Fate/monster

赤城九朗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、拙作「モンスターズＤ×Ｄ」のオリ主が聖杯戦争に召喚されるという、

外伝的作品になっております。

基本的に、ノリと勢いの小説のため前作の細かい設定を知らなくてもそんなに支障はありません。

ただ、オリ主故に不快な思いをされる方もいらっしゃると思います。

お気をつけください。

追記

諸事情あって、２０１５年１月３日で公開を停止いたします。申し訳ありません。

追記

期間限定で、公開を再開いたします。予告なく公開を停止するので、どうかご容赦ください。

目次

stay night 編
アーチャーとの契約 改 1
セイバーと協力する 改 15
ランサーと戦う 改 28
ライダーのマスターを知る 改 47
アサシンに遭遇する 改 69
キャスターとの交渉 改 85
バーサーカーの敵討ち 108
外伝が終わりました 116
EXTRA編
エピローグとオープニング 120
慎二の誤算 139
ブラックモアの脱落 161
ありすの死 176
ランルーの看破 194
ユリウスの悪手 1 221
ユリウスの悪手 2 230
zero編のボツネタ 241
ユリウスの悪手 SAGA 254
ユリウスの悪手 3 265
ユリウスの悪手 4 281
ユリウスの悪手 5 295
兵藤一誠の休日 310
レオナルドの失敗 321

最終回　トワイスの破綻 341
エピローグ　ネロの願い 350
ＺＥＲＯ編
ＺＥＲＯへのプロローグ 361
各勢力の現状確認 372
動き出す暗殺者 383
ＳＧ１　黒歴史 395
アサシンが召喚する一人目の仲間 404
銀色の竜巻 415
日輪の如き破城槌 422
正月ネタ　短いです 431
強力な支柱 437
ＳＧ２　王への不満 448
第二局面　訂正 454
反英雄の少女達 467
魔力消費の問題を解決するたった一つの冴えたやり方 474
哀悼の意と勝利への決意を胸に 486
土台固め 502
王の試練 514
最大の激突 528
拙速 548
対城宝具エクスカリバー 560
英雄たちの戦場 571
暗殺者たちの戦場 585
魔術師たちの戦場 593

武将たちの戦場 606
怪物たちの戦場 617
彼女たちの戦場 625
戦争問答 638
英雄王の晩餐 659
ＳＧ３　全知全能 671
喜劇と悲劇の幕開け 680
たいせつな　たからもの 686
サーヴァントとしての兵藤一誠　追加 693
Ｐｒａｙ～頼もしき援軍～ 701
鋼のレジスタンス～明日もし君が壊れても～ 719
予期せぬ苦戦～てっきり雑魚かと～ 730
守護神～ｔｈｅ　ｇｕａｒｄｉａｎ～ 745
勝利を約束された、勝利すべき王～勝利を約束されぬ、勝利すべきでない剣士 755
ＢＡＤＥＮＤへの序章 767
絶対に笑ってはいけない聖杯戦争 779
最古対次代！絶望を吹き飛ばせ！ 786
光あれ！フォーメーションＧ発令！ 795
まだ知らぬ友よ！次代を担うものたち！ 806
発動！滅神奥義四文字斬り！ 811
さらば聖杯戦争！オケアノスの潮騒を聞け！ 820
聖杯はしかるべきものの手に 832
伊耶那美！黄金体験鎮魂歌！ 840
大団円！みんな幸せ！

おまけ 855
蛇足 871
主役 887
熾烈な戦い 904
kaleid liner編
プロローグ　忘れられていた二人 922
魔法少女、出揃う。 927
ゴーストライダー 932
ニンジャ≠アサシン 943
セイバーのエクスカリバー 953
狙い撃つアーチャー 960
コートの上の魔物 971
死ねないバーサーカー 983
平行宇宙を駆ける魔法少女 995
2wei!編
7人の兵藤一誠について 1005
死と遊ぶ暗殺者 1013
敗者たちの休息 1027
使役する魔術師 1033
勝者たちの宴 1044
hollow ataraxia編
一誠の屋敷ではよくあること 1050
宝物庫 1060
主従契約 1068

ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　編
アーチャーとの契約　改

士蔵を整理していた衛宮士郎は、ある魔方陣が床に描かれていることに気づく。
それに触れると、その魔方陣は起動した。
激しい光とともに、一人の、スーツ姿の男が現れる。
「聞くが、お前がおれのマスターか」
「マス・・・ター？」
士郎には、それが何の事だかわからない。
それを察した男は、まず周囲を見渡した。
「日暮れ時・・・、まだ時間的余裕はありそうだな」
男は、外に向かって歩き始めた。
「家に上がらせてもらうぞ。ここで話すようなことじゃない」
そういって、そのまま出て行った。

その後を、士郎はあわてて追いかけていった。

「さてと、まぁこんなところだな」

7人の魔術師がマスターとなり、7人の英霊をサーヴァントとして使役し、最後の一組になるまで殺しあう。
勝者には、万能の願望機「聖杯」が与えられる。
という説明を、衛宮家の居間で、どこからともなく取り出したホワイトボードに書き込み、懇切丁寧に図付で説明した。
その、余りにも事務的な話し方に、逆に戸惑ってしまう。

「お前は、このおれを誤って召喚してしまったわけだ・・・」
「ご、ごめん」

「別にいいさ。気にしちゃいない。でだ、これはおれからの提案なんだが・・・棄権したらどうだ」

男は、やさしく言った。

「・・・え?」

「だから、棄権しろって言ってるんだ。お前、望んでないんだろう?殺し合いなんて」

「あ、当たり前だ」

それは、この国で生きる学生にとってごく当然の回答だった。

殺し合いで生き残れば、どんな願いも叶う。そんな胡散臭い話に、一般人は決して乗ることはない。

故に、士郎は彼の言葉を肯定する。人を殺して願いをかなえるなんて冗談じゃない。

「ならば話は早い、棄権しろ。

殺し合いをしてでも願いをかなえたい。

そんな連中に巻き込まれて死ぬなんて、ごめんだろう?」

殺し合いに参加するパートナーが素人。いやそれ以前に参加の意思すらないというのでは結果は見えている。

戦争というのは、基本的には下準備がものをいう。即日に戦争を始めるなど狂気の沙汰だ。

ならば、互いの命と時間を節約するためにこの提案をする。それもまた正しい発言だ。

「・・・なあ、俺には殺し合いをしてでもかなえたい願いなんてない。

だけど、殺し合いが起きるって言うのに、それを黙ってみていることなんてできない」

この国の、少なくとも家に住んでいる学生は、多くの場合物質的に満たされている。
命を懸けてまで戦う、それに値する願いは持ち合わせていない。だが、殺し合いを見過ごすこともできない。
余りにも向こう見ずで善良すぎるその言葉は、男には、真実だと看破できた。うれしくなって笑ってしまう。

「そうか・・・よし、わかった。お前をマスターと認めよう。
この聖杯戦争に参加し、できる限り死者が出ないように勤める。
それがおれたち主従の目的だ。それでいいか?」
「ああ!じゃあ、よろしく頼む」

そういって、手を伸ばして握手を求める士郎。その伸ばした手に、男は応じなかった。
その表情は、冷え切ったものに変わる。

「まだだ」
「え?」
「お前にはまだ〝決断〟しなければならないことがある」
「決断?」

無言で、ホワイトボードに書かれた聖杯戦争の情報を消し、今度は「基本方針」と大きく書いた。

「お前の目的は、できうる限り死人を出さない、だ。それは大変に結構なことだ。おれもそれでいい。だが、そのためにお前は何ができるんだ?」
「なにって・・・」
「具体的に聞くぞ。お前、何を基準にどう動くつもりなんだ。
例えば、二組の主従が争っている。お前はどうする?」
「止める」

それを聞いて男は「止める」、と書いた。
その言葉には、何の計画性もなかった。どうやって止めるのか。言葉でか、暴力でか、策略でか。
そもそも止めたところで何の意味があるのか。願いを持って戦争に臨んでいる参加者に、何の価値があるのか。
親しい人の蘇生を願うものは、果たして止まるのか。一族の悲願を背負っている者は、果たして止まれるのか。
職務で来ているものに、その説得は意味を成すのか。
だが、それよりも根本的な問いを男はする。
やってみなければ分からない、ではない。やらなくても分かることを。

「じゃあ次の質問だ。それがさらに複数だったら?」
「え?」
「だから、二つの離れた地点で同時に戦いが起こった。お前はどっちに行く?」
「そ、そんなこと」
「おこらないとでも?」

男は、きつく責める様に聞き返した。
それの迫力に、士郎は息を呑む。

「当然起こってしかるべき事態だ。そして、どちらでも死人が生じうる事態だ。さあどうする」

返事ができない士郎。
そう、確かに起こってしかるべき事態だった。
だからこそ返事ができない。

「いまはいい。

こうやって1分悩もうが1時間悩もうが誰も死なないんだからな。
だが、実際に起こったらそんな時間はないぞ。どっちも死ぬ」

それも事実だ。だが、それは助けられる命を「選ぶ」ということだ。
それは、命の価値を比べるということだ。そんな資格が自分にあるんだろうか。

「二手に分かれるって言うのはなしだ。
お前一人じゃ何もできない。第一、現場に向かうだけでも時間を食うしな」
「う・・・」
「さらに言うとだ、3組同時に争いが起こるって言うことも起こりえないじゃない。
さあどうする?」
「・・・命に順番をつけろって言うのか?」
「当たり前だ。現実って言うのは人の考え方に沿って存在するんじゃない。
ただあって、それに対して人がどう決断するのか。それだけのことだ。
つまり、戦争というのはこういうことだそこいらで殺し合いになる。
それをこの二人で、一組でカバーなんて不可能だ。それは分かったか?」
「ああ・・・」

男は、今度はシチュエーションBと書いた。

「今度は逆に、見つからない場合だ。
そもそもお前、どうやって他の参加者を探すつもりだ?
まさか、道を歩いていたらかってに向こうから話しかけてきて、
自動的に決闘が始まるなんて思ってないよな?」

そう、士郎は魔術師としては半人前、いやそれ以下だった。戦闘はおろか、まともな索敵すらこなせない。
使い魔を放つこともできないし、魔力を探知することもできない。人にそれを頼むこともできない。

「おれ達がこうして話をしている間にも、参加者や一般人が傷ついてるのかもしれない。
そう考えることもないのか？」

寒気が走った。説明の中で、魔力を一般人から奪うこともできる、ということも聞いていた。
自分たちが何番目の参加者だか知らないが、もうやっているのかもしれない。

「じゃ、じゃあこんなところで話している暇なんて・・・」
「だから、どうやって探すのかって聞いてるんだよ」

絶句した。そうだ、自分に何ができるって言うんだ。
男は厳しく言い切った。

「やる気は認める。それだけは。だがな、そんなもん何の価値もない。お前が何もできないという事実の前には何の意味もない」

したい。やりたい。しなければならない。行わなければならない。だがどうやって？そう、それがない。理想があっても、手段がない。目的にいたるまでの道筋が存在しない。

「一応念のため言っておくが。
俺に町のどこにいるのか分からない魔術師を探す術なんてない。で、その上での質問なんだ。俺にどうしてほしい？」

目の前の男は、厳しく問いただす。はっきりしろと。おれに命令しろと。

「それができないのなら、お前はやはり戦争に首を突っ込むべきではない」

そのとおりだった。なにができる、とか以前に自分は指示すらできない。

それで戦争も何もあったものじゃない。

「おれなら」

そう区切って言い切る。

「おれなら、近いところにいく。

もし複数箇所で争いが起きれば、同時にカバーできないのであれば近いほうにいく。

それがおれの決断だ」

「そんな基準でいいのかよ！」

「言いか悪いのかは問題じゃない。要は、おれがどう決断したかだ。

最適解は両方をカバーすること。それができない以上そうするしかない。

ただそれだけのことだ」

士郎は、否定したかった。だができなかった。

もっといい答えがあれば、答えられたのに。

しかし、その答えを少年は持ち合わせていない。

「そもそも、行ったところでどうにかできる保証なんてない。

もう終わっているかもしれないし、

あるいは出向いても何もできないかもしれない。
それでもいくしかないのなら、〝早くつけるほう〟に行く。
それだけのことだ」

男は、現実だけを語る。
きわめて論理的に、男は感情を交えずに語る。
その顔は、まるで能面のように無表情だ。

「理想を語るのはいい。だが、〝どうすればいいのか〟すらいえなければ理想も何もない」

反論する術がない。
事実として、考える時間を与えられたというのに、士郎は反論ができなかった。いい案がなかった。

「もし見つからなければ、待つ」
「・・・なにもしないのか?人が襲われているのかもしれないのに」
「それを見つける術がないのに?」

また返事ができない。自分の理想は、あまりにも中身がなく空っぽだった。
焦燥のままに飛び出しても、何もできないことだけがわかりきっている。

「少なくとも、おれ達が無傷で生き残っていれば、誰かが聖杯に世界の破滅を願っていたとしても、その願いは叶うことはない。
最悪の事態は避けられる。
さらにいうのなら、何もできない以上戦力をベストの状態に保ち、機があれば動けるようにしておくのがベターだ」
「ベストじゃないんだな」
「当然だ。ベストというのなら、参加者全員を捕捉し続けることぐら

いだろう。
できない以上、なにをやろうとしてもベターにしかならない」

言い返したかった。何かできるはずだろ、と。
そしたら目の前の男はこう答えるに違いない。

じゃあ、お前に案はあるのか

ない。そんなものがあるのならとっくに言っている。

「お前は、何もできない。であるならば、判断だけはしろ」

日は沈み、夜となった。

「飯食って、風呂入って寝ろ。明日の朝になったらもう一度同じ質問をする。
それで、〝決断〟ができなければ、おれはこの聖杯戦争から降りる」

そう言い切った。それが彼の決断だった。これは、歩み寄りであると言っていい。
なにせ、あいては魔力供給すらできない半人前以下の魔術師。
英雄になったものにとって、これを主と仰ぐなどあってはならないことだ。

「お前がなんと言おうと、おれはそうする。
そこに妥協はない。当然の権利だろう？
奴隷が主人に命令をしてもらうのは」

男は、士郎に背を向けると同時に姿を消した。

その後士郎は、言われたからではないが、健康的な夜食をとり、あっ

たかい風呂に入り清潔な布団に入り、意外なほどあっさりと寝た。

男は、縁側で取り出した果実を食べながら、まどろんでいた。
その果実一つ一つが下級であれ宝具と呼ぶにたるものであり、魔力を男に与えていた。

二人の、まったく同じ顔をした少年が戦っていた。
夜の街で、人目を避けて戦っていた。
一人は、まるで超人のように信じがたいほど軽やかな身のこなしでもう一人を追い詰めていた。
もう一人は、異形だった。
だというのにもかかわらず、目の前の普通の少年に後れを取っていた。
「攻撃力も、防御力も、機動力さえも」
指についた血をハンカチでぬぐう少年。
「何もかも俺のほうが上だな」
「ああ、そうだな」
異形の少年は、いともたやすくそれを認めた。
「武器の違いだな。残酷だが」
少年は、間合いを一瞬でつぶし、蹴り飛ばす。
「鉄塊〝輪〟」
「ぐ・・・」

壁にたたきつけられる異形の少年。
「分かるよ、お前がどれだけ修練してきたか。
俺もがんばってきたからな」
「・・・」
「空手だな。
だが、六式の前には無意味だ」
「・・みたいだな。空手には、空を飛んだり蹴りを飛ばすことなんてできないもんな」
「・・・」
目をぬぐう六式使いの少年。その目には涙が。
「だが、おれはオオスズメバチでもある」
ズタボロになりながら、勝ち誇る異形。
「な、何をした!」
あふれる涙を抑えることができずに、顔を抑える六式使いの少年。
「決まってるだろ?目潰しだよ。基本だよな」
壁から起き上がる異形の少年。
そのままよろりよろりと歩み寄る。
「そっちは風下だ。
おれは、風下にお前が立ったときからずっと毒を噴霧していた。
わかるな?
火星忍法『春香の術』だ」

ドヤァ

「て、てめぇ!」
「まさか卑怯だなんていわないよな。
そんな爆笑台詞」
近づいてくるのは分かる。
しかし、目視できない相手を攻撃する術を六式使いの少年は持っていない。
いやそもそも、激痛で身動きができない。

「じ・・・」
「じ？」

「ジョジョだったら！
負けだぞ！」

「爆笑だな」
異形の少年は拳を振りかぶった。
それを察した六式使いの少年は、体を硬直させる。
それしかできないからだ。
「鉄塊」
しかし、それもいつまでもできるわけではない。
加えて、全身がくまなく鉄になるわけではない。
急所はどうしても存在する。
毒針が、耳の穴に穿たれた。
言葉にならない悲鳴を上げる六式使いの少年。
「うるさいぜ。
人が来るだろうが」
もだえる少年を押さえつけ、肘の刃で喉を割いた。
「・・・脈拍はない。
呼吸も止まってる。
瞳孔も開いてる」
死をきっちりと確信した後、数瞬をはさんで喜んだ。
「今の放送・・・聞こえたぞ、こいつは脱落したんだな・・・勝った！」
その顔は、返り血で真っ赤だった。
「やった！勝ったんだ！
おれは勝ったんだ！」
その叫びは誰の耳にも届くことはなかった。

「おれは勝ったんだ！」

目が覚めた。
夢を見ていた気がする。
どんな夢だったかは思い出せないが。
いつものように起きて、布団をたたむ。
服を着替えて朝食を用意し終えたところで、後ろから声をかけられた。

「・・・どうだ。〃決断〃はできたのか」
「ああ」

自分でも驚くほどすんなりと、その言葉が出てきた。

「あんたの言うとおりに動こうと思う。
少なくとも今の俺じゃあ何もできないし、あんたの提案よりもいい考えなんて思い浮かばない。
だけど、できる限りのことをしたい。手伝ってくれ」
覚悟を決めた顔で、宣言した。
しかし、その言葉にはいくらかの敵意が込められていた。男の語る現実に負けないといわんばかりの。
その顔を見て、男は笑う。

「聞くが、お前が〃おれ〃のマスターか」

「そうだ。俺がお前のマスターだ」

「ならば」

男は跪いた。

「ここに契約は成った。サーヴァント、アーチャー。あなたをマスターと認めよう」

こうして、衛宮士郎の聖杯戦争は始まった。

セイバーと協力する　改

「学校に行くのも、いかないのも、どちらにも良い点と悪い点がある」
「・・・」
「いけば、他の参加者に見つかる可能性は上がる。
それをポジティブに受け止めるか。ネガティブに受け止めるかの差だ」
「・・・俺は、速く接触したい」
「なら、行動だ」

「とはいったが、こんなに速く接触できるとはな」

高校の屋上で、アーチャーと士郎は、遠坂凛とそのサーヴァントと向き合っていた。

「まさか、衛宮君が魔術師だったなんてね」
「俺もびっくりだ。遠坂が魔術師だったなんて」

学園のアイドルである遠坂が魔術師だったなんて・・・！と驚く士郎。
ため息を吐く遠坂。呆れているようだ。無理も無いだろう。
己の人生をかけた戦いの参加者が、びっくりだ、ですませるのだから。
自分は御三家の一角であり、最も警戒されるべき人間であるというのに。

「あのね、私はここのセカンドオーナーなの。わかる？」
「リン、まずは確認をするべきではないでしょうか」

遠坂のサーヴァントは金髪の少女だった。

幼さの残る容姿とは裏腹に、百戦錬磨の気風を持っている。
武装こそしていないものの、アーチャーに隙を見せない。

「・・・マスター、彼女は見た目どおりの歳じゃない。油断するなよ」
「ああ、分かってる」

アーチャーも警戒を怠らない。警戒する士郎。
とはいっても、素人に毛が生えた程度の士郎が警戒したところで、
一体どれだけの効果があるのかは疑問だが。

「ねえ、衛宮君。ここに結界を張ってるのはあなた達なの？」
「結界？」

何の事だか分からない士郎。アーチャーを見るが、アーチャーも首を振る。それを見て、落胆する遠坂。

「ああ、もういいわ。なるほど、あなた達じゃないみたいね」

そのあと、遠坂は士郎たちにこの学校に、人を喰う結界が張られつつあることを伝えた。

「なんだって！」
「無防備な一般人では持たないでしょうね」
「許しがたいことです」
「ふむ」

セイバーは、義憤に燃えているようだ。敵が強くなるということを差し引いても、真っ当な論理を持つものなら、そう考えて当然だろう。
アーチャーはそうして感情を表に出すことは無く、冷静に状況を咀嚼していた。

「ちまちま妨害工作をしているけど、多分サーヴァントの宝具よ。完全に止めることはできないわ」
「なあ、俺にできることは無いか？」
「半人前のあなたに頼むようなことなんて無いわ」
「そうか・・・」

首を振るう遠坂。気落ちする士郎。
そうだ、自分に何ができるって言うんだ？
言われなかったら、気づきもしなかった自分に。
それを察したアーチャーは、士郎の肩に手を置く。

「・・・落ち込むのはまだ早いぞ、マスター。できないことにとらわれてる場合じゃないだろう。
まず、他の参加者に接触できたこと、その相手が敵対的じゃないことを喜べ」
「・・・ああ、そうだな」

結界をとめようとしている。その動機がどんな理由だろうと、少なくともこの行為を止めようとしている。悪い奴じゃないようだ。

「それに、手が無いわけでもない」
「本当か？」
「あら、結界破りの宝具でも持ってるの？」
「だとしたら、心強いですね」
「いや違う・・・、だがここで話すようなことじゃないな」

人払いの結界は張っていたが、魔術師にはほぼ意味が無い。
キャスターや、そのほか魔術師の放った使い魔が居るのかも知れない。

「一旦この場での話し合いはやめにして、放課後でどこかで落ち合お

う。

この結界をどうにかするまで、一時休戦ということでいいか？」

そういった相手は、遠坂ではない。マスターである士郎だった。

「ああ、遠坂と争う理由なんて無いしな」

「あのね、これは聖杯戦争で」

「リン、協力者ができたのです。

無関係な民が傷つくことを避けるためにも、休戦を」

セイバーが具申する。少なくとも、目の前の善良そうな少年を信用しているようだ。

もちろん、警戒を怠っているわけではないだろうが。結界の破壊を最優先で考えているのだろう。

「わかってるわ、セイバー」

「じゃあ、後で俺の家に行こう」

「マスター、自宅に招くのはどうかと思うぞ」

工房に魔術師を招く。これは、罠が仕掛けてあるかもしれないところに誘導しているととられても仕方が無かった。

「大丈夫よ、ねえセイバー」

「もちろんです、リン。私がいる限り、あなたに危害が及ぶことなどありえません」

そういって、自信満々でセイバーを見る。セイバーも応じた。それは、主従の自信だった。自らと相棒の実力への。

「とはいったものの、本当に何の罠もないって言うのはね」

「仕掛けるわけ無いじゃないか」

居間に案内されたリンは、いぶかしげに周囲を見る。
魔術師らしいところなど寸毫も見受けられない。
まあ、一般人も出入りがある以上当然かもしれないが。

「でだ、状況を整理しよう」

居間の机を片付けて、アーチャーがホワイトボードを取り出す。

「・・・庶民的なアイテムを持ってるのね」
「ああ、これがおれの持っている宝具の一つ、『魔法の筒』だ。といっても、只のモノ入れだがな」

そういって、円筒形の物を見せるアーチャー。
一つだけではなく、掌にはいくつもの筒が置かれていた。

「なるほど、複数の宝具がそれに収まっているのですね」

なにか思うところがあるのか、あっさりと納得するセイバー。

「英霊がどうしてホワイトボードを持ってるのかが気になるわね」

頭を抑える遠坂。
自分の従えている英霊が、それこそまっすぐな英霊である為、ギャップに悩んでいるようだ。

「まあ、いいじゃないか。それよりも始めるぞ」

そういって、『穂群原学園の結界対策』と大きく記入するアー

チャー。その前に、座布団を敷いて座る3人。

「さて、まず結界の性質は人を喰う、そして魔力とする。だな。ただ、どういう理由かは分からないがすぐには発動しないと。
これに対する対策なんだが・・・、基点に妨害を施している、だな」

人死にが出る、敵が強くなる、放課後になった現在は比較的安心、現在セイバーのマスターが妨害中、と記入する。

「そして、セイバー、アーチャー、アーチャーのマスターは対策を取れない、と。ここまではいいか?」
「ええ、間違いないわ」

そう肯定する遠坂。緊張した面持ちで応える。魔術師として、神秘の隠匿に反するこの行いを見過ごせないのだろう。
それを見て、困惑する士郎。

「・・・何?衛宮君」
「いや、なんかいつもと雰囲気が違うなって」
「・・・今そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!」
「その通りだ。続けるぞ。まず、この結界を仕掛けた奴の動機を考えよう」
「魔力を補充する為じゃないのか?」
「もちろんそうだと思う。だが、決め付けは厳禁だ。理論だって考えたほうがいい。
思い込みは時として、生死に関わる。効果から察するに、3通りの使い道が考えられる」

攻撃、防御、補充、と記入する。

「攻撃、これは二組の参加者が絡んでいるパターンだ。つまり、アサシ

ンやそのマスターあたりが学校に潜んでいて、それをもう一組の参加者が学校ごと攻撃しようとしている場合」

攻撃、と書いた下に、△を記入する。

「だが、このやり方ではのんびり過ぎる。逃げられたらそれまでのはずだ。だからこの可能性は低い」

「だよな、逃げちゃうよな」

「まあ、隠れてる側にも離れられない事情がある可能性もあるから、あくまでも三角だ。で、次の可能性だ。防御の場合」

今度は○を記入する。

「学校を拠点と考えており、敵が着たら発動させると牽制している、或いは罠としている場合だ。

だが、これは可能性が低い。学生を人質と考えているのなら、昼はともかく夜は意味が無いからな」

「でも、丸なんだ」

「ああ、攻撃よりは可能性もある・・・」

最後に、◎を記入する。

「前の二つは、正直これに比べると極端に低い。

なぜなら、この学校にはセイバーのマスターが通っているからだ。

主催者側の魔術師である〝遠坂〟のことを、まともな魔術師なら調べるはずだ。

だから、わざわざ選び選んでこの学校を拠点にすることは無いだろう。

となると、魔力を補充するという可能性が高い。ついでに、遠坂を攻撃するためにな」

「でしょうね」

そんなことは、最初から分かっていたことだ。
だが、順序だって説明しないと気がすまないのだろう。
随分きっちりとした英霊だ。

「これに対して、おれは対策がある。
もちろん神秘は隠匿されるし、人的被害も無い。
確実に目論見を潰せる。おまけに、一切魔力も使わない」
「へえ、本当なら名案ね」
「それはすばらしい」
「なんだ、そんな案があるのか」
3人は、アーチャーを褒めた。
だが、アーチャーはそれを次の発言で否定する。

「だが、発動させるのも手だと思う」

「なんだって?」
それは、士郎にとって許容しがたいことだった。
人が死ぬの避ける。それが基本方針のはずだった。だが、目の前の男はそれを否定している。

「これはおれの推測だが、この結界を仕掛けている奴はもう既に、一般人から魔力を奪っている」
「でしょうね。魔力が足りないから結界を使って魔力を奪おうとしている。でもその結界を張るにも魔力が必要よ。となれば、〃地道〃な方法で魔力を奪って回ってるはず」

アーチャーの仮説を遠坂が苦々しげに肯定する。

「そんな・・・」

絶句する士郎。もう既に犠牲者が出ていて、それをどうすることもできない自分。あまりにも無力だ。

「ですが、それと結界を発動させることに何の関係が?」

セイバーが、いぶかしげに尋ねる。

確かに、犠牲者がでていることは痛ましいが、結界が発動すれば更に犠牲者がでることは明白だ。妨害できるのであればするべきだ。

「極単純な話、魔力を大量に奪う計画が頓挫すれば、そんなことを実行に移そうとしている〝効率的〟な連中がどう動くのか予測が付かない。

勝つためなら一般人から魔力を奪って殺すことも辞さない奴が、簡単にあきらめると思うか?」

「確かにそうね」

街中でかんしゃくを起こして暴れだすかもしれない。

いや、全然別のところで結界を張りなおすのかもしれない。

〝地道〟な方法を続けるのかもしれない。

「だから、結界を起動させるというのも手だ」

発動を防げば、学校の面々は助かる。だが、他の大勢が死ぬかもしれない。

これも、神ならぬ士郎には答えのない問題だった。

「例えばそうだな、セイバー」

「なんでしょうか」

「お前、アーサー王だろ」

「!!!!」

セイバーとそのマスターは驚愕に顔を歪める。
それは、正解であることを示していた。瞬時に武装して距離をとるセイバー。
不可視の剣を構えて、驚愕の表情でアーチャーを見ていた。

「なぜ、気付いたのですか」
「お前の子孫を自称する奴と付き合いがあってな。よく似てるし、セイバーだから・・・と推測したまでだ」
「・・・そうですか、私の子孫が」
「・・・いいサーヴァントを持ったわね、衛宮君」

サーヴァントの正体を一発で看破されるとは思わなかった。史実と性別が違うのだから尚のこと。
まあ、ジークフリートやアキレウスのように有名な弱点があるわけでもないのだが、面白くないに違いない。

「ああ・・・、でもアーチャー、いきなり警戒させるようなこと言うなよ」
「すまんすまん、だがこれでわかるだろう?顔を見るだけでも正体を推測できる。それは大きなメリットだ。
結界を発動させれば、間違いなくサーヴァントは現れる。そこを叩けば確実に倒せる。
だが、学校でも犠牲が出るだろう・・・。あとはどっちのリスクをとるか、だ」

アーチャーは、士郎に決断を迫る。悩むことは無かった。

「俺は・・・止める」
「そうか、セイバーとそのマスターはどうする?」
「止めるわ。問題が起きたらそのつど対応すればいい」

「私も止めることに賛成です。大量の犠牲者が出ることを放置することなどできません」

それを聞いて、アーチャーは嬉しそうに笑った。

「そうか、じゃあ４人とも一致ということで」

大量のモンスターの群れ。

どれだけ倒しても一向に減らない敵に、異形の少年は疲れきっていた。

「くそ・・・」

握る拳に力がなくなり始めていたとき、遠くのほうから声が聞こえてきた。

大量の足音とともに、竹刀や木刀で武装した少年少女が現れた。

その数は２０人はくだらない。

「・・・な、なんだ！」

うろたえる異形の少年をよそに、武装集団はモンスターの群れに襲い掛かっていく。

本来なら、少々武装していたところで勝てる相手ではない。

しかし、彼らは意外なほど健闘していた。

明らかに、なにがしかの能力を持っていた。

それを、異形の少年は視認できないというだけのことで。

しばらくすると、魔物の群れはやっつけられた。

数には数。

その真理を異形の少年は見せ付けられた。
「あなたは、7人の〃※※〃の一人ですね」
呆然としていると、少年達の一人が声をかけてきた。
「私たちは狩人会のメンバーです」
そういって、誇らしげにメンバーの証であろうキーホルダーを見せる。
「今は、あなたと戦わないであげます。
ですがもしも、僕らの邪魔をすれば、今殺しますよ?」
そういって、余裕を見せる。
「今はモンスター退治が優先なので。
ですが、この戦いで優勝するのは我ら狩人会のトップである会長です」
力強く断言する。
その顔には、優越感と超越感に満ちていた。

翌朝7時。
TVのローカルニュースが流れる。

昨夜未明、穂群原学園の校庭で何者かが大量の灯油をばら撒き、火をつけて逃走しました。
火は幸い消し止められ延焼は免れましたが、学校には脅迫状が送り届けられ、

事態を重く見た学校側は、授業を中止し1週間休校することとなりました。

警察は、脅迫状から犯人を捜査する模様です。

ですが、脅迫状は１００円ショップで購入された大量生産品であり、特定は難しい模様です。

では次のニュースです。

ランサーと戦う　改

「結界をどうにもできないなら話は簡単だ。結界の中に人が入らないようにすればいい。
夜の学校に侵入し、灯油を盗み、校庭に撒いて火をつける。各関係者に脅迫状を送る。以上」

これが、病院やホテルなど、２４時間多くの人間が居住しているのであればまた話は別だった。
だが、幸いにして学校には昼の時間しか人はいない。人がいない時間に犯行を行い、脅迫状を送れば間違いなく学校は休校になり人はいなくなる。
もう少し細かいことを言えば、遠坂が監督役に一声かければ、休校は確実なものとなるだろう。
なにせ、サーヴァントの宝具による大規模な魂喰いだ。神秘の隠匿から考えてもそうするのが正しいだろう。
学校が再開されそうになれば、また同じことをすればいい。それで事実上結界宝具は空撃ちになる。

「・・・ふざけんなー！」

おおっ！と納得する士郎。これならば学校に迷惑がかかるが、しかし人的被害は抑えられる。失敗の無い完璧な作戦に思えた。
しかし半狂乱で絶叫するのは遠坂だ。別に、作戦に不満があるのではない。むしろ、大賛成だ。極めて合理的であり反対する要素は無い。
だが、問題は既に彼女が妨害工作を行った後ということだ。遠坂の魔術『宝石魔術』によって・・・！
魔術の研究というのは金銭がいくら会っても足りないが、彼女の場合は尚のこと深刻だ。
なにせ、贅沢品の代名詞である宝石を『使い捨て』なければならな

いのである。
もちろん、彼女とて戦争に参加するのだ。金を惜しんで命を失うほど愚かではない。その程度の覚悟はしていた。
故に、結界の妨害に使用したことも悔いは無い。無かったのだ。ついさっきまでは。

「どうして私はそんな簡単なことが思いつかなかったのよー！」

火をつける、というのは極端だが、何のことは無い。監督役を経由して何がしかの言いがかりをつけて学校を休校にすればよかった。
そんな簡単なことで余計な出費は免れたのである。費用対効果から考えれば、自分は宝石をどぶに捨てたに等しかった。
まあ、彼女は良くも悪くも真っ当な魔術師でありすぎたのである。彼女を責めることはできない。
アーチャーは、良くも悪くも真っ当な騎士ではない。セイバーの思いつかないズルも簡単に思いついた、だけなのだろう。

「まあ・・・落ち着けよ。とにかく、この作戦でいいんだろう」
「・・・文句無いわよ。セイバーもそれでいいでしょう・・・？」

二人のマスターは、セイバーを見て硬直する。
セイバーは、先ほどまで以上にアーチャーを警戒していたのである。緊張が周囲に伝わるほどに。それが、二人には解せなかった。
アーチャーの作戦は、単純でしかも確実なもの。少なくとも、セイバーにとっても異論は無いだろう。
しかし、セイバーはアーチャーを警戒していた。その視線は、突き刺さるほどに鋭い。

「・・・何か問題でも」
「いいえ、その作戦そのものには異論はありません。ですが、貴方が恐ろしい。

私は、以前貴方のように『魔術師らしくない』策を練る男と共に戦ったことがある。
そして、最後には裏切られた。そんな私には、貴方のように騎士でも魔術師でもない男は警戒に値する」

自分には理解できない理屈で動く相手というのは、つまり自分には理解できない理屈で裏切ってくる。それが、セイバーのアーチャーを警戒する理由だ。
その突き刺さるほどの鋭い視線を、アーチャーは動じることなく受け止めている。不満げにでも、鬱陶しげにでもなく、それが当然であろうと受け止めている。
理解できない敵は恐ろしい。当然だろう。だが、理解できない味方というのはそれ以上に恐ろしい。
そんな、当然の理屈ゆえにアーチャーはセイバーの警戒を受け止めている。もちろん、それは両者が英霊ゆえにだ。
両者の対峙は、ほぼ一般人である士郎は当然のこと、魔術師である遠坂ですら息を呑んだ。
互いに刃を交えるか、と思うほどに緊張感が高まったところで、アーチャーが口火を切った。

「おれのマスターは素人だ。そんなマスターに使われているおれも万全とは言えない。
よって、君たちの協力が必要だ。信頼できないというのなら、理解してもらう必要がある。
不幸自慢みたいで嫌になるが、おれの話をしよう」

ホワイトボードの前で立っていたアーチャーは腰を下ろした。どうやら、自分の『戦う理由』を語るつもりのようである。
そうくれば、騎士であるセイバーも剣を抜くわけには行かない。視線を緩めること無く、アーチャーの話を聞く体勢になった。
とりあえず、いきなり仲間割れにならないということで、両マス

ターは胸を撫で下ろした。

「そうだな・・・。気を悪くするかもしれないが・・・。

アーサー王がコールヴランドを抜いてアーサー『王』になったように、おれは聖杯戦争もどきに参加し、優勝することで英雄に、いや怪物になった。

その戦争そのものに名前は無かったが、しいて言うのなら英雄戦争といったところだろう。

7人の参加者がそれぞれ武器を与えられ、一つの街を舞台に殺し合い、最後まで生き残った優勝者には対神宝具が与えられた。

一切、ルールに反する主催者側の介入も無く、何もかも参加者の知るとおりの戦争が起こり、必然『関係のない犠牲や被害』が大量に出た。

・・・勝ち残ったおれに、どんな運命が待っていたのか、説明の必要は無いだろう」

セイバーも、彼女自身の境遇を思い出しているのか、そこから先は聞かなかった。

いや、もっと言えば同情すらしていた。自らも『自らが剣を抜いたことを後悔』しているが故に。

少なくとも、この時点で彼は不都合な真実を隠しているように見えないし、もちろん嘘もついているようには見えない。

セイバーは黙っていた。

「だが、そんなことは分かりきって選んだ道だ。英雄として生きるということは、つまり過酷な運命を受け入れるということ。

英雄であることよりも怪物としての生き方を選んだおれが言うことではないが、要するに、当然の帰結だったのだからな。

後悔がないわけではないが、泣き言など言っていい立場ではない」

多くの犠牲と引き換えに、勝利をつかんだアーチャーは、つまり多

くの敗者を生み出してしまった。
そんな彼等に勝者であると認められた自分が、『優勝しなければ良かった』などとは口がさけても言えることではない。
だからこそ、会話に湿っぽさは無く、淡々として無機質だった。それが意図的であることが明白なほどに。

「だが、悔いがあるとしたら・・・。
あの戦争と同じように無関係な人間が死ぬことはできる限り少なくしたい。
それだけだ。聖杯など望んでいない」
「・・・なぜですか」
「万能の願望機などという『都合の良い』代物で、かなえていい願いなどおれは知らない」

そこには、明確な覚悟があった。万人が求める代物を、都合の良いと断じるだけの覚悟を、アーチャーは持っていた。
それを聞いて、セイバーはひとまず警戒を解いた。嘘も誇張もなく、聞くべきことは聞けたと判断して。
こうしてひとまず、セイバーとアーチャーは相争うことなく結界を張ったサーヴァントと戦うことになった。
その後の細かい作戦を立てた後、セイバー組は準備の為に帰宅することになった。

「なあ、二人はこの戦争で優勝したらどんな願いをかなえるんだ?」
そんな二人に、士郎は尋ねる。
もちろん、聞いたところで解答が返ってくるとは限らなかった。返ってきたとしても、正しいとも限らない。怒るかもしれない。だが聞きたかった。

「そうね、私は特に願いは無いわ。しいて言うなら、勝つ事自体が目標だもの」

「私は、この現世に影響を与えるような・・・。いえ、真名が知られている以上隠しても仕方ありませんね。
私の目的は滅びてしまった祖国の救済です」
「そうか・・・」

士郎には、それがどれほどの重みのある目的なのか分からない。
だが、少なくとも〝悪い人ではない〟と思った。

「そうか、ごめん。へんなこと聞いて」
「いいえ、気にしません。たしかに、万能の願望機をどう使うのか、気になるのは参加者として当然だと思います。
ですが、私の願いは必ず成就させます。もちろん人道にもとる行為はしませんが、対戦相手である以上アーチャーにもあなたにも容赦はしません」

セイバーは表情を引き締め、はっきりと言い切った。あなたと戦うと。その迫力に、士郎は何もいえなかった。
無力を思い知った少年は、少なからず臆病になっていたのだ。

「はあ、参った」
少年は町をうろついていた。
目的も無くぶらぶらと。
「仲間を作ろうと思っても、なかなかうまくいかないもんだな」
さっきから何度も声をかけようとしているのだが、どう声をかけて

いいのか分からない。
「なんで会長は仲間を増やせたんだろうな・・・」
口を開けばため息と弱音ばかりである。
「・・・ひょっとして、おれコミュ障でボッチ?」
はたと、何かに気付いてうなだれる。
「知らなかった・・・おれボッチだったんだ・・・」
少年は一人で気付き、傷つき、悲しんだ。
「どうせおれなんて、空手バカですよ・・・、
面白い話の一つもできませんよ・・・」
そのままとぼとぼと、人通りの多い道から離れて公園へと歩いていった。
「ちくしょう・・・どいつもこいつも数に頼りやがって・・・
男なら、拳一つで勝負せんかい!」
無意味なポーズをとりながら、自分のことを棚にあげつつ愚痴る。
「・・・まじでどうすんべ」
数は力だ。
それは思い知った。
少年は数をそろえることができない。
だとしたら、負けるしかないのだろうか。
いやだ。
負けたくない。
勝ちたい。
『優勝』したい。
「優勝したい」
それが少年の原動力。
それこそが少年の求めてやまないもの。
「勝つ。ここで勝たなきゃ、おれは・・・」
絹を咲くような悲鳴が聞こえた。
同時に、モンスターの叫びも。
即座に異形の姿へと転じ、その方向へ跳躍する。
ほんの数秒後には、惨劇の現場に到着していた。

死体。
したい。
遺体。
いたい。
遺骸。
いがい。
骸。
むくろ。
屍。
しかばね
仏。
ほとけ。

そこには、大量の死体が。

「う、うう、うううう」
猛烈な吐き気。
死臭が鼻につんと臭った。
「うううううううう」
思わず両手で口を押さえる。
そんな少年の下に、屍を作ったモンスターが迫る。
「うううううううう」
嫌悪を、怒りに変えて。
少年は猛る。
「うおおお

おおおお

「そろそろ時間だぞ」

アーチャーに起こされて、目が覚めた。ちょうど、というのもおかしいが夜だった。

目論見どおり休校になり、その日の夜に次の作戦に移行するために、日没を待ったのである。

「いこう」

「ああ」

起き上がる。あらかじめ用意した服を着て、出向く。

「初陣だ、気合を入れろよ。マスター」

「・・・ああ、そうだったな」

言われてみれば確かに、昨日は初めて敵と接触。

いや、結果的には接触したのは協力者になった遠坂とセイバーだ。

今日は、順調に行けば「敵」との交戦。

「緊張するか？」

アーチャーは気遣う。

先達として。

従僕として、

奴隷として。

戦友として。

「大丈夫だ。やれる」

士郎は応じた。

後輩として。
主人として。
上司として。
戦友として。

「そうか。お前、ろくな大人にならないぞ」
「かもな」

人を殺すことになるかもしれないというのに、気分は落ち着き払っていた。

「いく」

士郎は先を歩き始める。
アーチャーはそれに従った。
この作戦を提案をしたのはアーチャーだ。
だが、決めたのは自分だ。
それが、士郎にできた唯一のことだったのだから。
それを誇るように、誇示するように。
背負っているように。

人払いのされている結界内に収まっている学校。その校庭で、遠坂とセイバーが待っていた。

「早いわね。１０分前よ」
「そうだな。でも遠坂も待っていたじゃないか」
「そうね、なかなか寝付けなくて」
「寝てないのか？」
「ええ、まあいいじゃない。
どうせ今日で終わるわけじゃないんだから」

アーチャーの作戦。それは、運任せの釣りだった。放火魔は現場に現れる。
その古典的な諺を逆手に取り、この結界を仕掛けた参加者を釣る。
餌は、実行犯であるこの二組。

「二組で待つ必要はあるのか？」
「ないな。だが、どっちがやるのかでもめるよりはましだろう」

それも尤もな話だ。餌が安全でないというのは当然だ。
それを、押し付けあうよりは一緒にやったほうが何ぼかましだろう。
作戦を実行する前からケンカになるよりは、まあいいだろう。

「ですが、二組で待っていると牽制にはなっても襲撃は避けるのでは？」

待ち始めてしばらくして、アーチャーにセイバーがそう言った。

「それはそれでいい、だが、事前に打ち合わせたとおり、
そもそも発動させておけばこんな風に間抜けな作戦を取らなくてもよかったんだ。
それでもいいと全員で決めたことだろう？」
「・・・そうでしたね」

斥候の一体でもいれば、まあ多少策を練る余地もあったのだが、そんな事実は全く存在しないわけで。
セイバーとアーチャー。
ともに三騎士に数えられる聖杯戦争の勝利者の大本命とその主は、
校庭でのんびりといつ来るのかもわからない相手を待っていた。

そうして、しばらく待っていると・・・。

「おおっ、なかなか上玉がそろってるじゃねぇか」
「軽口はやめなさい、ランサー」

赤い槍を手にした青い獣と、スーツ姿の麗人が現れた。
サーヴァントの方が武人であるのは当然であり、それは特筆に価しない。だが、マスターであろう麗人もまたその隙の無い歩き方から武人であることがセイバーとアーチャーには伝わった。
サーヴァントと殴り合えばどちらが勝つかは明白であろうが、士郎はもちろん遠坂でさえ相手になるとは思えない。おそらく魔術師であることよりも戦闘屋としての色が濃いに違いない。

「・・・ランサーのサーヴァント」
「バゼット・フラガ・マクレミッツ！」

セイバーが見えない剣を構え、遠坂が強く警戒する。

「有名人なのか？」
「ええ、一級の戦闘屋よ」
「そうか・・・」
封印指定の執行者、バゼット。少なくとも戦闘能力という意味では、これ以上ないであろう人材だ。
アーチャーの顔から表情が消えた。戦闘の専門家ということは、ただそれだけで警戒に値する。

「知っているのなら話は早いですね。私は協会から派遣された魔術師です。
強力なサーヴァントが「2体」いることを知り、こうして赴かせていただきました」

2対1。だというのに自信を持って言い切る。

遠坂とセイバー同様、自分達の実力に一分の疑いも無いに違いない。

「で、どっちが相手をしてくれるんだ?二人同時でもいいんだぜ」

ランサーが、赤い槍を持って挑発する。それを見て、アーチャーがセイバーに伝える。

アーチャーは、その槍と使い手の伝説を知っている。

「おい、あいつクーフーリンだぞ」

「本当ですか」

「ああ、あの槍は見覚えがある。確かアースガルズで博物館に収められてた。

あれはゲイボルグだ。ゲイボルグといったら、クーフーリンだろう」

「あんた一体何者よ・・・」

遠坂が呆れる。無理も無いだろう、得物を一目見ただけで真名を看破されては、聖杯戦争の大部分が成り立たない。

バゼット、ランサーも、初見で、しかも戦闘開始前に始まるとは思っておらず、言葉は出さずとも動揺していた。

「凄いな、アーチャー。何でも知ってるんだな」

「いや、まあ無駄に交友関係は広くてな。でだ、大丈夫か?」

「問題ありません。作戦通りに私が相手をします」

そういって、セイバーが前に出る。

「・・・ククク、お前俺の真名を言い当てるとはな」

「笑い事ではありません。相当な英霊です。私が抑えますので・・・」

「いや、結構だ。おれはセイバーが負けない限り手を出さない。

騎士の誇りがあるらしいし、そこまで親しくもないしな」

アーチャーは両手を前に出して否定する。実際、魔力供給に不安がある以上、無駄な戦闘はできない。

こうして対峙し、バゼットを抑えるのがやっとだろう。

「そう言うことです、ランサー。彼と戦いたくば私を倒すことですね」

「上等！」

セイバーとランサー。

共に接近戦において絶対の自信を持つ両者。共に体力魔力において憂いなし。共に騎士としての一騎打ち。

おそらく、この上ないであろう技巧戦が繰り広げられ始めた。金属同士のぶつかる音が辺りに響き続ける。

セイバーの持つ不可視の剣は、自身の技量もあって接近戦では無類の強さを誇る。

しかし、それをランサーは技量と槍のリーチ、加えて経験で見事に捌いていた。

赤い槍は心臓を抉らんと雷の如くくらいつき、セイバーは嵐のような剣捌きでそれを振り払う。

アイルランドの光の御子と、ブリテンの騎士王は全力で打ち合い、しかし決め手に欠けるまま攻めあぐねていた。

およそ、マスターの介入する余地を与えないこの戦闘は、それぞれ全く違う経歴を持つマスター3人をして全員観客にしてしまっていた。

「なんて、でたらめ」

「凄い」

「・・・これが聖杯戦争なのか」

遠坂が言葉を失う。士郎は、言葉もない。戦闘の専門家であるバ

ゼットすら、いやだからこそ眼を奪われていた。
セイバー。幼さの残る少女。アーサー王だという。あんな少女が、あんなに強いなんて。
しかし、アーチャーだけは周囲を見渡していた。

「ふむ・・・」

アーチャー特有の視力が、〝とんび〟を捉えた。

「マスター!」

絶叫と共に、3人のマスター全員を抱えて走り出した。士郎や遠坂はともかく、バゼットにすら反応を許さない速度で。

「騎兵の手綱（ベルレフォーン）!!!」

突然の、殺意のない奇襲に困惑するバゼットをよそに、交戦中のランサーとセイバーに、上空から光の塊が着弾した。
3人のマスターを地に倒して衝撃から守ったアーチャーは、即座に立ち上がり着弾地点にいるであろう敵を睨んだ。

「ランサー!」
「大丈夫だ。まだ生きてるだろ」

動揺するバゼットに、令呪を見るように言う。事実として、3人のマスターの令呪は健在だった。
つまり、アーチャーは元よりセイバーとランサーも無事ということになる。

「・・・予想通り過ぎて引くが、横入りとは無粋な真似を」
「すみません。あいにく、騎士の誇りなど持ち合わせていないので」

砂塵を切り裂いて、眼帯をはめた女性が現れる。その足元で、直撃は避けたため息のある二人のサーヴァントが地に伏せていた。

「ははははははははははは！」

狭小な狂笑が、夜の校庭に響く。

「どうだ、遠坂。どうだ衛宮。僕の邪魔をした報いだ！」

そこには、間桐慎二が居た。

「慎二・・・」

「なんであなたが・・・」

「僕は魔術師だ。ここにいて当然だろう？」

そういって、手に持った本を振りかざして命令する。

「ライダー！遠坂のサーヴァントと、もう一人のサーヴァントに止めをさしてやれ！」

「ハイ、シンジ・・・！」

地に伏せて倒れていた二人のサーヴァント。その両方が、忽然と姿を消していた。

ライダーが慌てて周囲を確認すると、マスター３人のところに回収されていたランサーとセイバーがいた。

アーチャーが、高速移動により二人を抱えてマスターたちのところに運んだのである。

とはいえ、宝具の直撃を受けたであろう二人は明らかに戦えるコンディションではない。

「・・・セイバー、夢中になりすぎだ」
「すみません、アーチャー・・・」
「ありがとよ・・・」
「セイバー！」
「ランサー！」

ずたずたになりながらも喋れるのは、さすがサーヴァントといったところだろう。
遠坂とバゼットは、それぞれの従僕に駆け寄った。

「すみません、リン」
「かっこ悪いところ見せちまったな、バゼット」

立ち上がろうとするランサー。その眼には闘志が燃えていた。
戦場において、横槍は入れられて当然だ。７人のバトルロワイヤルだというのだから尚のこと、それは卑怯と呼ぶに値しない。
ただ、こうして腹を立てるのはこちらの勝手だろう。一騎討ちの邪魔をした報いを受けてもらうとしよう。

「あいつは俺が・・・」
「まあ、待て。英雄は英雄同士なら、反英雄は反英雄同士ってことで」

アーチャーがそれを静止する。来ていたスーツの上着を脱いで、士郎に渡す。

「あいつの面倒は、俺が見よう」
「なんだ、衛宮のサーヴァントが来るのか？僕のサーヴァントに勝てるとでも思ってるのか！」

慎二の自信は遠坂やバゼットの持つ自信とは違う、いわば妄信である。

自分は有能である、である以上負けるわけが無いと言う、根拠の全く無いものだった。
アーチャーは感情のない眼で、慎二を見る。それは、爬虫類の持つ無機質な殺意にも似たそれを帯びていた。
苛烈さなど無いそれは、しかし慎二を震え上がらせるにたるものだった。

「ひっ・・・」
「マスター、指示を」

アーチャーは、弓兵らしくも無く拳を構える。士郎はそれに応じた。

「アーチャー・・・、作戦通りに頼む！」

「了解！」

ライダーのマスターを知る　改

反英雄を名乗ったアーチャーは高速移動にて斜めに、両マスターが被弾しないような位置に移動した。

「さて、やろうか」

「・・・」

ライダーは冷静だった。先ほどは目で追えなかったが、今は追える。ひどく直線的で、一瞬しか持たないが自分以上の高速移動。

予備動作も見えた。地を、十回以上蹴ってから消えるように高速移動する。そうと分かれば対処できないではない。

しかし、ランサーと並び最速の英霊たるライダーは忘れていた。目の前の男は、アーチャーであると。

アーチャーは、取り出した六角形の金属板を構えた。

「武装錬金」

弓矢（アーチェリー）の武装錬金、エンゼル御前！

右腕に籠手、宙に浮く自動人形、なによりも左腕に装着された西洋弓。

それが、アーチャーである彼の得物であることは明白だ。だが、明らかにおかしい。何がおかしいのかと言えば、神秘を全く感じないのである。

通常、セイバーやランサーの宝具というものは手に持って使うもののことだ。真名開放も、その真価を発揮させるだけのものである。

しかし、真名開放をしていないにしてもいくらなんでも神秘が低すぎる。下手をしたら自分の持つ釘剣よりも弱いのではないだろうか。

「さて・・・武装錬金」

六角形の金属盤を更に2つ取り出す。

戦輪（チャクラム）の武装錬金、モーターギア！

軍用犬（ミリタリードッグ）の武装錬金、キラーレイビーズ！

現れたのは、馬ほどもある犬型自動人形二体と、歯車型の手裏剣だった。

その何れもが、極端すぎるほど神秘が薄い。もしかしたら、宝具と呼ぶに値しない代物ではないだろうか。

ただひたすら、武装が多いだけの兵士。それがこのアーチャーか。

「剃！」

しかし、それがまずかった。ライダーは怪物ではあっても戦士ではない。敵を前に熟考すると言う無茶をしてしまったのだ。

気づけばアーチャーの姿は消え、しかしゴーレム二体と円盤2枚がこちらに向けて襲い掛かってくる。

慌てて宙に舞うライダー。しかし、そこを正確に狙うアーチャーの弓術。

いや、実のところこのアーチャーに弓の心得は無い。この兵装そのものの持つ機能によって、弓にあるまじき機関銃の如き連射が可能だった。

そして、ライダーの持つ人間の持ちえぬ怪物の身のこなしは、しかしアーチャーにとってはよく知る動きだ。

自身が高速移動しているとはいえライダーを見失うことなく、その動きを正確に追尾し続ける。そして、ゴーレムや円盤、弓矢を精密に、とまでは行かなくても正確に、狙いを定めていた。

「く・・・！」

矢が突き刺さる。牙と爪が襲い掛かる。円盤が切り裂く。

しかし、一発一発は軽い。いや、ゴーレムや円盤を含めてかなりの

攻撃を受けているが、しかし全くと言っていいほどダメージが無い。

「耐久の低い私に、当たってこれとは・・・」

「まあ、おれもガス欠だからな・・・」

先ほどのランサー対セイバーと違い、両者は共に反英雄。そして、共にマスターが万全ではない。

サーヴァントとしての性能がどうこうではない。マスターの性能が低すぎるのだ。

五大元素を操る天才、遠坂凛。一流の戦闘屋、バゼット・フラガ・マクレミッツ。

その両者がアーサー王やアイルランドの光の御子を御しているのとはワケが違う。

方や、未熟者。方や、魔術師ですらないもの。

それが、メドゥーサや、※※※※を御せるわけは無い。

であれば、悪い意味で拮抗していた。しかし、ライダーはそれでも計りかねていた。

なぜ、かくものんびりと戦うのか。目の前の相手は、弱体化しているのだろうが安定して戦っている。余裕を持って、魔力を節約して戦っている。

本当に、自分と同じ怪物なのだろうか。自分と同じ化け物なのだろうか。

どうみても、その動きは訓練された「人間」のものだ。

その人間が、最初の一手で不意を打ち且つ決定打を浴びせることができたというのに、なぜ全力ではなかったのか。

分からない。判らない。解らない。

その疑問に答えたのは、マスターと呼ぶに値いしない愚かでこっけいな男。プライドばかり高い、ペルセウスによく似た男。

「なにやってるんだ、ライダー！」

全身に痛みがはしる。あの書の力だ。正気だろうか、戦闘中にこんなことをするなど。

いや、正気なのはあのアーチャーだ。そうか、これを狙っていたのか。ライダーは理解した。

つまり、攻撃ではなく挑発だったのだ。自分が無様をさらせば、必ずこの男は・・・。

「宝具を使え！」

痺れを切らせて札を切る。

ある種の、笑いを浮かべて眼帯に手をかける。それは、メドゥーサの代名詞。最も有名な特性。

アーサー王がエクスカリバーを持つように。クーフーリンがゲイボルグを持つように。

曰く、メドゥーサに見られれば石になる。

自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）！

魔力は足りず不完全とはいえ、その眼の力は健在。対魔力の低いであろうアーチャーは、いともあっさりその動きを止めた。

同時に、使用していた3種の武装がその機能を停止させる。六角形の金属板に戻った。

「・・・知っていた」

足元からゆっくりと石になりながら、能面のような顔を笑みに変えて、アーチャーは勝ち誇る。

「もしも、自分の手駒が期待を裏切ればかんしゃくを起こすと・・・。おれは知らないが、マスターと、セイバーのマスターは知っていた。知っているということは、対処ができるということだ」

足元から石化していったそれが突如として止まる。優勢だったはずのライダーが崩れた。息も荒く、地に伏せる。

「な、なにやってるんだよ！　お前、宝具を使ったんだろ！　何やられてるんだよ！」

慎二には、わからない。この男は、マスターではなく命令権を奪っている、いや借用しているだけの男だからわからない。

そう、そもそもどうして自分が怒っていたのかも忘れていた。

「ねえ慎二・・・」

セイバーのマスターが、セイバーを士郎に任せて慎二に歩み寄る。それに続いて、ランサーのマスターもゆっくりと歩み寄る。その迫力に、たじろぐ慎二。

「な、なんだよ！　おい、ライダー！　さっさと倒せよ！　お前強いんだろ！」

本を振りかざしても、ライダーは動かない。

「あなた、そもそもなんで学校にあんな結界張ったの？」

「と、遠坂！・・・なんだよ、あるところから持ってきて何が悪いんだよ！

僕は魔術師なんだ！　魔力を奪って何が悪い・・・！」

遅い。何もかもが遅い。

「そうよ、ライダーは魔力が少なかった。だからあんな結界を張ったのよね・・・。下種な考えだわ・・・」

笑うとは、牙を向く行為が元になったもの。
そんなことを思い出す慎二。
どうしてそんなことを思い出すのだろうか。

「で、平行して一般人からちまちま魔力を集めてたんだろうけど・・・。その魔力も結界を張るのに・・・、さっきの攻撃をするのに・・・、で、最後のあの魔眼を使うのに・・・」

遠坂が笑っている。
その顔は、まさにアクマ。
アカイアクマ。

「ぜぇんぶつかいきっちゃったのよねぇ？」

脇を歩くもう一人の女傑が霞むほどの迫力。もちろん、戦闘能力においては隔たりがあるのだろう。だが、その意気込みは明らかに遠坂のほうが上。

「で、一体マジュツシサマはどうやってこの二人から身を守るのかしら？」

ああ、そうか。これはいわゆる、死ぬ直前に生まれる集中力。自分の記憶の中で生き残る為の方法を検索するもの。

つまり、走馬灯。検索件数Ｈｉｔ、０．本能的に、魔術師どころか

人間らしくも無く仰向けになって倒れる。

「恐怖した動物は降伏のしるしとして自分のハラを見せるそうだが・・・・・ゆるしてくれということかしら？　しかしてめーはすでに動物としてのルールの領域をはみ出した・・・・・だめね」

オラオラオラオ

た。
アーチャーのマスターである士郎は役立たず。だが、慎二は足手まといだった。
士郎のマスターとしての価値はゼロだが、慎二のマスターとしての価値はマイナスだったのだ。
この、聖杯戦争に参加したマスターの中で最底辺を争ったマスター対決は、何もしなかった士郎に軍配が上がったのだ。
恐怖に負けた味方は、敵よりも恐ろしい。この聖杯戦争はタッグマッチであり、二人三脚。どちらかがコケれば、もう片方もコケざるをえない。

「でだ・・・、本当にわかりやすいやつだったな」

昨晩

「で、主催者側であるセイバーのマスターに聞きたいことがある」
「何？」
「この聖杯戦争の関係者で、しかし素人で絶対に参加者でない奴はいるか？」
「！」

その言葉を聞いて、遠坂は戦慄した。本来なら存在しないはずの関係者。
即ち魔術師のみが関係するこの戦争に、関わりを持ちながら魔術師でないもの。それは、二人居た。

「ふたり・・・いるわ」
「そうか・・・、じゃあ、こんなことをやりそうな奴はいるか？」
「・・・・」

返事に窮するのは、そんなことをする奴がいないからではない。
しそうな奴がいたからだ。

「いる。慎二ってやつよ」
「遠坂、それ本当なのか！」

士郎は知らない。彼もまた主催者の一族だと。

「そうか。じゃあ、そいつが犯人かもな。
こういう他の参加者に協力の口実を与える戦略的に不利な手は、
力に陶酔している素人がよくやる手だ」

決め付けは危険だ。だが、しかし言われてみればそうとしか思えない。

「そもそも、魔術師は普通一般人に危害を積極的には加えない。
気遣っているからじゃない。どうでもいいからだ」
「そうね、魔術師は血統主義だから・・・」

無関係なやからにかまうことは無い。時間の無駄だからだ。

「つまり、わざわざ一般人から魔力を集めるなんて無駄なことをする、
価値観の違うサーヴァント主導ならともかく、普通のマスターが積極的にやる理由は無い」

危険な決め付けだ。状況証拠しかない。だが、もしもそうだったら厄介だ。なにものかが糸を引いていることになる。

「本当にそいつが犯人だったら、捕まえて話を聞くべきだな」
「そうね、犯人だったら、だけど」

「なんか、殺しそうな勢いだな」
「ああ、今にも殺しそうだが、安心しろ。たぶん大丈夫だろう」

少なくとも、バゼットはプロだ。
なら仕損ずることは無い。

「さて、セイバーはともかくランサーには悪いことをしたな」
「ええ、私は不覚でした。
ただ、弁解をするのなら彼は手を抜ける相手ではなかったので」
「へへ、まあ戦場じゃよくあるこった。生きてりゃいいってことよ」

奇襲が来るかもしれないというのに戦闘に没頭したセイバーは恥ずかしげだ。
ランサーは、とりあえず生きているので気楽そうだ。

「同感だ」

アーチャーは、魔法の筒から六角形の金属板を取り出す。

「武装錬金」

避難壕（シェルター）の武装錬金　アンダーグラウンドサーチライト!

校庭の地面に、六角形のマンホールが形成される。

「予定通り、ここで一晩明かすぞ。ランサーはどうする?」
「・・・ああ、まあバゼットも断らないだろうしな」

それがなんなのか見当が付いたランサーは、なおリンチし続ける己がマスターを見てそう言った。

オラオラオラオ

「これはもう、宝具の一つですね」
「装備の一つだというのだから、恐れ入るわ」

士郎は、へー便利だな。
ぐらいの感想だったので、どちらかというと傷を負ったサーヴァント3人を心配していた。
しかし、そのサーヴァント3人は魔術師二人よりコレの便利さに絶句していた。

「こ、これが我が軍にあれば・・・」
「畜生!いい宝具持ちやがって!」

即席の拠点ときいていたセイバーは、じぶんの城よりも堅牢なこのシェルターに歯がゆい想いだった。
ランサーは、もっと狭くて暗いと思っていたのだ。
だが、研究施設なども収まるこのアンダーグラウンドサーチライトは、衛宮邸よりも大きいのだった。

「ふふふ、これを手に入れたときが人生で一番嬉しかったからな・・」

アーチャーは自慢げだ。

「でしょうね、これは戦略レベルの兵器だ」
「ああ、これが有るのと無いのじゃ、戦争がぜんぜん違うぜ」

二人は怪我も忘れて感嘆する。そう、戦場を知っている二人は「敵に見つからずに休む」や「風雨を凌ぐ」ことの大変さをよく知っていた。
それが、清潔ならなおのことだ。

「ここはアジトとして使っていたぐらいだ。２００人は収容できるぞ」
「なんと！野戦病院にできますね」
「ああ、宴会にも便利そうだ」
「よくパーティーをしたな・・・」

二人は戦場を思い出し、アーチャーは日常を思い出していた。

「ちなみに、おれの嬉しかった思い出ランキングはこんな感じだ」
ホワイトボードに書き込むアーチャー。

１　これを手に入れたとき。
２　アネックス１号を送られたとき。
３　初めて人を殺したとき。
４　後に妻となる彼女に告白されたとき。
５　娘が初めて喋った言葉が「パパ」だったとき。

「・・・娘と妻を上にしろよ」
「いいや、譲れないね」

マスターは、少しだけサーヴァントを見損なった。
この男は感情的な部分になると〝正直〟になってしまうらしい。

「もう、野宿しなくていいんだと思って、一日中床を雑巾がけしたもんだ・・・」
「たしかに私もそうしていたかもしれません・・・」
「俺もそうしてたかもなぁ・・・」

〝数ヶ月連続〟で野営で寝ることを体験したことの無い士郎には、理解できない感情だった。

「そうだ、マスター。頼みがあるんだ」

そういって、魔法の筒からダンボールやクーラーボックスを取り出した。

「生身の人間用に夜食を簡単に作って欲しいんだ」
「これ、うちの調理器具じゃないか」
「ああ、食材も持ってきた。水道と電気は通ってるから使ってくれ」

調理器具の中にカセットコンロもある。これなら、たいていの料理は作れるだろう。

「キャンプのとき便利だな」
「アーチャーのマスター！これはそんな代物ではありません！」
「そうだぜ、戦場で暖かい食べ物を寒い思いしなくても食えるって言うのはな・・・」
「ああ、うん。じゃあみんなの分も作るよ」
「・・・ああ、おいマスター。ランサーにそれは悪いぞ」
「ああ、ゲッシュのことか気にすんな」
「ゲッシュ？」

士郎には、なんのことだかわからない。

「ああ、なんでもねえよ。とにかく犬の肉が入ってなけりゃ問題ない」
「・・・宗教上の理由か？」
「ああ、そんなところだ」
「まあ、犬肉なんて無いから安心してくれ」

備え付けの机を使って、調理を開始する士郎。
そんなかれを置いて、バゼットと遠坂は今更ながら慎二から情報を得ようとしていた。

何のことは無い。魔術師なら誰でも使える簡単な暗示を使えば情報を引き出すなどたやすい。
あいては素人なのだから。

「さて」

魔法の筒の一つを手でもてあそぶアーチャー。

「それは・・・」
「ああ、ライダーが入ってる奴だ」

これには、魔物を入れることもできる。
聞きたいこともあり、殺さずに封じていた。

「彼女のことが気になるのですか?」
「いや、その先だ」
「他の参加者か?」

ランサーは核心を突いた。
そう、この聖杯戦争に参加している7組のうち4組、しかも三騎士と騎兵がそろっている。
残りが外れとも言うべき狂戦士、魔術師、暗殺者と来れば、おそらくこの中の面々の中から優勝者が出るのだろう。
だが、まだ予断は許されない。

「どう終わるのか。それが気になる」
今のところ、危険な思想を持ちそうなマスターは慎二一人であり、脱落は決定している。
被害も、最小限に抑えられた。
だが、残りの中にいないとも限らない。

「被害が、これ以上広がらないと良いんだが・・・」
「そうですね」
「・・・だな」

セイバーは自国を救う為なら、全く関係の無い国の民が傷ついてもいいと思うほど厚顔無恥な女性ではない。
ランサーも、積極的にそう言うことをやるやからを好んではいなかった。

「まあ、とりあえず今日の戦争は終わりだ。休むことに専念することにしよう」
「ですね」
「ああ、酒でも飲みたいぜ」
「持ってるぞ」

そういって、魔法の筒を見せる。

「本当か！つくづく便利だな」
「・・・感心しませんね」

とはいいつつも、セイバーも興味があるようだ。

「まあ、マスターたちが戻ってきてからだ。そのあとならお近づきの印ってことで神代の酒をご馳走しよう」
「へへ、悪いね」
「なに、協力してもらった礼だと思え」
戦場でであった強者と酒を飲む。それも戦人の楽しみの一つだった。

しばらくして、顔を青くした遠坂と険しい顔をしたバゼットが別室から現れた。

「あ、どうだった?」

野菜炒めを作っていた士郎は、二人に首尾を尋ねた。

「・・・とりあえず明日話すわ」
「・・・ですね」
「いいのか?」

士郎は、二人が結論を先延ばしにしたことに驚いた。二人とも話を進めることを好みそうだったから、以外だった。

「いいの。どうせ、今日は動けないもの」
「はい、報告と行動は明日ということで」
「そっか・・・」

3組の参加者は食事を終えると、それぞれ別室で休んだ。酒盛りの予定は、マスターたちが余り気分でないようだったので、延期となった。

「・・・お前ら」

少年は、目の前の光景を信じられなかった。

おおよそ、日常からかけ離れた光景だった。
自分の仲間が、「人」を殺していた。
「なにをやっているんだ？」
「なにって、人殺し？」
「なんだよ、カンチョーもやってんだろ？」
「そーそー、第一向こうからケンカ売ってきたんだぜ？」
「せーとーぼーえーじゃね？」
「うんうん、囲まれちゃったしね」
「だが回りこまれてしまった！」
「狩人会からは逃げられない！」
「じゃあ、殺すしかないよね」
８人は、へらへらと笑っていた。
※※※ではない、死ぬ必要の無い連中を殺していた。
自分の渡した武器で殺していた。

どうしてころしたんだ？

咽元まででかかった言葉を飲み込む。
そう、無意味だ。
言っていることは尤もだったからだ。
モンスターを駆逐せんと戦う狩人会と錬金戦団は、既に小競り合いをしていた。
それに巻き込まれる形で、
双方にとって未知の武器を二つも持っていた少年とその仲間は狙われていた。
紳士的に交渉するものも居た。
力ずくで奪おうとするものも居た。
そして、最終的には交戦するのだ。
偶々今日はじめて人を殺すことになった。
それだけだった。
いつからだ？

こうなるといつ決まった？
知れたこと。
自分が武器を渡したときからだ。
こうなると想いもしなかったが。
だが、予想はできたはずだ。
覚悟はできたはずだ。
だが、ああだがしかし・・・。
自分は余りにも考えが無さすぎた。

けっか、ひとがしんだ。

じぶんのなかまがひとをころした。

さあ、どうしよう。

「・・・まだ、狩人会がかかってくる」
そういって、注射器を人数分渡す。
そうだ、こいつらを失うわけにはいかない。
大事な、この町で初めての〝仲間〟。
いやだった。
人を殺してでも生き残って欲しかった。
「これ使え、人を超える力を手に入れられる」
人をやめる薬を渡す。
それを、８人は喜び勇んで使用する。

少年はこのとき、はじめて本当に〝仲間〟を得たのだろう。

すなわち、共犯者を。

いっしょにひとをころしてくれるともだちを。

そして、首謀者になったのだろう。
ひとをころせとめいじるくずに。

「・・・アーチャー、ライダーを出して」

翌朝、いや既に時刻は昼になっていた。３組の勝者は、敗者であるライダーに尋問をしようとしていた。
コンディションは万全、とはいかないが、十分にライダーを押さえられる。

「ああ、〝デルパ〟」

快音とともに、ライダーが現れる。
現界できるギリギリまで磨耗しており、消えかけていた。何のことは無い。昨日から魔力が補充されていないので弱っている。只それだけのことだった。

「・・・」

現れたライダーは、無言だった。ただ、苦しみに耐えていた。

「ライダー、あなたのマスターなんだけど」

その質問の意図を、士郎は計りかねた。なぜなら、もう解りきっていたからだ。マスターは・・・。

「桜ね？」

一瞬、士郎の言葉が思考から消えた。

代わりに、走馬灯のように思い出されるのはよく自分の家に来ていた後輩の姿。

「はい、私のマスターはサクラです」

それを、ライダーは肯定する。

「・・・なあ、どういうことだよ」

戸惑う士郎は、遠坂に詰め寄る。三騎士には、その意味がわからない。

桜、というのが人名であることは分かるのだが、それが誰なのかがわからない。

「・・・説明するわ」

昨晩聞き出せたことは、桜がライダーを召喚したこと。

更に、桜は魔術師になるために改造や虐待じみた修行を受けていることだった。

それから遠坂本人から明かされた。桜は遠坂からの養子であり、妹であると。

「そんな・・・どうして」

突きつけられた真実に、士郎は現実を受け入れかねていた。いや、

まずは聞き出さなければ。

「どうして昨日教えてくれなかったんだ！」

「決まってるでしょ」

遠坂は、辛そうに言った。

「あなたが暴走するからよ」

返す言葉がない。そうだ、いまでも遠坂につかみかかりそうだ。それを我慢できるのは、遠坂も辛そうだから。

「昨日動けば、確実に全滅していたわ。間桐臓硯か、またはそこに至るまでに他の参加者と出くわしてね」

異論は無い。少なくとも、一晩休んでライダー以外は幾分か回復している。

更に言えば、サーヴァントに魔力を供給するマスターにも休息は必要だった。

「元気なのは、あなただけだった。何もしていないあなただけがね」

そうだった。じぶんは未熟ゆえにアーチャーへ魔力を供給できていない。

だから、逆に疲れていなかった。そんな、自分の無力が憎かった。

アサシンに遭遇する　改

「では、私が作戦を立てるということで良いですね」
ライダーの真のマスターである間桐桜をマキリから救出すること。それがこの場にいる3人のマスターと4人のサーヴァントの統一した見解だった。
というのも、日ごろから付き合いのある士郎は言うに及ばず、遠坂は自分の妹が魔術師であることを差し引いても辛い目にあってると知り怒り心頭だった。
バゼットは、主催者である間桐臓硯が裏から干渉してきたことを重く受け止めており、
間桐臓硯を野放しにしておけば、優勝したタイミングで後ろから不意を打たれると、排除の必要があると判断したのだ。
また、今の状態でライダーを殺しても本当に死ぬかわからないことも理由にはある。もちろん、一宿一飯の恩義があることも事実だが。
「ああ、専門家にお任せするとしよう」
アーチャーを初め、サーヴァントたちも魔術師を専門に相手取ったことは無い。
であれば、魔術師と戦う専門家に作戦を練ってもらったほうが良い。
「・・・まあ、これだけの戦力がいるのでそれほど問題は無いのですが」
三騎士とライダー。ともに対魔力を持つ面々である。
裏を返せば、基本的に他のサーヴァントは全員それを持っていないことになる。
もし万が一他の勢力がマキリと手を組んでいても、バゼットや遠坂も普通に戦力に数えることができる。
「まあ、全員でぞろぞろと行く必要はありませんし・・・」
多少遠坂から魔力入りの宝石をもらい安定しているとはいえ弱体化の激しいライダーと、最初から戦力に数えるべきではない士郎を見る。
「まずあなた方二人は突入せずに表で待機していてください」

「そんな！」
声を荒げたのは士郎だ。ライダーは不満そうだが、言葉にはしない。サーヴァントとして弱いことを自覚しているのだ。
なによりも、自分が混じっていれば桜を人質にされるおそれがある。ライダーは自重した。
「マスター、専門家の意見は尊重するべきだ」
アーチャーがそれを止める。特に、作戦面において専門家の提案は受け入れてしかるべきである。当人に実績があればなおのことだ。
「そうよ、私に任せて。絶対助けるから」
遠坂は、或いは士郎以上の怒りを抑えた顔でそう言った。
情に厚い彼女は、実の妹の身をいつも案じていた。それが、この始末である。到底許せることではなかった。
「・・・ああ」
「では、セイバーとそのマスターは突入する組ということで。もちろんわたしとランサーも突入します。問題は・・・」
アーチャーを見る。この場で唯一真名のはっきりしていないサーヴァント。
そして、アーサー王とクーフーリンを呼び当てた自称反英雄。
まさか、真名を聞くわけにもいくまい。
こちらが言い当てられたとはいえ、しかしそれもこの戦争の妙。正体を見破られたことを責めるなど恥知らずもいいところだ。だが・・・。
「あなたのステータスを見てもよろしいですか？」
「ああ、いいぞ」
興味があることも事実だ。
バゼット、遠坂は彼のステータスを見る。

絶句した。

二の句が告げない。
それを見て、士郎が尋ねる。

「なあアーチャー、ステータスってなんだ？」
「大体どれぐらい強いのかの目安だな。
まあ、サーヴァントの為にもわかりやすく書いてやるとしよう」
そういって、ホワイトボードに公開されている情報を記入する。

クラス　アーチャー
真名　※※※※
性別　男性
属性　中立・中庸

クラススキル
対魔力　Ｅ
単独行動：Ｂ

保有スキル
神性　Ｅ～ＥＸ
宝具の効果によって変動

能力値
筋力　Ｃ
魔力　Ｅ
耐久　Ｃ
幸運　Ｅ
敏捷　Ｃ
宝具　ＥＸ

宝具

魔法の筒　E～B
様々な道具や武器の収められている筒。
それほど強力な武器は収められていない。

???
この宝具は現在閲覧できない。

「・・・ステータスが低いんだな」
「ああ、お前から魔力を供給されていないからな」
士郎の感想は、淡白なものだった。比較対象が存在しないのでなんとも言えないが、少なくともCやEは高くないと思ったのだ。
まあ、実際に低い。到底三大騎士の一角を名乗れない。セイバーやランサーが破格の英霊であるが故にそれは尚のこと顕著だった。
「魔力が供給されていればかなりましなステータスになる。いまは省エネルギーモードだし、こんなもんだ」
「そうか・・・ごめんなアーチャー」
自分の未熟を恥じる士郎。バゼットのように戦うことはおろか、遠坂のように魔力を十分に供給することもできない。
しかし、アーチャーは笑っていた。
「気にするな。どうせおれをフルで使えるマスターなんていないさ」
「・・・そうなのか？」
「ああ、スタータスを上下させるのもおれの宝具の一つだからな。低くしてもそんなに支障はない。それに、あるもので賄うのが戦場ってもんだ
戦場は無いもの尽くしだ。とあればあるものに感謝して、それを生かして戦えばいい。それにな、マスター。おれはマスターに戦闘能力も魔力供給も求めない。
できればそれに越したことは無いが、ただ決めてくれればいい。決

断するのがマスターだからな」
「・・・ああ」
この男は、本当になんていうか〝大人〟だ。
文句一つ言わず、ただこちらのことを尊重してくれている。
嬉しかった。こいつは最高の相棒だ。
「わかったよ、アーチャー。俺は・・・」

「なによこれ～～～～～～～～～～！」

遠坂が奇声を発した。いや、よく見ると他の面々も呆れた目でアーチャーを見ている。
そう、問題は低いステータスではない。宝具ＥＸでもない。対魔力も低いことでもない。保有スキルが異常なのだ。

「何で神性が上がったり下がったりするのよ！」

そう、それこそが最も異常だった。魔法の筒が上下するのはわかる。中身にばらつきが有るからだ。所詮器であり、真価は中身にある。
だが、神性はおかしい。言ってしまえば血統のようなものである。それが上下するなどありえない。
純日本人が、ハーフになったりクォーターになったり、或いは中国人になったりアメリカ人になるようなものだ。
いや、パンダや子豚、猫や白鳥になるようなものなのかも知れない。なにせ全く別の生き物なのだから。
「それが宝具の効果だからとしかいえないが・・・」
「なにより、神性の上限がＥＸというのがありえません。ランサーですらＢなのに・・、これはもはや英霊ではなく神霊ではないですか」
バゼットの指摘どおり、人が混じっている限りＥＸにはなりえない。主神ゼウスの仔であるヘラクレスさえ、Ａなのだ。であれば、目の前の男はそれこそ〝神〟、それも主神格ということになる。

「なにいってるんだ。神霊は召喚できないだろう？」
そう、冬木に存在する聖杯が本物である可能性が高い理由は、魔法使いですら使役することが難しい英霊を召喚し従えられるからだ。
もしも、神霊など召喚できた日には、それだけでもう聖杯などいらないだろう。
「なんていうか、神降ろしに近いんだよ。おれの宝具は・・・」
「それでＥＸですか？」
「おかしいだろ」
セイバーやランサーすら引いていた。
十分に魔力を供給されれば一体どれほどの脅威となるのだろう。
「まあとにかく、今のおれは弱い。そこのライダーとどっこいどっこいだ。家の外でマスター、ライダーと待機しているさ」
「・・・そうですね」
バゼットは、とりあえず了承した。
考えてみれば、もしも本当に神霊だったとして、それが十分に力を発揮できるわけは無い。そんな魔力を持つ人間など存在しない。
元が如何に強力だったとしても、所詮サーヴァントである以上、マスターという上限が存在するのだ。
「では、セイバー、ランサー組で突入します。あなた方は、外で横入りが無いように見張っていてください」
「わかった」
士郎は、信じることにした。そうだ、そう判断することしかできないんだから。
サーヴァントが自分に任せてくれているように、自分も人を信じよう。
「こんなことをいえた義理ではありませんが・・・、お二人とも、よろしくおねがいします」
ライダーは、セイバーとランサーに頭を下げた。
昨夜の奇襲に対するものだろう。騎士の誇りを持ち合わせていないとはいえ、恩人への礼節は弁えている。
「ええ、任せてください」

「おう」
騎士である二人は応じる。彼女のしたことは行儀の良いことではないが、しかし命じたのは慎二だ。であれば、少なくともこの二人に責める理由は無かった。
なによりも、弱者を救うのは騎士として当然のことである。
「では、作戦は夕刻以降からということで、各自英気を養ってください」

そう〆て、会議は終わった。何のことは無い、誰が外で待つのか、誰が突入するのかを決めただけだった。
しかし、それで十分。なにせ、如何に本調子ではないとはいえ最優と最速のサーヴァントが自陣にいるのだ。
たかが魔術師風情にできることは無いだろう。十分すぎるほどの勝算が、バゼットにはあった。
そんな彼女に、士郎が声をかける。
「あの、バゼット・・・さん」
「呼び捨てでかまいませんよ」
「じゃあバゼット、聖杯に何を願うんだ?」
それは遠坂たちにも聞いた事。
「・・・私は協会から派遣されています。持ち帰ることが目的なので、願うことはありません」
そう、言ってしまえば仕事できているのだ。であれば、手に入れて依頼者に渡す。只それだけのことだった。
「そうか・・・、ランサーは?」
「ないな。強い奴と心行くまで戦いたい。ただそれだけだ。
だから、今は共闘してもセイバーとはきっちり決着をつけたいと思ってる」
その表情に、暗さも後ろめたさも無い。
価値観が違うんだな、と士郎は人事のように思った。

作戦を決めることがあっさり終わったように、作戦自体もあっさり終わった。
しいて言うなら、作戦前にライダーが士郎の血を飲み少しパワーアップしたことぐらいだろう。
当然のように二組の参加者は主催者を倒し、桜を救出した。そして、魔術的な防御面から遠坂邸に帰宅したのだった。
「・・・桜の中にいる蟲を駆除するから、今日はここまでね。今後どうするのかはまた明日にしましょう」
妹を救ったというのに、その表情は硬い。それがなぜなのか、士郎にはわからない。
今まで気付かなかったことへの後悔なのだろうか?それとも・・・。
いずれにせよ、今日という日も終わった。
あてがわれた部屋で、士郎は床に就いた。
特に何をしたわけではないが、
ライダーに血をすわれすぎたことと、
ライダーが「じゅるり」といっていたこと、
作戦中ライダーがこっちをずっと獲物を見る目で見ていたことが、
かれの心身に負担をかけていたのだろう。
あっさりと眠ることができた。

「くそ・・・」
葬儀の参列者を見て、拳を握り締める。
その葬儀は、ここ最近よく見るものだった。
そう、この街では不審死が相次いでいた。

その原因を知る者は一握り。
そのうちの一人が彼であり、そして当事者だった。
いや、元凶というべきか。
「遺族に、犠牲者になんて言えばいいんだ?」
もうどうにもならない。
武器は、悪意の無い拡散を続けている。
ああ、もう自分が死んでもどうにもならない。
だが、何がある?
何ができる?
多くのものをくれたこの街に何ができる。
考えても、考えても答えはない。
もう、混乱の肥大化は止まらないのか。
誰にも制御できない。
誰も把握すらしていない。
誰かが言ったことを思い出す。

戦争を始めることはどんな馬鹿にもできる。
だが、戦争を終わらせることはどんな天才でも難しい。

終わり?
終わりとはなんだ。
7人の〃※※※※〃が全員死ぬことか?
いいや、違う。
もうとっくにこの戦争は、※※の手を離れていた。
もう終わらない、止まらないのだろうか。
いいや、何か手があるはずだ。
そうだ、手はあるはずだ。
逆に考えよう。
どうなったらこの悲劇は終わるのか。
そうだ、例えば・・・。

全員死ねばいい
一人残らず、全員死ねばいい。
粛清し、根絶すればいい。
復讐を考えるものが出ないように。
罪を犯すものが出ないように。

それは、天啓？
それとも悪魔のささやき？
いや、これは覚悟。
答えのない荒野に道を見出すこと。

この町にはびこる悪を駆逐する悪になること。

それが最適解かどうかなど些細なこと。
少年は、拳を握り締める。
どうすればその答えに到達できるのか、それだけを考える。
どうすれば全員殺せるのか考える。
涙を流しながら考える。
辛くても悲しくても考える。
それだけが、抵抗だった。
この絶望への。

目が覚めた。しかし憶えていた。

今まで見た夢も含めて憶えていた。あれは、アーチャーの記憶？
少年は、あどけなさこそ残っていたもののアーチャーに似ていた。
だとしたら、彼は人を殺したのだろうか。たくさん、たくさん殺したのだろうか。
「おい、マスター。セイバーのマスターが呼んでいるぞ」
アーチャーが、士郎の寝ている部屋に入る。
「なんでも、ライダーのマスターの件で話があるそうだ。お前も気にしていただろう。早く来い」
「・・・なあ、アーチャー」
「どうした」
アーチャーは、大人の顔でこっちを見ている。
もう少年ではない。当然だ。今の彼は英霊なのだから。
「俺、お前の夢を見たよ」
「そうか・・・」
恥ずかしそうに、目をそらすアーチャー。
「まあ、見て楽しいものじゃないからな」
「・・・なあ、アーチャー。皆殺し、のほかに手段は無かったのか？」
そんなことを聞いても、回答はわかっている。
じゃあお前に案はあるのか？
ない。
そんなものは無い。
だが、聞きたかった。

「・・・今でも探してるよ。次に活かす為にな」

その回答は、予想外だった。
「安心したよ。おれに心酔して、〝これしかない〟と思わなくて・・・」
「アーチャー・・・」
「いいか、マスター」
あくまでもやさしく語りかける。
「終わってからならなんとでもいえるんだ。ああすればよかった、こ

うすればよかった。
全部無意味だ。多分なんどやり直しても、似たような結果にしかならない。
当時のおれに、あれを丸く治める力なんて無かった。いろんな意味でな。だが、今は違う」
期待に満ちた目で、士郎を見ていた。
「いつでも、道筋を考えることをあきらめるな。最善を探し続けろ。できればいいのに、なんてことを考えるな。等身大の自分を知れ。いつでも大きい視野を持て。
じゃなきゃ、必ず失敗する。慎二みたいにな」
そういったきり、無言で部屋を出て行った。
それを聞いて、ふと思った。
自分は正義の味方になりたいと思っていた。
じゃあ「正義の味方」になれるんだろうか。
その道筋は？
なにがゴールなんだ？
どうすればなれるんだろう。
自分の夢が全く持って具体性にかけていることに、今更気付かされた。

一同を前にして、遠坂が口を開く。
「・・・結論から先に言うわ。
桜は、無茶な施術を施されてあと十年ぐらいしか生きられない」
その言葉を聞いて、士郎は思考が完全に停止した。

サクラガアトジュウネンシカイキラレナイ？

「そうか、その程度で済んでよかったな」
アーチャーのその言葉で、とっさに自分のサーヴァントを見る。

皮肉でもなんでもなく、本心からそう思っていた。
そんな顔だった。
遠坂も、その言葉に反論しない。
感情的にはともかく、論理的には正解だと認めざるを得ないからだ。
「魔術師のもとで虐待を受けていたわりには、幸運なほうです」
バゼットも頷いていた。きっと、封印指定の執行者として多くのものを見てきたであろう彼女は、士郎に現実を突きつけた。
「・・・なんとか、ならないのか？」
「無理ね、打てる手は全部打ったわ。それで、ようやく〝これ〟なのよ」
苦々しげに言い切る。
優秀であるが故に限界を知り、身内であるが故に悔しくてたまらない。
先に聞いていたライダーと桜は、寄り添うように互いを抱いていた。
「先輩、いいんです。姉さんやライダーが私を助けてくれたんです。それだけで、私はもう・・・」
「サクラ・・・」
悲しくも嬉しそうに笑う桜。おそらく本心から喜び、あるいはあきらめているのだろう。
それをみて、ライダーは歯がゆいに違いない。何もできないことが、歯がゆいに違いない。
「・・・アーチャー・・・」
「なんだ」
「なにかいい手はないのか？」
「衛宮君・・・、これはもう頓知でどうにかできるレベルの話じゃないの」
そう、足りないのは技術と魔力。魔力はどうにかなっても技術はどうにもならない。
いじられ倒した桜の体は、もうどうにもならなかった。

「いい手なんてない」
アーチャーは、言い切った。それを聞いて、他の面々も落胆すらしない。絶望したのは士郎だけだった。
当然だろう、弓兵にできる領分ではない。これは魔術師や医者の領分だ。

「だが、手がないわけではない」

「・・・本当か?」
希望が、本当に些細でも希望が欲しかった。桜すら、顔を上げる。
バゼットだけ、アーチャーの発言を聞いて眉をひそめた。というのも、このサーヴァントは得体が知れない。気付かないうちに利用されるのではないかと警戒するのは当然だ。

「だが、賭けだ。危険な、な。この場にいる全員の協力が必要だし、それに」
桜をみるアーチャー。その目には、ある種の冷酷さが見て取れる。
無理も無いだろう。彼女は十分に助かっている。ここから更に助けようとするのは危険極まりない。
「なにより、ライダーのマスターが危険だ。それでもいいなら・・・」
「教えて」
「私からもお願いします」
遠坂が懇願する。もう、妹を失いたくなかった。
セイバーも頭を下げる。協力できるのなら、なんでもするつもりだった。この、薄幸の少女を助ける為なら。
「まずは、教えてください」
「だな」
ランサー組も、条件次第では協力もやぶさかではないようだ。
そもそも、現状では積極的に争う理由は無い。今のところ、敵と呼ぶに値するのはセイバーと遠坂一組であり、他の二組のマスターは魔術師ですらない。

サーヴァントは一流のようだが、魔術師がコレでは勝負が成立しないだろう。
故に、アーチャーの提案しだいでは協力するのも手だと思っていた。
「・・・欲張ってもいいんでしょうか。私、いまでもう十分すぎるくらい幸せなのに・・・」
「サクラ・・・」
桜は、手を震わせている。ライダーが、抱きしめる。
「幸せになってください。私は、それだけが・・・」
「ライダー・・・」
自分自身の境遇を重ねているライダーは、彼女の幸せを願っていた。
「まあ、そんなにいい手ではない。だが・・・、ある程度利害は一致すると思う。そう言う意味では、危険ではあっても悪い手ではない」
そういって、語り始める。
「キャスターに交渉を持ちかけ、治してもらおう」

その夜。

柳洞寺の門前に集結した4組の参加者は、月光の元で予想外のサーヴァントにであう。
「ほほう、今宵は客が多いな」
侍。そう言い切るに足る風貌。優雅さすら感じるそのたたずまいに、サーヴァントは全員緊張する。
魔術師たちは、その正体を探ろうとした。どう見ても〝魔術師〟ではない。〝狂戦士〟でもない。では・・・。

「・・・アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

そう言って、刀を構える。そのたたずまいは、明らかに暗殺者のそれではない。一流の剣士のそれだ。

「ありゃ・・・沖田さんばりだな」

ただひたすらに剣術を極めんとした求道家のもつ鋭い剣気。この手合いは、宝具など持たずとも、性能で劣ろうともひっくり返すだけの『技術』をもっている。

ダメージの与え合いではなく、殺し合いでは決して油断できる相手ではない。最大級の警戒と共に、アーチャーが拳を構えた。他の面々も武装する。

４対１の戦いが・・・

「ようこそ、魔女の工房へ・・・」

始まらなかった。

キャスターとの交渉　改

キャスターは、門番に据えたアサシンが戦闘を仕掛けようとしたので止めた。
全く持って冗談ではない。
キャスターとアサシン。如何に弱いとされているとはいえ、2体のサーヴァントが協力しているという矛盾。圧倒的に優位なはずだった。
だが、向こうは4組が協力してこちらを攻めてきた。
しかも、〝バーサーカー〟にはもう出会っている以上、相手は間違いなく三騎士とライダーだ。
対魔力を持つ彼等には勝てない。絶対に勝てない。なんとかして、いったんでもいいから出直させなければ。
「それで、今宵は何の用かしら?」
「・・・交渉に来たわ、キャスター。門の中に通して頂戴」
それは、朗報といっていい言葉。問答無用で殲滅に来たわけではないようだ。
それだけでも心の中では小躍りしていた。なんとか、なんとかこの幸せを守らなければならない!
「いいでしょう、さあおはいりなさい」
「ふん、もったいない」
アサシンは道を退いた。寺の門が開く。
4組の参加者は、緊張した面持ちでその中に入っていった。

門が閉じる。

「それで、ご用件は何かしら?」
客間で、キャスターは8人と対峙していた。
ライダーらしき女性と、スーツ姿の男性はさほど強くない。
おそらく、マスターが万全でないのだろう。だがそれはそれで問題ない。

そう思わせるほどみなぎる自信を持って少女と青い獣はこちらを圧している。
単独でもアサシンと自分を倒せると思えるほど、彼等は魔力がみなぎっていた。
おそらく、どちらかがセイバーで、どちらかがランサーだ。ひるみそうになるが虚勢をはり、ごまかす。
「実は、このライダーのマスターを看て欲しいの」
そういって、一番女性的な少女が前に出た。
「あの、お願いします」
けなげそうな彼女は、ゆっくりと歩み寄った。
「？」
不可解だった。ぱっと見たところ健康そうだ。いろんな意味で。
しかし、手をかざして触れ、確かめると驚愕。そして憤怒した。
「これをやったのは誰！」
「もう始末をつけたわ」
「そう、参加したかったわ。残念ね」
女を、女性を、人と思わぬ所業。その結果が彼女であろうことは確かだ。無理やり捻じ曲げられ、適正を改造されている。
「こんなに腹が立ったのは久しぶりよ」
外道の技によりかわいそうな目にあっている少女。
それは、彼女の心の琴線に触れた。
「・・・治せるの？」
「誰に口を聞いているのよ。私はキャスターよ？」
そう、十分な魔力はある。十分な実力もある。治すという行為自体には何の問題もない。だが、魔術とは等価交換だ。
「で、あなたたちは何を差し出すの？」
スーツ姿の男が答える。
「おれ、アーチャーとそこにいるライダーの、命だ」

「キャスターと交渉ですか」
バゼットは、その表情を曇らせた。なるほど、手ではある。
魔術師のサーヴァントは、その技量たるやこの時代のあらゆる魔術師を凌駕しているに違いない。
そして、事前に集めた情報では町中から事故を装って魔力を集めている。
条件は十分だ。
「キャスターなら治せるのか？」
アーチャーのマスターは、そんなことはわからない。ただ可能性にすがりつく。
「知らん。ただ、現状で提供できる可能性はそれぐらいだ。
あとは、セイバーのマスターが優勝して聖杯で治す、ぐらいだな」
アーチャーは厳しく突き放した。
「・・・勝算、とかそう言う問題じゃないわね」
あきらかに不確実だ。なんの保証もない。
「それで、具体的には？」
ライダーは続きを促す。
そう、さっき彼は全員の利害が一致するといった。
いまの話では、バゼットが得をしない。彼女は、この場では余り積極的ではないからだ。
桜が助かることで、彼女には利益はないはずだ。
「まず、４組全員で赴く。キャスターの拠点は知れているんだろう？」
「ええ、柳洞寺にいるはずよ」
地脈を使い、魔力を集めている。ただし、死者は出ていない。だから、死人が出うるライダーの対処を優先したのだ。
「そこで、交渉を持ちかける。断られたら、全員で殺す」
「もうその時点で賭けね」
「そうだ。加えて治せるかどうかも賭けだし、治せても渋るかもしれない。そのときも殺す」
どの道殺す相手であり、面倒な相手でもある。
なるほど、ここまでは確実にキャスターを殺せるという意味でラン

サー組も得だ。
「で、対価を要求されるだろう」
魔術は等価交換。でなくとも、相手が見返りを求めるのは当然だ。
「そのとき、おれとライダーの脱落を条件として提示する」
戦争中において最も価値があるもの。即ち敵の首である。
それを聞いて、セイバー組、ランサー組は納得し、桜と士郎は絶句した。
「是非もありません」
ライダーは頷いた。この身に変えても彼女を救いたかったのだ。
文字通りの意味で。
故に、ためらいなどありえない。
「アーチャー！」
「マスター。どのみち、戦争が終わればおれたちは消える定めだ」
士郎の責める声を一蹴するアーチャー。
「更に言えば、ライダーのマスターはライダーが存在し続ける限り狙われる。
であれば、ここで使い潰したほうが安全の為にもなる」
「同感ですね」
バゼットは肯定する。確かに、ライダーがいる限り彼女は戦争に参加し続けることになる。
であれば、どの道手放さなければならない。彼女に戦闘はムリだ。
「何もかもうまくいけば、桜は助かり、マスターは戦争から開放され、アーチャーとライダーが脱落する。キャスターもランサー組も文句ないはずだ」
そう、形としてはそうなる。
「駄目です！ライダーを犠牲にするなんて・・・」
「サクラ」
ライダーは更に強く抱きしめる。
「あなたの幸せが私の幸せなんです」
「ライダー」
温かい言葉に、困る桜。納得がいかない、というのは士郎も同じだ。

「アーチャー。なんでお前まで・・・」
「いいか、マスター」
厳しく言う。
「何も失わずに、何かを得られると思うな。それが分不相応ならなおの事だ。いいか、お前はよくやったんだ。
ライダーのマスターを救い出した。無能なお前にはできすぎなぐらいの成果だ。誇っていい」
それすらも幸運に愛されただけだということを、士郎は知っている。
戦争に参加したものの、結局自分は何もしていない。
「彼女を幸せにしろ。
いいか、人一人救うって言うのは、とっても大変なことなんだ。
手間も時間も金銭もいる。こんな、どうでもいい戦いに参加している場合じゃない。
いいか、ランサーとセイバーのマスターを見ろ。この二人なら、たとえ残る3人のマスターがどんな奴でも倒せるさ。そうなれば、安全で安心だ」
もう十分だろう?そういっていた。
「本来、彼女の体を元に戻すのだって欲張りなぐらいだ」
賭けなんかしないほうがいいと、告げる。
「・・・」
「お前はよくやったよ。だから、もういいだろう?」
議論は紛糾した。
といっても、桜と士郎が嫌がっただけなのだったが。
結局、まず会って話をしようということになったのだった。

「そうね・・・」
悪い話ではない。

治療をすること自体、彼女にしてみればさほどの労力は要らない。
その程度の手間で、４対２が２対２になるのなら申し分ない。
「まず、おれが脱落する。
そのあと、ライダーのマスターが治ったのを確認したら、
ライダーも脱落する。もしも、余計な真似をしたら・・・」
「対魔力を持つセイバーとランサーが・・・てわけね」
これではうかつな真似はできない。
４組が手を結んでいるからこそできる力技だった。
この申し出を・・・キャスターは・・・。
「断るわ」
断った。
無言で武器を構えるサーヴァントたち。交渉が決裂した以上、殺すだけである。
「待ちなさい。別に治すことを拒否しているワケじゃないわ。実は、別の条件をお願いしたいの」
そういって、あわててなだめるキャスター。
「別の条件？」
確実に二組の参加者が脱落する以上にいい条件などあるのだろうか。
「バーサーカーを倒して欲しいの」
「・・・？」
４組には、見当が付かない。バーサーカー。狂気の力で生前以上の力を持つサーヴァント。
操縦が難しく、かつ燃費が悪いはずのサーヴァント。
それが、ライダーとアーチャーの首二つに相当するのだろうか。
「信じられないかもしれないけど、バーサーカーはヘラクレスよ」
その言葉は、全員に納得と戦慄を与えた。
「この間攻めてきて何とか追い返したけど、強敵だったわ」
「なるほど、それは強敵ですね」

セイバーが拳を握る。
「そりゃ楽しみだ」
ランサーは笑った。
確かに、つりあうどころかお釣りがくるほどの強敵だ。単体では絶対に勝てない。
「ですが、そんな規格外を一体どうやって・・・」
バゼットにはわからない。ヘラクレスだけでも無茶なのに、バーサーカーとは・・・。
マスターは、それこそどんな人間でもありえない。
「マスターは銀髪の少女だった」
それをきいて、セイバーの顔がこわばる。
「おそらく、「そのため」に調整された人形でしょうね」
「アインツベルン・・・！」
遠坂は、最後の御三家の名を口にする。最も長く聖杯を求め続けている一族だ。それぐらいのことはやるだろう。
「とにかく、彼を排除してくれると約束するのなら治療してあげる。どのみち、ある程度は経過を見なくちゃいけないし・・・。先に治してあげるわ」
ずいぶんな譲歩だった。だが、ありがたくもある。
「マスター、私に異論はありません」
「俺もだ」
セイバーは高ぶっていた。ランサーも同様である。なにせ、相手は英雄の中の英雄。
数多の綺羅星の如き英雄たちが活躍するギリシャ神話にあって、最大にして最強とたたえられる大英雄だ。
相手にとって不足は無い。バーサーカーであれ、ヘラクレスと戦えるのならばこの上ない幸運だ。
「私も微力ながら・・・」
ライダーも頷く。むろん、怪物退治に特化した英雄を相手に、自分は相性が悪い。だが、それでも全力を尽くすつもりだった。
しかし、キャスターが止める。

「あら、あなたは駄目よ。あなたはこのお嬢ちゃんとつながってるんだから、無理をしては駄目よ」
「・・・そうですか」
「じゃあ、おれとマスターがその分も頑張るってことでいいか？」
「ああ！」
士郎は令呪を見る。３つとも残っていた。
事前に聞いていたが、全部使えば宝具も使えるらしい。ここまで温存した甲斐があった。
「アサシンは門を動けないから、その三騎士さんたちだけで動いてもらうけど、いいかしら」
「十分です」
バゼットは応じた。たしかに、目の前のキャスターよりもヘラクレスのほうが脅威だ。
そして、バーサーカー以外のサーヴァント全員が手を組んでいる今は、この上ない好機であると言える。
クーフーリンの力は疑っていないが。それ以上にヘラクレスは厄介すぎる。嘘なら別だが、この状況では嘘をつく意味がない。
遠坂は、じぶんの妹を抱きしめた。
「桜、元気になりなさいよ？」
「ね、姉さん」
表情のゆがむ二人。
「必ず、勝って帰ってくるわ」
「ハイ、ライダーと待ってます」

アインツベルンは町外れの森の中に邸宅を持つ。そこを攻めるのであれば、神秘の隠匿上昼でも問題はない。
先に行動されるリスクと、ライダーから受けた傷の回復の時間を考え、翌日の昼に攻撃することにした。
それまで、この寺で一泊することになった。
当然、桜はキャスターの治療を受けることになり、ライダーはそばで見守ることになった。

一組ずつ、別室で休むことになった主従たち。
「なあ、アーチャー」
「どうした？」
改まって、士郎はアーチャーに尋ねる。これが最後かもしれないから、最後に聴きたいことがあった。
「１０のうち１０を救える正義の味方っていると思うか？俺は、それになりたいんだ」
そう、それは昔の約束だった。自分を育ててくれた父との。
一笑に付されるかもしれない。でも聞きたかった。目の前の男に。
「そうか・・・ふむ・・・」
考え込むアーチャー。
少なくとも、えらく真面目に考えていることは明らかだった。
「なあ、そもそもお前の言う〝１０〟てなんだ？」
それは根本的な問題だった。
なるほど、確かに意味がわからない。
「１０人困っている人がいたら、１０人救える、て意味だ」
「そうか・・・じゃあ無理だな」
あっさり言い切る。そういわれるような気がしていた。
だから怒る気にはなれない。だが、悲しかった。

「だって、１０人困っている人がいたとして、そのうちのほとんどは正義の味方じゃどうにもならないだろう？」

「え？」
それは、予想外の答えだった。
「じゃあお前、ＤＶが原因で困っている人を助けるのは正義の味方の仕事か？」
そんな、英霊らしくないことを言い出した。
「停電して、仕事ができなくて困っている人を助けるのは正義の味方か？

ちがう、電気技術者だ。
終電を逃して、家に帰れなくて困っている人を助けるのは正義の味方か？
ちがう、タクシーの運転手だ。
育児のストレスで気を病んで困っている人を助けるのは正義の味方か？
ちがう、カウンセラーだったり家族だ」
つらつらと、困っている人を挙げるアーチャー。
「１０人困っている人がいれば、その人それぞれの対応が必要で、それぞれの専門家がいるんだ。
正義の味方なんてそのうちの一種だろう？
それが１０人全部助けるなんて不可能だ」
「え・・・」
「まさかお前、ＤＶで傷ついている人は困っていないとでも？」
「それは、うん・・・」
「だろう？そう言うときは、弁護士や実家の家族、あるいは警察や裁判官、探偵なんかが味方になるんだ。調停員なんてものいたな・・・」
ちっとも英霊らしくないことを言い出すアーチャー。
「もしも正義の味方がこれを助けるとしたら・・、ほかの事なんてする暇ないぞ」
それは、一つの真理をついていた。
そう、言ってしまえば世の中の大概の人は困っている人であり、あるいは潜在的には困りうる人だ。
それを解決するのが〝仕事〟であり〝専門家〟であり〝プロ〟なのだ。
言ってしまえば、困っている人を助けるのが正義の味方の定義なら・・・
世界中のほとんどの人は正義の味方だ。
「お前、おなかがすいたら困るだろう？

そういうとき一々畑を耕して野菜やら穀物を収穫し、それを加工して食料や調味料にするか？
しないだろう。
農家の方や猟師の方が生産して、それを卸売業者の人が買い取って、さらに小売業に販売して、
そこで更に加工してから消費者の手に届くんだ。
飢えという根本的な「困る」を一つ解決するでもこれだけの人が関わってるんだぞ？」
「いや、そう言うのじゃなくて・・・」
「あのな！」
強く、攻める。
「世の中の大概の人は、スーパーマンよりアンパンマン。
ウルトラマンよりカレーパンマン。
ギンガマンより食パンマンなんだよ！」
それも、一つの真理。貧困は、確かに「困る」だ。
多くの争いの元凶は、これだろう。人間が動物に過ぎない以上、避けられない定めだ。
「じゃああれか？
そういう人たちにインフラ整備することを言ってるのか？
道路、ガス、水道、電気！これらがなくて「困ってる」人なんていくらでもいるぞ！
まずインフラ整備をするなら、役所や議会で計画を立てて、さらに競売をして企業に依頼をして・・・」
「いや、そういうのでもないんだけど・・・」
「そうか、じゃあ警察はどうだ？
日本全国にいるお巡りさん。刑事課に交通課、遺失物課にだな・・」
「ああ、うん」
「とにかくまあ、言い出したらきりがないぞ。困ってる人なんて」
士郎は、困っているひとがいたらその全員を救いたいと思っていた。

しかし、アーチャーはそんなのは全員でもなんでもないと言い切った。

そして、どう考えてもアーチャーの言っていることのほうがもっともだった。

つまり、正義の味方は１０のうち１０は救えない。

というより、一人救うのに十人以上は必要なのだ。

「お前の言いたいこともわかるよ。だけどな、お前の「困ってる」は凄い一部なんだよ。困ってる人のごく一部しか見てない。例えばライダーのマスターがいい例だ。

彼女は家庭的な事情で虐待されていた、それを解決するにはまず暴力が必要だった。

それがセイバーでありランサーだった。

で、さらに虐待により身体的に問題を抱えていた、それを解決するには医術が必要だった。

それがキャスターだ。

もっと言えば、心理的に追い詰められていた。それを解決するにはサポートが必要だった。

それがライダーであり、セイバーのマスターであり、お前だ」

一人困っている人がいれば、その人は多くの問題を抱えていることもある。

その全てを対処しなければ「救った」とはいえないだろう。

「わかるか？

お前はこの国に生まれて生活しているからわからないだろうが、ずっと昔から支えられ続けてるんだよ。

そりゃあ全部は救えないさ。でも、お前一人が頑張ったって、残りを救うなんてできない」

お前の力は全人類以上なのか？

人間社会以上なのか？

つまりそういっていた。じゃあ、そもそも無理なのか？

では、正義の味方以外の何ならば世界が救えるのか。
「じゃあ、１０のうち１０を救うのは正義の味方じゃないのか？」
「そうだ、世界の支配者だな」
世界に生きる全ての人の面倒をみる人。つまり、世界の支配者だ。
「世界征服・・・」
「そういうことだ。その覚悟がないのなら、地球人類の１０割のうち１０割を救うのは無理だな」
考え方の違いに愕然とする。
スケールが大きすぎる。
あるいは、細かすぎた。
「・・・」
「でだ、もしもお前が「助けたい」と思っている人のうち１０割を助けたいと思うなら・・・」
最後にこういって〆た。
「終末医療・・、いわゆる治る見込みのない患者や、その医師のまえで同じことを言えるか？」
結局、全部何から何まで破綻していた。そう言うことだろう。

１０のうち１０を救える正義の味方

まず、〝１０〟は全く持って「１０」ではなく、〝１〟を救うには到底〝一人〟では無理で、どの分野でも、〝全部〟は無理。
極めて論理的に無理だった。
それを、あっさりと納得してしまった。うん、無理だ。
たとえば、士郎が何かの職業に付けば、それだけで「困る」人を救える正義の味方。
でも、それ以外の「困る」は救えない。

更に言えば、自分が対処する「困る」も全部は救えない。
部署や、担当地域が違えば救えない。ただそれだけのこと。
救う順番を選べない男にとって、これは死刑宣告だった。

「でもまあ・・・」
蛇足のようにこういった。
「ライダーのマスターにとって、お前は正義の味方だろうな」
「え？」
少なくとも、一人は救えた。そのことに気付く。
「おれにとってもな」
彼は、泣きそうだった。
「アーチャー・・・」
「おれも・・・」
大人らしくもなく泣きそうな顔だった。
「何も願わなければ良かった・・・」

１００人の少年少女が、幾何学模様の空間に収まっていた。
背も、性別も、学年も、学校もバラバラの集団。
彼らは、話をする為に集まっていた。
これは決起集会。
壇上には、ここに自分以外の９９人を集めた少年が居た。

「・・・みんな、きょうは集まってくれてありがとう」

深く、頭を下げる。

場が、静寂に包まれた。

「今日、みんなには大事な話がある」

そういって、見渡した。
みんな少年を見守っていた。

「歴史の教科書を見て、或いは映画を見て、この人になりたいと思ったことはあるか?」

みな、答えない。
しかし、一度は思ったことのあることだった。

「おれはあった。それどころか、その機会すらあった」

それを聞いても、誰も驚かない。

「おれは※※※※になりたかった・・・」

既に、少年の目は潤んでいた。

「かわいい女の子に囲まれて、ちやほやされたかった。
悪い敵を倒して、みんなから褒められたかった。
強い武器を手に入れて、暴れまわりたかった」

目からは、涙がこぼれだした。

「そのためなら、頑張って修行できた。

そのためなら、遊べなくても良かった。
そのためなら・・・」

言葉に詰まる。
むせび泣く。
拳を握り締める。

「人を殺しても良かった！」

言い切った。

「でも、今は違う！」

もう一度周囲を見る。

「この町で起きたことを、終わらせたい！
それには、一人じゃ無理なんだ！
だから・・・」

なきながら叫ぶ。

「おれと一緒に人を殺してくれ！」

喝采の拍手に包まれて、少年は大泣きした。
申し訳なくて、悲しくてないていた。

「みんな・・・すまない。そして、ありがとう！」

３組の参加者は、おおよそ万全といっていい状態で、森に入っていった。
「相手は英雄中の英雄、ヘラクレス。相手にとって不足はありません」
「楽しみだぜ」
セイバーと、ランサーは気を高ぶらせつつ進んでいた。
もちろん、周囲の警戒は怠らない。ここはすでに敵地なのだから。
対して、遠坂とバゼットは緊張した面持ちだった。なにせ、ギリシャ神話最強の英雄が待ち構えているのだ。気が重くなろうというものだ。
しかし、アーチャーはやや余裕があった。少なくとも、緊張はしていなかった。
「ヘラクレスの実物かぁ・・・」
何か思うところでもあるのだろう。思いをはせていた。
そんな彼を見て、士郎は考えていた。
どうすればいいのだろう。
少なくとも、彼のおかげで桜を救えた。他の面々も、こうして協力できている。
少なくとも、見える範囲において彼は全てを救っている。
もちろん全く全部ではない。
キャスターやライダーの犠牲者は、相当な数らしい。つまり、今は味方だが彼女たちは悪なのだ。だが、憎む気にもなれない。
話してみれば、そう悪い人にも見えなかった。
悪い人も１０のうちなら、どうすれば救えるのだろうか。
そのヒントを、いや正解を目の前の男は持っているはずだった。
いや、それはないか。
昨日、本人が言っていた。
世界征服でもしないかぎり無理だと。

そんなことを考えていると、自分達の進行方向から轟音が響いた。

おかしい。

聖杯戦争に参加するのは7組。

セイバー、ランサー、アーチャーはここにいる。

キャスター、アサシン、ライダーはここにいない。

バーサーカーがこれから向かうところに居るだけだ。

であれば、一体誰と戦っているんだ？

「急ぐぞ！」

各サーヴァントは自分のマスターを抱えて走り出した。

轟音は段々と大きくなっていった。そして、館が見えた時点で止んだ。それは戦闘の終わりを意味していた。

「一体何が！」

「知るか！」

「突入するぞ！」

各々、歴戦の雄の持つ勘が鳴り響く。

強敵が居ると。

壁を破って内部に突入した3組を待っていたのは、消えていく傷だらけの巨人と、

その足元で泣き叫ぶ銀髪の少女。

おそらく、バーサーカー組に違いない。

では、一体誰が彼らを打倒したのか。

「アーチャー！」

セイバーが叫ぶ。視線の先には黄金のサーヴァントが立っていた。

「ほう、久しいなセイバー」

傲慢不遜。

それを絵に描いたような男は、セイバーだけを見てそう言った。

「しばし待て、いまこの人形を回収しなければならんのだ」
そういって、銀髪の少女に歩み寄る黄金のサーヴァント。

その前に、三組全員が立ちふさがる。

「気をつけてください。
彼は複数の宝具を持つ英雄です！」
「け、いけすかねえ面だ！」
「マスターはその子を捕まえておけ！」
事態は全くの見込めないがサーヴァント達は理解したのだ。この男の思い通りにさせてはならないと！

「雑種が・・・消えろ」

男の背後に空間の揺らぎが生まれ、そこから無数の宝具が顔を出す。
射出された。

「デルパ！　武装錬金！」
大戦斧（グレートアックス）の武装錬金　フェイタルアトラクション！

それを、斥力場を展開したアーチャーが一人で受け止める。
いや、いなした。
宝具の群はすべて誰にも当たらず、周囲だけを破壊した。
それは、床や柱のことごとくを破壊した。
それを見て、マスターたちは戦慄する。
これが一発でも当たれば、ただではすまない。

「・・・貴様！」

怒りに燃える黄金の男は、更に連続で射出する。
しかし、ただ飛ばすだけでは意味がない。
すべて軌道を変えられてしまう。
「はぁ・・・はぁ・・・」
しかし、全くの無駄ではない。
魔力を多く消費するであろうその斧の行使は、アーチャーの補給されることのない体力魔力を削っていた。
段々、斥力場が削られていく。狭くなっていく。
「このままでは・・・」
バゼットは歯がゆかった。少なくとも、防ぐという意味では完全だ。だが、長く持たないことはあきらか。
「何か手を・・・」
遠坂は宝石に手を伸ばそうとした。しかし、彼に補給することはできない。彼に触れれば拮抗が崩れるおそれがあった。
この状況で、それこそ何もできない士郎は、ただ銀髪の少女を守っていた。
「必ず、助けるからな!」
意味のない励ましをする士郎。しかし、それは彼女の心を動かした。
「シロウ・・・」
なぜか、彼女はシロウの名前を呼んだ。
「バーサーカーの敵をとってくれるの?」
「ああ!」
力強く頷く士郎。
「そっか、じゃあ私も力を貸してあげる」
そういって、少女は士郎に口づけをした。
戸惑う間もなく、自分の体に熱いものが流れ込み、更にどこかへ抜けていくことを感じた。
直後、アーチャーに魔力が流れ込む。

「これは・・・」

ヘラクレスを御しうる膨大な魔力が、士郎を通じてアーチャーへ流れ込んでいく。

それは、彼にとって今最も欲していたものだった。

「マスターー！」

能面のような顔で叫ぶ。

「令呪だ！3つ全部使って叫べ！」

「わかった」

頷く士郎。

「アーチャー！全力を！」

士郎の手に刻まれた令呪。

その〃全て〃が消える。

「士郎・・・お前がマスターでよかった」

士郎の耳にアーチャーがそう言ったのが聞こえた。

「不完全で恐縮だが・・・、使わせてもらうぞ！」

白い羽根が、空からひらひらと舞い降りた。

「弓兵のクラスで召喚されたおれだが、その宝具、最大の武器はこの肉

体！」

小さな鳥が羽ばたく音が聞こえた。段々近づいてくる。

「幼少のときからこの体には、いくつもの力が宿り続けた！」

妙な存在感のある白い鳩が一羽、《一誠》の肩に止まった。

「本来なら、その全てを引き出すのが我が宝具・・・」

我が名を称えよ　我が　栄光に満ちた　並ぶ者無き　我が名を称えよ・・・

「その一端に過ぎないが、これぞ我が最強宝具！」

Ｙ・Ｈ・Ｖ・Ｈ

「赫奕たる異形態（ディープレッド）！」

スーツは姿を消し、赤くも神々しい衣が彼を包む。

その手には、剣が握られていた。

「我が名を称えよ　我が　栄光に満ちた　並ぶ者無き　我が名を称えよ・・・」

彼らしくもなく、全力で自己を主張する。

凄まじい神々しさを放ちつつ、燃え盛る剣を振りかざす。その背を見る者たちに、生を。歯向かう者に、死を。

「聖書の神より託されし「輪を描いて回る炎の剣」を持って・・・」

それは、大見得きり。
「『次代を担うもの』として直々にお前を滅ぼす！」

「〝兵藤一誠〟の名にかけて！」

赫奕たる異形態（ディープレッド）　C～EX
あらゆる属性の力を融和させた肉体そのもの。
ほぼ自在に加減が可能であり、
本来両立しない神性と魔獣性すら純度を損なわずに同時に成立させる。
彼の本質であり、誇りそのもの。

バーサーカーの敵討ち

「ばかな、炎の剣なんて・・・」
「それを使う英雄なんているわけが無い・・・」
さて、クーフーリンというサーヴァントがいる。彼は、日本という土地ではあまり知名度がない。少なくとも、アーサー王やヘラクレス、メドゥーサよりは無い。
だからこそ、知名度の恩恵を得ることがかなわず、ほかと比べて弱い。若干だが。
しかし、その理屈でいえば、真名を明かしてなお知るものの無いアーチャーは、クーフーリンよりなお弱いはず。
だが、もしも。バゼットや遠坂の想像通りの能力なのだとしたら。神降しの「神」が思っているとおりで、しかもその補正を受けられるのだとしたら。
その力は、ヘラクレスすらかすむだろう。
それこそ正真正銘、最強の「信仰」を集めているのだから。
「さてと・・・」
それに由来するすさまじい力。目の前の黄金のサーヴァントすらかすむ強大な力。
神性を得たことにより、そのステータスは全てがＡランクに向上していた。
「魔獣創造の力は使えない。
グングニルの力も使えない。
オオスズメバチの力も使えない。
ドライグの力も使えない。
悪魔の駒の力も使えない。
聖槍の祝福の力も使えない。
使えるのは「次代を担うもの」と、炎の剣。
それから強化系念能力、武装錬金ぐらいか」
しかし、アーチャーはそれでも自分の力に不満があるというか、確認をしていた。

「「次代を担うもの」の力も百分の一の力も使えないな・・・。
でもまあたいしたことはないか」
能面のような表情で、黄金のサーヴァントをにらむ。
「千分の一か、万分の一か、億か、兆か、それとも京か。
それがたとえ那由多の彼方でもおれには十分に過ぎる」
握り締めた拳は、どこまでも力強い。
しかし、黄金のサーヴァントは笑うだけだ。
「だめ！」
バーサーカーのマスターが叫ぶ。
「神性は駄目なの！あのサーヴァントは・・・」
鎖。
黄金のサーヴァントは宝具の鎖を取り出す。
「神か・・・我の前に立つとはな、愚かな！」
「対神宝具を持ってるの！」
鎖が躍動し、アーチャーに襲い掛かる。
「我が友「天の鎖」は、相手の神の格が高ければ高いほどその効果を増す！
神の身で我が前に立つその愚かさを知れ！」

その鎖を、アーチャーは、すべてつかみむしりとった。

そして、引きちぎってバラバラにする。

「まさか対神宝具まで持っているとは恐れ入る」
黄金のサーヴァントも、あるいはマスターやセイバー、ランサーも、全員言葉がない。
「だがおれ以外の滅神四雄3人ならともかく・・・、あいにく、おれの異名は無敵の怪物。そんなものは何の意味もない」
こともなげに言い切った。
「・・・貴様！この雑種が！我が友を！」
怒りを顕にして咆哮する黄金のサーヴァント。

無数の宝物を持つ彼にとっても、その鎖はことさらに大事なものだったようだ。
怒りを隠すこともなく体を震わせていた。
「そうだ、おれは雑種だ。だからこそ、対神宝具は意味を成さない」
誇らしげに言い切る。そう、それこそがアーチャーの最大の強み。
念能力の応用により、肉体のうち両拳「だけ」を神でなく人にし、その腕力で引きちぎったのである。
「おれを倒したければ、力でこい」
理不尽。神の力を持ち、神の弱点を克服するもの。
故に無敵の怪物。この男を倒すには、力をもって来るしかない。
「いいだろう・・・、我にこれを抜かせるか！」
凄まじい、凄まじい暴風が屋敷の内装を吹き飛ばす。
「ＥＸクラスの宝具か・・・ならば」
炎の剣を身に埋めたアーチャーの体から、炎が吹き荒れる。
「セイバー、ランサー。この攻撃はたぶん防ぎきれない。だから、とどめは頼む」
そう言って、両の手のひらを前に突き出す。
「馬鹿が。そのちんけな剣ひとつで受けきれるものか！」
「・・・だろうな」
アーチャーは否定しない。事実だろうから。
「だが、こっちは一人じゃない」
アーチャーの周囲から、地面に光が広がっていく。
「どうせ、この従僕の状態ならたいしたことはできない。思いっきりいかせてもらう」
周囲から、さながらつぼみが花開くように美しくも無垢なる存在が現れる。
「我が名を称えよ　我が　栄光に満ちた　並ぶ者無き　我が名を称えよ・・・」
生まれいずる天使たちが、その歌声でアーチャーを称える。
「そんな、こんな無茶苦茶な」
「ありえない」

「でたらめだぜ・・・」
「すごい」
「意味がわからない・・・」
もう、どうリアクションしていいのかすらわから無い。
味方でありながら、目の前の謎のサーヴァントより尚謎の力、いや出所がはっきりしているから尚たちの悪い力。それを、すべて自分たちを守るために使おうとしている。
そんな、無茶苦茶が行われようとしている。

天使たちの美しい歌声が、アーチャーを強くする。
その光景に、黄金のサーヴァントは歯軋りをした。
この上ない力。
自分というこの上ない英雄の、さらにこの上ない力を前にして、目の前の男は同等以上の力を持って対峙している。
あってはならない。そんな力は、存在するはずも無い。

「さあ、力比べだ・・・輪を描いて回る（マワシ）・・・」
「抜かせ！・・・天地乖離す（エヌマ）・・・」
「炎の掌（ウケ）！」
「開闢の星（エリシュ）！」

天地を分けた剣と人と神を隔てる剣が、風と炎が激突する！
凄まじすぎる力と力のぶつかり合い。それは、終末を予感させる、いやそれそのものだった。
サーヴァントの二人すら見たことの無い創世記のごとき力のぶつかり合い。
それは、まるで永遠に続くかのように見えた。
だが、相手もこちらも限界はある。魔力量という限界が。
バーサーカーのマスターがよろめく。この力を支えきれなくなりつつあった。
当然だ。ヘラクレスすらこの暴風に耐えられまい。

だが、それを受けるアーチャーは、令呪をもって強化しているとはいえ、その消費は凄まじいはずだった。

見れば、アーチャーはゆっくりと足元から消えつつあった。
神降しの状態を維持できなくなりつつあったのである。
「アーチャー!」
士郎は、自身に膨大な魔力が流れ続けることによる熱に耐えながらも叫んだ。
「マスター」
穏やかに、アーチャーは応じる。
「あの時、何も望まないと言ったな?」
聖杯に、何も望まない。それは初めてあったときの会話。
戦いのなんたるかも知らなかった、無知であることをさえ知らなかった自分の青い言葉。
「あの言葉で、あの言葉だけでよかった」
その言葉が、アーチャーにとってどれだけの意味を持つのか、士郎は知らない。
何かを望み、願ってしまったこと自体を後悔している男は、本当に救われたのだ。
「救われたよ」
既に、天使たちも消えつつあった。アーチャーは、その下半身が消えていた。

「あとは、頼んだぜ」

アーチャーは笑い、直後にその姿は消えた。さえぎられていた風が暴威を振るう。
そして、セイバーとランサーがそれに向かって駆け出す。それは、本来なら自殺行為だった。
しかし、神話の風は既に大いに弱まっていた。そう、アーチャーは

凌ぎきっていたのだ。
そして、セイバーとランサーはそれを信じていた。
だからこそ、魔力が減りよろめいていた黄金のサーヴァントに、体勢を立て直す暇すら与えなかった。

「約束された（エクス）・・・」

アーチャーを削りきった創世の風を前にして、セイバーが自身の象徴を振りぬく！

「勝利の剣（カリバー）！」

「ぐううううう！」

気高くも美しい黄金の斬撃。その一撃で、弱まっていた風は切り裂かれ黄金の鎧が砕かれる。

サーヴァントの肉体に傷が走った。しかし、致命傷ではない。さすがは宝具の鎧といったところ。しかし、もう次は無い。

「刺し穿つ（ゲイ）・・・」

大きく見せた隙。青き獣が、その隙を逃すはずは無い。

「死棘の槍（ボルク）！」

必殺の一撃が、その心臓を打ち抜いた。

「バカな・・・」

その敗北を信じきることができないまま、謎のサーヴァントは謎の

まま姿を消した。

「やったようですね」

「そうみたいね」

宝具の使用による倦怠感を感じながらも、セイバーとランサーの両マスターは勝利を確信した。

恐ろしい敵だった。バーサーカーを含めれば、４人がかりでようやく倒せるとは、規格外にもほどがある。

「・・・アーチャー」

結局、どういう来歴だったのかわからないアーチャーを失っての勝利。

士郎は、最後に笑ったアーチャーの姿を幻視しつつ、呆然としていた。

しかし、それを許す状況ではなかったようだ。

「・・・どうした？」

自分の腕の中の、バーサーカーのマスターの異変に気づく。

明らかに、魔力の消耗以外の何かが彼女に起きていた。言葉を発することも無く、高熱を出している。とてもではないが、人間の体温ではない。

「・・・キャスターに診せましょう。なにかわかると思うわ」

遠坂の提案に反論するものはいなかった。

結局、キャスターがすべてを解決した。

なんでも、バーサーカーのマスター自身、その心臓が聖杯らしく、ヘラクレスと謎のサーヴァント、アーチャーが収まったせいで満杯になったらしい。

その聖杯は汚染されており、正しく願いをかなえることはできなかったが、

そこはキャスターが技術で何とかしたらしい。

魔術師の英霊にふさわしい大活躍と言えるだろう。
終わってみれば、生き残った5体のサーヴァントは聖杯の力によって受肉し、心臓を失ったバーサーカーのマスターも蘇生された。
桜も、当然のように元気になり、あと百年は生きられるらしい。
任務を果たせなかったバゼットが無職になり、ランサーともども士郎の家に厄介になり、
遠坂やセイバー、バーサーカーのマスターも住むようになった。
にぎわしくなり、みんな新しい生活を楽しんでいる。
士郎は、その中心の中で自分のなすべきことを悩んでいた。

そして、一月ほどして結論が出た。みんなに、相談するというものだった。

アーチャーの意見は、まったく持って正論で、自分は反論できなかった。多分、正解なんだろう。
だが、こうも言っていた。
士郎はアーチャーを救ったと。
現実は厳しくて、自分の思い描く正義の味方は存在できない。
でも、やれることはあるはずだ。それを探すために、頑張ろう。見つけたら、もっと頑張ろう。
それがきっと、自分に夢を託した義理の父の本当の願いだから。

外伝が終わりました

さて、投稿は三日ぐらいで終わりました。

はやっ！

駆け足にもほどがありますね。

まあ、前回が長すぎたのでその反動というわけで。

やっぱり、本編よりも後日談が長いのはどうかと思います。

まあ、あとがきも短めで・・・。

では、この作品ですが・・・。

いかがだったでしょうか。

短すぎて、しっくりこなかったでしょうか。

子供の夢を踏みにじってないでしょうか。

ですが、子供のままではエミヤになってしまいますし・・・。

なんといいますか、彼もロマンチストですよね。

肝心なところが子供のままで。

Ｆａｔｅについて。

自分は実は冬木の聖杯戦争があまり好きではありません。

というのも、戦ってもいいことが無いからです。

この戦いはサバイバルで、生き残ったものの勝ち。

つまり、戦力を保つことが重要で、最善手です。

ですが、極端な話全員穴熊を決め込んで膠着する可能性もあるので

はないでしょうか。

時間制限も明記されていませんし・・・。

結果的に、主人公が全部倒す流れになりがちですし・・・。

そうなりうる以上、そこはなにか手を考えてほしかったです。

まあ、エクストラはその限りではありません。

あれはトーナメントですからね。

負けるまで一対一で戦い続ける。

その絶対のルールの下、すべての参加者は平等です。

そこがいい。

なんといいますか、優勝とは戦って勝ち取るべきだと思います。

いえ、Ｆａｔｅはもちろん好きですよ？

自分も無限の剣製とか大好きですし！

でも、なんといいますか・・・

サバイバルなのにほぼ全員主人公が倒すって言うのは、ねえ？

ということで・・ジャンプで連載された名作、魁！男塾の名台詞。

いえ、迷台詞で〆させていただきます。

兵頭一誠死亡確認！

学生服の少年の前に、赤い服を着た少女が現れる。
「ふふふ！」
「そのなんだ、お前がおれのサーヴァントか？」
少年は、少女に尋ねる。
「そのとおりだ奏者よ！」
赤いサーヴァントが高らかに叫ぶ。
「余が、セイバーである！」
「そうか、よろしく」
少年は握手を求めた。

月の聖杯戦争の幕が上がる。

「奏者よ・・・。
これほどの美くしい女性と組むのだぞ！
もっと感動せぬか！」

不満を顕にする少女。
「・・・いや、妻子ある身なんで特には」
「ぬぬぬ・・・必ず余の美貌で骨抜きにしてみせようぞ！」
「言っておくが、おれの好みのタイプは妻子もちにアプローチしない人だ」
「なんの！そんな道理、余のわがままでこじ開ける！」
「・・・勘弁してくれ」
少年は、ため息をついた。
しかし、彼女の助力なしでは決して勝ち残れないだろう。
このムーンセルでの聖杯戦争は。

ＥＸＴＲＡ編
エピローグとオープニング

投影魔術で、宝具を投影する。
これしかできないおれの魔術。
「・・・何度見ても呆れるわね」
そんなことをいうのはキャスターだった。
寺の一室を借りて、おれと桜は魔術の授業を受けていた。
とはいっても、おれも桜も基本中の基本から学んでいるんだけれども。
遠坂曰く、教師の無駄使いらしい。
それはそうだろう。
こんな、無知なおれでさえ彼女の凄さはわかる。
なにせ、戦争を終わらせたのは彼女だからだ。
汚染された聖杯の始末、魔術協会への交渉、アインツベルンとの示談。
その全てを彼女一人で済ませた、いや遠坂も付いてったらしいが何もできなかったそうな。
それほど彼女という魔術師が規格外であり、同種である魔術師には天敵だった。
そう、剣士であるセイバーや槍兵であるランサー。
彼らには対魔力がある。
しかし、それは確かに戦闘では優位だが、
交渉ごとなどにおいてはとにかく知識や技術が重要になる。
相手が、探求者である魔術師なら尚のこと。
そうして、まず魔術協会を黙らせた彼女は、帰す刀でアインツベルンに赴いた。
自分を初めとする５人の受肉したサーヴァントの肉体の一部、
つまり髪の毛や血液を提出したのだ。
これは、第三魔法を目指すアインツベルンにとっては大きな一歩

だった。
そう、どれほど時間がかかったとしても、少なくとも成果は出た。
それだけが真実だった。
彼らはイリヤから手を引くことを約束し、
かつ冬木の戦争にも感知しないと契約した。
こうして、ひと悶着すらも起きなかったのは、何もかも彼女のおかげだ。
そんな、世界的に見ても、いや人類史的に見ても優れた魔術師の授業を受けるのは、
俺と桜という底辺的な二人なワケで・・・
「それにしても・・・、
つくづくあのアーチャーを引いたのは運がよかったわね」
俺にとって、ではなく全体として、という意味だろう。
確かに、彼がいなければこんな風に彼女と話をしているなどありえない。
「命令に従順で、作戦の立案もし、マスターの意見を尊重し、
魔力がなくても、願いがなくても人に従って、挙句強いと来る。
まったく、うちの穀潰しと取り替えて欲しいわ」
あのあと、はっきりしたことがいくつかある。
アーチャーの格だ。
なんでも、本来7騎全部が脱落しなければ満たされない聖杯が3騎で満ちたのは、
3騎が全て強力だったからだそうだ。
そのなかでもアーチャーは強力で、
アーチャー〉黄金〉ヘラクレス
だそうだ。
いったい、どれだけ強力だったんだろう。
「なあ、キャスター。
おまえにとってアーチャーはどんな奴だ?」
「そうね・・・、まず感謝しているわ。
受肉できたし。でもまあ、あれね、一日しかあってないし

正直印象が薄いわ」
でしょうね。
セイバーやランサーはよく来て、寺の庭でアサシンと立ち会ってる。
3人とも、戦うのが好きで、というか武芸を好むというか・・・。
とにかくまあ、彼女にとっては面倒きわまる相手だ。
さぞや印象深いに違いない。
セイバーだけは、かわいい服を着せようと計画を練っているらしいが、
アサシンとランサーははっきり言って邪魔以外の何者でもない。
ライダーは、桜と一緒にいるため、顔を合わせる。
共に、反英雄で、特に嫌う理由もなく話もしている。
同郷だしな。
「私は・・・」
おずおずと桜が話し出す。
「アーチャーさんは、頼もしかったです。
いや、ライダーが頼もしくなかったわけじゃないんですよ?
でも、すごく安心感があったっていうか」
それは俺も同じだった。
なんというか、磐石?
そんな印象が強い。
みんな、どこに誰がいるのかきちんと把握していなかった戦争の中で、
あいつは、あいつだけはいつもあわても騒ぎもしなかった。
そうだ。
あれはまさに大人って感じだった。

「彼・・・ですか」
我が家に住むバゼットにアーチャーの事を聞く。
いろんな人から彼のことを聞きたい。

「そうですね、彼はできることとできないことをよく知っていました。
特に、全体を常に把握していたと思います。
それはそのときそのときだけでなく、終わりを常に見据えていたと思います」
その結果が、校庭への放火だったりキャスターとの交渉だった。
「多分、かれはあなたに聖杯を与えるつもりはなかったんでしょう。
それこそ、あなたが五体満足で戦争から離脱すること。
それがかれにとっての聖杯戦争の理想的な終わりでした。
その為にできるだけあなたが納得する形にまとめようとしたんだと思いますよ」
だとしたら、俺は彼にどれだけ救われたのだろうか。
自分のことすらよくわかっていない奴が、
英雄英傑の集結した戦場に何の準備もなく参戦する。
今更ながら、その無謀に呆れる。
「おそらく、彼は常に先の先を見ていました。
桜が身体的に傷を負っていた場合、どうするのかも、
突入前からある程度は考えていたのではないでしょうか。
まあ、取らぬ狸の皮算用、という言葉もありますが、
事前の情報で想定できる事態の対処法をあらかじめ考えておく。
かれはそう言うことを得意としていたのでしょう」
俺もそう思う。
あいつはいつも準備万端だった。
作戦を決めるときにはもう、あるていどまとまった案を持っていた。
だから、俺たちも迷わずに行動ができた。
その結果、１週間ほどで全てが終わったんだ。
でも、もちろんあいつだって一人で何でもかんでもできたわけじゃない。
ライダーの結界に気付いたのは遠坂だし、キャスターの住処を把握していたのは遠坂とバゼットだった。
いや、それ以前に俺のせいでアーチャーはほとんど戦力にならな

かった。
セイバーやランサーがいなければ、桜を救出することはできなかった。
「セイバーもそうでしたが、彼は人を従える立場だったのでしょう。でなければ、ああも立場の違う面々をまとめることはできなかったはずです」
そうだな。
あいつはメリットやデメリットがある程度つりあうことをいつも考えていた。
だから、遠坂はともかくバゼットやキャスターがすんなり協力してくれたんだろう。
人は、善意で動く。
でも善意だけでは動かない。
ある程度、善意とメリットをつりあわせれば、積極的に動いてくれる。
今回で、それがよくわかった。
どうしてだ、なんでだ。
そんなことを言っていても、誰も助けてくれない。
交渉するのは悪いことじゃない。
ちゃんと見合うものを差し出せば、人は手を取り合えるんだ。
もちろん、そんなことばかりじゃないのはわかってるけど。
でも、よくわかった。
一人でできないことでも、みんなならできると。
「あいつ、今どうしてるかな」
セイバー曰く、あいつは「まだ生きている」らしい。
彼女も、まだ死ぬ直前の状態で召喚されているからよくわかったそうだ。
じゃあ、あいつも自分の体に戻ってるんだろうか。
俺は最初からずっとあいつのそばにいたのに、
戦争のことに夢中で、自分のことばっかり考えて、

あいつのことを何にも知らない。
真名だって、聞こうとも思っていなかった。
「会いたいな・・・」
話がしたい。
どんな風に戦って、どんな風に生きたのか。
戦争じゃなくて、この日常の中で話がしたかった。

自分を召喚するマスターなどいない。
そんなことはわかっている。
召喚するのなら、強いサーヴァントだろう。
或いは美しいサーヴァントだろう。
自分なら、間違いなく後者だ。
だが、自分はいずれにも当てはまらない。
いや、適切に言うのならそう思われている。
自分ほど強く、且つ美しいサーヴァントなど存在しないというのに。
ああ、しかし自分の悪名は、ただ暴君であったことのみを伝えている。
これでは、自分が如何に天才であったのか、すばらしい美しさを持っているのかなど伝わりようがない。
そんなことを考えていると、一人のマスターを見つけた。
いや、その候補を見つけた。
かれは、あろうことか単独で、一切の武装を持たずにエネミーと交戦していた。
いや、適切に言うのなら、一方的に破壊していた。
無言で、無表情で。
無骨。

その一言に尽きる。
美しくないのだ。
自分のそれと違って、見るものを魅せない。
ただ壊すだけなど、技ではない。
ああ、見るに耐えない。

そうして、しばらくしてまたマスターを探すと、さっきのマスター候補を見つけた。

まだ同じことをしていた。
さっきとはやや違う動きで、
しかし同じく一撃で破壊していた。
嫌悪すら覚えた。
ああ、みっともない。
どのみち、あのマスター候補はあそこを脱出できない。
どれほど優れた魔術師だろうと、戦闘に長じていようと。
あそこはそう言う〝ふう〟になっている。
サーヴァントを召喚しない限り。
そうして、また見るのをやめた。

また見ると、まだやっていた。
ああ、うっとおしい。
出向いて斬ってやろうかと思った。
一体いつまで続けるのだ。
無駄で、美の欠片もない行為を。
続けていれば、何か変わると思っているのだろうか。

それから、何度見ても、何度見ても同じことをしていた。
ずっと続いていた。

無表情な男は、どこまでいっても不細工で・・・。

そうして、向こうでは三日ほどたった頃だろう。
ついに、力尽きた。
エネミーを前にして、膝を突いた。
やっと終わったのか。
そうして、少年の顔を改めてみる。
一体どんな顔をしているのだろう。

泣いていた。

嬉しそうに泣いていた。
そう、なぜか笑っていた。

「一人では死ねないな・・・」

その言葉が、胸に突き刺さった。
見取るものさえいなかった自分の死を思い出した。

「そうとも生きて帰る」

自分は決していえなかった言葉。
帰ったところで、誰も自分を迎えるものなどいなかった。

「こんなところで死ねるか!」

少年は立ち上がる。
帰るために。

「静の気が尽きたなら動の気を開放するだけだ・・・!」

拳を握り締める少年。
その姿は、気高く美しい。

「〝兵藤一誠〟の力、魅せてやる！」

何度でもよみがえるエネミーに、
何度でも立ち向かう少年。
その目の涙に、悲壮感はない。
こんな、一人ぼっちの少年の、どこにこんな力があるというのだろうか。
醜くもがく少年の、その涙のなんと美しいことか。

「チェストー！」

一撃で、破壊する。
その咆哮は、気高く。
そして力強かった。

ここだ！

ここで自分が行かずしていつ行くというのか。

この少年の力強さ。
生命力。
その美しさに心惹かれた。
そう、認めよう。
かれは美しいと！

気付いたら学校に居た。
登校して、授業を受けて、下校した。

三日ほどした頃だろう。
気付いた。
自分の娘とペットがいないと。
そうだ、自分は高校になんてまともに通ったことがない。
おれは、そうだ。
軍人じゃないか。

さまよって、気付けばゲームの雑魚キャラっぽいのと戦っていた。

戦おうとして、愕然とする。
魔獣創造の力は使えない。
グングニルの力も使えない。
ドライグの力も使えない。
悪魔の駒の力も使えない。
聖槍の祝福の力も使えない。
炎の剣も使えない。
「次代を担うもの」の力も使えない。
「六式、念能力、空手・・・」
それだけあればいける。

どこかからか声が聞こえた。

おや、なぜ君のようなものがここにいるのかな?

そんなことはおれが聞きたい。
疑問をおれにぶつけないで欲しい。
まず、おれはどうして学生の頃の姿なのか。
どうしておれは能力のほとんどが使えないのか。
理解できない。
いや、それよりも、「一人」であることが嫌だった。

まあいい。案外、君に力を貸すものもいるのかも知れないな。

人型のキャラクター。
それが向かってくる。
動きは読めないが、しかしそもそも強くない。
見てから、余裕で対処できる。
空手は、攻撃の技術もそうだが防御の技術も存在する。
そして、スポーツと違い相手が自分と同じ条件でなくても成立する技がある。
ボクサーの敵はボクサー。
レスラーの敵はレスラー。
しかし、空手の敵は対武器すら想定してる。
すなわち、自衛の為の武術であることが骨子だ。
そしておれは、すこぶる付きの戦闘屋。
こんな張りぼて相手に負ける道理などない。

問題なく打倒する。

しかし、当然のように新しい敵が出てくる。
それも倒す。
倒す倒す倒す

三晩がたった、限界だった。

体中に激痛が走る。
いや、それよりも疲労が凄い。
眠い。
疲れた。
腹減った。
いや、そんな肉体的苦痛はもういい。
いくらでも我慢できる。
だが、ああだが。
寂しい。
一人ぼっちだ。
悲しい。
一人きりだ。
苦しい。
一人だけだ。

戦えない。

一人では戦えない。

誰かいないのか。

この拳は、倒す為のものだが、それは手段だ。
目的ではない。
この拳を振るうのは守るため。
仲間を、部下を。
その為に。
あの８人が初めて人を殺したときから決めていた。
絶対に部下を守ると。
その為に戦うと。

しかし、

だが、

ああ、

自分の為には戦えない。

こんなくずの為には戦えない。

人を殺させる、そんな命令をする男の為には戦えない。

「・・・」

違うだろうが。

そうだ、自分が死んでどうする。

自分を守らない奴に、人を守れる通理はない。

拳を握り締めろ。

この拳は、一人で強くなったものじゃない。

いろんなものが宿ってるじゃないか。

魔獣創造の力は使えない。

だけど、娘が命をくれたことは憶えてる。

娘が自分を必要としてくれたことは憶えてる。

グングニルの力も使えない。

だけど、オーディン様が槍をくれたことは憶えてる。

オーディン様が認めてくれたことは憶えてる。

ドライグの力も使えない。

だけど、ドライグが一緒に戦ってくれたことは憶えてる。

相棒と呼んでくれたことを憶えてる。

悪魔の駒の力も使えない。

だけど、魔王様が仲間に入れてくれたことを憶えてる。

こんな、得体の知れない奴を保護してくれたことを憶えてる。

聖槍の祝福の力も使えない。

だけど、曹操がおれを祝福してくれたことは憶えてる。

あいつが成長したことを憶えてる。

炎の剣も使えない、「次代を担うもの」の力も使えない。

だけど、あの力はみんなからもらった力だってことを憶えてる。

みんなが信じてくれたことを憶えてる。

その全部を、この拳は握り締めてる。

〝力〟なんてどうでもいい。
みんなの想いが一番大事だ。
おれは艦長だろう。
自分の命をあきらめてどうする。
たったの三日じゃないか。
おれはこれまでの鍛えてきた２０年間何をしてきた。
ほぼ全ての力を奪われ、記憶が定かでないことも、
何のいいわけにもならない。
まだあるじゃないか。
父さんと母さんからもらった健康な肉体が。
そして、帰るべき場所が。

気付けば泣いていた。

嬉しくて泣いていた。

おれは生きていていいんだ。

こんなくずでも生きていていいんだ。
みんながおれの家を作ってくれたんだから。
死地でも笑える。
おれは幸せだ。
一人ぼっちでも、戦える。

「一人では死ねないな・・・」

死ぬなら、仲間の為だ。
ベットの上で死ぬなんて、期待していない。

戦って、戦って死んでやる。
仲間の為に。
こんなわけのわからないところで死んでたまるか。

「そうとも生きて帰る」

死ぬ。
おれも死ぬ。
おれもいつかは死ぬだろう。
だが今日ではない、ここでは死ねない。

「こんなところで死ねるか！」

そうだ、自分の命しかかかっていない戦場で死ねるか。
部下のいる戦場で死ぬ。
その為に、この戦場で生き残る。
体力が尽きた。
だが気力はまだ萎えていない。
封じ続けてきた動の気が残っている。
正真正銘の最後の力。
気合。
戦略レベルでは全く意味はない。
戦術レベルでは一要素に過ぎない。
だが、戦闘レベルでは基本にして極意。

「静の気が尽きたなら動の気を開放するだけだ・・・！」

立てる。
戦える。
当然だ。
生きているのだから。

五体満足だ。
それだけでおれは満足だ。

「〝兵藤一誠〟の力、魅せてやる！」

そうだ、〝兵藤一誠〟の最強の武器は気合だ。
ハーレム系バトルラノベの主人公の、基本装備だ。
おれにも、備わっている力だ。
そうだ、負けない。
愛する部下の為に、おれは頑張れる。

「チェストー！」

動の気によって強化された拳が、眼前の敵を砕いた。
今まで以上の破壊力を持って、敵が砕ける。
鮮やかに。

動の気の開放によって、息切れが加速する。

しかし、どうやらおれに新しく部下ができたようだ。

サーヴァント。
なぜだか思い出せる言葉。
知識として知っている言葉。

仲間。

それが、おれの目の前に現れた。

「ふふふ！」

赤いきらびやかな服を着た少女。
そんな彼女は、何故か誇らしげに笑っていた。

「そのなんだ、お前がおれのサーヴァントか？」

「そのとおりだ奏者よ！」

赤いサーヴァントが高らかに叫ぶ。

「余が、セイバーである！」

「そうか、よろしく」

おれは手を伸ばして握手を求めた。
その腕は重い。
疲労に由来して。
しかし、その手をとられることはなかった。

「奏者よ・・・。
これほどの美しい女性と組むのだぞ！
もっと感動せぬか！」

むちゃくちゃなことを言って憤慨している。
とはいわれても・・・。
美少女であることは事実。
だが、やはりラノベの世界で３０年近く生きてきたおれにとって、
その少女は「よくいる」程度だった。

「・・・いや、妻子ある身なんで特には」

そう、そこが重要だ。

家庭があるのは大事だよな。
なんてゆうか、ヒロインなんて要らない。
ワイフがすでにいるし。

「ぬぬぬ・・・必ず余の美貌で骨抜きにしてみせようぞ！」
「言っておくが、おれの好みのタイプは妻子もちにアプローチしない人だ」
「なんの！そんな道理、余のわがままでこじ開ける！」
「・・・勘弁してくれ」

どうやら、新しい部下はやたらとわがままだ。
自分がこう思っているのだからお前もこう思え。
そんな感じがびんびんだ。
でもまあ、よく考えてみればおれの部下にはそういう奴も多かった。
であれば、それでいいだろう。
彼女と共に、戦おう。
生き残る為に。

慎二の誤算

「奏者よ、余は退屈をしておる！」
そんなことを言うのは我が従僕、セイバーだ。
なんというか、彼女は真名を明かさないというのに全力で皇帝であることを主張してくる。
そして、退屈を嫌い興を欲するのだ。
まあ、わからないでもないが、空手の稽古中ぐらいは黙っていて欲しいものだ。
「奏者よ！
アリーナに行き、金銭を得ようではないか！」
そして、彫刻やら絵画に手をだす。
まあ、結構なのだが・・・。
しかし、基本は大事だ。
実戦も大事、基本も大事。
そして、基本稽古はできるときにやっておかないと、実戦ばかりのときに困る。
そう言う事情を建築に例えると、不思議と納得してもらえたのだが・・・。
「奏者よ！」
やはり、こらえ性がない。
娘だってもう少し利口だったぞ。
どんだけ甘やかされてるんだ。
もう少し、待て。
あと1時間くらいだ。
「ぐぬぬぬぬぬ」
面白い顔をしても駄目だ。

さて、あ、さてさて。
戦力の確認といこう。
現状、自分は大幅に弱体化している。

まず、認めるところからはじめる。
で、使えるのは空手、六式、念能力。
つまりクソだ。
いわゆる英霊と戦えるわけではない。
少なくとも、三騎士には難しいだろう。
マスター相手なら・・・、どうだろうか。
マスターの一般を知らんのでなんともいえない。
「奏者は余の奏者なのだから、弱いわけがない！」
決め付けは厳禁だ。
しかし、その言葉を裏付けるように、セイバーはなかなかの強能力を持っている。
なんでも、１００％以上の力が出せるらしい。
それはつまり、おれのマスターとしての能力が高いことを示している。
まあ、当然と言えば当然なのだろうが・・・。
仮にも「神」の後継者。
その力は神仏すら凌駕しているはずだ。
まあ・・・神仏を相手に戦いたくないけど。
主に宗教的な理由で。
おれがどっかの神と戦ったら戦争につながりかねない。
うむ。
平和が一番だ。
軍隊は抑止力。
真に強い軍隊は戦わずして勝つことができるのだ。
しかし、この聖杯戦争ではその抑止は一切効かない。
なにせまあ・・・、トーナメント形式で最後の一人になるまで続くらしい。
つまり、全ての参加者に逃げ場なし、窮鼠猫をかむ、ということになるからだ。
油断は禁物である。
だが、現状ではそれほどの警戒に値する面々は少ない。

まだ一回戦すら経ていないので当然だが・・・。
ほぼ全員、「死」を感じていない。
ここは学園であり戦場だが、死臭すら感じない。
いや、その分猛烈な殺気を持つものが色濃く浮き出ているのだが。
「どうもはじめまして、お名前をお伺いしてもよろしいですか？」
学食で、やたらとゆるい物腰で話しかけてきたのは、カリスマのある金髪の少年だった。
「兵藤一誠だ」
「どうもありがとうございます。僕はレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。
ハーウェイ家の次期当主です」
高貴なオーラを最前面に押し出すこの少年の従者は、やはり高貴な騎士だった。
セイバーだと一目でわかる。
「ガウェインと申します」
騎士らしく、しかし警戒を怠らずに礼をしてきた。
おれを警戒しているらしい。
「・・・何か用かな」
「ええ、この聖杯戦争に参加している面々の中で、特にガウェインが警戒しているのがあなただったもので」
ずいぶん大ぴらな奴だ。
まあ、隠すことに意味なんてないし、負い目も感じていないのだろう。
当然だ。
ここにいるのは一人残らず、いや一人を残して死ぬのだから。
そんな戦いに首を突っ込んでいる奴に、命の同情をすること自体おかしい。
「ですが、あなたのことはいくら調べてもわかりませんでした。
なので、直接お伺いしようと」
「ふふふ、奏者よ！
注目されているな！

それでこそ余の奏者である！」
不意に、周囲を見るとおれ、というかレオナルドを名乗った少年に視線が集まっている。
「人気なようだな」
「ええ、ハーウェイ家の次期当主ですので」
どこの家？とは聞くまい。
あらゆる意味で意味がない。
兵藤一誠と名乗って何の反応もない時点で、ハイスクールＤ×Ｄの世界ではないのだから。
つまり、おれはここでは何の知識もない異邦人である。
まあ、偉い奴ぐらいでいいだろう。
「聞いたら、答えるとでも思ってるのか？」
「ええ、あなたは答えてくれると思います」
「根拠は」
「あなたは、無意味な情報を隠すことに労力をかける人には思えないので」
ふむ、無意味と着たか。
なるほど、この聖杯戦争でサーヴァントはともかくマスターの情報、
それも世間に名を知られていない相手の情報では意味がない。
「ふむ、情報がないのは当然だ」
肯定する。
そして、開帳する。
「おれは、そもそもマスターではない」
それが、自分自身で出した「いま」のおれの正体。
おそらく、おれは記憶にないが死んで、こうして戦争に呼び出されたのだろう。
サーヴァントとして。
何の因果か、マスターになってしまったのだが。
「・・・では、やはり英雄なのですね」
驚いた風でもなく、動揺も無く受けた。

「・・・違う。おれは反英雄だ」
英雄。
それを名乗った連中を打ちのめし、従属させる。
魔王に頭をたれ、そして異形の軍を率いる。
まさしく、魔の将。
反英雄だ。
本来なら打ち倒される側の存在だ。
「それは意外でした。
さぞや名のある英傑かと」
そういう少年の言葉からは、感情のゆれを感じ取れない。
そう言う風に教育されているのだろう。
「どういう手違いかは知らないが、おれはサーヴァントとしてではなくマスターとして登録されていた。
だから、こうしてここにいる。ただそれだけだ」
「なるほど・・・、どうもありがとうございます。
素直に話していただいてとても助かりました」
礼を言う少年。やはり、感情を感じない。
これは、「本物」だな。
間違いなく名家の出身で、幼い頃から英才教育を受けている。
「やはり、あなたが一番の強敵になりそうです」
「当然だ！
余のマスターなのだからな」
と、注目されていることに嬉しくなり、従僕は剣を振りかざしてこう宣言した。
「余のマスターこそこの戦争の勝者である！
これはもはや確定事項！
故に、汝らはこの劇の端役にすぎん！
せいぜい観客の心に残るような、美しき死に様でも考えておくがよい！」
高笑いする皇帝陛下。
うむ、馬鹿だ。

どうしてこう、派手好きなのだろう。
セラフォルー様を思い出す。
匙から聞いたのだが、あれは寂しがり屋なのだそうだ。
ベットの上では、しきりに名前を呼んで欲しがり、
朝まで一緒にいないとすねるそうだ。
子供が生まれて、その子にも付きっ切りで、かつ匙とも離れたがらない。
困っていると聞いている。
まあ、そう言う本人は幸せそうだったが。
つまり、こいつも寂しがりやか。
なるほどな。
うん、納得した。
「従僕が無礼をした。
許して欲しい」
机の上に上がったセイバーを引き降ろし、わびる。
「いいえ、気にしておりません。
ですが、さきほどの勝利宣言に関してだけは否定させていただきます。
優勝し、聖杯を得るのは僕です。
そうしなければなりません」
レオナルドはそう言った。
ふむ、無駄な感情を感じない。
ムキになってもいないし、卑屈になってもいない。
本心だな。
「偉い方というのは大変だ。
期待に答えなければならないからな」
偉いのにこんな独りしか生き残れない戦場に担ぎ出されるなんて、
ひょっとしたらハーウェイ家は没落しているんだろうか。
それとも、裏道で生き残りルートを確保しているんだろうか。
「ええ、ですがそれが僕の使命です」
「そうか・・・、じゃあお互いベストを尽くそう。

ここまで大きいことを言ったんだ。
一回戦負けをしないようにな」
「ええ、ではあなたも武運を」
そういって去っていくレオナルド。
その背中は、どこまでも堂々としている。
迷いは感じられない。
きっと、一族の気体を一身に背負っているのだろう。
若いのに大変だな。
「奏者よ！
主演を舞台から下ろすなど考えられん！」
「ここは食事の場だ」
足を乗せる奴があるか。
全世界の恵まれない子供達に謝れ。
特に、或床市で宿無しだった時代のおれに謝れ。
「おい、お前！」
と、新しい奴が声をかけてきた。
どっかで見た顔だ。
思い出せない。
しかし、忘れたものは仕方ない。
元々物覚えはよくないのだし。
「お前、この僕を差し置いて優勝するとは大きく出たじゃないか！」
そんなことを言い出した。
「べつにおれが言ったわけじゃない」
突き放す。
こういう手合いは、相手にされないのを一番嫌がる。
そして、部下でもない奴の機嫌をとるつもりもない。
「いくぞ、セイバー」
「ああ、待て奏者よ！
この者をだな・・・」
「放っておけ」
こいつは、さっきのやつとは違う。

ただのおのぼりだ。
殺すことにいささかの哀れみも抱かない。
きーきー喚く少年と、それを笑うサーヴァントの声が聞こえたが、
放っておくことにした。
どうでもいい。

さて、アリーナに来た。
ここは、まあ要するに金と経験地を稼ぐ場だ。
そこで、永延とエネミーを殺す作業に没頭するセイバー。
いや、作業というか劇だな。
一々反応を求めてくる。
こいつ、皇帝じゃなくて剣闘士だったんじゃないか？
「ふむ・・・、さっきから思ってたが、おまえ専門家じゃないな。
才能は光るものがあると思うが」
そう、彼女は天才だ。

ぐぎぎぎぎ、悔しいのう、悔しいのう。

ではなくて、修練が浅い。
いわゆる純粋な連中に感じる鋭さがない。

万人に一人の才能。

怠ることのない修練。

適切な指導。

豊富な実戦経験。

なによりも生き残る運。

その全てがことごとく一致した連中をおれは知るが、彼女はそれではない。
信じがたいことだが、彼女は万能の天才のようだ。
剣は、彼女の技の一つに過ぎない。
裏を返せば、そこまで強くないということだ。
「なんと！
余の力を疑うか！」
いや、正当な評価だ。
事実だ。
こうしてみると、逆にいいのかもしれない。
幅が広く対応できるのかもしれないな。
特化しすぎると、使い勝手が悪い。
戦闘に尖りすぎると、返って戦闘で不利になることはよくあるのだ。
「いずれにせよここの敵は、ただ的だな。
何の脅威も感じない」
そういって、適当なのを突く。
一撃で粉々だ。
大幅に弱体化したおれで、これではな。
まさにレベル一のダンジョンといったところか。
ふむ、最初に戦った奴よりは強いのか？
「まあいい。するべきことをして、天命を待つとしよう」
まあ、天というか現役の神はおれなんだけれども。
神は、引退しておれらの肩にとまってるもんな。
神はいつも見ていられるのです。
おれの肩で。
「ふふふ、奏者よ。
楽しみだな。
きっと観客が我らの強さと美しさに見とれるに違いない」
そういって、彼女は美しく剣を振るう。

なるほど、確かに美しい。
おれの知る、どんな剣技よりも美しい。
おそらく、芸術方面の才能に由来するのだろう。
しかし、それは強いのかというと・・・。
比較対象が悪すぎるな。
うん。
おれの知っている御仁らはリアルに神話だからなぁ。
比べたら悪い。
チョモランマと富士山を比べるようなものだ。

さて、彼女である。

おれの現在唯一の部下。
セイバー。剣の英霊。
さて、正体は？
見当はついている。
皇帝。言動の節々に表れるローマっぽさ。自称芸術家。
該当する英霊。いや、反英霊か？
そんなものは一つしか知らない。
正直、相手がマスターだからといって、おおっぴらに過ぎる。
隠す気あるのか？真剣に疑問だ。
こんなんでよく皇帝が務まったもんだ。
政治は、鵺が住むのではないのか？
いやでもな・・・

友達が一人しかいなくて、そいつが王様やってるんで僕も・・・
某魔王。

魔王少女でーす！
某魔王

あ～面倒くさいな～
某魔王

絆の力！キリッ
某魔王

やめよう。不敬だ。何よりも不毛だ。
あの人たちに何かを期待しちゃいけないと、初日にわかったことじゃないか。
あの人たちがまともだったら禍の団は・・・とか思っちゃ駄目だ。
無駄無駄無駄・・・。無駄なんだから。

とにかく、彼女は正体を隠したがっている。
であれば、聞くのは野暮だ。
さて、ここで問題だ。

彼女の真名を聞きだすのは正しいのか？

さて、そもそも聞き出して何が変わるのか？
まず、彼女の素性と宝具がわかる。
つまり、現状では彼女は宝具を使わないということだ。
これは大きいリスクといえるだろう。
反面、言いたくないのに無理に聞き出せばどうなるか？
まず、教えてくれるのかどうかが疑問だ。
というのも、彼女とおれは主従関係だが、別に給料を払っているわけではない。
つまり、基本的には彼女の善意だ。
更に言うと、聞き出せても機嫌を損ねるのかもしれない。
であれば、無理やり聞き出すべきではない。
そう考えている。
あくまでも感情的判断だが。

しかし、彼女は感情的に動く人間だ。
であれば、感情的判断に従うのはむしろ論理的に正しい。
まずは彼女と友好な関係を築き、その上で向こうから名乗るのを待つべきだろう。
宝具が使えないというのは戦術的は正しくない。
しかし、信頼関係が良好でないというのは戦略的に正しくない。
戦術と戦略ならば後者が優先されてしかるべきである。
であれば、待つべきなのだ。

「お前の真名は、ネロ・クラウディウスだ！」
戦闘の前のエレベーターの中で、そう言ったのは対戦相手の慎二君。
あっけにとられる。
すげぇドヤ顔だ。
まるでクイズ番組で最後のチャンス問題を決めたかのような得意満面な笑みだ。
ふと、自分の隣に立っている我が従僕、セイバーを見る。
大変に動揺していた。どうやら、正解のようだ。
まあ、確かに知られて楽しい名前ではないだろう。
それが対戦相手から、自分の隠したがっていた相手に言われては、当然だ。
「・・・奏者よ」
不安げな顔でおれを見る従僕。
「余は・・・その・・・別に・・・」
とっさのことで言葉がないようだ。
その動揺っぷりを見て、さらに勝ち誇る慎二。
「ははは！見ろよライダー！やっぱりだ、僕の言ったとおりだったろう？
こいつ、自分のマスターに真名も教えてないぜ！そりゃそうだよな

あ。
　僕だったら真名を名乗るどころか召喚にも応じないよ！恥ずかしくてさ」
「はっはっはっは！シンジ、いいねぇ、その悪党っぷり。
　なかなか堂に入ってるじゃないか」
　そういって、酒臭いライダーも彼を褒める。
　なるほど、確かに悪役っぽい。
　確かにディオドラも昔はあんなふうだったなぁ・・・。
　というか、曹操達も・・・。
　よく考えたら・・・おれの部下は、こんな奴ばっかりだったな。
　試合とは無関係のところで悲しくなってしまった。
「奏者・・・」
　おれが沈んだ顔をしたので、自分のことを嫌いになったのかと心配しているセイバー。
　大丈夫だセイバー。見当違いの心配をするな。
「ああ、気にするな」
　セイバーの金色の髪をなでる。
「為政者が後世で叩かれるなんてよくある話だ。
　だからまあ、おれは気にしてない」
　破滅したくて破滅する為政者などそうはいないだろう。
　少なくとも本人は真面目に国政をして、あるいは周囲を止めることができずに、
　失敗をしてしまうのだろう。
　もちろん、国の舵取りを誤った責任は追求されてしかるべきだろうが、
　それは死ぬ以前のこと。つまり、生前のことだ。
　彼女の国民でなかったおれがその咎を問うなど、あってはならない。
「だから、おれを信じろ。
　お前はいま、おれの従僕だ」
　そういって、抱き寄せて更に髪をなでる。

反応を確かめながらまるで娘にそうするように。
スキンシップは言葉単品よりも効果があるので、娘やペットには効果が絶大だ。
本来、女性に対してこれをやると何かとまずい。
色恋沙汰に発展しうるからな。
だから避けるべきだが、しかし、この状況で動揺しているとおれの命が危ない。
まあ、死んでいるのでそんなことを気にしても仕方ないのかもしれないが・・・。
やはり、前向きであるべきだ。
「・・・今のは聞かなかったことにするから、お前の口から語りたいときに語ってくれ」
「ありがとう・・・、奏者よ」
目をにじませながら頷く従僕。
頬の赤らみは気になるが、そんなことを言っている場合ではない。
見ない振りをする。
「ふふん!
そうやって取り繕ったって無駄さ!
なにしろこっちは真名がわかってるんだぜ?
お前ら、こっちの真名はわからなかったんだろう?」
そうそれも真実だ。
なんというか、こいつの言動は一々露骨過ぎて、真に受けることが難しかった。
なので、正体を探ろうとすらしなかった。
それこそ、ゲームじゃないんだからホイホイと正体がわかるわけもない。
第一・・・。

そんなことを考えていると、
アリーナに到着した。

「さあ、やっちまえよライダー！」
「ああ、給料分は働くさ！」
そういって、２丁拳銃を構えるライダー。
「奏者よ・・・、
余は・・・」
「後で聞くさ。勝ってからな」
顔を赤らめいびつな大剣を構えるセイバー。

さて、なぜ真名を暴くと有利になるのだろうか。
それは、生前の行いから弱点や武器があきらかになるからだ。
例えば、ジークフリートは背中の菩提樹の葉の影だけは無敵ではない、という弱点がある。

つまり、いくら攻撃しても死なないなんて！
が、
背中を刺せば楽勝！

となる。
アーサー王の場合、最も有名な武装はエクスカリバーである。
よって、宝具もそれとなるであろう。

「奏者よ・・・そなたの言葉はいかなる炎よりもわが身を焼いたぞ」

では、我が従僕は？
ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクス。
ローマ帝国５代皇帝である。
快楽を味わいつくし、反逆され、最後には自害した有名な皇帝である。

「余の名を勝手に暴いた罪、償ってもらうぞ！
三流の道化よ！」

さて。

目の前の少年は、一体どうやって「弱点＝死因」を突くのだろうか？

ライダーである彼女の宝具は、反逆者でも召喚できるのだろうか。

というか、宝具はわかったのだろうか？

「ｒｅｇｎｕｍ　ｃａｅｌｏｒｕｍ　ｅｔ　ｇｅｈｅｎｎａ（レグナム　カエロラム　エト　ジェヘナ）

築かれよ、我が摩天！　ここに至高の光を示せ！」

こいつは剣に関して有名な逸話はない。

いや、それより何より・・・。

「出でよ！招き蕩う黄金劇場（アエストゥス・ドムス・アウレア）！」

絢爛豪華な黄金の劇場が出現し場を書き換える。

これが彼女の宝具なのだろう。

うむ、人のことは全く言えないが、セイバー関係ないな。

「な、なんだよこれ！」

突然の場面転換に動揺する相手マスター。

確かに異常な展開だ。セイバーなんだから宝具は剣だと思うよな。

おれもあの歪な剣が変形するのかと思っていたのだが。

まさか場面転換させる宝具だとは。

それにしても、これどういう宝具なんだろう。

「童女謳う華の帝政（ラウス・セント・クラウディス）！」

叫び、切りかかる。

え？劇場を展開した意味は？

・・・こうして見ていても、正直どんな宝具なのかはわからない。

舞台装置でギミックがあったりするんだろうか。

「童女謳う華の帝政（ラウス・セント・クラウディス）！」

そう、経験があるのでわかるのだが、歴史上の記述と実際の武器は全くイコールではない。

コールブランドからビームが出るなんて話は聞いたことがないし、グングニルや炎の剣は体に入れるものなんて聞いたこともない。

ロンギヌスの槍から7つの宝玉が出てくるなんて話も聞いたことがない。

燕返しは剣が増えるなんて話も聞いたことがない。

「童女謳う華の帝政（ラウス・セント・クラウディス）！」

「な、なんだよこれ」

相手マスターは涙目だ。

つまり、相手がどんな真名なのかわかっても、

正直参考程度にしかならないのだ。

「童女謳う華の帝政（ラウス・セント・クラウディス）！」

特に我が従僕は、来歴から宝具も弱点もうかがえない。

第一、ネロはセイバーにふさわしくないだろ。

まったくわけのわからない効果の宝具を使っている。

そして、ライダーはまるで案山子のように一方的に弄られるばかり。

これは、おれと目の前の慎二君の格の差の問題。

つまり、おれは強くて彼女の全ての能力以上を引き出すことができ、

慎二君はそれほどには凄くないということだ。

「童女謳う華の帝政（ラウス・セント・クラウディス）！」

とどめの剣戟。
ライダーはいいとこなしで戦闘不能になった。
南無。

一体真名はなんだったのだろうか。宝具は？
今更だが、知りたくなった。
まあ、手遅れだが。

「な、なにやってるんだよ、ライダー！」
泣きながら、怒鳴り散らす慎二君。
いや、君の気持ちはよくわかる。
これはもう完全にいじめだな。
携帯ゲームなら投げてるところだ。
「いや～、手も足も出なかったねぇ」
意にも介さず酔ったまま笑うライダー。
ここまでボコボコにされても笑えるのは流石英雄といった所だろう。
「奏者よ！
見ていたか？」
「ああ、見ていた。
流石はおれの従僕、
さすがはおれのセイバーだ」
駆け寄ってくるセイバーを、精一杯抱きしめる。
彼女は、やはりこうしたスキンシップを好むようだ。
「ふふふ、そうだ。
もっと褒めよ！称えよ！」
満面の笑みで、しがみついてくる。
その頬は明らかに熱を帯びていた。
「ああ、神も照覧あれ、といったところだ」

貧困なボギャブラリーを総動員して彼女を褒める。
これは、後でうまくフォローを入れないと拗れるかもしれん・・・。

そしてこの勝者と敗者の間に、物理的な意味での壁が構築された。

崩壊していく、慎二君とライダー。
先に逝ったライダーはどこまでも潔く、英雄だった。
しかし、少年はそんなことはない。
「僕はまだ八歳なんだ・・・！死にたくない！」
全くといっていいほど、哀れではない。
悲しくもない。
彼はただ愚かだ。
少年よ。
日常の中においてさえ生の隣には死がいる。
まして、ついうっかりだろうと戦場に立てば、必然死ぬ。
看板は読まなかったのか？
ここで起きているのは戦争だと。

なによりも、おれは妊婦さえ殺せと命じる〝くず〟。

全く、自分が嫌になるほど心は痛まなかった。

おまけのキャスター編

「ぐふふ、ぐふふふ。ここからは私のターンです！
もう、赤セイバーとかいう自称男装皇帝とかマジお呼びじゃありません！
私とご主人様の愛の時間。聖杯戦争のイベントもそこそこに、イチャイチャラブラブの新婚生活！
おれは、今は君しか見えない・・・

今だけでいいんです。旦那様
キャスター・・・
タマモって、呼んでください・・・。
とかなんとかなっちゃったりして！
第一、ご主人様は私の本体（九尾）の本体（天照）を使役できるぐらいのマジキチ設定の化物なんですから、
こんな木っ端な英霊しか参加してない戦争なんて敵じゃないって言うか～余裕って言うか～」
マイルームでクネクネともだえる駄狐。
その表情はまさにＩＮ―ＲＡＮ。
そんな彼女にマスターは声をかける。
「おい、キャスター。そろそろ出るぞ」
「は、はいどこに行きますか？
プールに行って泳ぎますか？私の水着を見てもだえちゃいますか？
それとも家庭科室？私といっしょにお料理をつくちゃいますか？
そ・れ・と・も・・・」
「お前は一体なにを言ってるんだ。
アリーナにいくに決まってるだろ」
「は、はい～～～？」
「レベルを上げて、トリガーを二つゲットして、
対戦相手のマトリクスを埋めて、タイガーミッションをこなすんだろう？」
マスターは自分の従僕が事態を理解していないことに呆れていた。
「え、え、え？」
「ほら、早く行くぞ」
狼狽するキャスターをよそに、いそいそと支度をはじめる。
「ちょ、ご主人様！
なんでおまけでゲームの要素を最前面に押し出してくるんですか！
テンポが悪くなるだけじゃないですか！」

「・・・あのな、何を言っているのかわからないが、
お前が弱いのは事実だろう？」
「ちょいとお待ちください。今確認いたしますので！」

キャスター　筋力：E　耐久：E　敏捷：B　魔力：A　幸運：D
宝具：B

「十分じゃないですか！まだ一回戦なのにクリアもできるレベルですよ！
というか、ご主人様は？」
「おれか？」

マスター　筋力：A　耐久：A　敏捷：C　魔力：D　幸運：E
宝具：ー

「流石に、宝具は無くてな。グングニルや炎の剣があればお前に迷惑もかけなかっただろうに」
かなり優良なステータスだったが、若干不満げですらあった。
「おれはアイテムもコードキャストも使えない。苦戦を強いられるだろう」
「そんなことありませんから！この二人なら完全に余裕ですから！
難易度イージーですから！」
キャスターはそれを全力で否定する。
第一、システム的なことを無視してマスターを強化し直接戦闘すれば余裕だろう。
「しかしな、相手は光の御子クーフーリンや騎士王アーサー王。
ゴーゴン三姉妹メドゥーサに裏切りの魔女メディア。
魔法の域にまで達した佐々木小次郎、固有結界を操るエミヤ。
ギリシャ最強の大英雄ヘラクレスに人類最古の英雄王ギルガメッシュ。
とても楽ができる相手じゃない。万全を尽くすべきだろう」

「それ、ゲームが違いますから！Ｆａｔｅ違いですか！
私達の相手はそこまで豪華じゃありませんから！
スキルの持ち腐れの酔っ払い、解毒薬持っていれば宝具を防げる緑茶、
かわいいだけがとりえの小娘、マスターのせいで弱っちい吸血鬼、
ちっとも一撃必殺じゃないアサシン、バーサーカーよりもバーサーカーなランサー、
イエスマンの借金取り、そして出落ちですから！」
「キャスター」
マスターは、サーヴァントの肩に手を置き険しい顔で言い切る。
「立ち向かうんだ。この現実と」
「ご主人様が現実を見てください！」

ブラックモアの脱落

アリーナ前にて、セイバーとそのマスターは対戦相手について話していた。

「全く、あのような貧相なりの英雄が強いわけが無い。

1回戦のサーヴァントの方がまだ華があったぞ」

彼女の価値観において華、つまるところ美は非常に重要だ。

それはあながち間違いではない。なにせ、余裕があるのかないのかが如実に分かるからだ。

もちろん、それは精神的な意味においてだ。芸術や美とは、心の余裕だ。

少なくとも、マスターにとってはそうだ。

セイバーにとってはどうだろうか。全て、とでも言うのかも知れない。

いや、自分こそが「それそのもの」とでも言うのだろう。

とにかく、確かに攻撃力や防御力は高そうに見えなかった。

明らかに貧弱な装備だった。

裏を返せば、直接的な戦闘以外で勝負してくることだろう。

2回戦に勝ち進んでいる以上、対戦相手を打倒しているのだから。

「何れにせよ、警戒は必要だ。

相手マスターは本職の軍人らしいしな」

貧弱なボウヤだった一回戦の相手から考えると相当な差だ。

正直、一回戦は戦ったという実感すらない。

相手は引退間近とはいえ軍人。油断はできない。

そんなことを考えてつつアリーナに入ると、肉体的苦痛と精神的重圧が襲い掛かってきた。

エネミーなどではない。間違いなく敵意を持ったサーヴァントの仕業だ。

「ずいぶん早く仕掛けてきたもんだ」

「であるな、全く展開というものを考えん三流の脚本家よ」

「お前が言うと説得力無いな」

主従は、軽口を叩きつつ剣と拳を構えた。

月の聖杯戦争において、アーチャーとして召喚されたロビンフット。

彼は、アーチャーにあるまじきことに弓が宝具という「異常」なアーチャーだった。

何を言っているのかわからないと思うが、多くの場合アーチャーの宝具は弓矢ではないのだ。

そういう意味では、英雄の中では浮いているといえる。

しかし、その来歴はむしろ真っ当な英雄だ。

毒矢を武器とし、苦しむ民衆の為に圧政に立ち向かった英雄。

誰に恥じることは無い。民衆を救った義賊だった。

しかし、怪物を討ったわけでもなく、強者と向き合ったわけでもない。

弓の腕は、それこそ弓兵にふさわしいものではあったが、所詮その程度。

三騎士の名にふさわしくは無かった。

つまり、火力が低く貧弱な英雄だった。少なくとも、強い英雄ではない。

そんなことは、当人が一番よくわかっている。

感謝はされても、尊敬はされない。

正体不明であり、顔も名前も知られていないからこその英雄。

後悔は無いが、心のどこかで名誉を欲していた。

新しい主の持つ、ささやかで清らかな願いをかなえるために、

しかし最善の行動をとろうと思えばそれはつまり、生前からの「闇討ち」に徹するほかない。

それが例え、主の主義に反したとしても。

まして、それが自分とは比較にならない強者であれば。

「うちのマスターは、ウィザードとしてはともかく、

気構えとしては最上級だと思ってたんだがね」
若年のウィザード達で多くが構成されたマスターの中にあって、
騎士として認められた歴戦の軍人。
おそらく、実戦経験では比べるべくもない。
彼以外の全員を足したとて、及ばないであろう経験値。
その自信が、先日のハーウェイ家次期当主との会話で吹き飛んだ。
マスターが、ウィザードではなく反英雄。
これが何を意味するのか、非力な弓兵には痛いほどわかった。
マスター殺しを得意とするアサシンまがいの弓兵には、絶対に討ち取れない相手だった。
だが、それでもやるしかない。勝利する為にできる限りの手をうっておく。
真っ向勝負で勝算のない相手に対する、自分にできる唯一の手だ。
「殺せるとは思ってないが、最悪、毒を食らわせて弱らせとかないとな。
いや全く、非力な自分が悲しいぜ」
彼はマスターを勝たせたかった。
彼の願いが、国を救うという軍務からきたものならばおそらくここまで肩入れしなかっただろう。
だが、彼の願いは個人的なもの。いや、だからこそ民衆の為に戦った彼にとって守るべき願い。
アリーナ内に入ったセイバー組に圧力をかける。
並みのマスターなら、足がすくんで動けなくなるほどのプレッシャー。
加えて、宝具で毒を撒いてある。ただそこにいるだけで命は削られていくだろう。
しかし、相手は反英雄。まず死なないだろう。本命は己の手に握られた毒矢。
「・・・広間に入ったら、この毒矢で」
イチイの毒を塗った矢を二本持つ。命中させる自信はあった。
「まったく、非力で嫌になるぜ」

もう一度同じことを言い自嘲げな笑みを浮かべて、機を待った。

「奏者よ、どうやら毒がアリーナ全体に撒かれているようだな」

「・・・嫌がらせだ、気にするな。

それよりも、直接攻撃に気をつけろ」

アリーナに入ったセイバー組のうちサーヴァントは緊張し、周囲を見渡す。

マスターは落ち着いている。いや、まるで感情が欠落しているかのようだ。

「ところでセイバー。

こういう風に狙われる経験は初めてか?」

「うむ、初めてだ。

暗殺することは日常茶飯事であったが・・・、こうも殺意がむき出しでは華がない」

「そうか・・・。

おれはやる側だったな。残党狩りでこういう作戦をしていた。

逃げる方向を誘導して、人気の無いところに追い込んで、

戦意の喪失した相手を囲んで捕まえて、武器という武器を剥ぎ取って、

できるだけ手短に殺して、海に運んで捨てていた。懐かしいよ。

そう言う意味では、お互いアサシンの適正があるかもしれないな

いや、それにしても本当に懐かしい。童心を思い返すよ。あの頃は本当に大変だった」

「その割には無表情だな。見ていてつまらぬ」

「癖だ。気にするな」

二人は、毒に蝕まれることも気にせず走ることもなく、

ゆっくりと警戒しながらアリーナを奥に進んでいく。

元々アリーナは単純な構造だ。襲撃しやすい場所に勝手に相手は

来てくれる。
だが、それは相手も同じこと。そう言う場所に出向けば、必然警戒されるはずだ。
それでも、必ず毒矢を当てる。弓兵は神経を研ぎ澄ませていた。
宝具で身を隠し、息を潜めて弓を構える。

「この通路の先は広間だ。仕掛けてくるとすればそこだろう。
奇襲に備えてくれよ、セイバー」
「うむ。任せよ」

二人が広間に足を踏み入れた。
このアリーナに充満した殺気に対して警戒している。
だがそれでも尚、魔弾の射手からは逃れられない。
「ここだ！」
「むむ！」
ロビンフットの放った2本の矢は、一本だけはセイバーの剣によってはじかれた。
しかし、2本目の矢はしっかりとマスターの脚に突き刺さった。
よし、と拳を握り締めるアーチャー。
「な、二の矢だと！」
セイバーがうろたえるのも無理はない。
二本同時に放った矢を違うことなく命中させるなど、その技巧は計り知れない。
弓兵の誇りにかけて、その矢は外すわけにはいかなかった。意地の2射だった。
「・・・セイバー」
マスターは、無表情で脚に刺さった矢を無造作に引き抜く。
鏃に、肉が絡んで血が噴出した。
しかし、毒も傷もマスターの表情を曇らせるにすら至らない。
「気にするな。全身を全力で防御していたが・・、流石にこの身では防ぎきれなかった。

いや、むしろ相手を褒めるべきだろうな。さすが英雄だ」
その、意思の感じられない眼が、姿を隠したアーチャーの居る場所を捉えた。
矢の軌道から、正確に発射位置をこらえたのだ。
「ここで殺（と）る。いくぞセイバー！」
毒に蝕まれ、片脚が傷ついているとは思えないほどの速度で、広間の入り口から駆け出し、広間の反対側に潜むアーチャーに肉薄する。
姿を隠しつつ、舌打ちし身をかわすアーチャー。
元より殺しきれるとは思っていなかったが、反撃されるとは思っていなかった。
一誠の拳は空を切り、その後ろに居たエネミーを一撃で破壊する。
その威力にぞっとしながらも、身を翻して逃走するアーチャー。
既に、仕事は済んだ。後は逃げるのみ。引き際のよさも生き残りの秘訣だ。
セイバーとて、この身を隠す宝具に身を包むアーチャーの姿は捉えられない。
彼女にそんなスキルは存在しない。
「そこか！」
しかし、この規格外のマスターには通じない。
両目に集中させたオーラで、その姿をおぼろげながらも捉えていた。
身を隠す宝具が存在するのなら、それを見破る手段も当然存在する。
空を切る脚が、斬撃を放つ。
それは、逃走するアーチャーに直撃した。
「見事だ、奏者よ！」
攻撃を受け、一時その姿をさらしてしまったアーチャーにセイバーが斬りかかる。
大上段からの振り下ろしに、アーチャーは体勢を整えながら両手の短剣を交差させて受ける。

「ぐ・・・」

当然、この間合いでは弓兵が剣士に勝る道理はない。

むしろ、相手が生粋のセイバーでなく命拾いしていた。

これがもしもアーサー王やガウェインのような「純粋な剣士」であれば、

一刀の元に切り捨てられていただろう。

「つくづくインチキくさいマスターだ・・・。

宝具の陰形を見破るなんてありかよ・・・」

武器の重量で劣るアーチャーは、必死でその剣から逃れようとしていた。

だが、その懸命に耐える細い腕に何かが突き刺さる。

「ぐっ!・・・これは・・・」

それは自分の矢だった。

先ほど放ったイチイの毒の塗られた矢。

正確にはその鏃だ。

それを、相手マスターは投擲したのだ。

一旦相手に命中し、肉に食い込んだ鏃に毒がどれほど残っているのかなどわかりはしない。

だが、彼の腕に刺さったそれは、この鍔迫り合いを終わらせるに足るものだった。

「畜生・・・」

非力な自分を呪う言葉か、或いは強者である相手の組を呪う言葉か。

それとも、先走って勝手に死んだ自分の無謀を悔いる言葉だったか。

あるいは、得意分野で闘ったにもかかわらず負けたことへの嘆きか。

それが、敗北を確信したアーチャーの最期の言葉だった。

「そなたはいつも余に花を持たせてくれるな」

セイバーの持つ歪な大剣が、短剣を押しのけて袈裟懸けにアーチャーを切り裂いた。

そのたったの一撃で、孤独な弓兵はその姿を消した。
なんのこともない。
彼の死因がそうであったように、居場所が捉えられればゲリラ兵は殺されるだけだ。
「余も鼻が高いぞ、奏者よ」
「・・・」
マスターは、サーヴァントの賞賛に答えることなく膝を突いた。
その顔は相変わらず無表情だが息は粗く、蒼白だった。
アリーナ一帯に撒かれた毒、そして矢の毒は確実にマスターを蝕んでいた。
もちろん、アーチャーの死によって毒の効果は失われたが、
しかし流れ出た血と体力は戻らない。
「奏者?
なぜ辛いならそうと言わぬ!
分からないではないか!」
あわてながら駆け寄るセイバーに、倒れながら体を預けるマスター。
セイバーは、叱りつけながらも彼を抱きしめる。
「すまん・・・、急に動いたから毒が回ってな」
少年の姿のマスターは、消耗する姿を隠そうともせずセイバーにしがみつく。
震える手でリターンクリスタルを手渡した。
「すまんが、マイルームまで頼む・・・。
もう歩けない」
「う、うむ」
慌てたセイバーは、リターンクリスタルを受け取ると速やかにそれを使用した。
「負けたか、アーチャーよ」
教会で妻に祈りをささげていたブラックモアは、痛みと共に令呪が消えたことを確認した。

それは、単独行動をしていたアーチャーの敗北を意味していた。
そして、自分の聖杯戦争からの脱落をも。
死を意味していたというのに、苦痛に苦しむこともなくひたすらに穏やかだった。
それは軍人だったが故か、或いは心が老いたが故か。
少なくとも、彼は戦わずして負けたことを後悔していない。
「ベッドの上で死ぬとは思っていなかったが、まさか、教会で死ぬとはな」
消えていく肉体を、達観しつつ眺めるブラックモア。
その表情に後悔の色は無い。
強いて言うなら、結局自分の為に己を殺してくれたアーチャーと分かり合えなかったこと。
それだけが残念だった。
「・・・これも、狙撃手の業か」
きっと、彼の隠形をマスターかサーヴァントに見破られたのだろう。
居場所を悟られた狙撃手ほど無力なものはない。
一方的に殺す側から、一方的に殺される側に堕ちてしまう。
そんなことは歴戦の雄には分かりきったことだった。
いや、自分も一緒なら何かできたかもしれない。
彼の戦いに付いていってやるべきだった。そう言う意味でも失敗していた。
彼に、自分の考えを押し付けようとしすぎてしまった。
「・・・女王陛下、申し訳ありません」
既に、5割が無くなった体。
しかし、元より軍人であり老い先短い身。死んでいくことに恐怖は無い。
ただ、期待にこたえられなかったことが申し訳なかった。
「・・・アンナ」
9割が消えた体で最期に今は亡き妻の名前を呼んだ。
まるで天に召されるがごとく、老兵は教会の中で光に消えていっ

た。

「全く、そなたは無理をしすぎだ」

力なくベットで寝るマスターを叱咤するセイバー。

「もちろん、余があの矢をちゃんと防げなかったことが悪い。

だが、その後サーヴァントに一人で突っ込んだのはいただけぬ！

ちゃんと余を頼れ！」

マスターを守りきれず、あまつさえ手を煩わせたことに少し後ろめたさを感じつつも、セイバーは憤慨する。

そう、従者としては頼ってもらえないことが何よりも辛いのだ。

「すまん」

ばつが悪そうに、血の気の無い白い顔でわびるマスター。

なにせ、戦場で身動きをとるのも難しいほど消耗していたのだから、

マスターとして間違っていることは明白である。

「まあ、助かったことも事実だがな。

決戦を待たずして勝利してしまったわけだし、しばらくは休暇として余に尽くすが良い」

「休暇じゃねえのかよ」

あんまりにも暴君な発言に、マスターは呆れる。

だが、かわいいものだ。

なにせ生前の彼の部下は彼女の生前の行いがかわいく見えるような無茶を、

平然と実行に移していたのだから。

自分の死因を憶えていない彼ではあるが、おそらく部下に殺されたのだろうと確信している。

なにせ、前科があったのだし。

「余に奉仕する以上の栄誉や安らぎがこの世にあるだろうか？いや無い。

余と共に芸術活動に専念すれば、毒に蝕まれた体など一瞬にして癒

されるであろう！」
「そのような事実は存在しないだろ」
「なに、やってみるのだ。
さすれば華のないわが奏者といえど、真の芸術の目が開かれるであろう！」
「そういう価値観の押し付けは芸術とは違うぞ」
思えば、彼の部下にもそういうことを「趣味」とするものが居たが、あれは他人からの理解を求めず独立独歩の精神でやっていた。
世間をあっといわせることよりも、世間を呆れさせることに心血を注いでいたと思う。
それでいて、それなりに評価もされていたのだから世間とは分からないものである。
「まあ、話ぐらいは付き合ってやるよ。
どうせしばらくは稽古もできないしな」
「うむ、それでよい。
であれば、今日のところはもう寝るが良い」
そういって、セイバーは自身の席で眠りについた。
そして、マスターは寝入った自分の従僕を確認すると、
眠ろうとせずに討ち取ったアーチャーを思い出していた。
「・・・」
彼の戦い方には共感できた。
正攻法で闘えない者が、視界の聞かないフィールドで精一杯の抵抗を見せる。それがゲリラ戦だ。
だから、彼を卑怯とは思わない。むしろ、実質サーヴァント二人のこっちのほうが卑怯だろう。
むしろ、あの程度の武装しか持たないというのに英雄に数えられたという点は羨望を禁じえない。
「所詮、武器か・・・」
才能が無くとも、「修練」という誰にでもできることで名をはせた自分。
それは、強力無比な武器に由来する。

おそらく、仲間も武器が無ければ作れなかっただろう。
そう思うと、彼は無力感にさいなまれる。
そしてその分不相応な武装の一切を失い、部下の全員を失い、同時にあらゆる義務や束縛から解き放たれている「今」の自分。
果たして、どこにたどり着くのだろうか。
「いや、闘い続ける以上知れたことか」
そう、セイバーに切り伏せられたアーチャーの姿こそ、自分の未来の姿なのだろう。

おまけのキャスター編

アリーナ内の通路にて、エネミーと対峙する主従。
「よし、じゃあ素人が余計な知恵をまわすと失敗するから全部Ａで安定だな」
「ちょご主人様？
ブロッサム先生じゃないんですからそんな風に適当に決めないでくださいまし！
私防御は紙なんですから、もうちょっと考えていただかないと」
「そうか、だが安心しろ。
おれが援護するからな」
「そ、そうですか・・・。では」

キャスター　ＡＡＡＡＡ
エネミー　ＧＧＧＧＧ

「て、おいいいいい！
イベントバトルでもないのに６手完敗とかマジありえね～！
全部Ｇってなんですか！ドンだけ消極的なんですか！
ていうか、ご主人様、助けて～～！」

「任せろ！」

マスター　援護防御レベル６
状態異常及びスキル攻撃以外のダメージを、サーヴァントの代わりに受ける。

「させん！」
ダメージ　１
「部下は守る！」
ダメージ　１
「やらせないぞ！」
ダメージ　０
「体を張ってでも！」
ダメージ　１
「失敗は、行動で返す！」
ダメージ　１
「お前はおれが守る！」
ダメージ０

「やだ、ご主人様ったらもうイケメン（ドン引き）」

アリーナの大広間。
そこには大量のエネミーが徘徊していた。
基本戦闘能力の低いキャスターには、一体であれ脅威である。
スキル攻撃はＭＰを消費する為、長期戦には向かないのだ。
そこで活用するのかコードキャスト空気撃ち。
これはフィールド上で敵を攻撃し、戦闘開始時スタン状態にするコードキャストだ。
地味ながら、その能力は非常に有用である。
「キャスター、フィールドアタックで出鼻をくじく。

その隙を突いて戦闘するぞ」
「分かりました、ご主人様！」
「よし、じゃあ精神コマンドだ」
「なにそれ怖い」

直撃
「防御を打ち抜く！」
必中
「確実に、堅実に、練習どおりに！」
努力
「強くならなければ！」
魂
「相手を一撃で倒すのが、空手だ！」

ＢＧＭ「Ｂｒｅａｋ　ｕｐ！」

コードキャスト『空気撃ち／三の太刀』
フィールドアタック

一誠「耐えられるか、空気撃ち／三の太刀！」

一誠の渾身の拳が、空気を介してアリーナの大広間を揺さぶりエネミーを攻撃する。
その威力は余波による風だけで背後のキャスターの服や髪をはためかせた。
攻撃が終わった後、主従を除いて動くものはアリーナの大広間には存在しない。
エネミーは全て今の一撃で破壊されたようだ。

レベルアップ！　１３→１６

スキルポイント　0→　9

「よし、成功だ」

一度に大量の敵を倒してレベルアップし、ガッツポーズをとる一誠。

「あのご主人様、これフィールドアタックじゃなくてＭＡＰ兵器ですよね。

ていうか、ゲームのシステムを無視しないでください・・・」

出番の無いキャスターは呆れつつ突込みを入れた。

「ご主人様がイケメン魂すぎて（私が）困るっていうか、

ご主人様がスパロボ魂すぎて（敵が）困ってる・・・」

ありすの死

２階掲示板前にて。

セイバーとそのマスターは次の対戦相手を確認した。

そこには、ひらがな3文字で「ありす」とだけあった。

日本人でもそこまでおかしい名前でもないが、おそらく外国の人だろう。

もちろん、それは本名であればだが。

「ありす・・・、か」

苗字がないのでおそらく偽名だろう。

いや、電子の海である以上ハンドルネームというべきか。

よく考えてみれば、名前を偽るというのは基本的で、しかも容易な身分詐称だ。

アバターと名前の変更が効く以上、わざわざ本名を名乗る必要はない。

自己顕示欲の強いマスター、或いは国家の威信を背負ったマスターならともかく、

犯罪すれすれの行いをしている「凄腕」ハッカーならば、むしろ名乗るほうが自然だ。

「名前の感じから想像する姿は可愛いが、ネットの海はおれの時代でも広大だった。

ネット上に魔術師の居るこの時代、単なる名前など果たしてどこまで信じていいものか。

アバターもそれにふさわしいのかは見てみるまでは分からない。

更に言うと、中身がおっさんの可能性もある」

自分も、学生姿ながら中身は子持ちの３０前である。わざとやっているわけではないが、十分詐称だ。

「第一、こんなことを言いたくはないが「ありす」といっても本当に可愛い女の子とは限らない。

ありすが苗字で本人は男という可能性もあるし、実際女の子でも名前負けしている可愛くない女の子、あるいは「おばさん」ということ

もある。
　更に言うのなら、マスターは可愛くてもサーヴァントは醜いということも・・・」
　そんなネット上の現実と向き合う夢の無い社会人に、自称芸術家は憤慨した。
「奏者よ、夢の無いことを言うでない！
　それでは余の舞台にふさわしくないではないか！」
　品の無い女、しょっぱい男と戦ったセイバーはフラストレーションがたまっているらしい。
　彼女としてはいい加減キリッとした感じの騎士、或いは麗しの女剣士と戦いたいのだろう。
　まあ、確かにマスターの名前だけでここまで想像を働かせることは無意味だった。
「別に観客が居るわけじゃないだろう」
　居たところで作戦を変える必要は無いのだが、セイバー的に考えても観客が居ない決戦というのは面白くないはずだった。
　多くの英霊がそうであるように、いやその中でも彼女は特に目立ちたがり屋なのである。
　そもそも、歴史に名を残す英雄英傑というのは基本的に自己顕示欲が強い。
　でなければ、千年先まで名は残らないだろう。
「しかしだ、余と奏者はいる。
　特に、奏者には見せ場を譲ってもらってばかりだ。
　このままではいかん。サーヴァントとして主を立てなければ！」
「その心意気はありがたいが、目立つこと以外で発揮してくれ」
　かの暴君に主と認められることは光栄であるが、しかしこっちの事情も察して欲しい。
　まあ、意地悪なことを言ったのも事実だが。
「にしても、ありすか。アリスと言えば不思議の国のアリスだが・・・」
「まあ、関係なかろう。マスターの名前がサーヴァントの真名と関連することなどありえん。

偽名ならば尚のことよ」

「だな」

本名ならば、先祖とか或いはその縁で召喚される可能性が無いでもない。

だが、偽名ではその可能性は無いだろう。ゲームの裏技でもあるまいに。

そんなことを言い出したら、みんな岸波白野と名乗って黄金のサーヴァントを連れて歩いているだろう。

まあ、数日後にはほとんど全員「王に～～～～」とか「我に……」とかそんな感じで殺されているだろうが。

彼、あるいは彼女の名前を名乗るのは、それこそ英雄以上のあきらめの悪さと根性、蛮勇が必要になるだろう。

「まあ、相手もここに来るだろうしそれまでは待つか。

顔ぐらい見ておいたほうがいいだろう」

すでに聖杯戦争も3回戦。

トーナメントゆえに、すでに4分の1にまで淘汰されたウィザードたち。

1回戦は運がよければ勝てただろう。

だが2回戦ともなれば事情を理解して必死の者ばかりだ。

更にそれを勝ち抜いて3回戦に出場しているのだから、その腕前、外れということは無い。

「さて、どんなマスターがどんなサーヴァントを従えているのやら」

生前様々な相手と交流のあったマスターは、サーヴァントの顔を見れば相手の正体はおおむね見当が付く。

そして、どんな相手が出てきても臆することは無い。

それは確固たる自信だった。なにせ、生前は主神格と幾度と無く渡り合ってきたのだ。

どんな狂気に侵された相手だろうと、あるいは勇猛な騎士であろうと、彼らの上をいくとなどありえない。

ゼウス様に「妾を都合してくれ」と言われたときや、

オーディン様に「戦乙女用の雇用枠を作ってくれ」と頼まれたときや、
ポセイドン様に「なあ、いい娘を紹介してくれんか」と強請られたときや、
アテナ様に「あなたの奥さんの髪より、私の髪がきれいよね」と凄まれたときや、
天照様に「どうして日本人なのに私を頼らなかったのかしら」と拗ねられたときや、
ハーデス様に「冥府でドラゴンが暴れまわった後、なぜか緑が生い茂り、更にその後焼き尽くされる夢を見たんだ」
とわけのわからない相談をされたときに比べれば何のことも無い。
それにしてもギリシャ勢はひどいな。ろくなのが居ない。

「へぇ～～次遊んでくれるのはお兄ちゃんなんだ」

そんな自信は、背後に突然現れた二人の少女の姿を視認すると同時に吹き飛んだ。
振り向いて、その姿を見ると同時に体が硬直した。
「このお兄ちゃんがあそんでくれるの?アリス」
呼吸が苦しくなり、視線が動かせなくなった。
動いていないというのに動悸が激しい。早鐘のようだ。
「そうよ、楽しみね。ありす」
別に、何をされたわけではない。それは確かだった。
校舎内では戦闘をしないというルールなど関係ない。
正真正銘、なんの害意も敵意も殺意も感じない。
「うん、とっても楽しみ」
だが、その少女の「容姿」は、無敵の怪物から意識を奪った。
「かわいらしい幼子であったな。
どちらもこのような戦場でなければ傍において愛でたいところではある。
双子というのも良い。かわいらしさが2倍だ。

並べるもよし、余の右脇、左脇にはさむ形で置くのも良い。
そうは思わぬか、奏者よ」
皇帝として贅の限りを尽くした彼女らしい感想を、マスターは聞いていなかった。
ふらりと体を揺らした後、うつぶせにたおれたのだ。
「奏者！」
廊下の床に倒れたマスターをあわてて抱え起こすセイバー。
マスターは白目をむいて口を開け、明らかに気を失っていた。
勇壮、無敵の己がマスターが何ゆえ気を失ったのか？セイバーは混乱した。
医術にも魔術にも詳しくないセイバーは、しかし外傷が無いことだけを確認するとマイルームへマスターを運んだ。
ベットに寝かせると呼吸は一旦落ち着いたが、しかし眼を覚ます兆候は無かった。
「一体何が・・・」
相手のサーヴァントがキャスターだったとして、その魔術によってこのマスターが害を受けているとしよう。
だが、それを自分に気づかせないと言うことはありえない。
では、アサシンが行ったというのか。しかし、であれば何がしかの外傷が残るはず。
毒だろうか。その可能性も否定された。
毒に関しては彼女は専門家だ。剣を使うよりも毒をもって敵を討っていたのだから。
その彼女の知識の上では、ここまで即効性があり且つ肉体に表立った症状が出ない毒は無い。
いや、そもそもそこまで完璧に毒を投与できるなら、即死の毒を使うはずだ。
それらを確認する為、彼の服を脱がせたがもちろん医術的な目的である。
本当である。

如何に快楽をむさぼってきた彼女とて、ここまで弱っている相手に性的な欲求を感じることは無い。
本当だ。
セイバーであり、サーヴァントである彼女がマスターを介護する際に興奮するなどありえない。
本当だってば。
おおう、筋肉質。拳はごつごつしているが、やさしい手だな。改めて見ると顔は意外とかわいい。むふー。
などとは思っていない。
・・・ちょっとだけだぞ。

では一体何が彼を苦しめているのだろうか。
「奏者よ、うなされているのか？」
眠りに付いたまま、まれにうなされるように痙攣するマスターを、セイバーは慈しみ、頬をなでた。
何かをしたい。苦しみもがく弱ったマスターに。
思えば、看病などしたことが無い。ほんの少し気を緩めて、微笑む。
さしあたり、汗がひどいので服を脱がせたついでに体を拭くことにした。
しかし、拭いても汗は噴出し続けた。意識のないマスターは、苦悶の表情でもがく。
そんなマスターの手をセイバーは握った。すると、思った以上に強い力で握り返された。
まるで、この手を握りつぶそうとしているかのようだ。サーヴァントである自分をして苦痛と感じるほどの力。
しかし、それをセイバーは善しとした。
サーヴァントに至る英霊の力は業によるものが大きい。
なぜなら、特別な出生であるのならばともかく、一般大衆からすれば「そこまで」強くなる理由が無い。
そして、自分を含めて特別な出生はそれだけで業だ。

では、この英雄には一体どんな業があるのだろうか。
思えば、自分が真名を語らないが故に目の前の奏者に過去を聞くことはなかった。
彼もまた、自分から語ることはなかった。彼女は彼のことを知らない。
なにも。
「奏者よ、明日になったら保健室に行こう。
そして、眼が覚めたらそなたの英雄譚が聞きたい」
眼が覚めない。その可能性を胸にしまってセイバーは手を握り続けた。
どんなに強く握られても、決して手を放そうとはしなかった。
これほどに強く求められていることが嬉しかったから。
「楽しみにしているぞ、奏者よ」
彼女は、性的な欲求ではない親愛の口付けをした。
その証として、唇ではなく額に。

いえ、そのあとには色々しましたけれども。当然じゃないですか、バビロンの妖婦ですよ?

翌朝、セイバーはマスターを抱えて保健室に出向いた。
その移動の最中、他のマスターからは奇異の、或いはそのまま脱落してしまえという呪いの視線を送られた。
強敵が脱落しようとしているのだから当然だ。
それが、セイバーには面白くなかった。誰よりも強いマスターがこうして好奇の目にさらされるのは。
だから足早に保健室に向かう。
しかし、保健室に出向いても成果は芳しくなかった。
保健室のＮＰＣは極簡単な診察を行った後、セイバーに申し訳なさそうに原因不明であると告げた。
「これは、毒や魔術じゃありませんね。それだけは分かります。」

「そうであったか・・・」
進展が無いことに落ち込むセイバー。もはや打つべき手は無い。
あとは、時間が解決してくれることを祈るしかない。
いや、このまま猶予期間が過ぎてしまえば、闘わずして負けることになる。
つまり、死だ。
「・・・とりあえず、点滴をうっておきますね。
このままだと衰弱してしまいますから」
「うむ、すまぬ」
今は闘うことしかできないサーヴァントの身が呪わしい。
嘗ての権力があれば殿医を総動員し、更に国の中外から名医をかき集めていただろう。
マスターが初めてといっていいほど自分を強烈に必要としているのに、何もできることが無い。
「奏者よ・・・」
いまだにうなされる己がマスターは、時折声を発そうとして、しかしその度に飲み込んでいる。
一体、何を言おうとしているのだろうか。
「眼を覚ましてくれ。そのためなら余は何でもしよう」
片方の手を握る。やはり強い力で握り返された。
無力感にさいなまれるセイバーにとって、その反応だけが救いだった。

「う・・・」
決戦日の前の晩。マイルームのベットの上でうめいていたマスターは、ようやく薄目を開けた。
「奏者、目を覚ましたのか！」

もはやこれまでかと半ばあきらめていたセイバーは主の復活に歓喜した。
「り・・・リアス様・・・」
「奏者?」

「・・・人の家で、さりげなくメイドに混じらないでください・・・。
それから・・・人の家の風呂で・・・全裸待機しないでください・・・。
あと・・・寝ている隙に・・・ベットに入り込まないでください・・・。
マジで勘弁してください・・・。娘が見てるんです・・・。
教育に悪いんです・・・眷属も連れてこないでください・・・」

「奏者!」
「はっ!」
今度こそ眼を覚ましたマスターは、眼を見開き起床した。
「こ・・・こ・・・は・・・。そうか、聖杯戦争中だったな・・・。
すまんセイバー。どうやら迷惑をかけたようだ」
ベットの上から周囲を見渡し、現状を確認する。
いささか落胆を含んだ声で健在であることを示した。
「奏者よ、流石の余ももう駄目かと思ったぞ」
「ありがとう」
普段からは考えられないほど憔悴した様子のセイバーを、マスターは頬をなでてねぎらった。
それを、セイバーは満面の笑みを浮かべて受け入れる。安堵と歓喜で頬は緩みに緩んでいた。
「それにしてもあの少女たちは一体何をしたのだ。
ここまで消耗させるとは」
主の復活を喜びつつも、相手マスターに憤慨するセイバー。
そんな彼女をマスターは悲しげに否定する。
「いいや、違う。彼女たちは何も悪くない。
『悪い』のはおれなんだ。全部、な」
その顔には、普段は見せない後悔が見て取れた。

「・・・決戦は？」
「翌朝だ」
「そうか・・・。
随分寝入ってしまった」
マスターは片方の手で顔を抑え、もう片方の手で拳を握り締めた。
そんな彼の心中など、セイバーには察することはできても理解することはできない。
早く、何を思っているのか語ってほしくて前のめりで待ち構えていた。
しかし、そんな彼女の肩に手を置いて、マスターはやさしく距離を作った。
「もう今晩はお休み、セイバー。
明日、決戦を終えたら話すよ」
勤めて明るくそう言うと、普段彼女の寝ている天蓋付きのベットへ促した。
「必ずだぞ」
「ああ」
無理に笑い、笑顔を取り繕っていることは明白。
しかし問い詰めることもできず、セイバーは久しぶりに眠りに付いた。

そして、決戦。
セイバーとキャスター。
双方が対峙した状態で、且つ1対1であればセイバーが負ける道理は無い。

あっさりと、はかなく溶ける夏の雪の様に勝負は付いた。

「アリス・・・」
「ありす・・・」
全てを凍てつかせる氷の城を背景にした決闘場にて、夢物語のよう

にはかなく消えゆく二人の少女。
それを見送りながら、戦闘中は口を開こうとすらしなかったマスターはつぶやくように語り始めた。
それは、己がサーヴァントに説明するというよりは懺悔か、あるいは嘆いているようだった。
「おれには、娘が居た」
直立不動で、焦点の定まらない眼で遠くを見つつ呟き始める。
「ちょうど、おれが今の姿ぐらいのときに授かった娘だった」
その表情は、普段のように無表情である。しかし、無機質なそれではなく、涙も枯れた老人のようだった。
「本当に手を焼かされてな、赤ん坊のときはそれこそ寝る暇も無かったよ」
両手を、まるで何かを抱えているかのような形にする。
それが、見えない赤ん坊を抱きかかえているのだと、セイバーにはすぐに分かった。
マスターはその手を握り締めたが、そこに居ない赤子に触れるはずも無く、
むなしく空を切るばかりだ。
「でも、充実していた。いつも一緒だったよ」
無表情な彼のその双眸から涙が溢れ出した。
もはやいたたまれなくなったセイバーは、もう語らなくていいとマスターにしがみつく。
「・・・生前おれが憶えている娘は、ちょうど今の子ぐらいだった。
あの女の子を見た瞬間、娘の姿がフラッシュバックした。
オムツを替えたこと、風呂に入れたこと、ミルクをあげたこと、
初めて喋った日、初めて歩いた日、初めて三輪車に乗った日・・・」
「もう良い、もう良いのだ奏者！」
セイバーは自分も泣きながら喋るのをやめろと叫んだ。それ以上自分の傷を開くなと叫んだ。
しかし、マスターは語り続ける。その悲しみが必要であるかのように。

「・・・今、おれは悲しいんだ。だから、いっぱい悲しむ必要があるんだ。
泣ける内に、泣きたいんだ」
そして、あふれ出る涙をぬぐうこともなく語り続ける。
もはや表情を取り繕うことはできず、その眼は既に涙で潤み始めていた
「まあ・・・娘の健やかな成長を見届けることができないことが、悲しくてな・・・。
それに妻は妊娠していた。その子どもは無事に生まれたのか、名前は、性別は・・・。
何も知らないおれは、名前を呼ぶこともできないんだ」
泣きながらも、流暢に語っていたマスター。
しかし、ついに嗚咽を抑えることすらできなくなってしまった。
「・・・ララ・・・レイヴェル・・・し・・・シフォ・・・
あああああああああああああああああああああああああああああ」
膝をつき大声で泣き叫ぶマスター。
肉親との死別。その事実と向き合う死者。
その悲しみは極めて正統であり、セイバーをして介入する余地を与えなかった。
「父さん・・・!母さん・・・!」
大声でみっともなく泣き叫ぶ反英雄。しかし、その姿に恥じるものは無い。
死んで、もう家族に会えないことを嘆くことが、一体どうして恥ずかしいのか。
子どもが居て仕事を持ち一人前になった大の男が、家族に会えなくなって悲しんで、何が悪いのか。
そんな彼を見るセイバーの心中は複雑だった。
母に父と義父を殺され、その母を自らの手で討ち、妻となった従妹や父代わりの師を失った皇帝の心中は、嘆く彼を羨ましくすら思っていた。
生まれながらに権力の魔窟に囚われていた自分は、決して家族に会

いたいと思わないだろうから。
「・・・それが、願いなのか」
セイバーは、マスターの丸くなった背中をなでつつ尋ねる。
万能の願望機に家族との再会を願うのかと。
聖杯戦争において最も重要なこと、セイバーは今までそんなことすら聞いていなかった。
家族との再会、その願いは尊い。ささやかではあっても馬鹿にすることなどできない願い。
「・・・できるわけないだろうが」
しかし、それをマスターは否定する。
現世に何の悪影響も無いであろうその願いを否定する。
「おれは・・・軍人だ」
それは余りにもシンプルな答えだった。
国という多くの家族を守るために、敵を「殺す」職業。
彼が、或いはその部下がどれほどの命を刈り取ったのか想像することはできない。
同時に、どれだけの部下を失ったのかも。
死んでいった彼らにも、平等に家族が居たはずだ。各々に夢だって希望だってあったはずだ。
それを刈り取ってきたことを思えば、二度目の生などあってはならないのだろう。
そして、「そんなこと気にするな」などとは、皇帝であったセイバーには言えるはずも無い。
軍人よりも広く大きい意味で国を担っていた彼女は、
なるほど、望んではいけないと思う彼の気持ちも理解できる。
「死んだ者は、死んだ者だ。
無理に生き返らせたって、後から続くものの邪魔になるだけだ・・」
そして、
家族を失った男の叫びは、セイバー以外の誰も居ない決闘場にむな

しく染み入っていった。

突然ですが　おまけのキャスター編

「くう、バーサーカーめ。おれのとっておき、滅龍奥義二重金剛に耐えるとは！」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！」

「キャスター、大丈夫か！」

「・・・すみません、ご主人様・・・。
もう無理です」

「分かった。撤退するぞ！」

「攻略サイトによると、どうやらあれは敵サーヴァントではないらしい。
宝具の一種だそうだ。さりとて、倒さなければトリガーキーをゲットできない。
さて、どうしたものか」

「あの～、ご主人様。
攻略サイトを見てるんだったら、攻略法を探れば良いのでは？」

「・・・そうだ！
おれにいい考えがある！」

「あの、ご主人様？聞いてます？」

「そうと決まれば話は早い！
キャスター、特訓だ！」

「勝手に決めないでください、というか特訓？
え？筋力と耐久がＡのご主人様と私が？」

「そうだ！お前の力が必要だ！」

「いくぞ、新たなる力を見せてやる！」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！」

「キャスターとの特訓で磨いた新たなる滅龍奥義・・・。
呪法・玉天崩！」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！」

「会長め！女はべらせやがって！」
ガス！

「避妊ぐらいしろボケが！」
ガン！

「みんなに同じこと言ってるんじゃねぇ！」
ゴン！

「命助けたぐらいで調子に乗るな！」
ゴス！

「一週間でローテーション組むな！」
ドス！

「何が、「俺はみんなを平等に愛してる」だ！殺すぞ！
ていうかもう死んでいるけれども！」
ドン！

「あ～思い出しただけで腹立ってきた！」
ボン！

「もっと苦しんで死ねばよかったんだあいつは！」
ボコォ！

「狩人会の女子で誰に手を出すのかカレンダーに書き込むな！」
キン！

「報告書をまとめる奴も大変だったし、見るこっちも大変だったんだ

ぞ！」

キ～ン！

「ドンだけ手を出してんだお前は！」

キ～～～ン！

「なんで記録してるんだよ！写真に撮ってるんだよ！映像まで残ってるんだよ！」

キ～～～～ン！

「お前の子どもの母親の「処理」、めちゃくちゃ胸が痛んだわ！」

キ～～～～～～～ン！

「おかげでこっちはな・・・未だに妊婦がトラウマだ！」

「あの、ご主人様？もう死んで消えてますよ？

ていうか、アリーナが崩壊ＳＵＮ☆ＺＥＮなんですけど」

「ん？ああ、本当だ。アリーナの床踏んでた。

ダメだな、やっぱ動の気を開放して戦うのは。

大会に出たときはいつもカッとなって負けてたんだよ・・・」

「いえ、でも勝ててよかったですね」

「そうだな、でも思い出したら腹が立ってきた。

ちょっとエネミーマラソンするぞ、付き合え、キャスター」

「もちろんです。天下一武道会だろうと、暗黒武術会だろうと！」

その日の夜

キャスター「うちのマスターが、大門大的な意味で最強すぎる件について」

そんなマスターがいるか、とこんがり炎上しました。

「・・・ぐはぁ！」
「ど、どうしたのよマスター！」
「どうしたもこうしたもあるか！
　料理作ったから食べてみろというが、これもう食材を使った兵器と化してるじゃねえか！」
「そ、そんな、酷いわ！一生懸命作ったのに！」
「酷いのはお前だ！
　食材になった家畜と、その飼料になった穀物と、育てた酪農家に謝れ！
　ていうかおれに謝れ！」
「ううう、なによ、そこまで言わなくてもいいじゃない！」
「言うわ！こんなもの食えるか！
　これを食えたらそれだけでもう英雄だ！
　少なくともおれはそう思うぞ！」
「あなたは英雄でしょ！」
「おれは反英雄だ。こんな食材に対する冒涜的なメシ食えるか！
　おまえこれ料理に対するイメージだけで作っただろ。
　絶対レシピとか知らないだろ」
「なによ～～～！
　一生懸命作ったのに！」
「泣くな！
　泣いたって料理はうまくならん！
　・・・、ちょっと来い」
「なによ～、どこに行くの？」
「購買でホットケーキの材料を買ってくる」
「え？作ってくれるの？」

「何言ってるんだ！お前と一緒に作るんだよ！」
「え？いっしょに？」
「娘と一緒によく作ったもんだ。
それぐらいなら教えてやれる。・・・ほら早く来い！」
「ああ、うん！
行くわ！」
「ったく・・・」
「ねえ、マスター」
「なんだよ」
「こうしてると、夫婦みたいじゃない？」
「誰がだ、いいとこ兄妹だろ」
「ひっど～～い。
アイドルであるあたしに向かってそれは無いんじゃないの？」
「・・・お前、アイドルをなんだと思ってるんだ」
「え？可愛いだけでちやほやされる夢のような職業でしょう？」
「・・・違うぞ、断じて違う」
「どう違うのよ」
「あれはな、夢を売ってるんだよ。
お前は夢を与えていないだから、アイドルじゃないのさ」
「なんだかキン肉マンみたいね」
「・・・お前くだらないことはよく知ってるな」

ランルーの看破

マスターは決戦を終えたあともしばらく泣いていた。
そんな主に、セイバーは寄り添うことしかできない。
無力な己を呪う主従は、試合後の決戦場という安全地帯で悲しみにくれていた。
しかし、いつまでもここにいるわけにはいかない。
マスターは涙をぬぐって立ち上がり、自らも泣いていたセイバーの顔をなでてここを出ようと言った。
その眼はまだ赤く、目じりには涙が溜まっていたが、しかし心は多少軽くなったようだ。
「・・・お前には悪いが、おれには残してきた家族に対する想いがある。だがな、それは幸せなことだとも知っている。無事をただ祈るだけさ」
その顔を見て、やはりこの男も英霊なのだと、セイバーは理解する。
どうにもならない過去を抱えても、決して未来など無くても、なお前に進もうとする意思。
「さあ、いこう」
やせ我慢であることが明白な笑みを浮かべて、マスターは己がサーヴァントに手を伸ばした。
セイバーは、ためらうことなくその手をとって立ち上がった。

1階校舎に戻ったセイバー達を、意外な人物が出迎えた。
騎士を従えたレオナルド、その人だった。
「・・・死を、悼んでいるのですね」
泣きはらした後の顔を見て、そう言った。
少し恥じ入りながらも、一誠は応える。
「反英雄が子どもを殺したくらいで泣いていたら悪いか?」
「いいえ、むしろ好感が持てます。反英雄といえどもあなたは『人間』なのですね」
その、人間という言葉が種族を意味するものではないと、一誠は当

然のように受け止めていた。
心のありようとしての人間性、という意味なのだろう。
「この聖杯戦争は、戦いのなんたるかも知らない少女すら命を落とす、無慈悲な戦いです」
「そんなものだろう、争いは」
目の前の少年が言いたいことはわかるが、しかし賛同はできない。
争いで戦士だけが死ぬなどありえないことだ。絶対に、一般人は死ぬ。老若男女を問わずに。
そうでなくとも、国を挙げての戦争となれば、何がしかの形で国民に負担があるだろう。
それが生活を脅かすほどの重税であったり、働き手である夫や父を奪う徴兵であったり。
そんなことは体感で知っていることだ。おそらく、この場にいる4人全員が。
「そうです。ですから僕はこの手に聖杯を納める必要がある」
「別に、お前である必要は無いだろう」
万能の願望機であるのなら、誰が使っても結果は同じのはずだ。
目の前の少年である必要は全く無い。
「いいえ、その力は「人」の手に余る。国家レベル以上の力ですから」
「それはそうだろうが、お前だって人間だ。マスターなんだからな」
世界そのものを覆しうる力への重責。それは、なるほど人の手に余るだろう。
だが、それでも誰かが手に入れるというのなら、「僕」のものに。
いっていることが無茶だ。
「いいえ、僕は王です。地上を統べる、ハーウェイ家の次期当主。
この聖杯は、僕が手に納めるべきもの」
そう言う彼に、微塵も迷いは無い。
そんな彼は、多くの種族を見てきた一誠にとっていっそ滑稽ですらあった。
「冗談だろう。王というのは国という共同体における「最高責任者」。
ただそれだけだ。別に種族レベルで特別というわけでもない。

欲もあるし、失敗もする。病気にもなるし、寿命もある」
その言葉を聞いて、若干反応したのはガウェインだけだった。
王ではなく皇帝だったセイバー、ネロにしてみれば当然のことであった。
王は、その程度の存在。成功することもあるし失敗もある。
母親の野心から即位し、自らの失敗によって国を滅ぼした皇帝の素直な感想だった。
「確かにそうかもしれませんね。この聖杯戦争では多くの種の混じった英雄もいる。
そんな彼らから見れば僕は人間に過ぎないでしょう」
その、種族レベルでの発言はあっさりと認められた。
実際、レオナルドは一切遺伝子に手を加えられていない純粋な「人間」である。
「ですが、それでも僕は「王」です。人の世界を管理し導く義務がある」
「その発言から察するに・・・全体主義者なんだな」
「ええ、その通り。ですが、そうでなければ人類は存続すらできない状況なのです」
「ならこの話は終わりだ」
政治に携わる人間と軍属の人間が立場を弁えずに未来を語り合うなどあってはならない。
軍人は、あくまでも軍務にのみ関心を払うべきだ。
「おれは、なるほど心は人のそれだ。幼子を殺せば我が子と重なる。妊婦を殺せば、己が妻を見る。
だが、おれは軍人。職務に対しては王同様に忠実でなければならない。
そして、善悪は「自分の王」に委ねている。お前には委ねない」
そういって、従者を伴いマイルームへ向かう一誠。
そんな彼を、レオナルドは止めない。ガウェインも同様だ。
なぜなら彼の発言は全く持って正統なものだからである。
軍人が、王に剣を奉げるということはつまりそういうことだからだ。

騎士の鑑と、地上の王は全くもって彼の発言を覆す言葉を持たなかった。
しかし、それは彼が反英雄ではなく英雄であることを余りにも雄弁に語っていた。

英雄と反英雄。

例えばペルセウスとメドゥーサ。或いはジークフリートとファヴニール。
彼らは紛れもなく正統な英雄と完全なる反英雄だ。
しかし、此度の聖杯戦争でも召喚されたフランシス・ドレイクはどうだろうか。
イギリス人にとって彼女は護国の海賊だ。間違っても悪魔などとは呼ばれない。
しかし、それはイギリスにとっての話。スペインではまさしく悪魔の竜だろう。
つまり、史実の英雄においては国によって英雄と反英雄はひっくり返りうるのだ。

「やはり、彼は英雄ですね」
「ええ、もっとも彼自身はそう考えていないようですが」
二人は、おそらく自分たちにとって最大の障害であろう一誠をそういう存在であると認めていた。
最大級の警戒心と、それに負けないくらいの敬意を込めて。
「交渉次第では、共に戦ってくれると思ったのですが」
それは、聖杯戦争における敗退を意味し、つまり自分の為に「死ね」ということであったが、
それは王である彼にとって「必要」な判断であり、欠片も罪悪感は無い。
そして、ある意味では当然の思考だった。
世界を担うべき王が、こんなところで死ぬなどあってはならない。

勝つ為には当然の交渉だった。もちろん、彼を部下にしたかったことは事実だが。

「・・・死して尚唯一の君主に仕える。彼はそうした義理堅い男なのでしょう」

そういうガウェインは、円卓の騎士でありまさにアーサー王に仕えた身であった。

当然今のマスターはレオナルドではあったが、彼、いや彼女への忠義は薄れていない。

彼は死後の世界で孤独に戦いながらも王を、生前の仕えたただ一人と定めている。

そんな一誠の姿勢を尊く思っていた。

「であれば尋常に立会い、勝利するだけです」

レオナルドはあっさりと、彼への勧誘を断ち切ることにした。

そこには、彼我の二組が必ず勝ち残るという確信が存在していた。

自分の為にここにいる腹違いの兄では、決して勝てないということも冷酷に判断していた。

しかし、そのことにはガウェインは頷かなかった。

あのアサシンは、そんな簡単に負ける相手ではないと、そう思っていたのだ。

マイルームにて、一人静かに鍛錬をこなすマスター。

空手の型であったり、六式の型であったり、筋肉トレーニングであったり。

1週間でなまった体を取り戻そうと、普段以上に熱中している。

短パンだけを身にまとい、大いに汗をかいて無心に体を痛めつける。

飽きることも無く、淡々と時間と回数をこなしていった。

その後姿は訓練された兵士のそれだ。鍛え抜かれた筋肉が、或いはそれに秘めた魂が熱を放っていた。

少年の持つ瑞々しさと、大人の男の持つ逞しさが矛盾なく両立していた。

それを見つめるセイバーのまなざしは、それに負けないほどの熱を帯びていた。
間違いなく、恋慕的な熱である。
皇帝である前に一人の少女であるこのセイバーは、普段見せないマスターの弱さ、人間らしさにときめいてしまった。
いつもならば退屈なその姿も、今では悲しみを振り払おうとしている様に見える。
それが愛おしくてたまらない。
普段は見せない弱さと、それを覆い隠す愚直さがたまらない。
つい、頬がにやけてしまう。
このままずっと見ていたい気もするが、いい加減踏み込みあうべきだろう。
つまり、自分は真名を明かし、彼は過去を語るのだ。
以前、空気の読めない輩が己の真名を暴いたような気がするが・・・忘れよう。あんな海産物のことなど。
そんなことよりも二人同じベットに転がり、恋人のように過去を語り合い、
他愛のない失敗を笑いあい、辛い出来事では励ましあいたいのだ。
やがて二人の距離は接近し、そして二人は・・・。
ぬふふふふふ。

流竜馬曰く、
「穴があったら突っ込むのが男じゃねぇか！」

「・・・ふふふふふふふふふふふ」
彼女はオープンスケベだ。いや、そういう問題ではないのかもしれない。
リアルにハーレムを築き上げ、この世の快楽を味わいつくした暴君だ。
立技においては、空手と六式を操るマスターのほうが分があるだろう。

しかし、寝技ならば絶対の自信がある。なにせ、実戦経験が違うのだ。質も、量も。

史に名を刻む欲に忠実な皇帝の「寝技」の恐ろしさを見せてやろう。

「そなたは余の剣に、余はそなたの鞘になるのだ・・・」

幸い、以前彼の「剣」の有り様はしかと確かめている。抜かりはない。

抜き差しならぬ間柄ならぬ、抜きあい挿しあう間柄になるのだ。

経験豊富な彼女は、４８の殺人技から５２の関節技までマスターしている。

すでに、スタートからゴールまでシュミレーションは万全であった。

彼女は、「剣」であることより「鞘」であることのほうが実戦経験は豊富だったから当然だが。

しかし、この物語は１８禁ではないので（作者にとって）都合よく彼女の妄想は打ち切られる。

「む」

携帯端末が音と共に振動する。

稽古を中断し、確認すると残っているマスター達に臨時で召集が入ったようだ。

ふむ、と考える。

行かないことにメリットは感じない。逆に、行くことにはメリットを感じる。

「支度をしろセイバー。体育館でイベントがあるようだ」

「ぬふふふふ・・・なんと！」

「生き残ったマスターとサーヴァントが全員集合するらしいぞ」

「そうか、それは楽しみだな」

脳内では既に結婚式場の設計に取り掛かっていた彼女の幸せな妄想は、無粋きわまる召集によって打ち切られた。

そのことに憤慨しつつ、しかし突然のイベントにわくわくもしてし

まう。
何のことはない。彼女は好奇心旺盛な皇帝なのだから。

体育館。
そこには既に数多くのマスターが集まっていた。
とはいっても、４回戦に突入した時点でもはや１６組にまで厳選されている。いや、間引かれているというべきか。
と、そこまで数を考えたところで一誠は奇妙な事実に気付く。
若干だが少ない。
まだ来ていないという可能性もあるが、１３人しかいない。これは召集と関係があるのだろうか。

「３回戦を勝ち残ったマスター諸君」
体育館の中央に立つ言峰神父は、役者のように語りだした。いや、司会のようにというべきか。
あの、妙に人の神経を逆なでする話し方をする男は、コロシアムの司会のように残酷に語りだした。
その近くには、血色の悪い鎧の男と、ピエロ風のやせた男が立っていた。
どうやら、彼らが１４組目らしい。
「この度、マスターランルーとそのサーヴァントが管理ＮＰＣの度重なる警告を無視し、
アリーナ外での戦闘で他の参加者を「排除」し続けた。
よって、ペナルティを課すことにしたのだが・・・。即削除では面白くない」
人の生き死にがかかった戦場で、仮にもルールをつかさどるＮＰＣが違反者に直接罰を与えない。

しかも面白くないという理由で。全く持って誠意に欠ける対応だ。
しかも取り繕うとすらしない。ここまで露骨だと怒りを通り越してあきれ返る。
反面、やはりここは戦場なのだな、と納得もする。
第一、アリーナ内での戦闘は禁止されているというのに、実際は「3ターン待ってやる」状態だ。
それは禁止というか、制限ではないだろうか。
一誠は、そんな思考をしつつ話を聞いていた。
どうやら、あの一組のせいで人数が若干減っているらしい。
いや、1回戦のときから殺し続けているのだとしたら、実際は相当な数になるのかもしれない。
「そこで、提案がある。これは「狩り」だ。
今この場で、このランサーを打倒したものには報酬を与えよう。
具体的にはそうだな、次の対戦相手の戦闘情報だ。
逆に、ランサーが勝ち続けて挑戦者がいなくなれば恩赦としてペナルティを無くそう。
どうだろうか、勇敢なマスターはいるかな?」
性格悪いなこいつ、と感心する。
ここまで勝ち残ったマスターたちは、つまるところ既に聖杯に手が届きかけている面々ばかりだ。
当然だろう。予選で１０００人の内から１２８人。ここではまだ優勝など見えていなかった。
しかし、既に４回戦。残りは１６人、いや１４人。
もちろん、そのうちの一人しか生き残らないとはいえ、１４分の１である。
なるほど、張り切りもするだろう。
次の対戦相手のデータを手に入れて、優位に立ちその優位を生かして勝てれば、なんと８分の１だ。
たったの３回で万能の器に手が届く。
少々のリスクには眼を瞑り、立ち向かうべきだろう。
だが、一誠の足は重い。

というか、この見世物に参加する意義を感じられない。
まず第一に、次の対戦相手はあのランルーだ。
放っておいて死ぬならそれで善し、生き残ってもペナルティがなくなるだけでこちらに損は無い。
第二に、ここで闘えばそれだけで手駒をさらすことになる。
こうしてみているだけで、どんなサーヴァントを連れているのか分かってしまうのだ。
そっちのリスクのほうが怖い。
第三に・・・、あの神父が気に入らない。というか信頼できない。
流された情報が適切でないという可能性もある。
少なくとも、このまま「見る」に徹するべきだろう。
もっとも、それまで我が従僕が我慢できれば、だが。
念願の観客を得てうずうずしている己の「剣」を見て、呆れを深める一誠だった。

また一人、サーヴァントが槍によって貫かれた。
「どうした！異教徒どもよ、反逆者どもよ！」
ランサーの大立ち回りは、なるほど、マスターを大量に殺していただけのことはある。
多くの、しかもここまで勝ち残ったサーヴァントたちを相手取り、しかも優勢を保っている。
それを見る一誠は、彼を武将だと分類していた。
というのも、まず「技」が荒い。基本はしっかりしているし実力も確かだが、精度はそれほどでもない。
武術家や求道者の類ではないだろう。
装備は豪華だ。２回戦の相手とは比べ物にならないほど整っている。しかし、その武装に呪いや祝福の類は見受けられない。
犯罪者や反逆者、怪物殺しの勇者とも考えにくい。

であれば、集団を率いて闘った武将であると考えるのが自然だ。
戦場を常としていた武将であれば、複数相手でも遅れは取らないのだろう。
もちろん、それだけでもない。彼の相手は複数といっても指揮系統がはっきりしているわけでもないし、
また宝具を晒すわけにも行かないので、全員消極的な攻めに終始している。
つまり、味方を信じることもできず、敵に全力で挑むこともできない、
非常に中途半端な戦闘しかできないのだ。
「もう我慢できぬ！
良いな、奏者よ！」
返事も聞かずに飛び出すセイバー。
彼女も危機感が募ったのだろう。
つまり、これ以上「観客」が減っては困る、という点だ。
最初から12組しかいなかった「観客」は既に、9組にまで減っていた。
「余こそオリンピアの華、麗しき奏者の剣である！」
元々、究極の目立ちたがり屋である彼女は舞台女優のように「自称男装」のひらひらとした服で、
剣を振りつつ舞い踊り戦場に颯爽と現れる。
セイバーであること、一誠というマスターによって性能が高くなっていること。
それを見抜いたランサーは、この場ではセイバーのみを敵とみなした。
「ふん、ローマの暴君か。
ちょうど良い。神の教えの弾圧者を裁く絶好の機会である！」
「やってみるが良い！
ただし、そう簡単に行くと思わぬことだ！」
足を止めているランサーの周囲を、軽やかに、美しく舞い踊り翻弄するセイバー。

セイバーが放った横薙ぎの一振りを、ランサーは両手持ちの槍で軽々と受け止めるが、
しかし、反撃する間もなくセイバーからの冗談からの攻撃を再度受ける羽目になる。
赤いセイバーの特徴はセイバーとはいいがたほどの非力さと脆弱さ。
殴り合いならばまず、目の前のランサーには及ばない。
しかし、それとは引き換えに俊敏性は非常に高い。幸運もだ。
対するランサーは攻撃も防御も高いが、ランサーとは思えないほど遅い。それはおそらく最低ランクだ。
「おのれ、ちょこまかと!」
「ほれほれ、暴君の首はここだぞ?」
敏捷は、ゲームでは「何の為に存在しているのかわからない」レベルのステータスではあるが、
実際の戦闘では非常に意味がある。
赤いセイバーは一誠の恩恵によりただでさえAランクの敏捷と幸運には＋が付き、
筋力と耐久もDからCになっていた。
もちろん、やはり足を止めての殴り合いでは及ぶはずも無いが、
しかしセイバーの大胆にして変則的な高速移動攻撃にランサーは対処し切れていない。
足を止めて、完全に防御に徹していた。
しかし、膂力と頑健さが上回っていることは明白であり、
それを生かして果敢に反撃する。
一回戦でのライダー、2回戦でのアーチャー、3回戦でのキャスター。
一誠が対戦した何れのサーヴァントよりも強力だ。流石はセイバーに並ぶ三騎士といったところだろう。
剣と槍が幾度と無く火花を散らす。
先ほどまではおっかなびっくり参戦するか迷っていたほかのサーヴァントたちも、

もはやその場で棒立ちとなり観客になっていた。
それほどまでに、踏み込みがたい戦場だったのである。
特に、苛烈なのはランサーだ。時にはあえて攻撃を受けて、無理やり隙を作り反撃している。
「ぬう！」
セイバーの袈裟懸けの一撃を「肩」で受け止め、痛みを感じていないがごとく槍で反撃するランサー。
その一薙ぎは、圧倒的な破壊力で風を巻き起こし、周囲の観客達の服や髪を揺らした。
「神の教えがある限り、苦痛では止まらんよ！」
その闘い方は、肉体的な強さよりもむしろ精神的な強さが重く感じられる。
それが、この場にいた観客達とセイバーの考えだった。
「流石はヴラドⅢ世。あなたのサーヴァントとも互角ですね」
観戦していた一誠の脇に、レオが並び立つ。当然、ガウェインも一緒だ。
ここには、召集に応じた残存する全てマスターがいる。突然現れたことには驚かない。
しかし、ランサーの真名らしきものがいきなり会話に登場したことには驚いた。
「・・・ルーマニアに実在した王だな」
「ええ、吸血鬼ドラキュラの起源となった人物です。
オスマントルコを撃退した、護国の鬼ですね」
非常に、それこそ度を越えて厳格な人物であり、腐敗した貴族社会にメスを入れた、
いやナイフをつきたてはらわたを引きずり出した人物というべきか。
２万人を串刺しにして道に並べ、敵の戦意を奪うという「思いついても実行に移さない」作戦を実行した男。
「異教徒から、神の教えを守った男・・・」
感じ入ることでもあったのだろう。一誠は、己のサーヴァントでは

なくその敵を見た。
なるほど、強いわけだ。納得せざるを得ない。
強すぎる信仰心が彼の体を鎧のように守っているのだ。
「アレレ？」
目の前に、長身痩躯のピエロが現れた。
そのピエロは、間違いなく狩の対象となっているランルーである。
その、狂気に満ちた目は明らかに一誠を捕らえている。
「ネエ、君ハ公爵ガ好キナノ？」
狂人ゆえに本質を捉えたのか、一誠は図星を突かれた。
拳でピエロを殺すなど、一撃で十分だというのに身動きが取れない。
もちろん、彼（正確には彼女）が殺意や敵対心を持っていれば別だが、
そうしたものを全く感じなかった。
ガウェインはレオナルドの前に立ち、ランルーの視線をさえぎっているが、
ランルーはまったく気にも留めていない。
「君ガ公爵ヲ見ル眼ハトッテモヤサシイ。
カワイソウダッテ思ッテル。公爵ノコトガ好キナノ？」
「・・・」
そんなピエロに応えることなく、一誠は体育館の壁際から中心へ、
ピエロから逃げるように戦場に向かった。
その背中には、明らかな決意が見て取れる。
無視されたランルーは、気にも留めずにおどけながらもランサーの元へ歩いていった。
「セイバー、援護する」
学生服を身にまとった少年は、しかし無表情でなんの恐れも抱かずにサーヴァントの戦場に足を踏み入れた。
それを見て、セイバーは顔を輝かせる。
ランサーが思いのほか頑丈で、「劇」が長引き観客が飽きてしまうのではないかと危機感を抱いていたのだ。

「うむ、さすが余の奏者だ」
しかし、ランサーであるヴラドⅢ世は、あからさまにマスターである一誠を侮っている。
「酔狂な真似をするマスターもいたものだな。だろう?我が妻よ」
己の現状、或いはマスターの行状を一切棚に上げて高笑いする。
「アハハハハハ。ソウダネ、デモ好キニナレルカモ。好キニナッタラタベチャワナイト」
隣にいるランルーは、虚無的な笑いで応えた。
だが、マスターが三騎士を相手取るというのは確かに無謀だった。
普通のマスターならば、だが。
「ヴラドⅢ世」
無表情な顔の下にどこか哀れみを込めて、一誠は他のサーヴァントが取り落とした槍を拾って構えた。
その構えは、槍の重さも不慣れさも感じない堂に入った構えだった。
「お前の祈りに神は答えなかった。おれも、その資格を持たない。教えを守ったお前を倒し、弾圧したセイバーを守るというのは、なんとも酷い話だと思う。
だが・・・お前はやりすぎた」
〝やりすぎた〟
それが生前の行いなのか、あるいはこの聖杯戦争における行いなのかは、或いは両方か。
「せめて軍人として、槍を交わそう」
セイバーから見ればはるかに劣る速度で、しかしランサーより高速で突撃を仕掛ける。
その一突きは、まさしく電光石火。マスターたちには眼で追う事ができない速さだった。
しかし、セイバーの攻撃すら受けきったランサーから見れば十分に対処できる速度だ。
「神罰を食らうが良い!」
足を止めて迎え撃つランサーの横薙ぎの一撃。

サーヴァントたちの常識からすれば決して避けきれない一撃だった。

受ければ膂力の差で吹き飛び、壁にぶつかって悶絶するか、或いはそのまま死ぬだろう。

そう確信するほどの一撃は、空を切った。

「剃〃塵喰い（チリグイ）〃」

ランサーの槍の下、地を這うような前傾姿勢。

顎が地面にかするほど体を地面と平行にし、且つ速度を上げてランサー懐に飛び込む一誠。。

互いの槍が足かせになるほどの間合いで体を起こし、

短剣を突き刺すがごとく穂先の根元を持って、槍をランサーに突き立てる。

「小癪な！」

所詮は非力な、しかも不完全な体勢からの一撃。Ａクラスの耐久によって、鎧に傷一つつかない。

しかし間合いをつめ、しかも大きく隙を作ることには成功していた。

「主演女優を忘れるとはな！」

己がマスターの背後から飛び出してきたセイバーの一撃。

それは十分な予備動作によって振りぬかれた渾身の一振りだった。

「ぐぬう！」

自分の体勢は崩れ、しかも渾身の一撃とあっては流石に効いたらしく、苦悶の声を上げるランサー。

反撃に出ようとすると、しかし一誠によって阻まれる。

上背のあるランサーが槍を振り下ろそうとすれば、懐に入ったままその腕を手に持った槍で押さえる。

間合いの中で、とことん妨害する腹のようだ。

「伯爵、ガンバッテネ～」

ランルーも見ているだけではない。コードキャストを使用し、セイバーに妨害を仕掛ける。

「ぬぅ、うっとうしい！」

軽い衝撃。しかし、セイバーの気勢を削ぐには十分だった。
両マスターは、己のサーヴァントを援護している。
そのこと自体は当然だったが、片方のマスターは前衛を勤めて、文字通り体を張っていた。
異様な光景に、参加者たちは息を呑んでいた。

冷静なのは、レオナルドとその腹違いの兄、ユリウスだった。
そして、その両サーヴァントである。
「どう見ますか、ガウェイン」
レオナルドの質問に、白い騎士は感想を冷静にのべた。
「どちらも技量は高いですね。
特にランサーは懐に入られているとはいえ、決定的な隙を作っていません。
ですが、やはり槍兵にはあの間合いは不利です。やはり、セイバー組が優勢かと」
と、極めて客観的な言葉を述べた。
実のところ、サーヴァントの攻防に遅れることなく付いていけるマスターなどいない。
6合の打ち合いの内、参加できるのは1回がいいところだ。
ランルーも、流石に複数のサーヴァントを葬ってきただけのことはあり、
最善の妨害をするがついていけない。
「アサシン、お前はどう思う」
ユリウスが尋ねた相手は、しかし目に映ることは無い。
これが気配を殺しているの極み、存在感を消しているというのだから驚きだ。
なるほど、アサシンである。
「どちらも功夫が足らぬ。技量が低すぎてまるで児戯よ。
見ては居れぬ」
その言葉は、自身もまたランサーとしての適性を持っているからだろう。

他のサーヴァントを尻目に槍を振るう両雄を話にならないと言い切った。
「だが、どちらも場慣れはしているな。
死地にあっても恐怖はない。うむ、善い善い。
特に若い方、あれはおそらく槍が本業ではあるまいよ。
剣の英霊は、まだ全力を出しておらぬな。宝具、を使う気は無いようだ」
ガウェインは、アサシンの声の出所を探る。
しかし、どこにいるのか見当さえつかない。
その超絶の暗殺者に、ガウェインは緊張を隠せない。
レオナルドは全く危惧していないことだが、もしもユリウスが裏切れば、
自分は全くアサシンに対抗できない。
もちろん、それはユリウスの「個人的事情」から考えればありえないことであり、
よけいな心配ではあった。
だが、やはり驚嘆せざるを得ないのだ。
嘗て王の元に集った騎士たちの中で、もっとも優れているといわれた湖の騎士。
その彼よりも尚上の使い手がいるなど、と。
その折、戦場が動いた。
「喝采は剣戟のごとく！」
セイバーの連続攻撃が、ランサーに大ダメージを与えた。
それは、確かに致命傷だった。しかし、ランサーは尚動く。
「神の敵を前にして、倒れることなどできぬ！」
戦闘続行Ａ。単純ながら、土壇場でその威力を発揮するスキル。
それにより、誰の眼にも致命傷と分かるそれを喰らってもなおランサーは倒れない。
だが、一誠はその不屈をへし折りにかかる。
「金剛！」
槍を放棄し右拳に全オーラを集中させ渾身の一撃を、鎧に覆われた

ランサーの胸にたたきつける。
拳から血が流れることは無く、しかも金属でできた鎧を陥没させていた。
その打撃により、ランサーは苦悶の顔で動きを止める。
剣や、槍をはじき返していた鎧が、あっさりと打ち砕かれた様をみて驚嘆する観客達。
「ぬう、よい硬功夫じゃな」
と、中国拳法の言葉で一誠を賞賛するアサシン。
彼にとっては、その一言で済む程度のことではあったが、ガウェインには到底信じられないことだった。
「裸拳で金属の鎧を砕くとは・・・」
「それだけではないぞ、心の臓を押しておる。生身ならば耐えられまい。
まさに二の打ち要らずであろうな」
愉快そうに笑うアサシン。
姿が見えないことが尚のこと不気味だった。
「ぐ・・・おのれ!侵略者め!」
「まだ耐えるか・・・」
生理的限界はおろか、物理的限界すら超えて槍を振り上げるランサー。
しかし、一誠は拳を引き抜かずに間合いを更に縮める。
「虎砲!」
拳を密着させた状態からの打撃。
中国拳法においては寸勁と呼ばれるそれを、一誠は追撃の形で繰り出した。
再び、絶対急所である心臓が強く押される。
しかし、それでも尚倒れないと判断したのだろう。
ランサーの対応を見るまでも無く、今度は一歩下がって両拳を合わせる形で鎧に密着させた。
「止まっている相手ならば問題ない。
・・・六式奥義、六王銃!」

両拳から波紋のように広がる衝撃波が、ランサーの全身悉くを激しく揺さぶった。

今度こそ仕留めたと考えたのか、或いは余力が尽きたのか一誠は大きく下がってセイバーの元に戻った。

その顔はやや赤く、息も荒い。

「奏者よ、無事か？」

「ああ、それにしても非力なことだ。

この身が呪わしいよ」

一撃で楽にしてやりたかった。そう思いつつ拳を見る。

いつか見た、嘗ての自分のこぶしとは比べ物にならないほどの弱さに嘆息した。

しかし、それに浸る間もなくランサーに集中する魔力に緊迫する。

「神への反逆者よ・・・神罰を受けるがよい！」

その体には既に力なく、しかし意志の力で槍を地面に突き立てた。

ランサー、ヴラドⅢ世の宝具。

それは実在した武器でもなければ、技でもない。

自分の周囲に、無数の槍を出現させる対軍宝具『串刺城砦』。

欲深きものを断罪する正義の一撃。

観戦していた、中途半端な位置にいたサーヴァント共をまとめて始末する広範囲攻撃。

それは、神の教えを弾圧し、欲の限りを尽くしたセイバーには大きなダメージを与えるはずだった。

だった。

「バカな・・・」

ランサーは、ついに槍を取り落とした。

その光景が、彼にとってあってはならないものだったからだ。

腐敗を断罪するはずの神の一撃は、しかしただの一本もセイバーと一誠には届いていなかった。

いや、正確に言うのなら彼らを避けるように生えていた。

槍の密林で、一箇所にぽっかりと開いた安全地帯。
そこに、さながら役者のごとくセイバーと一誠は立っていた。
その光景に、セイバーは戸惑っている。敵の宝具を前に無傷となった理由が分からないからだ。
しかし、マスターは違う。しっかりと認識していた。
そもそも、「神罰」など自分に下るはずはないのだ。
「・・・お前にとってはつくづく不本意な結果だろう」
無表情はすっかり消えて、ドラキュラを哀れんでいた。
「理不尽極まりない話だとは自分でも思う。だが、もう、休め」
その言葉が、ランサーに届いたのかどうか。定かではない。
自分の中にあった信仰という名の骨格が崩れ落ち、
既に意志の力だけでつないでいた命はあっさりと失われた。
「バカな・・・」
言葉を失いつつ、姿を消すヴラドⅢ世。
苛烈なほどに信仰を貫いた彼にとってあまりにも、不条理な結果だった。
「伯爵・・・死ンジャッタノ?」
自分が死ぬことも、理解できているのかいないのか。
哀れなピエロは、サーヴァントの消滅によってあっさりとその姿を消した。

「詰めが甘かったの」
アサシンは、言葉だけでも伝わってくるほど上機嫌で笑っていた。
詰めが甘いと言うのも、完封したとはいえ宝具という反撃を許したからだ。
彼ならば、たとえ姿を視認されようともたったの一撃で勝負を終わらせていただろう。
「・・・笑い事ではないぞ、アサシン」
彼を打ち倒さなければならないユリウスにとって、今の光景は余りも脅威だった。
なぜ、必殺であるはずの宝具が完全に無力化されていたのか。

それを明らかにしないことには、うかつに仕掛けることもできない。

既に、一誠とセイバーを除いて体育館の中心に人影はない。

この日、本来16組だった聖杯戦争の4回戦の出場者は6組にまで減っていた。

それは、聖杯戦争の終わりが加速していたことも意味していた。

キャスター編

「真名に関する本、隠されちゃいましたか・・・。
それじゃあアリーナに行きましょうか?」
「そんな必要は無いだろう、司書の方に聞けば一発だ。
すみませーん。この図書室から無断で持ち出された本は分かりますか?」
「少々お待ちください・・・。
ああ、一冊だけ該当がありますね」
「その本の著者とか、関連する英雄は?」
「この本だと・・・フランシス・ドレイクですね」
「そうですか、ありがとうございます」
「・・・マスター、ちょっとは相手してあげましょうよ」

「吸血鬼にまつわる英霊・・・一体何ラド三世なんだ・・・」
「いえ、それもう分かってるじゃないですか」

「二の打ち要らず・・・一体何書文なんだ・・・」
「いえ、それもう分かってるじゃないですか」

「あの姿・・・どう見ても呂布だな」
「・・・ですね」

「和服で狐耳に狐の尻尾・・・一体玉藻の何なんだ・・・」
「・・・そりゃあ正解ですけれども」

赤ランサー編

「ホットケーキ・・・なかなか悪くなかったわね。
まあこの私が調理したから当然だけど」
「ああ、だろう?
そんなに手間はかからないしな。
初心者どころか素人でもできる」
「ねぇねぇ、次はどんなお菓子を作るの?」
「そうだな・・・シュークリームなんてどうだ?
あれは生地の中にクリームを入れるには専用の注射器が必要だが、
それにこだわらずに生地に切込みを入れて挟み込むようにすれば、
そんなに難しくは無い」
「じゃあ、それにしましょう!」
「ああ、だがそれも次の対戦が済んでからだ」
「もぉ~~ケチな猟犬ね。あなたってば本当に職業犬みたいに真面目だわ」
「それは認めるが、面と向かってそういうことを言うのは・・・アイドルっぽいな。
キャラ付けという奴だな」
「本当?」
「ああ、だがそのキャラ付けは危険でもある。
バリエーションが尽きると飽きられるし、相手を無駄に刺激して敵を増やしかねない・・・」
「別にいいじゃない。敵がどんなに増えたって!

私の歌唱力でなぎ倒すわ！（魅力で）」
「なぎ倒すか・・（物理で）確かに向かうところ敵なし、無人の野を行くが如しだろう」
「でしょ？（魅力）」
「ああ（物理）」
「だったらなんでも無いじゃない」
「だが、ファンはどうだ？ファンもなぎ倒すのか？
そうも行かないだろう。想像してみろ、ファンに嫌われた、予定が空白の自分のスケジュールを・・・」
「こ、怖いこと言わないでよね！」
「だったら、無意味に敵を増やさないことだな。
相手を怒らせず、且つ個性を発揮してみな。
おれの部下にそういう奴がいた。まあ、ある意味人気者だったぞ」
「・・・分かったわよ」
「それでいい・・・、シュークリームを作るときはクレープも作ってみるか？
味はかぶるが、食感は別だぞ。材料も大体一緒だしな」
「作るわ！お菓子作りが得意なアイドルになるのよ、私！」
「・・・まず歌の練習からしたらどうだ」

モードレッド編

「ということで、父上はオレを王であると認めなかったのだ。
だからオレは選定の剣を抜き王であることを示すのだ」
「ふむ、なるほど。筋は通っているな。
王が王たるは剣を引き抜き王であることを示したがゆえ、とするのなら、

お前が剣を引き抜ければお前も王にふさわしい器だ。
さしものアーサー王もそれを認めざるを得ない。
うん、確かにいい願いだな。直接王にしろ、よりはずっといい」
「だろう?
きっと父上も己の不明を恥じるに違いない。
ああ、お前を後継者にすればよかったと後悔するのだ」
「・・・」
「どうした?」
「いや、思い出したんだが、おれの世界にも選定の剣コールブランドは残っていた。
折れてはいない完全な状態でな」
「ほう」
「それを、おれの知り合いが使っていた」
「なんだと!」
「名前はアーサー・ペンドラゴン。自称アーサー王の子孫で、先祖にあやかった名前らしい」
「・・・先祖がアーサー王だからアーサーを名乗るだと!許しがたい!
それならオレがアーサーを名乗るべきだ!」
「いや全くだな。おれも先祖の名前をそのまんま名乗るのはどうかな?
と常日頃から思っていたんだ」
「・・・というか、誰の子孫だ?オレの末か」
「さあ、そこまで詳しくは・・・」
「まさか、嫡子であるオレを差し置いて、親類の子孫がそう名乗っているだけなのでは・・・」
「可能性はあるな・・・(公的に認められていない場合、嫡子なのか?)」
「そんな奴が王の剣を抜き、王になっているなど・・・許せん!」
「・・・そいつ、王じゃなくて兵士だぞ」
「・・・ファ?!」
「いや、本当だ。凄腕の剣士ではあるが、騎士ですらない。
おまけに元テロリスト、犯罪者だ」

「・・・カリバーンは折れてないのか?騎士道に反した行いをしているのに?」
「おれが見た限りでは、一度も。
ああそういえば、エクスカリバーは折れているぞ。
壊れて使い物にならなくなったので、デュランダルの補強に使っている」
「・・・」
「ちなみに、そっちを使っているのは品無し礼無し色気有りの女剣士だ。
当然王でもないし、ちゃんとした騎士でもない」
「・・・ふざけるな!」
「いや、そうだな。確かに言われてみれば酷い扱いだな・・どっちも」

「この兜は、生前母がオレの出生を隠すために作ってくれたものだ。人前ではずっとこれだったんだぞ?
ということで、今や宝具となったこの兜は、真名やステータスなどを隠蔽できるのだ!」
「ほう、地味だが堅実な効果だ。長期戦になる以上、真名の看破は避けたいしな」
「だろう?こんな便利な宝具は、オレや父上を差し置いて最強と呼ばれているランスロットも持っていないぞ!
ということで、このままの格好で食堂に行くとしよう。なに、このままでも食事はできる」
「だろうな。でなきゃ不便で仕方ない」

「その鎧装束は・・・おのれ、モードレッド!」
「・・・どうやら生前の知己のようだな。
考えてみれば、ずっと兜をかぶっていたならお前の知り合いには逆効果だったな」

「ぬぬぬ！優等生のガウェインか！」
「よくも反逆など！円卓の騎士の恥さらしめ！」
「ふん！
　恨むのならばオレを後継者に選ばなかった父上を恨むのだな！」
「ほざけ！貴様は王の器ではない！」
「父上と同じことを・・・！」
「・・・おい、二人ともそこまでにしろ。
　食事の場で言い争うなどアーサー王の品位も疑われるぞ」
「・・・失礼しました」
「・・・ふん！」
「・・・おかしい。
　サーヴァントの真名を隠すつもりが、即効で真名が公然とばらされてしまった」

ユリウスの悪手　1

一誠はＮＰＣである言峰神父から渡された次の対戦相手のデータを見て、
ほほを引きつらせていた。
彼は、かつて生きていた人間の情報を基に作りだされたただのＮＰＣである。
やあ、ここは始まりの村です。
というＲＰＧで村の入り口に立っている村人と原則的には変わらない。
ただ、その表情や台詞のバリエーションが豊富というだけのことだ。
しかし、一誠はこのデータを見てにじみ出る彼からの悪意にあきれざるをえなかった。
彼に渡されたユリウスの対戦データは、実に緻密だった。
本来は不必要であろう彼の対戦相手のマスターやサーヴァントのプロフィール、能力値や宝具。
更に、対戦前の会話すら記録されていた。
そんな、精緻な情報すべてに目を通した彼の従者、セイバーは眉をひそめていた。
というのも、決戦場の映像を何度確認しても、
一切ユリウスのサーヴァントが認識できなかったからである。
それは、いかなる理合によるものなのか。
ここまでの４度の戦闘の内容はすべて一緒。
試合開始早々に、ユリウスの前に立つサーヴァントが吹き飛び、そのまま即死しているのだ。
キャスターならば呪詛か、空間跳躍か。
アサシンならば迷彩か、不可視か、気配遮断か。
アーチャーならば遠距離からの狙撃か。
それとも・・・。
何れにせよ、こうして何度も映像で確認してすら敵の攻撃方法はわ

からない。
事前情報無しでの初見ならばなおのことだろう。
この情報を得たことは大きかった。これで勝算は大いに上がった。
少なくとも、セイバーはそう思っていた。しかし、一誠はそう思っていなかった。
なにせ、「対処できない」ということがわかったからである。
「奏者よ・・・どうしたというのだ」
「いや、その・・・」
一誠は、珍しく歯切れが悪い。
その脳内では、如何にして現状を打破すのか作戦を練っていた。
しかし、ある意味では既に結論は出ている。
「・・・無理だ。こいつには勝てない」
勝てない。軍人がいうべきではない言葉が口から出た。
それを聞いて、セイバーは怒りよりも驚愕が先に出た。
なぜなら、この攻撃の謎を解く、という過程をすっ飛ばして結論が出たからだ。
「・・・いいか、おれはユリウスのサーヴァントの真名がわかった。
その上で、まったく対処方法が思い浮かばない」
マイルームの椅子に座り込み、大きく脱力する一誠。
その表情はある種の諦めが支配していた。
一誠は、おそらくこの聖杯戦争に参加したあらゆるサーヴァントよりも広い見識を持っている。
だからこそ完全に敵の手の内を理解することができたし、だからこそ対処方法がないと結論が出たのだ。
もしも、言峰がそれと知ってここまで詳細な、慇懃無礼な情報を送ってきたのであれば感心するほどだ。
相当に、性格が悪い。
「まずサーヴァントの姿が見えない理由だが、これは中国拳法の奥義、圏境によるものだ」
天地と合一し、その姿を自然に溶け込ませることができる。
要するに、石ころ帽子だ。

この時点で、相手は仙術や妖術の使い手であることは明白。
生前の部下にこの術の使い手がいたからこそ、一誠は看破できた。

にゃ～ん（ハート）

問題は、対処方法がないということだ。
姿が見えないこと、相手を認識できないこと。これは戦場では非常にまずい。
その理由はいちいち明記するまでもない。
では、いかに対処するべきか。
方法は無数に存在し、しかしそのいずれもがセイバーには実現不可能だ。
剣以外の攻撃手段を持たない彼女は、
広範囲攻撃で薙ぎ払うことも、必中攻撃で認識できないまま攻撃することも、
或いは地雷のような設置攻撃もできない。
つまり、まず攻撃を当てることが難しい。
更に言うと、それを破ることができたとしても相手を倒せない公算が高い。
「でだ、おそらく生前その技能を持っていたとしても、
聖杯戦争でその能力を使うにはアサシンとしてのクラスを得ていなければおそらく使えない」
セイバーで召喚されたアーサー王は槍を持たず、
バーサーカーで召喚されたヘラクレスは弓を持たず、
ランサーで召喚されたティルムウッドは剣を持たない。
基本的に、サーヴァントは生前の技能を最大限に発揮できない。
であるからには、気配遮断の上位互換であるこの技能を使用できるクラスはアサシンであろう。
「つまり達人であり暗殺者で、且つ相手を一撃で倒すほどの威力。
二の打ち要らずの李書文以外にはいない」
それは、この聖杯戦争においてセイバーが戦ったことのない相手

だった。
武術家、つまり求道者。その生涯を武にささげた者。
今まで戦った相手は、海賊（武将）、義賊（犯罪者）、少女（天然）、王（武将）という具合で、
純粋に個人の戦闘に特化したタイプではない。
しかし、史に名を残すほどの個人としての強さを持った英雄李書文。
彼に、接近戦で勝利できる英雄はそういない。
少なくとも、術においては史実系では釈尊やプラトンぐらいだろう。
これは、もう完全に相性の問題だ。
武術家にとって苦手となるのは、軍団使役系の宝具や、乗り物を召喚するタイプの場合。
これらは完全に武術家の射程外だ。
もしくは大規模な破壊や、広範囲にわたる状態異常。
サーヴァントは無事でもマスターは危うい。
そのどちらにも対応できる可能性があるのが彼女の劇場だ。
そして、(正直効果はよくわからないが)劇場では透明化には対応できない。
結局、彼女は敵を武器で攻撃するからだ。
その手の届く範囲、武器の間合いにおいて武術家は無敵だ。
〝そうでなければならない〟
「そして・・・お前はあの御仁には勝てない」
セイバーはむくれるが、反論しない。己が主の発言は、そう的外れではないからだ。
彼女自身は万能の天才ではあっても、武術の専門家ではない。
凡俗ならば才気でどうとでもなるが、竜を殺したわけでもなく、軍を率いたわけでもない。
ただ強いという理由で史に名を刻んだ男に武勇で勝てるとは思っていない。
「・・・別に、無敵ではない。対処の方法はいくらでもあるだろう」

悔しそうに、断言する。
こなたが居れば、この学校ごと酸欠にして薬漬けにできるんだがな・・・。
と、思いながら。
「だが、彼に勝つことは俺たちでは無理だ」
しかし、あきらめたわけではない。軍人に、司令官にあきらめることは許されない。
隙はあるのだ。
例え自分とセイバーの二人がかりでもかの達人の上を行くことはできないだろう。
だが、マスターは別だ。自分を例外とすれば彼らは英雄でも反英雄でもないのだから。
「こいつだ」
一誠は映像の中のユリウスを指差した。
その顔色は、映像越しでわかるほど悪かった。
「おそらくこいつは病んでいる。
そして病はどうしようもなく人の心を蝕む」
一誠は射殺すような目で、ユリウスをにらんだ。
「付け入る隙は、ここにある」
でなければ、自分たちは負けるしかない。
一誠は、ここにきて初めて敗北を意識していた。
「ならば、その隙を見事についてみせようではないか！」
主の不安を拭うためにセイバーは己が剣を高らかに掲げた。
彼女は、ここにいたっても勝利を確信していた。
はっきりしている情報は不安要素だらけでも、負ける気などない。
だって、自分と奏者に不可能などないのだから。
その楽観に、一誠は微笑んだ。
そう、ここが戦場である限り、必然の負けなどありえない。

校庭の木漏れ日の中で、レオナルドとユリウスは視線を交えずに言葉を交わしていた。
「事前に、最も警戒していた二人。遠坂とラニは4回戦で相打った。残る強敵はもはやあのイレギュラーのみ」
「・・・」
ユリウスのその表情は、死の覚悟ではなく死の決意を固めていた。見るものが見れば、明らかに死相が見て取れた。
「必ずお前の手に聖杯を。俺は持てる限りのすべてをかけてやつを倒す」
「・・・御武運を、兄さん」
あまりにも短い兄弟の会話。それは、最後の会話であると双方が理解していた。
レオナルドは察していたのだ。おそらく、兄は全ての令呪を使用するのだと。
それは、勝敗がどうなろうと兄が死ぬことを意味していた。
ガウェインは、霊体化したまま彼に敬意を示した。彼こそ、忠義の騎士だと。

人通りのほとんどなくなった校舎内を行く黒衣の暗殺者。
死人のような白い肌、学校に似合わない装束。ただでさえ近づきがたい彼に、
ましてや決戦を前に決死の形相であるユリウスに話しかけるのは彼のサーヴァントのみ。
「そうは言うがな、ユリウスよ。あの手品の種は分かったのか？」
愉快そうに笑う声。しかしその姿は見えない。ユリウスにすら。
「問題ない」
この陽気な、とも取れる暗殺者の言動にはこの数週間で慣れた。仕事をこなしてきた、相棒。道具。相手を一撃で死に至らしめてきた魔人。
彼の技によって、彼は「戦う」ということすらなかった。ただ一方

的に殺すだけだった。
そして、それはおそらく今回もだろうと、ユリウスは考えていた。
というのも、あのイレギュラーはマイルームを一歩も出ないからだ。
もしも、あの宝具を無効化した手段が万能ならば、篭城などしない。
どのような条件かは知らないが、そこまで万能ではないのだろう。
ましてや、己がサーヴァントは宝具を持たない。
といっても、弱いのではない。それに代わる武芸を持っていた。
相性は、悪くないはずだ。そう、相性。
マスターがどんなにがんばったところで、
サーヴァント同士の相性はどうやったって覆せないのだから。
ユリウスは、この聖杯戦争に最初から優勝するつもりがない。
だからこそ、一歩引いた目線で状況を捉えていた。
そして、この聖杯戦争でマスターが成すべきことは「強いサーヴァント」を召喚すること。
それだけだと踏んでいた。
極端な話、自分のサーヴァントなら誰がマスターでもやすやすと優勝が狙える。
不可視、一撃必殺。よほど間抜けなマスターでも、問題なく勝てるだろう。
これがまったく無名な、しかも弱いサーヴァントならば。
或いは有名で強くとも、見ただけで正体や弱点が分かってしまえば簡単に負ける。
召喚されたのが正規の暗殺者ハサン・サッバーハだったら、
さすがに自分はここまで余裕はなかっただろう。
つまり、マスターに合せて英霊が召喚されるというのなら、
マスター自身の格でおおむねが決まってしまうのだ。
だとしたら、最初から優勝はレオナルドで決まっていた。
予選の時点で、サーヴァントが決まった時点でそれは明白だった。
ならば、こうして自分が駆け回っていることも無意味だろう。
ああ、なぜこんな「無意味」なことをするのだ。ムーンセルは。

まあいい。こんな、生きている価値のない自分など、あと一人殺しておしまいだ。
確実にしとめる為に、三画の令呪もすべて使う。
それで、自分の人生は完遂だ。ようやく死ねる。

「さて、そううまくいくかな」

その言葉はアサシン本人の希望だった。
強敵と戦いたいという、自分で修羅の道を選んだ求道者特有の感性。
同じ暗殺者であっても、それ以外の道がなかったユリウスとは相容れぬもの。
「あの小僧、そう簡単に死ぬとは思えぬがな」
「・・・お前の『无二打』は無敵だ。圏境も破ることはできまい。」
三画の令呪を使う以上敗北などありえないし、それ以上の作戦もまた存在しない。
自分で優勝する気がないからこそできる決死の作戦。
しかしそれは、ある種の楽観であり思考停止だった。
確かに、それ以上の作戦は聖杯戦争において存在しない。
だが、それは裏を返せば「最善の行動」ということだ。
最善の行動ほど読みやすい作戦はない。
思考停止に近いそれがいかに危険であるのか。彼は知っているはずだった。
だが、無双を誇るアサシンへの信頼が、ここまで戦いらしい戦いをしなかったが故の慢心が、
病魔への焦り以上に熟練の暗殺者ユリウスをなまらせていた。
だがもしも、この時アサシンの顔を見ていたのであればそれは拭えていたかもしれない。
ユリウスが言った圏境により、アサシンの顔は見えない。
それが敵にとってどれほど恐ろしいことなのかは説明の必要はないが、

この時マスターであるユリウスにもマイナスに働いていた。
武術家の嗅覚により強敵をかぎ分けた、
今まで見せたことのないアサシンの喜悦の笑みを見ることができなかったのだから。
百里を行く者は九十を半ばとす。
その言葉が、まさしく自分に当てはまっていることを、ユリウスは認識していなかった。

そして、気づいたときにはもう遅い。

ユリウスの悪手　2

強きこと、それが常に最善とは限らない。

アサシン陣営を脅かすこと。それ自体は一流のハッカーならばできなくはない。

対精神トラップにより、その体術を狂わせることで気配の完全遮断も封じることができ、无二打も弱体化できる。

サーヴァント同士の戦闘に介入できる、規格外のマスターである兵藤一誠。

彼よりも「強い」マスターは存在しない。だが、弱いマスターでもこの状況は覆しうる。

強きこと、それが常に最善とは限らない。

「まず、状況を整理しよう」

マイルームに備え付けの黒板に、戦力差を記入していく一誠。その手には、白いチョークが握られている。

セイバーは、行儀よく座り己がマスターの話を聞いていた。

「こっちの優位、あるいは武器だが・・・」

スキル、皇帝特権。宝具、黄金劇場。令呪、３つ。と、記入した。

どれも、強力な切り札である。

特に相手のスキルを模倣できる皇帝特権は、さまざまな状況をひっくり返すことができるオールマイティーな切り札だ。

だが、伝説の拳法家李書文を倒せるかというとその限りではない。心もとなくあった。

「まあ、こんなところだろう。正直、今回の相手にマスターであるおれが令呪以外で介入できるとも思えない」

一誠は、身の程をわきまえている。

そもそも、一誠は武術の才能があるわけでもないし、それのみに人

生をささげたわけでもない。
基礎スペックが大きく劣っている以上、武術の才能を持ち、その生涯をささげた達人と戦えるわけがない。
「で、あっちの優位点だが」
基礎スペック、優位。体術、中国拳法。体術、圏境。宝具?、无二打。令呪、3つ。と、記入した。
優位点の数だけでも、相手のほうが上であることは明白だった。
まあ、個人の武勇を競えば殺人鬼と皇帝では前者が圧倒的に優位なのは当然だ。
「・・・どうしよう」
一誠は、頭を抱えた。
チェスや将棋で言うところの詰みである。
スキルは、皇帝特権で相殺できる。中国拳法を極めている李書文のそのスキルを模倣すれば、圏境も見破れるだろう。多分。
だが、基礎スペックの差はいかんともしがたい。同等の体術ならば、力が上のほうが勝つのは道理だ。
令呪で補おうにも、向こうも同じ数のそれを持っている。
「セイバー、おれ、お前がサーヴァントでよかったよ」
「何をあきらめているのだ、奏者よ!」
とっくに死んでいるのにいまさら葬式ムードである。いささか遅い。
いや、決戦を前にしているのだからむしろ早いのだろうか。
しかし、自決の際に史実に残るほど潔くなかった暴君ネロはあきらめない。
ここまできたのだ、自分が弱いせいで負けるなどあってはならない。
「それに、余には「三度、落陽を迎えても」がある!」
そんな潔くないことを象徴するような、彼女の蘇生の技である。
「それ、蘇生するたびに殺されるんじゃないか?」
と、端的な結論で否定する一誠。
蘇生技を使う、殺される、復活する、蘇生技を使う、殺される、復

活する。
セルフイザナミとなるだろう。まあ、魔力が尽きるだろうが。
「ぐむ・・・」
「・・・正直な、今反省しているんだよ」
そういって、深くため息をつく一誠。その表情は、確かに沈んでいる。
思うところあるのだろう。心の中でここまでの戦いを振り返っていた。
マスターがへぼかった女海賊。どんな英霊なのか知る前に決着はついたが、しかしもしも相手が強力だったら、力押しなどできただろうか。
単独で襲い掛かってきた犯罪者。自分が先に攻撃したが、相手に接近戦の能力があれば、返り討ちになっていただろう。
少女の姿をした偶像。その姿を見ただけで、自分は意識を失ってしまった。
そして、ヴラドⅢ世。彼の間合いに飛び込んでいったが、あれはセイバー以上の膂力を持つもの相手にいささか無謀だったのではないだろうか。
もう、自分は死んでいて、相方も死んで久しい。聖杯に託す願いもない。負けても、失われるものはない。
明らかに自暴自棄だった。
いや、いっそ今を生きているものに道を譲るべきではないだろうか。
異界の死者が、この世界を生きるものを阻む資格があるのか。
中途半端だ。戦うならば最善を尽くして勝つ。道を譲るのならば潔く負ける。
そのどちらでもなく惰性で戦う。軍人にあるまじき中途半端な戦い。
複数の国をまたいだ連合軍の司令官を務めた者にあるまじき醜態だ。
「・・・もしも、あの神父からの情報がなければ、確実に殺されていた

だろう」
あの、魔人はそういう手合いだ。
まったく、そんなことにいまさら気づくとは。
「とはいえ・・・万策尽き果てたな」
互いに万全であれば、強いほうが勝つ。当然だ。
少なくとも、一誠にはこの状況を覆す策はない。
「・・・奏者よ！」
セイバーは勢いよく立ち上がった。その表情は憤慨している。
負ける、勝てない、相手は強い、こっちは弱い。
そんな、後ろ向きなマスターに彼女は耐えられないのだ。
「なにか、策はあるはずだ。余も全力で考える！
奏者も考えよ、勅令である！」
そういって、頭痛に耐えながらも思案するセイバー。しかし、その表情は思わしくない。
当然だ。
逆転の目があるとすれば令呪位だが、その使い方が難しい。
曖昧な命令では効果が薄まり、単純な命令ではこの状況を打破できない。
加えて、向こうも令呪を同数使えるのだ。
自分の持ち味を生かし、且つ向こうが令呪を使っても覆せない状況を作る。
無理だ。と、一誠は考えては『いなかった』。
『策』と呼べるほどのそれではないが、『賭け』はできる。
そう、あまりにも不確かだが賭けに勝てば勝負にはなる。
勝算は、あるのだ。不確か過ぎるというだけで。
ただ、一誠はその性格上賭けを好まない。だから、己がサーヴァントにその内容を言い出せずにいた。
彼女が堅実な策が思いつくのであれば、それが一番だからだ。
「・・・まあ、策が思いつかないのならば仕方ない。
まずは地道な対策を練るとしよう」
はっきりしていることはいくつかある。

それは彼の技の一撃でこちらは殺されるということだ。
セイバーにジークフリートやアキレウスのような守りがあるわけでない以上、それもまた対策を立てねばならない。
幸い、一誠は中国拳法に対する対処法は非常に詳しい。
「中国拳法の浸透勁に対する術を教える。
まあ、無効化できるわけでもないから、気休めだがな」
「そうか、いささか残念だがまあ前向きならばそれでよい。
しかし・・・」
セイバーは、不思議そうに一誠を見る。
「何ゆえ、奏者は術理だけでなく対処法まで知っているのだ」
彼が習得している空手に対する対処法ならば、その道の専門家ゆえに、と理解できるる。
しかし、まったく習得していない中国拳法への対処法など知っているのはおかしい。
「以前、中国拳法や仙術、妖術へのマニュアルを作ったことがあってな。その折に習った。
まあ、当然秘伝なんで、軍事機密なんだが・・・、死んだ後の、しかも異世界ならば問題ないだろう」
そういって、黒板に絵を書き始める一誠。
それは、人体のデッサンだった。しかもやたらとうまい。
「じゃあ、まず経絡の仕組みから・・・」
「待て！奏者よ！」
芸術家として負けるわけにはいかないと、その横に自分も人体のデッサンを描き始めた。
当然だが、彼女のほうが上手だった。
「・・・」
非常に得意げな彼女を見て、やや冷ややかな一誠。
そもそも、絵はあんまり重要ではないのだから。
とはいえ、ここで士気を下げることも好ましくない。
一誠は、彼女の金色の髪を優しくなでて褒めた。
「よく人体の構造を知っている絵だ。さすがだな」

「当然だ。余は為政者である前に至高の芸術家なのだからな」
その、得意げな笑みを好ましく思いつつ、こいつの治世はどんなものだったのか空恐ろしくなった。
まあ、ローマ帝国はこいつのせいで滅びているので結果からして明らかだが。

ユリウスは、マイルームの前で見張っていた。
もちろん、セイバー組が出てこないかを監視するためである。
その表情は、硬くも安らかだ。
勝算は十二分であり、経過も今のところ順調。
すでに完結している存在である英霊が、一週間足らずで強くなる道理もない。
である限り、こちらの勝利は揺るがない。
己が手に刻まれた令呪に目をやる。
もとより捨石になるつもりだったのだ。迷いなどあるはずはない。
この戦いでもって、辛くも長かった人生は完遂されるのだから。
血にまみれた人生も、これでようやく報われる。
弟が、彼女の息子が聖杯にたどり着く。
それだけが、彼に残された唯一の勤めなのだから。
いつも硬いその表情は、ほんの少しだけやわらかくなった。
しかし、その横で気配を遮断しているアサシンはそんなことなど考えていない。
いま、あの密室でどのような対策が採られているのか想像をめぐらせていた。
この、気まぐれのような二度目の娑婆で最後の敵。
一方的では困る。凡庸であっては困る。鼠であっては困る。
もしそうだったら楽しくない。
一撃で相手を倒してきたということは、つまり苦戦したことがないことを意味する。

つまり、彼にとって一度目の人生は退屈だったのだ。
強さを求めれば、戦いが楽しめなくなる。
武術家とは、足るを知らない求道家とはままならないものである。
マスターには悪いが、最後の敵は楽しい敵であってほしいものだ。
と、暗殺者の英雄は考える。

安楽な勝利による死を求めるマスターと闘争の中での勝利を求めるサーヴァントは、明らかな認識の差異があった。
それは、些細ではあるが敗北の原因につながりかねないものだった。
そもそも、仕事を楽しむというものは良い点と悪い点がある。
楽しむということは向上心があるということであり、しかし遊び心が生まれるということである。
具体的にいうと、背後で不意をつけているというのに、攻撃する前に話しかけるとか、
罠があると知っていても「ついうっかり」踏んじゃうような、致命的な遊び心が。
まあ、しかしそんな遊び心がなければ武術は極められない。
ままならないものである。

おまけのランサー編

「アイドルも面接とかあるのよね、その練習に付き合って頂戴！」
「いや、それは構わんよ。正直、生前は面接はよくしていたし。
まあ、アイドルじゃなくて軍隊への入隊希望者だったけど・・・」
「どっちも変わんないでしょ」
「・・・まあ、確かにな。というか、面接の練習よりも歌の練習、
さらに言うのなら基礎である音程とか音感の練習から入るべきでは・・・」

「何か言った？」
「いや、まあ本人が乗り気だし・・・。
なんでもない」
「じゃあ、お願いね、試験官さん！」

「・・・じゃあ、まず人はなぜ苦しむのだと思いますか？」
「それは、貴族である私をたたえるためよ！」
「なるほど・・・」
「・・・ねえ、これアイドルの面接で聞かれるかしら？」
「いや、おれは行く先々で真っ先にこれを聞かれたぞ。
世界のスーパーアイドル（教祖）たちに」
「それ、本当？」
「ああ、特にシッダールタさんや、ヨシュアさんには念入りに聞かれたぞ。
これを聞かずに人を雇うなどありえないらしい」
「そりゃあ、その人たちは聞くでしょうけど」
「ちなみに、おれは「強く求めるから」と答えた。
おれの部下たちはそれぞれ「弱いから」「理想とギャップがあるから」
「人間じゃないから良くわかんないけど、見てて楽しい」と答えたぞ」
「なんだか、最後の人とは話が合いそうだわ」
「うん、おれもそう思う」

おまけのモードレッド編

「購買で、焼き芋売ってたから買ってきた。
ほれ、熱いうちに食べようぜ」

「・・・なんだ、これ?」
「焼き芋だ」
「・・・これ、故郷の料理と似てるな」
「まあ、調理とか下ごしらえしてないからな」
「・・・美味いのか?」
「故郷の料理と同じって、ネガティブな意味なのかよ・・・」
「ああ、この時代と比べるとどうしてもな。
で、美味いのか」
「まあ、俺は好きだぞ。暗殺集団を率いていたころ、みんなでよくやったもんだ」
「どういう暗殺集団だよ・・・」
「いいから、食ってみろ。
百聞は一見にしかず、百見は一触にしかず。百触は一食にしかずだ」
「ああ・・・!」
「どうだ、美味いだろう。
これも農家の地道な品種改良の成果だな。
おれの生まれた国ではこういうのは特に盛んでな。
高級な果物は食べる宝石とも・・・」
「美味い!
・・・あの丘の戦いでこの味があれば、父上を倒した後国を簒奪できただろうに」
「・・・そこまで戦略的な価値はないと思うぞ」
「なんということだ・・・
世の中に・・・こんなにおいしい食べ物があったなんて・・・」
「そこまで感動しなくても・・・」
「言葉が探せない・・・オレは長い間バカげたことをいていたのかもしれない・・・」
「おい、どうした」
「・・・なあ・・・なあオイ・・・」
「本気でどうしたんだ!」

「もしこの戦争で負けて死んじまったらもう二度と・・・
こいつを食えなくなっちまうのか・・・なァ・・・」
「いや、お前もうとっくに死んでるだろ」
「何だか・・・
どーでもよくなってきたな・・・戦争なんて・・・
本当にうまいもん食うと・・・怒りや怨みがどこかに吹っ飛んじまうようだ・・・」
「流石にそれは困るぞ・・・」
「この料理・・・今度ガウェインにも食べさせてやりたい・・・」
「それは別にいいが・・・」
「ああ、父上にも今すぐ食べさせてやりたいよ・・・」
「いくらなんでも感動しすぎだろう・・ドンだけ食糧事情が悪かったんだ・・・。
お前の親との確執はそんな簡単なものだったのか?」

「いい湯だな～～。あれだ、月に温泉とは洒落てるな」
「ああ、そうだな」
「おまけに酒も飲めるとは・・。ムーンセルも分かってるじゃないか」
「オレも同感だ。湯に浸かってこうしてくつろげるとはな」
「にしても混浴があってよかった。お前、絶対女湯には入らないだろ」
「当然だ!オレは男なんだからな!」
「もちろんだ。おれもそう思っている。
だが、世間一般の人間というのはどうしようもなく見た目というものに囚われがちだ。
お前の性別を誤解する輩もいるだろう。むしろそいつらのほうが大多数だ。
そんな奴らともめていてはせっかくの風呂が台無しだ」
「・・・確かにな」
「お前の父親も、聖杯戦争中は案外こうした湯に浸かって疲れを癒しているのかも知れんぞ?」

「そんなことはない！父上は疲れたりなどしない！」
「・・・いや、疲れるだろう」
「父上を人間扱いするな、父上は騎士の王！
風呂にもトイレにも行かないんだ！」
「それは不衛生だな・・・」
「父上には、湖の乙女の加護がある！」
「関係ないだろ」
「・・・ある」
「お前、確信していないだろ・・・」
「・・・」
「まあ、いい。まあとにかく湯はいいものだ。
お前の父親だってこうした楽しみは知っているだろう。
案外、男やら女やらを引きずりこんで情事にいそしんでいるのかもな。
時代によっては男色も一般的だというし」
「父上がそんなことするわけ無いだろ！」
「ああ、すまんすまん。どうにも酒が入ると品の無いことを言ってしまうな。
今日はもう酒はやめにしよう」
「そうしておけ・・・。
まったく、そもそも父上は男だ！
男と風呂で情事などありえん！」
「すまんすまん・・・」

「フランシス・・・ドレイク？」

イギリス人であるウェイバーは、その名前を知っていた。

いや、知らないわけが無い。

侵略する為にイギリスを目指したスペインの無敵艦隊を打ち破った救国の海賊。

当時、二流の国に過ぎなかったイギリスを最強の国にまで押し上げた「偉人」。

その偉業ゆえに、母国では崇拝の対象にすらなった海賊。その偉業ゆえに、敵国から悪魔の竜とすら呼ばれた海賊。

そんな、教科書通りの情報が脳内をよぎった。

直後に、いくつもの疑問が頭をよぎる。

なぜ、女性なのか。アーサー王同様に、性別を偽っていたのだろうか。

なぜ、ライダーと名乗ったのか。いま、自分の前にいる大男こそライダーのはずだ。

なぜ、異常の起こった河へ向かおうとしている自分達を阻むのか。その異変の協力者だというのか。

「おい、ライダー・・・！」

己がサーヴァントに意見を聞こうと顔を見上げた。

しかし、その表情は未だ嘗てこの大男の見せたことの無い表情。

まさに茫然自失。さながら白痴のように口をあんぐりと開けていた。

こんな言い方はいっそ滑稽だが、まるで「幽霊」を見たようだ。

「フランシス・・・ドレイク・・・」

先ほど、己がマスターであるウェイバーと同様の言葉を吐き出す。

明らかに、マスター以上に驚愕していた。

「・・・海の果てを見た海賊」
呆然としたままつぶやくイスカンダル。
そこまでいって、ようやくウェイバーは合点がいった。
フランシス・ドレイクのもう一つの偉業。
それは人類史上初の「世界一周達成者」であるということ。

偉大なる英雄、征服王イスカンダル。
世界を征服せんと地の果てを目指した英雄。
当然、軍を率いた王であり、個の武勇はヘラクレスのような怪物退治をしたものや、李書文のような武を極めたものには劣る。
だが彼の本分は王であり、軍勢を率いて遠征をしたことにある。
故にこそ、強い弱いでなく「偉業を超える」英雄がいるとすれば、「二人」。
一人は、ユーラシア大陸の東の果てから西の果てまで、全てを「蹂躙」し「支配」した世界最強の騎馬民族の長。
征服王とは余りにも対照的な侵略者。現在に至るまで人類史上最大の帝国を築き上げたモンゴルの「大英雄」チンギス・ハーン。
もしも、神秘を抜きに考えれば、ただ如何に版図を広げたのかで語るのであれば、
この英雄はイスカンダルを遥かに凌ぐと言って違いない。
そして、もう一人。人類史上初の世界一周を成し遂げた「星の開拓者」。
海の果てを見た英雄、フランシス・ドレイク。
イスカンダルが地の果てを目指して「到達できなかった」英雄であるに対して、
エルドラゴは海の果てを目指して「到達した」英雄である。
征服と、航海。
その違いはあれども、成し遂げたという一点において優劣は明らかだった。

「へぇ、やっぱり有名なんだねぇ」
両手にクラッシックな拳銃を持った、顔に大きく傷のある女海賊。
フランシス・ドレイクと名乗った彼女は平然として二人の前に立っていた。
「アレキサンダー大王にそんな顔をさせるなんざ、私もたいしたもんだ」
心底愉快そうに、ケラケラと軽薄な笑い声をあげた。
重厚な声で笑うイスカンダルとは余りにも対極的だ。彼女の笑い声は余りにも刹那的過ぎる。
しかし、それも当然だろう。ライダーは英雄であり王。しかし同じ英雄でも彼女はどこまで行っても海賊だ。
明日も知れずに海へ出る、生粋の命知らず。それが英雄フランシス・ドレイクだった。
かなり距離があるにもかかわらず漂ってくる酒の臭い。戦場に立つというのに大酒を飲んでいたのだろう。
ある意味では想像するどおりの「海賊兼英雄」だ。
「で、どうするんだい？私はどっちでもいいけどねぇ」
そう、ここに至ってウェイバーは硬直から解けた。
そうだ、河で異変が起きている。それは明らかに魔術絡みであり、神秘の隠匿に反する行いであることは明らかだ。
そこへ向かわなくては。獲物となったキャスターがいるのかいないのかはともかく、魔術師として見過ごせない。
しかし、この謎のサーヴァントはそこに向かわせないと言った。
倒さなければ向かえない。しかし、勝てるのか？地の果てにすらたどり着けなかった英雄が海の果てにたどり着いた英雄に。
「・・・」
ウェイバーに見つめられる征服王の胸中や如何に。
彼の心のうちにはいくつもの言葉がよぎった。
しかし、その中でも最たるものはたった一つの「問い」。
自分が目指して得られなかった「答え」への「回答」。

海の果てはどんな景色だったのか

つい、口から出そうになった。それを慌てて飲み込む。
すると笑いがこみ上げてきた。
最初それはちいさな笑いだった。隣にいるウェイバーをして聞き取れないほどの。
しかし、それは突如として大笑いに変わった。王の、腹の底からの大笑いだった。
そうだ、聞くべきことはたったの一つだ。
海の果てを見た感想など、聞いて「満たされる」ものではない。
自分で成し遂げて確かめるべきものだ。
だから、今問うべきは・・・。
「貴様・・・本当にフランシス・ドレイクなのか?」
「そうさ」
「あの、世界を一周した?」
「ああ、その通りさ」
それだけ聞けば十分だった。その事実だけが彼にとって意味を持つものだ。「彼ら」にとってこの世のいかなることよりも重要なことなのだ。
「うぉおおおおおおおおおおおおおお!」
咽よ裂けろ、声よ枯れろ。しかし、この魂は叫ばずにいられない。
腹の底からの咆哮と共に、武装する征服王。
隣にいたウェイバーに尻餅をつかせるほどの覇気を伴って、凶暴な笑みを浮かべるイスカンダル。
今、彼は彼女を部下にしたいなどとは欠片も思わなかった。
自分の生きた時代の遥か後世に生まれた「先駆者」。
前人未到の大冒険を成し遂げた「航海者」。
征服王は、彼女を地の終わりと見た。
「昂ぶるぞ!おお、なんという幸運!

時の果てで、海の果てを見た者と矛を交えるとは！」
腰を抜かしそうになるのをこらえながらウェイバーは確かに見た。
その王の目が、少年の様に輝くのを。
まさに、王は挑戦者となった。彼の全てが歓喜で満たされた。
「そうだ、そうこなくっちゃ面白くないよ！」
その征服王を前に、海賊は高笑いをしながら銃を構える。
それを見たウェイバーは納得するしかない。そうだ、無敵艦隊すら蹴散らした海賊が臆するはずも無い。
どちらも引くはずなど無い。これが聖杯戦争。英雄と英雄の殺し合いだ。

「我らは！再び「果て」に挑む！」

抜き放った剣を掲げて、ライダー「イスカンダル」は宣言した。
これは挑戦であると、王である己が海賊風情に「挑む」のだと誇らしく断言した。
それは、相手への敬意に他ならない。
挑戦したからこそ分かる、その困難を乗り越えたものへの最大級の賛辞。
「行くぞ、勇者達よ！『王の軍勢』！」
突如として、夕暮れ時が灼熱の炎天に変わる。住宅地が、砂地に変わる。
そこは、イスカンダルとその部下が心に刻んだ大地。
そこに、隊列をなしたサーヴァントたちが王の背に続く。
征服王に率いられた勇者たち。ここはまさしく「彼ら」全員の心象風景そのものだった。
「・・・こ、固有結界！」
ウェイバーは魔術の奥義を眼にした。無双の軍勢を眼にした。そして今ライダーと共に、雷光の戦車に乗っている。
しかしそれでも不安に駆られていた。
勝てるのか？

そう、イギリス人である彼には、イギリスの英雄に勝てるヴィジョンが思い浮かばなかった。
その風体が征服王に比べて如何にみすぼらしくても、この熱砂の中で軍勢を相手に一人だったとしても。
フランシス・ドレイクという名前の持つ力に怯えていた。
そして、それこそが英霊の持つ力の本質でもあった。
強敵への予感。それは征服王も同じだった。
この酒の臭いしかしない品の無い女を、彼は強敵と見ていた。
「海賊を砂漠に上げるなんて、あんたもひどいねぇ！」
丘に上げられたにもかかわらず、相変わらず彼女は余裕だった。
それがやけくそなのか、本当は酔っているだけなのか。判別は付かない。
しかし、その彼女の背後で、虚空から無数の砲口が出現する。
それは、黄金のアーチャーが見せたような攻撃方法。
しかし、その量たるや比ではない。彼女を中心として左右に、地平線の彼方にまで続くようだった。
一体どれだけの魔力が注ぎ込まれているのか、想像もできない。彼女のマスターは本当に人間なのだろうか。
サーヴァントが如何に強力といっても、マスターの限界は当然存在するはずだ。
マスターへの疑問は尽きないが、その列を成す砲口からなにが発射されるのかは余りにも明白だった。
しかし、それでもイスカンダルは、いやさ彼の軍勢はひるまない。
「さあ、宵越しの銭は残さないよ？
弾も魔力も、出し惜しみなしさ。全部使い切るよ！」
「そうこなくてはな！
いくぞ、坊主！」
申し訳程度に話を振られたウェイバーは悲鳴を上げた。
「ああ、もう！
好きにしろよ！」
困難に挑んでこそ英雄。困難を突破してこそ英雄。不可能を可能

にしてこそ英雄だ。
王の軍勢は、勇者たちは突撃の号令を前に気を昂ぶらせていた。
一人一人の槍を握る手に力が込められる。
そんな彼ら同様に、いや彼ら以上に気を昂ぶらせたイスカンダルが全軍に向けて叫ぶ。
「我らが前に立ちふさがるは、無敵を沈め、太陽を落とした海賊エルドラゴ！
我らがたどり着けなかった、星の果てを見た偉大なる航海者！
相手にとって、不足は無い！
いくぞ、全軍・・・」
「さぁて・・・」
両ライダーが、攻撃を開始したのは全くの同時だった。
「突撃！」
「吹き飛ばすか！」
無数の兵が突撃し、無数の砲口から砲弾が発射される。
サーヴァントで構成された軍を召喚する文字通りの意味での対軍宝具『王の軍勢』は、
カルバリン砲の弾雨にさらされて尚意気高揚。
単独で黒煙と共に弾幕を張る悪魔の竜へ突撃を慣行する。
そして、その突撃の速度は明らかにカルバリン砲による殲滅力を大きく凌いでいた。
このまま行けば明らかに軍勢が彼女を轢殺する。しかし、そう容易くないことは、ウェイバーにすらすぐに分かったことだ。
なぜなら、彼女はまだ騎乗すらしていない。いや正確に言うのなら乗船すらしていないと言うべきだ。
彼女もまたライダーなのだから。
「さあ、ワイルドハントの始まりだよ！」
当然のように、彼女の宝具が展開される。

彼女の背後から、王の軍勢のように生前に率いたそれが出現する。
すなわち、無敵艦隊を沈めた悪魔の艦隊が。
荒涼たる砂の大地を海のごとく波立たせながら、無数の艦隊が王の軍勢に襲い掛かる。
そのことごとくが火で燃えていた。「火船」である。
彼女の代名詞、一隻の船に火をつけて使い捨てのミサイルのごとく突撃させる戦法。
魔力により再現されたその必殺の戦法は、突撃してくる軍勢を逆に轢殺せんと迎撃する。
しかし、徒歩で構成された軍勢の中から戦車が抜きん出た。
「一番槍はいただくぞ！」
己がマスターをのせた戦車で、雷光と共に火船を撃破し接近するイスカンダル。
その表情に迷いも憂いもありはしない。ただ、野望に燃える男の顔があった。
狂気とも取れるそれは、熱気に当てられたウェイバーにも伝染していた。
彼も、か細い声ながら突撃の咆哮に参加していた。
そんな王の突撃に続けと、カルバリン砲の弾幕と火船の突撃に吹き飛ばされながらも勇者たちは星の開拓者を目指して突き進む。
「そうだよ、そうこなくっちゃね！」
死をも恐れぬ軍勢を、一人相手にするフランシス・ドレイクはやはり笑っていた。
その楽観こそが、前人未到の海を越え世界を一周するに最も必要と言わんばかりに。
だが、彼女もまた軍略を操る。その表情は決して強がりではない。
彼女のマスターから供給される無尽蔵の魔力。その尽きぬ魔力を使い果たさんと、更に艦隊を召喚する。
ただし、己の背後からではない。上空からだ。
この英雄に、不可能を可能とする英雄に不可能など無いといわんばかりに、

世界の終わりのように、太陽を沈ませたかのように、無数の火船が燃え盛りつつ軍勢に、イスカンダルの戦車に襲い掛かる。
ことさらに、イスカンダルには船同士がぶつかるほどの密度で絶え間なく降り注がせる。
しかし、軍勢ももはや彼女を射程圏内に納めていた。
文字通りの火の海を、火の雨を越えた勇者たちの槍の投擲が、剣戟が彼女をめがけて襲い掛かってくる。
彼女は槍の投擲は両手の銃で、接近する兵には砲弾で迎撃する。
しかし槍の投擲は量が多く、また弾幕も密度が薄く受け切れはしない。
だが当たらない。
王の軍勢の宝具の評価が規格外ならば、彼女の持つ幸運もまた規格外だ。
当たるかどうか定かでない攻撃など、あたるはずもない。
そんなものが、世界一周という困難を乗り越えることができた彼女に到達するはずは無い。
いや、例え因果逆転の槍だろうと命中することは無いだろう。
不運という死神を追い散らし、幸運の女神のささやかな微笑を逃すことが許されない、
薄氷の上を渡るがごとき航海を完遂した海賊。
彼女を脅かすには、近づいて確実に殺すよりほかに手はない。
しかし、唯一彼女へ接近し攻撃できる戦車に乗ったイスカンダルは、密度を増していく火船に勢いを失っていった。
もはや、戦車に同乗しているウェイバーの眼には前など見えない。
ただ燃え盛る炎と瓦礫が見えるばかりだ。
だが、イスカンダルは確かに見ていた。目標である彼女を捕らえていた。

彼方にこそ栄えあり。

その体現者である彼女を、国家予算すら凌ぐ香辛料を祖国に持ち

帰った彼女を彼が見失うはずは無かった。
そうだ、やはり彼方を目指したことは間違いではない。
自分たちは至れなかったが、しかし間違いではなかった。
それを成し遂げた彼女を、うらやむことは無い。むしろ、よくぞ成し遂げてくれたと感謝してすらいた。
そして今はただ、挑戦したくてたまらなかった。
不可能を可能にした彼女。可能にできなかった自分。
しかし、今挑戦権が与えられている。
今ならば、あの時できなかった不可能を可能にできる。
戦車の持つ防御の結界を乗り越えて、燃える瓦礫が降りかかる。
それを剣で受けてなお前に進む。
征服者である王が、国を守った海賊に挑むという矛盾。

その突撃が、何分だったのか、或いは数秒だったのか。

気付けば、「王の軍勢」は解除され住宅地に戻り、戦車は消えうせ、己の体も地に倒れていた。
その脇で、小うるさくマスターが叫んでいる。彼もまたぼろぼろだった。傷こそ無いが、明らかに疲弊していた。
「おい、起きろよライダー！おい！」
叫びは無意味だ。既に征服王は目覚めている。もう夢は終わった。
二度目の生の終焉が見えた。
しかし、病死した嘗てと違いどこまでも心は軽やかだ。このまま地の果てを目指せそうだ。
「ああ、坊主。そんなに叫ぶな」
己が最強と信じる無双の軍勢は、無敵艦隊すら破った彼女の艦隊に敗れ去り、
耐久Ａの筋骨隆々たる肉体も、火傷や瓦礫の破片による裂傷でぼろぼろだった。
「ラム酒より効いたよ」
しかし、目の前にいるフランシス・ドレイクもまた無傷ではなかっ

た。
笑っているが、肩口から大きく切られて血が吹き出ていた。
その傷から見て、覚えはないが自分自身が成し遂げたようだ。
だが、どうやら自分と違って致命傷ではなく、消える様子は無い。
しかし、それでもイスカンダルも笑った。
「届いたか」
己が剣が、己が目標に文字通り「届いた」。
そのことが、その程度のことが嬉しくてたまらない。悔しくもあるが、嬉しさが先にある。
「此度の遠征、世界の果てに「届いた」か」
征服こそできなかったが、大きな進歩と言えた。
ライダーは、消えゆく体を惜しみつつ笑った。
「・・・次は、次こそは世界の果てをこの眼で拝むとしよう」
「・・・ああ、そうしな。いいもんだよ、あの景色は」
航海者、征服王。二人のライダーは視線を交わした。
共に見るのは、はるかな海原。
片方は実際に見た光景であり、片方にとっては見ることの叶わなかった光景である。
だが、同じ夢を見たことは確かだ。
思えば、征服王は同じ夢を持つ敵と戦ったのはこれが初めてではなかろうか。
「ああ、そうさな」
かろうじて動く手で、泣き崩れる己がマスターの頭をなでた。
「礼を言うぞ。
此度の召喚のおかげで世界の果てに届いた・・・」
「届いただけじゃないか！おまけに戦争からは脱落だ！バカ！」
かんしゃくをおこして、泣き叫ぶウェイバー。
しかし、本心から罵倒しているわけではないことは、よく分かった。
「・・・そう言うな、お前にはまだ人生がある。羨ましいことにな」
やさしく、一生分なでる。
「お前には、お前の覇がある。精進することだ・・・」

「ライダー・・・」
それを最期に、やかましくて主の言うことを守らなかったサーヴァントは消えてなくなった。
代わりに、傷を受けてなお笑う酒臭いライダーが残っていた。
おそらく、人を殺すことに何のためらいも持たない海賊が、悲しみに浸る暇さえ与えなかった。
「さて、あんたはどうする？」
私とやるかい？」
酔いどれ海賊は血まみれになりながら、やはり軽薄に笑いながら尋ねる。
彼女に雄雄しく立ち向かえたのなら、そしてライダーの敵を討てれば、一体どれだけ満たされるのだろう。
だが、そんなことはできない。やろうと思いもしなかった。
「いいや、断る」
ウェイバーは毅然として立ち上がり、否定した。
「僕がお前に戦いを挑めば、死ぬ。
こいつは、そんなことを望んじゃいない」
強がりであることは明白だった。
負ける姿など想像もできなかった彼にとっての「沈まぬ太陽」征服王すら、己が全てを奉げて尚一太刀あびせるのがやっと。
そんな英雄に、彼ができることなどありはしないのだから。
「だろうね」
ライダーは、酒臭くて品の無いライダーはウェイバーに背を向けるとそのまま歩いていった。
そんな小僧に、英雄は相手をする意味が無い。そしてこの海賊もまた、やり遂げて満たされていた。
「私はもう港に帰るよ。あんたもそうしな～」
そのまま、酔い覚ましの散歩のように住宅地をのんびりと歩いていくライダーを、
見えなくなるまで見届けると、ひざから崩れ落ちたウェイバーは、己の手の甲を見た。

令呪はやはりなくなっていた。
拳を握り締める。
肉体があることの証明のように、酷く痛んだ。

ユリウスの悪手　ＳＡＧＡ

１対１。決闘。タイマン。サシ。闘争の最小単位。
それにおいて、最も強いのは求道者。武術家。で、なければならない。
それのみに、人生を注いだ者達。だから、負けられない。
では、彼らと対峙したとき、それ以外の人種はあきらめるしかないのか？
前進しかできない香車の如き彼らの生き様。対峙するこっちは全方向に１マスだけしか動けない王。
戦場は、横に広がりはなく縦に無限の奥行きを持つ将棋盤。
最初から、詰んでいる盤面に指すべき一手など最初から存在しない。
あきらめるのか。それだけはできない。まだ、王は取られていないのだから。
ではどうするのか？
盤外戦術。これに尽きるだろう。
要するに、ルールに定められていないが、しかし『実行できる』一手。
・・・。
・・・。
・・・。
これは、賭けというよりはどちらかというと確認に近い。いや、戦場にルールを課した神を試す行為だ。
果たして、おれは生き残るべきなのか。
生者を排除して、死者が前に進むべきなのか。
そもそも、どうしておれはここにいるのか。
ルールを定めた者に問う。おれは勝ってもよいのか。
或いは、誰かを試す為の試金石なのか。それは、まさしく反英雄のなすべきことの一つ。
ジークフリートが龍を討って無敵となったように、誰かがおれを殺

すことで何かを得る為の・・・。
いや、アーサー王がモードレットに殺されたように、英雄を終わらせる為の・・・。
いずれにせよ、おれは知己に神はいても祈るべき神はいない。
そんな資格はない。

このルールを定めた月の聖杯に問おう。
果たして、生き残るべきは決死の生者か。あるいは、不屈の死者か。

だが、はっきりしていることは一つ。
これは1対1ではない。2対2だ。
たとえ、こちらの総力を向こうの一人で凌がれようとも、もう一人次第では覆せる。

そんなことを考えつつ、おれはマイルームのベッドで横になっていた。
もはや、明日は決戦。外はもう暗くなっているというのにセイバーは未だに作戦を考え続けている。
おそらく、妙案は浮かばない。だが、考えること自体は無駄ではない。
すくなくとも、月の聖杯の判断に身をゆだねる分の悪い賭けよりはましだ。
眼を閉じる・・・。
穏やかに眠りが脳を満たしていく。
気負いはない。恐れもない。あるのはただ・・・。
こんな気分は久しぶりだ。少年に戻ったようだ。

ああ・・・。

明日が・・・。

ビィーーー

この女に、論理的な言葉は無意味だ。そんなもので、止まるような慎ましい女ではない。

だからこそ、感情的な言葉こそ意味を持つ。効果がある。

「余の炎は、もう消えることはない。いかなる貞淑も焼き尽くすだけだ・・・！」

しかし、言葉は暴力の前に無力だ。

そう、いつだって自分の身を守るのはこの拳だ。武術の根幹は、護身に行き着く。

心身ともに戦闘体制へ移行する。心にほのかにあった彼女への性欲は消える。

認めよう。男として、雄として彼女の芸術的な肢体に眼を奪われた。だからこそ、それを遮断する。

シッダールタ様直伝、性欲オフ。

これもまた、静の気の有り様。いやこれこそが真の静の気なのだろう。

「セイバー・・・」

動の気を発している彼女の構えは、明らかにレスリング。タックルを狙い、立技ではありえないほど重心は低い。

陸上競技のそれにも似た、四つん這いに近い構え。

一旦組み付いてしまえば、どうとでもできると考えているのだろう。

それは、正しくて、間違っている。

「違う。余の真名は・・・ネロだ。そなたには、そう呼んで欲しい」

熱に狂った彼女の眼は、明らかに正常のそれではない。

その眼と股は、明かりの落ちたマイルームでもわかるほど、明らかに湿り気を帯びている。

「ネロ・・・」

そんな彼女に対しておれは六式ではなく、腰を落とした空手の構え。

なるほど、おれは組技はできない。最古の格闘技の一つ、レスリングは組技の極みの一つだ。

はるか、古代オリンピックでも行われていたそれ。
対する空手は、決して古い格闘技ではない。むしろ、圧倒的に若い武術だ。
インドで生まれたカラリパヤット。それが中国拳法の源流であり、それは琉球、沖縄に至り唐手となり、空手となった。
若い、或いは幼い武術といえるだろう。だが、体術に神秘は宿らない。源流にさかのぼるほど強いわけではない。
そして空手は全方位格闘術だ。決して、その術理はレスリングに負けることはない。
おれの呼吸に乱れはない。鼓動も正常だ。
「例え、死後であろうと・・・おれは・・・」
いや、死後だからこそ生き方は変えられない。
「余は・・・」
彼女が死んだ後も国が滅びた後も皇帝であるように、彼女であるように。
おれは、妻を愛している。
たとえ、『彼女』がおれの死後誰かのオンナになったとしても。
はるか時の彼方、年老いても・・・。枯れても・・・。
彼女と付き合ったことにたいした理由などなくても。
当時、なんだかんだ言ってハーレムを作っていた会長が羨ましくて、
彼女が欲しくて仕方なくて、誰に告白されても付き合っていただろうけれども・・・。
そんなことは些細なことだ。
「妻が・・・」
「そなたが・・・」
「「大好きだ！」」

先に仕掛けたのは、やはりネロ。
低い姿勢からそのまま低空タックルを仕掛けてくる。
流石の敏捷性だ。空手では避けられない。だが、迎撃は可能だ。
タックルの弱点は、弱点である頭部を晒してしまうこと。
そして、立ち技での攻略法は二つ。脚なら膝、手なら下段への攻撃だ。
ここは、組み付かれることを覚悟して手刀で迎え撃つ。狙いは無防備な後頭部だ。
しかし、考えが甘かった。万能の天才ネロの格闘技術を甘く見ていた。
しっかりと重心を低くしたおれの腰に組み付くや否や、あっさりと脚を取り、おれをひっくり返しにかかった。
そう、生前の俺ならばともかく、今のおれは限りなく弱体化している。
セイバーにあるまじき非力さのネロよりも更に力がない。
背中が床に付けば、もうどうにもならない。その熟練の技でおれの体は汚しつくしされるだろう。
だが、なんの問題もない。彼女の膂力はいかほどであろうと、技術がどうだろうと、体重差まではどうにもならない。
幸い上半身は何の問題もない。思いっきり身をそらし、床に貫手を突き刺しそこを支点にしてネロごと半回転する。
「軽いぞ、ネロ」
タックルの速度そのままに、ネロはマイルームの壁に上下逆さまに激突した。
体勢を立て直したおれは逆さまのまま動かないネロに残心を取る。
「・・・なぜ、追撃しない？」
下着姿で、ひっくり返っている彼女はいっそ滑稽ですらあった。全く笑えないが。
その表情は伺えないが、言葉からは更に熱気を感じた。狂気が加速している。
ダメージはないだろう。状況は悪化したのか。

いや、それでもおれは更に気を静める。
「おれの流儀は、空手だ」
もう組み付かせない。タックルに来ればその顔面に、カウンター気味に拳を叩き込んでやろう。
腰を落として、空手の構えを取る。
「立ったまま勝つのが、空手だ」
拳か、間接か。
打撃技か、関節技か。
ボクシングか、レスリングか。
空手か、柔道か。
剛か、柔か。
フィスト・オア・ツイスト。
異種格闘技戦に於ける、永遠のテーマの一つだ。
「・・・ならば、余も言おう」
その双眸に、怪しい、妖しい光を湛えてネロは笑う。
「余は、ネロだ!」
「ああ、おれの剣だ」
やはりネロが先に動く。再びの低空タックル。
だが、二度目とあればタイミングをつかむことはたやすい。
おれの下段突きがその顔面を確かに捉えた。
手ごたえはあった。だが、ネロの眼からは光は消えていない。
その手足が、蛇のように茨のようにおれの腕に、頭に絡みつく。
三角締めだ。
だが、学習能力のない奴だ。体重を考えろ・・・。
力任せに振りほどこうとする。
いや、天才がそんな安易な業を使うだろうか?
生前、組技への対策を習ったことがある。
その折に学習した。組技は蟻地獄のようなもの。一度はまったら即座に決められてしまう。
相手の狙いがわからない以上、ここは彼女の想定外の攻撃をするしかない。

そして、組技には一つ大きな欠点があると知れ。
もしも相手が凶器を持っていれば、組技は危険なものになってしまう。
だからこそ、野良試合や実戦では一旦組み付いたら即座に絞め落とすか圧し折るのが正しい。
そして、空手は五体を凶器と化す武術だ。
自由になっている腕で、ネロの柔らかな美脚をつかむ。
勝利を確信し興奮を増した彼女の眼が、更に笑みを深める。
しかし、色惚けをしている暇はないとしれ。この指は銃弾や刃物に劣らないのだ。
爪を突き立てるなどという生易しい、女々しい攻撃ではない。五本の指を脚に突き刺し、更に肉をむしらんと圧した。
流石に苦痛に歪めるネロ。だが、彼女は足から力を抜かない。
こうなると、こっちは絞め落とされてしまう。既に、息苦しくなりつつあった。
ならば、こっちも別の対応を見せるまで。
「鉄塊〝真王首〟」
首をバンプアップさせ、無理やり両脚の拘束を緩めさせる。
その隙間を利用して首を抜きさった。後は腕を引き抜くのみ。
だが、彼女も技を腕への関節技に切り替る。
そして、抜く暇もなく即座に折った。気分の悪い音が骨伝導で伝わってくる。
痛みは遮断できる。だが、組技が恐ろしいのはここからだ。腕一本の不利は致命傷に近い。
「もらったぞ、奏者よ！」
流れるような動きで、裸締めが入った。
腰に回った足にも万力のような力が、そして首に回った両手には大樹をへし折らんが如き大蛇の力が。
いかん、脚と違って腕での絞め技は落とすのが早い。立ったまま絞め落とされる。
再び、彼女の血でまみれた手で首をつかむ。

「無駄だ！例え何があろうと放さんぞ！」
いや、無駄ではない。
首をつかめれば、視神経をつかめる。空手の極意の一つ紐切りだ。
この状況で片目の神経を奪っても効果はないだろう。だが、生きている神経を切られるその痛みは、最大級。
おれは、視神経を引きちぎった。
「・・・無駄といったはずだ」
静かに、皇帝は宣言する。激痛は凄まじいだろうに、力は全く抜かれない。

ああ、だめだ。

いしきが・・・

らら・・・。

月の聖杯戦争にセイバーとして召喚された、ローマ皇帝ネロ・クラウディス。
伝説と違い、その姿は美しい少女だった。
しかし主との戦いにより、その至高の芸術は傷だらけとなっていた。
己が血で片足は赤く染まり、まともには動かない。
首は視神経が抉られ、痛ましくなっている。
更に、貌は空手の拳によって腫れていた。
しかし、それでも尚彼女は美しかった。
天上の美しさは、満身創痍でなお一掃際立っていた。
それは、内に秘めたる情熱ゆえか。
「奏者よ・・・」
絞め落とした獲物、自分のマスターをベットに寝かせた。

当然寝巻きは脱がせ、下着だけになっている。
その片腕は肘がいびつに折れ、顔は白目をむいて気絶している。
ああ、ようやく余のものになるのだな。
これが最後の夜になる。そう思ってしまった彼女は、秘めていた思いを爆発させたのだ。
その全てを欲する余りに、暴君として体を奪おうというのだ。
またがり、貌を近づける。まずは、その唇を奪う。
段々と、加速していく動悸を抑えつつ眼を閉じた。
しかし、その彼女はとっさに起き上がった。

大雀蜂だ。

激しく大顎をかみ合わせ威嚇する大雀蜂が彼女の脳内にイメージされたのだ。
「奏者よ・・・」
愛が転じて憎しみすら抱き、絞め落として意識すらないはずの一誠を睨んだ。
「気を失って、尚・・・余を拒むのか」
両手でその顔を固定し、肉食獣のように貪らんとした。
もはや、そうせざるを得なかったのだ。
大雀蜂の幻像は尚彼女を襲っていたが、しかしそれでも彼女はひるまない。
ただひとえに唇を求めた。

そのとき、いかなる現象か。気絶したはずの一誠の、健常な腕が激しく動いた。

その手は、酸欠によって気絶した脳に代わって魂を守らんと、一本指貫手を作り無防備なネロの、その耳穴を穿った。
それは、視力の残っていた眼の死角から完全に不意を打ち、脳に届き意識を奪った。

そして、彼女は唇すら奪うことなく、しかし気を失ったことで彼の体に覆いかぶさり肌を重ね合わせた。

それだけが、この夜の成果だった。

かくて、打撃技と関節技の対決は、主従の対決は引き分けで終わった。

いや、一誠の勝利だった。

彼は気絶して尚、暴君から尊厳を守りぬいたのだ。

戦士たちよ、今は眠れ。

翌朝の、本番の為に。

ユリウスの悪手　3

腕の激痛と共に眼を覚ます。
眼をやれば、明らかに関節技によって破壊された自分の腕。
そして、そのおれにのしかかっているセイバー。彼女の耳と首からは血が流れていた。
清潔なシーツのベッドは、その一部を血で染めていた。
見るものが見れば、情事の後にも見えるだろう。
まあ、少なくとも彼女はそのつもりだったに違いない。
「・・・まいったな」
言ってしまえば、おれの判断ミスだった。
確実性が欠けているとはいえ、あてがあるにもかかわらずそれを告げなかったこと。
それが彼女の暴走を招いてしまったのだ。
外を見ると、日が昇るどころか既に夕焼けとなっていた。
まもなく、決闘の刻限である。
ため息をつく。
知っていたはずだ。彼女がどういう人間だったのか。おれのことをどう思っていたのか。
知っていて、放置したのだ。結果はこれだ。笑えない。
慢心していたと反省した矢先、この様。
生前だったらもっとうまくやれていたのだろうか？
いや、そんなことはあるまい。最初から、おれはこの程度の器だったということだ。
まあ、生前だったら力づくでねじ伏せていたが。
やはり、思うに聖杯戦争の最大のゆがみというか不合理は主人よりも奴隷が強いことだ。
規格外に強いおれですら、幸運に恵まれても相打ちがやっと。
他のマスターだったら心身ともに彼女の虜になっていたに違いない。
戦闘や肉体を維持するための魔力供給だの、既にこの世に存在し得

ない矛盾を解消する為の楔だの、３回だけの絶対命令権だの。
そんなものは、史に名を残した英雄や反英雄に一体どれほどの意味があるのだろうか。
おそらく、肉体的には最弱のキャスターですら魔術師をくびり殺すなどたやすいだろう。
自害せよ。その一言さえ言わせなかったはずだ。
いや、何よりも精神が汚染される。
騎士道だの覇道だの、この時代に存在し得ない価値観に感化されてしまう。
別に、彼らの価値観を否定するつもりはない。
近世の人間からすれば不合理きわまる生き方も、その時代には必要だったのだ。
だから、名前だけでも形骸だけでも今存在しているのだ。
民間人への無駄な殺戮を避け、民衆からの支持を集めやすくし、効率よく搾取する為だったり、
或いは、内政の失敗をごまかす為に共通の目標や敵を作る為だったり。
それは、その時代にとって、国体を維持するために必要だったのだ。
だが、もう滅びて久しい。
鎌倉時代の武士は、名誉のありか、或いは報酬を確実に受け取る為に高々と我はここにありと叫んだ。
今は、特撮のヒーローぐらいしかしていないことも、つまり給料に直結するから存在していたのである。
しかし、全く違う価値観を持っていた元寇には、モンゴル軍には全く機能しなかった。
当たり前だ。まず言葉が通じない。
つまるところ、同じ時代ですら国が違えば、それこそ海を隔てただけの近い国ですらそうなのだ。
１０００年以上前の『偉人』の価値観が、通用するわけもない。
だが、彼らはその生き方を全うしたのだ。つまり、そのまま死んだのだ。

おそらく、根本的なところで話がかみ合わない。

しかも、彼らは例外なくかっこいいのだ。

極めて論理的に、頭では英雄の語る言葉を否定しようとしても、感情的にはつい、心のどこかで気を許してしまう。

その実直に、愚直に、威光に、威圧に。

気付けば、7人で争う程度のちっぽけな戦争など放り出してしまうものもいるだろう。

彼らに臣下の礼を取ってしまうものも現れかねない。

自分の、この時代での生き方が恥ずかしくなって。自分が矮小に見えて。

全く持ってばかばかしい。英雄とはそんないいものではない。

少なくとも、この時代に適合している社会的な人間は、彼らに関わるべきではないのだ。

まあ、魔術師が時代に適合しているかといったら、それは違うのだが。

「・・・」

むくりと、寝ぼけ眼で顔を上げるセイバー。

しばらく、自分の置かれている状況を理解しようとおれの肌を撫で、そして思い出したのか申し訳なさそうな顔をした。

暴君にあるまじき、殊勝そうな顔だ。おれに嫌われたらどうしようと思っているのかもしれない。

それが演技なのか、見分けるすべをおれは持ち合わせていない。

なので、一言だけ聞く。

「なにか、言うことはあるか?」

「・・・すまぬ」

暴君は、おれにのしかかったままそう言った。

そう思っているんだったら、さっさとどけ強姦魔。

「・・・色々考えたのだが、万能の天才である余の頭脳をもってしても回答は得られなんだ。

そうしているうちに最後の夜となってしまった」
「で、おれとまぐわおうとしたわけだな」
「うむ」
うむじゃねえよ。
何が悲しくて、ガチのパンツレスリングを決戦前にやらなければならないのだ。
しかも、部下と。
ため息が出る。
唯一の部下が、こんな色狂いなのだ。そりゃあため息も出るさ。
だが、まあ未だにおれの肉体をいじることをやめないサーヴァントを許すのもマスターだ。
というよりも、おれには彼女をとがめる資格はない。
相手の合意を得ない夜這いは、つまるところ強姦だ。
しかし、彼女は元よりそういう英霊だ。『知って』いて契約を続けていたはずだ。
更に言うのなら、『殺人鬼』が『強姦魔』をとがめるなど滑稽だ。
むしろ、ふさわしい主従といえよう。
「ネロ」
真名で呼び、無事なほうの腕で彼女の頭をなでる。くすぐったそうにそれを受け入れる彼女は、
とてもではないが史にその名を刻む偉大なる帝国の皇帝とは思えない。
しかし、厳然たる事実として彼女は皇帝であり、国を治めそして、滅ぼしたのだ。
その彼女の胸中を思うと、おれは、誠に身勝手ながら敬服せざるを得ない。
もしも、自分が彼女のように『失敗』をしてしまったら、おれはそれを受け入れることができるのだろうか。
背筋を伸ばして、生前のように振舞うことができるのだろうか。
まあ、それはさておいて。今度はおれが謝る番だろう。
おれのいらない思惑が、彼女を暴走するまで追い詰めてしまったの

だ。
「すまない。おれは君に一つ隠していたことがあった」
不思議そうに、見つめ返すセイバー。その表情は、あどけなささえあった。
「アサシンを倒す作戦はある」
「なんと！」
心底驚いたようで、おれの体から身を起こす。
するとベッドが揺れ、折れている腕が痛んだ。まあ些細なことだが。
「流石だな、余を凌ぐ頭脳を持つとは・・・なぜそれを余に隠していたのだ奏者よ・・・」
喜びが転じて怒りとなり、憤慨した。
彼女はベットで寝転ぶおれに覆いかぶさる形で四つん這いとなり、唇が触れるほどの距離まで顔を近づけてくる。
「返答次第では、わかっているであろうな」
彼女は美しい指で、おれの体を撫でる。
どうやら、つまらない理由ならパンツレスリング２Ｒが開催されるようだ。
「あまりにも、不確か過ぎる作戦でな。盟神探湯に近い。
おまえがいい作戦を思いついてくれれば、言うつもりもなかった」
「ぬうう・・・」
「結果的に追い詰めてしまった。許してくれ」
「・・・余のことを怒っていないのなら、許す」
膨れっ面で、ぷいっと視線をそらすセイバー。
最初から怒ってなどいないのだが。
生前の部下の行いに比べれば、被害がおれに収まっている時点で可愛いものだ。
生前の部下はそりゃあもう酷かった。
陛下から拝領した屋敷は、週に一度は半壊したし、領地はほぼ毎日地図の書き換えが必要だったし、
お偉いさんから預かったご子息に危険な修行を課すし、よく思いつ

きで孤児院を買収したり勝手に作ったり、
宿舎の男湯に自分の女を大量に連れ込んだり（もちろん裸）・・・。
あれ、思い出したら涙が・・・。
「もちろん、怒っていないよ」
「そうか・・・では、その作戦で余は何をすればよいのだ?」
「そうだな」
何もする必要はない。
そういいかけた口を閉ざす。
そうだ、やってもらうことが一つだけある。
「おれを、信じてくれ」

熱帯雨林を思わせる決闘場。
ユリウスの元に、ほんの数分遅れて現れたセイバーとその主。
赤いセイバー。レオのサーヴァントであるガウェインとは余りにも対照的な少女。
ローマ帝国を滅ぼした暴君、ネロ・クラウディス。聖剣に関わる伝説もなく、武勇も取り立ててない。
本来、セイバーとしての適性を持っているのかどうかさえ怪しいものだ。
その主、この聖杯戦争において、最大のイレギュラー。
本来、サーヴァントとして召喚されるべき英霊が、マスターとして登録されている異物。
正体不明の自称反英雄、兵藤一誠。
彼はいつになく決然とした表情で口を開いた。
それに従うセイバーは、珍しく無言だった。自分は脇役であるといわんばかりに。
「ユリウス殿と、アサシンのサーヴァント、李書文殿とお見受けします」
少年は、震える拳を握り締めてなお毅然としていた。

その表情を、ユリウスは一度として見たことがない。
この聖杯戦争中においてではない。短い生涯において見たことのない顔だった。
いや、違う。ガウェインだ。彼は、時としてこの表情をすることがあった。
レオの、自分の主を守るために、障害を討つときの彼は、こんな表情をしていた。
この顔をできる男が、反英雄だと？
決して、歴史に名を残すことのない自分の生涯。望むことさえ許されない生来の病。
謙遜ゆえにそう名乗っているのだとしたら、怒りすら覚える。
騎士の鑑、短い付き合いの中ですらわかる高潔な太陽の騎士。そんな彼と同じ表情ができる男が反英雄であろうはずがない。
その苛立ちを抑える。最後の仕事、しくじるわけには行かなかった。
だが、アサシンは自重しなかった。
「ほう、儂の真名を見破りよるか」
愉快そうに、姿こそ見せないものの愉快そうな声がどこからともなく聞こえてくる。
真名が明らかになったことは、正直ユリウスは驚いていない。
少々の知識があれば、その正体を推察することはできるはずだからだ。
というよりも、監督役が渡したという情報に、真名が入っていることすら視野に入れていたのだから。
とはいえ、だというのにこうも落ち着いているのは解せない。
船上の扇に当てる必中の弓も、心臓に突き刺さる因果逆転の槍も、千軍を薙ぎ払う剣も、罪人を裁く杭も、魔力を奪いつくす庭園も、彼女は持っていないはずだ。
未来予知に等しい直感も、戦闘論理から来る心眼も、気の運用を極めたことによる穏行の看破も、不可能なはずだ。
できるのだとしたら、ああも露骨に引きこもっていないだろう。

だとしたら、その自身の根拠はなんだ。
確実に勝てる。その思いは変わらないが、ブラフでないとしたら脅威だ。
アサシンに待機の指示を出す。
意外にも、それをあっさりと受け入れるアサシン。
どうやら彼も警戒している、いや楽しみにしているようだ。
「おい」
はたと、あることに気付くユリウス。
兵藤一誠の右腕だ。明らかに何がしかの重大なダメージを負っている。
あの主従は部屋に引きこもっていたはずだ。そのことは確認している。
「その腕はどうした」
彼らしくもなく、つい、聞いてしまった。
これも、何かの策なのかと。
「なに、ドーナツ作りに失敗してな」
臆面もなくそういいきると、折れた右腕に刻まれた令呪を輝かさせる。
来るか。
当てろ、と命令すればこっちは避けろと、そう命令すればいい。
「・・・令呪をもってネロ・クラウディスに命じる」
「うむ」
事前に打ち合わせをしていたのだろう。彼女は戸惑うこともなくそれを受け入れる。
しかし、なぜだろうか。彼女は剣を構えようとすらしない。
それが、逆に不安を駆り立てる。一体何をするつもりだ。
少年は、決然とした表情で命じた。

おれと、代われ。

その言葉の意味を理解する暇を与えず、言い切った直後、莫大な魔力の風が周囲を満たす。

それ自体が攻撃であったと錯覚するほどに、決戦場全体を激しく揺さぶった。

およそ、防御に関しては長じているといえないアサシンは、その剛風の前には耐えるしかなく、

マスターであるユリウスは吹き飛ばされないように身をかがめるだけで精一杯だった。

「賭けだった」

収まりつつある風に代わり、全く別のものが周囲を威圧していく。

何が起こっているのか、全く把握させないまま、一誠の声が風の轟音をかき消してユリウスの耳に届いた。

「こんなむちゃくちゃな命令が、できるのかどうか」

命令は、単純であればあるほど有効に機能する。

であれば単純に『代われ』と命令することは理屈の上では可能なはずだ。

本来は無意味だが。

なにせ、マスターがサーヴァントよりも強くなければ意味がないからだ。
「できても、これが使えるのかどうか。全くわからないからな」
体の震えが止まらなかった。
病から来るものではない。これは純粋に恐怖からだ。
目の前に出現した『それ』に対する恐怖。
幻想種の頂点に君臨する存在、龍。
その血を浴びただけで、ジークフリートは不死身になった。
その因子を得ているだけで、アーサー王は破格の力を得ていた。
あらゆる神話に存在する数多の龍。その中でも限りなく頂点に近いもの。

全知全能である聖書の神をも凌ぐ力を持った二天龍。赤龍帝ドライグと白龍皇アルビオン。

そのうち、倍化をつかさどる赤の龍。その魂を継ぎ、原典を超えた男。
それが、劣化に劣化を重ねているとはいえ決然として決戦場に出現した。
「生前、中国拳法の達人に圏境の見破り方を尋ねたことがある」
荒れ狂う風が収まると同時に、少年だったはずの、マスターだったはずの『セイバー』は、
わずかにその面影を残すだけの、プロミネンスを纏い赤い鱗に総身を覆われた龍人となっていた。
その異形に、5回戦まで勝ち残ったユリウスをして恐怖を隠させなかった。
蛇に睨まれた蛙のように、至近距離で肉食獣を認識した草食獣のように、逃走する気さえ与えなかった。
その言葉だけで、意思だけで世界を焼き尽くさんばかりの威圧感を放つ彼は、
先ほどまでと何も変わらない表情でアサシンを『視認』した。

「答えはこうだった。見破る必要など無い。天龍にそんな些細な小細工は意味を成さない、と」

自分の傍らで月海原学園の制服に身を包み、へたり込んでいる元セイバー、ネロの頭を撫でると、

一歩前に歩み出た。

それだけで、決闘場の空気が吹き飛ばされるようだった。

それだけで、ユリウスの心臓は早鐘のように爆発するかのように激しく鼓動した。

必死で呼吸しているのに、酸素が、全く脳にいきわたらない。

ダメだ。勝てない。

極めて純然たる事実として、己がアサシンは人殺しではあっても龍殺しではない。

時の果て、他のいかなる伝説が失われようと、それを成しただけで人々の心に記憶され続ける、偉業の中の偉業。

すなわち、それ単体で伝説に名を残させるもの。それが龍殺しだ。

ましてや、伝説の剣を持たない史実の、近代の拳法家が勝てる相手ではない。

ガウェインですら、勝てるのかどうか。

ダン！

その絶望を、たった一度の震脚が吹き飛ばす。

幻想の頂点の、さらにその頂点である怪物を前にして、たった一人の拳法家は意気高揚だった。

「虎かと思っていたが・・・、龍であったか！

うむ、こうでなくてはな！あらゆる時代から英傑が集っているのだ、龍ぐらい居らねばな！」

武に生き、武に殉じた彼の在り方は、ここに至ってもなお損なわれることはなかった。

歓喜。

強がりでもなく、自棄になるでもなく、ただ単純に拳を構える。い

つものように。
「・・・正直、申し訳なくも思います」
少年の面影を残した龍人は、決然とした表情のまま、更に歩を進める。
最初は１０ｍはあった彼我の距離はいつの間にか半分にまで減っていた。
「己が体の、武のみでここに立つあなたに、道具に頼りすぎるおれが未熟な身で立ち会うこと、それ自体が」
「なに。気に病むことはない。武術家が、こうして向き合っているのだ。そこに卑しさなどあるまいよ」
自然災害すらも凌ぐであろう幻想を前に、たった一人の拳法家が対等に向き合う。
その勇気に、あり方に改めてユリウスは理解する。
この男も、また英雄なのだと。
「そうですか・・・そう言っていただけると、少し嬉しいですね」
気付けば、両者共に完全に間合いに入っていた。
竜人であること、八極拳の使い手であることなど関係ない。
一足の間合いに両者は踏み入れていたのだ。そこは完全に死域であった。
「ユリウスよ、何をしておる」
視線を向けることもなく、アサシンは促した。
そう言葉をかけられて、ユリウスはようやく自分が死んでいないことに気付く。
「流石に、殺人鬼では龍は討てぬ。ほれ、令呪はどうした」
背中を押すはずの相手に背中を押されて、ユリウスは己を振るい立たせる。
拳を握り締めて叫んだ。
「令呪をもって命じる！
この一撃に全てをかけろ！」
「応よ！」
これまた、単純な命令。

更に言うのであれば、サーヴァントの在りようを肯定するこれは、まさしく最大級の効果を発揮した。

莫大な魔力がアサシンの全身に駆け巡る。

「重ねて命じる！

宝具を、无二打を使え！」

「応よ！」

更に重ねられる、単純にしてサーヴァントの嗜好と合致した命令。

この時点で、アサシンは確信していた。この一撃は生涯を通じて最高の一打になると。

しかし、更に命令は加速する。

「更に重ねて命じる！」

「何？」

ユリウスは、最後の令呪を使用した。流石に、これには予想外だったのだろう。

龍人の表情が驚愕にゆがんだ。

それを見て、ユリウスは不敵に微笑んで見せた。

「その男を、殺せ！」

出生の折、祝福されることのなかった暗殺者は、人生の総決算となるそれを叫んだ。

命じられるまでもない。アサシンは、全力で応えた。

「カカカカカッ！応よ！」

舞い踊るように、気を高めていく李書文。

「全身全剄、陽気を巡らす――！」

それを見て、セイバーとなった一誠は確信する。この一撃は自分の命を奪いうるのだと。

こちらも秘技、奥義の限りを尽くさなければならないのだと。

全身の武者震いを抑え、歓喜にゆがむ顔を無表情で取り繕う。

「内側に凝縮する静の気の内に、外側へ爆発する動の気を注ぎ込む」
両手で、大きく円を描き、相反する両方の気を操り始めた。
それは、人体というビンの中に爆竹を入れるが如き無謀。気の運用における、禁じ手の中の禁じ手。

「静動轟一！」

威圧感を更に加速させ、龍人もまた渾身の一撃を叩き込まんとした。
そう、この男の武術、空手の掲げる看板もまた一撃必殺。
言葉は違えど、この一撃にこそ真髄がある。
サーヴァントになってすら、なお完治していない右腕をだらりと下げ、腰を深く落とし左拳を腰の高さに構えた。
それは、さながらこれから左正拳突きを打ちますよ、といっているかのような構えだった。
それを見て、更に歓喜を深めるアサシン。一目で、その術理を看破した彼は尚技を加速させる。

「おれが、こうして立ち会うことをどれほど心待ちにしていたのか、それを語る時間はないようですね」

「うむ、惜しい。しかし、なんと贅沢なことか」

「ええ、おれの武が勝つか。あなたの武が勝つのか」

「その答えは、単純至極」

「「どうせ、一撃だ」」

聖杯戦争の戦最中、二人はもはや一切の事柄を脳内から排除していた。

あるのはただ、目の前の相手を葬ることのみ。

空に浮かぶ万能の願望機、ラプラスの魔、有史以来世界を観測し続けてきた異文明の構築物ムーンセル・オートマトン。

その所有権を賭けた、現在を生きる電子の魔術師たちの戦争。

舞台は、霊子虚構世界「ＳＥ．ＲＡ．ＰＨ（セラフ）」。

嘗て行われていた聖杯戦争を模して行われるそれは、月の聖杯戦争。

全部で7回行われる決戦の内、これは5度目にすぎない。

だが、もはやそれは両者にとって全く意味がないものだった。

まるで、この両者の対峙こそがこの戦争の意味であるかのように。

そう錯覚していた。

それを見守るユリウスと、ネロも全く同様だった。

まるで、この二人を対決させることこそが、自分達の使命であったかのように。

そして、それを完遂した今、彼らは観客になることしか許されない。

否。

それを見届けることこそが、真の使命であった。

「その体技、竜の鱗を砕き、竜の肝を潰し、その魂を刈り取る・・・」

「我が八極に二の打ち要らず！」

空手と八極拳。

共に掲げた看板は、二の打ち要らずと一撃必殺。

「滅龍奥義・・・二重金剛！」

「七孔噴血・・・・・・撒き死ねい!!」

勝つのは、どっちだ。

ユリウスの悪手　4

アサシン、李書文。
筋力Ｂ　耐久Ｃ　敏捷Ａ　魔力Ｅ　幸運Ｅ　宝具なし
中国武術Ａ＋＋＋　圏境Ａ
本来非力であるはずのアサシン、という点から考えれば「破格」のサーヴァントである。
少なくとも、三騎士以外では彼と接近戦で打ち合うことはできないだろう。
ステータスから見てもわかるとおり、接近戦に長じたサーヴァントである。
いや、正確に言うのであればそれのみに特化した、という一芸特化型のサーヴァントである。
体術を極める余り、それはもはや仙術の域に達し、気配の完全なる遮断を可能にしていた。
が、それはあくまでも対人戦。個人戦に特化していることを意味する。
１対１の戦いにおいて、無双の強さを誇る求道家は、果たして龍を討ち取りうるのだろうか。

対するセイバー、兵藤一誠。
筋力Ｂ　耐久Ｂ　敏捷Ｂ　魔力Ｄ　幸運Ｄ　宝具ＥＸ
対魔力Ｃ
平均以上、という意味ではまさしく最優といえる。
しかし、あくまでもそれは下地に過ぎない。本分は宝具による能力値の向上にあるといっていい。
彼の宝具は、全てが能力値の向上のために存在し、全て使用すれば幸運以外のステータスは４段階向上する。
内、一つのみ発動していない為３段階のみの向上となっているが、それでも能力値はセイバーの中にあっても破格という他ない。
しかし、技量の差はいかんともしがたい。

令呪３つのブーストの強化が、宝具による強化に勝るか。
それは「確かめて」みなければわからない。

魔人と龍人。八極拳と空手。
無双の「技」を得て尚研鑽を怠らなかった男と、無双の「力」を得て尚研鑽を怠らなかった男。
この聖杯戦争に参加したものの中で無手における最強を決める異種格闘技戦。
その決着は、ただの一合で明らかになる。
人体を石と認識し、それを上回る硬度へと拳足を鍛える空手。
人体を水袋であると認識し、それを揺さぶることで殺傷する拳法。
根本的な思想は違えども、結論は同じ。
すなわち、相手を一打で殺すこと。故に、次などありえない。

踏み込みは、両者ほぼ同時。
この時点で、既に互いの間に隔たる技量の差、性能の差は明らかだった。
少なくとも、一誠と書文の間では。

その技量は、明らかに書文が上。人生の全てを武にささげた男の技は、
神話に語られる英傑を眼にしてきた一誠をして、人か、と疑わせるものだった。
毛ほどの無駄もない動きは、いままで立ち会ってきた武仙や戦神の姿が重なった。
よくぞ、人の身でここまで練り上げた！
幼少のときに虫の体を得、龍の魂を得、悪魔の駒を得、神の槍を得、祝福を得、幻想の肉体を得、炎の剣を得、
命の泉を得、それでようやく最強に近づいた男は、ままならぬ人の、その強さに感嘆した。
人を捨て続けた男は、人のすばらしさに驚嘆した。

その基本性能は、明らかに一誠が上。幻想種の頂点は伊達ではない。

人としか戦わなかった書文にとって、初めて眼にする人外の肉体。

まさしく、雷の速度で向かってくる山の如し。

おお、これが龍か。なんと恐ろしい！

令呪の後押しを受け、それでようやく視認できる紫電の如き神速。

触れる前からわかる、土石流の如き暴威。

いかなる城砦よりも堅牢であろうその鱗。

それが、未熟なれど人の形で、人の技で向かってくる。

人を殺し続けた男は、人でないものの神秘に感嘆した。

このとき、両者は自分の死を予見した。

一誠の見た死のヴィジョンは書文の掌打が己が胸板に達し、そこより毒血が流し込まれ、体内の経絡を乱された果てに死ぬもの。

書文の見た死のヴィジョンは一誠の鉄拳が己が胴体に触れるや否や、その体を豆腐のように砕くもの。

しかし、優劣は明白。

元より、令呪を全て使用したことによりユリウスの脱落は確定事項である。

更に言うのであれば、書文は攻撃に関してはブーストされていても防御に関してはその限りではない。

双方共に牽制も防御もしないこの打ち合いにおいて、防御面においては龍の肉体を得ている一誠が圧倒的に有利。

相打つならば、明らかに一誠が有利だった。

しかし、そんなことは両者にとって全く無意味。

元より試合とは、相手のこれまでの人生とこれからの人生を全て奪うもの。

塵を詰み、山としてきた過去を、多くのものを得るであろう未来を、それを賭けて現在の力で戦うもの。
玉石のごとく磨き上げた己が心技体を、相手の心技体とぶつけ合い、どちらが砕けるのかを競うもの。
そこに、自分の死などあって当然である。

汚泥の中を進むがごとく、両者の打は極限まで圧縮された時間の中を進んでいく。
ゆっくりと自らに死が迫るそれは恐怖以外の何者でもない。
しかし、それでも二人の攻撃は鈍りすらしなかった。

先に、打を当てたのは書文であった。
元より、最も優れている能力は敏捷。これに技術と令呪によるブーストが加われば、それはむしろ当然だった。
しかし、体に当たる直前、炎の壁によって阻まれる。
それは、評価規格外の宝具「輪を描いて回る炎の剣」による守りであった。
本来防御に使うべきではない炎ではあったが、人と神を隔てる剣は、まさしく鉄壁となって必殺の掌打を受け止めていた。

ぬう、流石は龍。その鱗に触れるだけでも一苦労か！

硬い炎という埒外の存在。しかしそれを令呪の助けもあって押し通す。
じわりじわりと、粘土を変形させるように炎の壁を掘削する。
その間も、当然一誠の拳は書文の体に向かっていく。
もしも、己の掌が炎の壁を穿ちきる前に相手の鉄拳が体に届けば、相打つことさえできない。
しかし、あせりはない。この拳は壊すもの。神の炎さえ例外ではない。
それを証明するように、令呪1画分の魔力を持って壁の開通に成功

する。
しかし、更にその奥には赤い鱗が待ち構えていた。
鍛え抜かれた胸板に触れるや否や、再び書文の知らない感触が掌に伝わった。
例えるならば、やわらかい鋼鉄。硬質な炎の次は弾性のある金属ときたか。
神話の生き物の肉体構造に舌を巻く。が、これを穿つ必要は無い。
毒血を注ぎ込みさえすれば、それだけで殺せる。
しかし、単純な強度のみならず対魔力もA＋＋となっている赤龍帝の鱗は、やはり炎の壁同様令呪1画分の消費をもってしなければ貫けなかった。
残った令呪1画分、そして己の功夫を信じて裸の龍に勁を注ぎ込む。
それと、全く同時に一誠の拳が書文のわき腹を捕らえた。
単純な運動エネルギー。
書文には1歩も2歩も、あるいはそれどころではないほど遅れていようとも、空手の理合によって加速と体重移動が行われた一撃は、ギリギリのところで間に合った。
攻撃が、攻撃に成ったのは全くの同時。

手ごたえア――――――

道理はない。
元より、この一撃を見切れるものはセイバーかランサーぐらいのもの。
それ以外は、視認することすら不可能であろう一撃。
しかし、何が起こったのかを正確に、且つ完全に認識できたのは当事者である二人だけだった。
ユリウスと、ネロ。
二人が認識できたものは、轟音と閃光。それだけだった。
それが収まった折、二人が見たものは首から下が破裂したかのようにあたりを赤く染めている、
首だけになったアサシン。
そして、駒王学園の制服に身を包み、その服を己の顔からおびただしく流れる血で染め倒れるセイバー。
それだけだった。
「一誠・・・！」
極一瞬だけとはいえ、莫大に消費された魔力。
サーヴァントからマスターに堕ちたことによる喪失感。
それに苦しみながらも、這うようにして己の剣に近寄るネロ。
その表情は、苦しみに満ちていた。眼には、涙すら浮かんでいた。
愛おしき人が眼から、耳から、鼻から、口から。まさしく七孔噴血していたのだから。
それとは対照的に、ユリウスは令呪の全使用により朽ちていく体でありながら、心底嬉しそうに笑っていた。
達成した。
完遂した。
たとえ、最上級の治療薬をもってしても、乱された経絡はどうにもならない。
明らかに、明らかに致命傷だ。
これで、奴は脱落する。
これで、レオが優勝する。
これで、約束は・・・。

「ふ・・・」

ネロに抱かれながら、一誠は血を吐きつつ必死に言葉を吐き出そうとした。

「我が剣よ、喋るでない！」

ネロは、血にまみれた服を必死に脱がし、何かを施していく。

無駄だ。

酷薄な笑みが、ユリウスの顔を支配した。

それは己の勝利を確信した男の残忍な笑みだった。

それを肯定するように、一誠は言葉を発した。

「二重・・・金剛・・・」

「我が剣よ！喋るなと言っておろうに！」

己のマスターの静止も聞かず、サーヴァントは息も絶え絶えになりながら叫んだ。

「未・・・完了・・・！参りました・・・まさか・・・こうなるとは・・・」

「いやなに、ユリウスの手助けがあればこそよ」

やはり崩壊の始まっていたアサシンの首が、生物的限界を超えて声を発した。

こちらは、どう見ても死体であるというのに流暢に語った。

「いや、見事な无二打・・・いや一撃必殺であった」

心底愉快そうに、感嘆しつつ相手をたたえた。

それは怪物として生きた一誠を全面的に肯定する暖かさに満ちていた。

「龍の力、堪能したぞ」

「いえ、それでも・・・このざまです」

首だけとなったアサシンと、龍としての姿を保てないセイバー。

両者は、おそらく最も壮絶にして短時間で結末を迎えた戦いを終えて、湛えあう。

勝敗など、瑣末といわんばかりに。
「・・・我が、八極」
この場にあって、唯一歓喜していたユリウス。
そんな彼を、首だけのアサシンが絶望のどん底に突き落とした。

「龍を討つにあたわずか！」

「・・・なんだと？」
呆然と、その意味を尋ねるユリウスの前に、勝者と敗者を隔てる死の壁が出現した。
喪失感と共に消えていく自分の体。いや、それはいいのだ。
なぜ、ネロは消えないのだ！彼女は、血まみれになりながらも己の従者を手当てしていく。
その掌には、２画に減った令呪が刻まれて、消えていない！
その疑問に答えるように、「処置」を受けた一誠が体を起こす。
回復不能の一撃から復活した彼を見て、ユリウスは更に愕然とした。
理解が追いつかないというよりは、理解を脳が拒んでいた。
「何を勘違いしているのか知らないが、无二打は純然たる技だ。理合だ。
別に必殺だの、因果逆転だの、そんなトリックは存在しない。
そして殺す理合があるのなら、救う理合もあるのが道理」
その彼の、肌の露出した体には、何本もの小さい針が刺さっている。
おそらく、ネロが施したであろう処置、針治療。
知識の上で知っていたそれが、たかがそんな療法が无二打を破ったというのか？
ありえない。ただの一打で死ぬはずだ。そんな処置で追いつくものか。
「ユリウスよ、その赤い龍はな・・・」

心底愉快そうなアサシンは、その問いに回答した。
「内功で、勁をはじき返したのよ！」
それが、この状況の明確なる回答だった。
しかし、中国拳法を操る彼の言葉は、その道を知らぬユリウスには全くわからなかった。
「わかりやすく説明してやる」
それを、冥土の土産であるかのように惜しげもなく、一誠は語り始めた。
「おれは、胸板に触れられ発勁を打たれた。
それを、おれは胸板からの発勁で迎え撃ったのさ」
勁が、魔力を触れた箇所から注ぎ込みかき乱す技であるという。ならば逆に、触れられた箇所から魔力を放てば相殺できる道理。
しかし、それは攻撃に使うよりもよほど難しいはずだ。
体術で遅れていると自分で言っていたセイバーが、一誠がそんなことができるのか？
「まあ、もっとわかりやすく言うのであれば。リアクティブ・アーマーだ。そういえばわかるだろう」
そのとき、ユリウスはようやく理屈を理解した。
リアクティブ・アーマー。炸裂装甲とも呼ぶそれは、相手の攻撃を受けた折に装甲の表面を破裂させて衝撃を緩和させる技術だ。
つまり、この男は体のどこに打ち込まれてもそれをはじき返すことができたのだ。
そう準備していたのだ。
「静動轟一。それは本来肉体への負荷と引き換えに身体能力を一時的に増加させる技。
知識の上で知っていたおれは、それを再現しようと努力していた。
しかし、出来上がってみればそれはまったく別の技になっていた」
外側に爆発しようとする気を内側へ凝縮する気で押さえつけることにより、より爆発力を増す。
それが「本来」の静動轟一のあるべき姿。
しかし、これを再現したところ、似た術理によってなる業に至った。

一誠の気の運用の根幹を成すもの。
念能力。その放出系に分類されるそれだった。
放出系の念能力は、体の内側でできるだけ圧を高めて、水鉄砲のように勢いよく噴出させるもの。
静動轟一と全く同じ理合である。
つまり、兵藤一誠の静動轟一（リアクティブ・アーマー）は全身を破裂寸前のガスボンベと化させることで、
そこに魔力や気の類を流し込む相手にカウンターとして気を放出する技になったのだ。
「おれに中国拳法や仙術、妖術への対策を教えてくださった方からも、絶賛された技でな。
特に素手の相手には効果が抜群だったというわけだ」
もちろん、令呪により強化された分ダメージを受けてしまったわけだが。
いまだに息は荒いものの、一誠は少しずつ体調を戻しつつあった。
「そんなバカな」
体のほとんどが消えていく中、ユリウスは絶望した。
だとしたら、一誠がセイバーになった時点で勝ち目などなかったということか？
しかし、その問いを一誠は否定する。
「やはり、あせって失敗したな」
一誠は、今度こそユリウスを見て、勝ち誇った。
「あの技は、未完成でな。
極短時間しか持続できない上に決まった動きしかできないんだ」
静動轟一は、それ自体が極めて精密な気の運用を必要とする荒技。
少なくとも、未熟な一誠には決まった動きはできても複雑な攻防などできない。
それでなくても、ただ距離をとるだけでも十分に対処が難しかった。
「短期決戦を仕掛けてくると確信していなければ、できなかった」
二の打ち要らずと湛えられた李書文。

その最善の行動は令呪によるブーストで短期決戦を仕掛けること。
そうくると、確信していたからこそ、とれた作戦だった。
もしも、ユリウスが令呪をもう少し違う使い方をしていれば、この結果にはならなかった。
そもそも、アサシンは静動轟一がいかなる技なのか仕掛ける前に見抜いていた。
だが、令呪の3重の「縛り」によってそうとしか動けなかったのだ。
(もちろん、そうと知っていても武術家として正面から闘ったことは事実だが)
更に言うのならば、サーヴァントでなくなったネロの魔力量は未知数であり、
魔力を大量に消費するあの龍人の姿もどれだけ維持できたものかわからない。
ユリウスは勝負を焦る余り、間違った、悪手をしてしまったのだ。
それに思い至ったユリウスは、もう一度同じことをつぶやいた。

「・・・そんな、バカな」

そんな、己の主を置いておいて、アサシンは首だけなり、地面に転がったまま一誠に尋ねる。
どうしてもわからないことがあったのだ。
「龍よ。おぬし、中国拳法への対策は一体誰に習ったのだ。
儂以外に、この境地に達しているものがいたのか?」
発勁への対策や処置はまだいい。威力はともかく、その技自体は一般的だったからだ。
だが圏境自体への対策も知っていた。こればかりは、使えなければ断言できないはずだ。
この境地に達したものは、史上においてそう何人もいないはずだが。
「え、ああ・・・」
それに対して、一誠は恥ずかしそうに答えた。照れてすらいた。

「あなたもよく知っているはずの方ですよ。
おれに対策を授けてくださったのは・・・」
そういって、誇らしげに微笑んだ。

「闘仙勝仏様です」

ユリウスとアサシンは、今度こそ絶句した。
暗殺者でありながら、全く気性の異なる二人。
ここに至って、全く同じ反応をせざるを得なかった。
そして、ユリウスは消え行きながらなお呆然とし、アサシンは・・・。

「カカカカカカッ！」

首だけで、大いに笑った。
腹もないのに、腹の底から愉快そうに大笑いした。
無理もない。納得せざるを得ない。

「なんと、孫悟空の弟子であったか！
勝てぬはずよな！カカカカカカッ！」

やや穏やかに続いたデリートは、ここで一気に進み、暗殺者達を飲

み込んでいった。

しかし、消滅を終えて尚・・・。

カカカカカッ！

心底愉快そうに笑う声は、生き残ったセイバー組の耳に残った。

ユリウスの悪手　5

相性は最悪だった。我ながらよく勝てたものだと感心する。
もしも、彼がランサーだったのならおれに勝機はなかった。
なにせ、おれの基本戦術は敏捷と耐久に物を言わせて接近し、空手と筋力で撲殺することにあるからだ。
正直、遠距離戦の技などおまけに近い。
そんなおれにとって、素手の体術がはるかに上であるかの李書文を相手によく持ちこたえたものだ。
とはいえ、生き残った。
死者である自分が勝ったことの意義など心中複雑ではあるものの、そのことは単純に嬉しい。
地区大会に参加していた空手少年に戻った気分だ。
もう正直聖杯戦争なんて、という気分ですらある。
なんつうか、出し切ったというか、やり遂げたというか。
も～～～、成仏してもいいかな～～～みたいな。というか、解脱したい。

我がマスターネロが、
「我が剣よ、判っておろうが、これからは余がそなたのマスターである！」
と、言ったのはマイルームに戻り、おれへの本格的な治療が済んですぐのことであった。

もちろん、その間ずっとおれは血を吐いていたし、彼女も大いに疲弊していた。
なので、その間自重していただけでも評価するべきなんだろうか。
などと、少々の期待をしつつおれは彼女の膝枕に甘んじていた。
「ぬふふふふふふ」
あの状態のおれを維持するために魔力消費は夥しく、マスターへ堕ちたことで喪失感は著しいはず。

だというのに、この少女はおれの体を愛でていた。スケベ根性恐るべしである。

針がいたるところに刺さっているおれの体。その肌をつつ～と撫でている。

正直こそばゆい。

とはいえ、いまのおれは彼女のセイバー。逆らうことなど許されない。上下関係は大事だ。

第一、彼女だっておれに何の利益もないのに従ってくれていたのだ。おれもそうするべきだろう。

腕折られたけど。

「・・・反応が薄いな。つまらぬ」

いえ、正直慣れていますので。

ありがとうリアス様。あなたに比べれば彼女の攻めもまだぬるい。

今、初めてあなたに感謝しました。もう二度とすることはないと思います。永遠に。

いやほんと、まじで。

だってあのヒト、おれと妻の結婚式に殴りこみ仕掛けてきたんですよ？

各神話の著名人がたくさん着ている中、おれの妻と決闘すると宣言し、

各勢力からも参加者が出場、もう結婚式というか天下一武道会と化していた。

しかも負けるという醜態を晒す始末・・・。

一体何をしにきたのか・・・。

というか、結婚式に殴りこみとかないわー。まじでないわー。そんなことをやるのはラノベの主人公くらいだ。

というか、暴力で解決しようとするな。話し合いで解決しましょうよ。

「我が剣よ、ほかの女ことを考えていたのではないか」

口を尖らせてすねる我が陛下、淫乱皇帝。

ええ、考えていました。他の女のことを。

「ええ、少し生前のことを」
「ふん！
まあよい。すぐに余のこと以外思い出せなくしてやろう」
なんだ、この女無駄に前向きだな
それで問題が解決するとでも思っているのか。
「でだ、次の相手だが・・・」
「ああ、ガウェインだな」
おそらく、この聖杯戦争の大本命。最高のマスターに最優のサーヴァントの組み合わせだ。
おれのような「最強のマスター（？）」でもなく、ネロのような「最優のクラス（？）」でもない。
極めて真っ当な最高コンビといえる。
だが端的に言って、まず負けることはない。
少なくとも英雄の格として、おれは彼よりも数段上の存在だ。
というのも、筋力や耐久ではおれのほうが上であり、かつ相手は真っ当な剣士だ。
間合いさえつめてしまえばどうとでもなる。
これには、明確な根拠がある。
生前、おれは部下にアーサー王の子孫がおり、彼と戦うおりは間合いを潰せるかどうかだけが勝負の分かれ目だった。
どんな剣士も一旦懐に入ってさえしまえば、甲冑組み手になる。
そして、甲冑組み手の腕前なら真っ当な剣士ではおれの上を行くなどありえない。
何のことはない。訓練が足りないのだ。
戦場の主役は多くの場合槍であり、その補助として剣がある。
拳の間合いでの技は、多くの真っ当な英雄は持ち合わせがない。その必要がないからだ。
だからこそ、才能がないとはいえ幼少の頃それのみに人生を奉げてきたおれの空手が意味を持つ。
例えば、李書文の技量をＡ＋＋＋とした場合、おれの空手の技量はいいところＢだろう。槍の腕前もＣ程度のはずだ。

ガウェインの「剣」の技量はおそらくA＋程度。そして組み手の技量ではDといったところだ。

つまり、接近してしまえばどうとでもなる。おれはキャメロットの剣術も知っていて、体験済みだ。

翻って、ガウェインは空手を体感したことはあるまい。殴り合いの技量ならば絶対に負けない。

では、性能はどうか。

彼は太陽の騎士であるらしく、昼は3倍の力があるらしい。

しかし、悲しいかなおれの宿す龍は倍化をつかさどる赤龍帝。

禁手に至らずとも十秒間で倍々に強くなるのである。

最初の十秒では負けていても次の十秒では追い抜き、更にその十秒で突き放す。

禁手ならば尚のことだ。

まあ、サーヴァントの身である以上限界はあるだろうが、理屈上は圧倒的に上である。

持っている剣も、格で言うのであれば「転輪する勝利の剣」より「輪を描いて回る炎の剣」のほうが上だ。

少なくとも打ち合いでへし折れることはあるまい。

「『おれ』は、『彼』よりも強い」

「であろうな」

むふー、と鼻息も荒く自慢げなネロ。

おいおい。

それはこっちも正常な場合に限るのだ。

正直、アサシンから受けたダメージはまだ当分治らない。

所詮、素人の針治療だ。仙術使いによる正式な治療とはわけがちがうのだ。

本調子まで2週間といったところ。

つまり、次の対戦相手がレオナルドであった場合、まず負ける。

そして、そうでなかった場合。おれたちは不戦勝となる可能性がある。

これは、場外乱闘によって大量の欠員が出たためだ。

準決勝を前に、参加者は3人しかいない。つまり、一人はシード扱いなのだ。
「次の抽選次第だな」
「それで全てが決まるというわけだ」
と、ご機嫌な我が主。
しかし、懸念はもう一つある。
つまり、レオナルドはネロよりも強いのかということ。
この聖杯戦争は、あくまでもマスターとサーヴァントの二人三脚。
片方だけ勝っていてもしょうがない。
いかに多くの影響を後の世界に残しているとはいえローマの皇帝に過ぎなかったこの少女が、
世界の支配者であるというあの少年を打ち破りうるのか。
・・・。
おれに、為政者の器を図ることなどできはしない。できてはいけない。
・・・。
どのような形で終わろうと、死力を尽くすのみだ。

数時間後、運命を別つ対戦相手が発表された。
おれは、ふらつきながらも立ち上がり、ネロと一緒にマイルームを出た。
その掲示板の前には、既にレオナルドとガウェインがいた。
二人とも、戦意をみなぎらせた微笑を浮かべてる。その熱量は、一般人にはそれだけで猛毒だ。
「今回、僕の対戦相手はあなたではありませんでした」
レオナルドはにっこりと笑いを深めた。屈託のない少年の笑みと、好敵手を見つけた王の眼。
無邪気さと無慈悲さ。それが何の矛盾も無く同居している。

「つまり、あなた方は、今回不戦勝というわけです」
別に、疑ったわけではないのだが、確認をする為に掲示板を見る。

六回戦　不戦勝

そう、無機質にそう書いてあった。
命拾いをしたな、と安心する反面レオナルドの言動が気になった。
おれの体調が悪いことは見れば明らかだろう。チャンスだ、とは思っていないようだ。
いや、むしろ喜んですらいた。
「嬉しいですね。こうしてあなたと最高の舞台で戦えることが」
「おれたちはともかく、そっちはまだ一度闘うだろう?」
ここまで残ったマスターだ。レオナルドほどではないにしても強敵だろう。
それを無視しての発言というのは、なんとも気が早い。
「ふふふ、そうですね。確かにおっしゃるとおりだ。
それでは、一週間後。必ずあなたの前に立つと約束しましょう」
「ふむ、いいだろう。迎え撃たせてもらう。
勝つのは余達だがな!」
マスターになって尚自信満々で、ネロは胸を張った。
「いいえ、勝つのは僕です」
これに、レオナルドも負けじと応じた。
その剣であるガウェインは、ただ意思だけを持っておれに視線を送っていた。
忠節の騎士として、言葉は発せずただそこにいた。

2週間後には、この男と雌雄を決することになるだろう。
それが、この聖杯戦争の決勝戦だ。

準決勝、六回戦。
レオナルドは何の問題もなく決勝戦に駒を進めることになるだろう。
そして、そこで待ち構えているのは万全の体制を整えた一誠とネロ。
赤いセイバーと、白いセイバー。
最優の看板に偽りはなく、聖杯戦争はセイバー同士にて争われることになった。

尋常の勝負と言えば聞こえはいいが、それはつまり、兄の功績である一誠へのダメージをなかったことにするに等しい。
こうしてアサシンの、そしてユリウスの成したすべては無為に終わった。令呪一つの消費を除いて。
それを、白い騎士と赤い少年王が生かせるのか。それは、まだ判らない。
はっきりしていることは、どちらかが死ぬということだけだ。

おまけのキャスター編。

「ふむ、3倍の力か」
「いくらなんでもチートすぎますよ！」
ただでさえ剣士と魔術師の1対1だっていうのに・・・！」
規格外のスキル、聖者の数字。
これによって、昼のガウェインは普段の3倍の力を持つという。
ただでさえ、キャスターは筋力耐久ともに最低ランク。
平均以上の力を持つであろうセイバー、ガウェインを相手取るには不利なのだ。
これで相手の能力が3倍になれば、もう絶望的である。

「いろいろ作戦は考えた」
「おおっ流石ですご主人様」
「まず、お前がガウェインを押さえている間におれがレオナルド君を殴り殺すという作戦だ」
ちなみに、一誠は筋力耐久共にAクラス。聖者の数字を無視すればガウェイン以上である。
如何に優秀とはいえ、マスターでしかないレオナルドでは耐えられない。
「とはいえ、相手は騎士。それは警戒しているだろうし、おれに宝具がない以上不利は否めない。
何よりずるいしな」
「えっ今更？」

キャスターと合体して『イッセー＝タマモ』となり、李書文や呂布と殴りあった男とは思えない発言である。
「おれのこの手が光って唸る！
お前を倒せと輝き叫ぶ！
砕け、必殺！
太陽に代わってお仕置きよ！」
「氷天、フリーザーストーム！
炎天、フレイムブリザード！
必殺、烈風、正拳突き（改）！」

「いや、ダイレクトアタックはずるいだろう」
「・・・ご主人様のズルイの根拠がマジでイミフです」
「でだ、とにもかくにも聖者の数字を無効化せねばなるまい」
現状、殴り合いのダメージレースでは絶望的に不利といわざるを得ない。
聖者の数字を何とかすれば勝算はでてくる。
たとえ、キャスターでも0パーセントが1パーセントぐらいにはなる。

「そもそも聖者の数字は、アポロンの加護だという。ならば話は早い」
そう言って、キャスターの宝具である鑑を指差した。
「おれの世界のアポロン様にお願いして、加護を解除してもらおう」
・・・。
・・・・・・・。
・・・・・・・・・。
それを聞いて、キャスターはしばらく沈黙し、口を開いた。
「ご主人様、どう考えてもそっちのほうがズルイです」
酷くドン引きした顔でそう言った。
なるほど、加護を受けているのだから、加護を与えている者に話をつけるのは手順としては正しい。
しかし、神霊にそれを依頼するというのはむちゃくちゃすぎる。
そもそも、神霊に話をつけられるという時点で聖杯が要らないレベルの大奇跡。
伝説の大妖狐もドン引きである。ダークドン引きならぬフォックスドン引きである。
「何を言う。使えるものは何でも使うべきだ。それが暴力を伴わないなら尚のことな」
子供同士がけんかをしていて、お父さんに言いつけてやる！レベルの発言である。
「いえ、そっちのほうがえぐいです。暴力が伴ってない分より悪質です」
本当に怖いのは暴力を伴わない権力である。彼女は今更ながら自分の主のもつ「チカラ」に呆れていた。
軍人だけあってフェアプレー精神の欠片もない。
これは戦争なのだから、何事も（一方的な）暴力で解決するのが一番だ。
「闘わずして勝つ。それが戦争の理想だ」
「でもそれって経済制裁じゃないですか、ヤダー！」
呪殺よりもたちの悪い自分のマスターの発想。
彼女は恐れおののいていた。

それにしても、地上の王が月の聖杯戦争で太陽神から経済制裁を受けるというのもシュールである。

まさに、太陽系全体を巻き込んだ話だった。

「それじゃあ鏡を借りるぞ。異世界であり異教とはいえ同じ太陽神。連絡方法を知っているのなら、この宝具でも大丈夫なはずだ」

「まあ、そうでしょうが・・・」

キャスターは不承不承で鏡を渡す。受け取った一誠は、鏡に指を添えてなぞり始めた。

「たしか、アポロン様の電話番号は・・・」

「随分お手軽ですね、いや、まあ面倒くさくても困るんですけど」

「暫く、暫くぅ～～～～～～～～～～～～！」

一誠が数字を書き終えるまえに、鏡から膨大な神気があふれ出した。

キャスターとそのマスターは、互いの顔を見合わせた。

「どうしよう、お前の本体（九尾）の本体（天照）につながっちまった・・・」

「・・・すみません、ご主人様。私は無力です・・・」

そんな、絶句した二人をおきざりにして、日本神話の主神、天照大神が鏡を媒介にして光臨した。

一誠の世界の出身であるにもかかわらず、その姿はいかなる理由かキャスターにそっくりである。
例えは少しおかしいが、月とすっぽんの如き存在の格差は、見ただけで伝わってくるのだが。
「おれの世界の天照様だ。間違いない」
「ええ、そのようで。私の本体の本体とは並行宇宙の同一人物ですね」
とはいえ、一誠もタマモも別段知らないわけではない。
神々しさにあっけにとられることもなく、いささか不信心な態度でご来光を迎えたのだった。

「へえ、アポロン君の加護を受けている子と闘うんだ」
聖杯戦争などの事情を一通り聞いて、納得したらしい天照はうんうん、と頷いた。
「ええ、その通りです」
「・・・あなた、私（太陽）より強いじゃない。自分でどうにかしたら？」
「いえ、制限を受けていまして・・・。
億分の1の力も出せない体たらくでして・・・」
申し訳なさそうに、一誠は頭を下げた。
彼は別段何の神を信仰しているわけではないが、自国の陛下の祖先とあれば他の神以上に恐縮してしまっている。
「ふ～～～ん」
それを見て、天照は狐のような意地の悪い笑みを浮かべた。
タマモも、一誠もいやな予感がした。
なにせ、多神教の神というのはどこも似たようなもので、人間くさいところがあるのだ。
つまり、人間の都合など知ったことではないのである。
「じゃあ、力になってあげるわ！」
そういって、胸をドン、と叩いた。
「その加護を解除してあげる！同じ太陽神だし！」

「何を考えてるんですか！」
　一誠は、無礼を承知で大声でさえぎった。
　というか、別の神話の神の加護をかき消すなんて、正気の沙汰ではない。
　宣戦布告、とまでは行かないが、重大な越権行為である。
「なによ、別にオリンポスを滅ぼして天沼矛でかき回すわけじゃないんだし」
「曹操みたいなこと言わないでください！」
「大丈夫よ。あなたから頼まれた、って言えばアポロン君もぐぬぬぬ、って我慢するから」
「それ、ただの脅しじゃないですか！」
　一誠は、世界最強に限りなく近い男だった。
　その男から依頼されているとあれば、なるほど、文句は言えまい。
「・・・だって～～。
　一誠君てば、ミカエル君やアレス君とは仲いいのに、私にはあんまりかまってくれないじゃない・・・。
　私の子孫（陛下）の赤子（臣民）なのに～～」
「アレス様は、ただ難癖つけてきてるだけですから！」

　ふーん、組織の名前はマーズって言うのか・・・。
　それは、俺のことを尊敬しているってことでいいんだよな・・・？
　な・・・？

「形だけの役職として特別顧問の椅子を用意しただけですから！」
「でもぉ～～～」
「とにかく、アポロン様に話をつなげてくれるだけでいいので！」
　一誠は必死だ。
　こんなしょうもないことで外交問題に発展してはたまらない。
　タマモは、まさか本体の本体に口出しするわけにも行かず静々とお茶を用意していた。
「きゃ、私ってば良妻みたい！」

と、のんきなことを言っていた。現実逃避とも言う。
そんな彼女の後姿を見て、天照は不満げだ。
「ねえ、どうしてあなた、平行宇宙の私の分霊の分霊を使役してるの？
いってくれれば私が直接ご奉仕するのに・・・」
「ご冗談を！
そんな、畏れ多いまねはできません！」
「もう・・・、じゃあその騎士君、私がやっつけてあげよっか。
ほら、『太陽（サン）が直接（ア）お仕置（タッ）きよ（ク）』で」
「ご冗談を・・・」
ムーンセルがやばいというか、地球もヤバイ。
ＢＢよりも迅速に地球が滅びることは火を見るよりも明らかというか、陽を見るよりも明らかだった。
「なによ、シヴァ君だって、よく召喚されてるじゃない！ＦＦで！」
「本体が来てるわけでもないでしょう・・・」
「それに、私（太陽）の惑星（地球）の衛星（月）の分際で、お気に入りの子を・・・。
おのれ月読め・・・。姉より優れた弟など存在しねぇというのに・・・」
「月読様は関係ないでしょう・・・」
「ああいえばこういうのね・・・」
天照はそういってすねてしまった。一誠は、ため息をつく。
一誠は聖書の神の後継者だが、日本の生まれでもある。
また日本人としての帰属意識も強く、日本神話の神に対しては他の神よりもより深い敬意を示していると、天界や冥界でも問題になっていた。
だからこそ、できる限り無駄に関係を強化しないようにと、細心の注意を払っていたのだった。
死後とはいえ、軽々しい真似はできない。
「じゃあ、これをバージョンアップさせるわ」
そういって、召喚の触媒となった鏡を指差した。
キャスターの武装であり宝具、水天日光天照八野鎮石である。
「これを八咫鏡に昇格させるわ！」

「それ三種の神器じゃないですか！」
「なによ！オーディンさんからはグングニル、聖書の神からは炎の剣をもらってるじゃない！
似たようなものでしょ？しかも炎の剣に至ってはオリジナルじゃない！」
「それとこれとは、話が・・・」
「もう・・・仕方ないわね」
座布団に座っていた天照は、不機嫌そうに立ち上がった。
え、といやな予感がしつつも一誠は彼女を見上げた。
天照は、新体操の選手さながらに身軽な動きで一誠から距離を作ると高々と跳躍した。

「太陽中心核（ダーイーター）に比類（ニン）する女神力（ラック）の発露（シュ）！」

見事なライダーキック、いやさゴッデスキックを顔面に食らったことによって、一誠は景気よく吹き飛びマイルームの壁に激突した。
「アベシ！」
壁にクレーターを形成し、一誠は崩れ落ちる。
神霊の攻撃を受けて、その程度で済んだのは幸運なことなのか。一誠は死んでいなかった。
「ご、ご主人様～～～！」
「じゃ、頑張ってね！」
慌てて駆け寄る分霊などどこ吹く風。鏡を強化すると、天照は日没のように去っていった。
その、嵐のような存在がいなくなったことを確認し、一誠は変形した顔を抑えつつため息をついた。
「・・・キャスター。やっぱり神頼みはダメだな。自分の力で何とかしよう」
「はい。その通りでございます」

「転輪する勝利の剣（エクスカリバー・ガラティーン）！」
「日輪背負いし必勝の拳（ビクトリー・プロミネンス）！」

後日、一誠とタマモの合体攻撃によって、太陽の騎士ガウェインは灰も残らず敗北する。

その背後に、太陽神の恩寵があったことを、地上の太陽たるレオナルドは知ることがなかった。

兵藤一誠の休日

夢／夢
それは／それは
退屈な／羨望した
平凡な／平和な
壊したい／守るべき
当たり前の／手に入らない
日常／日常

眼が覚めると、そこは家だった。
狭い部屋には、窮屈さ／憧憬、を感じる。
自分の部屋には自分しかいない。
それがたまらなく、普通に／寂しく、思う。
今に行くと、これから仕事に行く父親と食事を配膳している母親がいた。
思わず、ため息をつき／泣き出したく、なる。

学校に登校すると、当然のように授業が始まる。
内容は頭に入ってこない。
こんな日々が、ずっと／少しだけ、続いていくのだろう。
そう思うと少しだけ、うんざり／悲しく、なった。

恋人はいないが友人はいる。自分と同じバカな友人だ。
きっと、こいつらとは今後も付き合いがあるんだろう。
卒業しても、社会に出ても。たまにしか会わなくても。
そう思うと、嬉しく／嬉しく、なる。

家に帰って、本を読む。
マンガだったり、ライトノベルだったり。

その中の主人公たちは、この世界で、過去で、未来で、異世界で。
（友情）仲間と協力して、
（努力）武器を集めて修行して、
（勝利）敵を倒し、少女の愛を得る。
それは、この国ではいくらでも存在する物語の一つ。
ありきたりで、どこにでもあって、そして・・・。

少年の／男の

こうなったらいいなという願望の物語／こうなってしまったという後悔の物語

眼が覚めた。

マイルームの窓から、デジタルな光が入ってくる。
当然だが、窓の外には雲ひとつない晴天。
骨折していた肘の痛みを確かめる為に、右拳を握り締めて空に突き出す。
快調、快調。
明日は、ついにレオナルドとの決戦だ。決戦前日でようやく自分も本調子。
円卓の騎士ガウェインを相手に、無様な真似は見せられない。
何の願いも持ち合わせがない、いや願ってなどいけない身ではあるが、
闘わなければならないのだとしたら、軍人として、暴君ネロの騎士として、微力を尽くすとしよう。

未だ、さっきまで自分も寝ていた天蓋付きベットで寝ている陛下をやさしく起こす。
「陛下、朝でございます」
「・・・」
実は眼が覚めているようなのだが、陛下は目を覚まさない。
期待しているような、どこかすねたような顔で、布団をかぶった。
「我が騎士よ」
「はい、ここに」
眼を閉じたまま、少しだけ顔を毛布から出した。
その顔は少しだけ赤らんでいる。
何を言おうとしているのか、手に取るように判る。
「まだ眠いようでしたら、朝餉をご用意いたします。
その後に、また起こしに参りますので」
「・・・あ～～～～」
「それでは、失礼します」
ベッドから降りて、おれは恭しく礼をした。
まあ難しい料理は作れないが、簡単な朝食なら作れる。
もともと、このムーンセルは仮想空間。
多くの国々から集まるマスター、あらゆる時代から集うサーヴァントの為に様々なインスタント食品が存在する。
陛下の好む料理もいくつかはあったはずだ。
「わ、我が剣よ！」
ネロは毛布を蹴っ飛ばし、ベッドの上に立った。
その顔は、見て判るほど憤慨している。
「余に、接吻する栄誉を与えようではないか！」
「謹んでお断りいたします」
如何におれが職務に忠実でも、それは断固辞退する。
それは職権乱用だ、バカめ。
「ぬうううう、このアポロンに並ぶ至高の芸術家に触れ、
愛を刻む至福を与えようというのに、それを辞退するなど・・・！」
いえ、こう見えて妻子ある身ですので。

それに、アポロン様はお前のこと千年以上経ってるのに愚痴るほど嫌ってたぞ。
あんな自己満足の超音痴皇帝と一緒にされるなど、風評被害も甚だしいとおっしゃっておいでだった。
ミカエル様も、宗教を弾圧したことを結構根に持っていたし・・・。
そう考えると、この女に忠を誓っている今この状況は存外に神々の逆鱗に触れるのかもしれないな。
まあ、死後だし異世界だし・・・。
こいつもおれも亡霊だしな。
ベッドに枕を叩きつけている皇帝陛下を放っておいて、おれは朝餉の支度に取り掛かる。

これも、もう何回もすることのないことだ。
戦争は、もう終わろうとしている。
この、参加者以外は死なない戦争というのは、実に気が楽だ。
国と国との戦争ではなく、基本個人と個人の戦争だからだろう。
だが、それでも8歳児は死んだ。アリスも。サーヴァントとしての亡霊たちも死んでいった。
彼らのことは、嫌いではなかった。ただ敵だったというだけで。
おれの悪い癖だ。敵を、憎むことも怒ることもできない。
それを、すこしでもいい方向に役立てようと生前は勤めてきた。
しかし、死後は・・・。結果的に相棒である、今は主となった少女の足を引っ張ってしまった。
だから、今はせめて闘志を燃やそう。勝利で、この戦争を終えるために。
そんなおれの顔を見て、ネロは優しく微笑み提案をしてきた。
「我が騎士よ。朝餉を済ませ次第アリーナへ向かうぞ。
供をするが善い」
「仰せのままに」
アサシンと戦う前の1週間、おれの治療にかけた2週間。
都合、3週間ほど閉じこもりきりで、お互いストレスも溜まってい

る。
ここいらで、アリーナを散歩するのはよさそうだ。
まあ、戦闘はしないほうがいいだろう。
仙術の一撃は後を引く。ここで無理に体を動かすと本番に響くからな。
おれたちは、取り留めのない話しをしながら朝食を済ませ、
アリーナへ向かった。
前を歩くのはマスターであるネロ。後ろを歩くのはサーヴァントであるおれだ。
前を、堂々と歩く彼女の姿は実に様になっていて・・・。
学生服だというのに、皇帝としての気風が漂ってくる。
そんな彼女をつい先日まで従えていたこと、今は従っていることが、誇らしい。
そうだ、彼女は誇り高い為政者だったのだ。おれが、忠を誓うにふさわしい改革者だった。
その、背筋の伸びた姿勢はなるほど、美しかった。

「我が剣よ、見よ。美しいとは思わぬか?余の好む美しさではないが・・・」

アリーナで、陛下とおれは夕日を見ていた。
おれは赤い鎧に身を包み、陛下は月海原学園の制服に身を包んで。
エネミーは討たない。必要がないからだ。今日は戦いにきたのではないのだから。
向こうもこっちに敵意がないからか、或いは勝てないと分かっているからか仕掛けてこない。
だから、この眼を焼かない美しい落陽を二人で見ていた。
おれの胸に去来するのは幼少の頃、強くなる為に走り続けた土手で見たあの夕陽だ。

ただひたすらに、厳正なるルールの中で栄誉のみを賭けた戦いをしていたあのときを。
ずいぶん遠くに、月にまで来てしまった。そう思うと、兜の中の眼からは涙が流れていた。
ああ、夕日はこんなにも美しいのか。
こうして、夕日を眺めるなんて贅沢は、一体いつ以来だろう。
思えば生前は、激務ばかりでこうした余裕などなかった。
また、そうしたいとも思っていなかった。
禁欲的でありたかった。責務を全うする為に、家族の為に個人の時間は鍛錬にのみさいていた。
後悔は無い。だが、ああーーーーー

なんて　美しいんだろう

「ふふ・・・」
陛下が、得意げに笑った。
「そなたは真面目で、ここのところ張り詰めている。
こうした心の余裕を持たねば、心の糸が切れてしまうぞ」
もっと遊べ。
生前はディオドラや唯、こなたがよく言ってくれてことだ。
全力で頑張っていても、限界が間近になれば部下がそういってくれると甘えていた。
そうだ、おれはいつも誰かに支えてもらっていた。
今更ながら、自分が部下に恵まれていたことが嬉しくてたまらない。

まあ、外れもたくさんいたが。
曹操とか、邪龍とか、ヴァーリとか、アーサーとか、美猴とか。

「お気遣い、ありがとうございます」
「なに、気に病むでない。

余も、終わりを間近にして・・・」
陛下は、おれの鎧に寄り添った。
「こうして、そなたと夕日を眺めたかったのだ」
腕を絡めてくる。この鎧、結構棘棘しているが痛くないのだろうか。
それにしても・・・。
この光景、妻に見られたらなんと言われるだろうか。

あ、あなたは新しい妾さん？
私、ララ！よろしくね！

うん。鉄板でこうだな。
というか、あの女はリアス様の最大の支援者だもんな。
妾１００人できるかな？とか歌ってたし。
正直、おれがハーレム作ってないのは単に感性の問題で、政治的には結構推奨されてたしな。
まあ、ディオドラばりにつくると希少価値が薄れるのだが。
鎧を着たまま少女と腕を組む。ここまでならおれも文句はない。
鎧のまま、涙を流すまま、夕日を眺め憧憬にふけっていた。

それを、エネミー以外に見ていたものがいた。
当然、ここにいるのはマスターだけ。
そして、もはや聖杯戦争において生き残っているのはもう一組だけだった。
地上の王レオナルドと、太陽の騎士ガウェインである。
仲睦まじい主従の、いや男女の交際に首を突っ込むほど野暮でも無

粋でもない。
あくまでも、遠くから見守るだけだった。
そして遠くから見るだけでも、一誠の力は伝わってきた。
穏やかでありながら恐ろしい、龍のオーラが。
「主従共に魔力に乱れはありません。
どうやらあの二人は体調は良好のようですね、ガウェイン」
「はい、レオ。間違いなく万全かと」
アサシン、李書文の宝具によって深い傷を負った一誠。
その体調はこの2週間でだいぶ改善され、完治したようだ。
ガウェインからも万全であるとの評価を聞いて、万全の戦いを求めていたレオナルドは嬉しそうだ。
彼らとの戦いで、手に入らないものが得られると思ったから。
彼は、生まれたときから完全な王であった。であった為、得られないものがあった。
栄光である。
最初から祝福されていた、約束された王は栄光を得られない。
それが、理解できないというのは想像力が足りないのだ。
敗北を前提としない戦いは狩猟である。失敗を前提としない殺戮は駆除である。
同様に、成功を前提とする努力は、努力とは言わない。
単なる作業だ。
全自動の工場のように、淡々と成功を積み上げていく日々。
それが彼の心に達成感を与えなかった。
つまり、彼は栄光に餓えていた。常勝に飽きていた。達成感を求めていた。
それが、自分にかけたものであると信じて。

対して、ガウェインの表情は硬い。
極単純に、自分よりも彼は格上のサーヴァントである。
自分の力では勝利できない可能性を考えていた。

まず、おそらく彼はそんなに剣術に秀でていない。
それは、ランサー、ヴラドⅢ世との戦いで明らかだった。
彼は、倒れた英霊達の武器の中でわざわざ槍を選んだ。
間合いをつめる闘い方であったにもかかわらず、だ。
つまり、彼は格闘を基本とし、槍は副武装としているのだろう。
更に言えば、槍術もたいした事はなかった。
つまり、技術面において彼はガウェインよりも大きく劣る。
だが、それだけだ。彼は、非常に戦いなれている。
技量、筋力、耐久で大きく上回るヴラドⅢ世を相手に間合いをつめる勇気。
それは、彼が歴戦の勇者であることを示している。
彼は、技量で劣っていることを弁えた上で、性能差を生かした戦いをするだろう。
そして、ヴラドⅢ世の宝具を無効化したことも忘れていない。
切り札である聖剣が通じるとも限らないのだ。

そして、なによりも彼のマスターは英霊に「なった」偉人。暴君ネロ。
滅びを知っている皇帝である。
敗北を知らない少年王は、果たして勝てるのだろうか。

ここにきて、両サーヴァントは全く同じ感想を抱いていた。
サーヴァントの優劣は明らか。勝負を決めるのはマスターの実力であると。
全く同じ不安を抱き、剣のサーヴァントは最後の決戦場に立つ。
己が主に、勝利をささげるために。

「なあ、マスター。オレがブリテンの王になったら、これもう食えないんだよな」
「ああ、そりゃそうだろ。これぱっかりは時代や地域の問題だ。
よくは知らんが、硬水とか軟水とか、水一つとってもいろいろあるしな。
水は、野菜の味を大きく変えるという。まあ、地域によっちゃあまずい野菜もあるだろうよ」
「そうか・・・。じゃあ、王になれなくてもいいや」
「・・・マジで言ってんのか?」
「ああ・・・。本当は最初から分かってたんだ。オレは王様になりたかったんじゃない・・・。
父上に息子として、認めて欲しかっただけなんだ」
「・・・モードレッド（そんな理由で国滅ぼしたのかコイツ）」
「でもさ・・・。お前も言っただろう?
アーサー王を責めるのはいい。だが、父を責めてやらないでくれ、と」
「・・・ああ、言った。
おれも子を育てていくうちに父親としての自覚も芽生えた。
子育てをして、おれも父親として育っていった。
自分の部下だった男から、突然あなたの息子だといわれても、実感も何もないだろうよ」
「・・・だよな。知っていたよ、本当は」
「だが、お前はあいつに仕えた騎士でもあった。
お前にとって、アーサー王は父親であり、君主だった。
アーサー王にとって、お前は息子ではなかった。だが・・・」
「・・・部下、配下の騎士ではあった。
君主であることと、騎士であること。それだけは共通の認識だった。

だから、オレを御せなかった責任は父に、いや「王」にある」
「そして、責任は果たされた。まあ、本人が目の前にいるのならともなくこれ以上責めてやるな。
理想の王であろうとした男だ。きっと、苦しんでいるだろうよ」
「ああ、そうだな」

「シロウ、おかわりです」
「はい、セイバー」
「ごめんね、士郎。私もご馳走になっちゃって」
「いいって。みんなで食べるほうがおいしいもんな」
「シロウ、おかわりです」
「て、早いな！」
「はい、シロウの料理は心が満たされる。
ああ、受肉してよかった・・・」
「・・・マスター権、譲ったほうがいいかしら」

レオナルドの失敗

マスター、ネロ・クラウディス。
そのサーヴァント、セイバー、兵藤一誠。
マスター、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。
そのサーヴァント、セイバー、ガウェイン。

六人の対戦相手を蹴散らして、１２８人の参加者の中から選りすぐられた二組。

月の聖杯を得るのにふさわしいのは

地上の王と太陽の騎士か。
古代の王と怪物の亡霊か。

今、最後の選別が始まる。

「ちまちまと、小ざかしくいかせてもらう」
「それでも、この重さ・・・これが『赤い龍』！」

鋭くも重い剣戟が、幾度となく決戦場に響き渡る。
燃え盛る剣と剣が、赤い鎧の騎士と白い鎧の騎士の間で、激しく鎬を削る。
赤い騎士は、燃え盛る剣を小さく小さく、あくまでも小振りで、最小限の動きで、
攻撃ではなく防御に使用していた。
膂力で大きく上回っていることは余りにも明白。
太陽の騎士が規格外のスキル聖者の数字によってどれほどその力をつけていようとも、
怪物の亡霊は、その身を包む鎧によって更にその上を行く力を身につけている。

だからこそ、大きく振るう必要は無い。
だからこそ、渾身の一撃など必要ない。
だからこそ、膨大な魔力を消費する龍人の姿になる必要がない。
だからこそ、危険な賭けなど必要ない。

極めて堅実に、自分の特意とする間合いに飛び込むために、神剣でもって、聖剣を捌いていく。
間合いをつめさえすれば、何の問題もなく勝利できる。
兵藤一誠の剣は、評価規格外の神造兵器。
対するガウェインの剣は擬似太陽を封じた星造兵器。
ただ打ち合うだけならば、優劣は存在しない。
そして、真名開放をしようとも、転輪する勝利の剣は攻撃であるのに対して、
輪を描いて回る炎の剣は防御。
相殺しあうだけで、戦況は変わらない。
しかし防具は、鎧は全く話が別。
ガウェインの白銀の鎧も、なるほど、太陽の騎士が身につけるべき一級の防具なのであろう。
しかしそれだけだ。兵藤一誠は、その身を包む鎧もまた対神宝具であり神造兵器。
想像しうる限り最強のアーチャー、ギルガメッシュが原初の乖離剣も所持し身に包む鎧もまた宝具であるように。
想像しうる限り最強のランサー、カルナが神殺しの槍を所持し生まれながらに太陽の輝きでできた鎧を身にまとっているように。
この、想像を超えたセイバー兵藤一誠もまた、防御においても死角はない。
よって、勝負をあせっていなかった。いや、むしろ万全であろうとした。
下手に大掛かりなことをせずに、木材を鉋で削るように、錐で穴を開けるように。

あくまでもじっくり、真綿で首を絞めるように闘わなければならなかった。
でなければ、確実に足元をすくわれる。最善の道が最短とは限らないのだから。

「騎士の時代、その最中を生きた真の騎士・・・か。
流石に本物は違うな」
「お褒めに預かり恐縮です！」

ガウェインは、戸惑いつつ善戦していた。
彼の人生で、こんなけったいな闘い方をする相手がいなかったからだ。
力に秀でたものがいた。技に秀でたものがいた。双方が備わったものがいた。
しかし、こんな闘い方をする者はいなかった。
彼の経験上、力に秀でたものは力づくで闘う。技に秀でたものは技を生かして闘う。
双方に秀でたものは、繊細な技に力が備わっていた。
この者には、技が備わっていない。
いや、体捌きは備わっているのだが、剣術は全くといっていい。
剣を、ただ棒のようにふりまわしているだけだ。
しかし、こちらの剣術に関しては熟知している。
体勢を崩しても、剣を払っても、即座に体勢を整えて反撃してくる。
小さく振ってくる剣がうっとおしい。
しかも、大して力の込めていない一振りを受ければ、或いはそらすだけで剣を握る腕が震える。
圧倒的な膂力の差を生かして、小さく小さく攻めてくる。
いらいらとする、うっとおしい、賢しい闘い方だ。
だが、それでもそんな彼を軽蔑できないのは、彼が『一生懸命』だからだろう。

赤い兜に隠され素顔を見ることは叶わないが、抜き身の剣から伝わってくるのはヒトであろうとしているけなげな怪物。
己が腕を右から左へ薙ぎ払うだけで全てが叶うであろう力を持ちながら、
ヒトとして闘おうとしている無才な武人。
それがセイバー、兵藤一誠だった。
しかし、そんな彼を相手取ってなお・・・。
ガウェインはあせらず、そして互角以上に戦えていた。
言うまでもない。マスターの差である。

いや、正確に述べるのであれば、サーヴァントとの相性。そう呼ぶべきものの差だ。

「我が剣よ・・・」
「息が荒いですね、皇帝陛下」

およそ兵藤一誠は、戦闘能力のみに限って言うのであれば、サーヴァント全体を通してなお最強格である。
しかし、だからこそ魔力を激しく消耗する。
故に、彼を使いこなさなければならないマスターに最も必要とされる能力は純粋に魔力の総量である。
狂化したヘラクレスがそうであるように、炎の魔力放出をするカルナがそうであるように。
基本性能が高すぎる余り、常に大量の魔力が必要とされるのだ。
つまり、Ｆａｔｅ全体を通してもイリヤスフィールのような『その為に鋳造された』マスターでもない限り、
彼をフルスペックで使い続けることは困難を極める。
或いは外付けで、桜のように聖杯との接続ないしユグドミレニアのように大量のホムンクルスで補う必要がでてくる。
まあ、それも当然と言えば当然だ。そも、龍はヒトに御せる存在ではない。

彼のマスター、ネロ・クラウディスはもともと魔力Bであり、筋力や耐久よりも魔力に秀でたサーヴァントであるが、
マスターに堕ちた彼女にとって、全力でないとはいえ兵藤一誠の戦闘は過酷を極める。
それこそ、行動の全てをアイテムによる魔力回復に費やさなければならないほどに。
身の丈に合わない兵器を使うものに対する、当然の負担である。
だからこそ、逆にフルスペックで短期決戦を仕掛けるべきなのであろうが、
しかしそれは最短の道。最短の道は最善の道たり得ず、相応のリスクがある。
なればこそ、わざわざあえてスペックを落として闘っていたのだ。

対するレオナルド。彼は非常に優れたマスターである。
規格外といわないまでも一級のサーヴァントであるガウェインが忠を誓うに足る相手だった。
それは、魔力供給も含めてだ。
宝具の鎧を身につけず、だからこそ過剰な魔力を必要としないガウェインは、
たとえ全力で打ち合い続けてもレオナルドの限界を超えることはなかった。
自分でコードキャスト、支援を行う余裕があるほどに。
ガウェインへは支援のコードキャストを。体力を回復しつつ筋力を向上させ、戦闘の手助けを。
一誠には攻撃のコードキャストを。スタンや、バッドステータスによる戦闘の妨害を。
だからこそ、性能差が如実なガウェインは拮抗でき、一誠は攻めあぐねていたのだ。

ただ、それも裏を返せばその程度に収まってしまっているということだ。

所詮、レオナルドは『最強のマスター』でしかない。
規格外のマスターであった兵藤一誠と違い、サーヴァント同士の戦闘ではさして力になれない。
まして、スタンやバッドステータスは必ずしも成功するものではない。
失敗すれば、その分行動は無駄に終わり、そしてガウェインは窮地に立たされる。
それも、見事に窮地から脱出する辺り見事な主従といえる。
しかし、それでも『そのとき』は確実に近づいていた。

忠節の騎士ガウェインは、己が主の勝利の為に全力を出しつくしていた。
嘗ての過ちを繰り返さない為に、ひたすらに滅私奉公していた。
今の、レオナルドという少年の抱えている歪みに気付きながら。
彼は、何の試練もない自分の生に飽いていた。
だからこそ、この強敵を前にして喜びすら感じている。
指示は一つ一つが正確で、無駄がなく正解だった。しかし、声には少なからず喜びが混じっている。
この人生初の強敵に対して、勝利すれば一体どれだけの達成感がえられるのだろうか。
自分の勝利を前提に、少年は高揚していた。この好勝負を。
だからこそ、普段から全く意識していないことに頭が回らない。
すなわち、自分はどうやったら負けるのかという最悪への想定だ。
それは、この勝負において、『勝利への道』と『敗北への道』が限りなく重なっている勝負において致命傷になりうるものだった。

だがガウェインは、自分の考えていることがある意味、レオナルドの考え以上に歪んだ考えだと気付かなかった。

もっと、大前提として致命的なミスがあることに気付いていなかっ

た。

それが、この主従の限界だった。

もう何合目なのか分からない。

怪物の前進を、技量と主からの支援で跳ね除けるガウェインと、騎士の剣戟を、経験と身体能力で補う一誠。

両者共に、この聖杯戦争において優勝を争うに足るもの同士であることは明白だった。

その最中で、指示を出すこともコードキャストを使用することもなかったネロが、

悲鳴を上げるようにサーヴァントである一誠に叫んだ。

「済まぬ、アイテムが尽きた！」

同時に、一誠のステータスが大きく下がった。赤い鎧は片腕の籠手を残して消え去る。

何のこともない。

如何に、アイテムが電子のデータ上の存在でありいくらでも持ち運べるとはいえ、予算には限界がある。

使い続ければ、無くなるのが道理だった。

「・・・！

好機です、ガウェイン！」

「はっ！」

ガウェインは聖剣で神剣を大きく打ち払い一誠の体勢を崩させた。

「ぐっ！」

一誠は、兜が消えその表情をあらわにしていた。

無表情が、わずかに歪んでいる。

宝具は、通じる保証が無い。ヴラドⅢ世のように、効果範囲から逃れるおそれがあった。

だからこそ、ガウェインは聖剣の真名解放ではなく渾身の一撃を放った。

「赤い龍よ・・・。これで終わりです！」

太陽の炎をまとった、忠義の剣閃。

その大振りの一撃を、一誠は剣で防げないことを知っていた。

そう確信しているからこそ、技量で勝る相手は渾身の一撃を放ったのだから。

だからこそ、相手の想定外の技で受けきる必要があった。

「鉄塊〝砕〟！」

規格外の神剣ではなく、籠手に覆われた正拳突きで聖剣を迎撃する。

「無駄です！」

如何に兵藤一誠の拳が鍛えこまれていようと、弱体化している今の状態ではこの一撃を防ぐことはできない。

だからこそ、ガウェインは己の技を信じて振りぬいた。

それは確かに、堅牢であろう赤龍帝の籠手の装甲を砕いた。拳を、指を切断した。

そのまま、腕を、肘を、首を目指して駆け上っていく。

肉を焼く、鼻に刺さる臭いが、煙が生じた。

龍の鱗を、腕を、太陽の炎が焼いていく。

ネロは、悲鳴を上げそうになり、レオナルドは歓喜した。

「お前の聖剣・・・おれの正拳を・・・斬るに足るだろう」

しかし、その一振りは肩口まで切ったところで止まっていた。

剣の炎は肌を溶かし、血を煮立たせ、肉を焼き、骨を焦がしていた。

一誠の顔も、あぶられている。

その激痛たるや、肉体に焼けた剣を突き刺される痛みたるや、それだけで死にかねない。

だが、一誠は無表情を失わなかった。
極めて冷静に、もう片方の腕を白銀の鎧に押し当てていた。

「だがおれの腕、横には斬れても・・・」

腕一本の犠牲と引き換えに間合いをつめた男は、チェックメイトをかけていた。

「縦には斬れまい！」

その籠手に覆われていた腕は、分厚い『装甲』となって一誠の命を守りきった。

「しまっ・・・」

「遅い・・・白虎の型・・・！」

生きている腕に、白銀の鎧に押し当てられている腕に赤い籠手が出現する。

それだけではない。全身から噴出していた魔力が拳の一点に集中する。

防御を考えない、捨て身の特攻形態白虎の型。

傷は痛み、魔力も供給されない。

もはや、先ほどまでとは比べ物にならないほど弱体化していた一誠ではあったが、全ての力を残った拳に当てていた。

「・・・十連無空波！」

直後、凄まじい振動がガウェインを揺さぶった。否、揺さぶり続けた。

人間には出せない出力で、人間には出せない連射速度で、人間には耐えられない攻撃が連続で叩き込まれる。

ガウェインには、この攻撃が理解できず、また抵抗することもでき

ない。

「片腕で恐縮だが、最大輪・・・十連六王銃！」

無空波とはリズムの異なる衝撃波が、追撃として鎧越しにガウェインを蹂躙する。

怪物の、身体能力にまかせた無駄の多い、狭い間合いでの連続攻撃。

しかし、それはもはや令呪を除いては脱出不可能の蟻地獄。

「十連空牙！」

開いた掌から、その指から、密着している鎧に真空波が叩き込まれる。

これも連続だ。度重なる衝撃で鎧そのものに亀裂が走る。

レオナルドは、ここに来てようやく反応ができた。何かしようとして、ようやく気付いた。

なにもできないのだ。

彼は、明晰な頭脳で打開策を練ろうとした。しかし、脳内によぎる案はずべて却下できた。

こちらは令呪を全て残しており、加えてこれは決勝戦である。残り2画を使っても全く支障はない。

だが、向こうには1画残っているのだ。

現状、不利な状況から離脱させなければならないが、ネロも追いすがらせることができる。

2画両方を使わなければ、離脱すらできない。

しかし、離脱したとしてもこちらは既に大ダメージを負っている。

向こうも同様だが、おそらく岩にかじりついてでも攻撃は止まらないだろう。向こうにとっては、唯一の勝機だ。

「十連無間！」

では、殺せ、と命じるのはどうか。不可能だ。
既に、ガウェインは剣を取り落としてしまっている。どうやっても反撃などできない。
では回復させるか？
それも否だ。時間稼ぎにしかならない。
また、既にネロは少し前から必死で回復のアイテムを大量に使用しており、
一誠の腕は、出血が収まりつつある。
優秀な人間でしかないレオナルドでは、反応できない速度で事態に対処し始めていたのだ。

「一点集中・・・」

コードキャストによる支援も不可能だ。既に魔力が尽きている。
向こうのアイテムが尽きたのであれば、こちらも相当の魔力を消費している。
であれば、いかに破格であるとはいえ人間でしかないレオナルドは、当然限界を迎えていた。
だからこそ、兵藤一誠に少し遅れる形でガウェインもステータスがダウンしている。
故に、連続攻撃になすがままなのだ。

「十連・・・」

どれほど魔力があっても、使い続ければ枯渇する。
そんな、当たり前の可能性をレオナルドはここに至るまで想像すらしていなかった。
なぜか？
なぜなら、格上を相手に魔力が切れることは敗北以外の何物でもな

いからだ。
想定する必要の無い敗北への道など、考える必要がない。

「脚波・・・」

レオナルドは、勝利への道を想定する機能は十全に持ち合わせていた。
だが、どうなったら敗北してしまうのか、という点にはまったく思考が及ばなかったのである。
それが即ち、敗北を知らない王の、致命傷となる・・・。

「貫手！」

明確な欠陥だった。

「その体技」

ヒビだらけとなった白銀の鎧。
その鎧に押し当てられた、赤い籠手に覆われた貫手。
肘への連続の膝蹴りによって後を押され、鎧を突き破っていく。

「竜の鱗を砕き」

鎧を一度突き破ってしまえば、人体など紙の様なもの。
魔力が尽きて空となったサーヴァントの肉体。
その皮膚、肉、骨など貫手は豆腐のように貫いていく。

「竜の肝を潰し」

その先には、絶対的な急所、心臓が存在した。
それもまた、穿たれる。

「その魂を刈り取る・・・」

標的からこの上なく明確に命を奪う。
接近した間合いからの、有無を言わさぬ連続掘削貫通穿孔攻撃。
その名も・・・。

「滅龍奥義・・・分子振動貫通拳！」

血に染まった腕を引き抜いた兵藤一誠の、勝利を決定付けたことを確信する咆哮。
直後ガウェインの体から、一切の力が失われた。

「・・・完了！」

「我が剣よ！」
「・・・陛下」
勝者となった主従は、互いをねぎらった。
ネロは外傷こそないものの、魔力切れにより疲弊しており、足取りもおぼつかなかった。
何より、愛するサーヴァントが腕を失ったことで酷く動揺していた。
対する一誠は、腕を失い魔力を失い、もはや余力などなかった。
しかし、己の足でしっかりと立ち、残った腕で駆け寄ってきたネロを抱きしめた。
「すみません。アイテムが尽きる前に勝負をつけられなくて」
「かまわぬ・・・。よくやった、我が剣よ」
安堵の涙を流し続ける顔を一誠の服に押し付け、血で体が汚れるのも気にせず抱きついていた。
そんな、勝利を得て喚起する赤いセイバー組と違い、

白いセイバーとそのマスターは、消滅の運命を粛々と受け入れていた。

「・・・なるほど、これが僕の欠陥でしたか」

序盤から終盤まで、勝利への絵図を描ききる。それは確かに王として必要な能力。

しかし、それだけでは片手落ちだ。

どうすれば敗北するのか。その可能性が頭をよぎらないことは、王としての明確な欠陥だ。

雪辱を晴らしたいという想いと、それが果たせないという無念。

そして、全力を出しつくした達成感と、自分に欠けていたものが満たされた満足感。

その中で、少年王は朽ちていく。

死の壁に閉ざされた決戦場の中で、どこか、空虚さを感じさせる表情のレオナルドは、

心臓を抉られた騎士にねぎらいの言葉をかける。

「ガウェイン・・・。僕のミスで、あなたを敗北させてしまいました。申し訳ありません」

「いいえ、レオナルド。あなたの指揮に誤りはありませんでした。ひとえに、私の力不足によるものです。あなたは・・・まさしく王でした」

死の壁を隔てて、やはり憔悴しきったネロと一誠は、そんな主従を見ていた。

一誠は、腕の痛みに苦しむよりも、精神的に何かをこらえていた。

それが、ネロには理解できない。一体、このセイバーは何を抱えているのだろうか。

「すみません、そして、ありがとう。

僕をここまで連れてきてくれて」

「・・・」

一誠は、その言葉を聞いたとたん更に表情を歪ませた。

それは、怒りというよりは哀愁に近かった。

そんなことは気にせず、というより見る余裕のなかったレオナルド

は、

深く、王として騎士に感謝の言葉を述べた。

「よくやってくれました。ガウェイン・・・」

「ふざけるな！」

片腕を、血肉を失って尚、兵藤一誠は力の限り叫んだ。

怒りからではない。悲しくて、哀しくてたまらなかったのだ。

謝罪するべき人間を、間違えていることが。

その咆哮に、あっけにとられた敗者の主従。

彼らには、なぜ勝者である彼があんなにも泣きそうなのか理解できない。

「敗北を知らないだと？

敗北を恐れないだと？

そんなことが欠陥であるものか！」

全く持って、見当違いと言わざるを得ない。

敗者となった主従は、敗北を経ておなじ『王の欠陥』に思い至っていた。

しかし、それは兵藤一誠にとって欠陥でもなんでもないことだった。

なぜなら、彼にとって王とは戦場で戦うものではないからだ。

であれば、少なくとも敗北を戦場で学ぶこと。そのこと自体が間違いなのだ。

「お前は！

・・・いやあなたは・・・。

そもそもなぜこんなところに居る・・・」

語気を沈めて、一誠は尋ねた。

しかし、それは返答を期待してのものではない。

それが証拠に、一誠は返事も聞かずに、ぽかんとしているレオナルドに言った。
「お前と同じハーウェイを名乗る男と闘ったとき、そいつは死ぬと知っていて全ての令呪を使い切った・・・。
俺を殺すことは叶わなかったが、それはお前を優勝させる為だろう」
気付けば、一誠は涙を流していた。
この、余りにも視野の狭い男が王だとは認めたくなかったから。
現場のことなど全く意に介していない男が、悲しくてたまらなかった。
「どんな理由かは知らないが・・・、あいつはお前の為に戦った。
そんな亡者に礼を言う前に、あいつに謝罪するべきだろう・・・」

いや、そもそも・・・。

「王様が、現場にしゃしゃり出てくるな・・・。
それはあなたの仕事じゃないだろう・・・」

ハーウェイ家次期当主、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。
彼がこの聖杯戦争に参加することになったのは、一族の総意と言っていい。
だが、本人もそのつもりだった。
国家以上の力を持つ聖杯を余人に渡すわけにはいかない。
だからこそ、レオナルドは戦争に参加した。

それはつまり、現場の人間を全く信用していないことを示している。

「ヒトは、裏切るさ。
失敗もする。罪を犯す・・」

兵藤一誠は、涙で前が見えなくなりながら、それでも必死に訴えた。

「だけどな、だから信じるんだろう。

それができない奴が、王を・・・名乗るな！」

その赤ん坊が、魔獣創造を？

ーーーーはい。検査も行い、はっきりしました。今は寝ていますが、泣き出すと魔獣を生みます。

そうか・・・。

ふむ、魔力量はすでに最上級悪魔クラスだね。成長すれば悪魔の中では随一となるだろう。

かわいい～～！

凄い有望株だね、ふわ～～。でも、それまで平和が続くかな？

続かせるさ・・・。それが我々の義務だ。

ああ、そうだったな。

わたし、頑張るよ！

僕も、部下に言っておくよ・・・。

それで、一誠君。

ーーーーはい。

その女の子を、養育して欲しい。すまないが、その子どもを育てられるのは君だけだ。
多くの不自由を負うことになると思う。だが、任せてもいいかい？

ーーーー是非もありません。

そうか・・・。
その子には、冥界の未来がかかってる。
頼んだよ。

勝者である一誠は、嗚咽しながら黙った。
いいたいことが尽きたのではない。もう、言葉にならなかったのだ。
同じく現場の人間であるユリウスの献身が、全く無視されていたことが。
どんな理由で闘ったにせよ、その働きは、決して忘れられていいものではなかったはずだ。
「・・・そうでしたね」
レオナルドは、自嘲しつつ拳を握り締めた。
こんなにも多くのものが、自分に欠けていたことが許せなかったのだ。
そして、今更気付いたことが。
「あなたの言うとおりだ。
僕は、人間のことなど何もわかっていなかった。

本当の意味での感謝・・・、それすらしていなかった。
当然だと受け取っていた・・・」
正しい道を歩み続けることのできない、必ずと言っていいほど失敗する『人間』。
それを見下していた『王』。
彼は、結局なにも分かっていなかったのだ。
ヒトは、完璧でないからこそ、ヒトを信じて、感謝するのだと。

それは、ガウェインには思い至らなかった結論。
まだ、王が剣を持って戦場を駆ける時代だった彼には、理解できない理屈。
ああ、そうだったのか。そう思うことすら許されず、太陽の騎士は消えていった。

「すみません、兄さん・・・」

それを追う様に、年相応にひたすら悔いる少年は、やはり何も残さず消えていった。

残されたのは勝者。

ここに、聖杯に願う資格を得るものが決まった。

おまけのランサー編

「ヴラドⅢ世・・・。私と同じ吸血鬼の元ネタね」

「・・・お前、それ絶対本人の前で言うなよ?」
「なによ、別にいいじゃない。本当なんだし」
「本人は気にしているみたいだし、あんまり突っつくな」
「なによ・・・あいつのほうが殺してるじゃない!
私は１０００人も殺してないし、あいつは串刺しだけで2万人でしょう?
あっちのほうが極悪人じゃない!」
「いや・・・それは・・・うん・・・」
「でしょう?」
「・・・」
「どうしたの?考え込んじゃって」
「いや。確かにお前のいうとおりではある。
確かに侵略者であり異教徒とはいえ、国を守るためとはいえ、人道に反する行いをしたことは事実だ。
それは認めよう。軍人としていいたいことはあるが、それは軍人の理屈だしな」
「・・・じゃあ、どうしてそんなに辛そうなのよ」
「いや・・・。昔蹂躙した奴のことを思い出しただけだ」
「・・・」
「あいつらは、聖書の勢力に土地も信者も奪われていた・・・。
あの戦争、大義は向こうにあったんだ・・・。
それを、おれたちは・・・叩き潰した・・・」
「・・・なによ、しんみりしちゃって」
「お前が悪であることは事実だ」
「・・・そこはかわんないのね」
「だがおれやあの人も、そういう面があるのは事実だ。
それは、忘れちゃいけないよな・・・」

最終回　トワイスの破綻

怪我の治療を終え、もはや憂いの無くなったセイバーとその主は、聖杯への道を歩いていった。

ムーンセルの中枢、万能の観測機へ続く長い道を。

「そなた、この期に及んで未だに願いは無いのか？」

セイバーは、ゆっくりと道を歩きながらたずねる。

電子的に、歩くたびに変わっていく風景も、正直二人には余り意味が無い。

というのも、超自然的であればあるほど、ああ、所詮ＣＧなのだな、と納得してしまうからであろう。

もちろんそれが、まさしく神の如き存在の生み出したものであろうことは真理。

しかし、それを読みとけない二人には、落陽に勝る感慨を与えなかった。

「ええ、そうですね・・・。

生前、願いはおおむね叶っていましたし・・・」

嘗て一誠が征した神話間戦争において、多くの犠牲はあった。

しかし、その彼らは救済を求めていたわけではない。各々祈りや願いを抱えて、そして闘ったのだ。

そんな彼らの救済など、自分が関わっていい領分ではない。

それに、敵にも味方にも闘うだけの理由があったのだ。

それは、戦争以外では解き得なかった、否、戦争以外では解消し得ない彼らの蟠り。

命に勝る、尊厳に関わること。

故に戦争そのものもまた、否定することができない。

戦争など、所詮結果に過ぎない。

どのような形であれ原因があり、過程を経て、結果に至ったのだ。

結果だけ見て否定するなど、いっそ滑稽である。

だから、あの戦いもまた否定することができない。

「欲しいものは、働いて金を稼いで買えました。

金で買えないものは、全部仲間や友人がくれました。
だから、願いなんてありません」
「そうか・・・」
少し寂しげに笑う兵藤一誠を見て、ネロも少し誇らしげに笑った。
彼の気持ちは分かる。自分も、生前のことは満足したわけではない。
だが、後悔も無いのだ。腐敗を正そうとしたことも、民草を愛したことも。
だからこそ、ネロもまた聖杯に託す願いなどもって居なかった。
「では、聖杯の真偽を確かめるとするか。
万能の願望機、その在りようをな」
「そうですね、本でも読むように可能性を覗くのも楽しそうだ」
もしも、だったら、れば。可能性はそれこそ無限大だ。
そのなかで、幸福に生きた自分も居るだろう。祝福されていた自分も居るだろう。
それらを見て、羨んだり、苦笑するのもいい。どうせ、お互い死人だ。時間はたくさんあった。
飽きたらまたまどろみに沈めばいい。もうとっくの昔に、次の代にバトンを譲っているのだから。

そんなことを談笑しつつ歩くと、開けた場所に至った。

そこは、聖杯があるとは思えないほど寂れた、荒野のような墓所だった。
ただ、その中心には中枢であろうキューブが浮いていた。
そして、その直下には一人の男性が立っていた。白衣で、そして一切生気を感じない表情でそこにいた。
「・・・」
その視線が、ネロと一誠に向けられる。
その、無機質な殺意に緊張する二人。
磨耗し果てた、というべきその男の敵意は、まさしく厭世的であっ

た。
ネロをかばうように、一誠は一歩前に出た。
「何者だ。ここは聖杯戦争の優勝者だけが立ち入れる場所のはずだ」
「・・・」
一誠の問いに、男性はため息をついた。
まるで、分かっていないのはお前のほうだといわんばかりに。
「それはこちらの台詞だ。
不正規なマスター達よ。もっとも強く、そしてもっとも無意味な優勝者達よ」
吐き捨てるように、男は断じた。この優勝者を、認めないといわんばかりに。
ネロは顔をしかめた。しかし、一誠は警戒しつつも納得した。
まあ、事実だ。一般の参加者からすれば理不尽極まりなかっただろう。
その一般の参加者の枠の中に、ユリウスやレオナルドすら含まれているのだ。
そりゃあ、観客からすれば見ていてつまらないだろう。
「・・・ムーンセルは、管理の怪物だ。だが、だからこそ本来なら発生し得ないイレギュラーが発生しうる。
私もその一人だが、君たちに比べれば可愛いものだ。なにせ、君たちはここまで順調に勝ち進んだのから。
負け続けた私とは偉い違いだ」
そういって、首を振った。
ああ、理不尽だ。と嘆いている。
自身をイレギュラーと名乗った男は、若干の敵意を込めて一誠の目を睨んだ。
「どうやら願いは無いようだが・・・一応いっておこう。
君達のような、不正規のマスターでは聖杯で願いをかなえることはできない。
中枢に接続した瞬間、違法なデータとして消去されるからね」
「そうか、忠告はありがたくいただこう。では、そなたもそうなのだな

?」

ネロは、男に敵意を向けつつそう言った。

「そうだ。私は、ここで私と同じ願いを抱えている優勝者を待っている。

私の代わって願いをかなえてもらうためにね」

「それはまた、むちゃくちゃな話だな」

一誠は呆れた。

なぜなら、この男がどんな願いを抱えているにせよ、同じ願いを持つものが優勝するまで待つというのは、

それはもう気の長い話だからだ。

本線に参加した１２８人の中で同じ願いを持つもの、というのもまず居る可能性が低く、

そして居たとしても優勝する可能性は1パーセント以下だ。

更に言うのならその優勝者が現れたのなら、この男が待つまでも無く、頼むまでも無くその願いをかなえるからだ。

つまり、この男は、自分の願い以外の願いを否定しようとしているのだ。

それが、悠久のときを必要としたとしても。

そりゃあ、磨耗もするだろう。

まるで、壊れて同じことをし続けている機械のようだ。

「・・・理解できないかな?」

「ああ、不毛に過ぎる。そこまでして、何を願うつもりだ」

まあ、個人的な願いではないだろう。

もしもそうならば、どんな優勝者でも軽く頼めばかなえてくれそうなものだからだ。

また、個人的な願いならば、同じ願いを抱えているものが現れる可能性もまず無いからだ。

おそらく、国や、地球全体に関わることなのだろう。

「・・・戦争を。この世界に終わることの無い戦争を」

どこか、疲れきった口調で、そういいきった。

まるで、願ってやまない夢を語るように、悪夢を語った。

「君達は、今の地球についてどこまで知っている?
資源は枯渇しつつあり、戦争が存在せず、衰退と平和が蔓延している老衰のような文明の姿を」
男は、嘆いていた。
それは、まあ分かる話だ。衰退していく世界を見るのは、まあ楽しくは無いだろう。
それが平穏に満ちていたとしても、未来に希望が持てない世界というのは。
しかも、それが自分ではない。自分の子孫たちの未来だとすれば尚のことに。
「だからこそ、戦争を。停滞を破壊する戦争を。
絶えることのない戦争を。そして、その先に発展を」
だが、その解決策が戦争だというのなら、単純すぎるというか、論理が飛躍している。
いや、そもそも万能の器だというのなら、戦争しなくても発展できる未来も選択できそうなものだ。
「・・・貴様、壊れているのだな」
ネロは、目の前の男を読みきった。
この男は、まさしく壊れた機械なのだ。
もとがどのような男かなど関係ない。
純然たる事実として、この男は目的と手段を一体化させてしまっているのだ。
目的に対してあきらめることができず、だからこそ、それと混じってしまった手段も覆すことができない。
まさしく、プログラムされたとおりにしか動けない機械そのものだ。
「そうだな、だがそれは私に限ったことではない。
戦いに犠牲はつき物だ。それを合理と捉えるか狂気と捉えるか。
その程度のものだろう。人の在りようなど、環境でたやすく変わるものだ」
「・・・賛同できないな」

一誠は、戦闘時と同じく無表情に至っていた。
それは、もはや戦闘が不可避であることを示している。
「・・・おれは、お前の言っていることは分かる。
だが、戦争が必要というのは、あくまでも結果論だからだ。
そして、おれが戦っているのは『戦いたくない人』を戦わせないためだ」
そこは、軍人として見逃せない。
無辜の民を守る為、とは言わない。人は皆罪を犯しているのだから。
だが、それでも戦うと決めている。
世界がどんなに腐っていても、戦いを望んでいない『極普通の人』たちのために戦う。
顔も知らない、自分達のことを嫌っているかもしれない人たちを守る為に戦う。
顔を知り、自分のことを好いている人を死地に送り込んででも戦う。
それが、軍人というものだからだ。
「戦いを求めるのは、人々の自由意志だ。だれかが、神のようなものが指し示すからじゃない！」
それが愚かしさからであろうと、生存の為であろうと、利益の為であろうと。
それは、戦う者達が求め、決めることだからだ。
「もとより、議論など交わすつもりは無い。
そもそも、君たちはここで消える定めだ」
着た道は既に無く、行く道は断崖絶壁。
なるほど、消える定めといえる。
しかし、だからなんだというのだ。
聖杯戦争を生き残った主従は、構えた。
もしも、自分達が勝ち残ったことに意味があるのだとしたら、それは不正規をもって不正規をただす為だ。
消える定めは受け入れる。だが、それはこの男を成敗の前から排除

してからだ。
「我が剣よ、勅命である。あの亡霊を排除せよ！」
「是非もありません！」
臨戦態勢をとる優勝者。
しかし、それを見ても男は全く動じない。
まるで、自分の勝利を疑っていない。

「では、排除させていただこう。
君が如何に強力なサーヴァントであろうと関係ない」

「さあ、見るがいい凡百の英霊共よ。
これが、ムーンセルの蔵書が私に与えた救いの姿・・・」

「唯一絶対の神。その威光にひれ伏すが良い」

我が名を称えよ　我が　栄光に満ちた　並ぶ者無き　我が名を称えよ…

神霊　Y・H・V・Hが現れた！

おまけのキャスター編

「あれー、どうしたの一誠君、それから・・・天照さんの分霊さん？」
「シッダールタ様！あなたこそどうしてここに？」
「御仏きちゃった！・・・ていうか、どうしてあなた一人なんですか？
もう一人居たと思うんですけど・・・（私の元カレが）」

「えっとね・・・、すごい疲れている人がいてね・・・。
まあ、呼び出されたから色々話を聞いたんだけど、
なんだか話しているうちに気持ちに整理が付いたらしくて、
解脱してくれたよ！」
「・・・さようですか。
さすが、リアル救世主ですね」
「そうですか、シッダールタ様も召喚されたのですね」
「ていうか、君もう死んじゃったんだ。早いね、何歳？」
「３０前ですね。不甲斐ないことです」
「何言ってんの。死んでからが本番だよ、この職業は！」
「え？いや自分は軍人なんで・・・」
「いやいや、イエスのお父さんが待望していた後継者じゃない・・・」
「いや、その・・・」
「若い頃は私もいろいろあったんだし、頑張ろうよ！」
「・・・流石ご主人様。めちゃくちゃ期待されてますね」
「あ、イエス呼ぼうか。色々話したがってたし」
「そんな、聖杯の前で禅問答ですか・・・」
「これが本当の聖杯問答ですね・・・」

エピローグ　ネロの願い

神霊の出現。聖杯戦争の大前提を覆すその異常事態。
一誠は、ネロへの負担も考えず即座に次代を担うものに至り、かつ龍人へと転じる。
だが、神霊の上位種であっても所詮英霊の枠に貶められたもの。
本来、ただ赤龍帝の力だけでＹ・Ｈ・Ｖ・Ｈを打倒できる一誠も、今は億分の一ほども力を発揮することは叶わない。

警告を司る神器

十の災い

まず、墓所に満ちた水溜りが突如として赤く染まった。
さらに、蛙が、ぶよが、虻がどこからとも無く出現し、足元を埋め尽くす。
それは、まさしく単なる警告だったに違いない。
拳大の雹が、それこそ雨のように降り注ぐ。
雪崩と思うほどの密度を持って、弾雨となり一誠の体を攻めさいなむ。
それがやんだかと思うと、墓所を埋め尽くす無数の蝗が出現し、一誠に群がっていく。
単なる蝗ならば、サーヴァントにとって脅威になるはずも無く、防御に秀でた一誠ならば尚のことだった。
しかし、赤い龍の鱗はその蝗の持つ獅子の牙によって噛み千切られていく。
鉄塊も全く意味を成さない。拳を振るおうにも、自分に群がりすぎてその隙間がない。
世界全てが敵になったかのように、空間を蟲が埋め尽くしていく。
その最中で、一誠は己が主を案じていた。その程度のことしかできなかった。

肩にとまっている白い鳩。それだけはどうやら無事なようだが、それがなんだというのだ。
何をしたいのだ、こいつは。一誠は腹立たしさを憶える。
しかし、突如として圧力は消えた。
既に、勇壮なる龍の鱗は健常な部分が少ないほどに引き裂かれていた。
初手で、警告で既にこのざま。
英霊では、神霊に及ぶ道理は無い。それを、まさしく分かりやすく証明された。

浄化を司る神器

メギドの火

それは、余りにも見覚えのあるものだった。
一度自分の半身を焼き尽くした火。神が最終戦争において用いる最終兵器。
それが、ただ自分に向けて放たれる。
一誠は、余力も考えず滅神奥義で防御した。
それが、いかほどの意味があったのか。浄化の火は一瞬にして墓所を嘗め尽くした。
防御していたはずの一誠は、大きく吹き飛び墓標に激突した。
火は、現れたとき同様まさしく一瞬にしてその足跡を消していた。
焼け爛れた一誠の肉以外、痕跡は見当たらない。

一誠は、肉体的な痛みでは屈しない。精神的な絶望にも屈しない。
動く体がある限り、力をふるって戦うだけだ。
眼前に出現しているそれに向かって猛進する。
それしかできない。それだけしかできない。

神の炎をまとった龍人は、まさしく規格外の力でもって肉薄する。
その一撃、太陽の輝きでできた鎧すらヒビを入れるだろう。
しかし、それは所詮英霊レベルの話。神霊にはいささかの意味もない。

生存を司る神器

ノアの箱舟

純粋に、炎の剣と違い真にその機能を持った巨大な船。それが盾となって一誠とY・H・V・Hを隔てる。
英霊の規格外の一撃は、神霊のそれに全く、傷一つ与えることはできなかった。
それでも一誠は止まらない。
傷ついた体を押して、異形の拳を幾度と無くたたきつける。
傷ついていくのは拳ばかり。一体どれだけの意味があるのやら。
栄光に彩られた無敵は消え去り、当人の持つ愚直さが浮き彫りになるその光景は、滑稽でもあり哀れでもあった。

契約を司る神器

石版と聖櫃

それを哀れんだのか、一誠の体が動かなくなる。
これも知っている力。物理法則に干渉する摂理の力。
本来、同格には極めて効果の薄いはずのそれが、一誠の体をがんじがらめに縛る。
概念でも呪詛でもない。神の権能による拘束。
それは、英霊風情が抵抗できる道理は無く・・・。

破壊を司る神器

それの、予兆を感じた瞬間、一誠は全てをあきらめた。
知っている。あれはメギドの火すら凌ぐ最強の神器。
全ての世界の命を焼き尽くす最終兵器ではなく、極一点の全てを破壊する最強神器。
あれを喰らえば、グレートレッドすら・・・。その特性上、耐え切れるものではない。
だからというわけではないのだろうが、一誠の体は重圧から解き放たれた。
地に落ち、倒れる。
重圧は消え、蝗に潰されているわけでもないのに、指一本動かない。
単純に、もう力が残っていないだけだ。出し尽くしてしまった。もう何も残っていない。

ああ　そういえば
ほんの少し前に
似たようなことがあったような

拳を握れ、顔を上げよ
命運は尽きぬ

なぜなら、そなたの運命は、今、始まるのだから

仰向けに倒れた一誠。その虚脱した顔を覗き込む美しい少女の姿があった。

誰だったか。

気の抜けた頭では、思いつかない。思い出せない。

呆けた頭を必死で動かし、ついに結論に到達した

「セイ・・・バー・・・？」

その呼び名は、間違っていて、正解だった。

「うむ。その通りだ、奏者よ」

酷く、疲弊した少女は、しかし笑っていた。

もしも、この二人を第3者が見ていたのであれば、少女の手に残っている令呪が残り1画になっていることに気付いただろう。

攻撃を凌げ。

そんな、単純極まりない命令を、彼女は後押しとして使ったのだ。

だから、英霊の身で神霊にあがなえたのだ。

「・・・見よ。余の、そなたの勝利だ」

一誠は、もう首を動かす力すら残っていない。
だが、気配で分かる。
そこには、神霊Y・H・V・Hがいる。
他には誰も居ない。

「あやつめ、いかなる外法を用いたか分からぬが、神霊を使役するなど分不相応にもほどがあろうに。
まさか、そなたがここまで粘るとは思わなかったのであろうな」

神霊、Y・H・V・H。この地上で最大の版図をほこる唯一神。
その威力を持ってすれば、並みの英霊ならば初手で消せるであろう。
しかし、一誠は、2手凌いだ。2手抵抗した。
5手には、ここに居た狂った男が耐えられなかった。
いや、人間の分際でよく4手まで持ちこたえたと評するべきなのだろう。
よほど、あの男は願いが大事だったに違いない。

対話を司る神器

シナイ山

気付けば、周囲の風景は墓地から殺風景な山に変わっていた。
それは、寂しくもありながら、しかし荘厳な場所だった。
そこは、嘗て預言者と神が契約を交わした場所だった。
そしてここに至って、全く口を開こうとしなかった〝それ〟が口を開いた。

やあ、ひさしぶりだね。

一誠にむけて、親しみを込めて語りかける。
先ほどまで、慈悲も寛容さも無い攻撃をしたそれとは思えないほど、その声は穏やかで安らぎに満ちていた。

君と、こうして話がしたくてね。
こういう形になってしまった。
すまない。

〝それ〟は、一言だけわびた。
そんな、不条理きわまる言葉を、愛するものを痛めつけられたネロすら受け入れてしまう。
それが、神の威光だった。

君だけだ。
7人いる兵藤一誠の中で君だけが、槍を目覚めさせることができた。
そして、他の6人も、君のおかげで次代を担うものに至ってくれた。
本当にありがとう。それが言いたかった。
これで、13ある神器は全て託し終えた。

ネロには、その言葉の意味が理解できない。
一誠も、頭が働かず理解が及ばない、

しかし、それでも〝それ〟は言葉を続ける。

また、話をしよう。
シナイ山は、すでに託している。
そのときは、もっと穏やかに語り合おう。
楽しみにしているよ。

一方的に神託をのこして、〝それ〟は消えた。
はた迷惑な話である。
しかし、神とはそういうものなのだろう。
そう思うことにした。

「・・・我が剣よ。そなたは神霊にも知己が居るのだな・・・！」
ネロは気付いた。
己が剣の、その姿が消え行くことを。
限界を超えた酷使に、英霊の枠が持たないのだろう。
男は、消滅しつつあった。
ネロは、そんな満身創痍の半死体を、重いものなど持ったことのなさそうな細腕で肩を貸し、聖杯への階段を上っていく。
「なあ、我が剣よ。余は決めたぞ。何を願うのか」
返事は無い。
当然だ。全てを出し切った男には、思考するだけの力も無い。
だが、それでもネロは嬉しそうに語りかける。
「すばらしい願いだ。そなたもきっと喜ぶであろう」

ムーンセルに消去されるまでもなく死を迎えつつ、聖杯の中に飛び込んだ主従。
不正規のマスターは消える定めにあろうが、しかし願いの一つぐら

いかなえる暇はあろう。
どうせ消えるのであれば、願いを託してから。
ネロは、そんな軽い調子で傷だらけの従者と共に聖杯に身を投げたのだ。
地球誕生以来の膨大なデータの蓄積された神の頭脳は、確かに一時は彼らを受け入れた。
そして、ネロが願いを託すと同時に消える・・・。

そのはずだった。

消去は、なかなか進まない。というより始まらない。
刻一刻と進むサーヴァントである一誠の衰弱死、そちらのほうが早いぐらいだった。
ネロは、疑問に抱きその原因を探り、仰天した。

「見るのだ、そなたの、そなたの・・・!」

消えつつあるセイバーは、しかし何とか眼を開く。
思考することすらできないほど疲弊した男は、死力を尽くしてまぶたを開けた。
そして、見た。

己が、正体を。

そこには、現実世界でネットの海にダイブしている魔術師、兵藤一誠の姿があった。
単なる学生であり、ただ、偶々たいしたことの無い魔術回路を持っていた彼は、
噂の聖杯戦争に首を突っ込んだ。
そこで、予選でサーヴァントを召喚した折、何の願いも無く参加し

た彼は平行宇宙の自分自身を引き当ててしまった。
そこで、齟齬が起こったのだ。
マスターである兵藤一誠に、サーヴァントである兵藤一誠が乗り移る形になってしまった。
そして、記憶の混乱により再度予選に参加・・・。セイバー、ネロを召喚。

つまり、そういうことだったのだ。

一誠は、嘗て自分が手放した日常を送り、その日常に飽いている自分を知った。
暗闇に閉ざされた脳髄に光が満ちた。
そこには、伝説の武器など持たず、空手も、大雀蜂の薬も持たず、彼女も、仲間も居ない。どこにでも居る普通の学生が居た。

ああ、なんて・・・羨ましい。

一誠は、そのデータを愛した。生前、求めることすら許されないことだったのだから。
そして、自分の滅び行くデータの中からそれを抽出し、地上へ向けて帰した。
癒着した魂の乖離など、ムーンセルの頭脳を持ってすればたやすいことだった。
憑依され帰還した彼は何を思うのだろうか・・・。
記憶が残っていなければ、なんだ、ガセか、と思うであろう。
残っていれば・・・そうだな。

セイバーのおっぱいを揉みたかった!!!!!
であろう。

セイバー、一誠は、崩れた顔で笑い、そのまま消えた。
その表情は、どこまでも穏やかで希望に満ちていた。
それを見て、やはりネロも穏やかに笑う。
「・・・また会おう、近いうちにな」
不正規のマスター、ネロもまた消えていく。

聖杯戦争は、まだ終わらない。

まだ。

ＺＥＲＯ編
ＺＥＲＯへのプロローグ

退屈な日常。
平凡な毎日。
幸福な日々。

ずっと続くと思っていた。
きっと終わらないと思っていた。
絶対に変わらないと思っていた。

「ＣＯＯＬ！
あんた最高にＣＯＯＬだぜ旦那！」
「よき理解者を得て、幸先がいい。
私も嬉しいですよ、マスター」

それが、たった一人の男のせいで。
その男が面白半分で台無しにした。

その男が召喚した悪魔のせいで。
その悪魔が悪ふざけで壊した。

許せない。
あきらめられない。
こんなところで、終わることなんてできない。

何ができる？
男だけじゃない、悪魔まで居る。
男だけで、私の○さんも○さんも・・・。
悪魔が、最後の家族だった○も・・・。

「じゃあ、この女の子もさ！」
「ええ、そうですね・・・おや？」

そうだ、この男がやったみたいに・・・。
私も悪魔を召喚すればいい。

「あれ、魔方陣にいくよ？
お腹からこぼれてるのに元気だね」
「・・・はっはっは！
どうやら、あなたの真似をして彼女もサーヴァントを召喚するつもりのようですね」
「え？まだ居るの？」
「ええ、あと六騎・・・。
ですが、はは・・・。
そんなことはありえない」

男が唱えていた呪文を唱えようとした。
おなかに力が入らない。
当たり前だ。おなかには・・・が・・・。

「ええ～？
残念だな」
「そうですよ。神は人を救わない。
どれだけ献身しても、祈りをささげても、敬虔であっても」

だけど、だめだ。
あきらめたらダメだ。
こんなところで、終われない。
前に進まなくちゃ。
頑張らなくちゃ。

「だ、誰か・・・」
「無駄です。
あなたに助けなど来るはずもない」
「じゃあ早くやっちゃおうぜ、旦那」
「まあ、待ちなさい。
言ったでしょう?恐怖には鮮度があるのですよ。
ですが、逆にあせりすぎてもよくないのです」
「そうなの?」
「ええ・・・。
見ていなさい、マスターよ。
神は人を救わない。その当然の現実に打ちひしがれる彼女の絶望を」

ふざけるな。
私はあきらめない。
なにがあってもぜったいに。
口からも血が出る。
だけど、血が出るなら声だってでるはずだ。
呪文なんてもう唱えられない。
だから、一言だけ。
全力で・・・。

「あれ、その女の子、手に痣が・・・」
「何ですって?・・・そんなバカな!」

「誰か、助けて!」

悪魔が出てきた魔方陣から、先ほど同様光が放たれる。
そこから現れるのは・・・。

↓学生服の少年
黄金の王者
剣を携えた男装の少女
妖艶な半獣の女性

「サーヴァント、アサシン。
聖杯に望みを抱かぬ者の召喚に応じ・・・参上」
黒いブレザーを着た少年が、魔方陣から荘厳な空気を持って出現する。
分かる。
服装が現代風でも、顔が普通でも。
雰囲気だけで彼がどういう存在なのか。
人間とは規格の異なる存在なのだと理解できる。

「ふざけるな!」

先に現れた悪魔、たしかキャスターと名乗った大男は、新しく現れたアサシンに罵声を浴びせた。
憤慨している。激怒している。
私の家族を殺した悪魔は、明らかにそれと分かるほど怒りに震えていた。

「神の手先め!
いまさらなんだ!
この下賤な小娘を救いにきたというのか!」
「神の手先・・・?
いや、手先ではないのだが・・・」
「かの聖処女は救わなかったというのに!
こんな小汚い信心も無い少女を救うというのか!」
「・・・ああ、なるほど。

そうか、お前も神に裏切られたクチか・・・」

アサシンは、申し訳なさそうに俯きつつしゃがみこんで、
床を這っていた私を、こぼれでた内容物ごと抱え上げる。
自分の体が汚れることもいとわず、優しく、暖かく抱え上げた。
とても、安心した。救われた気がした。
まだ悪魔から逃れていないというのに、私は、もう安心しきっていた。

「ああっ！
新しい悪魔の人！
その子をどうすんの？」
「下がっていなさい！
この男は神の下僕、もっとも軽蔑するべき存在です！」
「下僕でもないがな」

キャスターは、手に持った本を読み上げた。
突如、というべきか。
キャスターの背後から無数の蛸の化け物が出現した。
それは、私の○を食べた・・・。

「マスター、君の事情は察するに余りある。
だが、まず離脱する・・・！」
「待て、神の下僕！」

わたしのいしきは

眼が覚めると、そこはどこか、ビルの一室だった。

家具はおろか、壁紙すらないむき出しのコンクリート。
自分は、毛布に包まっていた。それ以外は、ここには何も無い。
明らかに、空いた一室であることは明らかだった。
窓の外は、夜。カーテンも無いガラス窓から人口の明かりが見えた。
不意に、わずかな痛みを感じておなかをさする。
そこには、女の子である自分にとって、非常に大きな傷跡が乱雑に走っていた。

―――――――――――――――

意識が遠くなりかける。
なにか、大事なことを忘れているような。
「どうやら、眼は覚めたようだな」
学生服の少年は、どこからか調達したらしい缶のお茶を持って、一室に入ってきた。
「・・・まだ、暫く横になっていたほうがいい。
召喚の疲れもあるだろうしな」
そういって、私にふたを開けてお茶を渡す。
飲むと、ようやく自分が酷く咽が渇いていることに気付いた。
熱い飲み物でなかったら一気に飲み干していたかもしれない。
熱さと乾きに苦しみながら、何とか飲み干す。
「・・・すまない。
気が利かなかったな」
その様子を見て、アサシンは申し訳なさそうに俯いた。
気にしないで、ありがとう。
素直に礼を言う。
それを聞いても、アサシンは沈んでいる。
どうやら、引きずる性分のようだ。
「いや、ほんとすまない。
申し訳ない」

こうしていると、ただの気のいい学生にしか見えない。
しかし、超然とした雰囲気はそれでも伝わってくる。
なんとなく、この「存在」は私たちとは違うのだと思い知らされる。
「いろいろ、話さなければならないことがある。
だが、先に自己紹介といこう」
そういって、アサシンは立ち上がり堂々と名乗った。

「兵藤一誠。アサシンのクラスで召喚された身だ。
よろしく」

アサシン。
確か、暗殺者という意味だ。
目の前の少年からは、そうした後ろ暗さは感じない。
むしろ、堂々たる英雄のようだった。
まるで、いわゆる伝説の勇者のような・・・。

「それで、マスター。
あなたの名前は?」

答えようとして、頭が痛くなった。
思い出せない。
自分のことが、自分の人生が。
最後に憶えているのは赤い・・・。

「マスター?」

アサシンは、不思議そうに首をかしげている。
確かに、名乗りもしなければ不審がられるだろう。
名前を確認しようと手を見るとそこには・・・。

岸波白野

↓フランシスコ・ザビエル

フランシスコ・ザビ・・・！

「え？フランシスコ・・・？」

いや、ちがう。
なんでそんなことが書いてあるんだ、あたしの手。
一体何があったんだ。
そうだ、私の名前を思い出した。

岸波白野だ。

第４次聖杯戦争にもっとも全体に影響を与えたものはいったいなんであろうか。

最強無敵、絶対的な強者ギルガメッシュではない。
彼が、仮にカルナのような他の強力なサーヴァントだったとしても、遠坂陣営にたいした影響は無い。
当然、言峰の目覚めに影響はあるだろうが、戦争全体をみると衛宮切継と戦う相手が代わるだけだ。
第五次を考えれば影響は甚大であろうが、第４次に限定すれば大差は無い。

清廉潔白、騎士の中の騎士アルトリアでもない。
これも、アインツベルンが用意する強力なサーヴァントでありさえ

すれば何の問題もない。
もちろん、キャスターにとっては重大であろうが、それでも大筋では影響が無い。

極悪非道、魔術師殺し衛宮切嗣でもない。
彼自身は手段はどうあれ、酷く真面目に戦争をしていただけだ。
更に言えば、堅実に一人一人を殺害していただけだ。
大掛かりな手段で複数の参加者を一網打尽にしたわけではない以上、居なくても変化はない。

では、一体誰が？

間違いなく、最弱の英霊ハサン・サッバーハである。

最も慎重を期していた遠坂陣営が教会から受けていた最大の支援。
間諜の英霊ハサン。
情報収集に特化していた彼らは、戦争全体に大きな影響を与えている。
序盤において、ギルガメッシュに殺されてみることで、各陣営を大きく動かした。
ケイネス・エルメロイが如何に自信家だったとしても、真っ当な魔術師である以上、
アサシンが殺されているところを確認せずに、ランサーで釣りなどしなかっただろう。
魔術により姿を隠していたとはいえ、まさか間諜の英霊の目を欺けるなどとは思わないはずだ。
ウェイバーがライダーに語ったとおり、存在する限り警戒し続けな

ければならないアサシンが、
衆人監視のなかで真っ先に死んで見せたことは大きいのだ。
中盤においては、キャスターの拠点を探り当て、遠坂と教会に『狩り』を提案させる後押しをした。
狩る対象を主催者達が把握し、勝算が高かったからこそ令呪という餌を用意できたのだ。
終局間近にあっては、既に脱落していたとはいえライダー陣営の居場所をあらかじめ探っており、
その情報がアイリスフィールを簒奪する一助になったことは事実である。あくまでも結果論だが。
アサシンが居なければ最後までウェイバーの拠点を把握できなかった可能性すらある。

神ならぬ参加者が、自分の命と願いがかかった戦場で大胆に動くことができたのは、
遠坂陣営のアサシンを用いた情報戦によるところが大きい。

真面目にギルガメッシュが全力で聖杯戦争に臨む、などという珍事が起きない限り、
かくも参加者が順調に脱落していく円滑な戦争にならなかっただろう。

では、この物語はいかにして話が進むのか。

ランサーの挑発行為を発端とした、5体のサーヴァントが一堂に会することも無く、
また、キャスターが狩りの獲物となることも無い。
ウェイバーの拠点が明らかになることも無い。

アサシンが、遠坂に味方しない戦争。
ただ、それだけで大きく物語は様相を変える。

この物語は、ＺＥＲＯ（始まり）に至ることは無い。
誰も望まないＺＥＲＯ（終末）にたどり着く物語。

作者は断言しよう。この物語の悲劇の結末を、誰も予想できないと。

各勢力の現状確認

アサシン、兵藤一誠は私に淡々と語った。
魔術師、聖杯、サーヴァント。
どれもが、自分の常識から大いに外れており理解に苦しんだ。
でも、心のどこかで納得していたのは、目の前の彼が必死だったことと、
彼自身の放つオーラが人間のそれとは違っていたからだろう。
「と、ルールはこうなんだが・・・。
当然、君は魔術師ではない」
私自身、名前以外何も思い出せないのでなんともいえないが、
多分、そんなことは無かったと思う。
私は普通の学生だった。
普通に学校に通って、勉強して、家に帰って・・・。
『かぞく』に・・・。
「・・・自分が思い出せないのは不安だろう。
だが、そうも言っていられない」
アサシンは、私のことを気遣いつつ、それでも話を進める。
そうだ、私もそれだけは覚えている。
あの、この世のものとは思えない、おぞましい群を。
あんな恐ろしいものを操るサーヴァントが、彼を含めてあと六騎も。
「本来、君のような魔術師ですらないものが戦争に参加するなどあってはならない。
だから、引くべきだとは思うんだが・・・。キャスターがいる」
うっすらとしか憶えていないが、あのキャスターは明らかにアサシンと自分を敵視していた。
それはもう、殺意の域だった。
「あれに、狂人に常人の理屈は通用しない。
間違いなく、どこに逃げても追いかけてくるだろう」
その通りだ。

あれは、ルールなど眼に入ってすらいないだろう。
素人である自分にも分かることだ。
彼は、いかなる事柄よりも私達の殺害を優先して動くだろう。
たとえ、その先に自滅が待っていたとしても。
「つまり、君はあのキャスターが脱落するまで逃げ延びなければならない。
いや、違うな・・・。おれ達の手で殺すことになるだろう」
意外だった。
君は素人だ、首を突っ込まずに引きこもろう、といわれると思っていたのだが。
「マスター、この状況を客観的に考えてみてくれ。
今、この聖杯戦争は極めてマズイことになっているんだ」
そういって、アサシンは一つ一つ説明を始めた。
それこそ、以下にこの事態がまずいのかを自分にも理解できるように。
「いいか・・・。君と、おそらくキャスターのマスターも魔術師的な意味では素人だ。
これは、矛盾する話だが『一般的な魔術師』から見ると非常にまずい組み合わせなんだ」
なぜだろうか。
さっきの説明ではクラスは七騎。そのなかでセイバー、ランサー、アーチャーが本命。
次いで、強力な宝具を持つライダー。外れとなるのがキャスター、アサシン、バーサーカーなはずだ。
確かに、1対1で戦うなら魔術師よりも剣士や槍兵のほうが有利だと思う。
「暗殺者の最大の利点であり脅威は、どこにいるのか分からないことだ。
だから、向こうはまず暗殺者のマスターを探すだろう。
どんなに隠れるのが上手でも、暗殺者の英霊と比べればたいしたことは無いからな。

だが、君は一般人だ。他の正規の参加者はどうやって君を探し出す？」

そうか。

一般の魔術師はまず魔術師を探すだろう。

しかし、自分は魔術師ではない。だから逆に探すのが難しいんだ。

冬木で魔術師を探すのはさして難しくないのかもしれない。

だが、もしも一般人でしかもこの町に元々住んでいたのなら？

探すことは不可能に近い。

「そうだ、他の参加者はまず確実に暗殺者のマスターを探すとき魔術師を探す。

そして、魔術師を探し続ける限りマスターにいたることは無い。

そういう意味では、著名な魔術師以上にアサシンのマスターに向いている」

情報戦という意味では、こっちは安全なのか。

だが、それはキャスターを除く。彼らは私の顔を知っている。

一般人だということを知っている。

しかも敵対視されている。現状全く安全ではない。

「だが、それは裏を返せば他の勢力は穴熊を決め込むということだ。

なにせ、普通の魔術師は、一般人が参加しているとは思わず、超一流の魔術師が潜伏していると考えるからな。

となると、他の勢力がキャスターを倒すというのも現実的ではない。

居もしないアサシンのマスターに怯えて、引きこもるだろう」

だからか。

キャスターは自分達で始末しないといけないんだ。

だとしたら、気がめいる。あの化け物は生理的にきつい。

思い出しただけで夜一人で眠れなくなりそうだ。

「まあ、もっとも動く奴は動くだろう。

例えば特定の誰かに恨みを抱えている奴とか、

何がしかの理由で切羽詰っている奴とか。

或いは冷静な判断力を失っている奴とか。

そういう手合いは早々に動いて自滅する。
別に、優勝を目指しているわけじゃないんだし、
そういうのは勘定に入れなくていいだろう」
あれ？
今の発言には何か違和感があったような・・・。
質問をしようとして、眩暈がした。
「もう寝たほうがいい。
傷は治したが、血を失ったしそれに・・・」
自分を気遣ってくれる優しい言葉に流されるままに、毛布に包まれてゆっくりと・・・

「君は、家族を・・・失った」
寝付いた、というか気絶した彼女におれは毛布をかけた。彼女には、なによりも休息が必要だ。
眠りは、あらゆる物を沈めてくれる。怒りも、決意も、憎しみも、悲しみも。
握り締めた拳が痛い。
例えば、文明社会で生きていれば車に轢かれて死ぬことは珍しいことではない。
だが、それ以上に車によって人は恩恵を受けている。
車に轢かれて死んだとして、車を世界中から無くせ、とは思わないだろう。
だが、これは違う。違いすぎる。
魔術などという、この世界に存在していても何の利益の無いもののために、彼女の家族は死んだ。
もちろん、マスターが一般人で殺人鬼だったという意味では魔術はあんまり関係ないのかもしれない。
だが、一部の狂人のせいでおれの守るべき一般人が死んだ。

そして、あそこにいたキャスターは・・・。
「ジャンヌ・・・。まさかこんなところで生前の因果に出会うとはな」
聖処女。
戦乙女でも女武者でもない。そう呼ばれる女性はただひとりしかいない。
オルレアンの乙女、ジャンヌ・ダルク。
そして、それにまつわる狂人と言えばジル・ド・レェだろう。ヴラドⅢ世同様神に裏切られた英霊だ。
「天罰を求めて、あらゆる不徳を犯した男」
せめて、おれの手で。
・・・。やめよう、無駄な感傷だ。そんなことより現状を確認しよう。
暗殺者で召喚されたおれの宝具は、ほかの状態と大きく異なる。
なぜなら、おれが暗殺者として全盛期だった悪魔になる以前の姿だからだ。
この時代のおれは完全で完璧な犯罪集団のボスだった。
なにせ、この法治国家で１０００人以上行方不明にしたてあげたからな。
いや、本当に今思い返しても凄い事したわ。
だって、１０００人以上も完全犯罪したんだぜ？
善し悪しは別にして、当時学生だったんだぜ。凄くね？
それはさておいて、今のおれは技量はともかくドライグの力すら持っていない。
つまり、この肉体は宝具たりえない。まったく毛の色の違う宝具が一つ。
そして、もう一つ・・・。
「まるで強姦魔だな」
眠っているマスターを背に、服を脱ぐ。
駒王学園のブレザーを脱ぎ、シャツを脱ぎ、ズボンを脱ぎ、下着を脱ぐ。
今まさにおれは、ぱんつ、履いて、ない。

それはさておいて、体に刻まれた『それ』を一つ一つ確認していく。
胸、心臓の上には竜をあしらった3画の令呪。
おそらく、エリザベート・バートリーが刻んだであろうそれがある。
右腕、肩のすぐ下には稲妻をあしらった3画の令呪。
おそらく、モードレッドが刻んだであろうそれがある。
背中、尾てい骨の辺りには炎のような尻尾をあしらった3画の令呪。
おそらく、玉藻の前が刻んだであろうそれがある。
そして、その・・・。
「あのヤロー・・・」
2個の球とバットに、それぞれ1画ずつ刻まれている華のような令呪。
間違いない。ネロ・クラウディスだ。絶対にそうだ。
あいつなに考えてるんだ。令呪をもって命じるときはここが光るんだぞ。分かってんのか?
光景を想像してしまった。こんな状況じゃなかったら召喚より先に自害を命じるところだ。
わかっててやってるだろ。こいつ。ヒトのナニをなんだと思ってるんだ!
坂田銀時じゃないんだから。なんだ、次はドッドになったりドライバーになるのか。
いや、それにしても。4人ともこんな願いをするとはな。
月の聖杯戦争において、おれは4回分の記憶がある。
その何れでもおれは優勝していたが、何の願いも望まなかった。
しかし、サーヴァントだった彼女たちは願いごとをしていた。
それが、これだ。
次の聖杯戦争でも、召喚して欲しい。
その結果、おれのクラスとは全く関係なくサーヴァント4騎の召喚権を得たわけだ。

さて、彼女達の思惑はともかく頭数はあればあるほどいい。
なにせ、こっちはどこにいるのか分からない魔術師を見つけ出して殺さなければならないのだ。
斥候、間諜、偵察。加えてマスターの護衛と、人数が無ければ話にならない。
彼女達がいればきっと力になってくれる。
おれは、部下がいないと何もできない。戦うことしかできない。
だから・・・！

「召喚しない。うん。ないな！」

我ながら、なんて冷静で的確な判断力なんだ！

ルーマニアのヴラドⅢ世、マケドニアのイスカンダルが聞けばあきれ返りそうな考えではあるが、
全く持って当然の判断である。
そもそも、魔力量が絶望的にたりない。
アサシンである一誠は、他のクラスで召喚されたときよりも燃費は非常にいいのだが、
それでもそこそこの英霊である。加えて、宝具も魔力をかなり食う。
キャスターであるタマモを例外として、他の英霊はどれも1級の英霊。
特に、モードレッドは大食らいである。
とてもではないが、マスターが持たないだろう。
更に言うと、人格的にも問題がある。
種類は違えども全員反英霊。マスターを相手に無礼をすることは必定。
正直言って、一般人であるマスターに余計な負担をかけたくなかっ

た。
ネロの超音痴攻撃（歌）。エリザベートの科学毒殺兵器（料理）。
無駄にポジティブシンキングな彼女達の猛攻にマスターは耐えられまい。
更に言うと、タマモは自分の令呪をマスターから奪いかねない。

人数が多いことの利点は数限りないが、反面リスクも多い。
仲間間の不和、維持のための魔力供給。
我が強すぎる彼女たちは、よほどのことが無い限り召喚するという選択肢はありえない。
英断であった。

さて、アサシン兵藤一誠の考えは概ね当たっていた。
各勢力は、序盤の情報収集で既に躓いていた為、穴熊を決め込んでいた。
特に、遠坂は使い魔の数を増やし、更に教会にも調べを進めさせていた。
なにせ、参加者が分かっていないのがよりにもよってキャスターとアサシンである。
優勝するのは難しいが、どちらも長期戦に優れており放置することはできない。
特にアサシンは、ギルガメッシュという破格の英霊を得た自陣にとって最大の敵である。
なにせ、自分が殺されては悲願も何もあったものではない。
一番安全である自宅に引きこもり、情報収集に没頭するのも無理の無い話であった。

例外は、二組。

「旦那、超ＣＯＯＬだぜ！」
「ええ、あなたもですよリュウノスケ。
そのアイディアと熱意は私にとっても得がたいものです」
キャスター、ジル・ド・レェは極めて建設的な行為に没頭していた。
即ち、備蓄と芸術活動へのまい進である。
これが、通常の意味での魔力の備蓄、或いは創作活動ならば何かを言うことはない。
しかし、彼らのそれは要するに幼児の誘拐であり、拷問であり、殺戮だった。
アサシンを最も排除すべき対象であると断じたキャスターであるが、彼も元をただせば軍人。
準備の大事さは重々承知だった。
まさか町中に火をつけるわけにもいかない。
そんなことをすれば逃げられてしまう。殺したかどうかも分からない。
この手で、確実に仕留める必要があった。
それも、できる限り苦しめて。神への冒涜としなければならない。
でなければ、ジャンヌが報われない。
彼女が救われないのに、あんな信心を知らない小娘が救われるなどあってはならない。
そんな、狂人の理屈で彼らは準備にいそしんでいた。
それが、結果的に尋常の意味での陣地作成ではないこと。
よって、キャスターの拠点の発見は遅れた。
さらに誘拐をし続けたため、また優秀な諜報員であったアサシンが彼らの勢力にいないため、
それがサーヴァントによるものだと判明するには相応の時間を要した。

かくて、狂人たちは自由を満喫していた。
現状、彼らの狂気を阻むものは何も無い。

そして、もう一組。
兵藤一誠の言っていた無謀にも動き始める男。
特定の誰かに恨みを抱えている奴。何がしかの理由で切羽詰っている奴。或いは冷静な判断力を失っている奴。
その全てに該当する男。バーサーカーのマスター、間桐雁夜。
彼には時間がなかった。寿命も、余力も無かった。
「時臣ィ・・・」
全身を蟲に蝕まれた男は、酷くあせっていた。
衰え弱り続ける肉体は、精神を蝕み、冷静で論理的な判断力を奪っていった。
早く動かなければならない。余力が尽きる前に。
それは、戦術的には正しい。
なるほど、バーサーカーは長期戦ができないサーヴァントである。
であれば、少々のリスクを犯してでも拠点の判明している勢力に攻撃を仕掛ける。
それは、そこまで間違っていない。だが、彼には戦略的視点が欠けていた。
即ち、自分の優勝するまでの道筋である。
遠坂陣営を攻撃する。バーサーカーでサーヴァントを殺し、マスターである時臣を殺す。
その後どうするかを考えていない。
いや、最初から考えていなかったのかもしれない。
納得は全てに優先される。それは負の面においてもだ。
かれは、もはや自分の力で時臣を殺し、桜を救い出すこと。
そうしなければ、納得できなかった。
そうしなければ、自分でいられない。
そんな、どこにいる誰でも持っているものを抱えて、半端な男は耐えていた。
自制していた。自重していた。我慢していた。

それが、限界に近づいていることを感じながら。

兵藤一誠の言っていた、素人に適したサーヴァント。アサシンとキャスター。

アサシンに関しては、前述したとおりマスターの存在が明らかになりにくいからである。

キャスターの場合、過去の魔術師であるキャスターは多くの場合この時代のいかなる魔術師よりも優れた魔術師であり、

よって、格下の魔術師であるマスターがいる意味合いが薄い。

現に、完全なる素人である雨生龍之介をマスターとしていても、

真っ当でない魔術師であるジル・ド・レェですらなんの支障も無く機能している。

逆は当然バーサーカーである。

バーサーカーのマスター、特にランスロットやヘラクレスのような破格の存在であれば、

最も必要とされるのは当然『マスターとしての技量』である。

それが、魔術師としては一人前ですらない男には備わっていないことは明白だった。

間桐雁夜。

彼は戦闘に関して素人であり、魔術に関して素人であり、取引において素人である。

だからこそ、魔術師の戦闘に首を突っ込むなどという無謀に出てしまった訳だが・・・。

だが、だからこそ時臣や切継のような合理主義者の思考から離れた動きをする可能性もあった。

それが、事態を好転させる可能性は無いに等しかったが。

動き出す暗殺者

「まったく、思いもよらないことだ」

そう嘆いたのは遠坂時臣。

かれは、この聖杯戦争の御三家の一角であり、同時に冬木の領主でもある。

地の利や準備期間などのアドバンテージは、まさしく随一であるといえる。

そんな彼が、聖杯戦争で必勝を期して召喚したサーヴァント。

間違いなく、想像しうる限り最強の英雄ギルガメッシュ。

アンリ・マユや佐々木小次郎のように、そう呼ばれていただけの男ではない。

まさしく、原初の英雄。全ての宝を集めつくした英雄王が召喚された。

全ての宝具の原典を持ちあらゆる英雄の弱点を突き、かつ自分には何の弱点もないという最強の英雄である。

が、その扱いにくさも相応であった。

マスターをマスターと思わぬ言動はまあいい。

しかし、聖杯戦争に対して興味が薄いというのは致命的だった。

騎士王のように治世に後悔があったわけでもない。

極刑王のように死後貶められたわけでもない。

征服王のように現世に望みがあるわけでもない。

この英雄王は、規格外すぎることに聖杯の原典すら所有している。

そんな彼が、わざわざ全力で戦うなどありえないことだ。

いや、召喚に応じただけでも奇跡に近いことだった。今の彼の言動を見れば。

しかし時臣という超一流、とまでは言わないが一流と名乗るに足る魔術師をマスターとしている以上、

残る六騎が全員敵に回るという事態になったとしても、勝算は高かった。

それも、相手がはっきりしている場合である。

ギルガメッシュは、自分こそ王であり、それ以外は王を名乗っているだけのまがい物であると断じてはばかり無い男である。
当然、自分のマスターを「マスター」などとは思っていない。臣下だと思っている。
それはいいのだが、要するにそこまで真剣に時臣を案じていないのである。
アサシン、ハサン・サッバーハ。
正体バレバレの暗殺者というどうしようもない存在ではあるが、マスター殺しに長けている、という意味では時臣の（ギルガメッシュのではない）天敵である。
最後に、ほぼ同時期に召喚されたキャスターとアサシン。
その両マスターは教会に名乗りを上げなかった。
いや、それどころか、召喚したはずの魔術師がこの冬木に来た、という情報自体なかった。
遠坂時臣は、聖杯戦争とは優れた魔術師たちがその人脈を用いて優れた英霊を召喚し、
魔術の秘奥を持って戦う、そういうものだと思っていた。
事実、三次まではそうだったらしい。
だが、キャスターとアサシンというハズレというべきクラスを召喚した魔術師。
彼らは、自身も暗殺者になったようにこの地に潜んでいるようだ。
「優雅さにかけることだ」
そこまでして、魔術師としての誇りを汚してまで願いをかなえたいというのか。
御三家である遠坂が思うべきことではないが、浅ましさには反吐が出る。
もはや、順当に行けばこの遠坂時臣が勝者になると決まっているというのに。
順当に行くと負けるから、潜んでいるのだと想像できないのが時臣の限界であった。

尚、ギルガメッシュは夜の街で退廃にまどろんでいた。
少々優雅さにかけるといえ、この国の接客業はギルガメッシュの逆鱗に触れるほどではなかったらしい。
人間が作った値が張るだけで神秘を含まない酒も、咽を潤す程度には飲めたもののようだ。

「ねえ、セイバー。
これ美味しそうじゃない？」
「そうですね、ですがこれも・・・」
冬木市郊外アインツベルン邸。そこに陣取るは当然アインツベルン勢である。
そこで、セイバー・アルトリアとアイリスフィールが見るは切嗣が用意したここ近辺での料理のカタログだった。
来日初日のみ町を出歩くことを許された二人であったが、それ以降はずっと邸内に引きこもっていた。
これは、当然切嗣の指示であった。
切嗣は自身のあらゆる情報網を用いても、残る2組の魔術師が参戦している事実を確認できず、
それを重く受け止めていた。
更に言えば、遠坂と近い関係にある教会が魔術師を全力で捜索していることがそれを助長していた。
アインツベルンがそうであるように、遠坂も極一般的な魔術師である。
強力なサーヴァントを召喚していることは確実だ。少なくとも、自身が最強と断ずるものを。
であれば、逆に考えて彼らが最も警戒するべきはアサシンである。
つまり、どのサーヴァントが召喚されたのか把握している教会がアサシンのマスターを捕捉していないことは確実。
自分も、アインツベルンという御三家の所属でなければ、

加えてアサシンを召喚していれば間違いなく同じことをしていただろう。
魔術師殺しである切嗣は冷静にそう判断していた。
つまり、自分と同じ思考回路の持ち主がいるということだ。
極めて魔術師的な思考として、アイリスフィールの心臓を破壊されるわけには行かない。
アサシンのマスターがどのようなマスターであるのか分からない以上、
うかつに町を歩かせるわけにはいかなかった。
それは、セイバーをして頷かせるものだった。
なにせ、彼女は守りに特化したサーヴァントではないのだから。
正確に言うのであれば、砲撃の類で攻撃されれば自分はともかくアイリスフィールを守りきる自信はない。
供給も十分である以上、篭城は正しい選択だった。
アイリスフィールも夫を困らせる理由は無い為、それに従った。
で、今に至るわけである。

カタログをみて二人が欲しがったものを出前、というかテイクアウトで舞弥が買出しに行っていた。
ラーメン、カレー、中華料理、ケーキ、焼肉。
日本という国の都合上、大きい町であれば食べられない料理はほぼ無い。
質も、金さえ惜しまなければおおよそ天井知らずである。
まあ、テイクアウトできない料理も無いではなかったが、そこも金で何とかした。
特に、セイバーとアイリスフィールの二人が熱中したのはケーキ、スイーツ類であった。
世界全土を見ても類を見ないほど、日本の菓子職人の腕は水準が高い。
見た目も美しく、味も上質、種類も多様。

高級料理を食べていたアイリスフィールや、そうした甘味類を知らないセイバー。
両者をして夢中にさせるものがあった。
特にセイバーは、嗜好品、こういのもあるのか！とカルチャーショックである。
ヤック・デカルチャー！
まあ、比喩誇張抜きで娯楽の少なかった時代と地方の人間である。
戦闘しか知らない巨人族張りに夢中である。
舞弥は、毎日のように行列のできるケーキ店やデパ地下を見て回る羽目になった。
さて、切嗣である。彼は極めて冷静に状況を把握していた。
彼が待っていたのはいくつかの状況の変化である。
まず、アサシンのマスターの捕捉。
これは自分達がする必要は無い。同じくらい警戒している遠坂に任せればいい。
だが、これは余り期待していない。自分が調査できないものが、教会にできるとは思えない。
アイリスフィールの安全に関しては最悪、自分がマスターとして動けばいい。
だが、せめてもう一つの条件に関しては満たさなければ動けない。
すなわち、バーサーカーのマスターの暴走である。

極単純な話、長期戦しかできないキャスターやアサシンであるが、裏を返せばそれはそれで技能なのだ。
長期的になって事態が悪化しない、ないし好転する見通しが立たなければ長期戦はできない。
維持するだけでも消耗の激しいバーサーカー。そのマスターにとってこの一刻一秒は血の一滴であろう。
真っ先に動くであろう彼が狙うは、間違いなく拠点のはっきりしている御三家である。
アインツベルンであればセイバーで迎え撃つしかないが、他の家を

狙ってもらえばこんなありがたいことはない。
なにせ、共倒れが狙える上に最悪でも2騎のサーヴァントが露出するわけである。
まあ、難点があるとすれば他の勢力もそれを狙っているであろう事ぐらいだが、
それを差し引いても一方的に情報を得られることは大きい。

いずれにせよ、ここは待つ段階である。

それは、戦略的に見て非常に正しい。

しかし、それはあくまでも彼の視点においてであった。
神ならぬ彼にとっては酷なことであったが、聖杯戦争は何が何でも早期に決着させなければならなかった。
今、刻一刻と成長している少女。彼女がまさしく聖杯戦争を地盤ごとひっくり返すほど成長する前に。

「ああ、もう！
どうしてどこも動かないんだよ！」
「そう怒鳴るな、坊主。
老夫妻に迷惑がかかるであろう」
ウェイバーは、動きの無い現状にいらいらしていた。
元々、勤勉である彼は待つ、ということが余り得意ではない。
それは、常であれば魔術師という真理の探究者として褒められたものである。
しかし、戦場においては足元をすくわれかねない危険な焦りである。

もっとも、それはライダーの制止と、自身もそれが無謀であると分かっているからだ。

しかし、かれは自分が如何に有利であるのかわかっていない。

今現在、どこも穴熊を決め込んでいるのは、マスターである魔術師の安全が確保されていないからだ。

現状にあって、唯一安全に移動できる勢力はただ1騎のみ。

すなわち、騎乗兵ライダーのクラスで現界したイスカンダルとそのマスター、ウェイバーである。

御者台に乗ってさえいれば、それだけでどの工房に立てこもるよりも安全を保障される。

ギルガメッシュならば同じこともできるが、彼にその気は無い。

そのアドバンテージに彼が気付いているかどうかはともかく、イスカンダルが気付いていない道理は無い。

ただ、彼はまだ機ではない。そう思っていた。

もし仮に、自分たちが町を出歩いたとて、他の勢力は静観を決め込むであろう。

もちろん、彼自身は真名がばれようが宝具がばれようが何一つ恥じ入ることは無い。

彼の覇道はまさしく栄光の道であったのだから。

しかし、今彼はまさしくこの時代に集結した英雄達を従え、聖杯により受肉し、

再び覇道を歩まんとしていた。

なるほど。彼にしてみれば、数多の戦場を勝ち続けた彼にしてみれば、

たかが参加者が7組14人の戦争など戦争ごっこであろう。

聖杯の仕組みを理解していない以上、六騎を従えて世界征服、というのは余りにもロマンのある話だ。

だからこそ、王道を説き従えたいと思っていた。

なにせ、彼は英雄を従える英雄である。それで生前はうまくいっていたのだ。

であれば、繰り返すのは当然である。

であれば、まず何は無くとも多くの英霊に我ここにありと示さなければならない。

全くの余談であるが、彼にとってもっとも臣下に収めるべきはアサシン兵藤一誠であった。

王である以上相容れぬ騎士王や英雄王。
不忠であったことを恥じている美貌の騎士。
狂っているが故に会話の成立しないキャスターとバーサーカー。

己の主の無事さえ保障できればそれでいいアサシンは、同時に武将でもある、
その、『アサシンとしての宝具』もまたイスカンダルにとって必要なそれであり、
なんといっても既に複数の反英霊を従えている反英霊である。
中でも、玉藻の前は「王の軍勢」との相性は最高に近い。
アサシンとライダーが組んだのであれば、生前の威力を復活させたまさしく無双の軍勢となるだろう。
一人一人がまさしくサーヴァントとしての威力を持ち、ギルガメッシュにすら勝利しうる軍勢。

それを、彼が認識し夢に見るのは、いつであろうか。

アサシンを召喚してから数日が経過した。
数日前にお腹を裂かれたというのに、体調もよくなってきた。
アサシン曰く、相手が人を切ることに慣れていて、切断面がきれい

だったから治療も容易かったらしい。
喜んでいいのか分からないが。
反面、アサシンの表情はどんどん曇っていく。
なにか、深刻な悩みでも抱えているのだろうか、と不安になる。
家族も、過去も何もかも失った自分にとって、彼は友人であり支えだ。
沈んだ顔をしているのであれば助けになりたい。
「ん、ああその・・・」
なんとも、歯切れが悪い。
彼は、もっとはっきりと物を言うと思っていたのだが、違ったのだろうか。
それとも、それだけ事態が深刻なのだろうか。
「・・・従僕として、これは言わなければならないな。
その、マスター。あなたはこの数日で随分成長した」
それはどういう意味だろうか。自分の背は伸びていない。
まあ、数日で伸びるものではないのだろうが。
「・・・魔術師として、という意味でだ。
宝具の使用はともかく、戦闘に耐えるレベルまで魔力が供給されている」
それの何が悪いのだろうか。
むしろいいことのような気がするのだが。
「いや、自分の常識に反していてな。
数日で供給される魔力量が倍になっているんだが」
そうか、初日は召喚と負傷で消耗していた。
しかし、それ以降はアサシンの維持に必要な魔力も負担だった。
それが解消されたということはつまり・・・。
自分の魔力量が増えたということだ。
「正直、嫉妬せざるをえない・・・。
世の中の魔術師が聞けばどう思うんだろうな・・・」
あ、そういう苦悶だったんだ。
「ともあれ、ここに潜伏するのも限界だ。

体調がよくなったのであれば他の場所に移ろう」
そういえば、ここはビルの一室だ。どうやって入ってきたんだろう。
「鍵はディスティニードローした。つまり壊した」
どう考えても犯罪です。ありがとうございました。
知らず知らずの内に自分は共犯者になっていたらしい。
「何を言ってるんだ。おれは人殺しだぞ?」
不法侵入ごときでガタガタ言わないことだ」
それは論理のすり替えのような気が・・・。
「まあ、とにかく従僕としては戦闘が許可できる状態になったわけだ。欲を言えば、宝具が使用できるようになるまで待つべきだと思うが」
宝具。
簡単に言うと必殺技らしい。
その分、魔力消費も多いらしいが。
「まあ、宝具使えたからどうって状況でもないんだが」
アサシンは、自分の宝具は決定力に欠けるといっていた。
また、令呪を使ってもそんなに効果が無いらしい。
とにかく、魔力が重要で、あればあるほどいいらしい。
「でだ、どうする?」
キャスターを探すのか、隠れるのか。
一応行っておくが、逃げるだけならいつでもできるぞ」
・・・。
正直、会いたくない相手だ。
だが、打ち倒さなければならない相手でもある。
アサシンが、戦闘ができると言っているということは、今まではそれができない状況だったのだろう。
そして、今も彼らはこの町で自分の家族に対してやっていたようなことを・・・。
更に言えば、人を食えば食うほどサーヴァントは強くなる。
戦闘ができるまで回復したとはいえ、今こっちは宝具は使えない。

不利なんだろう。

↓戦う
戦わない

「了解。
君の判断は正しいか間違っているかは結果次第だ。
だがともかく、良い判断だと思う」
そういって、アサシンは腰を上げた。
その顔は、先ほどまでの苦悶はどこにいったのか、とても晴れ晴れとしている。
それは、まさに年相応の少年のようだった。

「よし、じゃあ行きますか！」

あ、あのー。
ドウシテ、ジブンハ、アナタノセナカニ、ククリツケラレテイルンデショウカ？

「いや～、懐かしい。
生前はよくこうやって娘やペットを抱えて戦場に立ったもんです」
そういって、顔は見えないが笑っているアサシン。
凄く嬉しそうです。
アサシンが楽しそうで何よりです。
もちろん皮肉ですが。
「じゃあ、安全のために空を飛びます。
喋らないでくださいね。舌かみますから」

そういうと、窓をガラガラと開けて宙に身を躍らせた。
て、おい！
ガクン！ガクン！ガクン！
と宙を跳ねるアサシンと、それにくくりつけられている自分。
背中合わせの私たちは、まさしく重力を共有していた。
空を、自由に飛びたいな。
記憶を失った身ではあるが、そう思ったことは一度や二度ではないと思う。
だけど、こういうのは自由ではあっても飛んでいるとはいえない。
というか、自由ですらない。
「月歩です。このまま寂れたところに行くとしましょう」
このアサシン、実にノリノリである。
こうしてアサシンの背に括り付けられたまま、赤ん坊のように虚脱した状態で安全であろう工場跡に到達したのであった。

SG1　黒歴史

白いひげを蓄えた老人が、軍服を着た男に木造の船の甲板で語りかける。

「どうだ、一誠よ。
この船を貴様に贈呈しようではないか」

老人は、陽気に笑いながら、とんでもないことを言い出した。
船一隻。それがどれほどの価値があるのか、想像もできない。
軍服を着た男は、フルフルと拳を握り締めて、老人に確認する。

「この船を、自分にですか?」

老人は、頷いた。

「うむ。小僧も、もはや連合軍の司令官。
格好付けは必要であろう?」

「・・・」

軍服を着た男は、礼節も何もかも忘れて喜びの奇声を上げた。

「いやっ・・・たあああああああああああああああああああああああああああああ!」

顔のあらゆる穴という穴から体液を垂れ流しつつ、全力で声を張り上げた。

「オーディン様、ありがとうございます!
人生で2番目に嬉しいです!」
「う、うむ。そうか、それは何より」

男の、余りの喜びように、老人も引いている。

「初めて首印を上げたときよりも、
娘が初めて喋ったときよりも、妻に告白されたときよりも嬉しいです！」

「お父さんのばか・・・」

その、娘であろう少女は、すねたようだ。
当たり前だ。

「オーディン様、あなたが神だったんですね！」

「う、うむそうじゃが・・・」

「ちょっと改宗を考えました！いや、ほんの少しですが！」

老人の手をとり、きつく握り締めたかと思うと財布を取り出して、
札束を露出のきつい女性に渡す。

「空音！この金でデッキブラシと洗剤買ってこい！
大至急だ！もちろん最高級品だぞ！」

「了解、艦長」

やや、露出のきつい服を着た女性は、瞬時に消えた。

「戦闘員！」

「「「「「アラホイサッサ、ホイサッサー！」」」」」

世紀末なファッションの８人組が、男を取り囲む。

「胴上げだ！」

「「「「「「了解！」」」」」」」
「わりぇも」
「我も」

二人の少女と共に、軍服を着た男は高々と胴上げされる。
その表情は、まさに天国に来たようであった。

「ん、眼を覚ましたかマスター。
やはり、まだ様子を見たほうがよかったか」

どうやら、夢を見ていたらしい。
眼を覚ますと、アサシンが心配そうにこちらを見ている。
・・・、どこかずれたことで悩んでいるようだ。

「やはり、ワシズコプターのほうが良かったか？
娘はあれのほうが好きだったんだが・・・」

・・・、なんというか、命拾いしたようだ。
それがどういうものなのか、聞かないほうがよさそうだ。
そういえば、夢で見た男はアサシンに似ている。
向こうのほうが年をとっていたが。

「・・・それは、夢だな。
おれの記憶を見たのだろう。
まあ、どんな夢かは知らないが」

少し恥ずかしそうだ。
夢の内容を話したら、もっと恥ずかしがりそうだ。
だが、だとした疑問がある。

目の前の少年より、夢で見た男性のほうが大人だった。

「・・・ああ、そんなことか。
そういえば言っていなかったが、おれは３０前のおっさんだ」

ええ？
英霊だってことよりも驚きだ。
彼はどうみても自分と同世代だ。
学生服もちゃんと似合っている。

「サーヴァントは、全盛期の姿で召喚される。
例えば１００まで生きていても、召喚された姿は若いということもある」

なるほど。
だが、ちょっと待て。
ということは、アサシンの全盛期は学生時代なのか？
それ以降は衰えっぱなしなのか？
いくらなんでも旬が短すぎではないだろうか。

「んなわけないだろう。アサシンとしては、ということだ。
おれが以前参加した聖杯戦争では、李書文という中国拳法の達人がアサシンとして召喚されたが、その際は若い姿だった。
おそらく、最も強いであろうランサーとして召喚されれば、技の熟成された老人の姿で召喚されただろうよ」

ふむ、そういうこともあるのか。
・・・。
ちょっと待て。
だということは、目の前のアサシンは学生時代にアサシンを極めていたということか？

どういう学生時代だ。

「まあ、そのなんだ。
細かい経緯は省くが、１０００人以上を行方不明にした」

アサシンは照れているというか、困っている表情でそう言った。
・・・。
１０００人。
もしかしたら、この男はキャスター以上の危険人物ではないだろうか。

「危険人物であることは否定しないが、君の味方だ。
こんなことは言いたくないが、記憶も無く家族もいない君にとって唯一のな。
そういう不審な目で見ることはお勧めしないぞ。精神衛生上よくない」

ぐぬぬぬ。
確かに。
アサシン以外、自分に味方はいない。
話し相手だっていない。
彼と話したことが記憶の始まりである以上、彼をそういう眼で見るべきではないな。
うん。
納得したことにしよう。

「理解が早くて幸いだ。
まあ、英雄というのは直接間接問わず優秀な殺人機械だ。
その点においては反英雄と変わらない」

まあ、そうかもしれない。

だがキャスターが反英雄だったとすれば、
同じだと思いたくない。
目の前の少年は、自分を救ってくれたのだから。

「まあ、アサシンとして召喚された場合は学生だが、
それ以外であれば君の見た３０ぐらいの成人男性として召喚されるだろうよ」

・・・。
では、アサシンというのは彼にとってハズレなんだろうか。
だとしたら、召喚した身としては心苦しい。

「気にするな。
どのみち、魔力が足りなければ意味が無い」

ああ、それ以前の問題なのか。
たしかに、強力なサーヴァントはその分魔力の消費も激しいらしい。
であれば、マスターが自分である以上どのクラスで召喚されても知れたものなのか。
・・・。
ちょっと気になるので、どのクラスが該当するのか聞いてみた。

「そうだな、おれは本来バーサーカーかランサーが適正だ。
ちなみに強いのはバーサーカーだ。単純な腕力ではこの姿とは比較にならんだろうよ」

バーサーカー。確か、魔力消費の最も激しいクラスだ。
加えて、会話も成立しないらしい。
記憶喪失である自分には、最もありがたくないサーヴァントだっただろう。

「いや？会話は成立しただろうよ。
おれは狂気を制御していたからな。
狂化を自在にオン、オフできるのさ」

狂気を御せるサーヴァント。そういうのもあるのか。

「ああ、まあバーサーカーにしかなれない英雄はそういうのがいるらしいな。
まあ、あんまり褒められたものじゃないがな」

たしかに、いつでも狂っているということだから、あんまり友達になりたくない。

「あとは、そうだな。
一応アーチャー、セイバーがそうだな。
番外ではセイヴァー、救世主も該当するな。
まあ、バーサーカーが最強だが」

ふむ、なるほど。
救世主・・・、はよく分からないが、色々できるようだ。
・・・。
あれ？
あとはキャスターとライダーだ。
キャスターは魔術師だから確実に違うとして、ライダーは？
馬に乗って無くてもライダーにはなれると聞いていたのだが。
ペガサス、グリフォン、チャリオットは元より、戦艦などでもかまわないと本人が言っていたのだ。
確か、夢の中では艦長と呼ばれていたのだか。

「ぐっ・・・！

ついに、そこに気付いたか。やはり天才か・・・！」

いえ、単なる消去法です。
さあ、自供は取れているんだ。
早く言って楽になるんだってばよ！

「・・・マンガで」

マンガで？

「好きだったキャラクターが、艦長って呼ばれてたんで・・・。
その・・・」

へー。
アサシンも、可愛いところがあるんだ。

「あんまり突っ込まないでくれ・・・。
封印したい黒歴史なんだ・・・」

よし、今後彼をいじるときは艦長と呼んでやろう。

「・・・く、誘導尋問だ」

ＳＧ１を習得しました。

ＳＧ１　黒歴史

月に封印された戦争の歴史、ではない。
ホワイトドールは関係ない。

誰でも、封印したい過去はあるもの。
そういう意味では一般的な秘密である。
だが、一誠の場合はより深刻である。
ある事情から、彼は古参の部下から『兵藤一誠』と呼ばれることはない。
その為、その部下達からはずっと艦長と呼ばれる羽目になってしまった。
キラキラネーム、ＤＱＮネーム。そういうものは親が決めるものだが、
彼の場合は自分で決めてしまったのだから救えない。
まあ、単なる恥ずかしい秘密である。
害も無いので、そっとしておいてやろう。

プロフィール

ＮＡＭＥ
アサシン、兵藤一誠だ。
嘗てあこがれた男の名前であり、
尊敬する親がくれた名前であり、
部下と一緒に勝ち取った名前でもある。
ＨＯＭＥ
日本だ。
まあ、薄情きわまることに別の国に仕官してしまったが、
それでも守るべき大事な祖国だ。
ＦＥＴＩＳＨＩＳＭ
母性の象徴、豊満な胸だな。
妻との情事では・・・。て、ナニを言わせるつもりだ。

アサシンが召喚する一人目の仲間

アサシンにおんぶされ、夜の街の空を駆ける。
振動は相変わらず酷いがなんとか大丈夫だ。根性で耐えられる。
それに、慣れてしまえば空を駆ける感覚は悪くない。
というか、前回やたら怖かったのは背中と背中がくっつく形で背負われていたからだ。
空を見上げる形で真後ろの方向へ、安全装置らしいものは体を結ぶ紐のみ。
バンジージャンプなんて目じゃないぜ
今回は、おんぶなのでそんなに怖くない。

「一応、思春期の女性への気遣いだったんだがな」

という、アサシンの発言も分からなくはない。
実際、こう、胸がアサシンの背中に当たって恥ずかしいし。
だが、後ろ向きで空を飛ぶ恐怖には耐えがたかった。

さて、自分たちは工場跡を仮の拠点とした。
その後、夜を待って街の空を駆けている。
アサシン曰く、魔力の濃いところは目視である程度分かるそうだ。

「凝という技だ。万能でもないけどな」

曰く、姿を隠す術は多岐にわたり、特定の方法だけで見破ることは難しいらしい。
まあ、種族差があれば別らしいが。
いずれにせよ、アサシンには夜の街を走る以外に良い方法はないらしい。
自分では、何もできないので背中にしがみついて一緒に跳んでいる次第だ。

「一応言っておくが、戦闘に耐えると言っても急激な魔力消費は心身に影響を与える。
状況によっては、撤退も視野に入れてくれ」

アサシンは空を跳べる。飛べるではなく、跳べる。
結果的には同じなので、とにかく空中戦ができる。
これによって、召喚初日にアサシンはキャスターから逃げ切ったらしい。
向こうは際限なくあの気持ち悪い化け物を召喚できるらしいが、飛べるものは出せない。
遠距離攻撃の手段も持っていないので、跳べば逃げるのは容易いらしい。
まあ、アサシンも遠距離では攻撃力が乏しいので、戦うとしたら地に足をつけるが、
いつでも逃げられるというのはありがたい話だ。
もちろん、向こうがムキになって令呪を使う可能性もあるので、予断は許さない。
なにせ、相手は狂人だ。常識的に考えて、というのは危険だ。

「・・・さて、マスター。
心の準備は大丈夫か？」

ビルの上に着地したアサシンは、路地裏を見下ろしつつ覚悟を促してくる。
足元には、どうやらよろしくないものが群がっているらしい。
思い出すのは、自分の『かぞく』を食べた・・・。
・・・。
大丈夫、と言う。
あれを、この街で暴れさせるわけにはいかない。
もしかしたら、忘れてしまっただけで自分の友達がここにいるのか

も知れないのだ。
だから、それをする。何も憶えていなくても。

「よし、じゃあ行くとしようか」

アサシンは注射器を取り出した。
事前に聞いた、アサシンの主兵装の一つ。
地球上で最も危険な野生動物、大雀蜂の力を引き出す薬だ。

「人為変態」

首筋に注射されたそれの効果によって、アサシンの体が膨張する。
特に変化が著しいのは肘から先だ。拳は肥大化し、大雀蜂の尻を思わせる部位から針が飛び出している。
今はぴったりと背中に張り付いているのでよく見えないが、他にも色々変わっているのだろう。
現に、頭からは触覚が2本飛び出ている。
・・・。思わず、引っこ抜きたくなった。
痛いんだろうか、やっぱり。

「いくぞ、舌をかむなよ」

ふわりと、ビルの隙間に身を躍らせるアサシン。
もう、怖くない。
いや、怖くないわけじゃなくて、勇気がわいてくる。
アサシンの背中は、慣れてしまうと凄く安心できた。
だけど、いざビルの隙間に身を投じてみると、思わず体が震えた。
『平らげられた』であろう人の着ていた血まみれでずたずたの衣服。
それらに群がる蛸、いやヒトデの怪物。
その異臭、異様に吐き気がこみ上げた。
だが、幸いしてアサシンの頭に吐しゃ物をぶちまけずに済んだ。

「空手はもちろん六式も原則対人格闘技術。
お前達との戦闘は想定外といわざるを得ないな」

十数体はいるであろう海魔の群とそのおぞましいオーラ。
それらを前にして、アサシンから放たれる獰猛なオーラ。
それは、海魔をはるかに凌いでいる。

「だが問題ない。念能力やM．O．Oは害虫駆除用だ。
一匹残らず駆除してやる」

壁や宙を蹴って、穏やかに食事場へ着地するアサシン。
その背中に、迷いも恐れも無い。焦りも怒りもない。
だから自分も磐石の安心感を持って、アサシンに身を預けることができる。

「・・・」

アサシンは、無言で腰を落として構える。
掛け声も何も無く、そのまま普通に海魔に殴りかかった。
一撃、二撃、三撃！
大雀蜂の持つ獰猛さはそのままに、流れるような動きで毒針拳を打ち込んでいく。
不思議と、アサシンにしがみついている自分の体はあんまり揺れなかった。
きっと、重心が安定しているんだろう。こっちに気を使っているに違いない。

「まず、1匹」

一体、反応する間もなく駆除した。毒が効いているのかぴくぴくと

痙攣している。
しかし、ここからが本番だ。海魔はぞろぞろと、続々と群がってくる。

「練」

ぼそりとアサシンがつぶやくと、自分の体が何かに包まれる気がした。
それは、針で刺されるような苛烈さと、毛皮で守られているような安心感を併せ持つものだった。
アサシンは自分から間合いをつめて群の内一体を殴る。
今度は、たったの一撃で海魔が粉々になる。もはや毒針どうこうではない腕力だ。
見るもおぞましい異形。それに素手(?)で殴るだけでも勇敢だが、アサシンは手馴れているように全くひるむ気配が無い。
加えて終始無言だ。なるほど、アサシンだ。
素手で淡々と敵を処理していく様は、他のクラスには該当しない。
そうしているうちに、路地裏にいた十数体は残らず駆除された。
毒で死んだのか殴り殺されたのか、はたまた両方か。
海魔はあっさり痙攣するだけの汚物になった。圧倒的なパワーである。
しかし不安もある。他のサーヴァントもこれだけの強さがあるのだろうか。
だとしたら自分はアサシンの、文字通りのお荷物ではないだろうか。

「・・・、マスター。
とりあえず、今日はこれぐらいにしないか?
初日なんだし、あんまり思い出したくないことも思い出してしまったんじゃないか?」

振り向きつつ、こちらの身を案じるアサシン。
未だ大雀蜂のままだが、その目は優しい。きっと娘にもこういう目で見ていたんだろう。
年不相応の慈しみ深い目だった。
大丈夫だよ、と答える。少しだるいが、それだけだ。まだまだいける。

「そんなバカな！」

心底驚いた表情で、化け物でも見たように驚くアサシン。
あの、海魔を見たときとは偉い違いなんですけど。
アサシンとしては、海魔よりも私のほうが化け物なのか。
大雀蜂の改造人間に化物扱いされたくない。

「精神的なことは逃避により鈍化しているとして、
魔力は結構全力でぶん回したんだぞ？持つわけが無い！
だが、実際供給される魔力は・・・！」

ものすごくへこんでいる。
なにやら、彼の心の琴線に触れたようだ。
と思ったら、今度は叫びだした。

「インチキだ！イカサマだ！チートだ！
絶対におかしい！ありえない！
あれか、知らない間に精神と時の部屋にでも入っていたのか？
世界の存亡がかかっているわけでもないのに、あんなナンチャッテ修行は認められない！
修行するならちゃんと日常を削れ！限られた時間の中で行ってこその修行だろうが！」

随分な言い草だ。

自分は記憶が無いのでなんともいえないが、どうやら自分の成長はチート級のようだ。
彼は、自分にとって利しかないこの状況が気に入らないらしい。
自分の中のゴーストが囁く、お前が言うなと轟き叫ぶ。
そもそも、存在そのものが反則の英霊にチート扱いされたくない。

「・・・、すまない失言だった。
しかし、この魔力量なら『一人』は呼べるかもな。
いや、このペースなら全員も夢じゃない・・・か」

アサシンは、再び拳を構える。
同胞の死を感じたのか或いは集合フェロモンでも出ているのか。
路地裏の奥から海魔がわらわらと沸いてくる。その量は明らかに先ほど以上だ。
同じ個体ばかりだし、アサシンは強い。でも、この量は捌ききれるかわからない。

「ちょうどいい。あれで試し切りとするか。
マスター、魔力を大目にもらうぞ」

とたん、力が抜けた。
何をするつもりなのか分からないが、マスターとして、見届けなければならない。
アサシンも言っていた。部下を監督するのは上司の義務だと。
意地と根性で虚脱に耐える。

「・・・。こんだけ魔力を抜いたのになんで気絶しないんだ?まあ、いいか・・・」

気絶させるつもりだったのか・・・!
道理でくらくらするわけだ。

じつは、コイツは自分を殺すつもりなのでは・・・！

「なあマスター。おれは、以前１０００人を行方不明にしたといったよな？
あれは嘘だ」

ええ、あれ嘘なの！
じつは二桁ぐらいサバを読んでたとか？
いや、逆かも。１００００人も殺したとか？
案外、一人も殺してないとか。

「人数じゃない。一人でやったわけじゃないということだ」

ああ、そういう意味ですか。
ということは、仲間と一緒に行方不明に仕立て上げた、と。
尚のこと凄いような。秘密とか、守れたんだろうか。

「なにもアサシン時代に限ったことじゃない。
おれは、いつだって仲間がいないと何もできなかった。
どれだけ腕力があったって、仲間がいなければ・・・泣く事すらできはしない」

そういうアサシンは、何かを懐かしむようだった。
彼は、アサシンとしての戦いだけでなく、多くの戦いがあったのだろう。
それに挑み続けたからこそ、英霊に至ったのだから。
その間で、どれだけのものを得て失ったのか、想像することすらできはしない。

「だから、いつだって呼ぶのさ。
仲間を、部下を！・・・〃来い！〃」

アサシンは、拳を構えたまま叫んだ。
目の前には、海魔の群が肉薄する。その数は、ただ見える範囲だけでさっきの倍だ。
彼が呼んだそれが到着するのかどうか、こっちには分かりはしない。
だが、アサシンの背中にしがみついているこっちは逃げ出すこともできない。
つい、恐怖で一瞬目を閉じる。
・・・。
痛みは無い。海魔の悲鳴だけが耳に届いた。
恐る恐る目を開けると、そこには海魔を破壊したアサシンの仲間の姿が・・・！

妖艶な半獣の女性
可愛らしい怪物の少女
剣を携えた男装の少女
荘厳な全身甲冑の剣士

↓言動のおかしい女子生徒

「Ｆａｔｅのキャラクターだと思った？
残念！戦闘員でした！」

そこには、アサシンと同じ学校であろう女子生徒が、奇声を上げていた。

・・・。なに、あれがアサシンの仲間なの？

いくらなんでも酷すぎやしないだろうか。キャスターと同類のにおいがする。

なんとなく分かる。あれはクズだ。人を殺すことに何のためらいも持たない正真正銘のクズだ。

というか、丸分かりだ。隠そうとすらしていない。絶対笑いながら人を燃やしたりするタイプだ。

そんなこっちの印象を察したのか、アサシンは彼女の説明をする。

「マスター、あなたは彼女を見てきっとこう思っただろう。

血も涙も無い生まれついての人殺しだと。

笑いながら敵を燃やしたり、物を壊したり、家を焼いたり・・・。

その通りのクズだ。こいつは。

足すもなし、引くもなし。正真正銘のクズヤローです」

弁解なし。潔くすらある。

だが、そんなの召喚してどうする。厄介ごとが増えただけではなかろうか。

しかし、アサシンは言葉を続ける。そこには確かな信頼があった。

何一つ偽る必要の無い信頼関係。それが存在するのだと言わんばかりに。

「言動も悪いし、素行も悪い。おまけに頭も性格も最悪だ。

だが、彼女を含めたおれの最初に得た仲間８人、

彼らこそおれが生涯で得た部下や仲間の中で最も信頼するメンバーだ。

肉体が滅び、その魂がいかなる地獄に落ちようと、それでも尚喜び勇んで罪を重ねる不良共。

時空を隔てようともおれの召集に間違いなく答える８人の精鋭。
彼らとの腐れ縁こそ、神々からの贈呈品に勝るとも劣らぬおれの至宝！おれの将道！
アサシンの身で召喚された兵藤一誠の唯一にして最強宝具ー」

「『忠実無双の無法者（バグズ・アーミー）』！」

その言葉に答えるように、少女は両脚に装着された４本のアームの先端の刃と両手に持った鎌で・・・。
いや、両手が変形した鎌で海魔に切りかかっていく！

「ヒャッハー！腸を・・・」

哲峰（てっぽう）　珠（たま）
出身　日本
種族　転生悪魔
Ｍ・Ｏ・Ｏ　昆虫型　ハナカマキリ
Ｍ・Ａ・Ｒ・Ｓランキング　２９位

「ぶちまけろ！」

銀色の竜巻

「生前、アサシンとしての下積み時代を経てある国に、
配下を率いて仕官した。一重に、保身のためにな」

アサシンは、海魔に毒針拳を突き立てつつ私に語りかける。
自分が如何に戦ったのかを。その武勇をあくまでも端的に。
それは、恥じ入っている様でもあり、懺悔しているようでもあった。
アサシン自身は、その栄光が嬉しくないように。

「その国は、大きな変革期にあった。出世の機会は山とあった。
それはつまり、国が乱れるということだ。
おれは、人の不幸や悲劇を食い尽くしてあっという間に出世した」

戦争。
テレビ番組や教科書には言葉や写真、映像を尽くして語られることがある。
戦争はよくないと。
だが、それは近代の話。およそ中世の歴史では、さながらヒーローのように語られる。
版図を広げた、世界を征服した、帝国を築きあげた。
それは、時代が違うから人々の価値観が違ったのかもしれない。
だが、自分を背負う彼はそんな自分を心底嫌っているようだった。

「何人の部下を得たのか、失ったのか。
おれは既に死んだ身。死後も彼らをこき使うのは忍びない。
彼らは、勇敢に戦い死んだのだから。
おれ自身が未練によってここに立つとはいえども、彼らには安らかに眠っていて欲しい。
それがたとえ薄情だと、卑屈だと言われようと、おれは・・・そう思う」

それは祈りのようだ。
戦って死んでいった自分の部下への哀悼の意。
墓前を前にしたかのように、アサシンは安らかに語る。
その拳はその間も海魔を破壊していく。呼吸と同様に行われる大量破壊。
それは懺悔のようだった。

「だが、こいつらは違う。
心底戦争を、殺戮を、略奪を、蹂躙を好む正真正銘の邪悪たち。
おれの命じるままに殺人に興じる、生まれる時代を間違えた社会不適合者たち。
こいつらだけは、呼ぶことにためらいは無く、来ることに疑いは無い。
その絆ゆえの宝具だ」

その言葉を裏付けるように、召喚された〝恐怖のカマキリ女〟は、６本の刃を持って周囲を引き裂いていく。
ＳＦちっくな機械腕が、肥大化と収縮を繰り返しつつその刃で３６０度の海魔を引き裂いていく。
アサシンの拳が鉄槌なら、カマキリのそれは竜巻だ。重さではなく速さと手数で蹂躙していく。
それは、この状況下では非常によく機能していた。
四方から群がる海魔も、彼女にしてみればただの的にすぎない。
銀色の嵐が、暴威をもって駆逐していく。

「ヒャッハー！」

その、昆虫が混じった顔は歓喜に満ち、喜悦に歪んでいた。
狂気を感じる。一体どうしてここまで戦いを楽しめるのだろうか。

「また極単純に」

時間経過によるものだろう、変身が解けて人間に戻ったアサシンは構えを解いた。

再度変身することも無く極普通に棒立ちする。

そんな自分たちに、異臭を放つ海魔があらゆる方向から群がる。

アサシンは迎撃の構えはおろか身動きすらとろうとしない。そのたたずまいは、全てを信じて委ねているようだった。

「こいつらはおれが得た部下の中でも、随一の強さを誇る最精鋭部隊に所属していた。

その理由は強いからだ。こいつらは絶対に仕損じることは無い。」

「群がってるところ、ゴチになります！」

目にかろうじて映るだけの高速攻撃。

それは精密無比に私達の周囲の海魔だけを切り裂いていく。

ビル壁や、コンクリートの床すら傷をつけることは無い。

「言動とは裏腹に、こいつらは幾度と無く実戦を潜り抜けた精鋭であり、

逆境を生き抜いた勇猛な戦士であり、おれに忠実な訓練された兵士だ。

ただ戦争を勝ち抜くのであれば、こいつらさえいれば大概何とかなる」

「ヒャハハハハ！」

自分の周囲を銀色の刃が舞い踊るというのに、アサシンは穏やかに落ち着いていた。

彼女の技量と忠誠を疑うことなく身を委ねている。だからこそ、彼の象徴たる宝具なのだろうか。

「・・・駆除、完了だな」

気付けば、もう周囲に動くものは無い。
カマキリ少女を除けばだが。
返り血すら浴びていない彼女は、身をフルフルと震わせて感動に浸っていた。
悦んでいるのだ、この破壊と殺戮を。
自分の印象の通り、アサシンの評したとおりの異常者だ。
私の『かぞく』を殺した殺人鬼と同じような社会不適合者だった。
ただ一点、味方であるという事実を除いて。

「珠、よく来てくれた」
「なにいってんの艦長！
戦争ならいつでも大歓迎だよ！」

ヒトガタに戻った少女は、人とは思えないことを平然と言う。
しかし、その狂気の目には明らかにアサシンへの親愛が見て取れる。
心酔とは少し違う、慕う心。
後ろから見ているだけでも、今二人は信頼しあっているとわかる。
・・・。
少し、気が遠のいた。海魔の死体からの異臭もそうだが、本当に魔力の限界だ。
そのことを告げて、撤退しようと提案した。

「了解。確かに一段落したしな。
珠、早々で悪いが下がってくれ。
また何か会ったら呼ぶ」
「了解」

アサシンからの指示に小さく返事をするとカマキリ女は消えた。

残るはアサシンと自分。そして、海魔とその犠牲者の死体だった。
・・・。
小さい靴も見える。きっと、小さい子も同じように。

「マスター、想像は無意味だ」

アサシンは、冷たく切って捨てる。
それは、感情を殺しているというよりこちらを思いやっているようだった。

「あの時もそうだった。悔やんで、言葉を捜した。
どうすれば償えるのか、誰が悪いのか、どうしてこうなったのか。
全部無意味だ。状況は何も変わらない」

それは、昔自分がしでかしてしまった事である、と後悔しているようでもあった。
だが、彼はあくまでも前を向いている。決して、下を見て立ち止まろうとはしない。
何があろうとも前進する意思。それを感じる。

「できることを積み重ねて、目的を目指そう。
そして、何があってもそこにたどり着こう。
それが、おれたちの義務だ。そうだろう?」

アサシンの言葉に頷く。
そうだ、前進することだけはやめちゃいけない。
事態を解決する為には、それだけはしちゃいけないんだ。
そのために、もっと強くならないと。

「いや、そのペースがおかしいんだが・・・。
一体どうなってるんだ?」

アサシンは首をかしげている。
いや、でもやっぱりアサシンのほうがおかしいと思うけど。

これより数日間、アサシン組はキャスター組と戦いを続ける。
それに伴いキャスターは魔力を蓄え、岸波は魔力量を増大させていった。
状況が好転しているのかどうか。この両者の間ではっきりしない。
キャスターはアサシンを捉えることができず、アサシンはキャスターの海魔を駆逐するに至らない。
よって、キャスターは人々を食っていき、岸波は成長を続けていく。
双方共に攻めあぐね、拮抗しているというべきか。或いは双方共に目的を達成できず、負けているというべきか。
だが、それはあくまでも両者の間の話。他の勢力と比べて強くなっていることは明らかだった。
本格的に戦いをしているのは、
本来長期戦に徹するべきキャスターとアサシンだけという七騎の異常な拮抗状態。

しかし、事態は大きく動くことになる。

それは、アサシンがキャスターの拠点を発見し、攻撃する攻城戦と全く同じタイミングで行われたもう一つの戦い。
御三家、遠坂と間桐の激突である。
神の目線からすればそれは必然の戦いであり、その結末は描写する必要性を感じないほど。
一流の魔術師でありベストコンディションである遠坂時臣と、張り

ぼての魔術師で死に掛けた間桐雁夜。
ギルガメッシュがどうであれ、ランスロットがどうであれ、この戦争はマスターの技量の時点で決している。
ましてや、時臣の工房に攻め入ろうというのだ。無謀というほかない。
だが、戦争全体においては大きな意味を持つ一戦となる。
一方は脱落し、一方もその戦術を披露する。
それも、キャスターとアサシンを除く3組監視の上で。

聖杯戦争は、第二局面へ向けて動き出す。それは、多くの攻守が入れ替わる節目となる。

ここが、ターニングポイントであることは明白だった。

日輪の如き破城槌

キャスターの拠点への突入作戦を前にあわただしくなる私たちの拠点、工場跡。
その中で、おとなしくしている男が一人。

「・・・」

アサシンは、何かを考え込んでいるようだ。
その顔は、思わしくない。何か不安でもあるのだろうか。
現状、確かにこっちはキャスターの捕食をとどめることができていない。
それは確かによくないことだ。こうして拠点にいる間にも犠牲者がでているのかもしれない。
だが、こっちも戦力は整った。
アサシンの宝具、生前の部下を召喚する『忠実無双の無法者』は8人全員を展開でき、暫くなら全兵装を解禁できる。
アサシン曰く、三騎士を含めて対人宝具が相手ならまず負けないとのこと。
つまり、逃げることぐらいはできるそうだ。なにせ9人がかりだ。納得の強さです。
四方を囲んで棒で叩くのは戦術の基本。人類は未だこれより効率的な作戦を編み出していない。
その分マスターである自分への負担もきついが、我慢するのは得意だ。

「我慢でどうにかなる問題じゃないんだが・・・」

と、普段の嫉妬を込めた目も勢いが無い。何を悩んでいるのだろうか。
これから、発見されたキャスターの拠点に攻撃を仕掛けるというの

に。
こっちも不安になるから、是非教えて欲しい。
「マスターの懸念も尤もだ・・・分かった。
今、こっちは万全の状態で戦える。加えて向こうが拠点に陣取っている以上、全力同士の戦いになるだろう。
これが何を意味するのか分かるか？」
キャスターは拠点防御を得意としている。それに挑むのは無謀ということだろうか。
しかし、現状拠点へ令呪で離脱されるおそれがある以上、いっそ踏み込んだほうがいいと言ったのはアサシンだったはず。
そんな分かりきったことを改めて聞いてくるなんて？
「それは違う。これは格付けに近い。
こっちの全力と向こうの全力、万全同士でぶつかればどっちが上か。
それを決する戦いになるだろう」
お互い懸念事項も不安材料も無い。
こっちは強襲作戦、向こうは篭城戦。どっちもアサシンとキャスターの得意分野だ。
確かに、互いにとってこれ以上の好条件は無いだろう。
であれば、こっちの矛と向こうの盾。どっちが強いのかを確かめることになるだろう。
それの何が問題があるというのか。
「・・・ここで勝負がつかなければややこしいことになってしまう。
はっきり言えば、状況がコントロールできなくなる。
そうなれば状況を悪化させることになる。
いや、更に言えば聖杯戦争で優勝するしかなくなる」

優勝するしかなくなる。なんとも豪快な台詞だ。
まあ確かにこっちは優勝する為に戦っているのではなく、身の安全を確保する為に戦っているのだから、方針の変更という意味では正しいのかもしれない。
ただ、話を聞いてもアサシンがなぜ悩んでいるのか、結局分からなかった。

しかし、今にして思えば私が考えるべきは『優勝するしかなくなる』という言葉ではなく、
『状況を悪化させることになる』の方だった。
まさか、本当に文字通りの意味だったとは・・・！

場面は変わって。

遠坂邸。
そこはアインツベルンには及ばないものの、城と呼ぶに足る豪邸である。
間桐がそうであるように、ここもまた聖杯戦争を前提としている魔術要塞だ。
他の参加者と違い御三家は拠点がはっきりしているが、ここに攻め入るものはそういない。
キャスターの作成する工房、ないし神殿を例外とすればここよりも堅牢な城は存在しない。
である以上、そこを出たところを叩く。それが懸命というものだ。
しかし、それをやるものがいるとしたら・・・。
英雄王や征服王のように突破力に優れた宝具を持つか、あるいは・・・。

「時臣・・・！」

そんな、当然の思考もできないほど追い詰められている男だろう。
黒い影を引きつれ、足を引きずりつつ遠坂邸を睨む間桐雁夜。
彼は知らない。ここに来るまでに迷宮じみた結界が張られていることを。
魔術の正しい知識がなければここにたどり着くこともできないことを。
自分が心底憎んでいる遠坂時臣、彼の温情でここにたどり着けたことも。
そんなことにすら気付く余裕も何も無い。彼は焦燥にかられていた。
維持するだけでも辛いバーサーカーは、主を諌めるという部下としての機能も無い。
よって、なんの障害もなくここにたどり着いてしまった。
そう、ここから先に進む道はなく戻る道もまたない。
いっそ、時間への焦燥にかられても間桐邸でおとなしくしていれば良かったのだ。
その方が、よほど勝算はあったのだ。

「なんとも、醜い男よな」

最強の、この聖杯戦争ではなく想像しうる限り最強のサーヴァント、
ギルガメッシュは遠見の宝具で彼を見ていた。
姿は醜く、その性根も醜い。だというのに、自己犠牲の聖人面。
ギルガメッシュはそこまで見抜いていた。
細かい事情など興味は無い。ただ、あれは極個人的な恨みを遠坂時臣にぶつけに来たのだ。
そして、それを聞こえのいい言葉でごまかしているに過ぎないのだ。

大方、金か女がらみであろう。全く浅ましいことだ。
尚のこと愉快なのは、それが知らないとはいえ自分に挑むことだ。
ああ、全くどうしようもない男だ。本当にどうしようもない。
あらゆる財を納めた宝物庫にすら、馬鹿につける薬は無い。
そして、そんな賊に死をくれてやろうとソファーから腰を上げる。

「時臣、相手をしてやれ」
「はっ」

礼装を手に、時臣もそれに続く。
彼の心中は複雑ではあったが、それでも割り切れていた。
なにせ、とりあえず一騎脱落する。
工房に挑んできた敵を迎え撃つということで、勝ち方も優雅と言えば優雅だ。
ギルガメッシュも、間桐の散り様に興味があるらしく乗り気だ。
問題があるとすれば、ギルガメッシュの戦闘を多くの参加者に見られることであり、
また、倒す相手が半人前以下の半端者であるということだろう。
こっちが情報戦では一方的に損をすることになるが、問題はないだろう。

私のサーヴァントは最強だから！

かくて、結末の見えた戦いは始まる。
観客はアインツベルン、ケイネス、ウェイバー。
ある意味では、熱意や準備に差こそあれども、真っ当に聖杯戦争に参加している面々である。
だからこそ、御三家である遠坂の工房に使い魔を配置するのは当然といえる。
彼らは狂犬が黄金の王に挑むのを見ることになるだろうし、蟲が火に飛び込む様を見るだろう。

アインツベルンは戦争が動くことを確信し、ケイネスは遠坂の魔術を見て笑みを深め、ウェイバーは狂犬の脱落を喜ぶだろう。
だが、もう一つの戦いに観客はいない。
人知れず戦い続けていたキャスターとアサシン。その総力戦は、市街地で行われようとしていた。

場面は、岸波に戻る。

冬木市を流れる大きな川。そこにある巨大な排水口の前に私達10人は来ていた。
もちろん、ここにキャスターの拠点があるからである。
アサシン自身ではなくその部下達が目と鼻で探し当てたらしい。
曰く、ここはとんでもなく臭うとのこと。
そこからの流れは実にスムーズだった。
資料を準備し、その排水口の先に大きなスペースがあることを調べ上げ、突入計画を作成し、入念な打ち合わせをし、
なんの不手際もなくここに至った次第だ。
現在、アサシンにこれ以上の戦力を用意できないし、この9人で勝負をつけるのが正しいらしい。
アサシンがぼそりと、

「そもそもあいつ等、こういう狭いところでの集団戦闘に向いてないしな」

と言ったのはなんとなく耳に残った。なにかまだ、隠し玉があるのだろう。
だが、彼の最も信頼しているという部下を見た後だと、聞きたくなくなった。

そっとしておこう、うん。それがお互いの為だ。
アサシンがまともだから勘違いしていたが、部下もまともとは限らないのだから。
そう、最初に召喚されたカマキリ女、彼女以外の面々も判を押したようにチンピラだった。
いったい、どこに住んでいるんだろう。こんな分かりやすい不良。
生息地でもあるんだろうか。

「ヒャッハー！カチコミだ！」
「皆殺しだー！」
「汚物は消毒だー！」
「無慈悲で一方的な殲滅だー！」
「殺ってやるぜー！」
「行動は既に終了しているんだぜー！」
「拷問に変わってるんだぜー！」
「お前が死ぬまで殴るのをやめない！」

皆さん、楽しそうで何よりですね。もちろん皮肉ですが。
なぜか、アサシンの部下は全員着替えている。
棘付き肩パットや、ダメージジーンズ。或いは妙に汚れているシャツなど。
要するに世紀末なファッションに身を包んでいる。
なぜだ。いや、似合っているけど。
そして、アサシンはスルー。いつもなの？これが普通なの？どういう暗殺集団なの？
暗殺集団はガスマスクをつけて、プロテクターを着て、長い爪を装備してるんじゃないの？
いや、暗殺集団のことなんて分からないけど。

「さて、と」

こっちの困惑など置いてけぼりにして、アサシンはいつもの通り私をおんぶしている。
慣れてしまったが、こっちのほうがよほど戦場には不似合いだ。子連れ狼か。
アサシンは腕時計で時間を確認している。作戦開始時刻まで待つ算段の様だ。

「・・・時間だ」

アサシンがそう言った直後、遠いところで爆発音がした。
何のことは無い、これから突入するキャスターの工房へと通じる巨大排水口。
そこ以外の工房への出入り口を爆破したのだ。
こちらがいざ踏み込んでも、思い切りよく拠点を放棄して逃げられてはたまらない。
まあ、キャスターがその気になれば脱出できるかもしれないが、時間稼ぎにはなるとのこと。
なお、その為の排水図面は市役所からシャイニングドローしてきたらしい。
窃盗、爆破を含めてものすごい手馴れていた。
実は、こいつら暗殺者の英霊なんじゃなくてテロリストの英霊ではないだろうか。
ルールを守って楽しくデュエルしろ。

「「「「「「「「人為変態、武装錬金」」」」」」」」

異形の９人はＳＦな武器で武装し、私を伴って巨大排水口に突入していく。
案の定、車が通れるほどの排水口を塞ぐ密度で、海魔が襲い掛かってくる。
しかし、それは当然の備え。であれば、こっちにも対抗策はある。

城門を打ち破るのは、いつだって破城槌と相場が決まっているのだ。

「突撃槍の武装錬金、サンライトハート！」

一歩抜きん出たのは、大振りな槍を構えた男。

暗い排水溝の中を、槍の飾り布から放たれる朝日のような輝きが満たしていく。

それは、まさに圧倒的な突破力で海魔の群でできた壁を掘削、切り裂いていく。

凄まじいのは、槍自体の持つ破壊力だけではない。

壁にぶつかって尚勢いを増す男の突撃。

その元になるのは、他の面々と比べても尚圧倒的に肥大化した異形の両脚。

脚力を強化し、破壊力満点の槍で敵陣を突破する。それが彼の最強の武器なのだろう。

「この豆腐共が！」

母灯　貫

出身　日本

種族　転生悪魔

M・O・O　昆虫型　リオック

M・A・R・Sランキング　２７位

「一番槍はいただきだ！」

正月ネタ　短いです

「マスター、あけましておめでとうございます」

突然、何を言い出すのかこのサーヴァントは。
酷く真面目に、かしこまった調子で何を言い出すのかと思いきや、
あけましておめでとうございます、だと？
今は、元日どころか1月ですらないはずだというのに。
どうしたのだろうか、バーサーカーに転職したのだろうか。

「転職ですか・・・。
確かにバーサーカーとしての自分は最強ではありますが、
1対1を7回繰り返す群像劇たる月の聖杯戦争ならばいざ知らず、
色なし恋なし情けあり、生き馬の目を抜き、英雄王も絶賛する醜い争い、
本家本元冬木の聖杯戦争ではむしろ足かせかと。なにせ、そもそも全力が出せません。
相手が固有結界を使ってくれないと全力が出せないとか、欠陥にもほどがあると思いませんか」

アサシンは、酷く真面目に回答してくれる。なるほど、強すぎて全力が出せないのか。
・・・。具体的にどうなったのだろうか。

「熱膨張って知ってるか？」

やめよう。それ以上はいけない。

「魔獣創造生命帰還、熱膨張大正拳（ズームパンチ）に、熱膨張大下段正拳（ハートキャッチオーケストラ）。
熱膨張無限正拳（ムゲンパンチ）に熱膨張無限大鉄槌（イッパツギャクテンパンチ）。
熱膨張大車輪射出正拳（グルグルロケットパンチ）に熱膨張掘削射出正拳（ドリルプレッシャーパンチ）。

どれも広範囲を攻撃する技ばかりだからな」

なんでも熱膨張っていえばいいものではないと思う。
というか、熱膨張とはそういう意味ではないと思う。
よく分からないが、銃にお湯をかけて撃てなくするようなものだともう。
たぶん、そんなだ。

「まあとにかく、改めてあけましておめでとうございます。
・・・ということで、早速年賀状を見るとしましょう」

ちょっとまて。
ここは工場の廃墟、間違ってもここに郵便物が届くことなどありえない。
一体誰が、どうやってここに年賀状を送り届けたというのだ。
いや、それよりもナニよりも、だれが自分たちに年賀状を送り届けたというのか。

「熱膨張って知ってるか?」

ごめんなさい。もう何も聞きません。
もう年賀状でも督促状でも読み上げてください。

「では最初のお便りから。
次回作ブレイブハートD×Dの主人公、通称ヘタレからのお便りです」

次回作の主人公からのお手紙ってなんですか!
もういきなり飛ばしてますね、やりたい放題じゃないですか!
ていうか、ヘタレってなに。題名と偉い違いなんですけど!

「では・・・。
『恥じらってる貧乳の女の子って、最高だよね！』
・・・ダメだな、コイツとは相容れない」

早速、新年の挨拶もくそも無い内容だった。
ていうか、それが挨拶のつもりなのだろうか！
アサシンは不快そうにダメ、と書かれた箱の中にその年賀はがきを入れた。
なんだか、自分も馬鹿にされた気がした。

「こいつ、おれよりも出世している唯一の《一誠》なのにヒンニュー教徒とは・・・。
こいつの世界の聖書の勢力が心配だ」

私はあなたの世界も心配です。
本当に、どうかしているぞコイツら。

「では続いてのお便りです。
おれの部下、エルボーの得意な下級悪魔からのお便りです。
『私、一生懸命頑張ってるのにランキングが８８位から９８位に下がったんですけど！
いい加減ランキングを決める基準を危険度以外にしてください！』
・・・却下で」

考えるフリすらしないのか、この男は。
いや、待て。アサシンは結構理性的な男だ。
何か理由があるのだろう。とっても大切な理由が。

「そもそもＭ．Ａ．Ｒ．Ｓランキングは、
１から４部隊に所属するＥＸクラスからＢクラスまでに与えられた対外的な危険度の示唆だ。

強いだの弱いだのは関係ない。だから、暴走しやすいおれの娘が6位なんだし。
むしろ、人格や能力が安定していれば順位は下がるくらいだから、下がるということはその分安心して運用できるということ、誇ることなんだがな。
まあ、おれは2位なんだが」

・・・。

じゃあ、なんでわざわざランキングなんかつけるんだろうか。
不和の種になりそうだが。

「箔をつけるという意味もあるし、他の勢力への示威にもなる。
軍隊の持つ最大にして最高の機能は侵略でも防衛でもない。
戦争そのものへの抑止だからな。程度が過ぎると、どうかと思うが・・・。
なによりも、おれを最上位に置くことで、他の面々がおれを立てていることを示す必要もある」

また、アサシンはダメと書かれた箱に入れる。一体何の意味があるのだろうか。
だが、はがきの内容に関してはどうやら、色々考えはあるらしい。
多分、マンガの影響ではないのだろう。きっと、おそらく。

「では、続いてのお便りです。キャス狐こと玉藻御前より。
『二話からずっとスタンバってました』
いや、お前索敵とか諜報とか苦手だろ」

また、ダメとかかれた箱に入れる。

「・・・薔薇の皇帝ネロ・クラウディスより。
『捨てても無駄だぞ！』

知るか」

また、ダメとかかれた箱に入れる。

「・・・メシマズなんちゃってアイドル、エリザベート・バートリー。
『捨てても無駄よ！』
仲いいなこいつら」

また、ダメとかかれた箱に入れる。

「反抗期騎士モードレッド・・・。
『捨てないでください』
なんか怖いな」

でも、今度はヨシとかかれた箱に入れる。
基準がわからない。

「最後になるが・・・作者である赤城九朗からの・・・。
アンケートだ。今後の展開と更新に関わるものらしい」

え？アンケートでこの世界の行く末決まっちゃうの？

「いや、結末はもう決まっている。
大同小異はあってもこの星はもうダメだ。
そういう結末を迎えることはもう決まっている。
要するに、そこに至るまでの道筋の問題だな」

結局滅びるのかよ！

「アンケートを活動報告に記入しますので先着１０名様まで、どうぞ
御記入ください。

多数決で今後の展開と更新が多少変わります。
尚、感想には記入しないでください。規約に関わりますので」

一体何の規約に反するのか分からないが、突然始まったおはがきコーナーこと年賀状コーナーは、
唐突に終わるのだった。

強力な支柱

夜の排水口を、日輪の輝きが満たしていく。
深海の魔道から呼び出されたであろう海魔を、陽の光が打ち破っていくのは気持ちが良かった。
それが、ゲラゲラ品もなく笑っていなければだが。

「うひゃひゃひゃひゃ！」

海魔の壁を突き破り、遠ざかりつつある笑い声。
ひょっとしたら、海魔ってそんな悪い奴じゃないような気がしてきた。
だって、人間を食べるのも肉食獣が草食獣を食べるようなものだし。
少なくとも、ああやって破壊衝動に身をゆだねている男よりはマシかな、と思う。

「三叉槍の武装錬金、ライトニングペイルライダー！」
「突撃槍の武装錬金、サンライトハート改！」

一番槍がこじ開けた穴が、海魔の残党で埋められていく。
それを傍観していては一番槍が孤立するだけに終わる。
それを百戦錬磨の荒くれ共が傍観して見ているはずもない。
二の槍、三の槍が追撃を加えていく。
それは、ある意味では当然の行為だったが、しかし両者の感覚は余りにも短すぎる。
先行している者の背を穿つことなど、チンピラ共は考えていないようだ。
いや、違う。おそらくこいつらは信じているのだ。仲間に殺されるような間抜けではないと。

「処刑鎌の武装錬金、バルキリースカート！」

一時とはいえ突破力で穴が開いてしまえば、重厚であれ包囲網など脆いものだ。

続く面々はその穴を更に広げながら道を切り開いていく。

いや、そう言うと格好がいい。事実は海魔を蹂躙し虐殺しているというべきだろう。

不倶戴天の敵であるキャスターにとって、海魔は兵士であり下僕であり城砦だ。

それを殺すことは必然だ。

しかし、戦闘員と呼ぶアサシンの部下はまさしく満面の笑みでそれを行っている。

破壊と殺戮に陶酔していると言っていい。

人型の蟲になったことなど関係ない。彼らはその心の在りようが人から外れている。

多少ずれているところはあっても、思慮深く情に厚いアサシンとは違う。違いすぎる。

一体どうして、主従関係が成立しているのか分からない。

ただ、一つ言えることがあるとすれば、主従関係そのものは完璧だということだ。

『マスターを守るおれを守れ』

その一言だけが、彼らへの私に関する命令だった。

無数の海魔、その死体の残骸や血は全て戦闘員達にさえぎられている。

いや、もっと言えば彼らの密集戦はそれはもう素人目にも見事だった。

決して広いとは言えない排水口の中を、長柄の武器をフルスイングしているというのに、

当たる見込みが無い。

円筒状の道を天地無用で駆け回る。三次元の攻撃は全く持って目で追えない。
それは速度どうこうではない。その行動のルートが余りにも縦横無尽すぎて理解が及ばないのだ。
ただ混沌たる動きには、全体を見ると彼らなりの秩序があり、そしてそれはアサシンに奉げられている。
現に、アサシンはここに来て一度も拳を振るっていない。
アサシンは自分の鼻先三寸で刃が振るわれようとためらいもせず前進し続ける。
これが信頼でなくてなんと言うのか。
これが厄介だ。彼らがただ粗暴な悪党なら嫌いになれる。
だが、彼らは余りにも仲が良かった。この信頼関係を美しいと思ってしまうほどに。

「もうすぐ広いところに出る。
・・・覚悟を」

アサシンは、固い口調でそう言った。
ここにいる海魔は、つまるところキャスターが直接間接を問わず人間を食って召喚した代物だ。
そんなことをする奴が、まともであるはずが無い。
この先には、おそらく真っ当な人間の思慮を超える惨状があるに違いない。
だが、そこに行かなければならないというのであれば、行くしかない。
自分には力を貸してくれるアサシンがいるのだから。

「ようこそ、お待ちしておりました。
醜い神の使いよ」
「うっひょ～、本当に蟲人間だ！すんげぇＣＯＯＬだよ！
滅茶苦茶デザインされてるじゃん！どうやって造ったの？それ！」

そこには、ぎょろりと目の大きい痩せた男、キャスターと、少年のように目を輝かせているマスターがいた。
そして、そこにいるのは彼らだけではない。その回りには１０人近い少年少女が！
人質のつもりなのだろう。彼らは皆うつろな目をして明らかに正気を失っている。
だが、事態はそれよりも悪かった。

「・・・その腹に、卵を植えている、か」
「ほう、看破するとはさすがですね」

アサシンの、余りにも端的な説明はすんなりと理解できた。
海魔、それが彼らの中に植付けられている。だとすれば、キャスターの意のままに殺せるということだ。
まるで、爆弾のようだ。こんな使い方をしてくるなんて。
どうする。アサシンは言っていた。自分たちにそこまでの治療技術はないと。あくまでも応急処置の延長しかできないと。
海魔の卵の摘出。それは明らかに外科医療の分野だ。
不可能だ。到底アサシンたちには・・・彼らを助けられない！

「マキシマム、アントバレット！」
「フルパワー、リオックシュート！」
「エクストリーム、スピニングソーサー！」
「アルティメット、大切断！」
「リミットオーバー、ホロコースト！」
「カラミティ、ターミネーター！」
「奥義、怒沈比良（ドチンピラ）！」
「死技、喧嘩上等！」

８人は、全く別のモーションから完全に違う遠距離攻撃を打ち、そして全く同時に『子ども』たちに着弾させた。
それらは、まるで精密機械で工作したように体に穴をいくつも穿ったり、
模型のように骨を残して血肉を吹き飛ばしたり、逆に原形をとどめたまま骨だけを砕いて潰したり、
雑巾のようにもみくちゃにねじり上げたり、吹き飛ばして壁に貼り付けたり。
まるで死体の見本市のように創意工夫を凝らした殺人を披露した。
これが、人間のやることかよ・・・！

「おのれ、キャスター！」
「人質をとるとは卑怯な！」
「絶対に許さないぞ！」
「弱いものいじめとかマジで引くわー！」
「人の命は地球の未来なんだぞ！」
「なんて酷い奴なんだ！」
「だから、ここでむごたらしく殺してやるぜ！」
「これが正義だ！」

白々しい。
状況的には仕方ないとはいえ、明らかに嬉々として人を殺した連中の発言はどこまでも薄ら寒い。
マックスとか、フルパワーとか、どう考えても全力で攻撃していた。
というか、こいつらはナニを思ってこんな無駄に凝った技を開発したのだろうか。
知りたくない。

「すっげー！
あんたらこんなことができるのか！」

自分の思い通りにことが運ばず、悔しそうなキャスターを置いて、マスターはどこまでも嬉しそうだ。
あれは、明らかにこの殺人の見本市で感動している。
まるで、新しい絵の具を見つけた画家や、石材や木材を見つけた彫刻家のようだ。
８人の殺害方法やその結果に極めて感動していることが見て取れた。
どっちもどっちだ・・・。
吐き気が消えるほど、この場の面々は正気じゃない。

「・・・きっちりと主を守るか。
やはり貴様、正気は失っても理性は手放していないようだな」

一人、冷静に戦局を理解するのはアサシン一人。
真面目だが、いっそ滑稽にも見える。
狂人たちの中で正気である彼は、どこまでも異物だった。
そしてアサシンの指摘どおり、確かにキャスターは自分とマスターを守っていた。
戦闘員８人は子どもだけでなく彼らも当然攻撃した。
しかし、間欠泉のように湧き出た海魔が防壁となり二人を守ったのである。
それが自動的なものでなく、キャスターが仕込んだものであることは余りにも明白。
つまり、マスターはともかくこの狂人は「聖杯戦争」で勝つつもりということだ。

「神の使いよ！
そこまでして我が大望を阻むのか！
そのような汚らわしい小娘は軍勢を差し向けて守るのか！
では・・・ジャンヌはなぜ庇護しなかった！」

キャスターは嘆いていた。
アサシンの語った、彼の正体。フランスの英雄ジル・ド・レェ。
神に裁かれた、救われなかった聖処女ジャンヌ・ダルクの後を追う為に、
不徳の限りを尽くしたフランスの英雄にして反英雄。
その彼は、現世でも同じことを繰り返していた。

「・・・・」

アサシンは答えない。応えない。
その資格は、自分には無いといわんばかりに。
彼の問いに関して神以外に、答えるものはいてはならないのだから。

「貴様らの啓示を受け、ジャンヌは立ち上がった！
あの聖処女が如何に勇敢に戦ったのか、知らぬわけではあるまい！
その彼女を復活させんと聖杯を求めるこの私を妨害するなど・・・。
貴様は、天上にふんぞり返って一体何を考えている！」
「・・・言いたいことはあるが、言うべきことだけ言おう」

多くの言葉をかみ殺して、アサシンは口を開いた。
その、言葉になんの意味も無いと知っていて。
言うべき言葉があるというのにその資格がないと、苦しんで。

「かの聖処女は、戦うと決めて戦場に立ち、そして負けた。
だから辱められた。それは、当然の帰結だ」

アサシンの語る言葉は、余りにもキャスターを突き放していた。
狂人、キャスターはその発言に呆然とした。隣に立つマスターが気遣うほど分かりやすく。

狂人は〝なぜ〟と問い、暗殺者は〝故に〟と答える。問いに見合った答えではなかった。

「・・・ふざけるな！」

その慟哭は、あまりにも正しかった。

大きく飛び出た目玉から零れ落ちるのは大粒の涙。

己が顔を両手で覆う彼の苦しみは余りにも明らかだった。

彼は危険だと知っているのに、自分の家族を殺したと知っているのに。

それでも、彼を哀れに思ってしまうのは、記憶がないからだろうか。

「・・・殺す」

泣き止んだキャスターの一言は、一切の狂気を排除した理性的な言葉だった。

まるで、誰にぶつけていいのか分からない感情を、ぶつける相手を見つけたかのように。

それは、一筋の殺意となってアサシンと自分に向けられている。

いや、アサシンだけに明確に。どうやら、自分はその対象ではなくなったらしい。

「貴様は、確実にこの手で殺す。

ジャンヌを復活させる為に、そしてあの戦いを汚した貴様を葬る為に」

「ぬかせ。

生前はともかく、死後の罪はここで終わらせる」

アサシンがゆっくりと構えた。

同時に、それまで黙っていた戦闘員達が雄たけびを上げて魔術師の主従に襲い掛かる。

「ヒャッハー！」
「死ねやオラ！」
「調子ぶっこいてんじゃねー！」
「苦しみなら与えてやるぜ！」
「俺達がな！」
「お前らにだけどな！」
「殺していいのは殺される覚悟のあるやつだけだもんな！」
「オールオッケーだぜ！」

しかし、またも海魔に阻まれる。
いや、海魔は主従を飲み込んで姿を隠したのだ。

「・・・脱出路を事前に造っていたのか。
周到な狂人とは、やりにくいな」

アサシンは構えを解いた。握っていた拳も解く。
それは、心のどこかでキャスターを殺さずに済んだ事を、
後悔しつつも安堵しているようだった。
だが、そんなアサシンの周囲に８人が無言で集結し周囲を固めた。
全方位に対して襲撃を警戒している円周防御だった。

「来るぞ！」

戦闘員の一人が叫ぶと、ただでさえ暗かった巨大スペースはまさしく地獄と化した。
床、天井、壁、柱。そのことごとくが海魔で覆われていく。
世界全てが殺意を持ったように、円周防御を脅かさんと圧倒してきた。
それは致命的な状況だった。全方位を敵に、しかも開けたスペースで圧倒されている。
アサシン曰く、大軍を薙ぎ払うような圧倒的な制圧力は持っていな

いとのこと。
いや、あったとしてもここは地下。街中で、地下でそんな火力は使えない。
であれば、まさしくここは詰んでいるのではないだろうか。

「・・・念の為、上を人払いしておいて良かったな。
物理的に」

アサシンは、何一つ臆することもなくそう言った。
対策は、既にあると言わんばかりに。

「大、やれ」

「了解、アントホームラン！」

戦闘員の一人が、手に持った大剣で周囲を薙いだ。
それは圧倒的な剣圧でもって周囲の海魔を吹き飛ばし、
それどころか、柱にへばりついていた海魔を柱ごと破壊した。

「満塁だぜ」

つまり、このスペースは支えを失い・・・。
理解するより先に、天井が土砂と共に落ちて来た。

「こいつらは、肉を食う。
少なからず物理法則に縛られているだろう。
それに、潰しちまえば動きようもないからな」

アサシンは相変わらず冷静に状況を語る。
なるほど、生き埋めにしようというのだろう。
だが、それは我々もではないだろうか！

円周防御の上だけは崩れないということはなく、トラックほどもあるコンクリートは落下してきた。
思わず目をつぶる。だが、なにも起こらない。
なにも・・・。

「地盤だのコンクリートだの・・・。この程度の重さでオレの怪力を計れるかよ」

大剣をしまった彼は、驚くべきことに片手で軽々と、落ちて来た天井をその手で支えている。

風見（ふうみ）　大（だい）
出身　日本
種族　転生悪魔
M・O・O　昆虫型　パラポネラ
M・A・R・Sランキング　22位

「軽すぎるぜ」

ＳＧ２　王への不満

「詳細は省きますが、今後我々は全ての勢力に狙われることになるでしょう。
もちろん対策はありますのでご安心を・・・？
どうかしましたマスター。偉く不機嫌そうですが」

不機嫌にもなるだろう。
事前に説明を受けていたが、まさかああもあっさり崩落させるとは。
地下の排水スペースが崩れたことにより海魔は全滅。
（円とかいう技術で確認したから確からしい）
しかし、その上に立っていた家屋などの建物も土台から大きく揺らぐことになった。
人はあらかじめ避難させていたが、生活面では大きなダメージだろう。
自分もそうだったが、戦争に関係のない人を巻き込んでしまった。

「・・・」

アサシンは、こっちの意を察したのか静かに見つめている。
彼は以前言った。戦うとはそういうことなのだと。
それが許容できないのなら戦うべきではないと。
全てを理解した上で戦うと決めたものだけが、戦う資格を得るのだから。
自分には、アサシンしかいない。鍛錬を積み上げた日々も、聖杯にかけるべき強烈な目的もない。
そんな自分にできることは、アサシンを信じることと判断を下すことだけだろう。
それから逃げることだけはできない。

「あなたは強い人だ。だが、不満があれば言ってほしい。
そういうのはいつか爆発してしまうからな」

・・・。

じゃあ、あの無法者達を何とかしろ。

「・・・あいつ等を普通にさせたら、今度はあいつらの不満がたまるんです」

ものすごく申し訳なさそうに視線をそらすアサシン。
いや、アサシンが悪いわけじゃないのは分かる。
ただ、あいつらが悪過ぎるというだけで。

「いえ、あいつ等はあれでいいんですよ。公的な場では弁えて動きますから。
私的な場や戦闘中は好きにさせてやりたいんです」

あの言動は上司公認だったのか・・・！
道理で慎まないわけだ。
・・・。
待てよ、アサシンは自分に不満はないのだろうか。
正直魔術師としては何の価値もなく、ただ魔力タンクとしてふるまう自分に不満はないのだろうか。

「いえ、全然」

びっくりした顔で否定するアサシン。よほど意外だったようだ。
その驚いた顔をちょっと可愛いと思ってしまった。

「おれは、生前百人の部下を給料も払わずにこき使ったことがありまして・・・。

それを思えば、魔力を供給してくださっているだけで十分マスターですよ」

私を擁護するアサシンはとても嬉しそうだ。

そうか、彼は私をマスターと認めてくれているのか。

彼は今の自分にとって唯一の友人なのだ。友人に認めてもらっていることはとても嬉しい。

「こちらの方針に口出しをしないだけでも、生前の上司より全然ありがたいです」

うんうん、と頷くアサシン。

よほど不満がたまっていたのだろう。

すらすらと生前の上司への不満が滑り出し始めた。

「いえ、軍人が政治に首を突っ込むのはどうかと思いますし、事実素人なものですから偉そうなことを言うのも憚られるのですが、

あの人たちは何を考えているのか、定命の者から見ても明らかに生き急いでいましたから。

あの方々、千年も万年も生きるくせになんでああも駆け足で国を変革させようとしたんですかね。

悪魔の駒を用いた転生悪魔も、結果的に移民問題を引き起こすし。

こんなこと事前に予想できたんですから、配布する前に法整備するべきなんですよ。

自国内の政権を追われた貴族や移民問題なんかの憂慮を片付けずに外交に手を出すし、テロに巻き込ませるし。

しかも、他国の来賓に対応させようとするし。自分の祖国の陛下が同じ目にあったら宣戦布告も辞さないレベルですよ！

まず、自国内での意見をまとめてから友好を深めるべきだと思うんですよ。

というか、内部での複雑な権力情勢を整理するべきですよ。それが

原因で神話間戦争で大負けしたんですし。
なんで国の最高権力者が４人もいるのか。そんなにいらないでしょう。
せっかく政権交代したんですからそのあたりもスマートにするべきなんですよ！
もっと言えば、前政権の最高権力者の名前を継ぐってなんですか。しかも嫡子たちを差し置いて。
そりゃ不満もたまりますわ。なにが魔王少女レヴィ・ア・たん、だ！
自分の親の名前をそんなふうにネタ扱いされたらおれだって立ち上がるわ！
サーゼクス様もなんであんな国辱を晒すような方を外交のトップに据えたのか理解に苦しみます。
というか、吸血鬼と和平してどうするんだ。いえ、悪魔はまだいいんですよ。形は違えども人間を搾取してますから。
天使の方々はどうやって人を食べる吸血鬼と関係を築きあげるつもりだったんですかね？
日本人も食に関してはうるさいので、別に彼らが人間を食べることはまあ理解できるんですよ。
もちろん、対抗して吸血鬼狩りをすることも種として当然ですからどうこう思いませんよ。
だけども、同盟するというのは違うでしょう。エクソシスト涙目ですよ。
実際、第七部隊の連中からもその手の不満は多々ありましたし・・・。
まあ、結果的にはテロの温床になっていたので、判断は正しかったのですが・・・。
それも意図していなかったというし・・・。
あの人たちは、いつだって敗者への気遣いが足りないんですよ！
そんなんだから、あの国の政治家は無能だって言われるんですよ！
最近なんか、外交官の方がおれに直接文句言ってくるんですからね！

おれに言ってどうするんだよ！おれは軍人だぞ！政治も経済も外交も宗教も全然わかんないんだよ！」

・・・

「・・・申し訳ありません。生前の話は関係ないですね」

アサシンは、一気にまくし立てたあと落ち込んでしまった。
い、いえ気にせずに・・・。
よほど不満に思っていたのだろう。まさに爆発していた。
アサシンは真面目だから、畑違いのことに口を出さずにいたんだろうな。

「まあ、とにかく今後は全参加者を皆殺しにするぐらいのつもりのほうがいいでしょうね。
ご安心を、戦力的に不足はありませんから」

できるだけ、アサシンにはやさしくしてあげようと思ったのだった。

ＳＧ２を習得しました。

ＳＧ２　王への不満

誰でも自分以外への不満はあるもの。
だが、それは多くの場合自分にも備わっていないものである。
つまり、自分にできないことを他人に要求しているのだ。
それで腹を立てるのは筋違いである。

だが、それはそれとして不満は溜まっていく。
相手の事情を知っているだけに、逆に想像もできないからこそ口に出せずに。
一誠の場合、自分とは大きく価値観の違う国に仕官しただけに鬱憤を溜め込み、
しかし立場上うかつなことは言えなかった。
下手をすれば国が傾くからである。

政治ネタは荒れるので、あんまり口にしないほうがいいでしょう。

プロフィール

好きな下着の色は？

特にこだわりはない。
脱がせる側としては白が・・・。

余暇の過ごし方は？

家族との時間を大切にしている。
職場では公私混同が横行しているが、
司令官としてはきっちり区別をつけないとな。

第二局面　訂正

アサシン、兵藤一誠は事態を読みきっていたと言っていい。
いや、正確に言うのであれば「唯一」事態を正確に読みきっていた。
これは、イスカンダルやギルガメッシュの軍略や頭脳を凌いでいたわけではない。
単に、立ち位置が特殊だったことに由来する。
この聖杯戦争において、キャスターとアサシン双方が「素人」による召喚という間桐涙目の展開を迎えて、
しかもアサシンはハサンでないという極まりっぷり。
こんな事態を読みきれるものはまずいない。
だが、当時者の中で唯一戦略的思考を持っていたアサシンは今後の展開を読みきり、
その為の対策を取り始めていた。

では、具体的にはそもそもどういう事態に発展しているのかを説明しよう。

冬木市で起こっている連続殺人及び幼児失踪事件。
これが魔術がらみであることに教会と遠坂が気付いたのがまず遅かった。
キャスターのマスターである雨生が、事前にカルトごっこをしていたことが結果的に隠れ蓑になり、
把握が遅れたのである。
これも、間諜の英霊が召喚されていないことが響いていた。
魔術師という真理の探究者が、己が技量と才覚を持って英霊という規格外の使い魔を従え、
人知れず矛を交わす優雅で高尚な戦争。それが聖杯戦争だ。
だというのに、神秘を隠匿するべきという大前提すら忘却したかのごとく行われる凶行。
聖杯戦争に勝ち残り、根源に到達するという目的を抜きにしても、

管理者として見過ごせはしない。
だが、『誰がやっているのかわからなかった』のだ。
これも、ハサン不在の影響である。
状況証拠というか、考えられる可能性として御三家は違う、と思われる。
遠坂は言うに及ばず、アインツベルンはそこまで『外道』な発想が思いつかないほど筋金入りの魔術師である。
間桐は怪しいと思われたが、先日の自爆でそれも否定された。
あれにそんな知恵はない。
ロードエルメロイはそんなことをする意味がない。彼は時計塔の講師であり一級の魔術師だ。
遠坂は把握していなかったが、ソラウという魔術タンクを抜きにしてもそんな凶行は考えられない。
ウェイバーも怪しまれた。というか、この面々の中では最も怪しい。
だが、怪しいだけだ。証拠がない。
であれば、名乗りを上げていない残る二組を調べるだろう。
程なくして、市街地で交戦しているアサシンらしき面々とキャスターの使い魔らしき海魔を発見した。
だが、ここでも誤算が起きた。
両方が魂喰らいやっていないのではない。どっちもやってそうなのだった。
キャスターは無数の海魔を使役し、これは非常に魔力を必要としていた。
なによりも、殺人現場の状況から見て海魔に食わせたと考えれば符合する。
だが、アサシンもまた異常だった。複数体おり、しかもそれぞれが一般的なサーヴァント以上の力量を持っていたのである。
複数のサーヴァントの召喚使役がアサシンの宝具だったとしよう。
それはまあ分からないでもない。
つまり、ハサンで無いにしても、小隊を率いた暗殺者だったのだろ

う。納得のいく話だ。
だが、それに必要とされる魔力は、どう考えたって人を食べているとしか思えない消費量だ。
ヘラクレスだのカルナだの、そう言った超一級の英霊ではないにしても、
戦闘中に限定するとはいえ9体も同時に使役するなど遠坂やアインツベルン、ケイネスにだって不可能だ。
一時は、それもまたアサシンの宝具ではないかと思われたが、キャスターでもないのにそれはないだろう。
それに、異形のアサシンたちは海魔に負けず劣らず「やっていそう」だった。
じゃあ、両方がやっているのではないか、と思うかもしれない。
それならそれで、残る5組、いや間桐が脱落した為4組で外道共を討てばいい。
セイバー、アーチャー、ランサー、ライダーでキャスターとアサシンを叩くのだ。こんな簡単な話は無い。
だが、それも無理なのだ。数が合わない。
魂喰らいは、というか人喰いは全て同じ手口で行われていた。
アサシンがキャスターと似た手口でやって、全ての罪をかぶせようとしているともとれるが、問題はその量だ。
一般人はそもそも魔力量が少ない。だから、双方の戦力を支えるには犠牲者の数が少なすぎるのである。
つまり、海魔を操っているであろうキャスターと、異形の小隊を率いているアサシン。
どちらかは自前でまかなっているのだ。
魔術師だけに、キャスターは魔力供給の手段を持っていると考えるべきか。
(これは半分当たっていた)
長期に潜入する暗殺者だけに、アサシンが魔力供給の手段を持っていると考えるべきか。
まさか、偶々偶然戦争に巻き込まれた少女が、アサシンが驚愕する

ほどの魔力量をもっているとは考えないだろう。
（目の当たりにしても信じないはずだ）
では、領主として従者を伴い戦場に赴き、双方を殺すというのが最適解であろう。
だが、ギルガメッシュはそんなことをする気はまったく無い。
セイバー、ランサー、ライダーであれば義憤に燃えて、率先して外道を討つだろう。
しかし、ギルガメッシュだけはそんな気はない。仕事が違うからだ。
彼にしてみれば、召喚の失敗により部屋が滅茶苦茶になったので、お前が直せと言われた様な物だ。
地獄に落ちろ、と言うか地獄に落とすだろう。
つまり、遠坂は自分で動くことはできないのである。
だが、他の勢力に促すのも難しい。
まさか、
『キャスターとアサシンのどちらかが人を襲っている。両方を殺すか、食べているほう調べ上げて殺せ』
などと言えるはずも無いからだ。
そんな無茶苦茶な指示、魔術師殺しで無くったって従わないだろう。
だが、現状としてこれ以上の調査は難しいし、犠牲者は増え続ける一方だろう。
となれば、餌を多めに用意するしかない。
幸い、令呪はそこそこある。
まず、キャスターとアサシンの魔力の供給方法を調べて報告すれば令呪一画。
その上で、人を襲っているほうを殺せばまた一画。
ないし、両方殺せば二画、複数で協力して倒せば各々にも。
とすればまあ他の参加者も腰を上げるだろう。
教会と遠坂が裏でつながっていなければ、とっくにそうしていたは

ずだ。

傍若無人な英雄王が、まさかキャスターとアサシンを殺すことに積極的になるはずが無い。

そもそも、それができないからここまで手間のかかることをしているのだから。

となると、下手をすればセイバー、ランサー、ライダーという本命達全員に令呪を二画もくれてやることになる。

相対的に考えて遠坂が不利すぎる。遠坂を影ながら応援している教会が、そんなことをするはずも無い。

そう、だからここまで決断できなかったのだ。

アサシンは、ここまで読んでいたわけではない。

だが、少なくとも自分のマスターの異常性から考えて魂喰らいをしていると思われても当然だとは考えていた。

運営側にどんな都合があるのかは分からないが、キャスターは元より、ほかの勢力からも狙われるのも時間の問題だろうとは読んでいたのだ。

そこに来て、落盤である。いや、キャスターの工房であろう排水スペースへのアサシンの襲撃。

(状況的に考えて、だが正解だった)

付近の住民は全員気絶させられ、付近の病院の前停車させられた盗難トラックの荷台に詰められていた。

よって、落盤自体による人的被害は無かったし神秘も隠匿されていた。

しかし、どう考えても不自然な事態であることは明白。加えて、排水スペースからは子供の遺体が大量に発見された。

もはや猶予は無い。

遅きに逸したが、教会は令呪が大量になくなることを覚悟の上で招集をかけたのであった。

それを聞いて、ギルガメッシュは意外にも悦んだ。
狂犬の相手などさせられて、この上残る5騎全員を相手どれと言われれば機嫌が悪くなろう。
しかし、各々で食い合い選別するとなればこんないい話は無い。
乖離剣を抜くに足る相手はいないにしても、倒すならば王が討つに足る獲物で無ければならない。
つまり、当然のように腰を上げなかったのである。

教会は、もう遠坂が解決することをあきらめていた為得ていた情報を前面に出し、
その上で早期解決を望んだ。
苦渋の決断ではあったが、これ以上犠牲者がでれば遠坂は無能であると協会に判断されかねない。
まあ、結果だけ見れば事実そうなのだが、意外にも、というか能力の開示は逆効果になってしまった。
アインツベルン、ケイネスの双方は完全にしり込みしてしまったのである。
無理も無い。両方とも、基本的にはサーヴァントに足止めさせている間に魔術師を殺すという同じ戦術を立てていたのだから。
これが、平均以上のサーヴァント9体というアサシンの存在は、対人宝具しか所有していないランサーと、逆に強すぎて街中では使えないセイバーとそのマスターにとって、
戦術上天敵といっていい存在だった。
というか、市街地戦であるということを考慮すれば、人を食べる限りいくらでも兵力を増産できるキャスター、
無数の宝具を射出できるアーチャー、そして圧倒的突破力を持つライダーだけがアサシンに抗しうるのである。
義憤に燃える従者を、セイバーのマスターは無視し、ランサーのマスターは否定した。
よって、動いたのはライダー組だけであった。
彼らは、というかライダーに促されるままウェイバーは夜の空を駆

けていた。
そんな彼らは、海魔の群を発見してはこれを討ち、事態の深刻さに気づき、
その上でウェイバーがいくつかの証拠を手に入れ、協会に提出した結果令呪一画を得ている。
これは大きな前進だった。アサシンがどうやって魔力を得ているのかは分からないが、人を食っているのはキャスターであると判明したのだから。
これは二重の意味で協会にとって嬉しかった。なにせ、最悪6画を失うところ、4画で済みそうなのだから。
また得たのがライダーのマスターという、もっとも未熟な魔術師であるのも大きい。まあ、他にわたるよりはマシだからだ。
自分の功績により令呪を得て、また他の勢力から抜きん出て上機嫌のライダーにより喜ぶウェイバー。
彼の拠点である民家に、ランサーがやってくるまでは。

「ケイネス・エルメロイの使いの者です」

曰く、ウェイバーは目の前が真っ暗になったらしい。

「やあ、ウェイバー・ベルベット君。
よく来てくれたね」
苛立たしさを隠す気も無いケイネスは、ホテルのスイートルームに訪れた盗人、もとい生徒に着席を促した。
ライダーの影に隠れようとする恐怖に負けないように、ウェイバーは震えながらも椅子に座る。
ふかふかのソファーは、とんでもなくすわり心地が悪かった。
その隣に、どかっとライダーが座らなければ失禁していたかもしれない。
尚、ランサーはケイネスの脇に立っている。

「うむ、なかなか広いが、どこかこの国に馴染まんな。
これなら坊主が世話になっている家のほうがいいかも知れんな」
「そうかね。私もそう思うよイスカンダル」
「おおっ！余の名を知っているとはな！これは話が早そうだ！
見れば腕の立つ魔術師ではないか、余の部下にならないか？」

イスカンダルの、あんまりにも率直な勧誘にケイネスは頬を引きつらせた。
彼としては、元々自分が召喚する予定だったイスカンダルを、おろかな生徒から令呪ごと奪い返し、
戦場に勇壮にはせ参じるつもりだったのだ。魔力供給も、元々二人の魔術師がいるのだから問題ない。
ウェイバーも、1対1でそう言われれば断れなかったかもしれない。
しかし、この発言によってケイネスにその気は失せた。
よく考えてみれば、この征服王は史実でもこういう男だったのである。
であれば、こうやって勧誘するのも史実の通りといえる。となれば、御せぬ従者など必要ない。
こうなったからには面倒は不出来な生徒に押し付けて、その功績だけいただくとしよう。
魔術師として、合理的にそう判断していた。
最後の二組になったあと、鬱憤を晴らせばいいのである。
ケイネスは極めて論理的にそう決めた。
結果的に、それは双方の不和を招かずに済んだといえる。
イスカンダルは絶対に応とは言わなかったし、ランサーは顔には出さなくても不満には思っていたはずだ。

「言いたいことは色々あるが、ウェイバー君。
手を組まないか？」

手を組むとは、対等な関係を結ぶという意味である。
ウェイバーは驚きつつも喜んだ。
どうやら、自分は対等の参加者であると認めてもらったらしい。
それは見当違いだったのだが、まあさして問題はなかった。
実際、イスカンダルをケイネスが必要としていることは事実なのだから。
正確に言うと、その御者台を、だが。
使い魔で町中を網羅していたケイネスは、イスカンダルの移動方法とマスターがウェイバーであることを知り、
その拠点をランサー単独で探させていたのだ。
それは、ソラウからランサーを引き離す為でもあり、いざとなれば拠点にいるケイネスが令呪で呼び戻す為でもあった。
（もちろん、前者はソラウに説明していない）

「神秘の隠匿と、それを乱す者を討つことは魔術師の義務だ。
君が魔術師の端くれであるというのなら、それは当然だろう。
もっとも、既に動いていたようだ。教師として鼻が高い」

ケイネスは、ライダーの発言は聞き流してウェイバーを褒めた。
それが、イスカンダル、というかライダーの特性であり自分の能力で無いと知っていて尚、ウェイバーは喜んだ。
もちろん、ケイネスは何故こんな盗人におべっかを言わなければならないのか、と頭を痛めていたが。
とにかく、多少の恥は覚悟で状況を動かす必要があった。
このままだと神秘の漏洩云々はともかくソラウからの評価がまずいのである。
一人の男として惚れた女から、あなたは引きこもってばかりなのね、と言われ続けることに耐えられないのである。

「既に、私はキャスターの拠点らしきものを見つけている。

ランサーとライダーならば、これを打つのは容易いだろう」
「・・・ほう？」

ライダーは、無視されたことも気にせずランサーを見る。
それはランサーという騎士を評価せんとする王の眼だった。

「なるほど、こりゃあ一級の騎士だ。心強い！
どうだ、余の部下にならんか！共に世界に覇を唱えぬか！」

豪快に笑いつつ、勧誘する。
とにかく、ライダーに異論は無いようだ。
ランサーはこれを断っていたが、ライダーはしつこかった。
その間、ずっとソラウがさっさと帰れという眼差しで、隣の部屋から除いていたが、
男四人はそれぞれの理由でここに残ることになった。
ケイネスとランサーはソラウとランサーの接触を避けるため、ウェイバーはケイネスに残ることを進められた為、
ライダーはランサーを口説く為。
ともあれ、比較的円満に協力関係は築かれた。

これが、アサシンにとって最大の計算外であったことを、ここに記入する。

さて、アサシンである。
彼は、というか彼の部下はランサーにもライダーにも、或いはキャスターにさえも発見されることは無かった。
なぜなら、襲撃に失敗したその日に大きく方針を変えていたからである。

「マスター。
戦力を増強しようと思います」

既に、８体のサーヴァントを従えているアサシンの提案は、まさしく岸波白野にとって驚きだっただろう。
というか、アサシンは既にこれが万全であると言っていたはずなのだ。
増強する余地があったということは、彼が自分に嘘を言っていたことになる。
その疑問に、アサシンは神妙な面持ちで答えた。

「・・・なんといいますか、自分はもしものときは部下を皆殺しにするつもりでいつも率いているのです。
統率を失った軍は賊に成り下がります。おれは、それをよく知っている。
あなたも、キャスターを見ているでしょう。つまり、あれが解き放たれることになるのですから」

冷たい考えだが、それの被害者であるアサシンのマスターには理解できる。
軍隊という暴力装置にとって、粛清は厳しくも必要な手段なのだろう。

「まあ、アサシンで召喚されたおれに御せるのはあの８人がやっとだ、と思ってください。
であれば、これ以上の戦力増強はまとまりを欠くことになってしまうのです。
だから、避けたかったのですが・・・」

アサシンは申し訳なさそうだ。
彼をして、狂人がどこまで狂っているのかなど予想ができない。
いや、ギルガメッシュにすら不可能だろう。
あの狂人は、合理と不合理の狭間に立っている。

最善の策を打つのか最悪の策を打つのかなど想像もできない。

「こうなってしまっては仕方ありません」

本当に、心のそこから申し訳なさそうに席を立つアサシン。
そのまま工場内の一室から出て行く。

「いいですか、絶対に召喚するところを見ないでくださいね！」

珍しく語気も荒く、アサシンはそのまま出て行った。

それを、岸波白野は・・・。

↓追いかける
追いかけない

工場内の工作機械が撤去されたスペース。
そこで、アサシンは精神を集中していた。
影から見ているマスターに気づかないほどに。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」

それは、本来の召喚の為の呪文だった。
正規の手段で、しかし召喚されるのは想定外のサーヴァント。

「――――月の聖杯戦争の覇者が告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

アサシンの体に刻まれた令呪が輝く。
腕に刻まれた反逆の騎士モードレッドの令呪。
胸に刻まれた鮮血魔嬢エリザベート・バートリーの令呪。
背に刻まれた金毛白面玉藻の前の令呪。

「誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者」

そして、股間に刻まれたネロ・クラウディスの令呪が眩く輝く！
岸波は、あんまりにもあんまりな箇所の輝きに噴出した。
しかし、アサシンは気づかない。そのまま召喚を続行する。
腕と胸と背中、そして股間の紳士を輝かせながら、かっこいい呪文をかっこつけて詠唱する。

「汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」

４枚のステンドグラスが、アサシンを囲むように出現した！

反英雄の少女達

ネロ・クラウディスにとって、一誠はまさに偉大な英雄だった。
ユ○ヤの神にも臆することもなく、勇敢に立ち向かう様はまさに神話のそれだった。
勤勉にして実直、勇敢にして豪快。
アサシン、李書文との戦いなど決闘の極みだった。
ああも見事な決闘を見て、惚れない道理があるだろうか？
彼女の情熱の炎は、まさしく最高潮に燃え上がっていた。
己と相手。その全てを燃やし尽くすまで消えない炎。
それが彼女の愛だ。決して万人に受け入れられなかった彼女の愛だ。
だが、一誠はそれを受け止める。受け止めてなお燃え尽きない。
人に仇なすドラゴン。その中でもひときわ凶悪な邪龍たち。
そのほぼ全てを率いていた男にとって、情熱の炎などでは髪の一本すら燃やせないだろう。
どれほど愛しても燃え尽きず、しかも応えてくれる存在。
これほど落としがいのある男など存在しない。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」

玉藻の前にとって、一誠は実に困った主だった。
パッシブスキル、超甲殻三戦法！ガードでブレイクに勝つ！
パッシブスキル、脚波正拳！アタックでガードに勝つ！
パッシブスキル、二重金剛！ブレイクでアタックに勝つ！
パッシブスキル、生命帰還・茶色雀蜂！引き分けで勝つ！
アクティブスキル、震天動地！フィールドの敵を全て破壊する！
など、エネミー戦ではゲームシステムの根幹を否定する無茶苦茶さ

加減で徹頭徹尾無敵だったり、
反面、対戦相手との決戦では自分のサポートに徹するなど意味不明な律儀さを見せていた。
もうあいつ一人でいいんじゃないかな、と思うほど強い男だった。
もうコイツが優勝でいいんじゃないか、と思うほど無駄に律儀だった。
しかし、彼は鍛錬の合間に色々と気遣ってくれた。
自分に従ってくれる部下への敬意として、望んでいた感情ではないが「愛」してくれていた。
よくやってくれたと頭を撫でてくれた。ありがとうといって尻尾を毛づくろいしてくれた。
道具ではなく、部下として、弱い私を大切に扱ってくれた。
そんな彼が、なんとなしに自分に言ってくれたことは、とても嬉しかった。

もし良かったら、今後もおれの部下になってくれ。

それは、彼女の求めていた答えではないにしても。
ベストではなくベターですらないにしても。
仕えていた男に必要とされたことは、彼女の存在意義としてとても嬉しかった。

「――――月の聖杯戦争の覇者が告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

エリザベート・バートリーは、一誠という男が好きだった。
彼女は、生前何をするにも一方的だった。
与えるのも、奪うのも。痛めつけるのも、奉げられるのも。

そんな彼女にとって、一緒に色々なことをしてくれる男との日々は、
暖かくも穏やかで、そして刺激的だった。
まるで、生前自分が望んでいた恋物語のように。
そんな、貴族であることを自覚している彼女は、街娘と変わらない夢を抱き、
しかも叶うことが無かったのだから。
自分に臆することも無く、しかも悪いところを一緒に改めてくれる青年。
惹かれるにはそれだけでも十分すぎる。
また、一誠が赤龍帝というのも大きかっただろう。
無辜の怪物として竜になった彼女は、自分の同類に対して敏感になっていた。
つまり、彼のほうが自分よりも『貴い』と思ったのである。
あらゆる神魔を打ち倒す怪物の帝王。なるほど、乙女が恋焦がれるというのも分かるだろう。
それは彼女だけの感情ではない。生前彼の周りには多くの異形や混血が居た。
そんな彼女達にとって、自分たちとは比べ物にならないほどの異形でありながら、
その力を完全に御し、誰に迷惑をかけることも無く、それどころか良いことに使う彼はまさしくヒーローだった。
周囲には笑顔が絶えず、同じく異形になってくれる健常者たちが軍勢をなし、
世界の多くの面々から求められ、民衆から愛される、平和を守る異形。
万人から愛されるその勇姿、彼が手を振れば民は歓喜と共に彼を祝福した。
何が悪いのかも分からない怪物の彼女にとって、『彼の夢』は余りにも眩かったのだ。
一緒にいれば、自分もその喝采の中にいられるような気がして。

「誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者」

モードレッドは、一誠に何を見たのだろうか。
異性なのか、父性なのか。それは初恋も父性愛も知らない彼女にとって酷な質問である。
ただ、彼女は聖杯戦争中多くの夢を見た。
それは、一誠が娘を育てる日々だった。
夜鳴きで目を覚ませば、隣ではわんさか怪物が生まれていた。
家財はおろか。床や天井、壁なども壊しまくっている。
一誠は寝ぼけ眼で、彼女を泣きやませつつ怪物の頭を砕く日々が続いた。
赤ん坊とは泣くものであるとモードレッドは知識で知っていた。
だが、一誠の娘はそれはもう深刻だった。
ミルクが欲しい、オムツが汚れた、眠い。
あらゆる不快感で魔獣を生み出す彼女の養育は、根気云々の前に腕力が必要だった。
なんとも哀しいことに、学生の身で両方持っていた一誠はその苦行をこなし続けた。
ある貴族の男は、彼にこう言った。辛くはないのか。苦しくは無いのか。
一誠は答える。辛いし苦しい。だが、父親としての仕事だ。そこに是非はない。
更に言えば、こんなものはどこの母親もやっていることだ。
娘はすくすくと育っていく。父親からの愛情を一身に受けて。
そんな夢を見続けるモードレッドに、嫉妬や羨望が渦巻いていった。

それは、自分には得られないとあきらめていたものだったから。
そして、ある日意地悪のつもりでこうたずねた。
お前は娘を愛しているが、その子供が血がつながっていなくても、作り物でも愛せるのか。
その質問がどれほど滑稽かも知らないで。
一誠は、笑いながら答えた。娘は血などつながっていないし、作り物だ。
一誠の『娘』は、身のうちに宝具を宿し、それを使うためにだけ生み出された破壊兵器だった。
一誠は、ただその赤子を娘と呼び愛していただけに過ぎない。
では、何故愛せるのかとモードレッドはたずねた。それは、叫びのようだった。
どうして、自分は愛されなかったというのだろうか。彼女と一体何が違うというのか。
四六時中抱きしめていた。四六時中一緒にいた。成長を見守ってきた。そりゃあ、愛着もわくさ。
それは、モードレッドにとって、どうしても得られなかった答えへの明確な回答だった。
父親がどうして愛してくれないのか、完全に理解してしまい、幼子のように泣きじゃくるモードレッド。
そんな彼女を、一誠は優しく、暖かく抱きしめた。
それは、モードレッドの心の反英雄としての反骨心をゆっくりと、溶かしていった。

「汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」

同時に召喚された他の3人など見もしない。

ほんの少しの間だけ、いや随分長い間放置されていた彼女達は・・・。

「奏者よ・・・！」

「ご主人様・・・！」

「マネージャー・・・！」

「・・・父さん！」

泣きじゃくりながら一誠にしがみついた。

「いだだだ！モードレッド、筋力Ｂで抱きつくな！
あとエリザベート、爪で引っかくな！
タマモ、ネロ！胸を押し付けるな！」

「そなたが悪いのだ！
余をさっさと呼べば、こんなことにはならなかったのだぞ！」

「ぐへへ、ご主人様の体臭マジフレグランス！
このまま私の体臭もマーキングしちゃいましょう！
他の女が寄り付かないようにしないと！」

「いいでしょう！散々待たせたんだから！
サインだと思ってありがたく受け取りなさいよ！」

「父さん！父さん！父さん！私・・・会いたかった！」

「死ぬ！死ぬ！
もう死んでるけど・・・死ぬ！」

かくて、他の3人の存在に各々が気づくまで、貧弱なアサシンである一誠は四方から抱擁を受けたのである。
放置の代価を受け取ったのだ。痛いほど。

魔力消費の問題を解決するたった一つの冴えたやり方

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

奇妙な緊張感を持って、にらみ合う４人のサーヴァント。
アサシン曰く、自分とは違い正当な反英雄らしい。正当な反英雄とはいったい。

「奏者よ・・・では説明を要求するぞ」

赤い服を着た男装・・・？の少女はアサシンを奏者と呼び、且つ説明を要求した。
アサシンには正当な宝具として生前の部下８人を召喚することができる。つまり、『忠実無双の無法者』だ。
それとはまた別に、死後に聖杯戦争で得た部下４人を呼び出す権利、『番外召喚・覇者の片翼（エクストラ・サーヴァント）』を所持していたらしい。
だが、アサシンは『忠実無双の無法者』のみを使用し、『番外召喚・覇者の片翼（エクストラ・サーヴァント）』を使用していなかった。
それが、自らこそ一番の使い魔であると自負している彼女たちにとっては納得がいかなかったらしい。
・・・。もう既に、私には彼女たちが召喚されなかった理由が分かる。
こいつら、めんどくさそうだ。

「ご主人様～？
召喚していただいたのは嬉しいんですけど～？

この１２体同時使役は如何なものかと思うんですよ。
いくらなんでも多すぎると思いません？
魔力消費削減の為間引きませんか？１１体ぐらいズバッと。
ほら、時代はエコですよエコ」

とんでもない提案をしてきたのは狐の耳と尾の生えた妖艶な女性。
大丈夫です。まだ大丈夫。ちょっと眩暈がしているけど。
でも戦闘はきついかな。だって、両脚と両手と胴体と頭がしびれて動かないし。

「そうよ！
この埋め合わせとして、処女の生血を２０ℓ用意してもらおうかしら！」

生血をねだるのは、角と尾の生えた異形のアイドル。
うん、これは反英雄だ。世のため人のためにぶっ殺さないと。
アサシン、始末しちゃって。

「マスター、ご勘弁を。これでもおれの部下なので」

珍しく、もないが謝るアサシン。
仕方ない、勘弁してやろう。
・・・。
ひょっとして、キャスターよりとんでもないのを呼んでしまったのでは。

「嬉しくて・・・父さん、て呼んじゃった・・・。
びっくりしてないかな」

アサシンのことを恥ずかしそうにちらちらと見ているのは全身甲冑の騎士だ。

見た感じは一番まともだ。
兜で顔は見えないが、間違いなく恥ずかしがっている。
合わせる顔が無いというやつだろう。

「素人でもあるまい。今更説明が必要か？」

アサシンは呆れ顔で突き放してきた。取り付く島も無いという奴だ。
だが、その通りだと思う。
戦闘員８人と違って、彼女たちは相互に面識が無いらしい。
とてもではないが、あのチンピラ三次元殺法はできないだろう。
加えて、戦闘中でもないのに魔力がどんどん失われていく。
どうやら、彼女たちはアサシンやあの８人よりも強力で、その分消費もきついようだ。
あれ？目の前が真っ暗になってきたぞ？

「寝ていたおれを逆レしようとした挙句腕をへし折ったのは誰だ」
「ぐっ・・・」
「おれが状態異常を喰らったとき押し倒したのは誰だ」
「だってぇ～～、ご主人様がイケ魂過ぎるんですもの～～」
「おれに毒殺兵器を食べさせようとしたのは誰だ」
「・・・ごめんなさい」
「モードレッドは一番強い分、魔力消費も激しいからな・・・」
「・・・（捨てられたわけじゃないのか）」

なんだか、気分がよくなってきた。
ああ、どこにでもいけそうだ・・・。
そうか、これが遥か遠き理想郷・・・。

「む、マスターがまずいな。
戦闘員、スイーツをお持ちしろ！」

「「「「「「アラホラサッサ、ホイサッサー！」」」」」」

スイーツ?!

プリン?アイス?クッキー?それとも和菓子?

「マスター、魔力回復用のスイーツをお持ちしました」

なんて素敵な響き！

あれか、いわゆるＲＰＧ的な便利アイテムか！

そんなものがあるならさっさと出せばいいのに。

目に力が入った。視力が復活する。

そこには、少し大きいバケツが・・・？

「水です。１０ℓある」

な、なんだかオーラを感じる！

凄い魔力を回復しそうだ！

量的な意味で！

あれか、下級の回復アイテムを飲みまくるあれか！

「しかし、これだけの量の水は飲めない」

ですよね！

さすがに無茶ですよね！

「果糖を４キロ混ぜる。これで甘くなる。

おれも、餓えていた時代はこれを飲んで乗り切ろうと頑張ったもんだ」

飢饉なの?今大飢饉なの?農作物が大打撃を受けているの?

極限の飢餓状態でもないのにこんなの飲まなくちゃいけないの?

これで甘くなる、じゃないよ！絶対スイーツじゃないよ！スイートではあってもスイーツではないよ！

百歩譲って調理過程だよ！少なくとも完成品ではないよ！

というか、１４ｋｇも砂糖水飲まなくちゃいけないの？太るでしょ！

単純計算で１４ｋｇも太るでしょ！嫌だよ！こんなの飲んで１４ｋｇも太るなんて！

「マスター、おれを信じろ」

・・・。

卑怯者め。

視点切り替え。

岸波→アサシン

気づいたらマスターが干物になってた。

何を言ってるのかよく分かるだろう。理由は明白だ。

サーヴァント１３体は無理だよな。常識的に考えて。

いや、いけると思ったんだよ。今まで大丈夫だったし。

普通は1体でもしんどいところ、９体まで支えられるんだし、４体増えてもいけるかな、と。

もう心配するだけ時間の無駄かなと思って。でもやっぱり無理だったな。

こいつ等４人はおれ達９人と違って各々ちゃんとした英霊だし、省エネモードになれないし。

絶とか、紙絵とか使えないしな（皇帝特権除く）。

こんなことになるだろうと思って事前に用意しておいた水と果糖

で体力と魔力を回復させる。
半死人にバケツ1杯の砂糖水を飲ませるのは気が引けるが、やむを得まい。
水を得た干物のように復元していくマスター。さっきまでミイラみたいだったのに・・・。
我がマスターながら冗談みたいな回復力だ。マスター実は改造人間か何かなんじゃないか？
記憶喪失しているし、細かいところは分からないが。

「あの、ご主人様？
キャスター的に気になるのでお伺いしたいのですが、
その水、どうやってご用意されたので？
魔力を水に込めることはともかく、それを維持するなんて早々できないと思うんですが」

「放出系念能力と神字のあわせ技だ。
市販のペットボトルに、戦闘員とおれで手分けして神字を刻み、
その中に入れた水道水にオーラを蓄積させておいた。
マスターの魔力量が大分増えてきたときに造り溜めをはじめた。
そこそこの量がある」

9体のサーヴァントを支えつつまだ余裕があったマスターは、
やっぱりどっかおかしい。
ちなみに、神字を使ったオーラの蓄積技術は、戦闘員達より捜査員達のほうが上であり、
あんまり効率はよくない。
オーラを10込めて、7残り、一週間後には3になるだろう。
とはいえ、結構な量のストックがあったので、まあどうにかマスターを助けることができる。
なおマスターの着ている下着は、オオミノガの糸で編んで神字を刻んだ防弾防刃防魔術下着だ。

これによってマスターは対魔力Cぐらいある。

「がーん！

道具作成までできるなんて、このチンピラ共もあなどれねー！

オノレ、かくなる上は私もキャスターとして色々しなければ！」

意気込みがあって大変結構。

コイツには色々頑張ってもらうので、気合が入っているとやりやすい。

「・・・それで、マスター。

このタイミングで呼び出した理由はなんだ？」

モードレッドは、恥ずかしそうにしながらも建設的な話をしてきた。

いいね、やっぱり真面目だコイツ。流石、騎士王の治める国家を計画的に転覆させただけのことはある。

この程度の戦術眼が無ければ、とてもではないが、国一つ傾けることはできないだろう。

そう、コイツは有能なのだ。色々な意味で。その分、扱いには注意しなければ。

「説明したいが、これ以上喋っているとマスターに負担がかかりすぎる。

この、魔力消費の問題をさっさと解決しよう。話はそれからだ」

「私の出番ね？

いいわ、片っ端から処女を集めなさい！

最高の拷問場を造ってあげる！」

狂気のにじんだ笑みを浮かべるのはエリザベートだ。

この顔を見ると、やっぱりコイツバーサーカーの適性あるよな、と

思う。
おれと一緒で、正気を保っていられそうだ。
コイツの場合、最初から狂っているので会話が成立するぐらいになりそうだが。

「みこーん！
何陣地作成しようとしているんですかね？このマイナー英霊は！
ここはハンガリーなんて南蛮の田舎じゃなくて、
最新最古の入り混じる、八百万の神の住まう神の国日本。
よって私が陣地作成するに決まっているでしょうか！」
「というか、ランサーよ。濫りに民を傷つけるでない。
統治者たるもの、確かに民衆から搾取することもあるだろうし、
傷つけ、奪うこともあるであろう。
だが、統治者を統治者としているのはやはり民衆なのだ」

そういって、なかなか重みのある発言をするのはネロ。
この中では、唯一悪事を働いていない英霊だ。
反逆したわけでもないし、領民を不当に殺していたわけでもないし、
違う生き物に成りすましていたわけでもない。
純粋に、民と自分を愛しすぎる余り国庫を空にし、またある宗教を弾圧し、
そして治世がつたなかったせいで国を滅ぼしただけだ。

「まあ待て。拠点作りはまた後だ。
その前にやっておかなければならないことがある。
キャスター」
「はい、ここに。
及びとあらば即参上です！
良妻賢母なこのタマモ、この中でも、いやさあらゆる英霊神霊のなかでも、

ご主人様のベストサーヴァントなのですから！」

オーバーリアクションによって、他の３人にアピールするキャスター。

まあ、確かにコイツが一番使い勝手がいいのだが、周囲との不和が心配だ。

こいつに限ったことではないが、この４人は戦闘員たちと違って注意が特に必要だ。

なにせ、おれを慕う余りマスターを敵とみなす可能性がある。

おれがどうなろうと気にしないが、マスターに危害が及ぶとなれば、話は別だ。

マスターのためにも、こいつ等の為にも、暴走しないように気を使わなければ。

「お前の宝具は、今使えるか？」

「・・・ん～～、申し訳ありませんご主人様。

確かに私の宝具は魔力消費を無くすものですが、それを使うにも魔力は必要なのです。

その分の魔力が無いと、ちょっと・・・」

「ふん！

なんだ、結局使えないのだな。

口がでかいだけの駄狐め」

「なんだと！このアンポンタン皇帝！

そういうあなただって、これでもかって地味な宝具の癖に！

なんですか、あんなに派手に展開しておいて、効果が敵の弱体化とか！

出落ちにも程があるっつーの！」

「じ、地味だと！

余の設計した至高の芸術を地味だと！」

「後世でネタにされるぐらい、誰にも評価されなかった『至高の芸術家』が、

戦術的な価値1位のこの私の宝具を笑うとは、笑止千万ですよ！」
「そこまでにしておけ。
ネロ、会話に勝手に割り込むな。今のはお前が悪い。
タマモに謝れ」
「だが奏者よ・・・！」
「謝れ」
「・・・すまぬ」

不承不承に謝るネロ。
それを受けて、キャスターは得意満面だ。

「流石ご主人様！
大岡裁きもびっくりの名審判！
やっぱり最後は愛が勝つんですね！」
「タマモ、今度はお前が謝れ。
人の宝具にケチをつけるな」
「ええ～!?
喧嘩両成敗とか、学校の先生じゃないんですから！」
「謝れ」
「ぐぬぬぬ」
「ほれ、さっさと謝らぬか。
余は、謝罪には寛大だぞ？」

ネロはドヤ顔で、苦悶しているキャスターに謝罪を促す。
というか、早く謝れ。話がちっとも前に進まない。

「ごめんなさい～～。
何が悪いのかちっとも分からないですけどごめんなさい～～～」
「ちゃんと謝れ。
ネロはちゃんと謝ったんだぞ」
「・・・すみませんでした」

「うむ、許す！」

悔しそうなキャスターに、ものすごく偉そうな暴君。

・・・。

なんで、こいつ等のコントに付き合わなきゃいけないんだ。

ここは幼稚園じゃないんだぞ。

「魔力量が問題なら、さっきの水がたんとある。

１００ℓもあればいけるか？」

「いくらなんでもそんなに飲めませんから！

海坊主になっちゃいますから！完全に別の妖怪になっちゃいますから！」

「馬鹿かお前。普通に魔力を奪えばいいだろう」

コイツは、魔力を敵から奪う技を持っている。

無防備な水から魔力を吸うなんてたやすいだろうに。

エリザベートも似たようなことはできるだろう。

「あ、それもそうでした。タマモちゃんたらうっかり！」

「でだ、魔力を補充したら『水天日光天照八野鎮石』を使って、魔力消費を無くせ。

そうしたら・・・」

この判断は、間違いなく聖杯戦争の根幹を破壊するものだ。

キャスターだけでなく全勢力を敵に回すだろう。

だが、この状況ではそれは返って好都合。むしろ、そうならないと困る。

正直、この手は使いたくなかったが仕方あるまい。

「天照様から賜った『八咫鏡』を使って、おれ達全員を〝受肉〟させろ」

こうして、聖杯戦争はついに根元から崩壊する。

７人の魔術師がマスターとなり、７騎の英霊がサーヴァントとなって付き従う。

７組１４名で行われる戦争という大前提が、アサシンが召喚した４人によって真の意味で崩壊する。

そして、御三家の真の目的である死者蘇生、不老不死を可能にする、魂の運用。

第三魔法天の杯に至る為、根源への穴を穿つという大儀式。

これもまた、キャスター、玉藻の前の宝具によって崩壊する。

受肉した１３騎の英霊が、受肉を求める征服王の前に立ちふさがる日は、もう遠くない。

哀悼の意と勝利への決意を胸に

それは、厳かな雰囲気の中での儀式だった。
アサシン曰く、死者の蘇生は本来魔術ではなく魔法に分類されるらしい。
魔術は現代科学で再現できるもの、魔法はできないものを指す。
しかし、キャスターのそれは気合が違うらしい。
キャスター、玉藻の前が言うには『魔法使いなんざ、所詮人間の頂点。
神の頂点である主神の権能の前には何の意味もありゃしません』とのこと。
まあ、この時代では使うのは相当負担があるらしいが、一回なら何の問題もないとのこと。
チートだ。聖杯に2度目の生を望むものもいるだろうに、
なんたってこんな素敵宝具を持っている奴が聖杯戦争に参加しているのだろう。
でも玉藻の前は「いいえ、ご主人様の方がチートです」とも言っている。
いずれにせよ、これで私への負担は大幅に軽くなるらしい。
なにせ、彼等は生者として復活するのだから自前で魔力を生産できる。
つまり、マスターが供給する必要も、この世界への楔としての機能も必要なくなる。
・・・。マスターが存在する意義は在るのだろうか。

奥の手をお見せしましょう！
世にはびこる魔魅邪魅、元凶なるは殺生石、禊ぎ払うは我が鎮石、いざ！
とう！
私、心を入れ替えました！
水天日光、ここに見参！

厳かなのか、そうでないのか分からない呪文によって、周囲の雰囲気ががらりと変わる。
これこそが、サポート能力に特化したサーヴァントキャスター、玉藻の前の宝具『水天日光天照八野鎮石』。
真名開放による効果は極めて単純、自軍の魔力消費を『無くす』宝具。
単体ではほぼ意味は無く、しかし前衛と後衛に分かれることができるこの陣営ならば、
その効果は戦術レベルにとどまらない、とアサシンは言っている。
というか、この大所帯ではそれぐらいしないと全力の戦闘は無理だ。
しかし、それもあっさりと解消される。
キャスターを囲む１２騎のサーヴァントたち。
アサシン、その宝具の８人、加えてセイバー二人にランサー。
単独で聖杯戦争を２回開催できるほどの面々が、その時を待っている。

一二三四五六七八九十、布留部、由良由良止、布留部。

尋常でない、という規模の輝きが廃工場を満たしていく。
まるで、建物の中に太陽が出現したような、そんな光量だった。
その光に解けていくように、アサシンたちの体が消えていく。
だが、それは消滅ではなく転生だった。いや、復活というべきか。
日本神話の主神、太陽神天照大神の権能によって、沈んだ太陽が再び東から昇るように、
死者であるサーヴァントたちをこの世界に、この時代に復活させていく。
これ自体が万能の願望機であるように、玉藻の前の鏡は神々しさを増していく。

沖津鏡、辺津鏡。
八握剣。
生玉、死返玉、足玉、道返玉。
蛇比礼、蜂比礼、品物之比礼。

布瑠の言、死者蘇生の言霊で、古来の儀式にのっとって、死者は現代にまさしく復活する。
それはもはやゴーストではない。サーヴァントでもない。地に足をつける人間だ・・・！

でも、何故全員裸。

悲鳴と共に、大事なところを隠す４人の正当なる反英雄達。
彼女たちは、直立不動の体勢から一気にへたり込んだ。
明らかに羞恥で赤くなっている。
「ぬぬぬぬ！
おのれ淫乱狐め、余の裸が見たいのならば見たいとそう言えば良いものを！
このような場でさらし者にするなど・・・！」
「なにわけのわからない事言ってんですかピンク皇帝！
あなた普段とそんなに変わらないじゃないですか！
ああ～ん！ご主人様にもまだ見せたこと無いのに！」
「オレの体を見るな！見ないで！・・・見ないでよ！」
「変態よ！みんな変態だわ！
嫁入り前の娘の柔肌を晒させるなんて！」

しかし、８人の暗殺者達はそんなことは一切無い。ただ、自分の体を確認している。
真の意味で、生前の力を取り戻していないようだ。

「んん～！正義の血が滾るぜ！」

「血肉があるってのはいいねえ！」
「今すぐ人間をぶったたけそうだぜ！」
「三大欲求を満たしたいな～～！」
「してぇ～～、殺しがしてぇ～～！」
「復活！復活！復活！」
「強靭！無敵！最強！」
「俺は無敵だ～～～！」

訂正、いつもどおりだ。無駄にポージングを決めている。
ここまで来ると、ボディビルの大会みたいで恥ずかしくない。
ではアサシンはというと・・・。

「・・・」

ひたすら無言で、握り締めてる自分の拳を見つめていた。
彼は、合理性と非合理性の狭間に成功を見出す男だ。
もしかしたら、彼の中の非合理的な部分が今回の復活を喜んでいないのかもしれない。
しかし、合理的な部分が彼を突き動かす。
自分は裸のまま、寝るときに使っていた毛布をもって、反英雄の少女達に羽織らせていく。

「タマモ、よくやってくれた。ありがとう」
「え？褒められた？私褒められたんですか？
きゃー！裸を褒められた、嬉し～～！
やはり時代は美乳にして巨乳！キター！」

「ネロ、気遣いが足りなかったな」
「む・・・、勘違いするでない、奏者よ。
余は、別に恥らってなどいないぞ！
ただ、そうびっくりしただけだ！」

「あれ、無視？私のボケガン無視？」

「エリザベート。
お前はことさらに恥ずかしいよな」

「そうよ！もっと早く羽織らせなさいよ！
誰よりも早く！」

「モードレッド・・・」

「あ・・・」

アサシンが毛布を羽織らせると、モードレッドはほかと違い包まってしまった。
よほど恥ずかしいのだろう。小刻みに震えている。

「どうした、一緒に風呂に入った仲じゃないか」

「あ、あの時は・・・その・・・」

え？一緒に入ったの？混浴なの？
ていうか、聖杯戦争中に風呂に入ったの？

「心境の変化か・・・？」

「ああ、うん。大丈夫だ、すぐに・・・」

「いや、そういうことならしばらくはそのままでいい。
すまないが、作戦の説明だけは先にさせてもらう。
マスター」

立ち上がったアサシン。その一糸まとわぬ姿をみると、つい胸に刻まれた令呪に目がいく。
そして、〝令呪〟を見るとそのまま視線は下がって・・・。

「お前、召喚見たな？」

アサシンから、底冷えするほどの殺意を感じた。
その顔は、温もりも冷たさも感じない無機質な無表情だ。
ご、ごめんなさい、と謝る。アサシンは、ため息をつきつつ許してくれた。
ただ恥ずかしいだけの秘密だったからだろう。

「まあいい。とにかく、これで魔力供給の心配はほぼ無くなった。言いたくは無いが、これでマスターの『命』が狙われる危険性も大幅に下がったしな」

そう、アーチャーを除く全てのクラスはマスターがいないとこの世界に現存できない。
だからこそ、本来直接戦闘能力の低いアサシンが脅威となるのだ。
そして、この単独行動。マスターにとっては全くといって何の意味も無い能力である。
自分が死んだあとも戦えるとか、なんの慰めにもならない。
しかし、この場にいる13騎のサーヴァントは受肉した。もはや彼等はこの世界に己の体で立っている。
つまり、私を殺しても彼等の行動には何の支障もないのだ。ズル過ぎやしないだろうか。

「もちろん、おれの令呪は効果を発揮する。
そういう意味ではまだ価値がある。それに、おれはそんなものが無くても君に忠を誓っている。
今後もばっちり警護させてもらう」

アサシンは、相変わらず過保護だ。もう背中にくくりつけられるのにも大分慣れた。
きっと、聖杯戦争中もこのままずっとこんな感じなんだろう。

「各員、そのままでかまわん。聞け」

アサシンがそう言った瞬間、戦闘員達は横一列にならんだ。
さながら軍人のように、直立不動の体制をとっている。
こいつら、こんなに綺麗に並べるのかよ・・・。
尚、反英雄４人は相変わらず毛布を羽織ったままである。
モードレッドは、毛布の中からこちらの様子をうかがっているようだ。

「このたび、我々は『やむを得ず』受肉し、生者として復活した。
恥知らずなことにな」

その言葉に、嫌みったらしさも謙遜もない。ただ、自己嫌悪だけがある。
そう、この聖杯戦争では多くの犠牲者が生まれてしまった。キャスター、ジル・ド・レェによって。
そして、おそらく今現在も。

「戦略上仕方ないとはいえ、無関係な一般市民が死に、関係者である咎人が生き返る。
摂理にも論理にも反する行いだ。許されることではない。
だが、それでもやったのは必要だとおれが判断したからだ」

辛そうな、アサシン。受肉で喜んでいたネロやタマモは俯き、モードレッドも顔を出した。
ランサー、エリザベートはその言葉がよく分かっていないようだ。
何故悲しんでいるのか分からないらしく、首をかしげている。

「キャスターの凶行は必ず止める。それを改めて誓う。
だが、その前に犠牲者達に各々のやり方で哀悼の意を奉げてくれ。
エリザベート、お前には何がなんだか分からないだろうが、
おれの為に祈りをささげてくれないか？」

「オッケー、とりあえず祈っておくわ」

アサシンに促されるままに、皆瞑目し、祈りをささげている。
私も、祈りをささげるとしよう。忘れてしまった家族の為に。
路地裏で靴だけを残して逝ってしまった少女の為に。

数分か、数十秒か。

祈りは無意味であり、犠牲者は生まれ続けているのかもしれない。
だが、決意は固まった。私達は前に進まなくてはいけない。
キャスターを止める為に。

「おれの感傷に付き合ってくれたことに感謝する。
では、作戦の説明前に状況を整理しよう。
この聖杯戦争、全体像は全くといっていいほど把握できていない。
というか、接触しているのはキャスター、ジル・ド・レェだけだ。
こいつ以外は活動している形跡すら見られない。
これは、各参加者が穴熊を決め込んでいるか、或いは節度を弁えて各々の領地でのみ戦っているか、
もしくはその両方が考えられる」

極めて事務的に、アサシンは言葉を続ける。
そう、私達はキャスターを除く5組、その1組にも出会っていない。
キャスター以外全滅したかのように、全く動きが無いのだ。
狙撃を警戒しているアサシンが馬鹿みたいである。

「おそらくは、前者だろう。
穴熊は単純にして最良の戦略だ。
バトルロワイヤルでは目立つことは致命傷になる。
どれだけの物量を持とうとも、複数の参加者から狙われればそれまでだ。

そういう意味ではキャスターは最悪の戦術を取っているといえる。
たとえ、それがどれほど自分の能力を生かすことになろうとも、だ」

しかし、それにも限度はある。
先日、我々はキャスターの拠点を文字通り破壊した。
余りにも盛大で、ニュースにも取り上げられたらしい。

「あれだけのことをやったのだ。
引きこもっていたいという本音と、神秘を隠匿しなければならないという建前。
面子を重んじる貴族にとって、ここいらが限度だろう。
各面々は一斉に動き出す」

そして、そのタイミングでアサシンは彼女たちを召喚した。
私の魔力量の絡みもあるだろうが、このタイミングである理由はなんだろうか。

「穴熊は、最良の戦略だ。そして、最善の戦略ほど読みやすいものは無い。
ここから、彼等の行動を制限しにかかる。その上で、キャスターを倒す。
方針は大雑把にはこんな感じだ」

それこそ、とんでもなく大雑把な説明がされた。

「つまり、今まで我々はキャスターだけを相手取っていた。
しかし、ここからは残る全組と正面から敵対し、相手どる。つまり、全員敵だ。
おれ達は、正体不明のマスターに従えられた謎の暗殺者だった。
しかし、ここからは全ての情報をさらけ出して戦う。つまり、丸裸で戦うわけだ。

加えて、反英雄４騎を追加し、更に受肉させ現世での自由を与えてしまった。
これだけの新参者を抱えて戦うのは、大いに不和の種になるだろう。
戦力は増大しても、安定度は大いに下がった。おれにとっても未知数だ。
つまり、おれは『状況を悪化させた』わけだ」

質実剛健を善しとしていそうなアサシンにしてみれば、なるほど、彼女たちの召喚はリスクが高いというわけだ。
だが、それを引き換えにしても、事態を動かす必要が出たとは、どういうことだろう。

「ジル・ド・レェの次の手が全く読めないからだ。
最善の策をとるのか、次善の策をとるのか、最悪の策をとるのか。
仮にも元帥、無策で挑んでくることも無いだろう。
そもそも、無策だったら逃げないしな」

私達にとって、最初で最悪の敵。
彼等を何とかすること、その目的を見失ってはいない、ということだろう。

「だから、状況を単純にする。
連中が拠点を構えるのかそれとも隠れ潜むのか、
それすら定かでない以上、こっちも隠れているわけにはいかない。
長期戦になれば、ますます犠牲者が増えるし、
そもそも消耗戦では向こうが有利といわざるを得ない。
こっちは頭数はいても、補充が全く利かないからな」

なるほど、『人間』がいる限り、キャスター達は戦力をいくらでも補充できる。

対してこっちは、いくら受肉しているとはいえたったの１３人。
もし、万が一一人でもやられたらまずいということか。

「だから拠点を構えて、向こうにこっちの位置を教える。
篭城を決め込み、またこっちに人質の効果が無いと知っている以上、
どうやったって攻城してくるだろう。そこを叩く。
だが、それは当然他の組にも位置を教えることになる。
つまり、結果として他の組にも襲われることになるわけだ。
である以上、拠点作りには気合を入れることになる。
キャスター、苦手なのを知った上で頼む。
隠密は考えないで、魔力的な意味で目立つ拠点を作ってくれ」
「承りました！
このタマモ、誠心誠意ベルリンの壁から光子力研究所のバリヤーまで、
幅広くご用意いたします！」
「ああ、その調子で頼む。
どの道、ライダーが敵にいる以上堅牢にするだけ無駄だしな。
あくまでも、魔力を集めることにだけ力を注いでくれ」

キャスターのボケに対してガチで答えるアサシン。
というか作戦会議中に、呆けるな駄狐。

「まあ、その代わりと言ってはなんだが、戦闘が始まったら宝具の使用以外はしなくていい。
これだけ前衛がいるんだ。戦闘員は後衛もこなせるし、暢気に構えていてくれ」
「戦闘が始まれば、オレの出番だな」

そういって、毛布から顔を出して立ち上がる小柄な少女、モードレッド。

ステータス的に、彼女が一番強そうだ。まさに最優。

「そうだ。こっちにはセイバー2騎、ランサー1騎、アサシン1騎、その宝具のサーヴァント8騎がいる。
キャスターとマスターを保護して、他勢力を全員相手どるに足る戦力だ。
特に、モードレッドは格の上でも上から数えて3番目ぐらいの強力なサーヴァント。期待しているぞ。
そうだな、ギルガメッシュ、カルナといった規格外組。ヘラクレス、アキレウスといった神話組に次ぐ実力者だ。
まあ、そんな連中が全力で戦えるはずもないし、搦め手がきてもネロやエリザベートで対応できる。
つまり、うまく回れば磐石ということだ」

うまくいかなかったら、内部崩壊するんですね、分かります。
なるほど、コイツはリスキーだぜ。

「それに、さっき言ったバトルロワイヤルの最悪の手。
他勢力を全員敵にまわすというのも、この状況ならむしろ最善の手だ。
キャスターが他の組と手を組むなんて事はありえないし、
セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、バーサーカー。
これらの組は最善の手をうってくるだろうからな」

最善の手は読みやすい。
アサシンのさっきの言葉が思い出される。

「5組、10人。魔術師が5人いて英雄が5人。
互いの手の内をさらけ出しあい、令呪の全てを使用して、
後先も考えず、ただおれ達を全力で殺しにこれるわけがない。
なぜなら、全員優勝を狙っているんだからな」

そうか、彼等は穴熊を決め込んだ。
つまり、優勝する為に最善の策をとろうとしている。
そんな彼等が、私達に勝った後で殺しあうことになる面々に、
宝具や弱点につながる真名を漏らすはずも無いということだ。

「何人かは、手を組もうと言うだろう。
何人かは、全力でこっちを排除しようとしてくるだろう。
だが、何人かは同盟相手の背中を狙うはずだ。
何人かは弱点を探ろうとするはずだ。
何人かは弱点をさらけ出すことに躊躇するはずだ。
そして、各々がそれに注意しなければならない。
こっちは、確かに不和を抱えている。
だが、向こうはそれどころじゃない。なにせ、全員敵同士なんだからな」

聖杯戦争、その根幹は万能の願望機の奪い合いだ。
である以上、最後の一組だけしか残らない。
つまり、向こうは手を組む以上『全力』を出せない！

「中にはこっちに離反するものも現れるだろう。
なにせ、受肉、第二の人生、死者蘇生というのはオーソドックスな願いの一つだ。
聖杯戦争に勝ち残るよりも、こっちに従えば一発で解決する。
自分を『利口』だと思っている奴は、マスターにしてもサーヴァントにしても、
相方を裏切ってでもこっちに擦り寄ってくるだろうな。
まあ、そんな奴は信用できない。切り捨てるだけだ。
こっちには、頼りになるのがそろっているしな」

アサシンは、全員の顔を見る。

その表情には、信頼が見て取れた。
それを受け止めて、反英雄の少女達は嬉しそうに頬を染める。
戦闘員達は、直立不動のまま獰猛に笑った。

「これだけ頭数がいるんだ、平行して作業を進めよう。
皇帝特権黄金率で、資金を調達。食料や衣類、各雑貨を購入。
拠点に陣地を設営、宝具を使って魔力を『国中』から集めまくる。
そして、こっちの各メンバーの結束、とは言わないまでも交流を深める。
体勢が整い次第、キャスターを挑発し、攻撃を誘発させる。
その間、他の勢力からも攻撃のおそれがあるだろう。これも逐一迎撃する。
こっちに十分な戦力がある以上、アーチャーからの狙撃も、ライダーからの突撃も脅威とはいえない。
味方全員が生き残り、敵全員を殲滅する。これはもはや確定事項だ。
異論は無いな・・・？では、作戦行動を開始する！」

義憤に燃える衛宮士朗も、積極的に動き出していた遠坂凛も戦場に存在しない。
だからこそ、兵藤一誠の判断はまさしく正解だった。
この時点で、衛宮陣営の戦略は破綻している。
あらゆる手段を用いてマスターの暗殺。
それが複数のサーヴァントによる護衛によりほぼ不可能となり、
また、受肉によって殺害自体が完全に無意味になった。
また、岸波白野は記憶喪失であり、すでに家族は全員殺されている。
人質も成立しない。
聖杯を得るには、他の勢力を皆殺しにする必要がある以上、
どうしても倒せない勢力の存在は詰みの一手と言っていい。

まあ、５組を殺して自分のサーヴァントに自害を命じ、
聖杯を降臨させるという無茶苦茶な作戦も実行できなくは無いが、
それにしても、わずかな時間とはいえ完全に無防備になることを、
衛宮切嗣は善しとしないだろう。
なにせ、アサシンもまた聖杯を狙っていると信じているのだから。
また、正規のセイバーもこのままではモードレッドには勝てない。
円卓の騎士最強と称えられた湖の騎士よりも、
昼は３倍の力を持つとされた太陽の騎士よりも、
自らにとって死因そのものであるモードレッドは天敵といっていい。
まして、相手が魔力供給という一点において、
受肉により全く憂いが無く、十全の力が出せるということも大きいだろう。
もはや、鞘の返還ぐらいしか勝利への道は存在しない。
しかし、そこまでやっても１３分の１が始末できるだけ。
どうしようもなく、戦場は詰んでいた。

エーデルフェルトの双子館、その片方に拠点を構えたアサシン陣営をキャスターと誤認し、
単独で征伐に向かったセイバーが、偶々偶然同じタイミングで襲撃しようとしていたライダー、ランサー組と合流するまでは。

こうして第二局面、唯一の戦場が開かれる。

王の軍勢を率い、騎士王とフィオナ騎士団の一番槍という望外の助太刀を得たライダー、
英雄を従える英雄、征服王イスカンダル。
自身の生前から最も信頼している８人の部下に加え、
死後に得た反逆の騎士、傾国の美女、鮮血魔嬢、薔薇の皇帝。これらを擁するアサシン。
反英雄を従える反英雄、調和なす異形兵藤一誠。

聖杯戦争における最大の激突が、もはや秒読みとなっていた。

土台固め

「平均的なサーヴァント以上の性能を持つ兵を召喚使役する宝具。
ねえ、セイバー。そんな宝具はありえるのかしら」
「そうですね。
優秀な小隊を率いていたこと自体が伝説になっていれば或いは・・・」
その理屈で言えば、円卓の騎士を率いていたアーサー王にもそうした宝具があることも考えれる。
しかし、現実は辛いものだ。彼女の宝具は、聖剣エクスカリバーとそれを隠す仮初の鞘。
それだけである。
まあ、召喚できたとしても、仲間割れを起こすことは必定であり、しなくても魔力供給が追いつかない。
特に太陽の騎士ガウェインや湖の騎士ランスロットはアーサー王以上に強力な騎士。
とてもではないが、どんなマスターでも支えきれないだろう。
生前従えていた部下を召喚できることには、正直羨望を隠せない。
しかし、この手には剣がある。暗殺者には決して遅れはとらない。
セイバーが闘志を燃やしていた折、切嗣は珍しくセイバーの前で苦悶の表情を浮かべていた。

「どうしたの?」

アイリスフィールが気遣うほどに、機械としての切嗣は機能不全を侵していた。
それもそのはず、彼の優秀な戦術眼が事態の深刻さを理解していたからだ。
少なくとも、自分のやり方では彼等に勝てない。
協会からもたらされ、自分の情報網で裏を確認したキャスターの拠点襲撃。

その資料は、彼等が極めて自分に近い思想の持ち主であることを示していた。
彼等は、キャスターを最も重要な障害とみなし、戦っている。
だが、もしもこちらに牙をむけば？
自分でもセイバーでも、聖杯の入れ物であるアイリスフィールを守れない。
そのことに気づこうが気づくまいが、相手はアイリスフィールを狙うだろう。
なぜなら、彼女はアインツベルンであり、セイバーのマスターだと思われているから。
もしも、彼女の心臓が破壊されれば、世界平和は不可能になる。
妻は、何の意味もない犠牲になってしまう。
彼がセイバーを信頼していない理由としては、
何よりも自分のやり方でうまくいっていたという実績がある。
セイバーは正面から戦うことが正しいと信じているし、切嗣は卑劣な手を使うことが正しいと思っている。
そして、彼等アサシンはおそらく自分以上に卑劣な手をこなせるだろう。
そんな彼等が、他の組に落とされるとは思えない。
機械として『勝たなければならない』が『勝てない』。
安全装置の付いていない機械が、歯車が詰まって動かなくなっているというのに、
それでも尚無理やり動こうとしている。
今、まさに切嗣はそんな感じだった。
そして、結局まずはキャスターを排除し、令呪を一画得ようと判断した。
それが、判断の先送りに過ぎないと知りながら。

英霊というのは人型決戦兵器だと思っていた。しかし日常生活においてもチートだった。
まさか、買った馬券がことごとく大当たりするとは！黄金率、半端じゃないな！

「さて、競馬場涙目なぐらい資金を調達したわけだが」

今、私の目の前には、記憶を無くす前も見たことが無いであろう大金がある。
ネロ、タマモ、エリザベートはわくわくし、モードレッドもそわそわしてる。
かく言う自分も、これだけの札束には心奪われそうだ。
意外なことに、戦闘員達はテンション低めである。

「お前達には、進むべき二つの道がある。
今、全員で選べ」

突き放すような口調で、冷たく言い放つアサシン。
まるで暗殺者のようだ・・・！
そして、お前達というのは、反英雄４人と私だろうか。
少なくとも戦闘員たちは違うようである。

「このまま、マスターとお前等６人で次の拠点に移動し、
買い物は戦闘員たちに任せる、というパターン。
もちろん、買い物の中には服も含まれている。
安心しろ、これだけ金が有れば、サイズごとに大量に買える」
「こやつ等が選んだ服を着ろというのか！
冗談が過ぎるぞ、奏者よ！」
「ご主人様と一緒にウィンドウショッピングもできないんですか、ヤ

ダー！」
「服ぐらい、自分で買わせなさいよね、ケチ！」
「服はともかく・・・（父さんと一緒に）買い物はしたいぞ」

反英雄の少女達は不満そうに、口々に文句を言ってくる。
自分も買い物はしたいので、反対に一票だ。
今まで、この学生服をずっと着たままだったのである。

「もう一つは、戦闘員達が拠点に向かい、
残りの6人で買い物をするパターンだ。
ただし、ケンカはなしだ。一般の客に迷惑をかけるわけにはいかないからな」
「ぬ」
「え」
「む」
「・・・分かってるよ」

モードレッド以外は言葉を濁し、互いを見ている。
やはり思うところがあるのだろう。
しかし、これは当然の発言だ。まさか店内で反英雄たちが暴れるなんて事になったら、何の為に彼女たちを召喚したのかわからない。
今、彼女たちは服が無く、魔力で武装を編んでいる。認識障害で普通の服を着ているように見せているのだが、暴れた結果をごまかすには無理があるだろう。
今後のことも考えて、彼女たちに我慢と褒美を与えようとしているのか・・・！
このアサシン、できる！

「一人でもケンカを始めようとしたら、その時点で直帰だ。被害の有無など関係ない。令呪を使ってでも、従わせる。
だが、ケンカしない限り、おれもお前達の買い物に従おう。女の買

い物は長いことも知っているが、付き合うさ。
そうだな、夕暮れ時になったら夕食をみんなで食べるのもありだ。
まあ、本格的な夜になったら帰ることになるが・・・」

アサシンは彼女たちの反応をうかがっている。
色々悩んでいたようだが、結局答えは決まっていた。

そこから先は、アサシンの忍耐が試される番だった。
さっきまでは戦闘員たちを含めて男女比は一緒だった。
だが、戦闘員達には新しい拠点を掃除するという使命があるため、帰還してしまった。
よって、私を含めて女5人と男一人で向き合う羽目になったのである。

ケンカには至らないまでも、彼女達の競争意識は高く、アサシンは店内を引き回されることになった。
そんな彼を見る目は羨望ではなく・・・、どっちかというと娘に引き回されるお父さんを見る目だった。
なんというか、ぱっと見はアサシンは同い年なのに、全員への対応が父親のそれだ。
にらみ合いを始めたら注意し、大きな声を出したら怒り、服を選んでいるというより娘たちを監督しているようだった。
その手際は妙に慣れている。コイツ、本当に30前のオッサンなんだなと感心した。
学生時代に暗殺者としての全盛を極めたオッサンか・・・。
人に歴史ありだな、と思ってしまった。
そうこうしているうちに、こんなに買ってどうするんだという量の服が購入されていく。
聖杯戦争中に、全部着るつもりなんだろうか、こいつら。
とてもではないが運びきれる量ではなく、戦闘員を2人ほど三往復させることになった。
そうこうしているうちに、もう夕方。アサシンは時計を確認する

と、全員に撤収を促した。

「結局、食事の時間はなくなったな。まあ予定通りと言えば予定通りだが」

「くぅ～～～ぬかった！

もう一軒、もう一軒と見ているうちに・・・」

「私、実は３０分前からヤバイとは思ってたんですよ、実は」

「むぅ～～～、抗議するわ！スケジュールが押してるからってなによ！

アンコールよ、アンコール！」

「家で（父さんと）食事か、そう思えば・・・？」

モードレッド以外は不満そうだ。

こいつ等、何をしに召喚されたんだ。デートか、買い物か？

聖杯戦争よりも買い物を優先するのは、どうかと思うぞ。

「おれ達は、日常を満喫する為にここにいるわけじゃない。日常を守る為にここにいる。

お前等には月の聖杯戦争で世話になったし、その礼も兼ねて付き合ったが、何事にも節度は必要だ。

なに、キャスターを仕留めたらまたこよう」

やはり、アサシンが絞めるべきところを絞め、反英雄達のショッピングは終了となった。

さて、森の中に潜んでいた洋館。

そこを拠点とする作業が始まった。

先に向かっていた戦闘員達が、掃除を済ませており、発電機や給水タンクを用意していた。

更に、入り口へのルートを除き森中には強靭な糸が張り巡らされている。

まあ、嫌がらせぐらいにしか使えないらしいが。
簡単に食事を済ませると、タマモとネロは拠点作りを始めた。
ネロが皇帝特権で陣地作成Ａを得て、タマモの宝具を使い神殿レベルのものを造ろうとしているらしい。
アサシン曰く、皇帝特権はあると知っていれば再現は可能らしい。
ＥＸレベルのスキルは微妙らしいが。（ゲーム中でも、黄金率や剣術を得ています）
エリザベートは普通に入浴し、英気を養っている。戦闘員も同様だ。
サボっているように見えて、実のところサボっているが、やることもないのでサボらせている。

アサシン曰く、人数がいるので交代も兼ねて休ませたいらしい。
モードレッドは、入り口に待機し、門番として構えていた。
アサシンは、私を連れて巡回し各員の監視をしている。

こうして、楽しくも忙しい夜は更けていき・・・。

この日は襲撃もなく、一日は終わりを迎えた。私は、久しぶりに（？）ベットで寝ることを許されたのだった。

「さてと、これでよいだろう」

と、ネロが言ったので神殿造りは完了といったところだろう。
流石天照様から賜った宝具、パワーが段違いだ。
国中からゆっくりとかき集められている魔力が、洋館に蓄積されていく。

これが、戦闘時にタンクとしか使用できないのが哀しいところだ。
欲を言えば、相手キャスターの兵力に対抗する為に、こっちもゴーレムや竜牙兵を増産したいが・・・。
何でもありの皇帝特権だが、材料がないのはいかんともしがたい。
いくらなんでも欲をかきすぎだろう。
おれがアサシンとして召喚されていなければ、天使を生むこともできるのだが、言い出したらきりがない。

「よくやってくれた、ネロ、タマモ。
褒めてやろう、来なさい」
「ふっふっふ！当然だ！」
「ぐへへへへ。お言葉に甘えて・・・」

実際この二人はよくやってくれた。褒めることにためらいはない。
労りが伝わるように、ゆっくりと二人の頭を撫でてやる。
暫くそうしていると、二人はこちらに体重を預けてきた。寝ている。
これも受肉の弊害だろう。彼女等は肉体を維持するために食事や睡眠をとる必要がある。
まあ、ムーンセルでも寝ていたが。
二人を抱えて、洋館の中の各々の部屋に寝かせる。
彼女たちはよく働いてくれたので、明日また労ってやろう。
おれは、まだするべきことがあるので自室には戻らずそのまま外に歩いていく。

満点の星空の元、直立不動で番をしている甲冑の騎士がいた。

「モードレッド、よくやってくれた。交代しよう」

こういうとき、人数が多いのはいいことだ。
三日三晩不眠不休ではどんな英雄でも弱るだろう。

人並みに仕える兵隊が9人いれば、三交代制でぶん回せる。
もちろん、一騎当千の兵にはそれはそれで使い勝手の良い点もあるが、
やはり単独だとどうにもならない。
なにせ、二手に分かれるという基本的なことさえできはしないのだから。

「・・・。なあ、聞いてくれるか？」
「ああ、そうだな。話をしようか」

コンクリートによる舗装のされていない地面に、二人で腰を下ろす。
モードレッドは、武装を解除してこっちに身を預けてきた。
当然兜を脱いでいるので、やや恥らっているような顔も丸見えだ。

「・・・」
「・・・」

話をしようといったのに、一向に切り出してこないモードレッド。
どうやら、話もしたいがおれに甘えてもいたいようだ。
彼女の特殊な出生を思えば、親の愛に餓えていることは察するに余りある。
小柄の少女を抱き寄せて、頭を、頬を撫でてやる。
モードレッドは、嫌がるようなそぶりも見せず、恥らいつつもそれを受け入れた。
いや、それどころか、更にしな垂れかかって顔をおれの胸にうずめ、腰に手を回し抱きついてきた。
これが性的なものだったらおれも妻帯者として対応を考えるところだが、どうも雰囲気が違う。
やはり、これは父性愛を求める子供のハグなのだろう。
少し体格差が足りないが、モードレッドを抱きかかえて膝の上に乗

せる。
調度おれの顔の横にモードレッドの顔がある。まるで体面座位だな、と思っていると両脚でしがみついてきた。
実際、だいしゅきホールドであった。
これ、他の面々に見られたら弁解の余地ないな、と思った俺はしがみつかれたまま立ち上がった。
寝ない子供をあやすように、頭を撫でながら洋館の入り口の辺りをうろうろと歩き回る。
不意に、モードレッドが泣いていることに気づいた。
号泣という感じではない。むせび泣く、といった感じだ。

「話すことがあったんじゃないのか?」

モードレッドは、無言で首を横に振った。ああ、こいつは本当に娘に似ている。
少し大きいが、それでもコイツはまだ子供なんだな、と実感した。
そうして、歩き続けていると、寝息が聞こえてきた。絡み付いている足にも力がない。
どうやら、安心して眠ってしまったようだ。

「エリザベート、そこにいるんだろう?」

背後の竜のオーラを感じ、声をかける。
洋館から、気まずそうに出てきたのは、やはりエリザベートだった。

「気づいてたのね。私がこんなパパラッチまがいのことをしていることに」
「まあな。コイツを部屋に寝かせてくる。
それまででいいから、門番を頼む」
「アイドルにさせることじゃないわね」

モードレッドにかまってばかりなのが気に入らないのだろう。
エリザベートは口を尖らせている。拗ねてしまったようだ。
しかし、情事にいそしんでいたのならいざ知らず、
この状況で怒るのはプライドが許さないのだろう。
非は自分にあるのだから。
まあ、暴れださないだけこいつも成長したということだ。

「寝かせたら、今度はおれとお前で門番だ。
深夜ラジオの生収録だと思って、色々話そうじゃないか」
「・・・そうね、色々聞きたいわ」

入り口の前に立つエリザベートと入れ替わりで、モードレットを抱えつつ洋館に入る。
入り口を通り、階段を上り、モードレッドの部屋に入った。
今日戦闘員達が買ってきたばかりのベットに横にさせ、布団をかぶらせる。
その顔は、涙目ながら安心しきっていた。とても、反逆の騎士には見えない。
見た目以上に幼い少女のそれだった。その額にキスをして、おれは音を立てずに部屋を出る。

「お休み、モードレッド」

さて、今度はエリザベートの相手である。
そうだな、ディオドラの企画したチャリティーイベントで歌手デビューした話でも聞かせてやるとしよう。
大観衆を前に、アニソンを熱唱した話でも聞かせてやろう。全く、アニソンは気合が入りすぎるから困る。
後日、イベントの映像や歌のＣＤがそこそこに売れ、戦災復興に使われた話を聞いたら、どう思うかな。
そんなことを考えながら、門番に戻る。

「お休み、父さん・・・」

モードレッドは、結局いいたいことを言えなかった。
しかし、いい出せないほどに彼女は満ち足りていた。
ああ、この日々が続けばいいのに、と。

王の試練

拠点を移した翌朝、見張りの戦闘員2名を除いて、全員が洋館の広間に集結していた。

「マスター、ご理解いただけたと思うが、こいつ等に時間を割いていたら、時間がいくらあっても足りないということだ」

酷く真面目に、割と最低のことをいうアサシン。

まあ、分かる話だ。アサシンの宝具である8人は、アサシンの命令に異論を唱えることすらない。

使い勝手の良さから言えば、あの8人の圧勝だろう。言動の悪さなど何の問題にもならないレベルだ。

連中は、戦いさえできればそれでハッピーだからなぁ。

「まあ、それはそれとして。とりあえず、今日も様子見だな。これだけ派手に魔力を集めていれば、他の勢力も気づくだろうしな。

理想的な話をすれば、今日のところは誰も来ないで、明日の夜にキャスターを挑発。

ここに誘導して総力を挙げてさっさと片付ける。

この間、誰にも横槍を入れられないのが理想だな」

まあ、まず無理だろうとアサシンは判断している。

アサシン陣営とキャスター陣営、双方の戦力を確認すれば、キャスターを援護するものが現れてもおかしくはない。

そして、それは向こうにしてみれば打って当然の1手であり、こちらにとっては打たれたら間抜け、というだけだ。

アサシンは、アサシンだけあって不意打ちされることが前提で動いている。

だから、私を背中にくくりつけているのだし。

曰く、卑怯というのは負け犬の遠吠えだ。とのこと。
卑怯な手を打たれないように警戒しておけば、それは向こうに対する牽制になるのだと。

「おそらく、今日ここは狙われる。
何騎現れるのかは分からないが、５騎全員ということはあるまい。
こちらの総力を挙げて迎撃し、明日のキャスター戦に響かないように努めよう。
以上だ。
あと、ネロとタマモ。昨日はよくがんばってくれた。
ねぎらってやるから、こっち来い」
「ふふふ！そうこなくてわな！」
「キター！皇帝と一緒っていうのはいただけませんが、ご褒美ご褒美！」

一人、面白くなさそうなのはエリザベートだ。
モードレッドはどこか、ぼんやりとしている。

「戦闘員、マットもってこい。二人分な。
マッサージと針治療だ」

やたら本格的な労いが始まりました。
性的な要素を一切含まない整体で、二人を順々に癒していきます。
あれ、少しやって欲しいような・・・。

「念能力で、オーラをツボに注いでいる。
まあ、本職ほどではないが効くだろう。
こういうのは、戦闘員のほうが得意なんだが・・・」
「いやいや、これは良い！実に良い！」
「実は、蘇生で結構辛かったんですよ！
でも、これは疲れが吹っ飛びます～～～！

アイキャンフラ～イ！」

最初は、性的なものを期待していた二人も、体の調子がよくなっていくことに快感を覚えているらしく、
段々顔を緩ませていった。

「とりあえず、昼の間は見張りは2人でいい。戦闘員も交代で休んでおけ」

マッサージしながら部下に指示を飛ばす。
しかし、アサシンは寝ていないらしい。いつ休むのだろうか。
マスターとして心配である。

「おれも、やるべきことが済み次第寝る。
が、まずは信賞必罰だ。こういうのは早目に済ませておかないと、不満がたまる。
褒めるべき時に褒め、叱るべきときに叱るのは上官の務めだ」

相変わらず、非常に真面目だ。
これで暗殺者だというのが、理解に苦しむところである。
おや？いつの間にかエリザベートがいない。一体どこにいったのだろうか。

聖杯戦争において、参加する魔術師は当然サーヴァントを従えるわけだが、
契約する際にしておかなければならないことがある。

英霊の願いだ。
極端な話、世界の破滅を願うのなら、これは絶対に契約などしてはならない。
その理屈で言うと、今回聖杯戦争において最も優勝するべきではないのがイスカンダルであろう。
聖杯への望みは受肉であり、それ自体はまあ問題ない。
だが、受肉した後に世界征服に乗り出すというのだ。これはいただけない。
キャスターの望みは、聖処女の復活である。
その間にどれだけ無辜の民が犠牲になるかはともかく、聖杯が正しく願いをかなえたのであれば、
ジャンヌは、ジル・ド・レェの心を解きほぐすことは想像に難くない。
アーサー王の願いにしても、現代の社会にはさして影響はないといえる。
ギルガメッシュに至っては、真贋を見極めるという目的はあっても願いなどない。
アサシンやランサーも同様で、主従共に願い自体ない。
バーサーカーも脱落している以上、ライダーが一番危険である。
それは、神ならぬケイネスをして頭が痛いほどに理解が容易いことだった。
なにせ、世界征服である。神秘の隠匿もくそもあったものではない。
もしも、正しくケイネスがイスカンダルを召喚し、その願いを確認したのなら、
その場で契約を破棄していただろう。
それほど、思慮の必要がないほど悪質な男なのである。
だが、それでも同じ部屋でものを食べたり作戦会議をしていると、なんだかそう悪い男に見えなくなってくる。
ケイネスをして、自分が魅了されているのではないかと疑うほどに。

「・・おい、ライダー。貴様、ウェイバーからまともに魔力供給を受けていないな？」

だから、つい、戦術的に必要なことだと自分にいいわけをしながらライダーの問題点を指摘した。

「え？」

「え？ではない！

ウェイバー君、君は全く消耗していないだろう？

これほどの霊格の存在を始終実体化させておけば、君には荷が重いはずだ。

であれば、ライダーが自分で供給を止めているとしか思えない。

違うか？」

「はははははは！」

図星を突かれて、笑ってごまかそうとするライダー。

まあ、彼なりに自分のマスターを気遣っての行為だった。

確かに、ウェイバーは魔術師として未熟であり、吸うに任せていては干上がってしまうだろう。

かといって、霊体化も性にあわなかった。

なので、こうして黙って供給を受けずにいたのだが・・・。

「笑い事じゃないだろうが！

それじゃあまともな戦闘なんて・・・！」

「それは君が言うことかね！

指摘されるまで気づかないとは全く何事だ！

ちょっと待っていろ！」

ランサーと共に、礼装の置いてある部屋に向かうケイネス。

その表情は、苛立ちと不快感でいっぱいだった。

反面、不愉快ではないというのが、自身を御するべき魔術師、ケイネスにとって許しがたかった。

「主よ、よろしいのですか?敵に情けをかけるなど」

ランサーは、聞いておいてなんだが、嬉しそうである。

それは、万全の敵を倒したいという騎士特有のものであろう。

「ふん!元より、あのような三流に使われるサーヴァントなど敵ではない。

そうだろう?ランサー」

「無論です。今は手を組んでいますが、必ずや大将首を御前に」

「であれば、何の問題もあるまい」

「御意」

霊酒。神代のそれではないにしても、魔力を回復させる魔術道具である。

本来、魔術師二人でランサーを支えている以上、余り必要の無い代物だ。

とりあえず、持ってこれるものは持てるだけ持ってきておけ、という理由で持ち込んだものだが、

このような形で役に立つとはな。

運命に対する皮肉を感じながら、ケイネスはそれをライダーに差し出した。

「飲め、まあかなり回復するだろうよ」

「おお、かたじけない」

酒というのが嬉しかったのだろう。ライダーは疑うこともなく飲み干した。

毒でも混ぜておくべきだったと後悔しつつ、ケイネスは、じろりと

ウェイバーを見た。
自分に対して、そしてライダーに対して申し訳なさそうな彼は、恥じ入っているようだった。
そうだ、それでよい。
自分は優秀であり、彼は劣っている。その事実をまた一つ確認したケイネスは、ほんの少し機嫌を直した。
さて、いざ出陣である。
ライダーの御者台にウェイバーとケイネスが乗り込み、ランサーは霊体化してついていく。
見送りのソラウに自分以外への熱を感じつつも、ケイネスはようやく聖杯戦争で初の出陣を果たした。
そう、ようやくなのである。戦術的に、ランサーをして否定する気が起きないほど正しい判断ではあったが、
まあ、かなり遅い。キャスターならばともかく、アサシンの存在があるとはいえ遅きに逸したというべきだろう。
とはいえ、自分のサーヴァントではないとはいえ征服王の宝具に乗り込み夜の闇を駆けるのは、
なるほど気持ちのいいものだった。
魔術師の、聖杯戦争における出陣にふさわしいだろう。
雷鳴と共に、征服王は空を駆けていく。
途中、わざわざ罠のあるであろう陸路を行くのではなく、空路から直接キャスターの拠点と思われる洋館に突撃する、
という算段では会った。しかし、ランサーとライダーは同時に同じものを見つけた。

「ありゃあ、サーヴァントだな」
「なんだって?」
「主よ、下に我等以外のサーヴァントが」
「どうやら、そのようだな」

陸路を単身で駆けるのは現代風のスーツに身を包んだ男装の少女。

セイバーである。
　これは、およそ神の目線を持たない彼等にも理解できることだった。
　というのも、遠坂邸で待ち構えていた黄金のサーヴァントは、その攻撃方法からおそらくアーチャーであろうと、
　ライダーすら断言していた。加えて、バーサーカーらしき影はそのサーヴァントと戦って敗退済み。
　アサシンは学生服を着ており、加えてキャスターはこれから向かう拠点にいる。
　ライダーとランサーは自陣だ。
　であれば、最後のサーヴァント、セイバーであろう。
　論理的な帰結であった。
　おそらく、彼女のマスターは自分たち同様にキャスターの拠点を探り当て、
　しかし、アサシンを警戒してセイバー単身で向かわせたのだろう。
　そう、自分のことを棚にあげてケイネスは判断した。

「ライダーよ、あのセイバーがキャスターの元にたどり着く前に、こちらで始末をつけようではないか」

　ケイネスは当然の提案をした。ウェイバーも頷いている。
　なにせ、こっちにはランサーとライダーがいるのである。
　これ以上の戦力は明らかに不要だ。更に言えば、セイバーのマスターにも令呪がわたってしまう。それは面白くない。
　こっちは機動力で勝っているのだ。さっさと片付けて、帰還しよう。

「いやいや、調度いいではないか。あれにも声をかけよう」

　そんな、当然の判断ができないイスカンダルではない。だが、彼は、外道であるキャスターは例外にしても、

残る４騎は全員傘下に起きたいと思っているのである。
まあ確かに、世界征服をたくらんでいるのだ。そりゃあ戦力はいくらあっても足りないだろう。
ましてや、もはや英雄英傑など輩出されなくて久しい現代である。違う時代の英雄が集結した聖杯戦争は、最初で最大の雇用の場だ。とりあえず、声をかけようとした。そして、哀しいことにライダーがこの戦車の御者なのである。
誰がなんと言おうと、ライダーの思うとおりにしか動かないのだ。大きく傾いた戦車は、そのまま一気に落下していく。
師弟の悲鳴を無視し、戦車はそのままセイバーの少し後ろに着地した。その雷光で、周囲の木々を焦がしつつ、停車する。
直感によって、その接近に気づいていたセイバーは、既に武装を済ませていた。
師弟は、その高いステータスに警戒しながらも、しかしそれよりもライダーに警戒した。

「ふふん、そちら、剣の英霊セイバーとお見受けするが？」

実体化したランサーが、警戒しつつセイバーにたずねる。
本来は、自らの高らかに名乗りを上げるところだが、そこは自重した。

「いかにも。そちらは騎兵と槍兵、ライダーとランサーだな？」

キャスターの拠点を狙って動いていたにもかかわらず、ランサーとライダーに出くわした。
それはありえた事態とはいえセイバーに退く気はない。
騎士王として外道を討つことに迷いはないが、元より６騎は全員この手で倒すつもりだった。
まして、ランサーとライダー。相手にとって不足はない。

「その通りだ、名乗りを上げられぬとは・・・」
「余は、征服王イスカンダル！」

真面目に聖杯戦争をしようとしている二人を置いてけぼりにして、ライダーは高らかに真名を名乗った。
まあ、アキレウスやジークフリートのように有名な弱点が無いにしても、
真名をべらべら喋るのは賢いもののすることではない。
馬鹿のすることである。
しかし、この征服王。元より正気などどこかに置き忘れた男である。
まあ、確かに勧誘するのであれば自分が名乗らなければ始まらないだろう。
セイバーが殺す気満々という点を除けば、正しい勧誘だった。

「いかにも、ライダーのクラスを得て限界した！」

全員を置いてけぼりにして、ライダーは勧誘を続ける。
セイバーも、ランサーも、ケイネスも、ウェイバーも、呆れてものが言えない。
ケイネスに、真名を隠す気がないのはまあ分かる。そもそも知っていたのだし。
だが、初対面の敵に真名を明かすなど、正気ではない。

「その方、聖杯に願いを託さんと限界したのであろうが・・・。
それは、世界の覇権を握らんとする余の大望と比べてなお大きいものか？」

ここで、ようやく、全員がライダーの意図に気づいた。
ケイネスはこの男と行動しようとしたことを後悔し、ウェイバーは涙目になり、ランサーは呆れ、

セイバーは怒りに身を震わせた。
セイバーの願いは、小さいなどと言われるものではないのだ。
それは、貴くも正しい、誰に恥じるともない理想だ。
それを、知らないとはいえ侮辱されれば、王として許すことはできない。
自らも王であると名乗りたい自分を抑え、セイバーは見えない剣をライダーに向けた。

「余の部下となり、戦場を駆け抜けようではないか！」
「断る！私の願いは、決して小さくなどない！」
「そうか？待遇は応相談だが？」

当などないくせに、給金の相談を持ちかける辺り、この男はやはり考えなしだ。

「くどい！」
「そうか、残念だ。ああ、残念だ」

その気風から、彼女の力量を察したのだろう。ライダーは心底がっかりしていた。
だが、これには全員を落ち着かせるという効果はあった。
ライダーが馬鹿であると、全員の心が一つになったのである。

「まあ、今はそれでよい。
だが、外道を行っているキャスターの拠点がこの先にあるのだ。
わざわざ我等が戦って、キャスターを喜ばせることもあるまい？」
「・・・」

今更合理的なことを言われたセイバーはそれを認め、武装を解除し無言で歩き出した。
確かに、この目の前の男は切り捨てるべき男だが、それはそれ。

最も討つべきは無辜の民を己が欲望の為に食い散らかす外道だ。

「セイバーよ、一応念のため言っておくが、このライダーは私のサーヴァントではないからな」

「そんな、先生！」

「ウェイバー君、サーヴァントの不始末は君の不始末だ。違うかね？」

呉越同舟ではあるが、的は同じである。

かくて、『アサシン』の陣営に向けて彼等は向かっている。

その少し前・・・。

ぐはぁ！

「お、おい、もうやめたらどうだ？」

「見ているこっちが辛いぞ！」

「あのー、そこまでしなくても良くないですか？」

ぐ、ぐ、ぐ。

大丈夫だ、問題ない。

いや酷い味だ。どうして、人間が食べるものを普通の調理器具で料理して、

ここまでテロい味になるのだろうか。

ほんの数分前の自分を呪う。

きっかけは、エリザベートがおやつを焼いたときだった。

アサシンにとエリザベートが焼いたのだが、アサシンは寝てしまっていた。
落ち込んでいるエリザベートを慰めつつ、みんなでそれを食べた。
それは、店に置くような出来ではない無いにしても、ちゃんとした手順で作られた、ちゃんとした料理だったのだ。
みんなでそれを食べて、出来立てということも会って彼女を褒めた。
ネロも、タマモも、モードレッドも。
それがいけなかった。

じゃあ、私がもっと料理を作ってあげる！

これが、デスとかザラキーマに分類される即死呪文だったのだ。
彼女が造ってきた兵器は、料理と呼べる出来ではなかった。
全員が一口目で吐き出すほどに不味かったのだ。というか、料理のカテゴリーに含んではいけなかった！
しかし、ああしかし。
みんなに怒鳴りつけられ、涙目のエリザベート。
そんな彼女をほうってなど置けない！
不味いにしても、なんにしても、作ってくれたのだから最後まで食べなければ！

「子リス・・・」

他の反英雄やランサーに見守られながら、ついに最後の一口を食べ終えた。
ああ、辛い試練だった。砂糖水１４ｋｇよりも辛かった。
あれはまだ、食料というか飲料に含まれるもんな・・・。

「どうしたんだ、お前等」

刻限は既に夕方。
起きてきたアサシンは事態を把握すると滂沱の涙を流した。

「あなたが、おれの王だったのですね」

力なく、テーブルに倒れる私の手をとって、跪くアサシン。
その所作には、今まで以上に敬意が込められている。
彼は、保護の対象としてではなく尊敬の対象として私を見ている。
それは、明らかな変化だった。

「あなたこそ、おれの王だ。どうか、おれを導いて欲しい！」

その、一種異様な光景を誰もとがめることはなかった。
否、できるわけがなかったのだろう。
彼女の料理？の殺人的な不味さに耐え抜いた私を、誰もが王と認めていた。
気づけば、各々の最大級の礼で、私を称えていた。

あの、じゃあ食あたりに効く針をうってください。

最大の激突

「ご主人様、敵です！」

私がアサシンから腹痛の手当てを受けている折、キャスターが叫んだ。

どうやら、この洋館に敵が現れたらしい。

その言葉で広間にいた戦闘員６名、モードレッド、エリザベート、ネロが反応し、武装する。

「キャスター！」

「はい！」

「ちゃんと人数と内容を報告しろ。

把握できないなら把握できないでかまわない。

二度手間になるからな」

「も、申し訳ありません。

では、人数は５人。うち、サーヴァントが三騎です。

現在、道なりまっすぐこちらに向かっています。

おそらく、内１騎はライダーかと。宝具らしき牛二頭引きの戦車に搭乗し、

マスター二人を乗せています」

「・・・ライダーか。厄介だな」

アサシンが警戒していたサーヴァント。

それは、狙撃を得意とするアーチャーと、突撃を得意とするライダーだ。

どちらも、私を狙われた場合防ぐのが難しく、しかも反撃もしにくい。

その内の片方が、ここに向かっているのであれば、脅威といわざるを得ない。

「それから、その・・・。
もう一人はおそらく・・・、アーサー王です」

全員の視線が、モードレッドに集中する。
その視線に答える事もなく、モードレッドの表情が露骨に変わった。
臨戦態勢で今にも飛び出しそうだったが、その表情は困惑と狼狽に染まった。
嘗て、自分で殺した騎士王。そして、自分の父親。
それが、聖杯戦争の最中で偶然出会う。いや、聖杯戦争という場で、双方の召喚は必然だったのかも知れない。
なにせ、どちらも円卓の騎士であり、どちらも強力なサーヴァント足りうるのだから。

「魂、というか力の波長が全く一緒です。
これは、色呆け皇帝のような他人の空似ではありえません。
ここまで一緒だと、親子ですらありえません」
「そうだろうな。オレは父上のクローンなんだから」

自嘲すると、モードレッドは何かを振り切るようにアサシンを見た。
その言葉は、明らかに何かを求めていた。

「マスター・・・。
オレは・・・」
「・・・モードレッド」

兵として将の言葉を待っている。
アサシンは、なんと言葉をかけるんだろうか。
おれの敵と戦えと命じるのだろうか。父親と戦うなと命じるのだろうか。

そのどちらも、自分の見てきたアサシンらしい優しさや厳しさのある言葉だった。
だから、分からない。だが、どちらだったとしても、私は二人を恨まない。
アサシンは、不出来で魔力を供給する以外何の役にも立たない私を、マスターと認めここまで生かしてくれた。
そのアサシンが決めたこと。私は、彼を信じる。

「オレは・・・」
「モードレッド、アーサー王は強敵だ。戦ってくれるか」

あくまでも端的に、しかし信頼を込めてアサシンは尋ねる。
その言葉は、冷たいようで温かく、優しいようで厳しかった。
モードレッドには、モードレッドの都合があり、考えがあり、感情があるのだろう。
だが、アサシンはその全てを理解できないし、共有できない。その時間もない。
だから、アサシンは尋ねる。戦ってくれるのか。
その言葉に、モードレッドは自信を持って頷いた。

「ああ、オレは父上を越える唯一の騎士だからな」

モードレッドは力強く、拳を握り締めて答える。
それは、アサシンの信頼にこたえる一人の騎士としてのそれだった。

「じゃあ役割を簡単に決めておくか。モードレッド、お前はアーサー王の相手を」
「当然だ。オレ以外では抑えることさえ難しいだろうからな」

モードレッドの元になったというアーサー王。

この中では一番強いモードレッドでなければ、抑えることも難しい。
それはとても恐ろしい話だ。彼女が戦ってくれなければ、どれほど不利だっただろう。

「エリザベート、ランサーの相手を任せていいか。
現状、相手は未知数だがとりあえず同クラスを当てたい。
無理をして殺さなくてもいい。抑えることに専念してくれ。
戦闘員も4人あずける。フォローに徹させるから好きに使え」
「分かったわ。最高のステージを見せてあげる」

俊敏性が高いランサーを、やはり俊敏性の高いランサーで抑える。
戦場を引っ掻き回されることを恐れての判断だろう。
頭数で勝っているとはいえ、一時的に2対1の状況を作り出さないためだろう。

「ネロ、ライダーに当たってくれ。こっちも相当の機動力だろうし、馬力もあるだろう。
無理せずに、時間稼ぎに専念してくれ。
お前にも戦闘員を4人預ける。壁にしてもかまわん」
「ふむ、倒してもかまわんのだろう?」
「ああ、もちろんだ」

同じく、俊敏性の高い相手には俊敏性の高いネロを。
復活系のスキルを持つ彼女なら、不意を打たれても復活できる。
時間を稼ぐのは容易いだろう。

「タマモ、お前はマスターと一緒にいろ。守りにはお前が一番優れているからな。マスターを頼む」
「任されました!
いきなり一番重要な役職、ありがとうございます!」

「ああ、任せた」

これには、少し不安になる配置だ。
キャスターが不安なのではない。アサシンと一緒でないことが不安だ。
今までは、ずっと一緒だっただけに、彼の背中にいないことが不安になる。
だが、それでも戦おう。いつまでも、彼の重荷になってはいけない。

「おれは、アサシンらしく暗殺に徹する。マスター二人がいるのなら好都合だ。
二人とも首を刈り取って見せよう」

え？この上で敵マスターを殺しにかかるの？
受肉済み、キャスターの神殿からの供給で魔力量も安定。
頭数は3対13なのにまだガチなの？

「戦争に参加した以上、戦力の有無など些細なこと。参加した奴の自己責任だ。
そして、相手よりも多くの戦力を用意するのが戦略、相手の弱いところを突くのが戦術。
元々連中は三騎で一騎を袋叩きしに来たんだ。文句はあるまいよ」

相変わらず、合理的な思考の持ち主だ。
思うに、彼の怖いところはそこだろう。
非合理きわまることに、戦争中にみんなで買い物に行ったり、部下の機嫌を伺うことに時間を割きもする。
しかし、それは結果的に全員の士気をあげ、万全の状態を保たせる。
そして、その戦力は各々のあり方に矛盾しないように配置する。
嫌なことも、できないこともさせない。できること、したがることをさせる。

これがアサシンの戦い方。
非合理的な戦力を合理の中に組み込む。
そして、間違っている考え方の持ち主を、間違っているまま良い方向に使いこなす。
彼が敵でなかったと、安心した。

「そろそろだが・・・」
「うむ・・・」
「おかしいですね」

三騎のサーヴァントは、強大な魔力の収束地点が見えているにもかかわらず、
一向になんの気配もないことに困惑していた。
キャスターの戦い方から見て、海魔の召喚による物量作戦がメインだった。
というか、それ以外を使っているところを見たことがない。
これは、教会からの情報と、ライダー組からの情報だ。
だが、ここまで接近しているというのにその兆候すら見られない。
罠とも、誘いとも取れる。だが、元々おかしかったのだ。
キャスターは崩落した工房に、魔術師ならば備えていて当然の仕掛けをほぼしていなかった。
つまり、工房の作成能力はほぼなかった。
もちろん、アサシンに襲撃されて戦術を変えたとも取れるが、それにしても方向が変わりすぎた。
まるで、全く違う『キャスター』が出現したような・・・。
そして、自分たちと違い最序盤からキャスターと戦っていたアサシンが、
影も形も見せないのが不安になる。
キャスターがこうも目立つ拠点を構えていれば、我先にと襲撃してもおかしくないのだが。

「これは、見当違いのことになっているやも知れんな」

ライダーのつぶやきに、マスター二人は首をかしげる。

聖杯戦争は、主催者もいるきっちりとしたルールのもとに行われる戦争だ。

当然、想定外のことなどほぼ起こらない。

だが、イスカンダルはもちろん英雄にとって不測の事態など起こらないほうが稀だ。

セイバーもランサーも、気を引き締める。

虎穴に入らずんば虎子を得ずという言葉もあるが、もしや自分たちが向かっているのは虎穴ですらないのかもしれない。

ここで、アサシンであればすぐさま引き返し、再度情報を集めなおすだろう。

しかし、彼等は生まれやあり方は違えども皆正統なる英雄。困難を踏破し続けるもの。

引くことなどありえない。ここで引き下がるようなら、そもそも聖杯戦争に参加しないだろう。

そして、早いのか遅いのか。一行の前に一人の敵影が現れた。

強大な魔力と全身甲冑を身にまとい、手にした剣を地に突きたてている。

現在、姿が明らかになっていないのはキャスターだけだ。しかし、どうみてもキャスターではない。

「おい坊主、ありゃあ、サーヴァントとしてはどの程度のもんだ」

「分からない。なんていうか、本当に何にも分からない！」

「おそらく、正体を隠匿する宝具を身につけているのだろう。

自分の出自をごまかす英雄。珍しくもない・・・」

ライダーの問いに、師弟が答えた。

なるほど、そういう宝具はありそうだ。まあ、便利を出ない補助効果に過ぎないが。
だが、どうにも、不自然だ。
キャスターでないならば、それに召喚された『ナニカ』なのだろうか。
アサシンは自分の小隊を率いていたし、キャスターも海魔を従えている。
ライダー自身、そういった宝具も持っている。であれば、あれもそうなのだろう。
そう結論付けたところで、セイバーが、茫然自失としながら叫んだ。

「バカな！何故貴公がここにいる！」

セイバーには直感という優れたスキルがある。
しかし、それを用いて真名を暴くことはできない。
いや、できたとしても真名を隠す宝具を身にまとっている以上、見破ることはできないはずだ。
だというのに、セイバーは『彼女』の正体を看破していた。
なぜか？それは彼女は生前の知己だからだ。
その兜に、正体を隠す力はあっても姿を隠す力はない。
だから、彼女は分かってしまった。自分の死因が、『丘』から追いかけてきたのだと！

「お久しぶりです、父上」

正体不明のサーヴァントは、やはりセイバーを知っているのか、
自分の正体を見破られたことに驚くことなく、淡々と挨拶をした。
しかし、周囲の面々は困惑を深めるばかりだ。
なにせ、セイバーは明らかに少女だ。母上というのならまだ分かるが、父上とは一体？
しかし、ライダーすらも口を挟むことはない。

なぜなら、生前からの知己であり、親子であるようだ。
さすがのライダーも、これに首を突っ込むほど野暮天ではない。
両マスターは、セイバーと謎のサーヴァントの正体に迫れるとあって、一字一句聞き逃さないように耳を傾けていた。

「正直、いいたいことは山とありますが・・・。
とりあえず確認しましょう。あなたがこの聖杯戦争に参加したのは、
『国の滅び』をなかったことにする為ですか?」
「待て、先に私の質問に・・・!」

セイバーは、慎重に言葉を選んでいた。
なにせ、彼女の名前を呼べば、それはそのまま自分の真名につながる。
しかし、キャスターであることなどありえない彼女が、こうしてここにいることは、どうしても確認しなければならない。

「分かりました。では先に答えましょう・・・。
ここにいるのは、アサシンとして召喚された男について来たからですよ」
「ついてきた?」
「はい。私はここ冬木とは全く違う聖杯戦争に参加し、その折兵藤一誠にサーヴァントとして契約を交わしました。
まあ、本来彼はサーヴァントとして召喚されるところを、システムの不備によってマスターとして登録されたのですが・・・。
そして、我等は優勝し、願いをかなえたのです」
「・・・」
「お分かりでしょう。私は『彼に召喚されたい』と聖杯に願ったのです」
「まさか、貴公が・・・!」

セイバーにとって、これほど驚愕の事態はありえないだろう。
なぜなら、彼女は王である自分に反逆を起こし、国を転覆させてでも王になろうとしたのだ。
その彼女が、従者でありたいと願ったというのか？
あまりにも、不可解すぎる。だが、もしも聖杯に願ったというのなら、その話も頷ける。
それを聞いて、二人のマスターとランサーはライダーを見た。
案の定、ものすごく嬉しそうに笑っている。
その聖杯戦争に参加する段取りを考えているに違いない。

「だが、魔力供給は？
そのアサシンに加えて、貴公ほどの英霊をこの時代の魔術師が維持できるとは思えない」
「ええ、無理でした」

あっさりと、謎のサーヴァントはセイバーの言葉を肯定した。
そして、第８のサーヴァントはライダーにとってまさしく天啓といえる言葉を言ったのだ。

「なので、『受肉』しています」

咆哮しそうになる自分を抑えるライダー。
しかし、髪の毛は総毛立ち、肉体が膨れ上がったような錯覚を覚える。
同じ御者台に乗っている二人は、つい隅に後ずさった。
ここが敵地でなければ、飛び降りていたかもしれない。
そう、ライダーにとってその言葉は聖杯戦争の全てをひっくり返すものだった。
だからこそ、最後まで聞かなければならない。
ここで、最後まで聞かなければ一生後悔する・・・！

「そんなバカな！一体どうやって？」
「宝具ですよ。まあ、ご存知の通り私のそれではありません。
私同様、アサシンについてきた英霊、キャスターがその為の宝具を所持している。
それによって、既に我等１３騎は全員この世界に一人の人間として存在している。
よって、現界の為の魔力供給は全く必要ないのです」
もう、我慢の限界だった。
「うおおおおおおおおおおおおおおおお！」
突然の、或いは必然の咆哮に驚愕するセイバー。
しかし、ランサーを含め彼女以外は全く驚いていない。
無理もないだろう。今まで黙っていたほうが奇跡だ。
複数のサーヴァントの使役、それらの受肉。
ライダーの理想とすることをもう実践しているものがいるのだから。
もはや、聖杯等というあるかどうかも定かでないものを、この益荒男たちと取り合うことはない。
アサシンを傘下に置きさえすれば、それだけで全てが解決する！
残る４騎を、いや己の生前の軍勢までもが復活させられる・・・！
「もう我慢できん！
そこな騎士よ！ぜひその方の主に目通り願いたい！
この征服王イスカンダル、是が非でもアサシンに会いたくなった！」
元より、真名も熱意も隠す気はない。
だが、もはや彼の情熱は親子間の会話を待つことすらできなかった。

野暮とののしられようと、もはや我慢などできるわけもない。
一刻も早くその先駆者に出会い、王道を説き傘下に収めたかった。

「・・・・」

さすがに、あっけにとられたのだろう。
顔も見えないというのに、第８のサーヴァントからは驚きによる思考停止が見て取れた。
おかしい、因縁の親子の会話に、筋肉ムキムキマッチョが割り込んでくるなどあってはならない。
いやちょ、ちょっと待て。シリアスどこいった。

「待て、待て！まだオレは父上と話しているのだ・・・。
父上よ、あなたの願いは・・・」
「なんと、かの大王であったか！」

今度は、第８のサーヴァントの後ろから乱入者が。
いや、おそらくアサシンについてきたサーヴァントだろう。霊格も相当なものである。
不思議と、セイバーに顔が似ていた。双子、とまでは行かないが姉妹というほどには似ている。

「その風貌からして、さぞや名のある王と思ったが・・・！
アレクサンダー大王とは。生前是非会いたいと願っていた方と会えるとは。
やはり、聖杯戦争はすばらしいな！」

非常に快活に、ライダーに似たノリで現れた。出身地が近いのかも知れない。
その服装は、明らかに戦闘向きではない。
全身甲冑の騎士と違い、ヒラヒラのフリフリ。豪華な舞踏服だっ

た。
　服装からではクラスが分からない。しかし、ステータスは筋力と耐久が低い。
　敏捷と宝具が高いので、おそらく・・・。

「ライダーのクラス？」
「たわけ！余は最上の名器、その余が、最優のクラスであるセイバーでないわけがない！」

　筋力耐久がＤ＋で？
　振りかざした異形の剣を見ても、セイバーとは思えない。
　そもそも、あの剣からは宝具と呼べるほどの神秘を感じない。
　一級の礼装ではあるだろうが、騎士の持つ剣とは比べ物にならないほど弱そうだ。

「その方も、さぞや名のある王と見るが？」

　挑発交じりに、ライダーが尋ねる。
　本来、真名を明かすなどありえないが、目の前の少女なら名乗りそうだ。
　ウェイバーもケイネスも、観客同然になって彼女の返答を待つ。

「ふ、では答えよう。
　余こそ、楽神アポロンに匹敵する芸術家にして、太陽神ソルに匹敵する戦車御者。
　全ての道の至るローマの・・・」
「なに真名明かそうとしてるんだ！
　お前は馬鹿か！」

　慌てて、舞踏服の少女をぶん殴る全身甲冑の騎士。
　しかし、もはや手遅れである。

ここまでキーワードがそろえば、少しでも歴史に詳しければ名前は出てくるだろう。
そう、正統な英雄とは言いがたいが、しかし知名度は絶大。

「ローマの暴君、ネロ・クラウディスか！
まさかかの暴君がこのような小娘であったとはな！
いや、驚いた」

自分の没後に生まれた暴君。
イスカンダルはその少女の真名を見事に言い当てた。
しかし、それを聞いてネロは怒り心頭である。

「なんだと！余がちんまいだと！
大王といえども容赦はせんぞ！」
「はっはっは！すまんすまん。
怒らせてしまったな」

もはや、緊張感が行方不明である。
受肉を済ませている13騎のサーヴァント。
その、聖杯戦争をあらゆる意味で覆している存在に出会ったというのに、
この緊張感のなさはなんだろうか。
これも、イスカンダルの王としての器のなせる業なのかも知れない。

「まあ、いいじゃない。
アイドルの真名が分からないんじゃ、観客も困っちゃうでしょ？」
「まあ、確かにそうですね。
似たような顔のセイバーが3人では、見分けつかないですし？
これじゃあまとめて3人ともついうっかり殺しちゃうかもしれませんね？」

「まあ、真名を明かすのは仕方がないが・・・。
最後まで話ぐらいさせてやれよ」

新しく現れた11騎と、そのマスターであろう少女。もはや驚く気も起きない物量だ。
ケイネスは、今更ながらライダーと同盟を結んだことを喜んでいた。
対人宝具しか持たないランサーでは、この物量には太刀打ちできる見込みすらない。

「自分が、アサシンのサーヴァントです。
彼女達12人のマスターですね」

アサシンのサーヴァントは、学生服をはだけて胸に刻まれた令呪を見せた。
サーヴァントがサーヴァントを召喚、しかもアサシンがマスターとは恐れ入る。
なるほど、全身甲冑の騎士の言葉は本当らしい。

「イスカンダルよ、あなたが私に用があるのは分かりましたが、まず、コイツの話を終わらせてからにしてください」
「む、そうであったか・・・。
分かった。待とう」

はやる気持ちを再び押さえつけ、イスカンダルはどか、と座り込んだ。
しかし、既に武者震いが始まっている。
アサシンの配下である、少女達の真名も気になるところだろう。
しかし、ここは我慢である。イスカンダルは自制心の全てを費やしていた。
ランサーは、アサシンについてきたという少女のなかでも、特に角

と尻尾の生えた少女に警戒していた。
あの少女の放つ邪気は、ほかとは比べ物にならない。
明らかに、英雄の持つそれではなく、怪物のそれだった。

「・・・父上。
あなたは国の救済をお望みか？」
「無論だ」

気を取り直して、会話が再開される。
守れなかった王と、滅ぼした騎士が、地の果て時の果てで対峙した。
その冗談のような奇跡に、セイバーは苛立ちを隠せない。

「そうか、では私はあなたの願いが永遠に叶わないことを聖杯に願おう」
「なんだと！」
「私はあなたに刃向かい、討たれた。そのことをもう恨んでいない。
恨むのは筋違いなことだ。だが、それでもあの戦いをなかったことにはさせられない」

同じ王を仰いだ騎士たちが、敵と味方に分かれて対峙する悲劇の戦場。
国を終わらせた、あの丘の戦い。
それを、良しとするというのか。この騎士は。

「私は、出生を呪われている。
たとえ、何度やり直しても、あなたは私を子として認めるわけにはいかない。
そして、私に王としての器はない。であれば、何度やり直しても私は王になれない。
である以上、私がいる限りあの戦いは必ず起きていたでしょう」
「・・・！」

「お分かりでしょう？
あなたが国を救いたければ、私が『生まれてこなかった』ことにするしかないのです」

その言葉を、セイバーは否定できない。
確かに、彼女は姉の姦計によって生まれてしまった不義の子だ。
その存在そのものが、国を滅ぼすための兵器といっていい。
であれば、彼女の存在を認めるわけにはいかない。
どのような形であれ、彼女は国を滅ぼそうとするのだから・・・！

「反逆者として、『王』であるあなたに討たれたことは納得できます。
ですが、生まれてきてはならないと、『親』であることすら認められないあなたに、言われる筋合いはない」

存在そのものの否定。
それは、彼女にとってどれだけ辛いことなのだろう。
それを認め、親に告げること。その心中は察するに余りある。
だが、ああだが・・・。
それでも騎士王は止まれない。

「・・・私は」
「分かっていますよ、父上。
それでもあなたは止まらない。ああ、つくづくあなたは人の心が分からない！」

再び、剣を向け合う宿命の親子。
こうなることは分かっていた。そんなことは、最初から分かっていた！

「ぬ、剣呑だな」

ライダーは、王として親子骨肉の争いが珍しくないことを知っている。
だが、それはそれとして、自分も聞かなければ成らないことがある。

「アサシンよ！余の部下にならないか！
傘下を引きつれ、余の右腕になれ！
共に世界を征服しようではないか！」

その場にいる全員の視線が、アサシンに集中した。
無理もない。彼の返答次第では世界情勢そのものに至るまでひっくり返るだろう。
受肉した英霊とは、つまりそういうものだからだ。

「・・・マスター、どうします？」

それに対するアサシンの対応は、あっさりとしたものだった。
まあ、彼にしてみれば同盟相手を選ぶのは軍人である己の仕事ではなく、
為政者であるマスターなのだろう。
考えてみれば当然過ぎる対応に、ウェイバーもケイネスも、
サーヴァントなんだからこうあるべきだよな、と頷いていた。
というか、マスターに相談もなく勝手に話を進めるライダーがおかしいのである。
さて、アサシンのマスターは・・・。
首を横に振った。その表情はあきれ返っている。
世界征服なんて、とんでもないといった風情だ。
これまた、当然過ぎる対応である。

「せっかくだが、断らせていただく」
「なんと！」

余りにもあっさりした対応に、唖然とするライダー。
取り付く島もないとはこのことだろう。
極めて事務的に、アサシンはライダーの提案を蹴った。
当然の対応だろう、とライダー以外は全員納得している。

「語るべきは語った。さあ、どうする？
ここにいるのは貴様等の探しているキャスターではない。
ここにいる岸波白野をマスターとする受肉したサーヴァント１３騎。
引くなら止めぬが、向かってくるのなら相応の対応をさせていただく」
「私は、戦う！」

セイバーは、いの一番に答えた。
ここに反逆者がいる以上、王としてなすべきことは一つだ。
たとえ、どれだけ望みが薄くとも、王の責務からは逃れられない。
それを見て、ウェイバーとケイネスも頷きあう。
ランサーとライダーはともかく、セイバーは彼我にとって想定外の援軍だ。
そして、次があるとは限らない。もはやこうなっては、己のサーヴァントを信じるしかない！

「ランサー！」
「ライダー！」

ランサーは、己の主の指示を受けて槍を構えた。
何のことはない。敵は強いほど主に奉げるにふさわしい。
加えて、セイバーも名のある騎士と見た。これにイスカンダルが加わるのだ。
征服王ではないが、この陣営には心躍る。
例え、相手が異形の群だろうと、敗北する気は起きない！

「お任せあれ！」

ライダーは、未練たらたらである。

無理もないだろう。６騎仲間にできると思ったら、１３騎も仲間にできる機会を得たのだ。

袖にされたとはいえ、そう簡単にはあきらめられないだろう。

だが、このまま引くのも面白くない。

己の軍勢を見れば、彼等の考えも変わるかも知れない。

「やれやれ、では、やろうか！」

こうして、間違いなく歴代聖杯戦争における最大の戦いが始まろうとしていた。

拙速

「それじゃあ、自己紹介させてもらうわ。ランサー、ランサーじゃ分からないもの。
私はハンガリーに名高き竜の娘。エリザベート・バートリーよ」
「では私も。あの海産物と見分けのつかないキャスターまがいと一緒にされるのは嫌なので。
私、嘗ては金色白面九尾の妖狐、今は一尾の良妻賢母。癒し系呪術師、ラブリーキャスター、玉藻の前です」
「では改めて、余も。奏者の剣にして至高の芸術家。
ローマ帝国第5代皇帝、ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスである！」

本来、真名を隠すことに心血を注ぐ聖杯戦争。
真名は、己の最大の武器と最悪の弱点を晒すことになるからだ。
あるマスターは会話すら許さず、あるマスターは宝具を呪札で制限した。
ある英霊は空気の鞘で宝具をも隠し、ある英霊は正体を隠す宝具を装備している。
その手管は、誠に多岐にわたる。
である以上、彼女たちの名乗りは本来ありえないものだった。
だが、それ以上に驚愕するのは彼女たちの真名そのものだ。
全員、まともな英霊ではない。種類は違えども、全員悪名高い反英霊だ。
セイバーは知っている。最後の騎士も正式な英霊ではない。円卓の末席、反逆の騎士モードレッド。
彼女たちはそろいもそろって人類の敵対者、反英霊である。
加えて、彼の宝具であるほかの面々も不穏な空気をまとっている。
明らかに夜盗か賊の類だ。
しかし、だからこそ際立って目立つのがアサシンの堂々たる姿だ。
卑しさなど一切感じない佇まい。征服王を前に、背筋を伸ばし毅然

としている。
姿こそ若いが、おそらく中身は成人男性に違いない。兵藤一誠、聞いたことのない名前だ。
おそらくこの国の生まれであろうが、一体何者であろうか。

「手はずどおりだ。やるぞ」

アサシンの言葉により、反英雄達は武装していく。
エリザベートは装飾の多い鈍器のような槍を。ネロは曲線で作られた炎のような芸術性の高い剣を。
玉藻の前はやはり東洋らしく呪札を。モードレッドは地に突き立てていた王剣を、それぞれ構えた。
そして、アサシンたち9人が薬物を摂取しその姿を変える。あるものは硬質な甲皮を身に纏い、あるものは下半身を発達させる。
この国の学生服を内側から引き裂きながら、その異形を晒していく。
知っているとはいえ、その風貌には面食らう。
単なる怪物と侮ってはいけない。教会が極わずかに捕らえた映像からは、彼等の高速連携攻撃の片鱗が見て取れた。
ランサー、セイバーならば対応は可能ではあるが、ライダーにとってはいささか以上に厳しいであろう。
セイバーはモードレッドとの戦いに専念するつもりであり、他のことに気を回すことはない。
元より、協力関係にあったわけでもない。
しかし、ランサーは違う。ライダーの死は主の死につながる。
想定外の人数差、いかに立ち回るべきかと思案していた折、イスカンダルの周囲に突風を感じた。

「ご主人様！筋肉ダルマがまた空気も読まずに開幕ブッパに出ようとしています！」
「分かった。全員、警戒しろ」

この場で、間違いなく随一の魔術師であるキャスター、玉藻の前が最後衛から前線のアサシンに注意を促し、
アサシンも素直に警戒態勢をとるように指示した。
突撃しようとした面々は、一旦大きく距離をとり攻撃を控えた。

「その方、癖の強い者共をよく従えているな。
だが、王ではないな？生前は武将と見た」

ライダーは獰猛な笑みを深めた。
そう、反英雄と言うのは英雄同様種類は多い。しかし、何れも扱いにくさは確実に英雄以上だ。
圧制者ネロ。虐殺者エリザベート。反逆者モードレッド。大化生玉藻の前。
何れも、指示に従うような輩ではない。そんな彼女たちの手綱をきっちりと握っていること。
それ自体が、アサシンの有能さの証明だ。これが、ただ手駒が強いだけの力押しなら拍子抜けだ。
強敵、実に結構。それでこそ征服のし甲斐がある。

「生前からの配下のみならず、死後に得た配下からも信は並々ならぬものと見た。
臣下から慕われるのは良き将の証だ。であれば、余もそなたに見せねばなるまい」

セイバーとランサーは、ライダーが大技に出ようとしていることに気づくが、
しかし何をしようとしているのかわからない。
騎兵なのだから、戦車による突撃こそ宝具の真名解放と疑っていなかったが、どうも違うようだ。
マスターであるウェイバーも、詳しくは知らない。ただ、真に頼み

とする宝具の存在だけは知らされていた。
それが、今まさに開帳されようとしていた。初戦であるとはいえ、これだけの相手を前に使わないなどありえない。

「死後も己が主に忠義する兵達よ、誠に天晴れだ。まさしくそなた等はアサシンの宝に他なるまい。
アサシンもよく分かっておるな。戦場に赴くのであれば武器や馬。そしてなによりも信頼する部下は必須であろう。
そう、人の上に立つものにとって、真の宝とは財宝にあらず！己を慕い、共に同じ夢を追う臣下こそ、何物にも勝る至高の宝！」

セイバーも、ランサーも、モードレッドも、ネロも。その言葉に胸をうたれる。
そう、そうなのだ。確かに手にした宝具は宝であろう。
しかし、崩壊させてしまった円卓の騎士。裏切ってしまったフィオナ騎士団。滅ぼしてしまった偉大なるローマ帝国。
その何れもが、その日々こそが至上の宝だった。ライダーの言葉は正しい。
そして、現にアサシンは彼等を重用し、他の勢力から抜きん出た成果を多く上げていた。
この戦争では参加する英霊のほとんどが単騎だ。それゆえに誰もが消極策に出ざるを得なかった。
感情的にも、戦略的にも、ライダーの言葉は真理である。

「しかし、余は征服王！
率いる兵、その絆では負けておれん！」

誇らしげに、ライダーは両手を大きく広げた。
同時に、周囲の景色が夜の森林から大きく姿を変えていく。
そこは、雲ひとつとしてない真昼の砂地。
嘗てライダーが兵を率いて駆け抜けた大地である。

「ぬぬぬ、これは固有結界か！」
「うぎゃー！
キャスターである私を差し置いて、ライダーの癖に固有結界なんて大技を！
しかも、神殿からの魔力供給がぶっちぎられてるし！」
「嘘、こんな暑いところで戦うの？」
「クソッ、距離を作られたな」
「地の利を奪われたか。全員、一旦集まれ」

召集するまでもなくアサシンの元に集まっていた戦闘員達に一歩遅れて、
ネロ、モードレッド、マスターをつれたタマモ、エリザベートが集まる。
魔術師であるキャスターはともかく、聖杯からの知識によって他の面々も存在自体は知っていた大魔術固有結界。
固有結界は、異界常識。言ってしまえば相手を空間に閉じ込めて強制的にルールに従わせる大魔術。
周囲の魔力を枯渇させたり、名前や存在を希薄にさせたり。変り種では一度見た剣を蓄積するものもある。
何れも、世界そのものが敵となる為ルール次第では一撃必殺となるのだが・・・。
見れば、セイバーやランサー、マスター二人も普通にいる。どうやら、名無しの森のような無差別全体攻撃型ではないようだ。
しかし、彼我の距離は結界が張られる前よりも大きく開いている。
サーヴァントならば一息の距離だが、ここはライダーの領域。うかつには飛び込めない。
「タマモ、分析を全員に分かるように伝えろ！」
「はいはい・・・。今のところ、これと言って特に変化はありません。
本当にただ世界が変わっただけですね。

あれ？おかしくね？いくらなんでもおかしくね？
この固有結界、複数の個体からの魔力によって維持されています」

キャスターが調べていたのは、まずこの世界のルールだ。
内容によっては、気づかないうちに死ぬこともありうる。
しかし、今のところ周囲はただの砂地。神殿からの魔力供給は遮断されているが、各員これと言ってダメージはない。
ついで調べたのは固有結界を支える魔力の出所だ。
まあ、他に調べることがなかったのだが、これがどうにもおかしい。
魔力の出先が、複数ある。いや、無数と言うべきだ。
十でも百でも千ですらない。数万にも及ぶナニカが、この世界を支えている。

「余は、魔術師ではない。
その余が、こうして世界を塗りつぶせるのは、ここが、余たち全員の心象風景であるからさ」

ライダーの背後から砂煙と共に現れる、勇壮たるサーヴァントの軍勢。
ライダーの宝具、固有結界『王の軍勢』。
固有結界という形をとっていても、内容は『忠実無双の無法者』同様のサーヴァントの連続召喚。
しかしその規模たるや比較にならない。忠実無双の無法者がただ8人の召喚であるに対して、
この世界に招かれたのは数万からなる大軍勢。
文字通りの意味での対軍宝具であった。
その、規格外さに味方だというのに圧倒されるセイバーとランサー。
それは、敵ならば尚のこと恐ろしかった。
大王に引き入れられし、精兵ぞろいの軍勢は敵であるアサシン陣営を圧倒してきた。

「・・・いやあ」

その圧力にへたり込んだのは、マスターである岸波白野ではない。ランサー、エリザベート・バートリーだ。

軍勢を相手どるという経験がない彼女にとって、この光景はいつか自分を幽閉した者達に見えるのだろう。

トラウマを刺激され、恐慌に陥るのも無理はない。

そんな彼女にいち早く気づいたのはやはりアサシンだった。戦闘中であり、恐怖した味方を放置することはできない。

歩み寄り、恐慌している少女の顔を優しく撫でる。それでも目の潤みは増していくが、それも次の一手で収まった。額への、優しいキスである。

「勇気の出るおまじないだ」

「・・・えへへへ」

彼女のトラウマは根深いが、それ以上に恋する乙女は単純なのである。

先ほどまでの恐慌はどこへやら。赤面し照れている。

まあ、余り軽々しくやるべき手ではない。特に人前では。

「よし、他の面々は大丈夫か?」

「奏者よ、余もダメだ・・・。

ああ、落日を思い出してしまう・・・」

「よよよ、那須野の戦いを思い出してしまいました~~~」

「オレも、丘の戦い・・・を・・・」

「テンション上がってきたぜー!」

「一匹残らず駆逐してやるぜー!」

「無双の予感キター!」

「経験値がわんさかだぜ！」
「ゴミのようにぶっ飛ばしてやる！」
「惜しい、カスだ！」
「ボーリングのピンみたいにぶっ飛ばしてやる！」
「原始人どもをボッコボコだー！」

「よし、問題ないな」

嘘泣きできる連中はサラリとスルー。
向こうは、いまや遅しと突撃の体勢に入っているのである。付き合っている暇はない。
アサシンは、極めて冷静に戦場を整理しようとしていた。
向こうは軍勢であり、こちらは少数。数の利を生かして圧倒する予定が、逆転されてしまった。
事前の打ち合わせは全て撤廃する必要があるだろう。
また、神殿からのバックアップがなくなったことも大きい。自陣防御の利点である兵站が封じられてしまっているのだ。
それでも、受肉している分こちらが優位なことは確かだが。
アサシンは敵が動き出す前に、この場における最善の策を選択する。

「総員、おれに続け！」

了解！

アサシンは部下全員を引き連れて走り出した。ネロ、タマモ、モードレッドは不満げだが、無視。
マスターもこっちを見ているが、気にしている場合でもない。
この面々は、決して筋力や耐久に優れているわけではない。むしろ低い者がほとんどだ。
おそらく、軍勢に囲まれればそのまま削り殺されるだろう。

しかし、敏捷に限って言えば全員一定以上である。
マスター一人をキャスターが抱えている今、その速度は王の軍勢を大きく引き離している。
つまり、数に対して速度の利を生かそうと言う算段だ。どれほど数が多かろうと速度で劣る以上、一度にかかれる人数は知れている。
まして、ここは果てなどない無限の砂地。障害物もない以上この作戦は極めて有効だった。

「策はあるぜ！」
「たった一つだけ策はある！」
「とっておきのやつだ！」
「いいか！息がとまるまでとことんやるぜ！」
「足を使うんだよ！」
「力の限りやってやる！」
「フフフフフ」
「逃げるんだよォォォーーーー！」

つまり、背中を見せて逃げ出したのである。

「ははははは！先ほどまでの威勢はどこに行ったのやら。
奴らめ、逃げ出したぞ」

当初、圧倒的な兵力差に苦戦を予感していたケイネスだが、固有結界という大魔術と大軍勢に、しっかり調子を取り戻していた。
まあ、アサシン以上に脅威であるこの軍勢がやがて敵に回ると言うのは気になるところだが、今は良い。
第一、ウェイバーがマスターではそう何度も使用できる規模の宝具ではないのだから。
まずは、アサシンを排除できることを喜ぼう。
しかし、ライダーの表情は呆れているわけでもなく、かといって失望しているわけでもない。

むしろ、相手が『最適な』戦術を取ったことを評価していた。

「全軍に告ぐ、全速力で奴等を追え！」

大地を振るわせるほどの雄たけびと共に、軍勢は走り出す。

軍勢には、徒歩の歩兵だけでなく騎兵隊も当然存在する。

戦車を駆るライダーは陣頭を行き、その脇にランサー、セイバーが平行して走っていた。

征服王の両脇を剣の騎士と槍の騎士が固める、磐石の態勢。これに敵うものなどいない。

そう、ウェイバーも確信していた。だが、セイバーとランサーは表情が硬かった。

走り出して確信したが、王の軍勢は一人一人がサーヴァントであり、中には一級に該当するであろう著名な勇者もいる。

だが、マスターがいない。

固有結界という特別な場を用意し、そこに座から召喚された英霊たちではあるが、一人一人の性能はどうしようもなく落ちている。

つまり、脚で勝る相手に逃げられると追いつけないのである。

ライダー、ランサー、セイバーならば追いつけるが、それでは固有結界の意味がない。局地的に運用できる兵力差は再び逆転するのだ。

足止めに専念するにしても、１３対３ではいくらなんでも無謀が過ぎる。

まして、向こうにはモードレッドはともかく他に三体の著名な反英雄がいる。彼女たちの宝具が分からないのも確かなのだ。

下手を踏めば、そのまま全滅も考えられる

事実として、ネロは固有結界に似て非なる宝具を所有している。もしも、突っ込んで時間稼ぎに出られれば、逆に閉じ込めることも可能だった。

そして、王の軍勢は比較的燃費はいいものの、固有結界である。そう長時間展開できるものではない。

受肉している以上、持久力では向こうに利がある。つまり、向こう

は逃げているだけで優位を取り戻せるのだ。
単純な策は、まさしく逆転の一手となっていた。
ランサーもセイバーも、こうなってはアサシン陣営へうかつには飛び込めない。

「まさか、このまま逃げるわけでもあるまい？」

しかし、ライダーは不敵に笑う。あれほどの反英雄を従える男が、逃げて勝ちを拾うとは思えない。
事実として、向こうは速度で優位にあるにもかかわらず、一定の距離を保ち続けている。
これは逃げていると言うより、距離を作って作戦を練っているのだ。
さて、どれほどの将の器か。見せてもらおうじゃないか。
７組しか参加しない戦争など蹂躙して終わりと思ったが、なかなかどうして盛り上がってきたではないか。
征服王は来るであろう敵の次の一手に胸を震わせていた。

「キャスター、もう一度全員にこの固有結界の仕組みを伝えろ」

アサシンは砂地を駆け抜けつつ、脇を走るキャスターに声をかけた。
そう、逃げて勝つ気など元よりない。向こうは実戦の数ならば自分を大きく上回っている。
この膠着が続くのであればどんな手をうってくるのかわからない。
であれば、主導権を握り続ける必要がある。
アサシンは、走って逃げながら作戦を考える、無差別格闘早乙女流敵前大逆走をしていたのだ。
手が思いつかないなら、とりあえず距離と時間を稼ぐ。平凡で結構、兵は拙速を尊ぶのだ。

「策を練り、殲滅するぞ」

対城宝具エクスカリバー

「この固有結界は、ご主人様のそれと同じサーヴァントを召喚するものです。
そして、召喚されたサーヴァントたち各々でこの固有結界を維持しています。
本来固有結界はそう長く維持できるものではありませんが、
支えているの人数が人数。常のそれよりも長いでしょう」
「だろうな、長時間維持できなければ大軍を率いる意味がない」

私を背負って走るキャスターは、酷く焦っている。
無理もない、人数差で安心して勝てると思っていたら、この大逆転。
向かえ撃つはずだった私たちは逃げるしかなくなった。
しかし、アサシンは相変わらず真面目に戦争しようとしている。
そうだ、考えることをやめちゃいけないんだ。

「反面、一体一体の性能ははっきり意って雑魚。私よりも貧弱そうなのもちらほらと。
まあ、あれだけの英霊をまともに維持するなんて不可能ですから当然ですけどね。
仕組みから言って、このまま逃げ続けるか、ライダーないし軍勢の半分も殺せば結界は解除されるかと」
「・・・。エリザベート、モードレッド。
今神殿と切り離されているが何発宝具を撃てる？」

１３騎の中で、大量の敵を一度に薙ぎ払える対軍宝具を所持しているのはモードレッドだけ。
エリザベートも、対人宝具ではあるが、数百人は倒せるらしい。
まあ、対象が一人でも対界宝具というのもあるらしいし。

「３発だ。しかも、一度撃ったらラグがある」

「私もよ」
「そうか・・・キャスター。宝具はどれだけ維持できる？」
「そうですね、維持に専念すれば5分は・・・」
「上出来だ」

アサシンの作戦はいつだってシンプルだ。
動因人数が少ないからと言うのもあるが、大雑把な指示だけして後は各々の判断に任せている。
今回もそれに漏れないのだろう。第一、時間がない。
向こうがやけになって突っ込んでくれば、数人はやられてしまう。

「まず、モードレッド。お前が宝具でライダーを撃て。
アーサー王で迎撃されるだろうが、それでいい。打ち負けてもフォローする。
そして、それが済み次第敵を一旦ひきつけてタマモの宝具を展開、全員の最強遠距離攻撃を連発してとにかく敵軍の数を削る。
タマモは、それが終わり次第マスターの傍で休憩だ。何もしなくていい。休んでくれ」
「承りました」

タマモの対軍宝具は、ライダーやモードレッドのそれと違って支援用だ。
ただでさえ魔力が生産できる受肉したサーヴァントたちを更に強化できる。

「その後は、モードレッド。お前は予定通りアーサー王を頼む」
「ああ、当然だ」

モードレッドは、もう迷いがない。
話をして、気分が整理されたんだろう。

「ネロはタマモの傍で待機。おそらく、向こうはマスターを狙ってくる。
ランサーでもライダーでも、宝具を使って隔離してくれ。
ライダーはマスターを抱えているから、多分ランサーが来ると思うがな」
「うむ、任せよ。
できればイスカンダルであって欲しいが、あのランサーもなかなか品があってよい。
どちらであれ不足はない。楽しみだ」

ネロはこちらへの奇襲を対応が任務だ。
もちろん、地味な立ち位置だが、奇襲してくる相手が一級のサーヴァントとあれば話も別だろう。
一体一体は弱い軍勢を相手どるより、気分が乗るようだ。

「エリザベート。戦闘員を5人貸す。マスターとタマモを守ってくれ」
「私で、いいの？」
「もちろんだ。お前のことは信じている」

さっき恐慌に陥った少女に向けているとはとても思えない信じきった表情。
それを受けて、エリザベートもやる気を出したようだ。槍を強く握り締める。

「戦闘員、お前等は3と5に分かれてオフェンスとディフェンスだ。
3は敵陣を突破しマスターの首を狙え。
おそらくライダーの宝具に搭乗したままだろうが、それでも執拗に狙え。
できる限り、ネロやエリザベートに負担をかけるな。
5は、マスターとタマモを死守しろ。エリザベートへの援護も忘れ

るな。
　できるはずだ」

　了解、と戦闘員たちは答える。
　本当に、こいつ等は楽しそうに笑っている。
　そして、そんな彼等にアサシンは格別の期待を寄せているようだ。
　やはり、反英雄４騎を抱えていてもこいつ等のほうが『信頼』できるらしい。

　あれ、アサシンは?どうするんだろう。

「どれだけ攻撃しても、おそらくかなりの軍勢が残るはずだ。
　少なく見積もっても2万は残る。それはおれが面倒を見よう」

　その言葉を聞いて、反英雄の少女達全員がアサシンを見る。
　その目は驚愕に満ちていた。
　アサシンは、アサシンのクラスでなければ一騎当千の怪物だと言う。
　だが、アサシンである以上。２万以上の軍勢を相手どれるわけはない。
　いいや、２万というのも少なく見積もってだ。その倍は残るかもしれない。
　殲滅力、制圧力に欠ける『アサシン』には不可能だ。

「奏者よ、それはいくらなんでも欲張りすぎだ!」
「ご主人様、私もお供いたします。いいえ、させてください!」
「私と一緒に迎撃すればいいじゃない!」
「オレは・・・。お前に死んで欲しくない」

　走りながら、各々がその無謀を止める。
　しかし、アサシンの決意は固い。

他の誰もが強敵を相手取るなど、負担を強いることになる。
それを指示する自分が、一番無茶をしなくてどうするのか。
そう思っているのだろうか。

「マスター。あなたは判断をした。であれば、私はそれをこなすだけ。心配は要りません。
お前等もなめすぎだ。セイバーとランサー、ライダーさえいなければ、あんな烏合の衆に負けるおれではない。
受肉もしている以上憂いはない。戦闘員、おれにこの任務はできないと思うか？」

もっともアサシンを知る生前からの部下に、任務の可否を尋ねるアサシン。
それを聞いて、戦闘員達が大爆笑する。
おかしそうに、走りながら腹を抱えて涙を流している。

「こんなもん、ピンチの内にも入りませんぜ」
「そーそー、いいところ、経験値稼ぎのルーチンワークじゃね？」
「何真面目に心配してるんだか！」
「お前ら艦長を馬鹿にし過ぎだって！」
「なーんにもわかってねーんだから！」
「むしろいじめだって。弱いものいじめ」
「いーなー。おれもぶっ殺したいなー」
「艦長はな、宝具だの神器だの、ご大層な代物がなくったって負けやしないんだよ」

全面的な信頼。それに、少し嫉妬した。やはり、アサシンが信じているだけはある。
こいつ等もまた、アサシンを最大級に信じている。理解も、納得も、信頼も。相互で一切歪みがない。
ライダーの言ったとおりだ。こいつ等はアサシンにとって最高の

宝物だ。

「余を残して死ぬでないぞ」
「御武運を、ご主人様」
「危なくなったら呼びなさいよね」
「・・・大丈夫なんだな」

少女達も、覚悟を決めたようだ。
私もアサシンを信じよう。元より、私にはそれしかできない。

「よし、じゃあモードレッド。景気よく頼む！」
「ああ！赤雷よ！」

モードレッドを先頭にする形で、全員が足を止めて反転する。
同時に、兜をはずしたモードレッドから魔力放出、赤い雷がほとばしった。
剣の形が、音を立てて変形していく。剣が、憎悪の紅に染まっていく。
それは、アーサー王の伝説を終わらせた終焉の剣。反逆の騎士モードレッドの宝具、その真の姿である。
同時に、こちらへ向かってくる敵が足を止めた。
こちらの紅の極光に対抗せんと、向こうのセイバーも迎撃の構えだ。
金色の、濁りのない輝きが収束していく。
当然だろう。王は、反逆者から逃げてはならないのだから！

「我が麗しき父への叛逆（クラレント・ブラッドアーサー）！」

放たれる、自陣最強の攻撃力を持った大斬撃。
ライダーが戦場を書き換えて早々に放たれるそれは、まさしく戦争の幕開けを飾るに足るものだった。

「足を止めてください！」

セイバーが、紅の極光を目にしてライダーに叫ぶ。
それは間違いなく自分に向けての、そしてその周囲ごと破壊する渾身の一撃。
己の血で汚れたそれが相手とあっては、もはや迎撃するのは聖剣以外にはありえない。
セイバーに言われるまでもなく、ライダーもその輝きに警戒したのだろう。自分の周りだけ足を止めさせる。
如何に対軍宝具といえども、大軍の全てを薙ぎ払える道理はない。
大きく迂回させるルートで、挟み込む形で軍を進ませる。
ここで、全軍の足を止めては相手の思う壺だからだ。

「私から離れてください」

セイバーの、不可視の剣がその姿を示す。
不義の子のそれと違い、その剣に一片たりとも穢れはない。
その眩さに、マスターやサーヴァント、軍勢の誰もが心を奪われた。
戦場という地獄にあって、なお貴く輝く騎士の誇り。
その具現がこれである。あらゆる伝説の中にあって、最上とされる聖剣の中の一。
即ち騎士王、アーサー王の伝説。その代名詞！

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）！」

金色の極光に、炎天下の戦場が照らされる。
放たれる斬撃は、やはり金色であり、息子のそれと中間で激突する。

「くはぁ！こりゃあ派手な号砲よな！まさか、あの小娘がアーサー王とは！」
「ああ、ということは、あの騎士はモードレッドか」

明かされるセイバーとその息子の真名。
有名に過ぎるその伝説の登場人物たちが目の前で対峙しているとあって、
ライダーとランサーは興奮気味だ。
なにせ、仮初とはいえそれが味方なのだから。

「感心している場合じゃないだろう！」
「ええ、くそ！これほどの宝具を持つとは！」

ケイネスもウェイバーも、これが敵に回ることの恐ろしさのほうが先に立つ。
なにせ最強の聖剣だ。防ぐ手段など存在しない。
これには、ライダーの戦車がもつ防御も障子紙同然だろう。
そして、それと拮抗している宝具を相手が持っているというのも寒気が走る。
当然だ、なにせアーサー王を殺した息子がいるのだから。
アーサー王が強ければ強いほど、モードレッドもまた強くなる。当然の帰結であった。
しかし、宝具自体の格の差ゆえか。打ち勝ったのは黄金の輝きである。

「このまま、全滅か！」
「そんなわけはあるまい」

向こうにモードレッドしかいないのであれば、それも納得できる。
だが、向こうにはエリザベート・バートリーと、玉藻の前、ネロ・

クラウディスがいるのだ。
いやもっと言えば、アーサー王とその宝具は向こうは知っていたのだ。
こうの結果は予想できて当然だ。防ぐ手段を持っていないほうがおかしい。
そして、実際一つの小さな影がアサシン陣営に向かう黄金の刃の前に立ちふさがる。
さあ、だれがどうやって防ぐのだ！

「うおおお

しかし、アサシンは少しも慌てていない。
迫り来る至高の光を背にして、わざわざタマモの肩に手を置いて止める。
現実逃避しているのかと疑うほどの落ち着きっぷりだ。

「宝具の準備をしておけ。なに、問題ないさ」

「うっひゃー！」

戦闘員の一人が、奇声を発して飛び出した。
戦場を切り裂く黄金の輝きを前にして、その余りにも小さな体躯で立ちふさがる。
それは、自棄になっているでなく、功名心に駆られてでなく。
ただ、己に与えられた仕事をこなす為に・・・！

「強化系練全開！鉄塊〝剛〟！日本刀の武装錬金、ソードサムライX！」

まさに仁王立ち。如何に減衰しているとはいえ、最強の聖剣をたった一人の男が受け止めるその無謀。
頼りにする武器は日本刀。それは、確かに斬撃を真正面から受け止める。
そして、その刃に触れた黄金の輝きは飾りの輪から消散していく。
それは、何の冗談か。
一瞬の出来事であったが。それは確かに私たちの目の前で起きたことだった。
モードレッドは我が目を疑い、ネロもタマモもエリザベートも開いた口が塞がらない。
戦闘員7人とアサシンは、それが当然であると受け止めている。

「最強の聖剣エクスカリバー。ご大層な割には随分ちんけだな」

その黒い装甲は、対城宝具の直撃を受けて尚傷一つ受けていない。

屋螺礼（やられ）　薬（やく）

出身　日本

種族　転生悪魔

M・O・O　昆虫型　クロカタゾウムシ

M・A・R・Sランキング　３０位

「虫一匹殺せないんだもんな！」

英雄たちの戦場

「く・・・」

セイバー、アルトリアは己が手のエクスカリバーを固く握り締めた。

この結果は、つまり敵に真名開放を受けきられた結果は、自身の力不足にあると断じた。

それは、間違っていて、しかし正しい。

モードレッドと戦闘員は共に受肉済み。それに伴い魔力を自らで生み出せる生命である。

いかなる破格のマスターであろうと、この時代の魔術師である以上、

どうやったって英霊に全力を出させ続けることなどできない。

である以上、モードレッドも戦闘員もサーヴァントであるセイバーよりも『強い』。

ステータス的な意味ではない。生き物として、マスターに依存しなければならないセイバーよりも強靭だ。

そして、セイバーのマスター衛宮切嗣は戦闘すると言う意味では一級であっても、

マスターとして超一流ではない。

セイバーは十分な魔力供給を受けていても、十全の力が出せるわけではない。

そういう意味では、受け止められたことの原因が彼女の弱さにない、といえば嘘になる。

だが、もちろんそういう意味でセイバーは悔いているわけではない。

「セイバーよ。俯いている場合ではないだろう」

「無論です」

ライダーは、セイバーを気遣うと言うよりもからかった。

今のは、本気であり全力の一撃であっても、所詮は開幕の一撃。本番はこれからだ。

悔いている暇などありはしない。

敵は一人残らず精兵だ。そのことが分かっただけでもよしとしよう。

ここから先は、剣士としての戦いになる。

そう思ったのもつかの間だった。場の空気が明らかに変化した。

それは、敵陣で起こったことであり、その空気はかなり距離のある自陣にも伝わってくる。

攻撃ではない。しかし、なんだ。明らかに何かが起こっている。

それを感じているのは自分だけではない。ランサーもライダーも、敵陣を睨み続けている。

直後だった。

紅い極光が再びほとばしり、その背後で巨大な城砦が出現する。

赤雷と爆音が、敵陣を囲もうとしていた軍勢を吹き飛ばした。

爆音が誰の宝具かは分からない。しかし、赤雷がモードレッドのものであることは明らかだ。

あれは、如何に受肉しているとはいえ連発の利くものではありえない。

現に、セイバーは今撃たれたら迎撃不可能な程度には疲弊している。

更に、上空から無数の斬撃が降り注いでくる。

これは、せいぜい１０人ほどを切り捨てる程度の代物。正規のサーヴァントならば防ぐことはたやすい。

ライダーもランサーも、その武器ではじいている。

だが、マスターがいないため弱体化している軍勢には十分だった。

対軍宝具ほどではないにしても、整列した軍勢をかき乱していく。

出所は、やはり敵陣である。

更に、三度目の赤雷と二度目の爆音が軍勢に向けて放たれた。

「・・・魔術攻撃がない。

まさか、これがキャスターの宝具なのか！」

意外にも、その事実に真っ先に気づいたのはウェイバーだった。
こちらの軍勢を殲滅せんと放たれる大規模な攻撃群。
しかし、その中にキャスターの魔術らしいものはない。
だが、もしも既にキャスターが既に魔術や『宝具』を使用しているとしたら。
それがもしも、魔力の供給ないし消費を抑えるものだとしたら。この異常な状況にも説明がつく。

「アサシンめ、良い部下をそろえている」

供給するにせよ消費を抑えるにせよ、単体であれば、さして意味はない宝具だ。
しかし、自軍に対軍宝具持ちがいるのであればこれほど驚異的なそれはないだろう。
そして、受肉を施したのもキャスター玉藻の前に違いない。
つくづく、つくづく良い部下だ。是非欲しい。
彼女を最も有効に機能させられるのは自分だ。間違いない。
受肉し、魔力に憂いなく戦える軍勢。その威力は、自軍に襲い掛かっているので明らかだ。

「褒めてる場合かよ！
ここを攻撃されたらどうするんだ！」

最初の一撃こそ、セイバーが受け止めて跳ね返してくれた。
だが、向こうと違って魔力に不安のあるセイバーでは暫くは打てまい。
ウェイバーの指摘どおり、ここを狙われたら一環の終わりだった。

「ばかもん。その気なら、とっくにそうしている」

ライダーは、全くその心配はしていない。いや事実としてする必要がない。

なぜなら、赤雷や爆音は明らかに数をそぐことに費やされているからだ。

こちらに向けては放たれていない。

ライダーを葬るのは、この軍勢を葬るよりたやすいはずだと言うのに。

その理由を、ランサーは言い当てた。

「どうやら、相手は真っ向勝負が望みのようだぞ、征服王」

最初の一撃は、間違いなくセイバーに宝具を『使わせる』為のものだ。

戦場をひっくり返す対城宝具をセイバーが温存していれば、アサシンはうかつな行動が取れない。

だから、先に使わせたのである。現に、セイバーは敵陣に近づくことさえできない。

しかし、その後はこちらに向けて宝具を使ってこない。

これは、こちらが令呪を使うことを嫌っているとしか思えない。

令呪は万能の例外であり、3回しか使用できないマスターの切り札である。

もしも、こちらが令呪を使ったら、向こうも使わざるを得ないだろう。

敵は、こちらが令呪を使わなくても何とかなる状態を保ちつつ戦力を削ぎにきているのだ。

しかし、狙いは分かってもこちらとて令呪は使いたくない。

なにせ、サーヴァントより圧倒的に弱いマスターの、生命線と言っていいからだ。

そもそも、この状況を令呪1画でひっくり返せるとも思えない。

「まさか征服王、このまま全滅するのを待つつもりか？」

ケイネスは、苛立ちを隠さずに問いただす。

自分とて令呪はつかいたくない。さりとて全滅すれば数の差は元通りだ。

王の軍勢が消えれば、数的優位は元通りである。

「まあそう急くな」

ライダーはこの攻勢が続くとは思えなかった。

少なくとも、『王の軍勢』の維持できる時間よりも短いはずである。

なぜなら、そこまで長いのであればもっと早く使い、しかもああも慌てて攻撃してこないはずだ。

こちらが体勢を整えきる前に、いくばくかの無駄のある攻撃をしている。

そして、案の定『王の軍勢』が維持できなくなるほど兵力が減る前に、アサシンたちの陣を覆っていた場は消えた。

当然、噴火の如き攻勢はぴたっと止まった。

「一旦陣形を整えよ！」

ライダーの指示により、死傷者多数の軍勢は、しかし迅速に陣形を立て直していく。

彼等は一騎残らず精兵であり、たとえ能力は下がっていようとも規律が失われることはない。

人数は減ったものの、再び精緻な陣形が作られるのに時間は要らなかった。

しかし、向こうはその間何の手も打ってこなかったことが不気味である。

「どうやら、向こうは乱戦を避けたいようですね」

「であるな」

セイバーの指摘が正しいかどうかはともかく、軍勢は再び突撃できる体勢が整った。

そして、『王の軍勢』はまだ維持できる。少なくとも１３体を蹂躙するには十分すぎるほどに。

「よくぞ耐え凌いだ、我が朋友たちよ。

しかし、分かったであろう。彼等は１３体なれど我等に勝るとも劣らぬ無双の兵ぞろい。

楽な戦にはならぬ。嬉しいことにな」

茶目っ気たっぷりに軍勢へ呼びかける。

そう、英傑の集う戦場において、楽な戦場であってよい道理はないのだ。

「困難を打破し、未踏を蹂躙する。

それこそが我が王道！その夢を、皆に示すことこそ王であるが故に！」

然り！然り！

一度萎えかけた士気を再び盛り上げる。

向こうがこちらの体制を整えるのを待っていると言うのなら望むところ。

世界を征服せんと束を目指した征服王の軍勢。その真価を見せてやろうではないか！

「全軍、蹂躙せよ！」

再び、進軍する王の軍勢。しかし、今度は向こうは逃げない。

大軍を相手に迎撃するつもりのようだ。
半分ほどで陣形を作り、もう半分はまっすぐこちらへ向かってくる。
そして、見紛うはずもない。そのうちの一騎がセイバーに踊りかかる。

「モードレッド！」
「アーサー！」

丘の再現となるか、或いは塗り替えるか。
魔力放出を得意とするセイバー同士が、王の軍勢の本陣で火花を散らし剣を交わす！
それは王として反逆者を討たなければならないという義務感であり、
子として認められなかった親への反骨心であったり。
共に、聖杯戦争で最優とされるセイバー達は剣戟をはじめた。
それは幾多の戦場を駆け抜けたイスカンダルやその兵をして見とれさせるものだったが、
しかし飛び込んできたのはモードレッドだけではない。

「大将首だ！」
「ボーナスだ！」
「金一封だ！」

三騎。アサシンの手勢であろう異形の槍兵が、異形の槍を振りかざしてライダーとマスターたちに襲い掛かる。

「させん！」

それを許すランサーではない。
軍勢の持つ槍を拝借すると、槍兵として当然の技能である投擲に

よって、三人を攻撃する。
しかし、敵も然る者。空中にて跳びはね、そのまま軍勢の中に切り込み隠れていった。

「く、気配が消えた！」
「なるほど、あやつらもアサシンであったな」

気配遮断。それこそアサシンの基本技能であるが、この軍勢の中でやられると本当にどうしようもない。
なにせそこいら中にサーヴァントがいるのだ。
まさか、軍勢ごと薙ぎ払うわけにもいかない。ランサーとライダーは主を守る為に動くに動けなくなった。

「いや、助かったぞランサー。さすがは最速の英霊だ」
「いや、こちらも主を護って貰っているゆえな」

自分がいる限り、決してアサシンの手勢如きにマスターをやらせはしない。
それは、マスターを守っているライダーを守ることを意味している。
だが、それは三騎全員がここに釘付けになることを意味している。
少なくとも、セイバーは愚息を討つまで手が離せないであろう。
また、そのつもりもないに違いない。

「さて、前線は・・・」

セイバー同士、円卓の騎士同士の戦いにばかり目を向けるわけにも行かない。
なにせ、イスカンダルは軍勢の指揮官であるが故に。
そして、前方に見たものは壊乱されていく自分の軍勢であった。
明らかに防衛線がしかれ、そこをこちらは突破できずにいる。

死せば座に戻るサーヴァントゆえに死体は残っていないが、その殲滅力を見るに、
既に相当数の兵が討たれている。
しかし奇妙だ。その防衛線は明らかに１０人以上の兵で構成されている。
１００人に遠く届かない陣営で、防衛線を維持できていることも驚きだが、
それよりも向こうにまだ手駒がいたのか、とあっけにとられる。
底知れぬ奴よ、と思いつつ、その防衛線を大きく迂回させる形で別働隊を送り込む。
質で劣るのなら量で圧倒するまで。
限られた兵で、アサシンはよく戦場を維持している。
しかし、それを圧倒してこそ征服王。
必ず勝つ。そして、再び問おう。臣下に加わらぬかと。

時は少しさかのぼる。

数えるのがばかばかしいほど、視界を埋め尽くす大軍勢。
彼等は一人一人が歴戦の勇者であり、英雄であり、サーヴァント足りうるのだろう。
如何に劣化しているとはいえこの数、しかもアサシンもまた劣化している。
百歩譲って死なないにしても、進軍を阻めるかと言うと、不可能であろう。

「受肉を済ませ、もはやマスターに気を使う必要は無い。
これで、ようやくおれも武装錬金が使える」

大雀蜂の改造人間、兵藤一誠。
生前所持していた核鉄は、十字槍の武装錬金、激戦である。

しかしアサシンである学生の時代では、他の武装錬金を所持していた。
それは、大雀蜂の持つ驚異的な体力を最大限に生かすための兵装。
最前線で敵を殲滅するための武装である。

「月牙の武装錬金、サテライト３０！」

その特性は、月の月齢に合わせて本体を３０体に増殖させるもの。
一体一体が本体と同様のスペックを持つ。
これを打ち倒すには３０体全員を同時に倒すか、
或いは所持者の体力が尽きるまで殺し続けるしかない。

「大切なものを守る為、最後の力が枯れるまで」

兵藤一誠の若い頃の逸話に、こんなものがある。
不死鳥と持久戦をし、打ち勝ったと。
どれだけの武装を失おうと、その精神力と持久力は、決して損なわれてなどいない。

「ここから一歩も下がらない、ここから一歩も通さない！」

大雀蜂の毒針が、毒液と共に隆起する。
全身から吹き荒れるは強化系のオーラ。
使用する体術は六式と空手。
３０体の大雀蜂が、千軍万馬の前に立ちふさがる。

「嵐脚！」

一閃。全く同時に放たれる斬撃は、武装した兵の最前列を胴切りにするだけでなく、
そのまま後列をも切り捨てる。

見えない空気の斬撃に、面くらうも足を止めず襲い掛かっていく王の兵。
そのうち一人の顔面に槍の穂先ほどもある毒針が突き刺さる。
咽が、大顎の刃で切り裂かれる。
胴に風穴が開く。
首を折る。

殺す。

殺す殺す。

殺す殺す殺す。

殺す殺す殺す殺す。

殺す殺す殺す殺す殺す。

「どうした、もっと来いよ」

アサシン、兵藤一誠は、目に付く軍勢が押し寄せるよりも早く「消化」していく。
性能で圧倒している以上、どれほどの数がいようとも、速度と力で圧倒する。

「もっと、殺してやる」

その表情は、いつも以上に熱を感じない。
護国の英雄と称えられた男は、侵略者たちに一分の情けもない。
機械のように精密に、猛獣のように獰猛に、英雄のように勇敢に立ち向かっていく。

大雀蜂は肉食の昆虫である。
蜜蜂の巣を襲い、これを壊滅させることもしばしばである。
日本蜜蜂がこれに対抗するために、蜂団子なる技を持っていることは広く知られているが、
それも対処できるのは1匹の場合。
30匹も進入されればなすすべもない。
甲虫ほどではないにしても、蜜蜂の毒針など通さない装甲と、強力な大顎で持って蜜蜂を片っ端から駆逐していく。
そのキルレシオ、実に1：1000。恐るべきことに、たったの一匹で千匹を殺す計算である。

「ふぃー、本当に死んじゃうところでした～～！」

アサシンの注文通り、キャスターは宝具の維持に全力を注いだ。それこそ余力を一切考えずに。
それは戦術的な効果を上げ、敵の3分の1を薙ぐに至った。大戦果である。
そんな彼女を気遣って、岸波はねぎらうように寄り添っていた。

「余はつまらぬ」

しかし、この結果が気に入らず拗ねているのはネロだ。
なにせ、彼女は遠距離での有効な攻撃を持たず、三騎の反英雄の中では最も成果が少なかった。
皇帝特権で、六式を真似て攻撃するのが精一杯だったのである。
派手好きな彼女にとって、不本意な結果であろう。

「まったく、喋ってないで手伝いなさいよね！」

エリザベートは、アサシンの指示通りタマモと岸波を守っていた。
防衛線を迂回してきた軍勢を、尾の一撃で打ち倒していく。
最強種である竜の娘として、その名に恥じずアサシンの期待にこたえていた。
まあ、ネロは待機していろと指示されているので、何もしないのが正しいのだが。
そして、更に言うのであれば迂回してくる軍勢もエリザベートを含めた6人で十分対処できていた。

「ん～～、もういいね！」

頭に蛾の触角を生やした少女が、歯車型のチャクラム、モーターギアをアリの戦闘員風見に向けて投擲する。
当然、攻撃のためではない。それにくくりつけている「糸」を渡すためだ。

「よっしゃあ！」

風見はその糸を己の大剣に撒きつけると、ぬん、と力を込めてぶん回した。
その糸の先には、あらかじめ地面に張り巡らされていた糸による網が、
その上にいた兵隊を絡めとりつつ宙に舞った。
そして、数十人の兵隊は一塊となり別の兵隊の上にたたきつけられる。
地面に叩きつけられた兵隊と、兵隊を叩きつけられた兵隊。
合わせて百人近くの兵隊が、実に効率よく座に帰っていった。

「う～～ん、いいね」

鎌瀬（かませ）　縫（ぬい）

出身　日本

種族　転生悪魔

Ｍ．Ｏ．Ｏ　昆虫型　オオミノガ

Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓランキング　２８位

「強い奴をいじめるのは楽しいなぁ」

暗殺者たちの戦場

さて、ここで一旦戦場から更に一歩下がったところから「全体」を見渡そう。

バーサーカー組は既に脱落。サーヴァントもマスターも既に脱落している。

戦果と言えば、バーサーカーを仕留めるのにアーチャーが思いのほか時間がかかり、

その攻撃方法が無数の武具の射出であると他４組が確認してしまったこと。

令呪は元より、魔力の消費もさしてない。状況は動いたが、無駄死にであると言っていい。

キャスター組は拠点を「変えて」全く同じ事を繰り返している。ただし、精力的且つ大規模で。

この時代、人間が消えることは「社会的」に大きく取り上げられるが、「統計的」には全くたいしたことはない。

キャスター組にとって、資源が枯渇するということはないのだ。

マスターは「芸術活動」に打ち込めないことで不満がたまっているようだが、サーヴァントの言う「大きな祭り」の準備とあって、それを楽しみにしているようだ。

アサシン組は戦力を整え、セイバー、ランサー、ライダーと交戦中。

現状、戦場は膠着しつつあり、つまりアサシンが有利である。

アサシン陣営にとって、この戦いは予想しえたとはいえ「不利益な戦闘」ではあっても、

他の３組にとっては望外の幸運を得た「千載一遇の機会」であった。

なにせ、アサシン陣営は１３騎の受肉済みサーヴァント。３組の足並みが奇跡的にそろっている今でなければ、勝利は不可能と言っていい。

アーチャー組はその激突を、宝具でもって観戦している。

ギルガメッシュにとって、彼等は「打ち倒すに足る」敵かどうか、見極めの対象だ。彼は絶対の裁定者。負けるなど思っていないし、事実

負けることはないだろう。
まあ、主である遠坂時臣が生き残れるのかどうかは定かではないが。

では、今度は「戦場」に一歩近づこう。

ライダーの最強宝具、規格外の固有結界「王の軍勢」により、地の利、数の劣勢は大きく覆った。
それに対し、アサシンの初手は距離をとってからの対軍宝具による広範囲攻撃。玉藻の前を使いつぶす事で、大きく敵を殺いだ。
これによって、軍勢は１０のうち3が削られる。固有結界の維持には半数が必要なため、残る7のうち2が更に削られれば、結界は解除。
数的劣勢は当然、神殿からのバックアップが復旧するため、３組はなんとしても残りが削られきる前に、
或いは維持の限界時間が来る前に敵を、特にキャスター、玉藻の前を討ち取らなければならない。
しかし、アサシンは戦力の半分以上を割いて玉藻の前とアサシンのマスター、岸波白野を保護している。
王の軍勢のほとんどがアサシンによって大きく足止めされ、迂回した部隊も余裕を持って迎撃されている。
アサシンの武装錬金サテライト３０による防衛線は薄く、しかし広く固く征服者を阻んでいる。
これを突破するには、軍勢ではなくセイバー、ランサー、ライダーの何れかが防衛線に穴をうがたなければならない。
しかし、セイバーはモードレッドと交戦中。ランサーとライダーは戦闘員3名からマスター2名を守らなければならない。
アサシン陣営にはまだネロという温存している戦力がある以上、大きくアサシン有利であろう。今のところは、だが。

サテライト３０は、体力の続く限り増殖を繰り返すことができる単純且つ強力な武装錬金である。

しかし、３０体の分身全てを単独の意識で操る以上、どうしても精度は落ちる、

単体であれば、避けることも受け止めることもたやすい投槍や弓矢も、この状況では認識することすら難しい。

現に、アサシンの分身の内一体を見ると体中に矢が刺さり、槍で体を貫かれている。

異形の拳士は、血反吐を吐きながらも接近し、そして軍勢を殲滅していく。

既に半分以上失われている視界の中で、轢殺してくる軍勢の一人一人を捕らえ、毒針を打ち込む。

しかし、敵も一人一人が勇者。性能が下がろうとも果敢に挑んでくる。

一人は剣で切りつけ、反撃で胸を穿たれる。

一人は腹部に穴を穿たれて尚、絶命するよりも先に剣で突き刺す。

一人は仲間が殺されている隙に切りつける。

一人は大きくよろめいている隙に槍で打つ。

一人は倒れたところに止めを刺す。

それで、ようやく、ようやく一人目が死ぬ。そして、次の瞬間には補充される。

王の軍勢はこの戦線においてほぼ無尽蔵。後から後から補充されていく。

しかし、アサシンの構築した防衛ラインの戦力も、アサシンの体力が尽きるまでなくなることはない。

大雀蜂の改造人間であるアサシンは、底知れぬスタミナを発揮し奮

戦していた。その姿は勇壮とは言いがたい。
自分の血と返り血で黒く汚れ、体中に突き刺さった剣や槍はその全てが致命傷である。
それでも尚眼光に熱はなく、ただ幽鬼のごとく異形の拳を放つ。その息の根が絶えるまで。
もしも、彼が生前ならば。もしも、アサシンでなければ。ここまで苦戦するなどありえない。
しかし、ここにいるのはアサシンだ。であれば、やるべきことなど決まっている。
千軍万馬が殺到し、百の槍が、剣が体を責めさいなもうと、一歩も下がらず殺し続ける。
どれだけ無様だろうと、どれだけ滑稽だろうと、どれだけ苦痛を受けようと。
自分のつたない采配を信じて戦う愛すべき部下と、守るべき陛下のために。男は立ち上がる。何度でも。
愚かだと言われてもかまわない。部下を見捨てる賢さなどいらない。
力技と言われてもかまわない。陛下を守れない弱さなどいらない。
また一人を座に送り返した。拳が、もう毒針どうこうではなく、敵兵の顔面を陥没させる。力なく倒れ、消えていく勇者達。
もしも、彼等が英霊でなく人間だったならば、ここには無数の屍が山を成していただろう。
それでも、敵も止まらない。殺しても減らない異形を相手に、むしろ戦意を燃やす。
そんな敵の濁流を、アサシンは身をもってせき止める。
守る、守る、守る。それは守る為の殺意。ここで一秒でも多く一人残らず足止めすること。それしか、手はない。

モードレッドとアーサー王の戦いは、まさしく熾烈を極めていた。

国の未来を守る為、自分の存在を守る為、互いをなんとしても抹殺しなければならないという使命感。

それは清聴さなど欠片もない、ひたすらに真っ直ぐで鋭い、今にも折れてしまいそうな危うさに満ちた戦い。

敵陣真っ只中にあって、モードレッドの魔力放出、赤い雷は軍勢を焼き、アーサー王の魔力放出は軍勢を吹き飛ばしていく。

筋力、耐久、敏捷。そのほとんどが高レベルの両セイバーの戦いは、戦最中にあってランサー、ライダーを魅了するものだった。

恐ろしいことに、互いが戦力で相手を殺そうとしているのにもかかわらず、両者は傷一つない。

互いの持つ直感が、互いの体を守っていた。しかし、それも一体いつまで続くことか。

聖剣と邪剣の衝突する音はもはや音楽と化して響き渡っていた。

互いの手の内を知り尽くしている円卓の騎士達の戦いは、どこまでも続くようだった。

しかし、ランサーとライダーはそれに見ほれている場合ではない。

輝く槍を構え、一心にランサーとライダーのマスターの命を奪わんとする3体の戦闘員。

彼等は戦場にあってアサシンであることを貫き続けていた。

軍勢に紛れ姿を隠し、機を見てはその軍勢を吹き飛ばしながら突撃を繰り返している。

時間差、連携、包囲。手管の限りを尽くして、アサシンの宝具としての任を果たさんとしてくる。

粗野な言動とは裏腹に、正規のランサーをして捉えさせない。敏捷性と隠密性を高いレベルで備えている。

ライダーがその戦車の真名開放をもってすれば焼き尽くすなどたやすいが、魔力が足りないし、何よりも自軍が被害をこうむる。征服王には到底取れない作戦だった。

つくづく、良い兵だと思わせる。

アサシンが、まさか生前こいつ等だけを従えていたとは思わない。

ランサーもライダーも、彼を嘗ては武将として数多の将兵を率いていたと確信している。
そうでなければ、ここまで落ち着きはらって作戦など構築できない。大軍の圧力に屈していたはずだ。
しかし、おそらく率いた将兵の中でもこいつ等こそ最も信じていたに違いない。
たったの三騎で敵陣中央に切り込み大将と一番槍を押さえ込むなど、できることではないだろう。少数の利を見事に生かしている。
騎士としてのそれではなく、兵士としての性能の高さ。それは、疑いようのないものだった。

それは、陣地防御においても見事に生かされていた。
蟻の兵士が大剣にクロカタゾウムシの兵士を乗せて、ぶん回す。蟻の膂力に任せた即席の投石器だった。
弾丸として発射されたクロカタゾウムシは、砲弾の如き威力を持って敵陣を食い荒らす。
隊列は真正面から切り裂かれ、その足並みは一時とはいえ止まってしまった。
そこからはもうどうにもなるものではない。クロカタゾウムシの体に着いていた糸を用いて、蟻は更に大剣を振り回した。
さながらフレイルのように、数百メートルの長さの糸で、半径数百メートルに黒い弾丸が軌跡を描く。見事なことに、それは同じ戦場で戦うエリザベートにストレスを与えないように軌道を一々修正している。
アサシンの本陣に肉薄した迂回部隊は、横殴りの鉄球攻撃に近づくことさえままならない。
しかし、弓矢や投槍も無意味だ。六本の鎌を持つ蟷螂が力尽きた狐と未熟な王に張り付いて、雨のような攻撃を竜巻のようにはじき返す。

元より、質で大きく劣っていることは知っている。だからこそ量で圧倒しなければならないと言うのに、大きく迂回せざるを得ない軍勢はどうしてもその数量が足りない。

ふと前線の指揮官が後ろを振り返れば、未だに防衛線を突破できない本部隊が見える。

いっそ、あの防衛線を挟撃するべきだろうか、とすら考えてしまう。

だが、時間が足りない。固有結界はもうその維持できる時間の半分以上を使ってしまった。

あの防衛線を破壊できたとして、そのあと敵本陣を突破する時間があるのだろうか。

そう思案していた矢先、指揮官の首が落ちた。チャクラムである。音もなく首を落としたのは、やはり敵陣にまぎれたオオミノガの戦闘員。

全員が勇者であるにしても、指揮系統は存在し、それらは絶えず兵達に指示を送っている。そんな指揮官を殺せば、どうしようもなく部隊の動きは鈍くなってしまう。

派手に暴れる味方がいれば、それに乗じて敵の指揮官を一人一人掻っ捌いていくのもたやすくなる。これもまた、連携である。

また、別のところでも指揮官が馬ごと殺された。穿ったのは、槍のような先端を持つ鉄鞭。

砂地から突如として突き上げてくるそれは、馬体の真下から、馬ごと騎手を貫いた。

「へへへへへへ。指揮官の首十人目」

これも、またアサシンの手駒。

形勢は明らかにアサシンに有利である。あくまでも、現時点では。

座庫（ざこ）　吉良（きら）

出身　日本

種族　転生悪魔
Ｍ．Ｏ．Ｏ　昆虫型　ゲンゴロウ
Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓランキング　３２位

「た～の～～し～～～～な～～～～～～～」

魔術師たちの戦場

私は、戦場の只中にいる。

今まで、アサシンと駆け抜けてきた薄暗い、互いに潜みあう戦いとは違う。これは、凄まじい熱量を帯びていた。

これは、熱狂だ。冷静なのはアサシンぐらいなものだろう。パスを通じて伝わってくる彼の感情は、

相変わらず冷静そのものだ。

しかし、それ以外は熱狂だ。隣でただ待機しているだけのネロも、その表情から熱が見える。

だがそれも分かる。これは、ただ見ているだけでも我を忘れそうだ。

こちらの軍勢は精強無比。如何に原始的な武器で武装しようとも、異形の兵士は歯牙にもかけない。

しかし、敵もさるもの。恐れることなく立ち向かい、こちらの本陣を食い破らんとしてくる。

その咆哮は、聞いているだけでも死んでしまいそうだ。彼等にあるのは意思だ。そこに憎悪も憤怒も無い。

ただ、「一生懸命」殺そうと頑張っているだけだ。断言できる。彼等とは話が合わない。

アサシンは以前言っていた。

英霊は、どんなに善良でも肝心なところで話が合わない。

アサシンは、生前様々な思想や立場にある人と話をしてきたらしい。

そして、彼等には彼等の営みがあり、思惑があり、信念があり、そして、譲れないものがあるという。

彼等にとって、それは征服王に従うことなんだろう。アサシンの宝具と同様に。

だから彼等は恐れない。勇敢に戦って勇敢に死ぬ。それが彼等の

価値観だから。

しかしだとしたら、現代に生まれてなお古代の戦士と同じ価値観をもつ戦闘員たちは、まさしく「異物」ではないだろうか。

とはいえ、彼等はとても楽しそうだ。

「バッター振りました！かきーん！ボーリングのピンみたいにストラーイク！外野の命がアウト！
大量得点をゲットだぜーー！」

「脳漿を、腸を、汚物を、血液を、魂魄を！色々もろともぶちまけろー！

この綺麗な砂漠の戦場を、屠殺場、集団墓地にワープ進化させてやる！」

「鉄塊玉！塊魂！ロードローラーだ！タンクローリーだ！
蟲につぶされる気分はどうだ？人間様よぉ～～！」

「絶望しろとは言わないぜ？恐怖しろとも言わないぜ？理解しろとも言わないぜ？
死んだことにも気づかずに無様な屍を晒せよおらーー！」

「緊縛されて放置されて、ねえどんな気持ち？今どんな気持ち？
仲間がばたばた死んでいくのに、自分たちは元気で身動きできないのってどんな気持ち？」

水を得た魚のように、暗殺者たちは軍勢をはじき返していく。
アサシンが軍人であるように、彼等もまた暗殺者上がりの軍人だ。
本来暗殺者は、こんな晴天の下で真正面から戦うなどありえないだろうに、
彼等は恐れることなく処理していく。
現に、待機を命じられているネロはもちろん、エリザベートもほとんどすることが無い。
たったの5人で、私たちを投槍や矢からガードしつつ、無数の軍勢

を寄せ付けない。
筋力や耐久も高いが、彼等の最たるところは精密動作性と連携、経験だ。
常に敵と味方の位置を把握し、最適な攻撃を繰り出し「続ける」。

「うっわー。これは酷い。
確かに、悔しいですけどこいつ等マジニュータイプ。
いざとなったら無理にでも戦うつもりでしたが、そんな必要ありませんね。
まるで一つの思考でつながってるみたいでキモい」

引いているのは、私の隣にいる玉藻の前だ。彼等の緻密な連携に、呆れつつも安心しているようだ。
彼女は、宝具を長時間使用し疲労の色が濃い。無理せずに休んで欲しいものだ。

「うむ、あれは優秀なバックダンサーであるな。
躾の行き届いた狂犬とは・・・。
奏者はつくづく人を使うのがうまい」

熱を帯びた視線で戦場を見守りつつ、戦闘員を批評するネロ。
彼女はあくまでも正規のサーヴァントに対するカウンターだ。それまでは出番がない。

「まったく、少しは盛り上げて欲しいわね。
主役は私なのよ！少しはまわしなさい！」

そんな二人と違って、本陣の防御を任されているエリザベートは不満げだ。
無理も無いだろう。彼女は自分こそ最大戦力と思っているにもかかわらず、今のところ尾の一振り、槍の一振りで仕事が片付いてしま

うのだから。

「・・・随分気楽に捉えていますけど、アナタ、ここからが本番ですよ？」

「あら、どういうこと？楽勝じゃない。

敵はまさしく有象無象。あんな犬でも薙ぎ払えてる。セイバーも息子を倒せない。

ランサーとライダーも足手まといを守って動けない。

軍勢のほとんどをマネージャーが抑えていることもあって、このまま時間切れになるんじゃない？

そうなればアナタは神殿の魔力を受けて復活。そのまま他の面々も魔力供給を受けて復活。

向こうは疲れて動けない。楽な戦いじゃない」

「そこまで分かっているのならば、もう一歩思考を進めるべきだな、竜の娘よ」

楽観的なエリザベートに対し、ネロと玉藻は苦言を呈する。

どうやら、彼女たちはそう簡単にいかないと思っているようだ。

「そなたの予想は「正しい」。余もこのままいけばそうなると踏んでおる。

だが、向こうがそれに気づいていないとでも？」

「でも、もう手詰まりでしょ。向こうは気づいていても何もできない。無様よね」

「はあ、これだから経験の足りない小娘は。

いいですか、忘れているかもしれませんが我々の敵は征服王イスカンダルだけではありません。

騎士王アーサー、名も知れぬランサー。そして・・・。

マスターとしては魔力タンクとして以外の何の価値もない岸波様とは違う、

正当なる魔術師が二人もいるのです。まあ、片方は半人前でした

が・・・。
少なくとも、このまま指をくわえてみていることは無いでしょうね」

なんだか、ディスられたような・・・。
待てよ。魔力タンクとしての役割があるというのなら、それを全うするべきではなかろうか。
さすがに13人全員を支えるのは無理があるとしても、玉藻を戦線に復帰させるぐらいは・・・。

「それはなりません」

玉藻が、それを先に止めた。

「アナタには何の指示もありませんでした。
おそらく、主であるアナタに指示をするべきでないというご主人様の考え方でしょう。
ですが、それを差し引いてもアナタは何かをするべきではありません。
アナタの豊富な魔力は、最後の切り札なのですから」

なにもできないもどかしさを感じつつ、砂漠の戦場の先を見る。
そこでは、アサシンが孤軍奮闘している。一体どうやっているのかは分からないが、見事に足止めしている。
だが、彼は今でも全体の指揮官なのだ。だとすれば、私にも指示があるのかも知れない。

「死ねやおら！」

「どうした、御者台から降りてかかって来いよ！」
「魔術師サマカッコイー！」

「ランサーよ、こやつ等もなかなかの槍働きであるな！」
「ぬかせ、征服王！このランサー遅れはとらぬ！」

２対３の戦い。英雄と反英雄とはいえ、まさしく数の優位そのままの戦いとなっていた。
なにせ、相手はアサシン。性能が劣化した軍勢では気配遮断した彼等に気づくことさえできない。
その利を生かして、３騎は軍勢にまぎれてのヒットアンドアウェイを繰り返している。
また、ライダーも味方に囲まれた状況では戦車を動かすことができない。
愛馬にまたがればまた話は別だが、そうなるとマスター二人を守れない。
この一秒は血の一滴。確かにこの局面において王の軍勢は確かに枷であるが、これが解除されれば全てが逆転する。
そこに待つのは敗北だ。
ライダーもランサーも、うつべき手が無い。しかし、同時に窮地に追い込まれていることを楽しんでもいた。
もとより、二人はほぼ万全だった。聖杯戦争が始まってから、静観を決め込んでいた二人は全く消耗が無い。
なんとも奇縁なことに、本来敵である３組が手を組み、磐石の布陣。
しかし、ただ「敵がもっと強い」というだけで不利な状況に追い込まれている。まさに、戦場である。
ライダーにしろランサーにせよ、戦争に呼ばれたからには敵が雑魚ではつまらない。
戦車で右から左へ走っただけで死ぬ敵など、槍を２度３度振って死ぬ相手など、首級をあげるに足らず槍の誉れにならぬ。
然るに見よ、この戦場を。彼等の首は、まさしく己が戦歴を彩るに

余りある。
まさか、暗殺者がここまで楽しませてくれるとは思っていなかった。二人の男は、戦士として獰猛な笑みを浮かべていた。
ふと、ケイネスは自分が醜態を晒していることに気づいた。
隣にいるのは事もあろうに自分から聖遺物を掠め取った身の程知らずの生徒。
彼は、狭い御者台の中で床にへばりつき腰を抜かしている。では、自分は？
時計塔の講師であり、天才の名を欲しいままにしてきた自分は？
アーチボルト家9代目当主である自分は？
同じようにへたり込んでいるではないか。こんなことは許せるはずも無い。
もちろん、ここで御者台から降りるなどありえない。勇敢に戦って勝つなど想像もできない。
自分が如何に優れた魔術師であろうと、サーヴァントを相手になにかできるわけも無い。
では、何ができる。考えろ、そして証明するのだ。己の優秀さを。
少なくとも、隣でへたり込んでいる身の程知らずとは違うのだということを！
そして、優秀な彼はまさしく英雄と同じ結論に至った。
自分には、魔術師には魔力供給しかできない。であれば、魔力を供給するまでだ。
ただし、ランサーではなく征服王に！
「ウェイバー・ベルベット！」
「は、はい！」
強い口調で正気に返ったのか、恐慌に陥っていたウェイバーは慌てて体勢を整える。

そのウェイバーに、ブローチ型の礼装を渡した。
それは、キャスターがランサーとのパスを遮断してきたときのための保険と言えるものだった。

「それは簡易で即席だが君と私にパスをつなぐものだ。
君を経由して征服王に魔力を供給する！」
「ほう？」

その言葉に、嬉しそうに笑ったのはライダーだ。
なるほど、なにをするにもまずメシである。この場合は魔力だ。
魔力があれば戦車の真名開放はできないが、飛行させることはたやすい。
そうなれば、相手も軍勢に隠れることはできず、空中へ追撃するしかない。なによりも、ランサーの手が空く。

「しかし、今の余はまさに魔力に餓えておる。枯渇するやも知れんぞ？」
「私をなめるな！貴様程度の使い魔に魔力を供給するぐらいで干上がるものか！」
「結構！」

もたもたと、ウェイバーがそのブローチを身につける。
すると、ウェイバーを経由して征服王に、質、量共に一流と呼ぶに足る魔力が供給される。
ケイネスは大きく脱力し、経由するウェイバーも体が熱を帯びた。
だが、もとよりケイネスは一流の魔術師。加えて、ランサーに魔力を供給しているわけでもないので十分な魔力をいきわたらせることができた。

（この場にいないソラウも、ランサーに魔力を供給する形で戦っている。

私が何もせずに怯えていられるものか！）

そのころ、ホテルで愛する人の帰りを待つソラウはランサーの奮戦を支えるために魔力をガンガン吸われていた。

なるほど、彼女も戦っていたのだ。

「ディルムッド・・・ハァハァ」

彼女は、愛する人を支えていることを実感しとても興奮していた。

愛する人とは、もちろんケイネスである！（断言）

まさかランサーなわけがあるまい！魅惑の黒子に陥落するような一般人ではないのだ！

「ランサーよ！征服王が飛び次第本陣に切り込め！」

「ああ、まて。供給はありがたいが戦場に口をはさむでない。

いや・・・、うむ。ランサーよ、その途中に敵の防衛線がある。

そこを食い破ってくれんか。そうすれば足止めを喰らっている余の兵も動けよう」

「ああ、もう！ランサーよ！言われたとおりにせよ！」

その任務は、まさしくランサーにとって望外の幸福だった。

敵の防衛線を破り本陣に切り込む。おお、これほどの武者働きはそうあるまい。

武者震いに震える腕を抑えて、ランサーは短く答えた。

「御意！」

戦車が雷鳴と共に浮き上がると同時に、ランサーは友軍の中を疾風のように駆けて行く。

ああ、まるでいつかのようだ。今ならば断言できる。この戦は生前を含めても至上のものであると。

ゆえに、勝たなければならない！
それ自体が対軍宝具である戦車と違い、ランサーは技能として非常にすばやい。
友軍の海を傷つけずに駆け抜けるなどたやすいだろう。
そして、その先にいたのは分裂しているアサシンだった。

「その首、もらった！」

一軍の将が最前線で防衛線を引いていたことに感嘆し、分裂していることに驚嘆しつつも、
ランサーの雷光の如き槍捌きで一息に１０人のアサシンが破壊される。
もとより、単体の性能ではランサーが上であり、加えて分裂していることで反応が鈍い。
花を摘むようにたやすく倒せるが、しかし分裂により数は補充される。
それはたしかに対人宝具しか持たないランサーにとって、宝具の封印を抜きにしても脅威と呼べる能力だ。
だが、今は関係ない。どれほど頑丈であろうと一旦決壊した壁は、濁流の前には無力だ。

「さあ、征服王の勇者達よ！道は開かれたぞ！」

歓声とともに、軍勢は防衛線を突破していく。
その中でもアサシンは数を減らすことに尽力しているが、勢いを止めることはもうできない。
また、それに付き合うランサーでもない。その健脚で軍勢の先頭を行き、本陣に切り込んでいく。

「我こそはケイネス・エルメロイの騎士ランサー！
手合わせ願おう！」

防衛線を抜けた先には、もう砂の大地と敵の本陣しかない。
まさしく無人の野を行く軍勢を、誰もとめることはできない。
だが、ランサーを止めるための駒を、アサシンは最初から温存していた。

「良くぞきたな、ランサーよ！
その方はまさしく余が討つに足る騎士である！」

最速の英霊たるランサーに負けぬ速力で本陣から飛び出してきたのは薔薇の皇帝であった。
おお、敵陣を破り軍勢の先頭を行き、この上一騎打ちまでできるとは！
ランサーは思わず笑いそうになりながら二槍を振るった。異形の大剣と火花を散らす。

「ローマの暴君よ、その首貰い受ける！」
「どうかな、余はしぶといぞ！」

高速の弾丸同士が正面衝突したような轟音の後、軍勢の前からランサーとネロは姿を消した。
そのことに不審を抱きながらも、軍勢はその進軍を止めない。もはや、本陣はすぐそこだ。
先ほどまでとは比べ物にならない兵数が、あっという間にアサシンの陣営を包囲していく。
いや、包囲が成立しているということは、やはり敵兵の守りが堅いということであろう。
ともあれ、既に包囲は完了した。あとは押しつぶすまでである。

「く、ランサーはネロの固有結界に隔離されたらしい・・・。敵を弱体化させる黄金劇場・・・。暴君らしい単純でいやらしい能力だ。

それにしても、お前にしろネロにせよ、魔術師でもないくせにポンポンと固有結界を使いおって・・・」

「そういうな、ランサーのマスターよ。奴はそう簡単に討ち取られはすまい。

それに、すでに防衛線は食い破られた。ここから押し返すぞ！」

「待てやおら！」

「逃げんじゃねー！」

「道交法違反だぜ！」

「て、おい！

ライダー、あいつ等追いかけてきたぞ！」

「飛べるのは知っていただろうが。

それに、ライダーである余と空で戦おうなど・・・。

思い知らせてくれようぞ！」

劣勢だった戦局は、ケイネスの一手で大きく覆った。

魔力が供給されたことでライダーは固有結界を維持しながらも戦車での飛行が可能となり、

さえぎるものの無い空でアサシン3騎の相手をするだけでよくなった。

ランサーはネロに押さえられたが、裏を返せばアサシン陣営も予備兵力を使い切ったことになる。

明らかに、アサシンは不利だった。このままでは。

「思ったよりも早かったな」

空で高機動戦に興じている自分の部下を仰ぎ見て、アサシンは敵がマスターの防御をライダー一人に任せたことを悟った。

また、ランサーはネロが隔離した以上ネロを倒すまで出られない。

つまり、想定内である。

「いや、己の防御を攻撃に割くなど早々できることではない。

それを思えば、相手も愚鈍ではないと言うことか」

自分を素通りせんとする敵兵をできる限り殺しつつ、分裂しているアサシンは状況を冷静に確認していた。

いや、適切に言うのであれば機を待っていた。アサシンには、ここから打てる手が一つだけ存在する。

それは、タイミングが全てだ。そのタイミングを逃しては致命傷になりかねない。

「そのタイミングはエリザベートが教えてくれる。

あとは・・・、勝つだけだ」

アサシン、兵藤一誠は決して頭脳明晰ではない。

彼の司令官としての長所は、本来組織になじまない相手を組織につなぎとめる猛獣使いの如き能力である。

当然、その戦術や戦略は軍略に長けたライダー、イスカンダルに及ぶものではない。

だが、それはあくまでも対人戦に限定される。

イスカンダルは所詮史実の英雄。アサシンが戦ってきた敵のバリエーションからすれば拭いて飛ぶような狭い見識だ。

怪物と戦ったことのないものに、アサシンの次の一手を見破れる道理は無かった。

武将たちの戦場

絢爛豪華。その一言がふさわしい贅を尽くした劇場。
ネロ・クラウディスの宝具。固有結界とは似て非なる大魔術、「招き蕩う黄金劇場」。
その効果は自分の許可したもの以外の弱体化。そして、結界であるが故の拘束である。
もはやランサーは、この弱体化する空間内でネロを倒すか、或いは時間内を凌がなければならない。
しかも、相手は受肉した反英雄。先ほどまでアサシンの部下と交戦していたランサーにしてみれば、
この上なく不利であるといえる。
しかし、だからこそ心躍る。アサシンが自分を足止めするために、あるいは仕留めるために温存していた最後の一騎。
これを突破すれば本陣に槍が届く。
二槍を握る手に力が入ろうものだ。

「かように華やかな場は俺には馴染みがない。
先ほどの砂塵が舞う戦場のほうがまだ似合いだ。
だが、貴様には酷く似合う。その舞踏服は、この劇場で舞うためか、皇帝よ」
「如何にも、世の芸術的な肉体を彩るにふさわしい服であろう。
そして、そなたはここで余に打ち倒されるに足る敵役である！」

意気高揚する両名。共に、絶世の美形である。
槍兵の魔貌は黒子を抜きにして尚女を虜にするであろうし、
皇帝の艶姿は確かに天上の芸術であった。
これより、凄惨なる決闘をするとも思えないほど、二人は互いをたたえる。
しかし、ランサーはひたすらに笑っている。
なぜならば、既に自分は役目の多くを済ませたのだから。

「既に軍勢は防衛線を突破した。俺一人をこうして封じたところで意味は無い。
征服王の軍勢が、そちらの本陣を食い破っているだろうよ」
「ふむ、確かに」
それは事実だ。ネロも軍の最高司令官であった身、突破された防衛線の脆さなど熟知している。
『王の軍勢』の維持にも限界はあるだろうが、本陣がそれまで持つとも思えない。
なるほど、ランサーを押さえたところで無意味だ。
だが、それでも尚皇帝は余裕を崩さない。なぜなら、彼女もまた信じていることがあるからだ。
「その方は余の奏者を知らぬ。
奏者はな、真面目に見えて意外と意地悪なのだ」
「ほう？」
「余がせっかく召喚権を与えたというのに、つい先日まで召喚しなかったり、
余が目覚めのキスをする権利を与えたというのに袖にしたり。
極めつけは逆転の秘策を持ちながら黙っていることだ。
あれはな、無骨に見えて劇の盛り上げ方を知っている男よ」
彼女はアサシンの多くを知らない。彼が語らず、ネロも尋ねなかったからだ。
しかし、それでも月の聖杯戦争を潜り抜けた主従である。信頼は既にしている。
防衛線とは突破されるものであり、相手は思惑通りに動かないものである。
そんな常識を、あの兵藤一誠が知らないわけはない。であれば、この状況も想定してしかるべきであろう。

であれば、手は打てるはずだ。観客を沸かせるような一手を。

「己が主を信じるか。暴君よ、やはり貴様もサーヴァントなのだな」

「無論だ。余は奏者の剣である！」

「・・・そうでなくてはな」

暴君からも信頼されるとは、ますます持ってアサシンの器量が伺える。

そして、名のある敵を討つならばやはり一騎討ちが望ましい。

なるほど、ここはそれにふさわしい「舞台」であった。

「名乗りを上げられぬことを改めて呪う。

だが、勝利の祝福は我が主にささげよう！」

「くくく、喝采に包まれるのはどちらか、確かめようではないか。

美貌の槍兵よ！」

「くははは！振り落とされるなよ！」

魔力は満ちている、とは言えない。すでに固有結界を展開して１０分以上が経過している。

しかし征服王には一流の魔術師からの供給により戦闘が可能なレベルにまで魔力は足りている。

騎兵の名に恥じぬ戦車の速度で持って、戦場の空を駆けていた。

その後ろを追うのは、アサシンの部下三騎。

異形の身体能力、空中を跳躍する月歩と、槍の持つ推進力。それらをオーラで強化して、追いすがる。

既に、アサシンの最大の武器である隠密性は生かせない。

保身を考えるのであれば、軍勢にまぎれ続けるべきだった。

だが、それでもライダーを追うのは、彼等がそう命じられているか

らだろう。
命令に忠実、実に結構。
あれを育て上げたアサシンの器は、既に明らかだ。
令呪という便利きわまる代物に頼ることなく、宝具と言う強力きわまる兵器におごることなく、
この大軍勢と四つに組んでの力比べ。
果たして、ランサーやセイバーの助力が無ければ、どうなっていただろうか。
今頃は王の血に汚れた剣の赤雷か、民の血に汚れた竜の咆哮によって、果てていただろう。
が、望外の幸運によっていま自分は生かされている。天啓ではないだろうか。
この地に集結した英雄、反英雄。その全てを率いて世界に挑む。胸躍る。
アーサー王とモードレッドの確執も、自分とアサシンならば埋められる。
そして、今度こそ世界の果てを・・・。
はやる気持ちを抑え、ライダーは追いつきつつある三騎を見た。
既に、槍の光は眩いほどに輝き、こちらを攻撃しようとしている。

「見るがいい、坊主！そしてランサーのマスターよ！」

片手で剣を、もう片方の手で手綱を握り、ライダーは手を広げた。
促されるままに、必死になって御者台にしがみついている師弟は恐る恐る周囲を見渡した。

「これが、王の視界である！」

それは、空からの視界。戦場の全体像だった。
勇壮なる軍勢が突き進む様であり、親子の苛烈なる剣戟であり、醜悪な怪人の殺戮の様であった。

しかし、なんだろうか。この余りにも原始的な興奮は。魔術師である自分たちには決して得られないものが、視界を埋め尽くしていた。腹のそこに、なんともいえない力がみなぎっていく。

「さあて、さっきまでの余とは一味違うぞ？
この首、簡単に取れると思うな！」

「「イイヤッホー！」」

側面、上方、下方。空中ゆえの三方向からの同時攻撃。
それを、ライダーは巧みな手綱捌きでかわしていく。
牛二頭引きの戦車は、雷鳴をとどろかせつつ戦場の空を切り裂いていった。

「ああ、もう！」

アサシンがエリザベートを拠点防衛に回したのは、間違っていないと、今更私は思った。
と言うのも、エリザベートの攻撃は一つ一つが強力で、しかも大振りだ。
今回のように、敵が多くてそんなに強くないのなら、彼女の怪獣のような戦い方は非常に有効だ。
とはいえ、さすがに量が多すぎる。アサシンの部下も頑張っているが、槍や矢はもはや雨のように降り注ぎ、軍勢は視界を埋め尽くして

いる。
今のところ私は傷を受けていないが、時間の問題のように思える。
「大サービスよ！」
エリザベートは尻尾を横なぎにフルスイングし、迫り来る騎馬隊を吹き飛ばした。
その威力は正規のサーヴァントでない軍勢には致命傷であり、一人一人が宙で光となって消えていく。
だが、それだけだ。一撃で１０体以上葬っても、わんさかとやってくる。
その分、向こうもこちらに対軍宝具を使ってくる可能性は無いのだが・・・。
「ファザコンもお父さんと遊んでいますし・・・。
エロ皇帝もスケコマシと交戦中。小娘もあてにならない・・・。
はてさて、どうやってひっくりかえすつもりなんでしょうか」
玉藻は、こちら側の劣勢を認めていた。その上で敗北を意識していない。
どういうことだろうか。彼女は何を信じているのだろうか。
「決まっているじゃありませんか、ご主人様ですよ。
不愉快ですけど、ここにいるのは皆ご主人様を信じ慕うもの。
もちろん私が一番ですが、その采配を疑うものは居りません。
ならばこそ、ここからどうやって逆転するのか。それを図りかねているのです」
・・・。
確かに、自分も勝利を疑っていない。アサシンは必ず勝つ。
では一体どうやって・・・。

少なくとも、このまま時間を稼いで軍勢を凌ぎきらせるとは思えない。
そんな、不確か極まりない作戦を彼は取らないはずだ。

「面倒くさいわね！吹き飛ばす！」

エリザベートが、砂の大地に槍を突き立てた。同時に背後から彼女の居城が出現する。
彼女の宝具、それは対人宝具でありながら大量の敵を吹き飛ばす竜の咆哮。
彼女の異名と同じその宝具は・・・。

「鮮血魔嬢（バートリ・エルジェーベト）！」

彼女自身の咆哮と、拡声器となった城から放たれる超音波のドラゴンブレス。
その直線方向に存在した、こちらへ向かってくる軍勢の多くが吹き飛んだ。
一旦、一旦だが敵の攻撃が大幅に減った。しかし、キャスターの手助けなしで、そう何度も使える代物ではない。
戦闘の消耗を考えれば、使えてあと1度が限度だろう。
そんなときだった。アサシンの声が戦場に響き渡ったのは。

エリザベートの宝具、竜の咆哮が戦場を貫いた。これだ、この時を待っていた。
音は、単純にして強力な武器だ。それは訓練された兵士をしてただの無力な人間に引き摺り下ろす。
それが、人類悪である反英雄、幻想種の頂点である竜の咆哮であれ

ば尚のことだ。
それは、一旦だが士気を著しく下げる。軍勢が訓練され場数を踏んでいるほどに復帰は早いだろう。
だが、それだけだ。戦術とは畳み掛けるもの。ここで勝負をかける。士気を取り戻す時間など与えるものか。

「戦闘員８名に告げる！」

声を強化して、戦場に声を届かせる。味方に伝えるだけなら念話ですむが、これはただ伝えるだけでは足りない。
全軍に、それこそ敵にも教えてやら無ければならない。これから起こる出来事を。

「「「「「「「「応！」」」」」」」」

上空の三騎、本陣の五騎が負けじと戦場に響く大声で応えてくれる。
さすがに、こっちの意図はわかっているようだ。
そう、必要なのはこちらの士気を上げること、そしてそれ以上に相手の士気を下げること。
それには、大声が一番適任だ。なんといっても分かりやすい。
そして、令呪に限らず命令とは単純なほど意味を持つ！

「死力を尽くせ！」

「「「「「「「「おおおおおおおお！」」」」」」」」

おれの周囲の軍勢も、これから起こることに身構える。
だが、無意味だ。もう遅い。
イスカンダルよ、お前は死を覚悟した人間の恐ろしさを知っているだろう。

だが、これは知るまい。死を覚悟した『怪物』の恐ろしさを！
おれはためらうことなく、自身の首筋に注射をつきたてる。
変身をしているにもかかわらず、連続での注射は体への負担が大きい。
だが、だからこそここで一気に勝負をかける！傾いた天秤を、そのまま更に傾けるために！
３０いるおれの分身。その全てがオーバードラッグによって血を吐きながら、周囲の敵軍に襲い掛かっていく。
これは防衛のためではない。一人残らず殲滅する戦いだ。
征服王よ教えてやろう。たとえ万策尽き果てようとも、怪物はいつだって力技で戦場をひっくり返すのだ！

誰よりも事態を早く理解したのは当然イスカンダルだった。普段見せている余裕の一切を失い叫ぶ。それほどまでに自体は単純で、深刻だった。

「剛に出たか！」

余りにも単純きわまる号令。士気を上げる為の激。将の基本といっていい代物。
しかし、それはアサシンの生前からの部下に絶対命令権たる令呪の如き効果を発揮させた。
それまで、やや劣勢だったアサシンの本陣。それが上から見ても明らかなほど周囲の自軍を食い破っていく。
包囲していたはずが、内側からずたずたに引き裂かれていく。
中には敗走、とまでは言わないまでも一旦距離をとるものまで現れだした。
それは現場指揮官の無能が原因ではない。兵一人一人の足並みが

乱れに乱れ、体勢を整える必要があったのだ。
しかし、そこをアサシンの部下は切り裂いていく。体勢を整えるよりはやく、その部隊を壊乱させていった。
その以前から既に現場の指揮官は既に多くが討たれていた。
その混乱も、兵一人一人が英雄であるが故になんとか表に出ることは無かった。
しかし一旦劣勢になれば、それはどうしようもなく露出する。
恐怖に負けるもの。自棄になって突き進むもの。指示が来ずに混乱するもの。余りにもバラバラだ。
部隊内、各部隊間。とにかく軍隊内の秩序を取り戻さなければならない。
そしてそれをするのは指揮官である己の役目。号令一つでひっくり返された戦場を、もう一度ひっくり返す。
自分が激を飛ばせばそれは必ず勇者たちに伝わる。
元より、彼等は大海魔であろうと恐れぬ伝説の英雄たち。イスカンダルが彼等を奮い立たせれば必ずや敵に負けぬ士気を取り戻すであろう。
だが、既に放たれていたアサシンの部下が、それを許さない。
そう、既にアサシンは彼等に指示をしていたのだ。だからこそ、単純な命令だけでよい。

「でやりゃあああああああああああ！」

対軍宝具神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）を牽引する飛蹄雷牛（ゴッド・ブル）。ゼウスの雷光に包まれた神獣に、戦闘員の内一人があろうことか組み付いて槍を突き立てていた。
その肉体は外側から神の雷に焼かれ、内側から薬の負荷に蝕まれ、肉体を炭化させ血を吐きながら、それでも尚狂笑する戦闘員。
この一瞬、ただ一瞬を稼ぐために、己の受肉した体を対軍宝具に組み付かせる彼はまさしく死兵となっていた。
飛蹄雷牛の悲鳴と共に、神威の車輪は大いに揺れた。

まともに飛ぶことなどできず、ライダーの騎乗スキルを持ってしても御し得ない。

魔力を抜かれて虚脱しつつあったケイネスとウェイバーは、イスカンダルの脚に必死になってしがみつく。

そんな不安定な兵器に、他の戦闘員二人も組み付いていく。彼等もまた、雷に焼かれ血を吐きながら笑っている。

ここで、イスカンダルは自分が、自軍が死地にいることを思い知らされた。

「おのれ、アサシン！

余に王としての責務を果たさせぬつもりだな！」

イスカンダルの軍勢にはイスカンダルよりも強い者もいる。外交に長ける者もいる。軍略に理解のあるものもいる。

だが、全軍に号令を出せるのはイスカンダルだけだ。アサシンの部下は、文字通り体を張ってそのイスカンダルを押さえ込むつもりだ。

札月（ふだつき）　割（わる）

出身　日本

種族　転生悪魔

Ｍ・Ｏ・Ｏ　昆虫型　サバクトビバッタ

Ｍ・Ａ・Ｒ・Ｓランキング　２６位

「お前には、なにもさせねぇえええええええええ！」

怪物たちの戦場

連続での注射。肉体への負担と引き換えに〝最古の害虫〟が目を醒ます。

「あああああああああああああああああ！」

サバクトビバッタの翅が黒く延長し、その姿を孤独相から群生相へと相変異をしていく。

能力値としては、筋力と敏捷に補正がつく、その程度の代物であろう。ランクの低い怪力や、狂化に近いスキルと言える。

そう、その程度の代物なのだ。命を懸けて、自分の体を捨てても、その程度の恩恵しかえられない。

どう考えても、最序盤に行われた宝具の連続開放に比べれば、戦局を覆すには足りない。それだけでは、足りない。

ではどうやって補うか。もっと命を懸けるしかない。危険に身を晒すしかない。元より、あいては英雄。楽をして勝てる相手ではないのだから。

もっと的確に言うのであれば、より効果的に命を危険に晒すために、薬物を過剰摂取しているのである。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

戦闘員の肉体を神の雷が体を焼いていく。神獣の肉体はそれ自体が神秘の塊だ。

聖剣や呪槍ならばともかく、神秘の度合いが低い武装錬金では、オーラを纏わせていてもたいしたダメージにはならない。

このまま相撲をとり続ければ、間違いなく負けるのは戦闘員のほうだ。そして、それはそう先のことではない。

そんなことは分かっている。だが、それでもやる。この一秒、征服王を止めることができればそれは戦場全体に深刻な傾きを与えるだろう。

戦術的には、相手の指揮系統を乱すための本陣への突撃。しかし、そんなことは戦闘員には分からない。ただ、命じられるままに戦うだけだ。

どれだけの苦痛が心と魂をさいなもうと。たとえ、その先に死が待っていようとも。

それは、彼だけの覚悟ではない。彼と同じくライダーと彼の護衛しているマスターを討つよう命じられている二人の戦闘員も、薬を過剰に摂取して戦車に組み付いていく。

その表情は、やはり狂笑。自棄になっているでなく、強制されているでなく、死域にひたり歓喜している。

「ははははははははははははははははは！」

「ひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

もう、ここまで来ると褒めるしかない。一体彼等の中の何がここまでさせるのか。

彼等自身の素養として、元から『そう』なのだろう。人を殺すことに何のためらいも無い天性の殺人鬼。時代錯誤の社会不適合者。

尤も統計的にはそう珍しくも無い。男性で３～４％、女性で１％程度、全体で２％程が「生まれながらの殺し屋」と呼ばれる。

通常、訓練された兵隊でも人を殺せば罪悪感を憶えるが、彼等はむしろ殺人を楽しむことができると言う。

１００人の内二人という可能性が一つの小学校、中学校に偏り、結果として彼等は自然に出会い、友人となった。

中学卒業まで一緒に「遊び」楽しむ仲ではあったが、元々、そう粘着質でもない。卒業と同時に、彼等は別の高校に進学した。

進学先でも、同好の士を見つけることができると信じて疑わず。まあ、結果はお察しの通りである。

そこで、彼等はようやく自分たちが少数派であることに気づいた。

友人と一緒に騒ぐことを好む彼等は、その素行ゆえに決して高校では友人を作ることができず、必然、中学時代の８人と一緒にすごすようになっていった。

この輝かしい『現在』がいつか破綻することを知りながら、彼等は夜の街で暴力に酔っていた。・・・『艦長』に出会うまで。

アサシンにとって彼等は疑うことの無い信頼できる部下である。

同様に、戦闘員にとってアサシンは救世主であると言っていい。

自分たちの在りようは必ず社会から排除されると知りながら、しかし自分を変えることのできない彼等にとって、自分たちのあり方を肯定し、社会に組み込む組織を作ってくれる『艦長』は最高の上司だった。

そんな彼から、常に与えられるものがあった。最上の親愛と信頼である。

最古参ということもあるのだろう。彼は公私を問わず戦闘員８名こそ最も信頼している部下であると公言して憚らない。

『艦長』にとって唯一の部下であったバグズ時代。幹部や捜査員、構成員が参加したアネックス時代。ヴァーリ、ディオドラ、曹操とその部下と連合を組んだＭ．Ａ．Ｒ．Ｓ時代。三カ国からなる連合軍となった正規軍の時代。

その全てにおいて、アサシンは多くの有能で優秀で強力な部下を得続けた。だが、それでもアサシンは彼等を信頼し続けている。

世界最強の男に、世界で最も信頼されているということ。これほど誇らしいことは無いだろう。

本陣を守り続けている５人も同様だ。血を吐きながら、自滅への道を全速力で走っている。

如何に５人が奮闘したところで、軍勢のその全てを追い散らすことなどできはしない。

こちらが轟音と共に派手な技を繰り出し、敵兵を大きく蹴散らしているからこそ優勢に見えるが、しかしこの守勢がいつまでも続くわけが無い。

怪物が牙を向くのは、いつだって追い詰められているときだ。

これは、たとえるのなら体中に傷を負い、最後の力を振り絞っての大暴れ。死の危険は伴うが、ここを凌げば王の軍勢の勝利である。

その、凌ぐ時間を削がれていることに、彼等が気づくことができるのか。

暗殺者らしくも無く、アサシンは叫び続ける。その声が、気休め程度でも相手の勢いを削げると信じて。

「嵐脚！嵐脚！嵐脚！嵐脚！嵐脚！嵐脚！嵐脚！らん、きゃーく！」

アサシンは王の軍勢の濁流の真っ只中。突撃中の敵に包囲されるという最悪の事態である。しかし、裏を返せば弱兵を殲滅する機会を得たと言えよう。

今、この瞬間に限って言うのであれば、味方を守るにしても敵を押さえるにしても、必要なのは勢いである。

緻密な作戦でも、精密な連携でもない。ただ、自滅していくだけにしても、虚勢であっても、勢いがどうしても必要だった。

アサシンがサテライト３０により分身し、周囲の敵の数を、固有結界が維持できなくなるほど殺ぐ時間を稼ぐために。

戦闘員は、徹頭徹尾時間稼ぎのための要員だ。敵は、頭数こそこちらを圧倒しているが時間に制限があり、持久戦では受肉しているこちらが圧倒的に有利。

モードレッドとネロは強力な駒であろうセイバーとランサーを押さえるために。

エリザベートは、宝具を使う余裕を持たせるために戦闘員を同じくキャスターとマスターの護衛に。

そして、アサシンこそがオフェンスだ。王の軍勢を削り、敵の制限時間を直接減らすために、空が飛べるにもかかわらずあえて敵中で戦い続け、とにかく数を減らし続ける。

３０人が一度に嵐脚を軍勢の中から放てば、一人につき１０人は殺せる。つまり３００人だ。１０度繰り返せば３０００人、２０度繰り返せば６０００人、３０度繰り返せば９０００人だ。

精度も余力も一切度外視して、アサシンは自分の配下が命をとして稼いだ血の一秒を殲滅に注ぎ続ける。

本当に、本当にただそれだけの作戦。策と呼べない力技で、死地に

活路をこじ開ける。アサシンの得意技である。
味方の死体で城を作るが如き無策っぷり。この作戦で彼は守るべき国を守った。当然、多大な犠牲を伴って。
「生前からの部下を、死地に追いやってでも！」
散開し、より敵を求めて広がっていくアサシンの群。それは、蜜蜂の巣に飛び込んだオオスズメバチの如し。
体に矢が刺さろうと、槍で貫かれようと、剣が肉を裂こうと、倒れて消えようと、次の瞬間には補充される。
敵にとって、数で利するとはいえその恐怖は如何ばかりか。背を向けて逃げ出さないだけでも評価に値する。
「死後に得た部下に、負担を強い、強敵と対峙させようと！」
その表情に、普段のような優しさや寛容さはない。戦闘時に見せる無機質さも無い。今、必要とされている勢いを得るために、彼らしくも無く激情に染まっていた。
それが、敵を威圧するための演技なのか。或いは取り繕うことの無い素の怒りなのか。もしくは、自責の念から来る苛立ちによるものか。
誰にも分かりはしないだろう。アサシン自身にすら、分かりはしない。
「軍人の職務として守るものがある！
サーヴァントの役柄として守るべきものがある！
兵藤一誠の一個人として守りたいものがある！」
口から出る言葉は、敵を威圧するものではない。味方を鼓舞するものでもない。自分に言い聞かせるものだった。この戦いの見失ってはならない意義を。
死後に得た、守るべき主君。その願いと命を守る為に戦う。
理不尽な殺人鬼によって家族を失い、理不尽な魔術師の行いによって記憶すら失い、それでも尚他人のために戦える彼女に示さなければならない。
神滅具などというご大層な武器が無くても、聖杯などというご都合主義な代物に頼らなくても、令呪などという安全装置を使わなくて

も。
　アナタの味方であるワタシはその願いをかなえることができるのだと。
「ここは熱砂の戦場じゃない！
　お前たちの駆け抜けた戦場ではない！
　人の営みがある市街地に程近いおれ達の拠点だ！
　誰に断ってこの『世界』を塗りつぶしている。お前たちに・・・！」
　今を生きる、我が王の『未来』は渡さない！

「ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａｉｅ!!」
　負けられない。勝ちたい。男の原始的感情がライダーを支配している。
　敵は号令一つで死兵と化し、こちらの指揮系統を麻痺させている。
　上空から戦場を見ることができるライダーは、自軍の追い込まれている状況を正確に理解していた。
　故にこそ、ここでただ敵に群がられている場合ではない。
　固有結界の維持で消費していく魔力は、もはや残量が少ない。だが、それでもできること、するべきことはある。
　手綱を握る手に膂力と胆力を込めて、ライダーは神獣に魔力を注ぎ込む。
　必然、それは強力な雷となり、組み付いていた戦闘員を焼いた。
　錐揉み状に回転しながら落下していた神威の車輪から、体の過半が炭化した戦闘員は、手足を失いついに引き剥がされる。
「ちっくしょう・・・・・・・・・・！」
　残る二人は御者台の結界に梃子摺っていた。それも、手にした剣で切り払う。
　むろん、向こうは死兵。そうたやすくは引き剥がせない。だが、ラ

イダーもそうすんなりと首をくれてやるわけにはいかなかった。
「うるぁあああああああああああ！」
「ちぇあああああああああああ！」
「はあああああああああああああ！」
結界をこじ破りつつあった矛の切っ先がライダーの肉体に突き刺さる。
しかし、ライダー自身もまた一級の英霊。ただ、耐久と筋力で力任せに打ち払う。
向こうにも覚悟と決意があるのだろう。だが、征服王として気迫で負けるわけにはいかない。
ついに、神威の車輪の制御に専念できるようになり、その手綱を両手で引き上げた。
地表ギリギリ、地を纏った雷で焼きながら神威の車輪は平行を取り戻した。
「ゼウスの仔らよ！我が朋友よ！」
アサシンに負けじと、ライダーもまた声を戦場にとどろかせる。
浮き足立っていた指揮官、ひるんでいた戦士、馬を落ち着かせていた騎兵がその声に耳を傾ける。
「敵は士気で戦局を覆さんとしている！
なるほど、血気盛んな怪物の軍勢は強敵であろう！
しかし、我等もそれで負けはせん！
全軍、奮戦せよ！勝利は既に見えているぞ！」
必然、歓声が上がる。
手にした槍を、剣を高々と掲げて、全兵士が沸き立った。それはアサシンの耳にも届く。彼は自分の手駒がやられたことを知った。
だが、そんなことは分かりきっていたことだ。分かりきって、あの3人に任せたのだ。もう、十分に彼等は役目を果たした。
もう、自分が一刻も早く軍勢を削りきることでしかその働きに報えない。
天秤は、大きく向こうが押し返し、水平に、いやむしろ向こうにやや傾いた。

果たして、自分は自陣が崩壊するまでに殺しきれるのか。
アサシンが焦燥したとき、アサシンの本陣で血の雨が降り、敵の後方で無垢なる光が輝きを放った。

彼女たちの戦場

本陣の防御を任されているエリザベートは、苦戦していた。
竜の鱗に、矢や槍が突き刺さる。元より、対魔力はともかく耐久はさして高くない。
そして、生前戦闘などした事のない彼女に、槍の技量など備わっていない。
必然、体は傷だらけになっていた。美しい肌も、己の血で汚れに汚れていた。

「ブタの分際で、家畜の分際で、私の食べ物の分際で・・・！」

エリザベート・バートリーは苛苛していた。それは、生前はずっと収まらないもので、死後のマスターに出会ってからは収まっていたもの。
頭痛だった。
兵藤一誠は、彼女のような怪物の扱いを心得ていた。だから、引くべきところは引き押すべきところは押した。
その結果、彼女は自分の思い通りになること以上に満たされ、救われていた。
月の聖杯戦争で、彼を独占しているときはそれこそ本当に幸せだった。
戦争が終わってしまうことが、残念に思うほどに。だから、彼と一緒にいることを望んだ。
・・・。
だが、ここに来てからはどうだろうか。多くの少女が、あるいは粗暴な連中が、彼の周りにいる。自分は、その中の一人になってしまった。
だけど、どうしてだろう。彼が頼られていると、彼が皆をまとめていると、誇らしい気持ちになるのは。
皆とも仲良くなれる気がした。特に、ネロとは。ああ、そういえば、

友達って、初めてだったかな・・・。
しかし、別に本性が変わったわけではない。兵藤一誠は、他人の迷惑にならないように御することは得意でも、その本質を変えることはできない。
自分で変わりたいと思わない限りは。

「・・・全員まとめて串刺しよ！」

監獄城チェイテを、酷く乱暴に投擲する。大振りな槍は、１０人以上を貫通し、地面に突き刺さった。
そして、雨のごとく血が降り注ぎ、彼女の体を濡らし、癒していく。
これは、血が特別なのではない。ヴラドⅢ世とならぶ吸血鬼の原典である彼女固有のスキルである。
処女の生き血を、己の美容のために絞りとっていた彼女の、生前の逸話を再現する能力だった。

「全く、こんな男の血で・・・！」

とはいえ、彼女にだって好みはある。いくら体の傷を治すためとはいえ、こんな筋肉ムキムキの男の血など浴びたくない。
まあ、分かる話である。とはいえ、戦士たちにしてみればたまったものではない。串刺しにされて血を奪われて、文句まで言われるのである。
だが、その恐怖こそアサシンが求めたもの。戦士の血肉を食い散らかす吸血鬼。それは、後付の竜の咆哮より、彼女の本質をあらわしている。
ほんの1歩でいい。相手をひるませれば時間が稼げる。
そのためには、派手な演出がもってこいだ。砂漠の大地を湿らせる血の雨など、効果は抜群であろう。そんな意図は彼女には無いが。

「いいわ、片っ端から食べてあげる！」

もう、ためらうのはやめたのであろう。彼女は槍の投擲を繰り返し、本陣を血で染め上げていく。

それは、当然多くの隙を生んだが、少々の傷ならば血で癒され、大きい隙は戦闘員たちが埋めていく。

最初の怯えはどこへやら。元々誇り高い彼女は、自分に群がる敵を片っ端から潰していった。

反英雄らしく、怪物らしく、実にむごたらしく。文字通り、血祭りに上げていく。

砂漠の戦場で砂塵を巻き上げながら大軍勢と戦う他の面々とは『舞台』を変えて戦うランサーとネロ。

黄金劇場の中でしのぎを削る両雄は、しかし煌びやかな舞台とは違いコロッセオさながらの血戦に興じていた。

「・・・正直、セイバーを名乗るには熟練が足りないな、薔薇の皇帝」

額から血を流していたランサーは、息切れしつつも優勢を確信していた。

筋力や耐久は下がっている。しかし、技量までは失われていない。宝具そのものも、弱体化していない。まあ、封印しているので弱体化しているようなものだが。

しかし、それでも自分は有利だ。このままいけば、確実に彼女の首を獲れる。

「なに、逆転劇の方が観客も喜ぶゆえな、美貌の槍兵よ」

玉藻の前の宝具によって受肉し、自身の宝具によって相手を弱体化させ、しかしそれでもランサーは強敵だった。

無理も無い。彼は一級の魔術師ロード・エルメロイに召喚され、加えて彼の伴侶となる女性から、全力での支援を受けている。

なんと言っても、フィオナ騎士団において最強とうたわれたディルムッド・オディナは、その卓越した技量によってアーサー王とすら接

近戦で互角以上に立ち回れる精兵だ。
セイバー（笑）のネロでは、勝てる相手ではない。受肉によるボーナスと宝具による弱体化を加味しても、それでもディルムッドのほうがネロを上回り、技量もまた然り。
皇帝特権は万能だが、李書文戦でもそうであったように、スキルなりスペックなりで二つ以上相手に上回られると、とたん馬脚を現してしまう。
万能の天才では、戦闘の専門家には及ばないという当然の事実が彼女の前に立ちふさがっている。
だが、有利な点もある。ネロは、体力という点においてはランサーを突き放している。
ランサーは、ネロと戦うまでにかなりの戦闘をしており、ソラウが魔力供給に専念しているとはいえ、ソラウ自身の限界が近い。
が、それも些細なこと。どう考えても、それより先にランサーの槍がネロを貫くだろう。
そんなことは分かりきっている。彼女は、分かっているがその未来を覆すつもりは無い。
言ってしまえば、自分は時間稼ぎ。このランサーは自分を確実にしとめるために時間をかけている。
であれば、宝具が持続する間は大丈夫だろう。加えて、自分も彼には結構な痛手を与えた。向こうには自分のライバルであるエリザベートがいる。彼女ならば、この槍兵を討ち取ってくれる。
もしも、宝具が解けた後彼が自分を無視して本陣に向かっても大丈夫。その確信が、彼女を焦燥させなかった。
皇帝特権によって怪力を得て、愛剣を握る力を増した。
「さあ、ここからが本番だぞ！」
「ああ、終わらせるとしよう！」
観客のいない劇場で、花形役者が交差する。鮮やかなるその殺陣は、もしもこれが劇であったなら見るものを魅了してやまなかっただろう。
しかし、これは劇場での死合。そして、この戦いはあくまでも添え

物にすぎない。本来の戦場は、大軍勢と怪物の激突する砂地だ。
共に、轡を並べるものが待っている。いつまでもここにいるわけにはいかない。
その、一瞬の交差。槍兵は二槍を突き出し、皇帝は炎の剣を振りぬいた。
直後、槍兵が膝を突く。肩口から袈裟懸けに、大いに血が流れていた。それは彼女の意地。乾坤一擲の斬撃だった。
なるほど、決死の一撃だった。槍兵をしてかわせないほどの。だが、彼は笑った。
「見事だ、薔薇の皇帝よ」
劇場が、幕を下ろした。固有結界の中に構築された、固有結界とは似て非なる大魔術。彼女の宝具が解除されたのだ。
二人は、再び戦場に舞い戻ったのだ。
「すまぬ、奏者よ・・・」
その薔薇の皇帝の胸には、二つの大きな穴が開いていた。むろん、ランサーの一撃、いや二撃である。
力なく、地面に倒れ伏すネロ。その姿を見て、ランサーは勝利を確認した。聖杯戦争の初陣にて首級一つを得た。我が主も、お喜びになるだろう。
とはいえ、自分も相応のダメージを負った。ここからの本陣への突撃は、さすがに無謀だった。一旦霊体化しようとしたその刹那、信じがたいものを見た。
「そなたを残しては逝けぬ」
受けた傷が全回復、とまでは行かないが、致命傷だけは確かに回復して、ネロは剣を手に立ち上がった。
それをみて、ランサーは彼女が蘇生のスキルを持っていたことに気づく。
であれば、先ほどの刺し違えんばかりの気迫も納得がいく。死なないのだからと開き直って、と思うのは素人だ。
死して生き返ると知ってなお、槍への恐怖はなくなるものではない。

「・・・しぶといな」
槍の封印さえなければ、と思ってしまうがそれは今更だ。
こちらも重傷だが、復活した相手も半死。であれば、退く理由は無い。
「落陽を三度迎えても、余は奏者のために戦う！」
己が主への忠義ゆえに立つ相手ならば尚のこと。
忠義で騎士が皇帝に負けるわけにはいかない。
「その心意気、見事だ！」
重傷で尚戦おうとするその二人は、しかし刃を交えることは無かった。
無垢なる光が遠くで輝き、そしてそれを合図にするように荒涼たる大地はその姿を消したのだから。

「風王鉄槌！」
剣を不可視にしていた空気の鞘。それを開放するアーサーの数少ない遠距離攻撃。
連発は利かず、当然エクスカリバーほどの威力は無い。
現に、直撃したモードレッドは頭から血を流していても健在である。
「どうしました、息が荒いですよ。アーサー王」
「ぬかせ・・・」
逆にアーサーは、目立った負傷も無いのに肩で息をしていた。
一重に魔力不足が原因である。ただでさえ、約束された勝利の剣を使った後だ。魔力放出を持続させる戦闘は、どう考えても長くは持たない。
逆に、モードレッドは血まみれで尚余裕の表情だ。彼女は自分の魔力で一度真名解放を行っているが、それ以外はキャスターの援護を受けてのもの。

受肉しているが故に、能力の拮抗はモードレッドに利していた。
それが分かっているからこそ、アーサー王の表情は苦渋に満ちている。
言ってしまえば、彼女の視点からの聖杯戦争から考えれば、モードレッドは殺す必要が無い。
彼女の敵はあくまでもアサシンである兵藤一誠であり、モードレッドは彼の手ごまだ。打つ意味は無い。
だが、討つ理由はある。彼女はあろうことか自分の願いである国家の救済そのものを否定し、その願いがかなわないことを聖杯に願おうとしている。
故に、国家の救済を望む王として国家の滅亡を願う騎士を討たなければならない。そこに、迷いなどあろうはずもない。
だが、どう考えても勝算は薄い。モードレッドの剣はアーサー王の死因そのものであり、モードレッドはアーサー王を殺した張本人だ。
もしも、アーチャー・ギルガメッシュが『燦然と輝く王剣（クラレント）』の原典を使用したとしても、或いは錬鉄の英雄エミヤが『我が麗しの父への叛逆（クラレント・ブラッドアーサー）』を投影し使用したとしても、
こと対アーサー王においてここまでの伝説のなぞりはありえない。
もしも、彼女のマスターがこの戦いを観戦していたのであれば、令呪を用いて結界内から離脱させていただろう。
その結果、ランサーとライダーが脱落し、その後不利な展開になろうとも。今すぐの、致命的な破綻よりは大いにマシだ。
だが、アーサー王はそれができない。頭では不利であると分かりきっていても、『不屈の王』はどうしようもなくあきらめることができない。
それを見て、モードレッドは少し表情を和らげた。憎悪の色が薄まり、親愛の表情を浮かべている。
「・・・嘗ての自分を見るようです」
ホムンクルスである自分の元になった、偉大なる王の疲弊した姿に、モードレッドは嘗ての自分を重ねていた。
あの、父に子としてみてもらえないことが、我慢ならなかった自分

の、惨めな姿を。
「・・・そこまでして、聖杯に願ってまで」
アーサー王は、決然とした表情でモードレッドを見る。
「国を滅ぼしたいのか、貴公は」
「・・・違いますよ」
モードレッドは、あっさりとアーサー王の言葉を否定した。
「さっきも言ったでしょう。私は自分の存在を守る為に戦っている。貴方が国の救済を願えば、どうしようもなく私は消えるのだから」
「一個人の存続のために、国民の全てを犠牲にするというのか。やはり、貴公に王としての器は無い」
「ええ、その通りですよ。ですがそんな私を、陛下、貴方は信用してしまった」
アーサー王は、モードレッドの叛意を見抜くことができなかった。それゆえに、遠征の留守を彼女に任せてしまったのだ。
「私は、完全で高潔な王である貴方にあこがれた。私だけではない。多くの騎士が、そのあり方を貴く思った。
しかし・・・結局、貴方は『正しさ』の僕だった。貴方は、正しくありさえすればそれで国を守れると、そう思い違いをしていた」
「バカな。王は孤高でなければならない。私情を挟まず、公平に物事を決めなければ、国は傾く」
「そうですね、貴方は上辺ではなく心底そう思っていたし、事実それをこなしていた。
それに、私もランスロットもついていけなかった」
今思い返しても、アーサー王は完璧だった。モードレッドはそう思う。だが、しかし結果的に国は滅びてしまった。
月の聖杯戦争でのマスターとの対話を経て、モードレッドはアーサー王が国を滅ぼした原因を考えた。
無論、悪いのは自分である。ただ、父に愛されたいという理由で国を滅ぼした自分が悪いに決まっている。
だが、そもそも自分が一人で騎士を片っ端から殺していたわけではない。自分の叛逆に、賛同した騎士が多くいたのだ。

なぜだろうか。王には人の心が分からないというが、アーサー王は国民の望む王であり続けたはずだ。

なぜ？

「結局のところ、貴方が率いるに値しなかったのですよ、円卓の騎士は。

私だけではない。湖の騎士も、太陽の騎士さえも」

「ランスロットやガウェインを愚弄するか」

「違いますよ、貴方が私情を挟まないことに皆が耐え切れなかったのです。

少なくとも、私は完璧である王に、『贔屓』に扱って欲しかった。

矛盾していますが、それが人の心と言うものです」

たとえそれが不可能でも、いや不可能だからこそ息子として愛して欲しかった。

少女の、切実な叫びだった。

「貴方の『失敗』は、公正であることが万人に受け入れられると思い込んだことです。

もちろん国を統べる王が、一人一人の意見を汲むことなどできるわけも無い。

だとしても、せめて、貴方は自分の立場から一歩でも歩み寄ろうとするべきだった」

その一歩が、限りなく遠かった。

姉の姦計で国が滅びたのは事実だ。だが、少なくとも自分は一度は母の思惑を外れ、心底貴方に心酔していた。

私を裏切らせたのは、貴方のその一歩だ。筋違いだとは思うが、それがモードレッドの結論だった。

兵藤一誠は違う。自分は正しくあろうとしても、しかしそれを他人に押し付けない彼は違う。

もちろん、彼にランスロットやガウェインが忠を誓うことは無いだろう。だが、それでも自分にはすばらしい主だ。

キャスターの凶行は必ず止める。それを改めて誓う。

だが、その前に犠牲者達に各々のやり方で哀悼の意を奉げてくれ。

それは、兵藤一誠の中にある正しさの発露だった。民衆を守る戦人の、その心意気の現れ。

叛逆の騎士である自分にもあるそれを、反英雄エリザベート・バートリーは持っていなかった。

それが、モードレッドにとってたまらなく不愉快だった。

アーサー王とは違うながらも、正しくあろうとする彼に似合わない部下だと思ったのだ。

エリザベート、お前には何がなんだか分からないだろうが、

おれの為に祈りをささげてくれないか？

オッケー、とりあえず祈っておくわ

それを聞いて、自分の器量の狭さを痛感した。

彼は、彼女がそういう怪物であると理解したうえで部下に従え、更に形だけでも取り繕おうとしている。

それは、決してアーサー王にはできないことだ。相手の間違いを飲み込み、それを社会に適合させる。

反英雄の間違いを、間違ったまま正しい方向へ導く。それが彼の器量だった。

そして、自分は今も彼に甘えている。

彼が好きだ。たまらなく大好きだ。そして今の自分を守りたい。

「綺麗事を言うつもりはない・・・悪びれるつもりもない・・・。

オレは自分を守るためだけに祖国の住人全てを売る。

オレがただオレの家族を・・・守る為だ・・・！

そして・・・オレの主に三度も家族を失わせはしない！」

血まみれのモードレッドは、その手にした剣を高々と掲げた。おそらく、この戦場において最後となるであろう真名開放を。父親との決

着をつけるために。
そして、アルトリアはそれを迎え撃つために、再度真名開放の構えを見せる。余力はほとんど無い。使えば消滅するかもしれない。だが、それでも彼女は退くわけにはいかない。
しかし、そんなアーサー王の心が、モードレッドの手にしている剣の輝きに愕然とする。
その剣は、確かに己の血と、己への憎悪で堕したはずだ。だというのに、嘗ての無垢なる輝きを取り戻している。
いかなる皮肉だろうか。己こそ王であると掲げた剣は、己は王の器にあらずと認めたとたん、あるべき姿を取り戻したのだ。
それは、魔法？否、必然である。
彼女が受肉したのは、第三魔法天の杯による、魂の運用によるものではない。もしそうであれば、彼女は戦闘用ホムンクルスとして復活しただけに終わっただろう。
しかし、彼女を一個の生命としているのは主神の権能。魔法と違い、権能に理屈は存在しない。
今の彼女を人と呼ぶべきなのかは判然としないが、少なくとも母の手によって作られたアーサー王のクローンではない。
そのような理屈を知ってかしらでか、モードレッドは生きているものとしての当然の機能、成長を遂げていた。
「・・・貴方の王道は、私が終わらせる」
その表情に、もはや怒りも憎しみも無い。ただ、勝利への意思が込められている。
「負けるものか・・・。私は、王として譲れないものがある！」
宿命の親子は、丘から遠く、余りにも時代を隔てて対峙する。
「『燦然（クラ）とーーーー」
「『約束（エクス）されたーーーー」
双方共に、騎士として、王としての輝きを解き放った。

「ーーー輝く王剣（レント）！」
「ーーー勝利の剣（カリバー）！」

全く同じ色をした光の激突。
それは、どちらが有利なのか傍目には判別できない。
だが、はっきりしていることもある。勝つのはモードレッドだと言うことだ。
事実、拮抗は一瞬だった。モードレッドの、本来の在り方を取り戻した『燦然（クラレント）と輝く王剣』の光がアーサー王の『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』を押していく。
これは、言ってしまえば属性が聖剣になったことなど関係ない。最初から分かりきっていたことに、魔力が足りないのだ。
双方共に、１０数分前に1度解き放っている。そして、勝ったのはアーサー王だ。つまり、消費した魔力量もまた多いということ。
２度目をどううったところで、完全なものになるはずも無い。
では、剣の属性が変わったことに意味は無いのか。それも違うだろう。モードレッドは、父親を超えたのだ。
母が父の国を滅ぼすために自分を創った。父の完璧さにあこがれて父の騎士になった。父に認めてもらえずいらだって母の思惑通り国を滅ぼした。
・・・ここに、一体どこに彼女自身がいるのだろうか。
どんな英雄も、最初は子供だ。親や運命に決められた道を歩むしかない。だが、どんな子供も成長する。親の決めた道や、親の背中から離れていく。

「・・・父上」
「モードレッド・・・！」

片方の光の奔流が、片方を破った。完璧だった王は、不完全な真名解放を行い、必然の敗北をした。
だが、そんなことは最初から分かっていたはずなのだ。受肉を遂げ

た生きているモードレッドに、この世界で生きていないアーサー王が勝てるわけが無い。

だとしても、『完全な王』は『国を滅ぼしたもの』から逃げるわけにはいかなかったのだ。

そこまで分かっていて、アサシンはモードレッドにアーサー王を任せたのだ。

「ぐ・・・」

光過ぎ去りし後、アーサー王はまだ存在していた。剣を杖代わりにして、必死に立ち上がろうとしている。

これも当然だろう。不完全な『約束された勝利の剣』は、『燦然と輝く剣』と全くの互角。打ち負けたとはいえ、ほぼその威力を殺していた。

アーサー王は、打ち負けてはいたが消えてはいなかった。

だが、負けた。この世界において死者である彼女は、『伝説』を覆すことができない。

いつだって、雪辱を晴らすことができるのは、過去を乗り越えることができるのは、生きて、成長しているものだけだ。

「私の勝ちです、アーサー」

その言葉と同時に、世界は再び塗りつぶされていく。

いや、元の姿を取り戻していくといったところか。

こうして、第二局面は終わりを迎えつつあった。

「王の軍勢」去りしあと、残ったのは一体。

戦争問答

固有結界『王の軍勢』。それは、現実の世界では全くといっていいほど周囲に影響を与えない。

結界という特別な場を用意しなければ、数万からなるサーヴァントの軍勢を維持できないこともあるが、運用面から考えても難しい。

なにせ、数万である。砂の大地ではなく住宅地で、アサシンでなくセイバーやランサーのような兵士が収まるわけが無い。

神秘の隠匿という点においても、非常に優れた宝具であろう。

そして、それは今回もきちんと機能した。なにせ、対軍宝具の乱れ撃ちから始まって、軍勢と怪物の力比べ。

比喩誇張抜きに、実態空間でこれを行えば冬木市だけでなく周囲の町も壊滅に陥っていただろう。

もしも、ハサンや使い魔が彼等の戦闘を監視しようとしていたら、13対3で対峙したかと思うと次の瞬間には全員が消え、暫くしたら全員が元の場所に戻るという間抜けな光景となっただろう。

とはいえ、各々、ただの一人たりとも流血していないものはいない。疲弊していないものはいない。16騎のサーヴァントは全員戦闘が続行できないレベルまで傷ついていた。

特に酷かったのが、アサシンの宝具である戦闘員、そのうちライダーを押さえていた3名だろう。ライダーの戦車の雷に焼かれて手足が炭化し、免疫不全による内臓への負担で吐血していた。

もしも彼等が一般人ならば、あるいはこの場にキャスター、玉藻の前がいなければ、まず生存は絶望的であろう。

とはいえ16騎、全員生存である。マスター3人も慣れない戦場の空気に当てられ、立ち上がる気力すらも残っていなかったが、傷一つ無い。双方共に、どれだけ自分が傷つこうともマスターだけは守り通したのである。

「ご主人様！神殿とのラインが復活しました！

これでご主人様のナカに日本中から集めた私の魔力をシュー！超

エキサイティン！」

「まずネロを治してくれ。エリザベート、モードレッドの順だ。

その後は戦闘員を頼む、おれは最後で良い。」

戦闘中ということもあって、アサシンは玉藻のボケをガン無視。全体の状況を確認すると治療の順番を指示していく。

ダメージの大きいネロを最優先。傷は無いが魔力が減っているエリザベートが続き、疲弊しているものの戦闘が可能なモードレッドは、敵の牽制の為に後回し。

戦闘員8名と自分は、傷の具合に関係なく薬による反動で動けない。よって、もはやこの場での戦闘は不可能である。

とはいえ、アサシン陣営は既に玉藻の前が完全復活している。他の月のサーヴァントもすぐに全快するだろう。

なにせ、拠点に作られた神殿には日本中から集められた魔力が渦巻いている。結界による切り離しも復旧し、キャスター無双である。

逆にほぼ回復する見込みが無いのがライダー、セイバー、ランサーである。なにせ、マスターも自身も魔力を使いきっているのだ。霊体化せずにいるのがギリギリである。

このままでは、全快したアサシン陣営にぼこぼこにされる。その未来は明らかだった。マスターである、戦場においては素人の三人にさえ。

だからこそ、何が何でも固有結界が持続しているうちに玉藻の前だけは仕留めなければならなかった。

しかし、結界の維持と自身の戦闘によってライダーの魔力は枯渇。共に結界を支えていた軍勢も過半を削られ、ついに結界を維持できなくなった次第である。

後ほんの少し、ほんの少しでも結界が持続していればアサシンとその宝具は戦闘不能になっていた。それを思えば、まさにギリギリの勝負。辛くも結界の維持限界まで逃げ切れた、といったところだろう。

だが、ここからは一方的な展開である。片や、回復していく三騎の三大騎士とそれに守られた神殿の中のキャスター。片や、疲弊してい

るマスター二人と満身創痍のサーヴァント三騎。
もはや、ここから逆転の一手など誰にも残っていない。ここからは、犠牲を少なくするための撤退戦だ。であれば、殿が必要である。
ランサーは、血まみれで尚美しい顔を不敵にゆがませた。ここは、自分の見せ場だと。
当然の事実として、セイバーはたまたま共に戦った仲。同盟関係に無い。彼女自身がどう思っているにせよ、マスターの思惑もあるだろうが、こちらの二人を守ろうとはしないだろう。
ライダーには、二人を連れて逃げる『足』がある。魔力に限界はあるだろうが、令呪を使えば可能なはずだ。
であれば、自分が殿を務めるべきであろう。
初戦で、首ひとつ得ることなく2番目に脱落というのはなんとも情けないことだ。だが、後悔は無い。
ライダーの軍勢と共に戦場を駆け敵陣に切り込み、薔薇の皇帝との余人を交えぬ一騎討ち。主の名誉の為に聖杯を奉げることはできなかったが、満足するには十分だ。
ここからは最後の奉公となるだろう。令呪3画での後押しをいただければ、4人の撤退時間は稼げるであろうし、うまくすれば一人か二人は道連れにできるかもしれない。
一切の悲壮感をにじませること無く、ランサーは槍を杖代わりに立ち上がろうとした。
それを、ライダーが止める。
軽く手をかざして、待て、という風だ。
不審に思いつつ彼の視線を追うと、そこには相変わらず敵意の無い眼をしているアサシンがいた。血を吐き、宝具である戦闘員同様自身も戦闘不能になっているが、将としての責務ゆえか、未だにこちらを見ている。
そして、第一声はランサーにとって予想外だった。
「さっきと同じことを言おう」

結界が解除された後のアサシンは、キャスターがネロの回復を始めると同時に敵であるライダー、セイバー、ランサーに語りかけた。
敵意の全く無い、事務的な調子で。

「さっきと同じことを言おう。
戦えるだけ戦った。さあ、どうする？
引くなら止めぬが、向かってくるのなら相応の対応をさせていただく」

その言葉に、私もモードレッドもエリザベートも、我が耳を疑った。
玉藻とネロ、戦闘員は別に驚いてはいないようだが。
合理的なアサシンのことだ、このまま皆殺しだ、とでも言うと思ったのだが。
いや、別に皆殺しにしたいわけじゃないんだけれども。
ただ、理由はともかくワケを言って欲しいな。
向こうの陣営も、ライダー以外は警戒している。彼の思惑が読めないようだ。ライダーは、ふむ、とこちらの思惑が分かっているようだ。
とはいえ、向こうにしてみれば望外の提案だろう。すわ全滅か、というところまで追い詰められてからの敵からの撤退許可。
罠であっても、満身創痍の彼等には甘美に写るだろう。例え、回復までの時間稼ぎと疑おうと。

「怪訝に思うのも無理は無いが、こちらにも理由はある。というか、そちらを討つ理由が無い。
まず、こっちの目的はキャスターを止めることだ。まずはそれが最優先。
その理由に関しては、キャスターを征伐しに来たそちらはよくご存知だろう。

また、手負いの虎を楽にしとめられるとは思っていない。ランサーなど飛び掛ってきそうだしな」

ランサーのマスターであろう成年男性が息も絶え絶えながらランサーを見る。その目に力は無く迷いが見て取れる。

彼自身、聖杯への未練もあるのだろう。同時に自分の命へも。無事に帰れるのならばそうしたいようだ。

ランサーは一瞬躊躇した後、地に腰を下ろした。腰を上げるだけでも重労働だったのだろう、目だけは警戒しているが体に力が入っていない。

「そちらはなにをするにしても、もう令呪を使うしかないし、令呪を使われたらこっちも使うしかない。

回数制限のある切り札を、戦略上優先順位の低い相手に使うのは面白くない。

そちらがおとなしく帰ってもらえるのなら、それが一番だ」

押せば倒れそうな相手を前に、アサシンは惜しげもなく撤退を許可する。

なんというか、思い切りが良いというか気前がいいと言うか・・・。

私も積極的に聖杯を狙っているわけではないし、彼等も悪い人ではなさそうだ。キャスターのように一般人を殺すことは無いだろう。

見逃す、というのは賛成だ。

「良いのか?次は他の面々も連れてくるやも知れんぞ?」

挑発するように言ったのは、ライダーだ。他の二人よりはマシだが、彼の体も深い傷を負っている。

だというのに、彼はこちらを品定めしているようだ。

余裕があるというか、厚顔というか・・・。

「お好きなように。
お察しの通り、この拠点は仮住まいだ。キャスターを討ち次第撤収する。
そちらの戦力が回復し、更に他のサーヴァントと連合を組むころには移動済みという寸法だ。
そのときはこんな目立つ拠点は作らない。適当な家屋を見つけて占拠してすませる」

それを聞いて、ものすごく嫌そうな顔をしたのはネロとエリザベートだ。日本の一般的な住宅事情を先日の買い物で知った二人にとって、この邸を離れるのは面白くないのだろう。
とはいえ、ことは戦略的問題。アサシンは譲らないだろうし、ネロも頭では分かっていそうだ。エリザベートは、たぶんアサシンがごまかすのだろう。

「勝敗は六分か七分勝てば良い。八分の勝ちはすでに危険であり、九分、十分の勝ちは大敗を招く下地となる。と言ったのは武田信玄だったか。
こちらとしては全員が治療可能な範囲の怪我だし、そちらの戦力も知れた。十分すぎる戦果だ。そちらも、失ったのは再起にかける時間だけ。
そういうことにして、今日の所はここまでにしよう」

戦闘中の苛烈さはどこへやら。いともあっさり優位を放棄する辺り、アサシンは暗殺者らしくない。
でも、確かにこっちは皆ぼろぼろ。これ以上戦わせるのは忍びない。引いてくれるのなら、それが一番だと思う。
向こうも、モードレッドを前にしているアーサー王すら、撤退を考えているようだ。無理も無い、このまま戦えばそれこそ無駄死にである。
だが、ライダーだけは違うようだ。戦車も出せないほど弱っている

というのに、呵呵大笑しドカリと地面に座り込んだ。
それを見てアサシンは顔に手を当て困り、ネロはにやりと笑った。

「・・・やっぱりおれ、交渉に向いてないな」
「奏者よ、してやられたな。引くもよし、来るもよしとはいったが、座ったらどうするとは言っていない。
もう、向こうは交渉する気満々だぞ?」

「おい、ライダー!お前何考えてるんだよ!
今逃げなくて・・・、じゃない退く時だろ!」
「坊主よ・・・分かっておらんな。今このときを除いてアサシンと話をする機会などない。
加えて隙を見せている。そこに付け入るのが戦というものよ。それに・・・」

ライダーは、にやりと笑った。その顔には、こちらを圧倒するばかりの眼力が込められている。

「この男は、確かにこの場では余たちを見逃すであろう。だが、その後はどうする?」
「無論、アサシンらしく立ち回らせていただく」

アサシンは、しれっととんでもないことを言った。つまり、正面から戦わず奇襲からの暗殺に徹するつもりのようだ。
ここで正面から手負いのサーヴァントと戦うのではなく、寝ているマスターを狙うつもりとは・・・。
その言葉に、モードレッドは不満そうな顔をしている。やはり、父(?)とは息子(?)として正面から戦いたいんだろう。

「安心しろ、モードレッド。お前の望みはきちんとかなえてやる。
アーサー王とは、正面から正々堂々戦っていいぞ

おれがどうにかするのはあくまでもランサーとライダーのマスターだけだ。」

その言葉を聞いて、ランサーとライダーのマスターたちが顔を青くした。無理も無い。

1体ずつならばサーヴァントで対処できるし、あるいは宝具である戦車に乗っていればいい。だが、常に13人を警戒するとなると不可能だ。

サーヴァントというより、マスターの神経が持たない。

「マスターが人殺しを好まないというのならそれにお答えしよう。

エリザベートに頼んで魔術回路や魔術刻印を引っこ抜いてもいい。

玉藻に頼んで呪うのもいいな、現代の魔術師では解呪不可能な奴を。

まあ、ネロは何でもできるし、毒や狙撃というのもありか・・・。

こっちには優秀なスタッフが着いている。手管にはことかかん。

どれを選ぶのかはマスター次第だ」

いえ、そんなの選びたくありません。

なんというか、もっと温厚な方法でお願いします。

「まあ、アサシンに暗殺するなというほうが無茶な注文だ。

おれ自身はともかく、アサシンはイレギュラーでもなんでもない正規のクラスだ。

暗殺されるのが嫌なら、最初から戦争に参加しなければいい」

「然り！全くよな！」

青ざめているマスター二人を豪快に笑い飛ばすライダー。

いや、そんなに面白いことでもないような気がする。

それにしても、どうしてライダーはアサシンが暗殺に徹すると分かったんだろう。

今の戦闘中、特に卑劣な振る舞いはなかったと思うのだけれど。

「なに、その方が部下の無用な損失を恐れていることはよく分かった。であれば、『アサシン』として背を撃つのは当然であろうよ」

「ご理解いただいて幸いです。

こちらにとって、そちらはもう『今無理をして倒す』か『後で安全に倒す』かの二通りでしかありません。

後者のほうが、我々にとって楽なのは当然でしょう」

「フハハハハ！

うむ、見事。完敗であるな」

ライダー、偉大なる征服王イスカンダルはいともあっさり自分の負けを認めた。

しかし、心の底から愉快そうに笑っているので負けている風には見えない。どちらかというと、こっちが負けているように思えた。

「では、余もさっきと同じことを言おう。

アサシンよ！余の部下にならないか！

傘下を引きつれ、余の右腕になれ！

共に世界を征服しようではないか！」

「それに関しては先ほど断らせていただいたはずだ」

「それは、その方の主の言葉であろう。

その方の『己』の言葉ではない！」

「軍人が軍務中に『私』を語るなど許されないことだ。

おれは貴方と違って自分を語る自由を許していない」

なぜか、まるでこちらが負けているような錯覚を覚える。

ライダーはとにかく押しが強い。そして、アサシンは頑として跳ね除けているが語気は弱い。

これは、王であるイスカンダルと将である二人の食い違いであろう。

征服王たる暴君は『己の野心』を語り、軍人たる怪物は『己の職務』を語る。

どちらも、自分の誇りを掲げて話し合っているが、しかし肝心なところでかみ合っていない。

もちろん、アサシンはそんなことに気づいていないはずが無い。だが、それでも彼は自分を語らない。

己の生き様を、死後であっても貫こうとしているのだ。もちろんそれは、イスカンダルも同様であるが。

「ただ主に仕えることをよしとするのか？

それは愚かなことだぞ。臣下は時として忠言を述べるのも勤めだ」

「軍事に関わるのなら、意見を求められれば応じる。だが、外交や内政ならばその限りではない。

政に口を挟むのならば文官であるべきだ。おれは生前それになる機会もあったが、それは断っている。

そのおれが、死後とは言え同盟という重要なことに口を挟めるはずは無い」

「しかしだ、余は納得せぬぞ？

なにせ、心底おぬしにほれ込んでおる。

その方、その反英雄の小娘どもに慕われているな？

いや、恋慕もあるのだろうがそれだけではない。

それは信頼だ。でなければ、ああも自分を死中に飛び込ませることを善しとはできまい」

「彼女たちとは誠実に向き合っている。

その結果が信頼を築き上げた。

であれば、筋の通らないことを彼女たちの前でできるわけも無い」

「だが、興奮せなんだか？

余の軍勢を相手どったとき。

余はしたぞ、怪物どもに槍を突き立てられてな。

頼れる戦友と轡を並べ、強敵に挑む。どうだ、胸が躍らぬか」

「個人的な感情で戦う相手を選ぶことなどあってはいけない。

指揮官であれば当然のことだ」

「堅物よなぁ。

その方はそれだけの兵を率いて、なんの夢も抱かぬと？

それはあるまい。男子たるもの、世に覇を唱えんとするが必定」

「おれが至らぬばかりに、生前の部下はおろか死後の部下まで墓から引きずり出している次第。

拙い作戦を信じている彼女達に感謝はあれども、それをよしとすることはできない」

「・・・。

本当に何も感じぬのか？

想像してみよ。時代を超えて国を超えて集結した英雄と反英雄。

その邂逅に意味を見出したくは無いか？

この場にいる面々での戦いは、まっこと胸が躍った。

この身には、すでに魔力も体力も残っていない。だが、全く違うものが肉体を満たしている」

「おれは・・・」

「余は、この場での邂逅を天啓と見た！」

二人の議論はどこまでも平行線だ。このままでは埒が明かない。

もう既に反英雄の3人は全快を遂げ、玉藻は戦闘員の中でも特に傷の酷いものを手当てし始めている。

だというのに、この会話には誰も口を挟めない。

下手をすれば、それは再びの大激突になるからだ。それは双方が望んでいないことだろう。

であれば、私はマスターとして彼にするべきことがある。

「・・・おれに、己を語れと？」

そうだ、向こうが納得するには軍人としての言葉ではなく個人としての言葉で無ければならない。

そして、アサシンに個人としての自由を与えるのはマスターである

私の務めだ。

「マスター・・・」

アサシンは、傷だらけの体で私に礼の姿勢をとった。
それは、サーヴァントとしてではなく軍人として私の言葉を受けようとしている態度だ。

「この口から出る言葉が、例え貴方の意に沿わぬものでも、ですか」

ためらうことなく頷く。
元より、私には彼を信じることしかできない。
彼を信じることができなくなったら、一体誰を信じろというのだ。
戦闘員とか、反英雄の四人とか、信用できない奴等ばかりだぞ。

「・・・申し訳ありません」

それは、至らない部下ばかりで、ということだろうか。それとも、自分の言葉を語れといったところだろうか。

「両方ですよ。
ああ、つくづくおれは良いマスターにめぐり合った」

深々と礼をするアサシン。
その姿は、まるで王に忠節を誓う騎士のようだ。その姿を、敵も味方も見守っている。
はたして、アサシンはイスカンダルにどう応えるのか。

「我が主より、己を語るよう命令を賜った。よって、己の言葉でそちらの勧誘にこたえよう」
「うむ」

ついに、まともな議論が始まる。イスカンダルは満面の笑みだ。
勧誘することもさることながら、アサシンの自分の言葉が聞きたくてたまらないのだろう。

「結論は変わらない。そちらの求めには応じることができない」

その言葉は、やはり拒絶。
アサシンは、争いなど望んでいないのだろう。戦闘員たちはその限りではないだろうが、ひたすらに口を開かない。
アサシンが政務に口を挟まないと決めているように、彼等もアサシンの軍務に口を挟む気は無いのだろう。

「おれが生前仕えた王は、若く未熟で理想に燃える王だった。
その王の語るものは、戦争による征服ではなく友好による融和だった。
正直に言って、政治には素人であるおれの眼にも明らかなほど困難なことだった。
その陛下は内外を問わず、余りにも多くの問題を抱えていた。
一体何度、あの方を暗殺してくれと影から依頼されたのか分からない。
不敬を承知で言おう。あの方は頭はいいのかもしれないが、愚かだった。
貴方が征服という言葉に魅了されていたように、陛下は友好という言葉に魅了されていた。
おかげで、散々苦労させられた・・・」

その顔には、苦渋の色が濃い。一体彼はどれだけ面倒ごとを押し付けられてきたのだろうか。
なんというか、つい同情してしまう。

「だが、そんな陛下だからこそおれを受け入れてくれたのだ。
おれとて、あの方の甘さに救われた身。一体どうしてそれを咎めることができよう。
そして、真実陛下は国民から慕われていた。皆が、彼を愛していた・・・」

ネロとアーサーがその言葉に俯く。
国を統べ、滅ぼした王として、嘗て自分に向けられたものを思い出しているのだろう。

「その王に仕えたおれが、貴方に仕えることなどできはしない。
なぜならば、おれは貴方の王道を認めることができないからだ。
政を語らず戦を語り、民を統べず兵を統べる。国を語らず己を語り、治を求めず乱を求める。
そんな貴方を、おれは王と認めることはできない」

暗殺者に似合わぬ、余りにも真っ直ぐな言葉。
それは、彼の王に対する親愛と忠節を知るには十分すぎるものだった。
体が魂が外道に落ちようと、その心は誠実の一言。誇りを最後まで貫いた、いや貫き続ける男の宣言だった。
それを、地に座り込んだイスカンダルは黙って聞いている。
それは彼が望んだものでないにせよ、アサシンの『己』だったからだ。
彼は、やはり戦争を望んでいないのだ。

「それに、正直こんなことは言いたくないが、この場にいる全員が手を結んだとしても、とてもではないが無双の軍勢とはいえない。
なにせ、アサシンであるこの身ゆえにここまでの苦戦を強いられたが、他のクラスでの召喚であればあの場にいた全員が受肉済みでもおれ一人で皆殺しにできる」

・・・え？何をいきなり出だしてるんですかこの怪物は？
さっきまでの皆の奮戦とか、流血とか、作戦とか全否定ですか？
ていうか、受肉したサーヴァント数万体全部相手どれるの？こいつ。
ドンだけ強いんだよ、というかどんだけ弱体化しているんだ・・・。

「なにせ、この身はカリバーンを抜く前のアーサー王のようなもの。
生前所持していた５つの対神宝具の全てを失っているいまのおれは、とてもではないが強いとはいえない。
そうだな、仮に最強であるバーサーカーでの召喚であれば皆殺しにするのに１０秒かからないだろう。
それは、悪霊枠で召喚された玉藻でも同様のはずだ。あと、戦闘員もな」

話を振られた９人は、ためないなく頷いている。それを見て、他の面々も微妙な顔をしている。
戦争の余韻台無しだ、コレ。

「それに、この場の面々で神話級の奴が一人もいないしな。
ギリシャからヘラクレスやアキレウス、インドではカルナやアルジェナ。
あとは・・・ギルガメッシュとエルキドゥあたりだな・・・。
彼等が適正なクラスで召喚されれば歯が立たないだろう」

その、有名どころを上げたアサシンの言葉で、ギルガメッシュ、という言葉に相手５人の顔がこわばった。
なにか、心当たりでもあるのだろうか。

「特に、この世の全てを集めたというギルガメッシュや、それと互角だったというエルキドゥには勝てる気がしない。

古ければ古いほど強いのが神秘。最古の物語の英雄には勝てないだろうな・・・」

見る見る青ざめていくマスターたち。え?.なに?.そいつが召喚されてるの?

「とまあ、上には上がいる。
生前のおれとて、無敵の怪物と呼ばれながらも上がいた。
そんなものだ。正直心は全く躍らない。
ということで、断らせてもらう」

そんな彼らのことなどどこ吹く風、アサシンは改めてライダーの勧誘を断った。
それを聞き届けると、ようやくライダーは腰を上げる。
その巨躯は、立ち上がると尚のこと勇壮だった。たとえ、満身創痍であっても。

「残念だ。誠に残念だ。
・・・だが、余はあきらめんぞ。必ずその方を幕下に加えると約束しよう。
征服王イスカンダルの名にかけて」
「まだあきらめないので?.」
「無論だ。そもそも余は戦略的敗北を戦術的勝利で塗りつぶしてきた男。
正直負ける気がせん」
「戦略的に負けている相手に、征服を挑むことがまずおかしいと思いますがね」

ここで、ようやく緊張感は完全に解けた。
敵を一人も倒せないことは惜しくもあるが、とりあえず全員が無事であったことを喜ぼう。

そう思って、帰ろうとしたそのときだった。
傷だらけのアーサー王がアサシンに叫んだ。

「待て、アサシン」
「・・・まだ何か」
「貴方は、モードレッドの願いをよしとするのか！」

その言葉に、あらわになっているモードレッドの顔がゆがんだ。
彼女たちにしてみれば、互いに生前死後を問わず不倶戴天の敵となっている。
生前は国家の存亡をかけて、死後は互いの聖杯にかける願いを全否定するもの同士として。

「そーいえば、モードレッド。お前聖杯に願うとか何とか言ってたな」
「・・・すまん、つい」
「ダメじゃないか、そういう大事なことはおれに相談してくれないと。事前に言ってくれればおれからマスターに進言してやるから・・・な？」
「うん・・・」

なんというか、モードレッドは微妙な表情だ。願いの是非ではなく、処理の手続きとしての問題を指摘している。
聖杯に願いをかけること自体は問題に思っていないようだ。

「・・・アーサー王。
その質問に答える前に聞かなければならないことがある。
貴方のことは、モードレッドから聞いているが、なにせ片方からだけの意見を聞くことが正しいとは思えない。
まず、伝説とは容姿が違いすぎるしな・・・。
お前は真実キャメロットを治めたアーサー王で、国を守る為にモードレッドと戦い相打ち、その結果国が滅びた。間違いないか？」

「そうだ！」

アーサー王は、ネロやモードレッドと酷似している彼女は二人と違いすぎる眩さを持って応じた。

そのあり方に、何の恥もないといわんばかりに。

「そうか・・・じゃあ言いたいことも特にないし、言うべきことだけ言うとしよう」

その、アサシンの顔はさっき己の王を語ったときとは真逆だった。情熱も苦渋も一切含まない。しいて言うなら、呆れているようだった。

そんなアサシンは、酷くどうでもよさそうに、アーサー王に酷薄に言い切った。

「戦って負けて死んだくせにごちゃごちゃ言うな」

・・・。

あのー、もう少し言い方ってものがあるのではないでしょうか？

キャスター、ジル・ド・レェに言った時だってもう少し温かみがあったような・・・。

あまりにも突き放した言葉に、アーサー王は元よりモードレッドも眼を見開いている。

「よし、撤収するぞ」

「ま、待て奏者よ！

他に言うことはないのか？」

国を滅ぼした王として、思うところがあるのだろう。ネロは立ち去ろうとするアサシンを呼び止めた。

アーサー王とモードレッドは未だに口から言葉が出ない。

「ネロ、同情は無意味だ。あの王の言っていることは聞くに耐えん負け犬の感傷だ。
あの王の治世など、同じ時代の同じ国を生きたもの以外には理解することなど許されない。
だが、手に剣を持って戦った時点で、その是非は結果に委ねられる。
それは、強い弱いでも善し悪しでも多い少ないでも生き死にですらない。勝ち負けの問題だ」

酷く残酷に、ばっさりと切って捨てる。
甘さとか理想とか、夢とか一切含まない、現実どころか摂理を語るようだった。
まるで、肉食獣に草食獣が食べられることは自然だといわんばかりに。

「負けても生きていれば再起も図れるだろう。だが、死ねばそこまで。
そして、過去を死後に改ざんするなど愚の骨頂。戦った結果が気に入らないからと、聖杯に改ざんを願うなどあってはならない」
「それで納得するのは武人だけだ！それでは民が救われない！」

アーサー王は、傷だらけの体から血を吹き出させながら叫ぶ。
アサシンの言葉を認めれば、自分がここにいる意義そのものが失われるのだから。
あるいは、国に奉げてきた人生そのものが。
しかし、それすらもアサシンは切り捨てる。

「納得も救済も無意味だ。その必要はないだろう。ただ事実があるのだから。
そして、まさかお前、それが厚顔無恥な願いだと気づいていないのか？
国を滅ぼしたいと願って戦ったモードレッドは、正当な勝者だ。お

前はそれに泥を塗っているんだぞ」
「バカな！国を割って騎士達を争わせたモードレッドが勝者だと?!」
「当たり前だ。滅ぼすために戦って滅ぼしたんだ。勝者とは目的を達成したもののこと。
　であれば、綿密な計画のもと国を滅ぼすために画策し、実行し実現させた彼女は間違いなく勝者だ。
　それとも、お前は自分が勝ったというつもりか？」
「それは違う！だが、私は民のことを想って・・・」
「じゃあ聞くがな、聖杯に戦争の結果を覆すことを良しとするのか？
　聖杯に願ってでも国の破滅を回避することが王の責務だと？」
「そうだ！王とはかくあるべきだろう！」
「心情的には理解できるが論理的には否定せざるを得ないな」

　アーサー王は、満身創痍で尚苛烈だ。己の正しさを貫こうとしている。
　アサシンは、確信を持ってそんな彼女を退ける。そこに迷いは全くない。
　なぜだ、どうしてここまで自分の正しさを確信できるのだろう。

「お前が滅ぼしてきた『蛮族』が同じことをしたら、お前はそれもよしとするのか？」
「・・・え？」
「お前は剣で切り殺してきた連中は全員納得して死んだのか？お前が率いた軍勢で踏み潰してきた連中は全員救済されたのか？
　そいつ等が、同じことを願ったとして、その結果お前の国が滅びたらそれでも『王』ないし『族長』の責務だ、と肯定できるか？」

　そのときの、アーサー王の表情といったら、見れたものではない。
　体の疲弊以上に、先ほどの敗戦以上に、彼女はアサシンの言葉によって自信を喪失しようとしていた。

「そこにいるイスカンダルが、自分の国の存続を願ったとして、その結果イスカンダルの死後も領土が拡張され続け、結果お前の国が滅びても納得できるのか？

お前がやろうとしていることはつまりそういうことだ。やり出したらきりがない。そんな時間の無駄には付き合えない」

「待て、アサシン！」

アサシンは、彼女に背を向けた。今度こそ拠点に帰還するつもりのようだ。

そんな彼を、アーサー王は呼び止める。だが、アサシンはそれでも止まらない。論議は無意味だといわんばかりに。

「おれが何を言おうと生前のように勝てばいいだろう。

おれを殺して、ランサーを殺して、ライダーを殺して、アーチャーを殺して、バーサーカーを殺して、キャスターを殺して。

それで、聖杯を勝ち取ればいい。できるものならな」

アーサー王の正しさは人間としての、王としての正しさだ。それは、悪く言えば自分の国さえよければそれで良いと言う無自覚な傲慢さの発露。

対するアサシンの正しさは物理法則や摂理のような矛盾を許さない正しさだ。彼は、自分だけよければそれで良いという傲慢さを自分にも他人にも許さない。

そんな二人を、モードレッドは悲しげに交互に見つめ、結局アサシンの後に続いた。

他の面々も、治療が済み歩けるようになった戦闘員たちも後に続く。

私は、嵐の海に突き落とされたような絶望に染まったアーサー王を、何度も振り返りながら、それに続いた。

英雄王の晩餐

敗残兵、というのが正しいのか分からないが、５人は来た道をとぼとぼと歩いていく。
来たときは敗北など意識すらしていなかったが、しかしこの場にいる面々の内一人でも欠けていれば、生還することさえ敵わなかったであろう。
それほどに相手は強敵で、こちらも強かったのだ。
「ふふふ、夜風が火照った体に心地よいわい」
「まったく、こっちの苦労も知らないで・・・霊体化しとけよ」
ライダーは、初戦で想わぬ苦戦を強いられた。しかし、それはこちらの土俵に引きずり込んでのこと。
アサシンの作戦を卑劣とも思わないし、事実正面からの戦いだった。
聖杯戦争、思った以上に楽しめそうである。
だが、ウェイバーは疲労の色が濃い。そして、精神的にもいきなり戦場に引きずり込まれて何がなんだか分からなかった。
正直言って、今も混乱している最中である。
だが、そんな彼をしてなお心配させるのが、セイバー、アーサー王の存在だ。
眼はうつろで、全身傷だらけ。正直、見るに耐えない。
なんというか、自分という存在そのものを全面的に否定されたのだろう。
「ケイネス様、此度の戦で首級をあげることができず申し訳ありません」
「言うな、ランサー。叱責は、工房に戻ってからだ。それよりも警戒を怠るな」
「ハッ」
正直に言って、ケイネスは自信喪失どころの騒ぎではなかった。英雄の、その規格外さはよく知っているが、知った気になっていただけのようだ。

前向きに考えれば、敵の手の内も、味方の手の内もすべて見ることができた。真名だけではない、その宝具の力もだ。

なにせ真名、宝具共に隠せたのは自分だけ故に。

とはいえ、それは何の慰めにもならない。ランサーの宝具は補助効果しかなく、あの戦場を覆しうるものではなかったからだ。

おそらく、揃った面々の中では一番弱いに違いない。

それは、あっているといえばあっているし違うといえば違うことだった。

だが、とりもなおさず死地からの脱出は心を緩めるに足るものだった。とにかく、ソラウに会いたかった。恥も外聞もなく、そう思う。

「セイバーよ、いつまでも落ち込んでいる場合でもあるまい。未だに勝つ気でいるのなら、その方のマスターを説得することだな」

「お前、まだ勝てると思ってるのかよ！」

「当然だ。あれほどの将を引き込みたいと思わない王などおらぬ」

「・・・あのな、お前も気づいているんだろう？

アーチャーのサーヴァントが、ギルガメッシュだってことを！」

アサシンの言った、神話の英雄。その中でも格別の扱いをしたギルガメッシュ。

彼等は知らないようだが、この場にいる５人はバーサーカーとアーチャーの戦いを知っている。

そして、アサシンが語ったこの世の全てを集めた、という言葉から『無数の武具』を投擲するアーチャーの真名に思い至ったのである。

古ければ古いほど強いのが神秘である以上、人類最古の物語であるギルガメッシュ叙事詩の主人公は、この場にいる全員が束になってもかなうものではない。

そう、アサシンは言っていた。

よりにもよって、それが戦争に参加しているのである。アサシンを倒すのがまず無理で、その後にはもっと強いのが控えているのだ。

ウェイバーの発言も当然であろう。

「お前の思惑通りにことが進んでも、ギルガメッシュには絶対に勝て

ない！
　どうするつもりだよ！」
「決まっている。ギルガメッシュも引き入れる」
　ライダーは、満面の笑みでそう言った。彼にしてみれば、当然の話であろう。聖杯などに頼らずとも、受肉ができるのだ。争う意味が無い。
　ウェイバーは、今度こそがっくりとうなだれた。
「坊主、想像してみろ！
　玉藻の前の宝具で受肉を遂げた余の軍勢が、ギルガメッシュの持つ武具で武装し、アーサー王やモードレッド、アサシン、ランサー、ネロに率いられるその様を！」
「アサシンが、バーサーカー枠で召喚されてたら、直ぐに倒されそうだけどな」
「なに、それはそれで心が躍るではないか」
　アサシンの自虐はともかく、ライダーはアサシンを高く評価している。
　兵に慕われ、兵を愛し、兵を効果的に活用するのは良い将の証。これが兵の一人一人が怪物というのも面白い。
　個としての弱さなど関係ない。なんとしても引き入れたい人材だ。
「あのな！僕たちはまずアサシンに命を狙われてるんだぞ！そこをどうやって凌ぐのかを考えろよ！
　それに、想像しうる限り最強のサーヴァントであるギルガメッシュが、他のサーヴァントと手を組むなんてありえないだろうが！」
「弁えているではないか、雑種」
　三騎のサーヴァントは警戒をしていなかったわけではない。
　だが、当然のように輝く船に乗った王はそこにいた。
　警戒できる距離を隔てて、圧倒的な速度でここに来ただけといわんばかりに。
　黄金の鎧に身を包んだサーヴァント、アーチャーは上機嫌でこちら

を見下ろしていた。
「アーチャー・・・！」
ランサーとセイバーが身構える。傷だらけではあるが戦意はなえていない。
もっとも、それがどれだけの意味があるのかは知れないが。
「我の真名にはもう思い至っているのであろう？
良いぞ、我を見ること、聞くこと、話すことを許す」
最強のサーヴァントは、絶対の自信を持って輝く船を地に下ろした。
傲慢きわまる言動だが、しかし人類最古の英雄王にしてみれば当然の言動であろう。
ただ一人の王であった自分を差し置いて、王を名乗るなど雑種に過ぎない。
この場にいる面々は、納得せざるを得なかった。
「水に落ちた犬でも叩きに来たのか？
意外とせこいものよな、ウルクの英雄王も」
挑発するのは、やはりライダーだ。
とはいえ、アーチャーもそれを本気にはしない。なにせ、彼はひたすらに上機嫌だったからだ。
「その様では何を言ってもむなしいぞ、雑種。
我が直々にここに来たのは他でもない。労をねぎらうためよ」
「ははぁ、貴様見ていたな？」
「不興を慰めるには十分すぎる茶番であった。王たるこの我が、その労をねぎらうのは当然であろう
さあ、乗るがいい。宴の準備は整っているぞ。その姿で王の前に立つなど、本来はありえざることだが、特に許す」
固有結界の内側での戦いを見ていたというのであれば、それは宝具によるものだろう。
この男が真実英雄王であるのなら、その類も持っていて当然だ。
だが、宴席を用意した、というのはさすがに全員が意表を突かれた。
まあ、アーチャーが自分に対して正しく認識しているのであれば、

傷だらけのサーヴァントなど相手にするまでもないということだろうが。

「ではお言葉に甘えるとしようか」

まず乗ったのはライダーだった。それにウェイバーも恐る恐る続く。

ケイネスも、戦争の疲弊が抜けきらず相手に逆らう気が起きず乗り込み、ランサーも続いた。

セイバーは、しばし呆然としたが、しかし問答を持ちかけられては退けない。決然として乗り込んだ。

アーチャーは、全員が乗り込むとその船を浮かび上がらせた。

ライダーの持つ神威の車輪も、コレに劣るほどの宝具ではないだろうが、しかしここまでの優雅さはない。

法則の一切を無視した速さと快適さで、一行を遠坂邸に迎えたのだった。

「さあ、好きに飲み、食べるがいい。無礼講である」

遠坂邸に用意された宴席では、おそらく神代の酒や肉、料理の類が大量に並べられていた。

その一つ一つが宝具としての価値を持つであろう、それほどの魔力を秘めている。

魔力に餓えた5人は、思わず唾を飲み込んだ。もちろん、真っ先に食べ始めたのはライダーであるが。

「むはぁ！こりゃあうまい！」

「当然だ。我の蔵には至上の物しかありえない。

それは武具に限らず万物に及ぶ」

とはいえ、神代の酒はともかく料理の類まで収められていたわけではない。

材料はあったので、ゴーレムに作らせただけだ。

人類の知恵のあらゆる原典が収められた蔵。その力は戦闘のみに限らない。

アサシンが語ったとおり、戦闘面に限って言うのであれば同格の者はいる。それは傲慢不遜な英雄王自身が認めるところだ。

だが、現在過去未来を問わず人類の生み出す全てを所有している英雄王は、間違いなく究極の一であろう。

そんな彼だからこそ、真面目に戦闘をしようという気は全く起きないのだが。

言ってしまえば、彼が真面目に戦争をしようと思ったらそれこそ無粋の極みである。

エルキドゥが召喚された場合を除いて、それこそ勝算はありえない。

「ありがたくいただくが・・・何を考えているのだ、英雄王」

ランサーは、至上の料理を食べつつも、英雄王に尋ねた。コレは、文字通り敵に塩を送っている。

料理を食べるだけで魔力は供給され、必然怪我も癒えていく。特別な呪いを受けていない以上、サーヴァントである彼等の治療は速やかだ。

「なに、このまま無抵抗で殺されては興ざめということだ。

貴様等とあの怪物共、勝者が我の前に立つ故な」

やはり、ウェイバーの予想したとおりのことだ。この英雄王は他人と手を組むことがありえない。

そして、バーサーカーが脱落し、キャスターもあの外道。もはや、この3組以上の戦力は整えられないということだ。

ケイネスも、ウェイバーも至上の料理を食べているにもかかわらず気持ちはへこんでいる。

「ふっ、敵が減るまで待つということか?」

セイバーは、強がりであると知りつつ英雄王を挑発する。

もちろん、その間もひたすら料理を食べ続けている。なにせ、魔力の枯渇具合で言うのならライダーをも凌ぎかねないのだ。

決して、こんなおいしいものがあったなんて!と思っているわけではない。

「何を言う、お前たちがびくびくと潜んでいるから我が手を煩わせる

羽目になったのだ。
ただの一騎も落としていない貴様等が、大言を吐くではないか」
ケラケラと笑う英雄王。
事実、現状脱落者はバーサーカーのみ。そして討ったのはこのギルガメッシュだ。
なるほど、筋違いにもほどがある発言だ。
「・・・それにしても、見ものであったぞ。
あの『凡夫』めに騎士王を名乗るものが説き伏せられるのはな！」
思い出し笑いという奴だろう。英雄王は膝を叩いて笑った。整った顔立ちも歪めての大笑である。
事実、セイバーは返す言葉もなく英雄王が現れるまで自問自答を繰り返していたのだから。
だが、凡夫という言葉には、さすがにランサーやライダーも眉をひそめる。
「勝者が残るは当然の理。なるほど、それを覆すには聖杯が必要だろうよ。
が、それを得るにも勝たねばならん。せいぜいあがくことだな」
「凡夫とは、アサシンのことか？」
「当然であろう。あの男は、貴様たちとは違う。
力もあるのだろう、事もなしたのだろう。だが、あの男は英雄とはとても呼べぬ。
その辺りも弁えているようだがな」
「ふむ・・・。だが、得がたい男であるのも事実だ」
「確かに有能ではあるのだろうよ。だが、つまらぬ。勤勉だけがとりえでは、見ていても飽きる」
征服王は、英雄王のいわんとすることを察したようだ。
しかし、ランサーにもセイバーにもそれが理解できない。
力があり、事もなした。それで英雄ではないとは如何に。
「あれは対応者だ。なにをするにしても物の道理以外には動かぬし動けぬ。
何かをしてやろうという気概がまずない。己の器量の矮小さを知

り、その分をわきまえる。
我の召喚者と同じ、逸脱者にはなりえぬ凡夫だ」
有能であると認めるのは、彼にしてみれば珍しいことである。
だが、有能であるだけならば自分がいる。英雄王は征服王と違い臣下を必要としない。
彼が他者に求めるのは愉悦だ。コレばかりは己の中には求められない。
そんな彼にとって、当然のことをわきまえて動くアサシンは凡夫である。
ある意味、裁定者であるギルガメッシュと、中庸であろうとするアサシンの価値観は近い。
つまり、ギルガメッシュが思っていることとアサシンが思っていることは、大体同じになる。
腹を立てることもないが、しかし気に入ることはない。彼が気に入るのは、望みが大きすぎ、その前に挫折するものだ。
「セイバーよ。お前の王道は『正しい』。お前の手に余るというだけでな。それは『凡夫』も認めるところだろう。
だが、貴様は負けた。そして死んだ。なるほど、荷が重いようだったな！」
付け足すべき言葉など何もない。あの男は、ギルガメッシュの思う言葉をすべて言ってしまった。もう何も残っていない。
だが、それでもギルガメッシュは上機嫌だ。なにせ、自分が言うよりもあの男が言うほうがよほど説得力がある。
なんでもそうだが、説得とは受け手にとって何を言うかよりも誰が言うかのほうがよほど重要だ。
あの男の語る王道は、少なからずセイバーに共感を与えた。形は違えども、民を愛する王とそれに仕えた軍人。
セイバーをして羨望を禁じえない部下との絆の結晶『王の軍勢』を前に、その在り方を真っ向から否定する様。それは、セイバーに納得を与えるものだった。
王とは、民を治めるものだ。軍を率いるのも、その一端でしかない。

誇るべきは戦果ではない。守り抜いた民の笑顔だ。
だが、だからこそ聞いてしまった。己の願いを否定するモードレッドの願いを肯定するのか。
聞いてはいけなかった。彼は、あくまでも公平だった。公正だった。自分以上に。
自分の公平さ、公正さは国を守る為のものだった。あの男にはその垣根すらない。彼にしてみれば、自分の願いも我欲以外の何者でもなかったのだ。
そんな彼だからこそ、暴君であるギルガメッシュが言うよりも、何倍もセイバーを傷つけた。
「・・・国の為に理想を掲げて滅私奉公する・・・。
そういう王もいるのだな」
つぶやいたのは、酒をあおる征服王だ。
彼自身、認めた男に王道を否定されて思うところがあるのだろう。
「まあ、なりたいとは思わんが」
「だろうな、貴様にその生き方は似合わん」
ランサーは、軽く笑った。そもそも、彼だけはあの男に羨望はしても否定されてはいない。
ギルガメッシュが彼の思想から凡夫と見た。セイバーは彼の宣言から守った民を見た。イスカンダルは彼の戦いから率いた軍を見た。
では、ランサーは？
決まっている。騎士としての忠節だ。
彼は、誇るべき主を持ち信念の元に忠義を貫いた。そこに一片たりとも曇りはない。
そんな彼がどうして聖杯戦争に参加しているのか興味は尽きないが、正直羨望を禁じえない。
だが、だからこそこの戦いで騎士道を貫こう。幸い、今までであったサーヴァントは皆首級に値する強敵だ。
・・・。おそらく、ランサーとしての自分では及ばないだろう。だが、ライダーがいる。
もしも自分が力及ばすとも、ライダーならばマスターを守ってくれ

るだろう。
自分の手で聖杯を奉げたかったが、それができずとも満足だ。
少なくとも、今日の初陣はそれほどまでに充実していたのだ。
「私は・・・！」
民のための理想を貫いたアサシンに願いを否定され、英雄王に己のあり方を笑われ、俯いていたセイバー。
彼女は、目をむいて食事を再開した。その細身からは想像もできないほどの量を、自棄になって食べ始めた。
「私はそれでも、聖杯を求める！」
豪華なテーブルに並べられた、神代の料理。その全てを平らげんばかりに、セイバーはがっついていく。
アサシンも認めたこと。要は勝てばいいのだ。残る5組、その全てを打ち倒して、聖杯に願いを託す。甘くて、たまらない。
だから、今はとにかく食べる。食べて英気を養う。これ、ほっぺたが落ちそうだ。
たとえそれが現実逃避だったとしても。いや、それにしても美味しい。
我欲で結構だ。私は国を救う。持ち帰っても良いでしょうか。
おいし～～～～！
「フハハハ！そうだ、我が催した宴だ。残して恥などかかせるなよ？」
ここで、意気消沈し自害などされても面白くない。そう簡単に悟られては興ざめだ。
わざわざ労ってやったのだ。食べて回復し、あの怪物どもを倒し、ライダーやランサーをも討ち、我が前に立つがいい。
それぐらいのことができなければ、英雄は名乗れまい。
「では余も負けてはおれんな、なあランサー」
「そうだな、女に食欲で負けては立つ瀬がない」
負けじと、ランサーやライダーも食いついていく。
つい先ほどまで血まみれで満身創痍だったとは思えないほど、元気に喰いついていく。
「・・・英雄王よ、この地に私の婚約者がいるのだ。呼んでもかまわな

いか？」
「かまわぬ。許す」
ケイネスは、もはや開き直っていた。
この状況は、もう自分ひとりで変えられるものではない。
時代を築き上げてきた英雄英傑が揃った戦場だ。ただの魔術師である自分にできることなど限られているのだろう。
であれば、その中で最善を尽くす。その上で、自分の優秀さを示す。
初陣を、敗北に近い引き分けで飾ってしまったが、なんのことはない。自分は何も失っていない。
アサシンも言っていたことだ。勝てば全て解決する。
それからも英雄王は、全くの善意から自分を楽しませた5人を蔵の中身を用いて歓待した。後から来たソラウも、それに混じった。
アサシンは、彼等5人が疲労し、明晩のキャスター戦に余計なことをされなければそれでいいと思っていたが、常識の外にあるギルガメッシュの手によって、その目論見は潰された。
とはいえ、有利であることに変わりはない。

さて、わざわざ敵を回復させているアーチャーに「なにやってんだこいつ」と時臣ががっくりきているとき、彼を動揺させる事件が起きていた。
遠坂凛の家出である。

「いやぁあああああ！」
友達を助けるために、親の言いつけを破って飛び出した少女。
聖杯戦争の渦中、魔術師の少女が夜の街を出歩くという無謀。
それは、何の矛盾もなく彼女の身を襲った。
キャスター、ジル・ド・レェの海魔が彼女を見つけたのである。

彼女を保護するために母親が探していたが、それも無意味。
ここには来れないし、いたとしても何の意味もない。
バーサーカーが脱落した今、彼女を守るために動いた参加者は一人もいない。
それは、アサシンがあきらめた犠牲。今日は、キャスターと事を構えないと判断した彼の罪。
それは、未来の大魔術師の命をはかなく散らす『はず』だった。

「はぁ!」

夜の闇の中にあって、彼女はなお光り輝く。
聖なる旗を振りかざし、海魔を退けるその姿はまさに英雄。
金色の髪に、銀色の髪飾り。アルトリアを思わせる清廉潔白なるその姿は・・・。

「お怪我はありませんか?」

事態を理解できず、気を失う少女。
聖女は、彼女を優しく抱きしめた。

「大丈夫、必ずおうちに帰してあげますからね」

腰に下げた剣でなく、軍旗を武器とするその少女。
既に出揃っている7騎のサーヴァントではありえない、彼女の正体は一体?

ＳＧ３　全知全能

「どうだ、なかなかのものだろう」
「ぐへへへ、いやぁ、たまりませんな～～～」

スケベ親父のような顔で悦に浸っているのは、玉藻の前。
消耗した体を押して、見張りに行っている戦闘員を除いた４人の前で、尻尾をブラッシングされていた。
もちろん、アサシンの手によって、である。
これというのも、アサシンが『彼女が一番の功労者である』と言って、真っ先にねぎらったからである。
まあ、確かに彼女の宝具で一掃しなかったら色々やばかったかもしれないけど。

「生前は、馬や娘やペットにブラッシングしてやったもんだ・・・」
「ご息女はともかく、馬やペットと同じ扱いにしないでください！」
「すまんすまん」

ともあれ、玉藻は最高に嬉しそうである。
反面、他の３人はぐぬぬぬ状態だ。それを見て、尚のこと調子に乗るのが玉藻である。
露骨に擦り寄ったり、臭いを擦り付けたりしている。
まあ、度が過ぎると判断したらアサシンがほっぺを思いっきりつねり上げるのだが。

「こうやって、分かりやすく労をねぎらうのは上に立つものとして当然のことです。
より一掃の働きを期待できますし、裏切らせないためにも大事です」

裏切らせないか・・・。

さっき、アサシンはモードレッドの叛逆を高く評価していた。
アサシンは、モードレッドが裏切ったことそのものはどう思っているのだろうか。
誠実な彼は、裏切りを好みそうにないのだが。

「おれは別に聖人君子ではありませんし、それを他人にも強要しません。
第一、裏切ることそのものは悪いことではありません」

至極当然のように、ブラッシングしながら応えるアサシン。
・・・なんか、私も裏切られそうな気がしてきた。
そして、それよりも劣るものがある以上、利害が一致しなくなれば裏切られることもあるでしょう。
なに、肯定派なの？アサシンらしく、背中からブスリなの？

「あのですね、マスター。人間は、自分や家族が一番大事なんです。
加えて言うなら、上の人間に不満があれば、下の人間は反乱を起こして当然です。
それを否定するということは、上の人間が何をしても下の人間は我慢しろ、ということになってしまう。
そっちのほうが、よほど不誠実でしょう。人の上に立つ者は、下の人間に裏切られないように努めなくてはいけません」

なるほど、確かにそっちのほうがアサシンらしい。
自分は忠実でありながら他人にそれを強要せず、だからこそ、相手に対して誠意を尽くす。
現実主義者な彼らしい人事だ。
しかし、彼は非常に忠実な人だ。少なくとも自分を欺いたり無碍に扱ったことはない。
空中散歩を除く。
そんな彼は生前、王に対して命令を断ったことがあったのだろう

か。なさそうだが。

「ありますよ。正式な命令ではありませんでしたが、陛下の依頼を断ってます」

そのアサシンの顔は、苦悶に満ちていた。ついうっかり、玉藻の尻尾を握り締めてしまうほどに。

彼が断るとは、よほどのことだったのだろう。

一体、どんな無茶な注文を。あれか、肉体関係を強要されたのか。

「品がないですね。

まあ、それも多少はありましたが。妹と結婚しないか、とか。

それはそれで断ってますが、もっと別の重要ごとです」

それはそれであったんだ。モテモテだな。ちっとも嬉しそうじゃないけど。

「クーデターを起こしてくれと依頼されまして、それを断ってます」

・・・。

今なんて？

クーデター？軍事的に行動して、政権を奪取するというあれ？

王様から『王に背け』と命令されてそれに背いたの？

なにそれ、頓知？

「いえいえ、それだけ状況が悪かったということですよ。

といいますのも、私の仕官先は大変に歴史のある国でして、その分勢力図は混沌としていました。

王様だけでも４人いて、大王派や大公派、番外といった具合に様々な派閥がそれぞれの主権を主張していました。

つまり、最高責任者の言うことを聞かない奴が大量に居たのです」

な、なんだか複雑な話になってきたぞ。歴史の授業みたいだ。
自分の頭でも理解できるだろうか。記憶喪失なので、自分の頭の良さは憶えていないが、そんなによくなかったと思う。

「いや、理屈は簡単なんです。
要するに、皆が好き勝手やるから全体の行動が鈍いんです」

その言葉に、ネロはうんうんと頷いている。
ローマ帝国というのは、権力争いが盛んだったという。皇帝だった彼女も様々な手段で政敵を討ったというし・・・。
なるほど、なじみのある話なのだろう。

「加えて国軍がない。コレが致命的でした。
各有力者が強力な兵を従えていたものの、所詮は２０人に満たない少数精鋭。
仕合による交流はあっても合同訓練はなく、総数も知れたもの。
加えて、強力な兵も血統か才能に依存したもので、補充もままならない。
というか、種族として子供が生まれにくく、才能のある若者を戦線で失うと家がヤバイ、という次第。
そりゃ負けますわ」

自棄になって笑うアサシン。彼が笑うのだから、それこそ笑うしかない状況だったのだろう。
確かに、伝説の勇者の血統とかは強そうだけど、死んじゃったら代えがきかない。
言い方は悪いけど、戦場では人が死ぬだろうし、死ぬことを前提に組織を作らないといけないのか。

「己の領地を狙う賊程度ならばどうとでもできますが、

国全体に戦場が広がると、どうしようもなく対応が遅れる。
個の強さは所詮局地的なもの。広域戦では平均水準の高い、全体の足並みの揃った行動が要求されます。
最高司令官の指揮に従わないものが多く、作戦がなりたたない。これでは戦争になりません。
加えて、広域戦のための効率的な情報システムも誕生し、いよいよもって窮地に立たされたわけです」

な、何てことだ。
よくわかんないけど、アサシンはそんなに状況が悪い国に仕官してしまったのか。

「二人の天才が、完成させてしまったんですよ。軍の在りようを変えるシステムをね。
まあ、そのシステムの原案はおれが作ったんですが」

なにやってんのこいつー！
コイツが悪いんじゃん！
ピンチだったのはコイツのせいじゃん！

「まあまあ。その二人は戦後自分のしでかしたことにえらく落ち込んでいましたが、正直自分はあんまり気にしてません。
傷口に塩を塗る程度のこと。放っておいても傷は傷です。放置すれば狙われていたでしょう。
おれの娘が成長していればそれも補えたのですが、間に合いませんでしたし・・・。
どのみち、国家全体の改革が必要でした。それは、私だけではなく国家の要職に突く全員の共通認識でした」

そこまで聞いて、ネロは頭を抱えた。『どこも同じよな』、という風だ。

「ネロが察している通り、改革は困難を極めました。
なにせ、同じ国とはいえ世代を超えて権力争いを行ってきた各地の貴族たちが、怨恨を越えて手を結ぶなどありえません。
個人レベルでは仲良くなれても、家と家の利害はどうにもなりません。なにせ、家族や臣下の生活もかかっているのですから。
しかし、改革は必要です。ではどうするか。手っ取り早いのがクーデターによる独裁政権というわけです」

なるほど、それができるのはアサシンだけだったというわけか。
生前のアサシンは強かったらしいし、権力を得てもそう暴走しそうにない。
王様が頼むのも、分かる。王がクーデターを起こしてくれというのも、変な話だが。

「王がそれを頼むというのは、統治能力がないと自白しているようなもの。
聞くだけでも辛い言葉でした・・・。一体どれだけ苦悩されたことか。
まあ、断りましたが。
なにせ、ネロのような万能の天才でも改革はできなかった。しっかりと、英才教育を受けて尚、です。
生まれてこの方人を殴ることしか知らなかったおれに、それはとてもじゃないが勤まりません。
なによりも、独裁政権ということは国家の全てをおれが預かるということ。
余りにも荷が重すぎた・・・」

その眼は、ネロに向いている。アサシンは、ネロを尊敬しているのだ。
問題を知りつつ、挑戦することすらしなかった自分と、問題を見据

え、失敗したとはいえ挑戦した彼女を比べて。

「その後戦争が起き、全員の予想通りにフルボッコ。勝ったは勝ったが壊滅状態。

いやおうなく改革することになり、自分は他の国との連合軍の司令官になりました。

自分は、ちゃんとした『軍隊』を組織し、部下の9割以上の犠牲と引き換えに勝利を勝ち取り、

唯一の勝者であるとたたえられた結果の地位でした。まあ、嬉しくはありませんでいたが」

その表情は、いつになく沈んでいる。

国を救うためという大儀の元、部下を死地に送った無能な指揮官。

それが、彼の自己評価なのだろう。

「・・・戦争中、炎の剣を手に入れた折、ほぼ全知全能に近い力を得ました。

そして、それこそ戦争が起こった事実すら書き換えられるほどに。

ですが、それをしてもどうにもならないでしょう?

国は相変わらず内部に問題を抱え、外部からは恨まれている。形を変えて戦争が起こるでしょうね。

死者蘇生も同様だ。生き返らせれば、そいつ等はより以前の死者をよみがえらせて欲しいと願うでしょう。

それができないなら良かったが、できてしまうのが問題でした。永遠に際限なく生き返らせるだけの日々が続くでしょうね。

結局のところ、国一つの運命すら背負えない男には、神の座などふさわしくなかった」

・・・そういうことか。

彼が徹頭徹尾、聖杯よりも被害の元を断つことに気を置いていたのは、そういう考え方があったからか。

彼は、全能であることに魅力を感じず、むしろ恐怖を抱いている。
世界の全てを支配することを拒絶したがゆえに。

「ですが、こうも思います。
生まれながらに難病を背負った少女は、奇跡を望んではいけないのか。
両親を不慮の事故で失った少女は、やり直しを望んではいけないのか。
神の啓示を受けて立ち上がった聖女は、救われてはいけなかったのか。
神の教えを守る為に戦った王は、死後辱められるほどの悪人だったのか。
未熟な自分は、未だに心のどこかで迷っているのです」

アサシンは、自分に言い聞かせるようにつぶやきながら、玉藻の前の毛づくろいを続けた。

ＳＧ３を習得しました。

ＳＧ３　全知全能

全てを支配するということは、全てに支配されるということ。
失敗を恐れるリアリストである彼は、困難であることを知りつつ理想を目指す王を尊敬している。
例え失敗しようとも、その行為に意味があると信じて。
だからこそ、そんな彼よりも偉くなってはいけないという想いが彼の中にある。
政権というバトンを受け取らなかったが故に。

なんでも思い通りになるということは、何もしないのと同じである。

ああすればこうなる。こうすればああなる。

全知全能であるということは、つまりやる前から結果を観測できるということ。

やる前から結果は確定している以上、実行するという行為そのものが無意味である。

そこまで行かなくても、行為によって起こりうるリスクを念頭に動くと、どうしても動きは鈍くなる。

力が大きすぎれば尚のこと。

小心者の彼には、器に見合わない力というわけだ。

パートナーに求めることは？

一緒にいて楽しいことだな。

気が休まる人と一緒にいたい。

ＷＥＡＫ　ＰＯＩＮＴ

才能がない。

加えて、仕事も忙しいから鍛錬も足りない。

未熟もいいところだ。

喜劇と悲劇の幕開け

こうして、第二局面は幕を下ろした。
明らかになった各陣営の状況。
想像しうる限り最強のアーチャー、ギルガメッシュ。
彼は、自分の持つ力を正しく認識しており、故に真面目に戦争をする気がない。
すれば、その日の内に聖杯は遠坂のものとなるだろう。そんなつまらないことをする御仁ではない。
時臣は涙目だが、必要経費である。なにせ、順当に行けばまず間違いなく勝てる。
自分で選んだサーヴァントだ。文句を言うのは筋違いだろう。

受肉を果たした反英雄の群を率いる、アサシン、兵藤一誠。
彼は、サーヴァントの魔力を供給するマスターの負担を減らすために自分の部下を受肉させるという、意味不明の暴挙に打って出た。
加えて、その手段は第三魔法の上位互換、日本神話の主神天照の権能による死者蘇生である。アインツベルン、マキリ涙目である。
この作戦により、マスターがいなくても行動に一切制約がかからなくなり、この一点においてはギルガメッシュすら凌いでいる。

街で生贄を求めて徘徊するキャスター、ジル・ド・レェ。
彼は、この時代のこの国にはいくらでもある資源を湯水のように使い、膨大な量の魔力をかき集めていた。
加えて、彼はコレを最大限に活用する宝具を所持し、最悪の方法で運用する所存だった。
神秘の隠匿という魔術師としての最低限のルールすら守らない彼は、意図せずとはいえ聖杯戦争の土台から崩壊させようとしていた。

各々が各々のやり方で、魔術師殺しがかわいく見えるほど真面目に聖杯戦争をするつもりのない面々。

さて、バーサーカーは脱落した今、残るはセイバー、ランサー、ライダー。しかし、各々単独での勝利はありえない。

セイバーはキャスターには勝てるものの、ギルガメッシュはもちろん、アサシンの部下であるモードレッドにも勝てない。

ランサーとライダーは、誰にも勝てない（笑）

ではどうするべきか。３人で手を組むか？それで勝てるのはキャスターだけだ。

アサシンには一度挑み、ほぼすべての手の内を明かしてなお敗北。二度同じ手が通じるとも思えない。

ギルガメッシュには、アサシン自身の口から勝てないとされ、勝算は全くない。

これで、あっさりあきらめてサーヴァントに自害を命じるほど、魔術師たちは潔くない。

潔かったら、今の時代に魔術師などできはしない。

ケイネスは、とにかく自分の才覚を信じ、策を講じようとしていた。ただし、そこに自分が戦場で戦うことはない。なにせ、サーヴァント同士での戦いを間近で見たのだ。

もはや、自分が華々しく戦う機会はないと判断したのである。ウェイバーと協力し、サーヴァントを全力で支援する構えだった。

切嗣は、それしかないと思っても賛同することができなかった。彼はアサシンと違い、真っ向勝負することが『できない』。

自分の今までの戦い方に『すがり付いている』彼は、協力するのが最善であると気づいていても、実行に移せないのである。

方向性こそ違えども、融通の利かなさでは、セイバーとどっこいどっこいであった。

遠坂時臣は、まあどうにかなる。ギルガメッシュと時臣の連携が完全でないことは晩餐からして明らかだ。

切嗣のやり方を貫いてアサシンに勝つのならば、アサシンのマスターである岸波白野を拉致し、アサシンの令呪を使わせ全員を自害させるしかない。

完璧な作戦である。１３騎の受肉したサーヴァントの護衛をかい

くぐることができれば、だが。つまり、ほぼ不可能だ。
そんな、もはや主従共に真面目に聖杯を求めて戦争をしているのはセイバー組だけとなってしまった聖杯戦争ではある。
（ライダーは全員部下にするつもり、ランサーはもう優勝をあきらめている）
だが、ここから更に破綻することになるとは、アサシンにすら想像外だった。
聖杯戦争は、ここから一気に第三局面、即ち最終局面へと向かっていく。
正史の通り、その始まりを告げるのは、キャスターの大海魔召喚であった。

ジル・ド・レェの心を支配しているものは怒りであった。あの気高い聖処女の戦いを、有象無象のそれと同様に扱われたのだから。
それをマスターも応援した。男女のことだ。きっと複雑なことがあったに違いないと察したのである。
だからこそ、この町に潜んでいるであろうあの神の使いを、どこに潜もうとも確実に轢殺する。そのための準備をしていた。その後のことなど、一切考えていない。
そんなことをすれば自分もただではすまないとか、全勢力に自分の場所を教えるとか、聖杯に願いをかけるどころではないとか、考えようともしない。
ただ、自分の敬愛する聖処女の名誉を回復させたかった。その為にはあの、この自分とすら比べても汚らしい神の僕を討たなければならない。
まず、ジャンヌ・ダルクの名誉はこの時代においてはとっくに回復している。加えて、アサシン兵藤一誠は神の『僕』ではない。だからというわけではないが、彼を殺しても何の解決にもならない。そもそも、この街にアサシンは潜伏していない。

目的も方法も手段さえも完全に見当違いなのだが、これを指摘する人物はいなかった。まあ、いたとしても耳を貸したかは疑問だが。

それほどに、彼の悲しみは深く怒りは激しかった。アサシンは彼にとって最も重要で繊細な部分に触れてしまったのだ。

そして、多くの無辜の民を生贄にささげることで、大海魔が召喚されようとしていた。

「夜を待たず先に動くとはな・・・。戦闘員、フォーメーションEだ！」

「了解！」

サーヴァントとしての感知力が、アサシンに街での大海魔の出現を感知させた。

キャスターに休憩をさせていたのが裏目に出たか、と思いつつ、アサシンは戦闘員に移動の準備をさせる。

兵は拙速を尊ぶ。向こうの状況は分からないが、ここで待っていては状況が致命的になりかねない。

罠であろうと、向こうが『派手』なことをしようとしているのは確かだ。少々こちらも派手な動きをせねばなるまい。

「マスター、おれの背に」

アサシンはマスターを背負うと、戸惑うマスターを他所にオオミノガの糸で自分とマスターを縛って固定する。

「奏者よ、フォーメーションEとは？なにやら楽しそうだが」

「ちょっと、私に説明はないわけ?!」

「なにやってるんだ！急がないと街がやばいぞ！」

「ご主人様？私なんだか猛烈に嫌な予感が・・・」

事情を飲み込めない４人の手に、やはり糸を渡す。

そして、その糸の端は戦闘員の持つ槍の、その柄に固定されていた。

それを見て、マスターと反英雄４騎は状況がなんとなく分かった気

がした。

「よし、いくぞ！」

「「「「「「了解！」」」」」」

アサシンは、自分も糸をつかみそれにオーラを流し込む。戦闘員7人も同様だ。糸を通じて、一本の槍に9人分の強化系オーラが注がれる。

その槍は、朝日を思わせる眩い輝きを放ち、そして、爆発した。

小ぶりな槍の、その石突が弾丸が発射されるように伸び、大地に突き刺さる。それでも尚伸びる石突は、反作用と共に槍を、それにつながる全員を上空に押し出した。

「「「きゃあああああああああ！」」」

何の予告もなく発射された自分の体。凄まじい風圧に顔を歪めつつ、反英雄の少女たちは悲鳴を上げた。必死になって、その糸を握り締める。

しかし、戦闘員たちは楽しそうだ。

「イイヤッホー！」

「ぶっ殺してやるぜー！」

「ひゃっはー！」

「うひょー！」

「きもちぃいいいいい！」

「もっともっと！」

「スピード上げろや～～～！」

特に、槍を握っている戦闘員は。

「このまま地獄に案内してやるぜ！」

園田（そのだ）　尾瀬伊（おぜい）

出身　日本

種族　転生悪魔

Ｍ．Ｏ．Ｏ　昆虫型　オケラ

Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓランキング　３１位

「ただし、あいつをな！」

たいせつな　たからもの

向こうが隠れる以上、こちらが拠点を固持するわけにもいかない。
切嗣の判断は早かった。暗殺される可能性のあるアイリスフィールを隔離するために、市内の武家屋敷に避難させた。
市内ならば、対軍宝具を使用しにくくなると判断してのことである。
その屋敷内で荷物を整理していたセイバーをアイリスフィールが見ると、手が止まっていた。
「どうしての、セイバー」
「すみません、アイリスフィール。考え事をしていました」
その表情は、浮かないものだった。戦場に立つことなど珍しくないはずの彼女が、どうしてこんなにも沈んでいるのか。
道具を気遣うとか、護衛が弱っているのが不安だとか、そういった感情はなく、ただ心配になりアイリスフィールはその先を促した。
「ライダーとアサシンは、それぞれが生前の部下を率いることを宝具としていました。
アサシンは文字通りの従者として。ライダーは結界の中での軍勢として。
それは、どちらも決定力にかけるものの、非常に心強かった」
自分には、己の象徴であるエクスカリバーがある。これを、剣の英霊である自分は信じて疑っていない。象徴であるのだから当然だ。
だが、こうも思う。彼等もそうなのだろうと。あの８人も数万人も、等しく絶対の絆で結ばれていると。
その関係を羨ましいと思ってしまった。
自分は、王は孤高ではなければならないと思っている。誰かに偏れば、それは公正さを欠き民や騎士に不満を与えるだろうと。
だから、自分は円卓の騎士ともある程度の壁を作っていた。自らを息子だと告白したモードレッドにも。
そんな自分は、絶対に『円卓の騎士』を宝具とすることはできない。
だが、もしも。自分が声をかけたら彼等は来てくれただろうか。

そう思うと、たまらなく寂しくなってしまう。自分で選んだ道とはいえ、遠い異国に一人というのは、辛い。

「セイバー・・・。きっとあなたが呼んだら皆来てくれるわよ」

「少なくとも、ランスロットとモードレッドは来てくれないでしょう。他の面々も、国を滅ぼしてしまった自分を王と認めてくれるかどうか・・・」

それでいい。国を滅ぼした責任を取れるのは、王だけなのだから。ただ、寂しいだけなのだ。それだけだ。

「大丈夫です、アイリスフィール。私はその運命を覆すためにいる」

その、運命を覆すことそのものの無意味さを説かれても、止まることはできない。

あの地で失われた命を思うと、前に進む以外にありえない。

例えそれが思考放棄であったとしても。

この時代からすれば過去のことかもしれないが、自分にしてみればついさっきのことなのだ。

それを、時代の流れだとどうしてあきらめることができようか。

これは、セイバーだけが特別なのではない。きっと、誰にでもあるありふれた願いだ。

だが、だからこそそんな願いをかなえることを容認してしまえば、他の連中も願いをかなえようとするだろう。

アサシンは、だからこそそれを否定し、セイバーはそれでも願った。

アサシンとて、自分の身内が死んだとしても同じことが言えるだろうか。

そういう意味では、勝者の傲慢であるといえた。

だが、敗者の反則を見逃せば、モラルハザードを起こし、人類は一歩たりとも前に進めなくなる。

誰も彼もが辛い過去を改ざんし続ければ、未来などあるはずもない。

そういったことが、セイバーに分からないはずもない。

だが、それでも聖杯を求めるのは、王としての、つまり人を率いることを選んだものの使命感だろう。

あの日、人としての幸せを失うと知ってカリバーンを抜いたのだから。

人を率いる。つまり、志を同じくする仲間と共にあること。

ジル・ド・レェも同様であろう。彼も、在りし日の彼女を取り戻したいだけなのだ。

神の御許にいってしまった彼女と、もう一度会いたいのだ。話をしたいのだ。

つまらない話でいい。面白い話もしたい。昔の話に花を咲かせたい。できれば、触れ合いたい。手をとって欲しい。

その願いが罪であろうか。罪であろうものか。もしそうなのだとしたら、生前の自分にどうして罰がくだらなかったというのだ。あれほど罪と呼べる全てを犯したというのに。

彼女には、どうしてあんな結果が待っていたのだ。あれほど勇敢に戦ったというのに。お前の指示通りに戦ったというのに。

なんなのだこの世界は。一体どうしてこんな理不尽がまかり通る。

善行には善行への報いが。悪行には悪行への報いが。あってしかるべきではないか。そうでなければならないだろうが。

それがお前の仕事ではないのか。そうと信じているものに、どうして手を差し伸べない！

キャスターの、余りにも大胆な魔術行使。それは、当然のように全勢力にその居場所を伝えていた。

セイバーとそのマスターである切嗣は車に飛び乗って、ライダーとランサーは、マスターと共にホテルから戦車で。各々の最速と信じる方法で駆け出していた。

だが、もっとも早く着いたのはアサシンたちだった。

強力な推進力によって郊外の邸から大海魔の上空にとびあがった彼等は、その直上で槍を解除し、スカイダイブ。

障害物も何もかもを無視して、そのまま戦場に降り立つ。

元より、神秘を含まない攻撃はサーヴァントには効果がなく、戦闘員とアサシンは空を跳躍することができ、ネロはそれを模倣できる。モードレッドは魔力放出で、エリザベートは竜の翼による滑空で。ただし、玉藻だけは飛ぶ手段はない。なので、女性の戦闘員二人に抱えられ、夜闇の落ちた街に舞い降りる。

だが、そんな彼等よりも先についているものがいた。当然、参加者ではない。乱入者だ。

金色の髪に銀色の飾りをつけた、戦旗を構えた少女が立っていたのである。

彼女は、呆然と大海魔を見ていた。恐怖の対象ではなく、親愛の対象としてみるように。

夕焼けが夜闇に変わりつつある時間に、冬木の街を郊外に向けて歩いていた金髪の少女は、ふと振り返った。

その先には河があった。そこで、『何か』が行われようとしているのを察したのだ。つい、そこに脚が向かいそうになる。

なにかが、自分にとって重要な何かがそこにあるような気がして。

だが、行くことはできない。自分には使命がある。この地に来たのはその使命を果たすためだ。

自分が向かうべきは、あの山にある魔力の渦だ。きっと、そこに自分の目的がある。確信があった。

だが、それでも後ろ髪を引かれる。あの河にいかなければならないような気がしてならないのだ。

それは、おぞましいようでいて懐かしいような、矛盾したものを感じるのだ。

理性的には前に進もうとして、感情的には反転しようとして。結局脚が動かなくなる。

そうして、コンクリートで舗装された道に縫い付けられたが如き様を晒していた彼女だったが、しかし魔力の渦の中心から何かだ凄まじい勢いで発射するのを感じた。それは、自分の後方を目指している。

間違いない。目的のそれは、自分が惹かれているところを目指して

いる。
そうとわかれば軽やかなものだ。人間の限界を超えた速度で、河に向けて走り出す。おそらく自分が先に着くであろうが、それはそれでかまわない。
今はただ、あの地へ。
そして、駆け抜けた先で見たものはこの世のものとは思えないほど奇抜な、海の底からやってきたとしか思えない奇形の怪物であった。
「ジル・・・」
つい、誰かの名前を呼んで、手を伸ばしてしまった。その、救いようもないほど醜いそれを愛おしそうに。
分かる。分かってしまう。あそこには彼がいる。一緒に戦ってくれた彼がいる。
ああ、手を伸ばせば届きそうなのに。どうして、こんなにも遠いのか。
こんなに遠くなってしまったのは、自分のせいだろうか。ああ、あの時言うべきだった。伝えたかった。私が何を思っていたのかを。決して神を呪ってなどいないことを。
あれはただ、自分が選択した結果なのだと。
そうしていると、背後に誰かが降り立った。振り向くと、そこにはまた別の『彼』が・・・。

仲間とはなんだろうか。

たとえば、王の軍勢。たとえば、忠実無双の無法者。
ライダーもアサシンも呼ぶことにためらいはない。呼べば必ず応えてくれるから。
軍勢も無法者も待つことためらいはない。待っていれば必ず呼んでくれるのだから。

彼等は、仲間なのだろう。そこに、疑いを挟む余地はないのだろう。だが、それだけが仲間なのか。それは違うはずだ。

円卓の騎士も、呼ばれれば応じるはずだ。全員が、モードレッドさえも必要だと呼ばれれば応えるはずだ。

彼女の危機を知れば、いてもたってもいられないはずだ。ランスロットでさえそうだったのだ。

互いの危機を感じあうことができる仲間は最も大事な仲間だろう。最も信頼できる仲間なのだろう。

だが、危機を知れば駆けつける。具足を身にまとい、剣を手に、馬に乗ってはせ参じる。

時間の彼方だろうが、異次元の果てだろうが、未知の世界だろうが、地獄の戦場だろうが、そんなことは関係ない。

貴方がそこにいるのなら。貴方が困っているのなら。貴方が戦っているのなら。貴方が傷ついているのなら。

呼ばれていなくったって。求められていなくったって。迷惑に思われていたって。来るなと言われたって。

駆け出せずにいられようか。手を伸ばさずにいられようか。その名前を叫ばずにいられようか。盾にならずにいられようか。

だって、私と貴方は・・・苦楽を共にしてきたのだから。

それが、仲間でないはずがない。

大海魔を確認し、遥か上空からのダイブ。夕闇を切り裂いて着地したとき、既にそこには先客がいた。鎧装束の女性である。いや、少女だろうか。

後姿からでも分かるほど、清楚で潔白な雰囲気。とてもでは人間の出せるオーラではない。美しい金髪の三つ編みが、風に揺れていた。

大海魔を見ていた彼女は、こちらに気づいたのか、笑顔で振り向いた。おもわず、ため息をつくような毒のない可憐さを感じてしまう。

しかし、その顔を見て戦闘員たちとアサシンは全く同じリアクショ

ンをする。
確かに、まだ遭遇していないサーヴァントはアーチャーとバーサーカー。そのどちらにも該当しそうにない。
ネロたち同様、いるはずのないサーヴァント。それに、４人の反英雄は身構える。だが、アサシンは手で制した。
彼も、同じ思いなのだろう。ただし、いるはずのない『仲間』がここにいるから驚いているのだ。
アサシンは、呆然としながら彼女に声をかけた。

「おれは、お前を呼んでないぞ」

信じられない、といわんばかりに。それほど彼女の存在は想定外だった。アサシンをして、彼女がここにいるなどありえないのだ。
そんなアサシンに彼女は応えた。容姿からは想像もできないほどぶっきらぼうに。しかし、どこまでも優しく。
ありったけの暖かさと親愛を込めて。

「馬鹿ね。貴方が呼ばないから・・・」

ジャンヌ・ダルク
出身　フランス
種族　人間
保有神器　聖剣創造
Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓランキング　４４位

「勝手に来たのよ」

サーヴァントとしての兵藤一誠　追加

兵藤一誠
該当クラス
適正（高）ランサー　バーサーカー
適正（低）セイバー　アーチャー　アサシン
番外　セイヴァー

各ステータス（最高値）
アサシン
筋力　C　魔力　E　耐久　C　幸運　E　敏捷　C　宝具　B
兵装　大雀蜂　サテライト３０
宝具　忠実無双の無法者
固有スキル　六式　念能力

セイヴァー
筋力　A　魔力　A＋＋＋　耐久　A＋＋　幸運　A＋＋　敏捷　A　宝具　EX
兵装　聖槍の祝福　悪魔の駒　炎の剣
宝具　赫奕たる異形態
固有スキル　六式　念能力　次代を担うもの

アーチャー
筋力　A　魔力　A　耐久　A＋＋　幸運　A　敏捷　A　宝具　EX
兵装　炎の剣　各種武器多数
宝具　赫奕たる異形態　魔法の筒
固有スキル　六式　念能力　次代を担うもの

セイバー
筋力　A＋＋＋　魔力　A　耐久　なし　幸運　A　敏捷　A＋

＋＋　宝具　ＥＸ
兵装　赤龍帝の籠手　炎の剣
宝具　赫奕たる異形態
固有スキル　六式　念能力　次代を担うもの

ランサー
筋力　なし　魔力　Ａ　耐久　なし　幸運　Ａ　敏捷　ＥＸ　宝具　ＥＸ
兵装　怪物の神槍　赤龍帝の籠手　炎の剣　大雀蜂　激戦
宝具　赫奕たる異形態
固有スキル　六式　念能力　次代を担うもの

バーサーカー
筋力　なし　魔力　なし　耐久　なし　幸運　なし　敏捷　なし　宝具　なし
兵装　怪物の神槍　赤龍帝の籠手　魔獣創造　炎の剣　大雀蜂　激戦
宝具　赫奕たる異形態
固有スキル　六式　念能力　忠実なる狂犬　次代を担うもの

兵装解説

大雀蜂　Ｃ
兵藤一誠の代名詞。筋力、耐久、敏捷を一段階向上させる。毒を持つが、さほどランクは高くないため、神性を持つものにはほぼ意味が無い。

赤龍帝の籠手　Ａ＋
赤龍帝の魂の封じられた籠手。本来のスペックから大きく下がっている。
筋力、耐久、敏捷を一段階ずつ向上させることができ、最大３段階

上がる。
強化させるごとに竜性が上がる。

新・大神宣言　Ａ＋
彼の為に製作された新しいグングニル。本来のスペックから大きく下がっている。
武器として使用した場合、必中と貫通属性を持つ投擲用の槍となる。
道具として肉体と同化させた場合、筋力を一段階強化。攻撃に必中と貫通の概念を加える。
防御概念を持たない物に対して、耐久を無視して攻撃できる。

魔獣創造　Ａ＋
無尽蔵に生命力を供給する命の炎。本来のスペックから大きく下がっている。
筋力と耐久と敏捷を2段階向上させる。１ターンにＨＰとＭＰを１０パーセント回復させる。
肉体の損傷を回復させるだけでなく、身体構造を変化させることができる。自己改造の上位互換。
正確には本人の宝具ではないため、担い手が死亡する類の因果は意味を成さない。

聖槍の祝福　Ａ＋
汝に罪なし。本来のスペックから大きく下がっている。
幸運と魔力を2段階向上させる。また、天罰の類を無力化させることができる。
攻撃に神聖属性を付与することができる。
本来、人間に対して最大の効果を発揮する祝福だが、当人はその能力によって人間でないにも関わらず最大の効果を得ている。

悪魔の駒　Ｃ

汝は悪魔なり。本来のスペックから変わりはない。
魔力を一段階向上させる。攻撃に魔性属性を付与できる。
魔性を得るため、その類の弱点まで得てしまうが、聖槍の祝福によって無効化されている。

激戦　E―
十字槍の武装錬金。佐々木小次郎の剣同様、神秘を全く含まない。
魔力の続く限り担い手と槍自身の損傷を即座に修復できるが、呪詛の類には意味を成さない。

サテライト３０　E―
月牙の武装錬金。やはり神秘は含まない。
武器としての性能は無いに等しいが、魔力の続く限り３０体の分身を生み出せる。

炎の剣　EX
神と人の隔たりを定める零落を司る神器。本来のスペックから大きく下がっている。
武器として使用した場合、神性を対象から剥奪し、ステータスを低下させる。天の鎖と同じタイプの宝具。
Cクラスの場合は3割減、Aクラスの場合、半減する。
道具として肉体と同化させた場合、耐久を二段階向上させる。
この剣は、聖書の中において一行だけ記述のある神造兵器であり、つまり使用されていないため、カルナの槍同様、ギルガメッシュの宝物庫にも存在はするがその使い方は分からない。

宝具解説

魔法の筒　E～B
アーチャーのクラスでのみ使用可能。
様々な道具や武器の収められている筒。それほど強力な武器は収

められていない。
英雄王のそれと違って、原典以外の宝物も収められているので、バリエーションは豊富。

赫奕たる異形態（ディープレッド）　ＥＸ
アサシン以外のクラスで使用可能。
あらゆる属性の力を融和させた肉体そのもの。
ほぼ自在に加減が可能であり、本来両立しない神性と魔獣性すら純度を損なわずに同時に成立させる。
あらゆる呪いを受け入れ、同化することができる。事実上、この宝具がある限りあらゆる汚染は意味を成さない。
合意さえ得れれば、他のサーヴァントすら取り込める。

忠実無双の無法者（バグズアーミー）　Ｂ
アサシンのクラスでのみ使用できる。
自身の最も信頼する配下を召喚する宝具。
全員で８人であり、各々が平均以上の戦闘力を持つ。
最大で９人同時に使役することになるので、消費は大きい。

スキル解説

次代を担うもの　ＥＸ
神の後継者。
ユダ○教、○リスト教、イス○ム教の主神への信仰心、知名度を己がものとするスキル。
古い、という点では英雄王には及ばないが、知名度や信仰心は『地球上』で最強である。
全てのステータスがＡクラスに向上する。反面、というか当然魔力消費は跳ね上がる。

六式　Ｂ

指銃、鉄塊、紙絵、月歩、嵐脚、剃からなる超人体術。軍隊格闘技。筋力、耐久、敏捷の内どれかを1ランクアップさせる。
得意なのは指銃、鉄塊、嵐脚、剃、月歩。苦手なのは紙絵。
奥義である六王銃も『一応』使用できる。これは、これを会得する際の「武器」の恩恵によるもの。

念能力　B＋
魔力の運用法。魔力放出の上位互換。
魔力を筋力、耐久、敏捷に加えることができる。気配遮断の模倣すら可能。
ステータスをある程度コントロールできる。
中国拳法同様、極めて習得の難しいスキルであり、正直言ってB＋は二流である。

忠実なる狂犬　A
狂化を持たない代わりに保有しているスキル。オンオフが可能。
会話ができなくなる代わりに全てのステータスを一段階向上させるスキル。
李書分やランスロットが、『武術』を完全に極めているが故にどんな精神状態でも十全の武を発揮できるのに対して、
一誠は『狂気』を完全に制御している為、このクラスで召喚されても会話も、ステータスアップも可能である。
つまり、在りようとしては生前から狂っていたエリザベートやスパルタカスに近い。

相性について

アサシン以外の場合、全ての宝具がステータスアップのために存在するため、実はディルムッドの持つ破魔の紅薔薇に対して極端に弱い。
当人の技量と敏捷性もあって、初見ではまず不意を突かれる。その

まま首を取られて死ぬ可能性も・・・。
逆に、アサシンで召喚されれば対人宝具しか持たない彼の天敵となる。
アサシンで召喚された場合は、対軍宝具もちであり、かつマスターを守ることができるイスカンダルと相性が悪い。
また、本編で語られたとおり常時発動している防御系の宝具を所持する者にはほぼ無力である。

マスターとの相性では、衛宮切嗣やレオナルド・B・ハーウェイとは特に相性が悪く、あと士郎とも相性が悪かった。
頑固な理想主義者というのは、柔軟な現実主義者である一誠とは特に話がかみ合わない。
『絶対に自分が正しい』と思ってはばかり無い切嗣やレオナルドは、『絶対に正しい考え方など存在しない』と信じている一誠から見て傲慢に写る。
逆に、ベストを目指して失敗するよりベターを目指して成功することを良しとする一誠は、
ベスト以外を失敗とする切嗣やレオナルドとは肝心なところで齟齬がおきる。
士郎の場合、相性は悪いものの一誠の言葉に対して具体的な反論ができないため、
結果的に彼に感化される形になった。
尤も、それは何もかもがうまくいったからであり、つまり周りがうまくサポートしてくれたからである。

逆に、相性がいいのは『聖杯を求めていない魔術師』全員である。
万能の願望機を求める者より、名誉や職務を良しとする者とは相性がよかった。
というか、彼の参加の動機が『戦争での無意味な犠牲を減らす』である以上、
真っ当な魔術師のもつ『神秘の隠匿』と相性が良いため、まず衝突

が起こらない。
聖杯を求める者には召喚することができないのだが、実はそういう輩は結構多い。
５次では遠坂凛、間桐桜、バゼット。
４次ではケイネス、ウェイバー、言峰綺礼が該当する。
ケイネスにランサーとして召喚される、というのも案の中には入っていた。
最終的に、没にしました。
白野にバーサーカーとして召喚され、アサシンに李書文が召喚されリベンジ・・・。
というのもあった。没にしました。

総評
魔力さえあれば無敵に近い。戦闘能力を向上させるたびに魔力消費が上がる。長時間の戦闘はイリヤにすら不可能。
ランサーで召喚された場合、神霊の領域に片足を突っ込んでおり、バーサーカーで召喚されれば両脚を突っ込むことができる。
（なし、というのは０ではなく、測定不能という意味）
が、人格的にも能力的にも制御がたやすいため無くても無いなりに運用できる。
アーチャーとアサシンならば、戦闘以外でも結構活躍できる。
というか、一般的な聖杯戦争ならばアサシンでも十分すぎるほど強い。

Ｐｒａｙ～頼もしき援軍～

聖杯戦争には、古今東西のあらゆる英霊が召喚される。神話の時代から、伝説の世界から、史実の過去から。

興を欲している裁定者がいる。聖杯に願いをかける王がいる。生前の未練を引きずる騎士がいる。戦いを求める侍がいる。請われるままに応じる槍がいる。後悔を抱えた正義の味方がいる。境遇を哀れむ怪物がいる。少女を支えたいという益荒男がいる。ただ聖杯戦争が正常に行われることを願う聖女がいる。儚き少女と共にある物語の化身がいる。

未来から召喚された只一人の例外をのぞいて、この時代の魔術師では到底たどり着けない神秘の塊。根源に至った魔法使いですら御しえぬ、本物の英霊。

しかし、もしもコレを上回る脅威が存在するとしたら、受肉した英霊に他ならない。魔力供給という制限がない彼等は、もはや鎖の無い猛獣、いや怪獣だ。

だが、それすらも凌ぐ存在がいる。いうまでもない。生きている英雄そのものだ。サーヴァントの身で召喚されている以上、適正なクラスで召喚されようと全ての武装や能力を扱えるわけではない。そして、彼等は当然のように全盛期だ。

何よりも、死者は生者には勝てない。これは、絶対の摂理である。

私は、兵藤一誠という軍人であり暗殺者と契約した。その生前からの部下であり、不良の８人に護られた。狂人にして召喚師、ジル・ド・レェに命を狙われた。薔薇の皇帝ネロや、征服王イスカンダルという暴君に出会った。騎士王アーサーや叛逆の騎士モードレッド、名も知れぬランサーを見た。傾国の妖狐玉藻や鮮血魔嬢エリザベートに眼を奪われた。

だが、目の前にいる彼女は、明らかにその何れとも纏っている雰囲気が違う。濁りも汚れもない、純真さと清らかさだけでできているような、そんな錯覚を覚えるほどに、目の前の少女は澄んでいた。

「あ、処女だ」

「処女がいるぞ」

「処女が何しに来たんだ?」

「そりゃ、処女卒業するための男漁りだろ」

「確かになー、処女と言ってももう三十路だもんなー」

「若作りしててみっともない処女だよなー」

「ねえ、どんな気持ち?処女って呼ばれて今どんな気持ち?」

「股にクモの巣張ってる処女の人ちーっす!」

８人のチンピラは、彼女が自分の知っている人間であると確定するや否や、彼女の周りを囲んで回りながらからかい始めた。いつものように、実に息のあった連係プレーである。

処女。処女と呼ばれる彼女は、顔を真っ赤にして身を震わせていた。怒ってる。どうみても怒ってる。そりゃあ怒る。誰だって怒る。私だって怒る。というか、連呼しすぎだ。しつこい。

なに、処女とな!とネロは眼を輝かせ、処女処女うるさいわよ、とエリザベートは恥らっており、またライバル出現とかー!とビビッているのは玉藻だ。

モードレッドとアサシンだけは、真面目に彼女の出現に驚いている。８人の挑発を無視して、緊迫した空気のまま会話を始めた。

「勝手に来ただと?お前、立場を考えて物を言え!第三主力部隊の副隊長が、そうそう軽々に基地を留守にしていいと思っているのか!」

「司令官にそんなことを言われたくないわね・・・というか、まずこいつ等を黙らせなさいよ!」

「わーっ処女が怒ったー!」

「処女が怒ったー!」

「助けてー、処女に犯される~!」

「逆レされた挙句責任とってとか言われるぞ~!」

「処女メンドクセー!」

「処女、超メンドクセー！」
「男の敵よー！」
「処女が痴女にワープ進化だー！」
　自分の周りをぐるぐる回る不良たちを指差して、聖女は旗を地面にドスドスと突き立てて怒鳴りつける。よほど腹に据えかねているようで、今にも切りかからんばかりである。
　しかし、アサシンにとってはどうでもいいことのようだ。聞く耳持たず、そのままシリアスな会話を続けようとする。
「気にするから、余計に喜ばせるんだ。セミかなんかだと思ってやり過ごせ。で、どうしてここにいるんだ」
「・・・貴方を救出しに来たのよ」
　怒りに身を震わせながら、聖女はアサシンに目的を告げる。しかし、救助とは一体・・・。アサシンとその宝具は、英霊だ。つまり死んだ人間である。死人の彼等を『救助』とはこれ如何に。
　自分同様首をかしげるアサシンだが、宝具の８人はうんうんと頷いている。どうやら、かれらは思うところがあるようだ。
「あれー、やっぱ死んでなかったんだ」
「だよなー、死んだ憶えないし」
「うんうん、実は知ってた」
「なるほど、死んでなかったのか～」
「俺達は、死んでなかったんだよー！」
「な、なんだってー（棒）」
「そ、そうだったのかー（笑）」
「どういうことなんだ！（喜）」
　自分が死んだと思ってたら、実は生きていた。衝撃の展開に眼をむいて驚くアサシンだが、他の面々はおチャラける余裕すらある。
　というか、アサシンはもう少し自分が死んだかどうか疑問に思うべきなのではないのでしょうか。ものすごく重要だと思うんですけど。
「お前等、どういうことだ」
「いえね？艦長が死んだつもりになってたんでおかしいなー、とは思ってたんですよ」

「だって、皆でいつものように軍務の休み時間を利用して新入りの手足をもいで遊んでたら、艦長に呼ばれた気がして・・・」
「いつものように呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃやジャーン！」
「ほんとにただソンだけで、少なくとも艦長は生きてんじゃねえかな、とは薄々・・・」
「まあ、おれ等は艦長に呼ばれりゃいつでも何処にでもお供しますし！」
「そりゃあもう！地獄だろうが戦場だろうが地獄のような戦場だろうが地獄の戦場だろうが！」
「日常も戦場に、平穏も戦場に、食卓を戦場に、結婚式も戦場に！」
「生きてようが死んでようがやること変わんないし、それでオッケーッしょ！」
「そうか、そうだったのか・・・」
８人とも、実に楽しそうに能天気な笑いで河原に声を響かせた。物騒な危険人物なのか、忠義に厚い殉死者なのか、あるいは両方なのか。アサシンは、それを当然と思っているようで感動するそぶりも見せず、自分が死んでいない、その意味を反芻していた。
そういえば、大海魔が召喚されていた。あわてて見ると、やはり河の中央にいる巨大な海魔が、向こう岸に向けて動き始めている。
体の半分以上が河に沈んでいてその全体像は把握し切れていないが、それは相当巨大であることは明らかだ。もしも、あれが他の海魔同様人を喰うとすれば、もはや今までの比ではない被害が起きる。
早く倒さなければ！
「ご安心ください、マスター。何の問題もありません。ネロの宝具で拘束して、玉藻の宝具でモードレッドの宝具を連発させれば終わります」
で、ですよねー。なんというか、人材が豊富なため、相手が強大でも全く問題ない。なにせ、所詮相手は一人だ。前回とは違いすぎる。正直、昨夜の思わぬ苦戦でいらない警戒をしていたようだ。
しかし、聖女はアサシンが私をマスターと呼んだことに眉をひそめた。

「その女の子がマスター、ですって?話には聞いていたけど、本当に聖杯戦争なんかに参加してるのね・・・」
「ああ、彼女は岸波白野。サーゼクス様に負けるとも劣らぬ、おれには過ぎた王だ」
「あのバカ共を比較対象に持ち出されても困るわよ」
「不敬だぞ!陛下になんて口の利き方を!」
「その謎の忠誠心は一体何処から沸くのよ。一時期は洗脳されてるんじゃないかと噂がささやかれたほどなのよ?
　貴方のほうが、あのロマンシスト共よりよっぽど強くて賢いと思うけど。というか、現実主義者の貴方が、どうして理想主義者の王を立てるのよ」
「何度も言うが、おれは王には向かない。なんでも妥協してあきらめるおれは、結局失敗が怖いだけだ。そして、それで納得できるのは色々な意味で恵まれた立場にいるからだ。
　あの国の多くの民は、悲しいことに満たされないものが多すぎる。陛下は、たとえ失敗を繰り返そうと、少しずつでも彼等のよりよい未来を模索しておいでだ。
　その為の捨石になることにためらいは無い。ましてや、一助になれるのであればこれに勝る栄誉はあるまい。
　王に至らないところがあるのであれば、それを補うのが臣下の勤め。治にありては抑止に努め、乱にありては之を速やかに治めるのが軍人の務めだ。
　第一、強い弱いなど上下関係には指して意味は無い。現におれは自分より強い者に臣下の礼をとったことは無い!」
「・・・まあ、いいわ。で・・・」
　改めて、聖女は海魔を見る。それは、相変わらず見るもの全ての心を汚染するような、異形。明らかに人類そのものの敵に他ならないであろうそれを、しかし聖女は慈しみの眼で見ていた。それは、アサシンがキャスターを見る眼と同様のそれだ。
　もしや、とは思うが。いや、もうこれは間違いない。彼女はジャンヌ・ダルクだ。嘗てはフランスの元帥だったジル・ド・レェとつなが

りの深い聖女など他には考えられない。神の声を聞き、祖国のために立ち上がったオルレアンの乙女。アサシンやその宝具と旧知なのかは知れないが、彼女がジャンヌであることにもはや疑いは無い。

だが、アサシンも言っていたがどうしてここに聖処女がいるのだろうか。聖杯戦争にはセイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの7騎のサーヴァントしか召喚されないはずである。明らかにアーチャーでもバーサーカーでもないジャンヌ・ダルク。8騎目のサーヴァントなどありえるのだろうか。

うちの陣営はセイバーが二人、ランサーが一人、キャスターが一人、アサシンにいたっては9人もいて合計13騎もいる上に全員受肉済みだが、気にするな。心の中に棚を作れ。

「あれを呼んだのは、ジルなのね」

「ああ、おそらく中に納まってるんだろうよ」

「そう・・・」

聖女は、より一層悲しみを深めた。アサシンも同様であるが、ジャンヌには及ばない。彼女は、在りし日に轡を並べて戦った元帥が脳裏に焼きついており、そしてその姿こそがジル・ド・レェなはずだ。

堕ちるところまで落ちてしまった彼を見て、思うところがあるのだろう。

「あれ、私に任せてくれないかしら」

「・・・！」

「おねがい」

泣き出しそうな顔で、ジャンヌはアサシンに頼み込む。それを、アサシンは受けることも拒むこともできずにいた。そして、一瞬瞑目し背負っている私を見た。

言い辛いことをいうように、しかし、はっきりと私に彼女の頼みを伝え始めた。どこかで、私に戦いを譲ることを願うように。

「マスター。家族を失った貴方には、彼は不倶戴天の敵だ。彼を我々の手で討つことは、決着をつけるという意味でもある。だからこそ、この手できっちりと討つべきだと思う。

ですが、ジャンヌはジャンヌなりのやり方で彼と戦おうとしていま

す。もちろん、彼女もきっちりと彼を止めることができるでしょう。そういう意味では、別に彼女に任せても問題はない。

ただ、彼女は彼を救おうとしている。生前の行状はともかく、この街で起こった多くの悲劇、その張本人を救おうとしている。被害者を、遺族さえも救わずにいたおれたちが、元凶を救うなどあってはならないことです。

因果応報などという言葉は、所詮そうあればいいという願望に過ぎません。世の中、どれほどの理不尽が蔓延しているのか分かったものではない。だが、だからこそ、あれは裁かねばならない」

厳しい言葉とは裏腹に、アサシンは辛そうだ。思えば、彼は止めたいとは思っていても殺したい、と憎んではいなかった。

私には理解できないが、彼には彼特有の価値観があり、それゆえにアーサー王よりもジル・ド・レェを悼んでいた。それが証拠に、ジャンヌにそれを任せたがっているのが目に見えて明らかだ。

それが、もしかしたら部下の望みをかなえてやりたいという指揮官としての愛情なのだとしたら・・・。

↓ジャンヌに任せる
ジャンヌに任せない

・・・。きっと、間違っているんだろう。彼は裁かれるべきであり、一度目の生同様2度目の生も当人にとって全く納得のいかない死であるべきだ。

だが、それでも私は、ジャンヌに任せることにした。ジャンヌ・ダルクの事情は、正直に言ってまったく分からない。だが、アサシンは彼女に任せたがっている。ただ、私の事を優先しようとしてくれている。

家族も家も記憶さえもなくした私は、何から何まで彼に与えられたものを受け入れ続けてきた。だから、彼に決断を委ねられたときは彼

にとって『良い』選択をしてあげたい。
だから、いいよ、と背中を押してあげた。
「・・・すみません。ありがとうございます」
心底申し訳なさそうに、アサシンは身を震わせていた。主である私への義務感と、部下であるジャンヌとそれとつながりのあるジル・ド・レェへの思い入れの板ばさみになりながら。
「私からも礼を言わせてもらうわ、ありがとう。さて・・他の連中はうまくやっているかしらね」

「・・・あれはキャスターの宝具ですね」
「ふん、醜いものよな。あのような汚物、我の庭にはふさわしくない」
夜の街を眼下に、輝く船に乗るはアーチャーの主従。どちらが主であるかは、通常のサーヴァント契約とは異なるが、しかし開戦当初から優位を保ち続けている。３組の連合、キャスターの暴走、アサシンの複数召喚、受肉という想定外にもほどがある事態を経て尚、未だに最強の座を独占している。
ギルガメッシュを召喚した時臣は、ある種の余裕を持っていた。なにせ、もう事態は解決したも同然であり、それはつまり戦争に勝利したも同然だったからである。
状況を整理してみれば、現状脱落しているのはバーサーカーだけであり、これはアーチャーが直々に撃破し加えてそれは衆人環視のもとで行われている。キャスターとアサシンを除いて全員が穴熊を決め込んでいたが、勝利したのは自陣だけだ。
これは、先日の宴でもはっきりさせたように、他の勢力の交戦を待ついい口実になった。アサシン組とセイバー、ランサー、ライダー連合。どちらが勝つにせよ人数や令呪が減ったところを叩ければ、勝利は確実である。

なによりも、気難しい英雄王が乗り気だ。只でさえ強い英雄王だが、やる気があればそれは尚のこと強い。これなら、「一つも令呪を使わず」に勝てるだろう。

遠坂を含めて、御三家は本来他の組と比べて一つだけ優勝に対するハードルが高い。それは、自分のサーヴァントを最終的には自害させなければならないということだ。

なぜならば、6騎だけでは『どんな願いでも叶う』聖杯どまりである。それでは『根源』に至れない。7騎全部が聖杯に奉げられなければ根源に通じる穴を穿てないのだ。

よって、本来サーヴァントとの友好な関係があれば使い切ってもさして問題のない令呪は、しかし御三家に限っては一つだけは絶対に残さなければならないのである。

加えて、規格外に強い英雄王はもしかしたら自害せよという単純な命令に対しても反抗する可能性が高い。2画でも不安があるが、3画残っていれば確実だ。

キャスターの民間人の虐殺は、魔術師としても管理者としてもいたいところだが、それもこれで終わる。なにせ、キャスターを狙う二つのグループは、何れも相手を拘束する結界宝具と海魔を殲滅する対城宝具と対軍宝具を所有している。何処にキャスターがいるのかはっきりしている今、排除は確実だ。

欲を言えば、教会とつながりがなく令呪を取りに来る可能性の無いアサシン組だけで対処して欲しいが、どっちがキャスターを倒すにしても、合い争う。無傷ではすまないだろう。

よって、時臣は優雅な笑みを浮かべていた。だが・・・、『それ』をアーチャーは笑う。

「まさか時臣よ、お前はこの後あの凡夫と征服王が争うとでも思っているのか?」

「・・・それは、どういう意味でしょうか」

「あの凡夫が、まさか本気で我の宝を狙っているとでも思っていたのか?」

その言葉を聞いて、時臣は血の気が引いた。なるほど、アサシン組

は全員受肉を済ませている。それは、魔力供給の問題もさることながら、大聖杯が効果を失っても尚現界できることを意味し、よって『この冬木にとどまる』理由が無い。

つまり、もしも彼等が英雄王の見込みどおり聖杯を求めていなければ、キャスターを排除してしまえば彼等はここに残る理由が無いのだ。

これはまずい、と時臣は頭を抱えそうになった。何のことは無い、アサシンが逃げたら己の分を弁え宝を求めない彼をアーチャーは追わないし、他の連中では見つけることもできないのである。

アサシンの部下は宝具であり、脱落しても小聖杯にはたまらない。それは、王の軍勢で大量に死んでも何の意味も無かったことにより明らかである。他の四騎は、霊気盤による感知もできないため、おそらく違うだろう、と確実ではない。

よって、時臣の知る限りにおいて、この聖杯戦争で目的を果たすにはアサシンが今この場でキャスター同様に死ななければならない。

まあ、実際はアサシンがいなくてもギルガメッシュが死ねばそれで根源に至れるほど聖杯に蓄積されることになる。これは、ギルガメッシュが三体分の大きさを持っているからだ。

しかし、そんな無意味な心配をしている時臣を他所に、全く持って予想外の横入りが入った。

日が沈み、夜の闇が包み始めた冬木の空を、余りにも唐突に流星と見まごうばかりの一条の光が切り裂いたのである。

「聖杯戦争の参加者だな」

その光の内側から空間を切り裂いて現れた男は、中華の戦装束に身を包んだ青年だった。当然、時臣やアーチャーの知るランサーではない。いや、サーヴァントですらない生きた人間だった。

いや、そちらのほうが問題だった。生きている人間でありながら、英雄王と同質にして同様の雰囲気を見に纏っている男の、その異常性は英雄王をして嗜虐の笑みを浮かばせるものだった。

彼は、宙に身を躍らせるとふわりと浮き上がり、宝具であろう槍を構えた。その槍は、その威風からして明らかに人間が作れるものでは

ない。どう見ても神造兵器だった。
当惑する時臣を他所に、青年は高らかに宣言する。
「すまないが、この聖杯戦争に武力でもって介入させてもらう」
規格外には規格外を。英雄には英雄を。最強には最強を。闇を切り裂いて、天秤の武将参陣。

ホテルの一室。ここは、別にホテルごと解体されたわけでもないので未だに健在である。
よって、アサシンに襲撃されるおそれがあるマッケンジー夫妻の家から本格的に拠点を移したライダーと、ランサー陣営は一つの部屋にまとまっていた。
現状、魔術師である自分にできることは魔力供給だけであると判断したケイネス・エルメロイは、その優れた技術によってラインをより複雑化させていた。
今まではソラウからのみランサーに供給していたが、これに自分からの魔力も供給し、更にライダーへの魔力供給も行っている。つまり、3人のマスター全員で2騎のサーヴァントを支えることにしたのである。
一級の魔術師であるケイネスの魔力は、半分であるとはいえイスカンダルに回され、つまり性能を強化していた。もちろん、受肉しているアサシン組には到底及ばないが、それでも大きな改善である。
主がその作業を終えて休憩している折、ディルムッド・オディナは昨晩の宴により回復している体を持て余しながら、ある思考にとらわれていた。すなわち、アーサー王と同様の思考である。
果たして、自分は生前の主に召喚してもらうことができるのかどう

か、だ。
　今の主には悪いが、もしも呼ばれればこれに勝る誉は無い。例えどれだけ弱体化しようと、かの大英雄の元にはせ参じるだろう。だが、呼んでくれるだろうか。そう思うと、呼ばれなくて当然だと思う反面辛くなる。
　あのアサシンとその宝具は、或いはライダーとその宝具は、まさに磐石の絆で結ばれていた。アサシンにしてみれば軍を率いることは王にとって重要ではないと言うが、しかしそれでも羨望は隠せない。ライダーやアサシンにではない、呼ばれた彼等に、だ。
　死後も信じるにたる主と共に戦場を駆け抜ける、忠を誓うにふさわしい主に呼び招かれる、何れもが彼にとってどうしようもなく羨ましかった。
　騎士の誓いゆえに、自分は主の妻を奪ってしまった。だが、最後には和解もできた。最期には救うことをためらわれてしまったが、それでも和解はできたのだ。だから、呼ばれると信じている。だが・・・。
　憂うイケメン騎士は、自分を『はあ、ディルムッドマジイケメン』と恋慕の目で見てくるソラウに気づかなかった。ケイネスは気づいていた。
　それはそれとして、ライダーは全身にみなぎる魔力と、それ以上に高まる期待で胸が溢れんばかりだった。
　それを見て、ウェイバーは呆れている。つい昨夜あれだけ戦ったと言うのに、まだ戦う気があるのだ。どれだけ戦がすきなのだ。
「お前さ、今だって狙われているのかもしれないのに、どうしてそんなにのんきなんだよ」
　アサシンらしく立ち回ると宣言したアサシン。受肉しているが故に霊体化できないのは少々手間だろうが、なにせ向こうは１３騎。宝具はおそらく全て晒しただろうが、マスター殺しに宝具など使うまい。
　宣言したとおり、あらゆる手管で自分やケイネスを殺しに来るにちがいない。今は、まだキャスターに集中しているが、もしかしたらそれすらもフェイクで、今も狙っているのかもしれないのだ。

「なんだ、坊主。まさか暗殺者の言うことを真に受けておったのか」
逆にびっくりした、という風にきょとんとした顔でライダーはウェイバーを見た。
その言葉に、その場の全員がライダーを見た。（ソラウを除く）
「それはどういう意味だ、征服王」
ケイネスが問いただした。ことは、戦略的問題である。なにせ、積極的にこちらを狙っているのはもはやアサシン組だけである。ギルガメッシュは様子見だし、セイバーもまさか単独でアサシン陣営を打倒できない以上、協力せざるを得ない。
よって、彼等と如何に戦うのかがこの聖杯戦争の流れを決めるものになっていた。だが、ライダーの言葉はその大前提を覆すものだった。
もしや、あのアサシンは更に深い策を練っており、それを征服王は看破し、それを言わなかったというのか。
「考えてもみよ、あ奴は我等3騎を『戦略的に優先順位が低い』と抜かしたのだぞ？聖杯戦争が英雄同士の殺し合いである以上、英雄を確実に脱落させることより重要なことなどありえまい」
お前が言うなよ、という目でウェイバーが見る。大前提であるそれを真っ向から否定しているのがライダーだ。なにせ、スカウトに走るぐらいなのだから。
「おそらく、あ奴はキャスターを討ち果たしたらその足でこの町を離れる」
「なんだって！」
いや、驚いておいてなんだが、それは実に理にかなっている。なにせ、連中は全員受肉済みだ。あらゆる意味で聖杯戦争から逸脱していると言っていい。
そんな彼等が、果たして聖杯戦争に固執するだろうか。確かに、その公算は低い。考えてみれば、アサシンはモードレッドの聖杯への願いにさして興味がなさそうだった。あれは、どう考えても聖杯そのものへの執着が薄い。
「それは好機か？・・・いや、違うのか！」

ケイネスは、苦もなく敵が勝手に離脱してくれることを喜んだが、しかしよく考えてみれば事実は逆だ。３騎ではギルガメッシュに勝てない。

なんとも奇妙な話だが、聖杯戦争で優勝するにははもはや、自陣でキャスターを始末し令呪を得、アサシンが離脱する前に捕まえて説得するなりして仲間に加えなくてはならないのだ。

結果的には、ライダーの提案どおりに動かなければならなくなった。ケイネスは、歯がゆい思いでいっぱいだ。

言ってしまえば、聖杯戦争で重要なのは召喚されるサーヴァントをマスターが支えられるかどうかだ。その一点にかかっていると言っていい。

まず、単純に強い英霊を召喚することが重要であり、その為の触媒を用意するのも、強力な英霊に魔力を供給するのも魔術師としての人脈や実力によるものだ。

であれば、超一級のサーヴァントギルガメッシュを召喚し、それを曲がりなりにも使役している遠坂に自分は遠く及ばないと言うことだ。

「・・・ほお、どうやらキャスターが先に動くようだな」

河原で行われた大規模な魔術行使に、魔術師でないとはいえ感知したライダーはにやりと笑った。いよいよ再びの出陣である。

おそらく、というか間違いなく自分たちが全快していることをアサシンは知らない。それは大きなアドバンテージだ。加えて、今回は令呪も使わせるつもりだ。これは、事前にウェイバーやケイネスからも了解を得ている。

昨晩のようには行かんぞ、と戦意をみなぎらせた。

そこからの動きはスムーズなものだ。屋上からライダーの宝具である戦車で戦場に向かう。今回は念のため、ソラウも一緒だ。四人も乗ると流石に狭いが、そんなことを言っている場合でもない。

ランサーは、やはり霊体化している。ソラウはそれが不満げだ。ケイネスと変わってくれないかしら、とすら思っている。それはつまりケイネス死ね、ということなのだろうか。

「さあ、行くぞ！」
夜の街の空を駆ける戦車。その手綱を似る手に、思わず力が込められた。
無理も無い。あそこには自分と渡り合った将がいるのだから。
生前から従っていたであろう８人の兵士、死後に得たという４人の反英雄。そして、それを統べるアサシンの将器。震えるほどの興奮だ。きっと彼を従えることができれば、きっと怪物すらも配下にできる。
惜しむべきは、彼が生前従えていた軍勢の、その全てを見ることができないことだ。きっと、さぞや愉快な軍勢であるに違いない。
護国の鬼がいるのだろう、凶暴な怪物がいるのだろう、高名な騎士がいるのであろう、人を食ったような軍師がいるのであろう。
一人一人では轡を並べることなどありえない者達が、あの一人につき従っていたのだろう。なんという面白い軍勢だ！
そんな思いに浸るイスカンダルを、突然の衝撃が襲った。自分の宝具である神威の車輪が、突如として体制を崩したかと思うと眼前には河原ではなく木々に覆われた山の斜面が写っていた。
錐揉みで回転する戦車をなんとか体制を整えようとするが、間に合わない。そのまま山に激突し、クレーターを作っていた。
御者台の中にいたマスター3人を探すが、何処にもいない。魔力は供給されているので死んでいないのは確かだが・・・。
「征服王、マスターはここだ」
実体化し、振り落とされたであろう3人のマスターを抱えたランサーがそこにいた。どうやら、3人とも目を回しているが、怪我は無いようだ。一安心しているライダーに、ランサーが尋ねる。
「それで、なにがあった」
「分からぬ。不甲斐ないな」
そう言って、町のほうを見る。明らかに、自分たちは進行方向と反対側に吹き飛ばされていた。
真名開放していないとはいえ、この宝具の格はＡ＋。停止しているのならばともかく走行している戦車を、どうこうできる手段は思いつ

かない。
一体誰が、どうやって。
ライダーとランサーがそう思っていると、その疑問に答えるように『犯人』が自分たちの目の前に着弾した。
神威の車輪が焼いたであろう木々の、その倍以上を薙ぎ払って巨大な何かが地面に上空から落下してきたのである。
それは、人の形をしていたが、しかし人ではなかった。明らかにスケールが違いすぎる。
聖杯戦争においては随一の筋骨隆々とした大男であるライダー、イスカンダル。その彼が見上げるほどの巨人が、そこにいた。
「聖杯戦争の参加者だな、お初にお目にかかる」
鉛色の肌はそれそのものが鎧のように硬質だった。肉体を覆う筋肉はそれそのものが武器だった。その声は、決してこちらに殺意をむけていないというのに、威圧感は十分に過ぎた。
名を名乗らずとも、伝わるものがある。この男は、一体何者なのか？その答えは余りにも明白だった。
「本日付で編成された兵藤一誠救出部隊だ。覚悟してもらう」
英雄と聞いて、誰もが思い描く英雄の中の英雄がそこにいた。

夜の街を、バイクに跨ったセイバーが駆けていた。
騎乗スキルによって、生前は全く存在するとも思っていなかった機械仕掛けの馬は、しかしアーサー王の望むままに地上を切り裂いていく。
大きな通りを抜けて、住宅地の小さな道を抜けて。ついに河原にたどり着く。
そこには、大海魔と、それを守るかのように立ちはだかる何者かがいた。
彼は、白銀の鎧に身を包み、見たことのある、忘れようの無い剣を大地に突き立てていた。

その髪は金色。眼は閉じていて見えないが、おそらく青だろう。自分と同じように。

貴方はだれだ、と聞きたいが、しかし言葉にならない。その、余りにも堂々とした姿に、目を奪われていた。

「ここより先は、我が友の戦場。いかなる者もここより先は通すわけにはいかない」

目を見開いた。やはり、当然のように眼は青い。

冷や汗が、背中を伝った。いや、いまやアーサー王はただ一人の小娘のように恐れていた。名乗るな、と。

騎士が名乗るなど当然だが、しかし、彼に名乗らせてはならないと、彼女の本能が叫んでいた。聞けば、自分は今度こそ戦うことができなくなると。

「どうしても通るというのであれば、この私を倒すことです」

いつかの様に、大地に突き立っていた剣を引き抜いて、騎士は気高くも懐かしい構えを見せる。

ああ、その剣は、その剣は・・・。

「我が名は、アーサー・ペンドラゴン。国のため・・・いやただ友のため、貴方をここで討たせてもらう」

余りにも貴い輝きがセイバーの目を焼いた。そこには、アーサー・ペンドラゴンがいたのだ。自分と同じ名前をした誰かが、カリバーンをもってそこに立っていたのだ。

思わず、呆然としてしまった。一体、彼が何を言っているのか理解できない。だが、はっきりしていることもある。彼を討たなければ、自分は先には進めないと。

直後、夕焼けの途切れた空を漆黒の何かが覆った。

冬木で最も高いビル。その屋上に、二人の男が立っていた。一人は分隊長。もう一人はその護衛を勤める補佐だ。

第三主力部隊第一分隊隊長、その任務はこの町で友軍が全力を出せるように、この世界の常識を一部改ざんするものだった。
それはつまり、この街そのものを己の結界で覆い尽くすことを意味する。
しかし、彼にとってはなんの事もない。あの、たった半日で冥界の3分の2を焼いたあの戦場で、最後まで生き残った彼にしてみれば、こんな小さな町を一つ飲み込むなどたやすいことだ。
たとえ、身のうちに蛇を取り込んでいなくとも、だ。
「さすが、分隊長！黒歌をも超える最強の空間使いですね！」
「のぼせるな、ディオドラには遠く及ばない」

黒鉄　大和
出身　日本
種族　人間
保有神器　闇の大盾
M．A．R．Sランキング　５１位

「俺は2番目だ」

鋼のレジスタンス～明日もし君が壊れても～

眼が覚めたのは、病院のベットの上だった。全身に包帯が巻かれ、その箇所からは燃えるような痛みと、そして衰弱しきった体があった。

動くのは、かろうじて首から上。それも、相当な労力を要した。

「あ、眼が覚めたか。俺も今眼が覚めたところだ」

隣のベットから声が聞こえる。知っている声だ。確か、黒鉄という空間使いだ。彼は・・・。

そうだ、思い出した。自分たちは神話間で勃発した戦争に聖書の勢力側として参戦し、兵力の９割以上を損失し敵の捕虜となった。

捕まって以降のことは記憶に無いが、この処置から見るにどうやら自分はすぐに殺されるわけではないようだ。

「火あぶりも覚悟してたんだけどね」

「俺もだ」

前世と同じように、自分は国と聖書の神のために戦い、そして敵国に捉えられた。これから自分がどんな目にあうのか、火を見るより明らかだろう。しかし、気分は不思議と晴れやかだった。

今なら分かる。何故、『ジャンヌ・ダルク』が最期まで神を信じることができたのか。こうなると知って、その上で殉じたのだ。知っていてその上で選択したのであれば、神を恨むのは筋違いというものだ。

これから自分に、一体どれだけの責め苦が待っているのか。異教の神を相手に、田舎娘が挑んだその無謀。プロメテウスのような末路も、或いはありえるだろう。

だが、それでもいい。結局自分は『自分』でこの生き方を選んだのだから。

フランスの守護聖人ジャンヌ・ダルクとしてではなく、テロリスト禍の団分派、Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓのジャンヌ・ダルクとして戦ったのだから。

まあ、そこまで悲観することも無い。正直な話、ここまで治療をされていて、今さら火刑などありえない。

「あれだな、敵将を迎えようって腹かね」
「光栄だけど、それは無いでしょ」
おそらく、というか間違いなく聖書の勢力はボコボコにされた。唯一組織だってまともに行動できたのは自分たちだけだ。
そして、それはつまり敵にしてみればこの上なく目障りだったに違いない。こちらは9割の兵を失ったが、向こうの5割を足止めしたのだ。１００倍以上の戦力差を思えば、奇跡と言っていい。
裏を返せば、それだけ恨みを買ったということだ。
「・・・曹操達は勝ったよな」
「当然でしょ」
聖書の勢力が滅びる前に勝ったか、滅びた後に勝ったか、その程度の差のはずだ。でなければ、命をささげて時間稼ぎをした兵が浮かばれない。
「あいつ等は、馬鹿だけど強いわ」
「そうだな」

夜の空を覆い隠す影の結界。それは星や雲をさえぎり、町を暗闇で包み込んでいた。
「・・・黒鉄」
戦闘開始の合図である。この結界によって、異なる世界の力を操る自分達が暴れても、ある程度はこの世界に影響を与えずに済む。
正直、『この世界』がどうなろうと一向に構わないほど切羽詰っているこの一行ではあるが、肉体から精神だけに切り離されている一誠がどうなるか分からない以上、騒ぎを大きくしたくなかった。
よって、結界が発動した今は、結界が壊れない程度であれば好きに暴れられると言うことだ。
「来なさい！」
ジャンヌは、手にした旗を大地に突き立てる。

直後、剣や鎧で完全武装した兵たちが、ビルの上から、河の中から、橋の上から、街のいたるところから人とは思えない速度で走ってくる。

征服王の軍勢に比べれば、その頭数は少ないと言っていい。およそ、３０人ほどだろう。

その面々を見て、戦闘員や一誠は顔色を変えた。全員がよく知っている面々だったからである。

「こいつ等、全員Ｂクラスか！」

各部隊からかき集められたであろう小隊長やその補佐たち。出自や経歴は違えども、兵藤一誠から部下を預かった精兵である。

「当然でしょう、弱いのつれてきてどうしろってのよ！」

叫ぶと同時に、手にした神器の旗を高々と掲げる。その旗印は、赤い星。凶兆とされる太陽系第五惑星、火星である。

神器は、担い手の精神と密接に結びついている。同じ神器でも、担い手の考え方や使い方でその禁手は形を変える。

そして、極まれにだが担い手が劇的に精神を変革させた折は、その姿を変えることもあった。

聖女の魂を継ぐジャンヌ・ダルクが所有している神器は『聖剣創造』。現在の禁手は亜種ではなく正当な禁手『聖輝の騎士団』へと姿を変えている。

そして、その発展系は人を率いることに特化した英雄ジャンヌ・ダルクを象徴する、戦いの旗。

『ジャンヌ・ダルク　聖剣創造　覚醒』

『赤き星の旗の下に（Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓマーチ）』

彼女の叫びにより劇的な変化が訪れた。それは彼女だけにとどまらない。彼女の周囲に集った兵士一人一人を輝きが覆っていく。それは固形化し、赤い星をあしらった全身甲冑を身につけた、光輝に満ちた騎士団が完成する。

それは、祝福であり鼓舞。国土を侵され疲弊した兵士の一人一人の

士気を大いに上げた、オルレアンの乙女のその伝説を再現するものだった。

自分の指揮下にある兵士一人一人に神器で創造した鎧をまとわせ、各々に自分の力を上乗せさせる指揮官としての能力。

ヘラクレスや曹操に比べて非力な自分。しかし、自分には人を率いることができる。自らを『部下を奮い立たせる者』と定義した彼女は、それに合わせて神器もふさわしくなっていた。

「さあ、行くわよ！」

過ぎ去りしいつかの様に、嘗てあったはずの前世の様に、救国の聖女は今再びこの現世に姿を現した。今の自分の戦友を助けるために。前世の自分の戦友を救うために。

先陣を切るのはやはり戦旗の聖女。それに続くは夜を輝きで塗りつぶさんばかりの鎧をまとった勇猛無双の精兵３０名。

ましてや討つべき敵が民草を襲う人類の敵、大海魔と来ればもはや伝説の怪物退治の絵のようだった。

善と悪、白と黒、光と闇。

余りにも明らかな両者の立ち位置はしかし、討つ勇者と討たれる怪物ではなかった。遅くなってしまったが狂気に堕ちた戦友を救いに来た聖女と、救われる大罪人だった。

「・・・おお」

大海魔に包まれて尚憤怒に身を震わせていたキャスター、ジル・ド・レェ。彼が知覚したのは、汚れきって尚失っていなかった在りし日の記憶をなぞるが如き美しき光景。

軍靴の音が聞こえる。祖国を救うと言う使命と、聖処女と轡を並べて戦うことの高揚感に満ちた、あの勇壮な軍靴の音が聞こえる。

思わず、河から上がろうとしていた大海魔の中で振り向いた。分かる。分かってしまう。そこに自分の望んだ全てがあると。栄光と歓喜に満ちたあの日々があると・・・。

しかし、大海魔は既に彼の制御を離れている。コントロールを度外

視して、ただ殺戮のために呼び出した巨大な海魔はキャスターの意向など完全に無視していた。

「離れよ！」

命じたところで何も変わらない。海魔の触手は彼から魔力を吸おうとして離さない。歯軋りしながら、キャスターは体にまとわり着くそれを引き剥がしにかかった。

もはや、これは怨敵を討つ兵士ではない。ただの拘束具に他ならない。出たくないと思っていたときは難攻不落の城だったが、出たいと思えば脱出不可能の檻に他ならない。

もがけども、もがけども、キャスターは大海魔の腸の中から逃れることはできない。

「剥がれろ！」

触手に溺れるように、必死に手を伸ばす。そこには彼女がいるのだ、彼は確信している。誰が見間違えるというのだ、あの気高い魂を。

恨みも憎しみも怒りも、自分自身の命をももはや考えるに値しない。飢えや乾きに近いそれで、必死に外に向けて手を伸ばした。

「ジャンヌ!!」

外に、そうしてもがき苦しむ彼の姿など見えるわけが無い。だが、知らなかったとしても現世に復活していたジャンヌ・ダルクは彼を救うために奮戦していた。

輝く旗は一振りで襲い掛かってくる巨大な触手を跳ね上げる。率いる軍勢は、当然のように水上を駆け抜けながら大海魔の本体を目指して触手を焼き、焦がし、凍らせ、切り裂いていく。

その巨体と再生能力を武器とする大海魔にしてみれば、数は脅威とはなりえない。だが、質が伴っているとすればまったく別の話だ。

最初の一撃でこの海魔に再生能力があると理解したジャンヌの率いる騎士団はそれを妨害した。何のことは無い、再生させたくないのであれば傷口を焼くなり凍らせるなりすればよい。

もちろん、少々の寒さや熱では大海魔の巨体に痛痒は無い。だが、ジャンヌが聖剣創造の基本的な能力によって炎熱や氷雪属性、再生妨害や傷口悪化を攻撃に付与させてしまえば、部下はただ攻撃するだけ

で大海魔にダメージを蓄積させていく。
伝説の怪物とも戦ってきたジャンヌにとって、再生能力など持っていない怪獣のほうが珍しいぐらいだ。対処の方策は山とある。
そして、その対策を実践する実力を騎士団の一人一人が持っている。一本が巨大な触手を、聖剣の助けを受けているとはいえ、全く恐れることなく立ち向かい、切り捨てていく。
手にした武器は、各々でばらばらだ。拳を武器とする者、斧、槍、刀。その全てが聖処女の光でコーティングされている。
一本、また一本と触手がなくなっていく。やがて、本体が無防備となりその姿を晒したとき・・・。
「ジル！」
生み出して手にした剣の一閃。ジャンヌ・ダルクは汚物と呼ぶのがふさわしい大海魔の体内に突入した。
身にまとった輝きを明かりとして、異臭の漂う怪物の体内をもぐっていく。不潔という言葉では足りないほどの体液が彼女の体にかかるが、しかし聖剣の加護によってその穢れは髪の毛一本すら汚せなかった。
「ジャンヌ・・・！」
「ジル！」
そして、ついに中枢と呼ぶべき空洞に到達したジャンヌは、自分に向けて手を伸ばす彼を見つけた。
その、やせ細った手を、輝く籠手で覆われた手でつかんだ。空いた手で、戦友を拘束している触手に己の旗を突き立てる。
その旗自体も、聖剣創造の一端である。炎を纏わせることもたやすい。大海魔にとっても急所であろうそこへの攻撃は、大海魔の体を大きく振るわせた。
断末魔とともに蠢く触手から、力任せにキャスターを引き剥がしたジャンヌは、外へ向かって肉の壁に再び突入する。
魔力の供給源であるキャスターを失い、大海魔はもがき苦しみながらも空気が抜けるように現世から姿を消していく。
宝具である書を失った、いや放り捨てたジル・ド・レェとジャンヌ・

ダルクが大海魔から脱出したのは、消滅とほぼ同時のタイミングだった。

戦いは、まさしくあっという間に終わった。キャスターを倒すためにここに来た私たちは、結局その見事な手際を拝見するだけで終わってしまった。

そして人払いのされた土手で、当のキャスター、ジル・ド・レェは武装集団に囲まれていた。

宝具を失い、魔力を失い、何よりも勝機を失った彼は、しかし非常に穏やかだった。私やアサシンを殺そうとしていたときとは全く違う、理性的な男性の顔をしていた。

彼は、アサシンの生前の知己であると言うジャンヌ・ダルクを前に膝を突いていた。

「聖処女よ・・・」

「久しぶりですね、ジル」

男女の仲、という気配ではない。彼等にあるのは戦友の絆だった。主従とは違う、対等な尊敬を抱くものとして両者は向き合っていた。

それは、余りにも美しく、汚しがたく、手を出しがたいものだった。

不意に、私を背中から下ろしていたアサシンが泣いていることに気付いていた。彼は、私を見て泣いていた。

彼は、この光景に感動しているのではない。この光景を許してしまった自分を恥じているのだ。

どのような理由があれども、彼にとって守るべきだった多くの民衆の命、それを奪い続けた狂気キャスター、ジル・ド・レェ。

それが、今本懐を遂げてしまった。どう贔屓目に見ても、この戦争を催した聖杯は、彼を祝福しているようにしか見えない。６騎を落とすことなく、聖杯は彼を選び望みをかなえてしまった。

それを善しとした、自分が許せないのだろう。彼は、救われるべきではない存在だと言うのに。

それでも、彼はやはり心のどこかで彼を救いたいと思っていたのだ。神をのろっていた彼を、救いたいと思っていたのだ。思ってしまっていたのだ。

「ジャンヌ・・・。あなたは、まだ神の為に戦っているのですか?あれほどまでの非業の死を遂げたあなたが、なぜ・・・」

ジャンヌ・ダルクの光輝に満ちた装束は、一切の穢れを見せない。キャスターが指摘するまでもなく、私の目にも彼女は聖書の神の力を行使している。

生前、彼女は神に救われることなく火刑によって命を落としたはずだ。その前にはおそらく人としての尊厳を奪われつくしただろうに。だというのに、彼女は神の為に戦っているのだろうか。確かにそれは理解できないことだ。

しかし、その言葉に、ジャンヌは首を振るった。

「私は、全てを知ってあの運命を選択したのです」

その言葉に、反英雄４人は身を震わせた。余りにも高潔な献身の言葉に、胸を打たれたのだ。私も同様だ。死の間際、極短い栄光とその後の非業の死を受け入れたのですらない。自らの終わりを知って、それでもなお選んだと言うのか。

なんという気高さだろう。その清らかさに、脱帽するより他にない。

それは神を呪い続けたキャスターにとっては殊更に辛い言葉だった。彼は、腰が抜けたのかへたり込んだ。彼を反英雄としてきたものが、全て消えてなくなってしまったのだ。

「私は、何を・・・」

神を呪った。彼女を救わなかった神を呪った。私を呪った。アサシンに救われた私を呪った。アサシンを呪った。私を救ったアサシンを呪った。

しかし、それは彼女の気高さに唾を吐く行為だったのだ。そして、自分がなした輝かしい日々の全てを焼き尽くす、愚かしい行為だったのだ。

そんな彼に、歩み寄るジャンヌ。その顔は、憂いを秘めた笑顔だっ

た。それを、キャスターは拒絶する。
「おやめください！」
それは、絶叫だった。悲鳴だった。彼が善しとして、民衆から受け続けた苦痛の叫びだ。しかし、それは精神的な羞恥によるものだった。
自分の行いの罪深さに気付いてしまえば、もはや彼女の前に立つことなどできはしない。在りし日の輝きをもって立つ彼女の前に、堕ちるところまで堕ちてしまった自分が、その姿を晒すことなどできはしないのだろう。
「私は・・・、私のこの手は・・・罪の無い民の血で汚れきってしまっているのです！」
腰を抜かしながら、体をそらしながら後ずさる。そんな彼にジャンヌは尚近づいた。そして、その手を優しくとった。
その清らかな手を汚すわけにはいかないと、振りほどこうとするキャスターに、ジャンヌはにっこりと笑った。
「これで、私の手も汚れました。話を聞いてくれますね」
それは、救いの言葉だった。地獄に落ちたと思っていた聖女は、地獄に落ちた自分の手をとってくれた。そして、同じところに降り立ってくれた。
なんという慈悲だろう。なんという救済だろう。生前はともかく、この冬木で多くの罪を犯した殺人鬼は、完全に許されてしまっていた。
「ジル、私は貴方の言うととおり戦っています。友ともに、神や国の為に・・・」
「はい・・・」
「もし、貴方がよければ、また私と一緒に戦ってくれますか？」
「！」
ただでさえ大きい目を見開いて、キャスターは歓喜の涙を流した。身に余る至福とはこれを言うのだろう。地に落ちた彼は、しかし天に召されるかのように喜びに満ちていた。
不意に、遠くで人の倒れる音がした。同時に、キャスターの体が消

え始めた。おそらく、マスターが、私の家族を殺した殺人鬼が殺されたのだ。マスターを失ったサーヴァントは消える定めである。後一体どれだけ彼が現界できるのか、知れたものではない。

だが、その短い時間は永遠のようだった。

「よろしいのですか?こんな、こんな私でも、許されないほど罪深い私でも・・・」

「貴方は、私と一緒に戦ってくれた。その貴方が罪に苦しんでいるのなら、一緒にそれを償います」

「ああ・・・」

ジャンヌの手を、細った手で握り締めるキャスター。その手に、涙が滴った。体は既に、半分以上が光になって消えている。

「もしも、許されるのであれば、この不肖ジル・ド・レェ・・・。貴方の為に身命をささげましょう」

「ありがとう、ジル」

「ですが、すみません。少し眠くなってしまいました」

安らかな顔で、キャスターは目を閉じた。消えていく体はもはや、顔と手しか残っていない。しかし、その手はしっかりとジャンヌの手を握っていた。

「どうか・・・眼が覚めるまでこの手を握っていてくれませんか?」

「もちろんです、ジル」

「・・・眼が覚めましたら、昔の話を、しま、しょう・・・。おやす、みなさい、ジャンヌ・・・」

「お休み、ジル・・・」

痕跡一つ残すことなく消えていく、ジル・ド・レェ。一切の苦痛も、未練も残すこともなく消えてしまった。もしも、目的を達成することが勝者だと言うのならば、この聖杯戦争の勝者は間違いなく彼だ。

そう断じてしまうほどに、彼は救われ、安らかに眠りについてしまった。もう、彼を誰にもどうにもできない。彼は、永遠の夢の中で栄光の過去と贖罪の未来を思いながら眠り続ける。

それを見送った聖女の顔は、穏やかで、落ち着いていた。それは、救いたい人を救うことができた聖人の微笑だった。

「マスター、すみません。本当に・・・すみません・・・」
ぼろぼろと涙を流しながら、アサシンは私を抱きしめていた。気付けば、私も泣いていた。元々、記憶がなく家族の敵と言われてもぴんと来なかった。しかし、こうして彼が消えてしまうと、どうしようもなく気が抜けてしまった。彼に対する恐怖も、義憤も、なにもかもが消えてなくなってしまった。
全ては光の中に、奇跡のような時間の中で。

予期せぬ苦戦～てつきり雑魚かと～

「・・・つっ！」

ライダーのマスター、ウェイバーは目を覚ました。体の節々が痛む。記憶は混乱しておりはっきりしない。

どうやら自分は木々の生い茂る山の斜面にいるようだ。周囲は街明かりもなく暗い、よって刻限は夜。しかし、星明りでも分かるほど大きく大地は抉られていた。これは、ライダーの宝具によるもののようだ。

段々と記憶がはっきりしてくる。そうだ、自分はキャスターを討つために、ケイネス先生やランサーと共にライダーの宝具に乗って・・・。

「くっ・・・」

周囲を改めて見ると、ケイネス先生が自分同様によろめきながら意識を取り戻していた。彼の婚約者であるソラウはまだ気絶している。頼みのサーヴァント2騎は、自分たちを守るように何かと対峙していた。

「ら、ライダー・・・何があったんだ?」

「ランサー・・・説明せよ!」

「おう、眼が覚めたか坊主」

「主よ、奇襲に対応できませんでした、お許しください。ですが、叱責は後に・・・」

二人は、こちらを向こうともせずに何かを睨み続けていた。その背中越しに相手を見る両マスター。

ぞっとした。

そこにいたのは、イスカンダルが小さく見えるほどの大男だった。鎧のような硬質な肌は岩石のような鉛色。筋肉に覆われた手足は丸太を通り越して神殿の石柱だ。何よりも、ただそこに立っているだけにも関わらず凄まじい威圧感を放っていた。

もう、何処からどう見ても一般人でも魔術師でもない。英雄だ、それ以外の何者でもない。もう、アサシンは単独で受肉した12騎のサーヴァントを従えていたし、ライダーも無数の英霊を従えている。

もう、１４騎だろうが１２８騎だろうが驚かない。
　では、真名は？師弟は全く同じ英雄を思い描いた。もう、考えたくないが、どう見ても明らかだ。さっきは散々凄そうだの強そうだの恐ろしいだの言ったが、一言で形容してしまえば次の通りだ。
　まるでヘラクレスのような男だ。
　こんな、極東のド田舎の、神秘の何たるかも知らない連中でも知っている、ギリシャ神話の最大にして最強の英雄。主神ゼウスの子にして十二の試練を乗り越えた大英雄だ。
　アーサー王や叛逆の騎士モードレッドや暴君ネロが女だったり、エリザベートが竜だったり、イスカンダルが巨漢だったりと常識とは一体、という召喚された面々ではあったが、この英雄は、どうみてもそれ以外ではありえない。
　もしもこの英雄がヘラクレス以外の名を名乗ろうものなら、自分達は魔術の道を捨てて出家してやろう、そう思うほどに目の前の男はヘラクレスだった。
「・・・では、こちらの目的を告げよう。この聖杯戦争に、ある男がサーヴァントとして参加している。その男の確保が、【我々】の目的だ」
　どうやら、ケイネスとウェイバーが目を覚ますのを待っていたらしい。彼は、見た目にふさわしい重厚な声で語り始める。
　その言葉は、ただ告げているだけであり交渉するという柔軟性の一切を排除していた。つまり、一種の宣戦布告である。
　たった、それだけのことを認識しただけで、ケイネスもウェイバーも体が硬直した。あれと、神話の英雄と戦うと言うのか。
「その男は我々の指揮官であり、個人的には友人だ。その彼が、肉体と精神が切り離されて、現在意識不明となっている。
　肉体は我々が確保しているが、精神は、どうやらこの聖杯戦争に参加しているらしい。あの無駄に潔い男のことだ、自分が死んだとでも勘違いしているのだろう。
　なんとしてでも見つけ出して、是が非でも回収しなければならない。そして、それを妨害しうる勢力は全て排除する」
　その、妨害しうる勢力の中に、自分たちが含まれていることは明ら

かだ。もはや、交戦は避けられないらしい。
もう、正直に言ってどういった経緯でヘラクレスが生きていて、何故ヘラクレスがここにいて、どうしてヘラクレスが自分たちと敵対しているのかなど、どうでもいい。分かりきっていることは自分たちはここで死ぬということだ。
魔術師である師弟は、もう完全に命をあきらめていた。だが、サーヴァント二人は違う。なるほど、この敵は強いに違いない。あのギルガメッシュですら勝てる保証は無いほどに。
だが、だからどうしたと言うのだ。自分たち2騎を一人で相手どるなど、馬鹿にするにもほどがある。ランサーは手にした槍に力を込めた。しかし、それを制してライダーは話しかける。
交渉の余地は無いにしても、言葉は通じるのだ。情報は大いに越したことは無い。
「・・・その方、もしや捜している男は兵藤一誠、とか言わんか?」
「そうだ。どうやら接触していたようだな」
ヘラクレス、らしき男はライダーが言ったアサシンの真名を、自分の指揮官であると認めた。これは、その場の全員が二重の意味で驚いた。
あのアサシンは、ヘラクレスを従えた男であり、従えていたにもかかわらず召喚しなかったのだ。ヘラクレスほどの英雄よりも、あの8人のほうが彼にとって信頼できる部下だと言うのか。
「・・・どうやら、あの8人も一緒のようだな。あの8人は、あの男の最古参の部下だ。それゆえに思うところもあるのだろうよ。まったく、水臭い奴だ」
その表情から、察したのだろう。ヘラクレスらしき男はやや機嫌が悪そうに目をそらした。当人も、呼ばれなかったことを気にしているらしい。呼ばれれば、自分とてはせ参じる。その言葉には、若干すねたような口調も感じられる。どうやら、アサシンは随分慕われているようだ。
「・・・余は、征服王イスカンダル!ライダーのクラスを得て現界した!」

やはり、と思ってしまうほど慣れた名乗り。とくれば続く言葉もお決まりだ。いや、というかこの男が『目の前の英雄』を誘わないわけが無い。

そして、こんなことを言いたくはないが、これが成功しなければ自分たちはこの男と戦うことになる。可能性がどれだけ低いにしても、この男の交渉にすがるより他に手は無い。

「その方、名はなんという！」

「・・・三勢力連合正規軍『M・A・R・S』第二精鋭部隊天秤派所属、上級戦闘員ヘラクレス」

分かりきっていた真名だった。その言葉に、イスカンダルは体を震わせる。

なにせ、アキレウスと並ぶ彼にとっての「憧れのヒーロー」だ。テンションはもうどうにもならない域に達している。

「余の配下になり、世界を征服せんか？余と肩を並べて、覇道を歩んでほしい！」

「・・・・」

「どうだ、ヘラクレスよ！」

宣戦布告をした相手に勧誘される、という不測の事態に、ヘラクレスと名乗った男は体を硬直させた。無理も無いだろう。初めはこの場にいる3人も同様の反応をしたのだ。

しかし、これこそが征服王イスカンダルの生き様なのである。地の果てを目指して東征し、その途中にあった国のことごとくを征服し、己の軍に加え続けた男。その彼が、寝物語に聞いたであろうギリシャ神話最強の英雄を勧誘しないわけが無い。

「・・・それ、あいつにも言ったのか？」

「無論だ。袖にされたがな」

「・・・だろうな。あいつは昔からそういう奴だ。俺達も昔、奴と敵対していた折に勧誘したが、断られたしな」

ヘラクレスは、何かを懐かしむように物思いにふけった。彼には、きっと自分たちの知らない物語があり、それを思い返しているのだろう。

それを知りたいと思う反面、更に恐ろしい事実に気づく。この男は、嘗てアサシンと敵対していたと言う。そして、今は配下だ。

イスカンダルのことを笑えない。あの男は、目の前の大英雄をねじ伏せて幕下に加えたのだ。

「あの男が断ったのであれば、俺もそれに従うだけだ」

「そうか、残念だ。・・・しかし、あの男は武将であっても王ではあるまい。それでも、あの男に従うのか？」

「・・・長い付き合いだが、正直、俺にはあいつが何故あの『バカ共』に忠誠を誓っているのか未だに理解できん」

その言葉は苦悩で歪んでいたが、しかしそれはあの男への親愛を示すには十分な代物だ。そして、もう一つ明らかなことがある。アサシンを従えれば目の前の男も参加に加わると言うことだ。

生きているヘラクレスは、なるほど想像しうる限り最強の敵だ。到底勝てるものではない。だが、もしも勝てれば、そしてアサシンを確保できれば・・・。

イスカンダルは、大いに笑った。そして、背中で怯えている己のマスターに声をかける。

「坊主よ・・・。すまんが1画でいい。令呪を使ってくれんか」

はっとして、ウェイバーは令呪を見た。そこには、キャスターが魂喰いをしていたことを突き止めたが故の４画の令呪が刻まれている。

これは、対アサシン戦で使うべき、ウェイバーにとって最大にして唯一の武器だ。だが、もはやそんなことを言っている場合ではない。

「1画で勝てるのかよ」

征服王らしくもなく、返答は無い。というよりも、あるだけ使っても勝てるか分からないのだ。もしかしたら、逃げるべきなのかも知れない。

４画全てを使って離脱すれば、あるいはロンドンまで逃げ切れるのかも知れない。そうなれば、向こうも脅威ではないと判断してくれるかもしれない。

だが、そんなことはできない。魔術師としての栄誉を求めて参加したこの師弟は、そんな判断をできない。

「4画つかうぞ。使うから、いいな、ライダー・・・。お前、今後僕に絶対服従しろよな！」
「恩に着るぞ、坊主！」
自分の身を守る為に、抑止力として令呪は1画残しておくべきものだ。だが、もはやそんな事態ではない。ありとあらゆる意味で、もうこの男に全てをかけるしかない。
「令呪4つ重ねて命じる！【その男を倒せ】！やっちまえ、ライダー！」
「任せよ！」
突如として、世界は夜の森から灼熱の荒野に姿を変える。それは、昨夜見たばかりの魔術の奥義。固有結界『王の軍勢』だ。しかし、見るからに違うことがある。軍勢一人一人が生前ほどの力を持っている、とまでは行かないまでもマスターがいるサーヴァント程度の力は持っていた。
令呪4画と言うありえない強化によって、ライダーが召喚した軍勢は単独行動のスキルがEからEXにまで向上していた。もはや、宝具の真名開放が可能なレベルである。
昨晩は、それこそただ数に任せた単純突撃しかできなかったが、今は違う。まさしく生前の無双の軍勢としての力を取り戻していた。
「・・・ランサーよ」
「ハッ」
その、余りにも勇壮な軍勢の中で、気を失っている婚約者を支えながらケイネスは己の令呪をみた。
考え方によっては、ライダーの令呪を使いきり、同盟解消後の戦いには優位に立ったといえる。だが、それももう些細なことだ。とりもなおさず、目の前のヘラクレスを排除しなければならない。
「いや、フィオナ騎士団の一番槍、ディルムッド・オディナよ。機を見て令呪3画を使う。聖杯戦争への横入りを入れてきた無粋な男の首を刈り取るのは我等だ」
「御意」
ケイネスは、何処までも魔術師的に考えている『つもり』だった。なにせ、ことは聖杯戦争全体に関わることだ。キャスターが民間人を大

量に襲っていることも確かに許しがたいが、目の前の男は聖杯戦争の参加者ですらない。

そして、参加者である自分たちに宣戦を布告した。これは、聖杯戦争そのものをひっくり返す一大事だ。これを排除すれば、交渉次第では3画どころか5画はもらえるだろう。そんな、都合のいい妄想で自分をごまかす。

結局のところ、なめられたくないのだ。あのヘラクレスがどれだけ強かったとしても、この時計塔の講師を務めるケイネス・エルメロイを無視するなど許せないのだ。

その言葉に、ランサーは身震いするほどの感動を受けた。理屈はどうあれ、ヘラクレスの首を刈り取れるとあればもはやどうでもいい。それを主が命じてくれるとあれば、これに勝る光栄など存在しない。

同様の高揚に包まれた軍勢は、いまや遅しとみなぎらせていた。

そして、その軍勢を前に立ちふさがるは一騎当千、万夫不当の大英雄、ヘラクレスであった。

二人の、全く同じ名前を持つ男女の剣士は、黄金の剣と不可視の剣を交えていた。

流儀も似通っており、構えや太刀筋、あるいは足さばきに至るまで非常に酷似していた。無論、体格に差がある故に微妙に違いはある。だが、その程度。明らかに同じ剣術を学んだもの同士の戦いであった。

そして、筋力も技量も速度も、そのことごとくを男性の剣士が上回っていた。特に、技量においては明らかに凌駕している。それは、客観的事実であり同時に両者が認めているところでもあった。

現に、傷を負っているのは圧倒的に少女の剣士であり、その美しい顔には血がぬれていた。

だが、それでも戦いは拮抗していた。剣そのものの格はともかく、

剣士としては圧倒的に男性が上回っているにもかかわらず、少女は未だに敗北していない。
「ふむ、重いですね」
轟音と共に、不可視の剣を受け止める剣士アーサー。その威力は、明らかに小娘の細腕のそれではない。魔力放出による上乗せがあったにしても、これだけの重みはありえない。
本来、彼女程度の力量ならばこの一撃を受け止めて、返す一撃で両断できるはずだった。だが、弾けない。受け止めるのがやっとだ。
これは、魔力でも筋力でもない。理屈を超えた、戦場を駆け抜け続けた武将の力。
「いえ、貴方の場合は『王の力』ですね」
格下を相手にしての予想外の苦戦。それすらも楽しみながら剣士は笑う。それを、不愉快そうに見るのは少女だ。
言葉を交わさずとも、伝わるものはある。いや、より雄弁に伝わるのだ。実感を伴って。
百聞は一見にしかず。百見は一触にしかず。
高度な戦いはある意味においてコミュニケーションであり、相手を理解することにつながる。これは、戦略や戦術、戦闘のあらゆる場面で共通する事実である。
それ故に、アルトリア・ペンドラゴンは目の前の男が自分と血縁のある男であり、少なくともペンドラゴンを騙っているだけではないと見抜いていた。
同時に、彼が王ではないことも、そうした責任のある立場に無いことも見抜いた。剣が、軽すぎるのだ。英雄としての誇りはあっても、背負っているものが軽すぎる。故に、剣の一撃に重みが無い。
おそらく、彼は剣士として生き、それ以外の全てを排除しているのであろう。王として、騎士として生きた自分には無い、圧倒的な研鑽が見て取れる。それは、種類の違いはあっても決して軽くない剣士の誇りを感じる。
それはいい。
国を滅ぼした自分が、自分の子孫に向かって何故王ではないのか、

と問うほど愚かではないし、王になるということは、人としての幸せの一切を放棄することだ。薦められるものではないし、生半なものには任せられない。

だから、そんなことで怒っているのではない。

「その剣は・・・！」

コールヴランド、あるいはカリバーン。その剣を振るっているのでなければ、彼女は彼をただの敵と見ることができただろう。

もしも、モードレッドがこの剣を振るっているのならば、まだ許容できる。彼女は王になろうとしていたのだから。自分は彼女を王の器にあらずと断じたが、もしも彼女がその剣を振るって国を束ねたのであれば、アーサーは自分の不明を恥じ彼女に詫びただろう。

だが、王でなく、王になろうともしていない男が、ただ自分の血縁であると言うだけでこの剣を振るうのであれば、それは自分への最大の侮辱に他ならない。

なぜならば、もしもその剣が『ペンドラゴン』であるだけで振るえるのであれば、『王でなくても』振るえるのであれば、それは即ち彼女の人生の全てを否定することになるのだから。

「貴様が担っていいものではない・・・！」

たとえ、戦士として劣っていようとも、ブリテンという国を背負った王として自分は負けられない。その気迫がアーサー王の剣に宿り、剣士アーサーを押していた。

「ふふふ、凄い剣幕だ」

しかし、それでも剣士アーサーはひるまない。強敵、苦戦、実に結構だ。自分の人生は、結局それだけあればいいのだから。

輝く船にのった黄金の王は、輝く槍を持った武将姿の男に激昂した。たとえどこの誰であろうと、自分を見下ろすなど許せないこと

だ。
マスターである時臣の困惑を一切無視して、聞く耳も持たず戦闘を開始する。
「仰ぎ見るべき我を、下に見るか、下郎！」
激昂と共に、空間を揺らせて４っつの宝具が射出される。その独特の攻撃方法に面食らいながらも、曹操は槍を振るって光の帯を放った。
その一撃は、たやすく宝具を破壊して、更にギルガメッシュに肉薄する。だが、それも更に展開された無数の盾によって遮られる。
「武器が・・・多すぎる！」
「ふん、王の財、その一端を見るがいい！」
３０は下らない宝具が、四方八方から空中の曹操に襲い掛かる。しかし、その何れもがただ射出された代物であると見抜いた曹操は、空中を高速で移動しながらそれを一つ一つ破壊していく。
それは、一つ一つが視界の外側からの超音速の一撃であったが、曹操は技量でもってそれを打ち落とし、槍の暴威を持って砕いていく。
圧倒的物量を凌駕する圧倒的技量。それは、時臣をして先日のバーサーカー戦を思い出させるものだった。であれば、結果も同様である。故に、恐れは無くなった。
圧倒的物量で及ばないのであれば、絶望的物量で押しつぶせばよいだけだ。
「さあ、いつまで凌げるかな？」
百を超える宝具の弾丸。その全てが一級品である。もはや、技量でどうにかできるレベルではない。矢の一撃を受け止める剣士も、降りしきる雨の全てをはじくなど不可能であるが故に。
よって、ギルガメッシュは全く焦らずに、嗜虐でもって弾丸を発射した。しかし、曹操もそれに全く動じない。虚空を斬り、その中に姿を隠した。
それを見て、ギルガメッシュは自分の背後に再び無数の盾を展開する。
直後、激しい槍の一撃が船体を揺らした。サーヴァントであれば令

呪をもってようやく可能になる空間跳躍からの奇襲。それは全くの初見であったにも関わらずギルガメッシュにはたやすく防ぐことができた。

「何！」

「なかなか、興じさせるではないか」

既に射出されていた弾丸は、宙でその軌道を変えて再び曹操に襲い掛かる。更に、ギルガメッシュは宝具を１００ほど射出し、追尾させる。

曹操は、空間跳躍を繰り返しながらそれを迎撃し、反撃する。しかし、悉くが防がれ、あるいは避けられた。ギルガメッシュの乗る船は、慣性を無視した優雅な飛行によって放たれる光の帯を避けていった。

曹操は、その気になればこの星を打ち砕くこともできるが、しかしそれをすれば一誠が死んでしまうおそれがあるし、その前に結界が壊れる。そうしたら、他の面々に影響があるだろう。

更に言えば、自分がどの程度の出力を出していいのか、細かい制御がそこまで得意でない彼は、無数の武器を操る敵を前に、出すべき力を決めかねていた。

時間は少しだけさかのぼる

ホテルにいた二つの大きな気配。おそらくサーヴァント2騎が、自分が向かっている最中に動き出した。その先は、河原。司令官が向かっている場所である。

あの2騎にどのような目的があろうとも、とりもなおさずあいつに接触させるわけには行かない。

自分の遥か頭上、夜の街を駆けていく雷の戦車。それを性格に視認したヘラクレスは、ビルの屋上からたった一歩の助走もせずに跳躍する。

それは、ランサーやセイバーですら令呪を用いなければ実現できないほどの大跳躍だった。しかし、彼にとっては何の事もないことだ。

あるバッタは、人間大になれば9階建てのビルを飛び越えると言うが、彼がその気になればランドマークタワーだって飛び越えられるだろう。

それも、ただ筋力を持って、だ。

たったの一歩、その程度の加速でライダーの宝具に追いついたヘラクレスを、今度は雷の結界が蝕む。神獣の引く戦車は、ゼウスの雷によって守られている。

だが、それが何だというのだ。この魂はゼウスの子供である。そして、それを抜きにしてもその肉体はそれ自体が甲冑、いや城砦だ。雷は、体に火傷はおろか熱さえ伝えない。

結界を突き破り、そのまま御者台の床をつかむ。つかんでしまえばこっちのものだ。前世においては、あらゆる刃が通じないと言う大獅子を捻り潰し、ケルベロスを生け捕りにした豪傑である。

例えば、単純に考えて、神獣の二頭引きの戦車を正面から止めるにはそれと互角の力が必要である。更に、反対側に吹き飛ばすには倍の力が必要である。片手でそれをやるとなれば、更に倍は必要だろう。加えて、足場も無い空中でそれをやるとなれば、一体どれだけの力が必要になるのか想像もできない。

だが、この男にしてみればたやすいことである。できないとは思えないし、疑いもしない。事実として、一連の動作は極めてスムーズだった。

戦車に追いつく健脚、結界に耐える堅牢、戦車を越える強力。その一つ一つならば、肉体一つでそれをこなすと言う点を除けば、宝具なりスキルなりで備えている英雄は決して珍しくないだろう。だが、その全てを備えている英雄となれば、ヘラクレス一人ぐらいのものである。

ヘラクレス。最強の英雄は、ただ自分の肉体を全く疑っていなかった。肉体もそれに答えた。

力任せに放り投げられた戦車は、いともあっさり制御を失い、狙い通りに山の中腹に着弾した。

ヘラクレスは数秒の浮遊の後、ビルへの着地と同時にその場に向

かって再び跳躍する。
そこには、マスターと思われる魔術師が三人とサーヴァントが2騎確かにいた。
大地にクレーターを作り、降り立った彼はマスターたちが目を覚ますのを待った。純然たる事実として、自分たちは横槍を入れたのだから、事情ぐらいは説明するべきだろうと判断して。
まさか、勧誘されるとは思っていなかったが。曹操と仲いいかもな、こいつ。
「・・三勢力連合正規軍『M．A．R．S』第二精鋭部隊天秤派所属、上級戦闘員ヘラクレス」
と名乗った後で、ヘラクレスは激しく後悔した。ヘラクレスと名乗れば、それはもうあのギリシャ神話最強の英雄を思い浮かべるだろう。
そして、自分はそのヘラクレスではなくその魂を継ぐもの。転生体だ。正直に言って、前世の記憶など全く無いので、十二の試練を突破したときの感想とか聞かれても、そのなんだ、困る。
やっぱり、こう、ちゃんとM．A．R．Sの事を知らない一般の方に名乗る名前を考えておかないと駄目だな。
こういう話をすると、ジャンヌやアーサーからは気にしすぎだと言われる。あいつ等は、まだよくある名前だからいいのだが、こっちはもう完全に単一の英雄しか思い浮かばない名前なのである。なぜか一誠からは『分かるよ』と言われる。おそらく本来の歴史に絡むのだろうが、さて。
そして、そんなことを考えていると結界の中に閉じ込められた。内部には、おそらくサーヴァントと同格であろう英霊たちが待ち構えていた。
しまったな。
軽く、後悔した。まさか、騎兵らしきイスカンダルが、こんな結界を持っているとは予想外だ。
別に、結界の一つや二つ壊すなどさして難しくないが、この結界がどの程度の固さなのか専門家ではない彼には見当もつかない。この

結界を壊して更に黒鉄の構築した結界を壊してしまえば、最悪一誠が消滅してしまうかもしれない。

嘗ての、周囲に破壊をばら撒いていた自分ならばともかく、今の自分は広範囲や多勢を攻撃する手段は決して多くない。むしろ、苦手だ。これでは、自分以外がピンチになったとき救援にいけない。

だが、自分が置かれている状況そのものに限って言えばヘラクレスは全く恐れていない。この程度の軍勢、あの神話間戦争での無茶な戦いに比べれば、何のことも無い。

『戦力が足りないから、お前一人でシヴァ神足止めしろ。ちなみにお前に拒否権は無い』

そう、あのときに比べれば、たやすいことだ。あいては、所詮死んだ英雄に過ぎないのだから。

時に、ＭＡＲＳランキングとは、あくまでも危険度を前提としたランキングである。

たとえ、当人が『全体で十指に入る』実力者だったとしても、その能力が単体での戦闘向けで効果範囲が狭く、能力の制御が万全で暴走の危険がなく、なによりも人格者で周囲に叛意がないと思われていれば、ランキングは自然と低くなる。

「我が朋友よ！今宵の敵はかの大英雄、ヘラクレス！昨夜の敗北をぬぐうには十分すぎる敵だ！

我が軍の全てをかけて、かの大英雄を打ち倒すぞ！」

災害のような歓声が、軍勢から発せられる。砂塵が舞い、魔力で大気がきしんでいる。

それは、彼等の高い士気の表れだった。最高のコンディションで、最強の敵と戦えることへの高揚がもたらすものであることは明らかだ。

「いいぞ、応えてやる」

ヘラクレス本人でなかったとしても、その名前に恥じない功績と実力は持っているつもりだ。
英雄の魂を継ぎ、英雄になった男は、決然として軍勢を迎え撃つ。

ヘラクレス
出身　ギリシャ
種族　人間（半神）
保有神器　巨人の悪戯
Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓランキング　１７位

「さあ、やろうか」

雷鳴の大戦士の鉄槌が下される。

ほう、てっきり赤龍帝が来るかと思ったが・・・。ゼウスの子倅か・・・。

その雷、ゼウスのものではない。なるほど、ミョルニルか。盗まれたと言っていたが、お前が持っていたのか。

トールの武器、Ｙ・Ｈ・Ｖ・Ｈの祝福、ゼウスの血統。

主神級３柱の加護を受けているとあれば、楽しめそうだ。

さあ、新世代よ。このシヴァを興じさせよ。

ヘラクレスは、世界最強の一角を相手に、なんと戦争開始から終了までの半日間押さえ込んだのである。

それは、戦後も高く評価され、初代に勝るとも劣らぬ偉業であるとたたえられた。

本人は、もう二度とごめんだと語っているが、シヴァとインドラからは、熱い視線が送られていたりする。

ちなみに、実力差はジャイアンとのび太ぐらいあったという。殺す気満々のジャイアンを相手に、よく持ちこたえたものだ。

「蹂躙せよ！」

王の号令の下、軍勢は手にした槍を投擲し、弓に番えた矢を放った。

以前と違うのは、一人一人の能力値が向上していることと、その一発一発が宝具の真名開放だと言うことだ。Ｂクラスないし Ｃクラス。中にはＡクラスのものまで混じっている。

さて、この猛攻をヘラクレスは以下にして対処するのか。

アーサー王ならば鞘による絶対防御で、英雄王ならば負けじと無数の宝具を展開して防ぐのだろう。施しの英雄ならば、その黄金の鎧ではじくに違いない。いずれにせよ、生半な防御では突破されるに違いない。

では、ヘラクレスは？『ヘラクレスの筋力』で解決する。
その、鍛え抜かれた健脚に力を込めて、走り出す。スプリンターがそうであるように、筋肉が速度を作り出す。
それは、爆発的推進力でもって槍や矢の雨をかいくぐっていく。
中には、必中の矢や槍も存在する。だが、そのことごとくが命中しても刺さらない。複合装甲すらもかすむ絶対的防御力。怪物と取っ組み合いをしてなお負けない最強の肉体。
その、防御力が『ヘラクレス』。
そのヘラクレスに、騎兵隊が突撃してくる。当然、これも一人一人が真名開放を行っている。砂塵を吹き飛ばし、地面をけって、弾丸のように突撃してくる人馬一体の群。
騎兵の強みは機動力である。速度に乗った騎兵は、圧倒的突破力で歩兵を食い破る。それが、真名開放であるとくれば尚のことだ。まして、これもＡクラスの混じった宝具の群。その威力たるや生半なものではない。
さて、この突撃をヘラクレスは如何にして解決するのか。
メデューサならば魔眼で、叛逆の騎士ならば王剣で薙ぎ払うだろう。いずれにしても、受けに回れば蹂躙されるに違いない。
では、ヘラクレスは？『ヘラクレスの筋力』で解決する。
神殿の柱の如き両腕を、翼のように広げて騎兵隊の突撃を迎え撃つ。
「絶牛雷犁熱刀（ダブルラリアット）！」
人間など、踏み潰してしまうだろう英雄の軍馬。その突撃を、逆に轢殺する。真っ向勝負で、力任せに吹き飛ばしていく。
そのまま、何人かを馬ごと高方と抱え上げて、地面に叩きつける。
「雷我爆弾（ライガーボム）！」
叩きつけると同時に、地面が波打ち爆発する。雷が走り周囲を蒸発させる。抱えていた連中など、叩きつけると同時に座に帰った。突撃してきた騎兵隊は、傷一つ負わせることなく壊滅した。
その、腕力が『ヘラクレス』。
なおも走り続けるヘラクレスの前に、今度はファランクス陣形が待

ち構える。
その陣形は、イスカンダルの象徴とも言うべき必勝の型。長い槍を持った歩兵が密集し、隙間なく槍衾を形成する。当然、これそのものも宝具である。
さて、この陣形をヘラクレスは如何にして解決するのか。
騎兵としての突撃が可能なライダーであれば、側面から攻撃するだろう。そのほか、対軍宝具持ちならば、薙ぎ払ってしまうに違いない。だが、その陣形は正面からは堅牢。正面からの突撃にはめっぽう強い。
では、ヘラクレスは？『ヘラクレスの筋力』で解決する。
彼は、ショルダータックルの体勢をとった。頭部と背中を繋ぐ僧帽筋の爆発的な肥大。人体の弱点首が埋まり　上半身全てが瞬間一つの鉄塊に。
「Δダイナマイト！」
剛力3倍。槍をへし折り盾を砕き、堅牢なはずのファランクス陣形を破壊してそのまま軍勢に突入する。
もう、こうなってしまえば遠距離攻撃も対軍宝具も使用できない。ただ、怪物をも蹂躙する大英雄の力で蹂躙されるだけだ。
だが、王の軍勢もやられっぱなしではない。宝具は爆発的な効果を発揮するものがあるが、常に発動して戦闘を優位に進めるものもある。破魔の紅薔薇、必滅の黄薔薇、無毀なる湖光などがそれに該当する。
それを手にした兵士たちが、ヘラクレスの巨体に襲い掛かっていく。真名開放には程遠いものの、その威力は凄まじい。また、数も多い。如何に万夫不当であろうとも、このまま素通しなどさせない。勇者たちはしがみつき、大英雄を足止めせんと奮戦する。
さて、この勇者たちをヘラクレスは如何にして解決するのか。
施しの英雄ならば炎の魔力放出で、神威の戦車ならば真名開放で、魔拳士ならば圏境で、いずれにせよ、その手立てはないではない。
では、ヘラクレスは？『ヘラクレスの筋力』で解決する。
群がる軍勢をものともせず、ただひたすらに大将であるイスカンダ

ルを目指す。道を塞ぐ敵を文字通り蹴散らし、足にしがみつく敵を引きずりながら、剣をその肉体ではじいて突き進む。

その姿はまさに万夫不当、まさに一騎当千、まさに鎧袖一触。叫ぶこともなく猛る事もなく、ただ並み居る軍勢を押しのけて突き進む様は、帝王の如し。

「帝王の突進（シーザーズチャージ）！」

その肉体は、人間如きでは何万集まろうと傷つけることはできず、その膂力は、人間風情では何万集まろうと問題にならず、その健脚は、軍馬風情では追いすがることもできない。即ち、絶対に倒れず、絶対に止まらない突撃。

怪獣を肉体的に凌駕するこの英雄は、もとよりご大層な宝具など必要としていない。その肉体だけで全ての問題が解決する。否、全ての問題を解決してきたのだ。

その雄度がヘラクレス。

もはや、もうどうにもなりはしない。この男と対峙した時点で、もうイスカンダルの命運は尽きていたのだ。

「道をあけよ！」

しかし、その絶望を吹き飛ばしてこそイスカンダル。己の持つ宝具、『神威の車輪』の真名開放を行った。Ａ＋ランクの宝具による蹂躙突撃は、軍勢の中でも屈指の強さである。

もとより、ただ見ていることなどできはしない。彼のヘラクレスが自分の命を狙っているのだ。どうしておめおめと隠れることができようか。

「遥かなる蹂躙制覇（ヴィア・エクスプグナティオ）！」

それは、ゼウスの雷を纏った蹂躙走法。ライダーにふさわしい、圧倒的突破力を持った突撃である。

だが、それはむしろヘラクレスに利している。元より、ヘラクレスはアキレウスと違って多数の軍勢を相手取るに秀でていない。強大な怪物と生身でぶつかり合う強さこそが、彼の持ち味だ。

『飛蹄雷牛（ゴッド・ブル）』の突撃も、なんの、大獅子やケルベロスに比べればかわいいものだ。真名を開放しようが何をしようが、この

英雄には何の意味もない。
「トライデントタックル！」
片手を突き出し、神獣を連結する支柱をつかむと、そのまま高々と持ち上げ、地面にたたきつけた。Ａ＋ランクであるはずのその宝具は、ただそれだけでいともあっさりバラバラになる。今更ながら、恐るべき膂力と言わざるを得ない。
だが、宝具はバラバラになっても神獣もイスカンダルも健在であった。己が体だけでも突撃せんと、雷鳴を帯びる飛蹄雷牛２頭。愛馬ブケファロスに跨り、再び挑まんとするイスカンダル。王を守らんと、勇者に喰らい着く軍勢。そして、その影から令呪３画の助けを受けて突撃するランサーの姿もあった。
だが、その場にいた全員が、そのヘラクレスの構えを見て戦慄した。彼は、バラバラに解体した戦車の、その支柱を掴み槍のように構えていたのである。
それは即ち、彼が武芸を披露しようとしているということだ。
「射殺す百頭（ナインライブズ）！」
重厚長大な支柱が曲がって見えるほどの高速連続攻撃。その風圧は軍勢を切り裂き、隊列を吹き飛ばしていった。
宝具の真名開放ではなく、ただの攻撃、スキルにすぎない。しかし、それはさながら地上の流星のように大地をも抉っていく。
その、余りにもヘラクレスらしい豪華な力技をみて、マスター二人はもう完全に戦意を消失させていた。
「どうしろっていうんだよ・・・あれ」
「無茶苦茶すぎる・・・」
切り札であるはずの、ランサーの令呪３画使用による奇襲も、もののついでのように破られてしまった。
しかし、納得せざるを得ない。あれはあらゆる英雄の中でも、おそらく最上級に位置する最強の英霊だ。神秘も、知名度も、他とは比べ物にならない『無敵』の英雄。
腕の一薙ぎで軍勢は吹き飛び、突進は軍勢を押しつぶし、いかなる宝具も砕かれ、歯が立たない。それこそが、ヘラクレスなのだ。

「くははは、なあランサー」
愛馬ごと吹き飛ばされ、地面に倒れるイスカンダル。彼は、自分同様に地に倒れているランサーに声をかけた。ランサーは、両の槍をへし折られ、かろうじて体が動くだけとなっている。
「なんだ、征服王」
「ヘラクレスは、やっぱり強いなぁ」
「ああ、全くだ」
ヘラクレスは、彼にとってなじみのある英雄だ。父方、マケドニア王家の遠い先祖と伝えられている。生前は、彼のまねをして毛皮を兜に戦場へ出たものだ。
そのヘラクレスが、自分と戦っている。自分の軍勢と戦っている。そして、歯が立たない。もう、感動的なほど嬉しかった。ヘラクレスが、ヘラクレスなことが、たまらなく嬉しいのだ。
とはいえ、ヘラクレスも数万と言う数には手を焼いていた。手にしていた支柱は、必殺の一撃の負荷で折れてしまった。広範囲を攻撃する術を持たない彼は、いい加減外の仲間が心配になっていた。
業を煮やした彼は、ついにこの結界を破壊しにかかる。
さて、この結界をヘラクレス達は如何にして解決するのか。
カルナやアルジェナのような、インドの一部の英雄は、結界をも破壊するような強力な宝具を持っているし、ギルガメッシュは文字通りの対界宝具を所持している。
では、ヘラクレスは？『ヘラクレスの筋力』で解決する。
ヘラクレスは、十二の試練を乗り越えたことで知られるが、第十一の難業、黄金のリンゴの実を取ってくる、というものに関しては人の手、というか巨人の手を借りている。
オケアノスの岸辺にある楽園に生えた黄金のリンゴの樹。それは、もう人間のいける場所ではない。よって、彼は世界の西の果てで世界を支えているアトラスという巨人にそれを取ってきてもらうように頼んだのだ。もちろん、その間は自分が支えると言って。
アトラスは巨人の中でも巨体で、特に怪力であったが、それでも天地はとても重いものだった。だが、ヘラクレスはそれをあっさりと支

えてみせたという。
「地球投げ！」
大地に両手を突き刺し、渾身の力を込めた。同時に、世界そのものが悲鳴を上げる。世界の全てを支えたと言うその腕力で、この世界そのものを破壊しにかかったのだ。
たったそれだけで、本来彼以外の誰がやっても無意味に終わるはずのそれを、彼はやってのける。
イスカンダルが朋友と共に駆け抜けた戦場は、しかし、たった一人の腕力の前にたやすく屈する。大地はひび割れ、隆起し、天に亀裂が走った。無双の軍勢は、もはや見る影もなく壊乱していく。
気づけば、夜の森に戻っていた。昨夜と同じく、圧倒的に優位だった自分たちはあっけなく敗北し、目の前には敵が残っている。昨日と違うことがあるとすれば、それは、敵が未だに健在だと言うことだろう。
「もう、ここまでされれば笑うしかあるまい！」
満身創痍のイスカンダルは、笑いながら立ち上がると、拳を握り締めた。
「付き合うぞ、征服王」
槍を失ったランサーも、血だらけになっても何とか立ち上がる。
目の前には、全く無傷の大英雄が何事もなかったかのように立ちふさがっている。
「この挑戦、受けてもらうぞ！」
「うおおおおおお！」
男二人は、もはや最後の武器に全てを託した。即ち、拳である。
男は、皆世界を征服したいと思うものだ、とイスカンダルは言う。だが、もっと原始的なユメが存在する。それは、すなわちヘラクレスのように世界最強になりたいと言う夢だ。
己の体一つで、何もかもを解決する最強の男。ああ、あこがれないわけがない。
二人は、ぼろぼろになりながらヘラクレスに殴りかかった。それを、やはりヘラクレスは微動だにせず受け止める。

二人の男の拳は、確かにヘラクレスを打った。しかし、痛みを感じたのはやはり二人のほうだった。
「・・・坊主、付き合ってくれて、礼を言うぞ」
「・・・マスター、申し訳ありません」
ヘラクレスが拳を振り上げ、振りぬくまでの刹那、二人の英雄は己のマスターに礼を言った。
言い終わると同時に、彼らはヘラクレスの鉄拳で粉々になりながら吹き飛ばされる。
「ロケットパンチ！」
看板に偽りなく、ロケット推進のように吹き飛んでいく二人の英雄。しかし、その顔はとても安らかだった。
残るは、意識を失ったままのソラウと、腰を抜かしたマスター二人。そして、ヘラクレスだけである。
「さて、他の連中は・・・」
ヘラクレスが上空を見上げると、暗闇の結界の中で無数の光が生まれては消えていた。どうやら、まだ終わっていないようである。

市街地にて、アルトリアは未だに耐えていた。一国を治めた王であることの、その意地で。
昨夜の宴によって回復したはずの体は、再び傷で覆われ、息は荒く、疲弊していた。
だが、未来予知に近い直感と、王の持つ剣の重みによって持ちこたえていた。そして、今。ついになんとか一太刀を浴びせることができた。
剣士アーサーは、自分の額から流れる血をぺろりとなめて、笑みを深めた。

なるほど、強い。この重さは、下手をしなくても一誠以上である、と感じた。

そして、それは全く持って自分には宿っていないことも知っている。だが、負ける気はまったくなかった。

（拳の重み？まあ、意識したことはないが）

（だが、気にすることはないぞ。そんなものは単なる一要素だ）

（いいか、戦いって言うのは背負っているものが重いほうが勝つんじゃない。修行の苦痛が多いほうが勝つんでもない）

（背負っているもののプロフィールを調べて、それを発表しあうわけじゃないだろう。努力の時間を記録して、それを競い合うわけでもないだろう）

（戦って強いほうが勝つ、当前だ）

（拳の重みなんて言葉は、むしろ侮辱だ。おれはそんなものを評価されたくないね）

（それに、武将にしかないものがあるというのなら、求道家にしかないものがあると知っているだろう）

（競うな、持ち味を生かせ）

そうだ、あれをやってみよう。一誠との語らいを思い出した、そのついでに一つの妙案がアーサーの脳裏を走った。調度いい。あれで彼女を斬ってみよう。

「貴女は強い。尊敬に値するほど強い」

アーサーは、自分の妹によく似た少女を心の底から賞賛する。彼女は、スペックでもテクニックでも劣っているにもかかわらず、その不屈の意思だけで自分に刀傷を負わせた。

ならば、自分も剣士としての誇りを見せねばなるまい。生涯を、それのみにささげることでしか至れない境地をお目にかけよう。

アーサー・ペンドラゴン

出身　イギリス
種族　人間
専用武器　聖王剣コールヴランド
M・A・R・Sランキング　16位

「予告しよう。貴方の誇りごと両断する」

聖王剣の担い手、本領発揮。

勝利を約束された、勝利すべき王～勝利を約束されぬ、勝利すべきでない剣士

あなたは最強だ。なのになぜ、まだ強くなろうとしているんですか。

ヴァーリへの義理もある。初段じゃ格好がつかないのもある。だが・・・。

「私の誇りごと、ですか・・・」

「ええ、そうでなければ意味がない」

アーサー王に王としての信念があるように、剣士アーサーにも求道者としての信念がある。一対一の決闘で、求道者でもないものに遅れをとることなどあってはならない。

軍勢の強さも知っている。絆の強さも知っている。だが、それでも自分にとって重要なのは個の強さだ。他の何で劣ろうとも気にしないが、これだけは負けるわけには行かない。

同流派ならば尚のことだ。王に王として背負っているものがあるように、求道者には求道者が背負っているものがある。

それは、同じ道を歩いているものにしか理解できないものだ。なぜならば、彼らは力を、強さを求め続けるがしかし、それをナニカに生かそうとは思わない。強くなること、それ自体が目的だ。

例えば、スポーツマンのようにメダルが欲しい、ベルトが欲しいとは思わない。

例えば、騎士のように武勲を立てたい、弱者を守りたいとは思わない。

例えば、王のように国を守りたい、国を滅ぼしたいと思わない。

一重に強くなりたい。とにかく強くなりたい。誰よりも強くなりたい。一重に、とにかく、誰よりも強くなっても強くなり続けたい。

力とは、己の意を通す為の道具であるが、彼等にとってはより大きい力を手に入れること、それ自体が目的だ。故に、富も名誉もいらない。欲するのは己の力と、そして打ち倒すにたる敵だ。

だから、それだけは絶対に負けない。

「貴女は強い。王の持つ、国を背負う責任故の強さ。その強さを真っ向から両断しなければ意味がない」

勝つ、とは目的を達成することである。彼にとって勝つとは、背中を切ることではない。遮二無二殺すことでもない。真正面から挑み、相手の全力を切り捨て、完全に自分が強いと言うことを証明してこそ勝利と言える。

その顔は、自分の力をぶつけられるという高揚に満ちていた。

「・・・いいでしょう。こうして正々堂々と戦うというのであれば、意義はありません」

口ではどういいつくろっても、心中、全く持って穏やかではない。なるほど、正面から戦って勝つ、という宣言は騎士道精神にも矛盾しない。正面から来るのであれば正面から倒すのみだ。

だが、彼の中に在るものはただ己があるだけ。相手を尊敬していると言うが、それはただ強さという絶対値だけ。その強さの種類に、なんの興味も持たない目だ。

獣も騎士も賊も王も、強さと言う絶対値が等しければ彼にとっては等価値なのだ。許せるものか。そんな男が王の剣を持っているなど。

アーサー王は、己の剣を覆っていた空気の鞘を解き放った。何のことはない、元々この男に不可視の剣など何の効果もなかった。であれば、その分も力に回すだけのこと。

「・・・では」

剣士は、黄金の剣を両手で強く握り構えた。そして、大きく一歩踏み込んだ。

「疾きこと風の如く」

それは、他の何よりも速度を重んじる一撃だった。起こり、踏み込み、振り、抜きまで何の無駄もない、完成された初撃。

目で追うことはできなかった。速度もさることながら、動きに無駄

がなさ過ぎる。直感で予知していなければ首と胴は泣き別れだった。その技量に瞠目しつつ、しかし、聖剣で確かに防御する。

だが、動きは止まってしまった。そのまま更に追撃が連続する。その一撃は、速度に長じている分軽い。おそらく、鎧の上からならば致命傷にはならないだろう、そう思わせるほど軽い斬撃だ。だが、狙っている箇所が装甲の継ぎ目であったり、動きの要と呼ぶべき部分ばかりだった。喰らえば、そのまま死につながる。

故に、彼女は全力をとして凌ぎ続ける。幸い、攻撃は軽いこともあるが、一度の攻撃の後には少々のラグがある。一振り一振りは完璧でもつながりは未完成だ。尤も、それは自分やランサーのような接近戦のスペシャリストでなければ見抜く前に死んでいるだろうが。

薄皮を切られながら、しかし攻撃の継ぎ目を見抜いて反撃する。しかし、それも剣士には想定の範囲内だ。

「静かなること林の如く」

防御の体制からの反撃は、どうしようもなくラグがあった。また、攻撃している剣士にしてみれば自分の技の未熟さなど王以上に熟知している。継ぎ目を狙ってくるなど想定内だ。

故に、その動きの枕を押さえて繊細に流れを変える。しゃらん、と弾けるような音ではなく金属がすりあうような音と共にセイバーの反撃はいともあっさり流された。

信じがたいほど、彼女の一撃はものの見事に捌かれたのである。分かりきっていたが、彼の技量は自分を大きく上回っている。

渾身の一振りが空振りに終わり、おもわず体制を崩してたたらを踏みそうになるセイバー。しかし、直感の叫びで必死に体勢を取り戻す。だが、それでも返す刀で鎧の上から一撃をもらった。致命傷ではないが、しかし大きく体に傷が走る。火がついたように熱い。

アーサー王は、攻めたのではなく攻めさせられたことに羞恥を憶えつつも、再び防御の構えを取った。やはり、直感が追撃に対して警報を鳴らしたのである。

「侵略すること火の如く」

何の小細工もない大上段からの一撃。その、二撃目も反撃も考慮し

ていない威力のみを追求した一振りを、セイバーは聖剣を斜めにしていなそうと試みる。

轟音と共に、大上段からの一振りは地面を砕いた。いなすことには成功したが、しかし両腕がしびれる。間違いなく、今までの中で最強の一撃だった。まともに受けていれば、防ぎきれずに脳天から両断されていただろう。

しかし、凌いだ。最大の一撃の後に、隙は必然先ほどよりも大きい。ここからならば、先ほどのようにいなすことはできない。確信を持ってアーサー王は反撃する。

それは、事実だった。先ほどはこちらの剣の振りにに添うように剣を振っていたが、今度は剣を盾の如く構えている。受けられたとしても、それでも主導権を奪えるはずだ。

「動かざること山の如く」

はずだったのだが、それは彼女の知る術理の限界でしかない。剣士アーサーは中国拳法における足捌きによって、極小さい動きで盾のように構えた剣で打撃を放った。当然、その打撃は打ち込まれた彼女の剣そのものへの打撃である。

打ち込んだはずが弾かれた。それは意識的なカウンターとなり、体重で劣る彼女を吹き飛ばした。彼女と違い、彼は全く違う生き物や全く違う術理の敵と立会い、交流と経験をつんできた。聖杯は現代の知識を彼女に与えているが、しょせんそういうものがあると知っているだけのこと。少なくとも、技の引き出しと知識量においても、彼は彼女を遥かに突き放している。

攻撃した力で、逆に弾かれたように吹き飛ぶアーサー王。再び距離が生まれるが、しかしそれは些細なことだ。英雄にとって、少々の間合いなどあってないようなものである。

いいか、アーサー。この奥義の肝は、絶対に防げないというタイミングで攻撃することにある。そうでなければ意味がない。大きく隙を作ってそこに渾身の一撃を叩き込め。自分にとって、この上ない絶対の一撃を。

「動くこと・・・」

それは、アーサーにとって最高の一撃。全く無駄のないフォームから放たれる、速度と重量の乗った乾坤一擲の一撃。

基礎を極めているが故の、なんの飾り気もないただの一振り。しかし、だからこそ、技量も膂力も劣る相手には対処を許さない、究極の一。彼にとっての、今現在の最強の一。

「雷霆の如し！」

朝から晩まで、幼少のころから鍛えに鍛えた、極基本的な抜き胴。英雄の速度、英雄の膂力、英雄の技量。ただ、それだけで、最強無敵の必殺技に昇華する。

李書文の无二打のように、佐々木小次郎の燕返しのように、才能と嗜好と鍛錬と幸運の全てが何の不足もなく充実していなければ絶対に成立しない、それ自体が宝具と呼ぶにふさわしい絶対の一。

いかなる身体能力を持とうとも、いかなる伝説をうちたてようとも、いかなる宝剣を担おうとも、自分同様に武に全てを奉げていなければ反応することも不可能な一撃。

身体能力では、ヘラクレスや美猴には遠く及ばないアーサーが、彼らに負けぬために鍛え上げた奥義『風林火山』の奥の手、『雷』。本来は聖王剣の力を解放して放つそれは、Ａクラスでもトップクラスの切断力を誇り、並み居る邪竜の首さえも一刀の元に断ち切る。

まして、格下の身体能力、格下の技量、大きく体勢を崩している相手には、防げる道理はなかった。

その刹那、アーサー王の脳裏に浮かんだのは、遥かキャメロット。そこには円卓の騎士がいた。自分に従う騎士がいた。守るべき民がいた。統べるべき国があった。

そして、切り捨ててきたものがあった。モードレッド、ランスロットがいた。戦費の捻出の為に干上がらせた村があった。倒してきた敵がいた。

その全てにかけて、自分は目の前の男に負けるわけにはいかない。
王の剣を、皆が信じた騎士王の象徴であるそれをただの強い剣としか思っていない男に、負けるわけにはいかない。
勝たなければならない。自分の双肩には、国の未来がかかっているのだから！

「私、は、勝つ！」
アーサー王がその一撃を防ぐことができたのは、直感スキルと彼女自身の技量と才覚。そして、国を思う意志の強さゆえであろう。むろん、剣士アーサーが聖王剣を全開にしていればこの町は横薙ぎに両断されていただろうが、そんなことをしていればまったく別の結果だっただろう。そんな真似をしない程度には、彼は良識があった。
ともあれ彼の渾身の一撃である抜き胴を、彼女は約束された勝利の剣で確かに受け止めていた。
なんとか、体を震わせながらその一撃を支えていた。鍔迫り合いでは力もさることながら体格も大きく作用するため、それこそ全力で受けていなければならなかったが。
「私、は、負け、ない！」
自分に言い聞かせるように、顔から汗を噴出せながら、痺れているはずの両手で、命を削るように攻撃を受けていた。
それを、アーサーはにんまりと笑って見せた。
「知っていましたよ」

だが、防がれるだろう。どれほど、策や技を尽くしても物理法則すら凌駕して『奴等』は防ぐ。だから、そこを力ずくで無理やりこじ開けろ。

「貴女は、私の渾身の一撃を受け止めると知っていましたよ、ご先祖様」

アーサー王は、その笑顔に戦慄した。冷や汗が背を伝わる。直感どうこうではない、もはや確信している。このままでは自分は死ぬと。だが、どうしろと言うのだ。自分はもうこの体制を保つことに死力を尽くしている。これから何が起こるにしても、それを理解できても、対処のしようなどない。

この体勢を作るために、剣士アーサーは奥義の限りを尽くして彼女を弱らせ追い込んだ。即ち、詰み将棋のように攻撃と防御を想定し、横綱相撲のように最後は押し切る。

その攻撃の流れそのものを、ある男は『滅龍奥義』としたのだ。

「知っているということは、対処ができるということです」

エクスカリバーとカリバーン。刃を合わせているその聖剣は、本来エクスカリバーのほうが武器としては上である。

だが、儀礼用であるはずのカリバーンが輝いた。真名開放のように大規模に輝くのではなく、それ自体が刃であるかのように研ぎ澄まされていた。

その輝きが、エクスカリバーの刀身に食い込んだ。その光景に、セイバーは美しい顔をゆがめた。泣き出しそうになりながら、認めがたい事実をその眼は認識していた。

「そんな・・・」

「秘技・・・」

最強の聖剣エクスカリバーが、劣るはずのカリバーンで『切断』されつつあるなど、認められるはずもない。

だが、現実はそれを裏切っていた。彼女の認識の世界ではゆっくりと、しかし現実の世界では刹那の内に起こってしまったありえざる事態。

断言してもいい。自分がもう一人いたとして、カリバーンとエクスカリバーが打ち合わせて同様の結果にはたどり着けない。

それは、つまり、カリバーンを『自分以上』に使いこなしていると言うことに他ならない！

「計都羅喉剣・暗剣殺！」

２次元の域にまで研ぎ澄まされた厚みのない光の刃。それが、全く

手ごたえなく最強の聖剣『だった』エクスカリバーごとアーサー王の胴体を両断する。
その、速度と鋭利さ故に、剣士アーサーが抜き胴を振りぬいた後もアーサー王はエクスカリバーを握ったまま立っていた。
だが、全く汚れていない聖王剣を血振りした剣士アーサーが宣言すると同時に、時が動き出したように、ずるりと切断面があらわになる。

それが、『屠竜破骨』だ。

「滅龍奥義、屠竜破骨・・・完了」
立ったままの下半身を置き去りにして、上半身が地面に落ちた。切断面から勢い良く血が噴出していく。
金属音と共に真っ二つにされたエクスカリバーが地面に落ち、幻想的な光の粒となって消えていく。
「あ、ああ・・・」
消えていく。自分の象徴が消えていく。手を伸ばそうとするが、しかしそもそも肘から先も切断されていて存在しない。すがるものの一切を失った彼女はそれでも血のあふれ出る腕を必死に伸ばした。
「うそだ・・・」
何もかもが、消えていくようだった。自分の不甲斐無さゆえに、エクスカリバーは折れるどころか切断されてしまった。しかも、よりによってカリバーンによって。
何もかもが、大前提から幻想だったと言うのか？
カリバーンはただ強いだけの剣に過ぎず、エクスカリバーも同様であり、誰も彼もが王の剣であると思い違いをしていただけなのか？
それを引き抜いた自分は、ただの勘違いをしていた小娘だったと言うのか？
もしそうだったとすれば、自分は、理想の王であろうとしていた自分は、自分についてきた騎士達は、一体なんだったと言うのだ？

皆が、都合のいい夢を見ていただけだったというのか？
現実から目をそらしていただけだというのか？
そんなユメに、自分は溺れてしまったというのか？
「そんなの、うそだ・・・」
「いいえ、現実です」
勝者、剣士アーサーは手にした『最強の聖剣』コールヴランドを彼女に突きつける。
「強い剣を持っているものが勝つのではない。重い責任を背負っているものが勝つのではない。正しく貴い願いを持つものが勝つのではない。勝利すべきものが勝つのではない。勝利を約束されたものが勝つのではない。勝つのは常に・・・」
強者とはなんだ。生き残ったものか、願いをかなえたものか、己が意を通すことができるものか、格好いいものか。ただ力があるものか。軍勢を率いるものか。そんなことは誰にも分からない。
だが、アーサーは信じている。アーサー王が騎士道と王道を信じているように、信仰している。勝利するものが強者であり、強者こそが勝者であると。そうでなければならないと、信仰している。
「真に強い者です」
サーヴァントの霊核は、心臓と脳にある。腰から両断された彼女は完全に致命傷であり、切断面から夥しい量の魔力と血を噴出していたが、しかし即死は免れていた。免れてしまっていた。
即死していれば、ただ丘に戻されていただろう彼女は、受け入れがたい現実を認識してしまっていた。いかなる呪いよりも辛い現実という猛毒が、彼女を蝕んでいた。
滅龍奥義を最後まで出し切らせてくれた強者への、最大級の賛美と感謝と慈悲として、彼は彼女の心臓を聖剣で貫いた。
「ああ・・・」
それでも、彼女は目の前の光に目を奪われていた。聖剣エクスカリバーが消滅していく美しい光景に、目を奪われていた。その残り香である光の粒さえもついには消えていく。
もう、なにも見えない。彼女の視界は完全に闇にとらわれていた。

「うそ、だったのか・・・」

嘗て、自分が引き抜いた『王の剣』は王でないものが自分以上に使いこなし、『最強の聖剣』を真っ二つにした。

それは、もはや彼女を王としていた全てを否定し、打ち砕き、破り捨て、絶望のどん底に突き落とした。

「ごめんなさい・・・」

誰に謝っているのかもわからない。自分が干上がらせた村になのか、自分が王でないと否定したモードレッドになのか、結婚の真似事をさせたギネヴィアになのか、彼女を愛したランスロットになのか。

あるいは、その全てになのか、それ以外をも含めてなのか。余りにも明らかな敗北にふさわしい、嗚咽と絶望の中で『敗者』は消えていく。

対照的に、額から血を流すだけの傷しかない『勝者』は満ち足りていた。己の『強さ』が証明された達成感に打ち震えていたのだ。

ヴァーリへの義理もある。初段じゃ格好がつかないのもある。だが・・・。『強くなる』のって、楽しいだろう?

「ふふふ、全くですね」

そう、だから自分は求道者なのだ。そんな簡単な理屈に人生を委ねられるからこそ、自分は強くなることに全てを奉げられるのだ。

勝つ、強くなる。それが自分の全てであり、『彼』はある意味では理解者であり、少しだけ違うけれども同じ道を歩くものだ。

そして、最強に近づきつつある自分の、未だに遠い目標の一人だ。

ああ、なんという幸福だろう。これだから武術はやめられない。

「ねえ、ヴァーリ。彼に追いつき、追い抜いて、抜き返されて、幸せですよね」

5年前の神話間戦争において、敵勢力の中でも間違いなく最強だったインド神話勢。それを戦線に参加させないため、自分たちは少数で殴り込みをかけた。

神喰狼フェンリル。その護衛として自分と美猴、スコルとハティ。フェンリルを打ち倒しうるシヴァ神を止めるためにヘラクレス。

この、たったの3人と3頭で、自分たちはインド神話そのものに挑んだ。そして、なんとか時間を稼ぎきり、冥界を守り勝利したのだ。

とはいえ、最終的には大暴れしていたフェンリルも封印。護衛していた自分たちも捕縛。最後までシヴァと相対していたヘラクレスも最後には地面に倒れてシヴァの足にしがみつくばかりだった。

「俺が、お前を止めないと、安心してあいつ等が戦場に立てないんだ！」

と、まさにのび太状態になっていた。

最終決戦に臨んだ4人が黒幕を倒し次代を担うものになっていたて、ヴァーリが『よし、勝負だ！』と言い出して結局一誠を半殺しにしていたころの話である。

捕虜交換のときにそれを知らされたヘラクレスは『激おこぷんぷん丸』を通り越してして『げきオコスティックファイナリアリティぷんぷんドリーム』に突入してヴァーリに殴りかかっていたが、美猴と自分はヴァーリを羨んだものだ。

世界最強のライバルがいて、追い抜きあうなんて、羨ましいにもほどがある。

心のどこかで、敵わないとあきらめていた。だが、あの『屠竜破骨』がそれを吹き飛ばした。あれには、執念が宿っていた。ヴァーリを殺さずに倒す、その5年越しの執念が宿っていた。

あきらめるなんてもったいない。何処までも追いかけて楽しもうじゃないか。

「だから、死んで逃げるなんて許しませんよ。閣下」

ＢＡＤＥＮＤへの序章

ジャンヌが語ったことは、アサシンは死んでおらず、幽体離脱の状態らしい。ということ。アサシンの宝具である８人も同様で、意識不明だそうだ。

なんというか、余りにもどうかと思う展開である。だが、アサシンにしてみれば、いい話ではないだろうか。向こうにも家族はいるらしいし。

そう思って、顔を覗き込むと意外にも沈痛な面持ちをしていた。何かをこらえているような、そんな顔だ。

「・・・やっぱり、復活することに抵抗があるの？」

やや呆れながら、ジャンヌはアサシンにたずねる。どうやら、彼女にしてみればアサシンの反応は想定内のようだ。

思えば、彼は聖杯に望みをかけることそのものを否定していた。そして、やり直しも否定していた。時間の無駄だと。死者蘇生も否定的だった。できれば、復活したくなかったと。

彼は、公正で公平な人間だ。少なくとも、そうあろうとしている。もちろん、キャスターとセイバーに対して明らかに対応違うので、彼の中では感情的な部分での差はあるのかもしれないが。

死んでいたと思った自分が、生き返る。そのことに、忌避感を憶えているのだろう。たとえ、死んでいなかったとしても。

彼が、軍人として非常に気にしていた、この町で起きた聖杯戦争での犠牲者。善良であり無辜の民である彼らは死んだままであり、軍務とはいえ殺人を犯してきた自分が生き返る。そんな理不尽を、彼は許せないのだろう。

「それとも、この世界で第二、じゃなかった第三の人生でも歩むつもりだったの？肉体を得ているし」

「そんな、ばかな。これはあくまでも必要だからやっただけのこと。用が済み次第、座に戻るつもりだった」

・・・。今なんていったのコイツ。

「キャスターを仕留めたら、この町を出て聖杯戦争から離脱するつも

りだった。そして、部下をねぎらって、マスターの安全を確保したら、また次の戦争に行くつもりだったさ」

バカじゃないの。なにを勝手にそんなことを決めてるの。

人の人生まで、勝手に決めるなんて、軍人らしくないんじゃないの。

「・・・貴女は、強い方だ。だが、その強さは、その才能は生きていくうえでは不必要なものだ。そして、それ以上におれ達の存在は邪魔なんです。それこそ、議論の余地が生じないほどに。確かに勝手かもしれないが、貴女には人としての幸せを掴んで欲しかった」

人としての幸せ。それは、特別な役職についている人間には縁がないものだ。少なくとも、今アサシンを見ている限り、彼はそれを貴く思っている以上に自分が求めてはいけないものだと思っている。

だからこそ、まだ戻れるであろう自分には、それを手に入れて欲しいのだろう。だけど、勝手が過ぎる。私のことを王と認めたのではなかったのか。

「・・・おれは、今まで厚顔無恥なことを言ってきた。それこそ、何でもできるのにしてこなかった」

ぽたぽたと涙を流しながら、アサシンは語り始めた。傍から見れば栄光に包まれた、最強の怪物の勝利の軌跡を。その後に残った必然の悲劇を。

多くの人が財産や家族を失い呆然とする中、アサシンは彼らを励まし続けた。各地での合同葬儀や、イベント。遺族への挨拶も行ってきた。司令官という社会的に認められている立場の彼が、一般の方を慰めることは、とても効果があったらしい。

なんでもそうだが、説得も慰安も、何を言うよりも誰が言うかの方が重要だ。アサシンは、この通り愚直で真面目な男で、分かりやすいぐらい情に厚い。そんな彼だからこそ、遺族の心は癒され、再起をする決心がついたという。

「・・・なにもかも、なかったことにできるというのにな」

これも、よくある話だが、殺人事件の加害者に対して遺族が求めることは金でも、実刑判決でもない。死んだ人を生き返らせることだ。

もちろん、不可能である。それに、例えばこれが窃盗だったとして、

盗んだものを返せば罪はなくなるのか、と言えば否であろう。だが、死んだ人が生き返るのであれば、これに勝るものはないに違いない。

アサシンは以前言っていた。自分は一時期全知全能であったと。彼らを慰めることは、ある種の偽善だ。彼は、何もかもをなかったことにできるのだから。

「ディオドラが指を振れば、壊れた建物は一瞬で元通りだ。わざわざ瓦礫を撤去して、新しい家を立てる必要は無い。曹操が槍を振るえば、死んだ人も何人でも生き返る。わざわざ、失った痛みを癒す必要は無い。だが、できなかった。おれは、そうしろと言えなかったんだ。

理屈で言えば、戦争で死んだ人を生き返らせれば、他の原因で死んだ人も生き返らせなきゃならなくなる。そしたら、遥か以前に死んだ人もそうなる。きりがない。そうやって言い訳をして、おれは誰も救わなかったんだ。そのおれが、自分だけは生き返る？冗談だろう・・・」

公正と公平。それをよしとする彼にとって、自分だけは生き返る、などあってはならないのだろう。筋は通っている。しかし、こうしてないているアサシンを見ていると、どうしてもそれは背負い込みすぎだ、と言いたくなる。

彼にも、家族がいる。帰るべき家がある。そして、少しだけ図々しくなることができれば、彼は家に帰れる。家族に会える。だが、彼はどうしようもなくそれができない。

多くの家族の涙と再起を見てきた彼には、それを選ぶことができない。

「おれは・・・帰っていいのかも分からないんだ」

「・・・バルス！」

ジャンヌは、俯くアサシンに近寄り、顔を上げさせた。そして、顔に手を伸ばし・・・人差し指と中指をアサシンの目に突っ込んだ。急所への攻撃の一つ、目潰しである。

「ぎゃあああああ！目が、目がぁあああああ！」

「フン！」

さらに、追撃の金的だ。急所攻撃のオンパレードだ。いいぞ、もっとやれ。

「ああっ奏者！奏者の剣が！余のものなのに！」
「お・・ま・・えの・・・じゃね・・・えよ」
ネロの言葉に突っ込みを入れつつ、涙と呼吸障害に苦しみながら悶絶するアサシン。受肉しているというのもあるだろうが、本当に辛そうだ。
女の自分には理解できない痛みである。
「あのねぇ・・あんたは死んでないの！幽体離脱しているだけなの！だから、さっさと戻ってきなさい。
あんたの大好きな陛下もそれを望んでるわよ・・・。ていうか・・・」
ジャンヌは、怒りに震えながら怒鳴りつけた。
「なんで、私らを呼ばないのよ！」
「・・・お前、曹操の部下だろ」
「だったら曹操も呼びなさいよ」
「え～～～～～？」
アサシンは、ものすごく嫌そうな顔をした。曹操と言えば、中国の実在した武将だ。その子孫か生まれ変わりが部下のいるようだ。
しかし、アサシンの反応を見るに、どうやら扱いにくい部下のようである。ジャンヌは扱いやすそうだが、その上の人がそれでも補えないほど駄目なようだ。
「死んだ後もあいつの面倒を見るのかよ・・・」
「まあ、それは分かるにしても、どうしてその８人だけなの。他の調和派はどうして呼ばないの」
「あいつ等は・・そうだな、きっと負い目があるんだろうな。巻き込んでしまった負い目が・・・」
「その理屈だと、そこの８人は違うの？」
「こいつ等？なんで？」
アサシンは心底不思議そうに聞き返していた。８人も、どうしてそんな質問をされたのか不思議がってすらいる。ついてきて当然だろう？と言わんばかりだ。まあ、それぐらいの信頼関係がないと宝具として成立しないだろうが。
それを思うと、数万人を相手にそれだけの信頼関係を築き上げたイ

スカンダルは、まさに大王の器なのだろう。同様の宝具を持つアサシンの話を聞くに、厚顔無恥というのもあるのだろうが。いや、ようするに性格の問題なのだろう。

戦争を好んでいるイスカンダルと、戦争を嫌っているアサシンでは、仲間への感情が根本的に違うのだ。また一緒に戦争しようぜ！と巻き込みたくない（８人を除く）ぐらい差がある。

しかし、その理屈で言うとアーサー王は一体・・・。

「おい、ハクノ。おまえなんか失礼なこと考えなかったか？」

じろりと、モードレットが私を睨んだ。いいえ、気のせいです。アーサー王は器がちっちゃいんだなー、とか全然思っていません。

「・・・こいつ等、呼ばなくてもついてくるだろ？」

「ああ、もういいわ。良く分かった」

頭を痛そうにして、ジャンヌはアサシンを黙らせる。アサシン自身、未だに苦しいので黙ることにした。

ふと頭上を見る。そこではいくつもの光が瞬いては消えていた。おそらく、あそこでも戦闘が起きているにちがいない。おそらく、アサシンを救出するための援軍だ。

・・・なんというか、アサシンはつくづく仲間に恵まれた英雄だと思う。生前から付き従う８人の部下、死後に得た４人の部下、そして、今ついに生前の時代から救援が来た。もう、聖杯戦争とは一体・・・状態である。

７組１４人しか参加しないはずの聖杯戦争の前提を覆し続けている。本人は真面目なだけに、もう手がつけられない。

「・・・やっぱり揉めてたのか」

突如として、背後に気配が現れた。そこには、地面に影を沸き立たせている男が立っている。そして、その脇にもう一人、槍を持っている男が立っていた。年若く、少年のように笑顔だった。

「司令官無事だったんですね、よかった。あ、教官のみなさん！お久しぶりです！」

と、８人に歩み寄る。その言葉に、反英雄４人は顔をゆがめた。

え？こいつら教官なの？人に者を教える立場の人間だったの？そ

れなのにこんなに素行悪いの？
「奏者よ、余の耳が異常をきたしていないのであれば、こやつはこの阿呆どもを教官と呼んだのか？」
「ああ、こいつ等８人の所属している第二部隊は教導隊も兼ねていたからな」
「ねえ、何を教えてたの？・・・拷問の仕方とか？」
興味深そうに、というか疑っているようにエリザベートが尋ねる。
うん、私も気になる。少なくとも、礼儀は教えられそうにない。それに関しては教わる必要があるぐらいだ。
「連携攻撃とそれへの対策だ」
「ああ・・・なるほど、残虐ファイトを教えてたんですか。納得です」
玉藻は呆れながらも納得した。確かに私も納得せざるを得ない。彼らの連携は確かにそれ自体が宝具のようだった。
同時に、技術でもあるので教えることには意味があるだろう。まあ、あんな変態機動を全部真似できるとも思えないが。
なんていうか、ニュータイプだもんな。空中で視線も交わさずに武器を投擲して交換とか平気でするもん。
「自慢じゃないが、個人技能としても連携技能としてもコイツらはトップクラスだぞ。指揮は壊滅的だけど」
ああなるほど、ひたすら単純に『優れた兵士』なんだ。それ以上でもそれ以下でもないんだ、こいつ等。
聖剣を持っているわけでもないし、魔剣を持っているわけでもない。そういう勇者ではありえない。
権謀術策に通じているわけでもないし、士気向上ができるわけでもない。そういう指揮官としての機能も持ち合わせがない。
魔法の域にまで武芸を極めたわけでもないし、一つの流派を生み出したわけでもない。そういう武術家でもない。
こいつ等は、誰にでもできうることを誰にもまねできないレベルまで極めている『兵士レベル９９』なんだ。それが８人いるだけなんだ。
逆に言うと、だから単純に使いやすい。戦争に必要な機能を備えているから、手段も色々と選べる。便利という意味では、騎士や武将よ

りも兵士というわけか。
なんというか、アサシンは本当に戦闘面では合理主義だよね。
「といいますか、そうでないと死にますからね」
未だに苦悶しているが、アサシンは平常運転だった。
と、更に他の面々も現れる。イスカンダルが小さく見えるほどの鉛色の巨人、白銀の鎧に身を包んだ金髪の騎士。どちらも、戦闘のあとなのかやや服装が乱れているが目立った怪我はないようだ。
・・・どうやら、昨夜１３人で死力を尽くして追い返したセイバーやランサー、ライダーを仕留めてきたようだ。それも、わりとあっさり。ジャンヌはジャンヌで仲間がいたとはいえジル・ド・レェを一蹴したし・・・。
やっぱり、昨夜のアサシンの言葉は正しかった。上には上がいる。たぶん、何かの間違いでアサシンとその部下がライダーと共闘していても、結果は対して変わらなかっただろう。最強、無敵という言葉は、酷くむなしい。
「ヘラクレスにアーサー、遅かったじゃない」
「ああ、思ったより手間取った。というか、相手は軍勢を召喚してきたんで面倒だった。あれ、お前がやればよかったんじゃないか?こっちは怪獣だったんだろう?そっちのほうが良かったよ・・・」
と、ヘラクレスと呼ばれた男は答える。・・・なるほど、どっからどう見てもヘラクレスだ。それ以外の何者でもない。そして、ヘラクレスといえば怪獣退治で有名な英雄だ。数で押してくるライダーの宝具とは相性が悪かったらしい。
しかし、アサシンが言っていた通りヘラクレスは無敵だったらしく、全然無傷だった。手間がかかる程度のことらしい。アサシンは死ぬ気で時間を稼いでいたというのに、ぐぬぬぬ・・・。
「なんと、ヘラクレスとな!」
「ヘラクレスですって!」
「うわっー!あのヤリ○ンの息子とか引くわー」
「アーサーだと!」
ヘラクレスという言葉に、３人の反英雄は飛びついた。有名な英雄

だけに、彼女たちにとっても英雄なのだろう。
　モードレッドだけはアーサーにこだわったが。というか、アーサー王は女性だったので、こっちのほうが本物のように思える。実際、どうなのだろうか。
「紹介いたしますが、アーサーはアーサー王の子孫で、ヘラクレスはヘラクレスの生まれ変わりです。そういう意味では両方とも本人ではありませんね」
「いやいや！これだけの益荒男、ヘラクレス以外ではありえぬ！」
「うわー、本当に筋肉ムキムキマッチョだわ～。これ、本当に素肌なの？」
「怪獣退治に使命をかける、私の天敵ですねぇ」
「あ、あの、そのなんだ。あんまり体に触らないで欲しいんだが・・・」
　３人は、みんなしてぺたぺたとヘラクレスの体に群がり触りまくっていた。体格差もあるので、まるで大人と子供だ。
　興味津々の３人に、ヘラクレスはたじたじ。振り払うこともせずただ狼狽していた。
　しかし、モードレッドだけはアーサーと呼ばれた騎士に剣を向けていた。
「・・・貴様、父上を斬ったな」
「ええ、すばらしい使い手でしたよ」
　満面の笑みを浮かべて返事をするアーサー。それに、モードレッドは赤雷を纏って切りかかる。
　それを、アーサーは苦もなく聖剣で受け止める。そのまま攻防が続いたが、しかし誰も止めようとしない。素人目にも技量、身体ともにアーサーが上だった。
　決死の顔のモードレッドを、涼しげにかわしていくアーサー。その表情だけでも、優劣は明らかである。
「なるほど、勢いもあり、才覚もある。鍛錬もきっちりと感じる・・・。一級ですね」
「くそっ、くそっ！」
「ですが、軽い。貴女の剣はアーサー王のそれと違って軽すぎる。そ

れでは、私はおろか彼女にも及びませんよ」
「黙れ！」
モードレッドを一級と賛辞しつつ、アーサーは彼女の剣戟をあしらい続ける。流石に、斬るつもりはないらしく、防戦一方ではあったが。
業を煮やしたモードレッドは、手にした剣を投擲し、更に接近して殴りにかかった。だが、それも無意味だ。アーサーは投擲された剣をあっさりと掴み取り二刀流に切り替えると、そのままモードレッドの首に突きつけた。
とんでもない技量である。
「そこまでだ、アーサー。剣を返せ」
震えながらも、アサシンは立ち上がってモードレッドに突きつけられた剣を掴む。
その目には、断固たる覚悟がこもっている。その目に、アーサーは喜びの笑みを深めた。そのまま、自分の剣を収めて彼女に剣を返却する。
モードレッドは、剣を受け取ると再び切りかかりそうになるが、しかしそれをアサシンは無理やり抱きしめる。
「放せ！」
「・・・駄目だ」
嫌がって暴れるモードレッドを、それでも無理やり抱きしめるアサシン。そのまま、背中を撫で始めた。
まるで、暴れ馬を手なずけるように、アサシンはそのままモードレッドを放さない。
「今ここに、お前の敵はいない。アーサーも、お前にとって味方ではないかもしれないが敵でもない」
「だから、なんだ！」
「お前は、今、泣いていいんだ」
その言葉を聞くや否や、モードレッドはもがくのをやめた。そのまま手にしていた剣を消して、力なくだらりと手を下げる。
恐る恐る、そのままアサシンの背中に手を回して、しがみついた。
そして嗚咽が漏れ始める。

嘗て、自らの手で殺した己の父。その死は、彼女に複雑な感情をもたらしたのだろう。モードレッドは大声を上げて泣き始めた。
「・・・泣きたいときに泣くのは子供だが、泣けるときに泣かないのは兵士失格だ。今泣いておかないと、もう泣く機会はないぞ」
それを、優しく抱きしめるアサシン。やっぱり、コイツは３０前のおっさんなんだと納得してしまう。
そして、アサシンはアーサーを睨んだ。
「迎えには礼を言うが、あまりコイツをからかうな。この子も、おれの部下だ。無礼は許さん」
「・・・ああ」
アーサーは、心の底が冷えるほど冷たい微笑を見せた。
その眼は、明らかにジル・ド・レェのそれに似ている。美男子だというのに、いやだからこそアーサーの微笑みは恐ろしかった。
「貴方は、力のすべてを失ってなお、貴方なのですね。そんな当たり前のことがたまらなく嬉しい。
仲間を率いて主に仕え、その目的の為に奔走している。ああ、私やヴァーリの好きな貴方のままだ」
明らかに、仲間に向けるべき好感ではない。まるで、倒すべき敵を見つけた、狩人のような目だ。
もう、それだけで分かる。こいつ、８人のチンピラよりも明らかに危険人物だ。
アサシンを主であると認めながら、しかし殺意を抑えず隠す気もまたない。
「少し目を放した隙に、また強くなった。正直に言って、もう少し迎えに来るのが遅くなったら嘗て以上の力を得ていたのかもしれませんね。そんな貴方にも興味がある。
ああ、貴方は今度はどんな部下を率いてどんな組織を作るんでしょうね？」
「いい加減にしろ」
ごん、とヘラクレスが危険人物をぶん殴った。モードレッドでは手も足も出なかったアーサーを、ヘラクレスはその拳骨で黙らせてしま

う。圧倒的な実力はヘラクレスの名前に恥じないものだ。
「痛いじゃないですか・・・」
「お前の発言のほうが痛い。全く、何をしにきたんだ」
もう片方の手でネロを持ち上げてあげながら、アーサーの頭をぐりぐりと握っている。手が大きいので、まるで野球のボールのようにすっぽりと収まっていた。
「・・ああ、そのなんだ、司令官。この町にいた魔術師は一人を除いて全員とっ捕まえたぞ。あと、もう一人は話が通じなかったんで殺害したが。
残っているのはあんた等を除いて一組だけ。曹操と交戦中だ」
足元で影を沸き立たせている男は、さらりとすごいことを言った。どうやら、聖杯戦争はほとんど終了したらしい。
聖杯戦争。この世界において最大級の神秘である英霊を、サーヴァントという限定された形で召喚使役し争う魔術師としての最高峰の戦いなのだが、それ以上の戦力を大量に投入されるともう話しにならなかった。
やっぱり戦争は質と数なのである。それを兼ね備えているアサシンの、盤外からの戦略に誰も抵抗すらできなかったようだ。
「・・・後は、曹操だけか」
空を見上げるその場の面々。空には、いくつもの光が瞬いては消えていた。おそらく、あそこには最後のマスターとサーヴァントがいる。私の、出会わなかったサーヴァントが。
バーサーカーと、アーチャー。どちらなのだろうか・・・。

「くうっ！」
曹操は、相手を計りかねていた。
言ってしまえば、自分は自軍で最強であり、負けることの許されない存在である。

そして、敵のサーヴァントはそれを相手に拮抗している。
空間跳躍を用いた奇襲も、悉く先読みされて防がれている。空中機動自体も高速且つ俊敏だ。明らかに慣性を無視している。
なによりも、武装が豊富すぎて正体がつかめない。
勝手のつかめない異世界の、物理法則の異なる世界の戦闘。果たして、自分は何処から何処までならば力を出していいのやら。
歯がゆさに、心はどんどん焦っていく。
「ふん、いい加減飽きてきたな」
それは、ギルガメッシュも同様だった。空中での高速機動や遠距離戦、空間跳躍もなかなか楽しめたが、これだけ続くと飽き飽きだ。船を止めて、乖離剣を抜き放つ。空間をも破壊する乖離剣ならば、跳躍しようとも逃れられるものではない。
「興じさせた礼だ。貴様には過ぎた一撃だがな」
それが、彼にとっての最強の一撃であろうことは、曹操にも即座に分かった。そして、空間が軋みを上げていることから、空間そのものへの攻撃であるとも理解する。これでは、５１位の構築した結界も破壊されかねない。もはや、手加減などしている場合ではない。
彼の心の中にあるのは、一誠の身を案じる仲間達の声だった。人間しか来ることの許されない、遠い異世界の戦場。そこに来れなかった調和派や白銀派、国賊派の面々から託されたものを思い出す。
絶対に負けるわけにはいかない。
「使うしかないのか、『四文字斬り』を・・・」
曹操は、手の内が読めない相手に対して、自分の最強の攻撃を出すことを決意する。
ギルガメッシュと曹操。共に、己の必勝を期して最強の一撃をぶつけ合おうとしていた。

絶対に笑ってはいけない聖杯戦争
最古対次代！絶望を吹き飛ばせ！

「また、貴方に会いたい！」
『こころが迷ったなら・・・・・・曹操・・・振るうのはやめなさい』
「迷ったなら「振るうな」・・・・・・・・・だがもう「迷い」はない！」
『「新しい道」への扉が開かれるだろう・・・』
曹操の祈るような言葉に、何者かが答える。そして、２千年の時を経て尚朽ちることのない信仰を集める『聖人の遺体』が曹操と同化していく。
そして、白い羽根が、空からひらひらと舞い降りた。
小さな鳥が羽ばたく音が聞こえた。段々近づいてくる。
妙な存在感のある白い鳩が一羽、曹操の肩に止まった。
我が名を称えよ　我が　栄光に満ちた　並ぶ者無き　我が名を称えよ・・・
Ｙ・Ｈ・Ｖ・Ｈ
「これが、『次代を担うもの』だ！」
曹操が高らかに咆哮する。瞬間、冬木を覆っていた影の結界が砕かれ、夜の空があらわになる。そして、更にそれを日輪の如き後光が塗りつぶしていく。
日が沈んでまだ時間はたっていないというのに、再び世界は真昼の如き光明に包まれた。
それは、固有結界などという細々としたものではない。この現実世界そのものを塗りつぶす、神の業であった。
神の出現により、夜は昼に、月は日輪へとその姿を変える。物理法則はゆがみ原形をとどめず、科学技術の発展と共に失われつつあった神秘は神代の濃度を取り戻した。
その光景に、魔術師である時臣は感動すると共に身を振るわせた。無理もない。ただ神秘に介入するだけの人間が、神を相手に身動き一

つすら許されない。
だが、ギルガメッシュは違う。神を嫌うこの男は、神を前にしても一歩も引くことはない。
「時臣、なにをうろたえているか！」
叱咤し、激高する。彼にしてみれば、この時代で神が闊歩するなど許しがたいことだ。おとなしく、神代に引きこもっていればいいものを。
とはいえ、目の前に出現した『神』には、警戒せざるを得ない。なにせ、この身は所詮サーヴァント。生前の力など出し切れるものではない。
時臣は一級の魔術師であるが、さて、どうやって倒したものか。
「我が名を称えよ！我が、栄光に満ちた、並ぶ者無き、我が名を称えよ！」
乖離剣を片手に思案する英雄王を尻目に、曹操は更に声高に叫ぶ。宣言する。
同時に彼の足元に白い雲が生まれ、そのまま雲海となった。
本来、この三人がいる場所は雲が発生するような高度ではないため、それ自体が天候に対する大掛かりな魔術行使であった。
人間の魔術師では、一体どれだけの予算と才能ある人材を注ぎ込めば実現できるのか怪しい神秘である。
だが、それはあくまでも土台作りに他ならない。雲海からは、泉が沸き立つように目を奪われるような美貌の天使たちが生まれていく。
一人や二人ではない。視界の届く限りにつづく雲海の、そのそこかしこで花が咲くように、無数の天使が生まれていく。
それは、嘗て彼が神話間戦争で行った大規模な天使創造の再現だった。
自らはオーフィスと融合した黒幕との対峙で動けず、その為劣勢だった冥界や天界への援軍として『最上級悪魔』クラスの天使を大量に生み出し送り込んだのである。
だが、今回彼はそれを軍勢として使役するために生み出したのではない。自分への援護として生み出したのだ。『次代を担うもの』は、自

らの権能で天使を生み出し、それによって自分を強化することができるのである。

「歌え、戦いの歌を！」

天上の美声が雲海に響き渡る。その音域は人間に出せるものではなく、そして今生まれたばかりの天使は紛れもなく純粋無垢であった。

彼らの歌声は、あらゆる意味で天使の歌声だった・・・。

「おお・・・」

幻想的、あるいは神秘的とも言える光景に、時臣は知らずに涙を流していた。人の描いた天国がまさにここにあり、そしてその想像力の儚さに絶句する。

本物の天国はかくも美しく救いに満ちているのであれば、宗教画の一切はそれを全く表現できていないのだ。

それは、地上でも同様だった。夜が昼で塗りつぶされ、何事かとおもって空を見上げれば、雲海から漏れ出る日光は何処までも美しく町を照らし、天上からはあまりにも美しい歌声が響き渡ってくる。

信心ある者も無い者も、己の目から溢れる涙をぬぐうこともできなかった。

この世界で、決して起きることのありえなかった奇跡が、この冬木の地に現れたのである。

美しい空気を肺いっぱいに吸い込み、その光景に目を奪われ、歌声に魅了されていた。

たとえ、その歌が戦いの歌だったとしても・・・。

「四大魔王より賜った、封印解除のキーを！」

次代を担うものにとって最強の一撃である滅神奥義、その中でも曹操の誇る四文字斬りはその特性ゆえに幾重にも封印が施されている。

故に、その一つとして使用する作戦の前に、あらかじめ四大魔王が使用許可を出していなければ封印の解除を始めることすらできなかった。

そして、それは『兵藤一誠の意識不明』という最悪の事態を解決するため、許可済みである。それほどまでに、事態は深刻なのであった。

「魔王サーゼクス・ルシファーと！」
曹操は、己の手にしていた４枚の羊皮紙の契約書を高々と掲げる。
そのうちの一枚が輝き、槍に吸い込まれていく。
「セラフォルー・レヴィアタンと！」
また一枚、
「アジュカ・ベルゼブブと！」
また一枚、
「ファルビウム・アスモデウスの名において！」
最後の一枚もまた吸い込まれて消えていく。
槍は振動し、そして槍の柄に複雑な模様が刻まれていく。否、それは槍の内に封じられたものがその姿を示すために外郭が解体されているだけの話だった。
「『黄昏の聖槍』に施された封印を、解き放つ！」
曹操が手にした槍は、幾百ものパーツに分解されその中からあふれ出る光の柱そのものが露出した。
柱は、もはや天上のかなたにまでその姿を伸ばし、威容をさらけ出していた。当然のように、それは大気圏を突破しこの惑星から突き出ていた。
その刀身は、この星から未だに脱出できぬ人類では観測することすら不可能に近い速度で膨張を続け、この宇宙を侵食していった。
宇宙の物理法則をも書き換える。それこそが神の権能であるといわんばかりに。
「天使長ミカエルよ！総督アザゼルよ！」
その上で、尚曹操は封印の解除を続ける。それは、即ちこの神器の中にあって頂点に君臨する『黄昏の聖槍』の、その真価を発揮するための儀式。その為の許可を求めるものだった。
それは、三界にとどまらない、あまねく世界を巻き込んだ大儀式である。
「第三主力部隊隊長曹操が、フォーメーションＧの発令を申請する！」
光の柱の根元で、曹操はその輝きに臆することなく更なる力を求めて叫んだ。

そう、槍の封印は解かれたものの、四文字斬りはまだ発動すらしていないのだから。

遠い世界を隔てて、ここは天界。

一誠が守り抜いた世界で、天使長ミカエルは居城から天界の復興作業を眺めていた。

そこには、遥かな神話の時代から自分同様に『聖書の神』に仕えていた天使と、それと共に汗を流す人間からの転生者『御使い』、そして、新世代の天使が協力していた。

この光景を、ミカエルは一体どれだけ待ち望んだのだろうか。

聖書の神の死から、生まれることのなかった新世代の天使。彼らは自分とも違うながらもその善良さ故に、決して元の天使を迫害することなく、献身している。

彼らをめぐって、多くの論争は起きているが、しかしそれのなんと幸せなことか。悪魔と違って新世代の生まれることのありえなかった天界にとって、その議論は決して悪ではありえないのだ。

痛ましい戦災も、こうして復興しつつある。滅びていれば、決してなしえなかったことだ。あの戦いは、決して無駄ではなかったのである。

しかし、その戦争で活躍した英雄が、今日の平和の立役者である一誠が意識不明になったことで、それも砂上の楼閣となってしまった。

彼の軍勢は、決して善良な者達の集まりではない。むしろ、世界に悪をなすものたちで構成されている。

だが、それでも彼らに共通する一誠への敬意故に、この世界には決して悪影響を与えずにいた。だが、こうして一誠がいなくなれば、彼らは要のなくなった扇の様にバラバラになり、世界中でその狂気をさらすだろう。

そうなってしまえば、彼らの主である3勢力は世界中から非難を集

め、戦争からの痛手のいえぬまま神話間戦争が再び勃発するであろう。そうなれば、今度こそ聖書の勢力は壊滅する。いままで、自分たちがしてきたことのように。

神の代理を預かるものとして、それだけは避けねばならない。ミカエルは、決意を固めていた。

「・・・向こうでは、どうなっているんだろうな」

同じ部屋にいた、堕天使総督アザゼルは椅子に座りながらつぶやいた。

ディオドラの神器によって遠く外宇宙に進軍した兵藤一誠救出部隊。彼らからの連絡は全くない。世界を隔てているだけに、空間使いである黒鉄でも連絡すらたやすくないことは知っているが、しかし・・・。

いずれにせよ、彼らにできることは待つことだけである。吉報にしても凶報にしても。そして、もしもの時には、一誠から託された封印解除の鍵を使うしかない。

そうでなければ、世界が救えないというのであれば。

「それほどの強敵が、いなければいいのですが」

「ああ、全くだ」

しかし、その期待を裏切って両名の首から下がっていたペンダントが光り、そして電子的な音を発した。

曹操からの、フォーメーションG発令の要請である。もはや、一刻の猶予もない。二人はそのペンダントを手に持って高々と掲げた。

「ミカエル！一誠から託されたキーを！」

「分かっています！」

その部屋に備え付けられていた、二つの台座を前に、二人は鍵を機動状態に移行させる。

「「人類の未来と、平和への誓いの元に！」」

ペンダントが、それこそ人の手には再現できない3次元には納まらない複雑な変形を開始する。そして、最終的にはまさしく鍵の形になった。

それを、ミカエルとアザゼルは台座へ同時に差込み、捻った。

「「四文字斬り、発動承認！」」

鍵によって開錠された台座が、複雑に変形する。それは、意味のある形の模様、文字を形成した。

片方には『勝』。もう片方には『利』。すなわち『勝利』を描いたのだ。アザゼルが叫ぶ。

「これが勝利の鍵だ！」

光あれ！フォーメーションG発令！

上流階級の悪魔が利用する病院。その中でも特に待遇のよい個室のベッドで横になっているのは、最上級悪魔兵藤一誠の妻にして第一本部隊副隊長の兵藤ララだった。

別に、体調不良を訴えているわけではない。兵藤一誠の妻であるララは、このたび懐妊したのだ。今は単に検査で入院しているだけである。

むろん、この情報を知っている者は少ないが、しかしこの吉報はあまり関係者を驚かせなかった。

それ以上に、一誠が意識不明であることが関係者にとって重大ごとだったのである。

「レイヴェル、何がそんなに心配なの？」

しかし、妻であるララは非常にのんきだった。彼女は、自分の夫を深く愛しているが、しかしそれ以上に信じている。きっと何事もなかったように帰ってくると疑っていない。

だが、それは彼女がそういう性格だからだろう。第二婦人であるレイヴェルは、そこまで彼を信じきることができなかった。身重である彼女にすがりつき、泣きじゃくっていた。

「ですが・・・」

「大丈夫、我がいる」

「だーじょー、わりぇがいる」

1号、2号も彼女を慰めていた。まあこの二人は状況を深く理解していない。なにせ、傍目には一誠は寝ているだけなのだから。

「・・・あれ？」

不意に、ララの体が光った。これは、彼女自身が光っているのではない。その中にある魔獣創造が輝いているのだ。

無論、フォーメーションGの関係である。曹操が祝福した神器が、呼応しているのだ。

「ふふふ、そっか。じゃあみんな、手をつないで。私を通して曹操君に思いを伝えるから」

そう言って、ララは右手を差し出した。その手を、涙ぐみながらとるのはレイヴェルであり、のんきに握るのは1号と2号である。
「どうか、あの方が目を覚ましますように」
「また、一緒に稽古する」
「いっしょに、おかしつくる」
3人は、ララの手をとって祈りをささげる。それが、ララの体内の魔獣創造に伝わり、その先の黄昏の聖槍に通じていた。
それを確信しつつ、ララは左手で自分のおなかを撫でた。それは、慈しみ深い母親のそれだった。
「貴方も、いっしょにお祈りしようね・・・」
まだ、名前もないわが子に語りかけながら、ララは瞑目した。

「・・・俺もいきたかったぜぃ」
第二部隊の会議室でそう言ったのは美猴だった。無理もないだろう、一誠の精神が何処にあるのかを発見し、救出部隊を編成することになったと思ったら、行けるのは人間だけときた。
おかげで、出向いたのは白銀派の中ではアーサーだけである。かれは、それはもう嬉しそうに出かけたのだ。未知の世界、未知の冒険。それは、多くの世界を出歩きつくした彼等にとって魅力的な開拓地だ。
ましてや、そこに一誠がいるとあれば、その楽しみは無限大だ。きっと愉快なことになっているに違いない。
「俺もだ・・・」
と言ったのは、クロウ・クロワッハ。人間の姿をしているが、邪龍の中でも最強といわれる龍である。
Aクラスの中でも屈指の実力者である彼は、自分と同等のヘラクレスが戦場に行っていることが羨ましくて仕方がない。
M・A・R・Sの中では遊び相手に事欠かないが、戦争は別格だ。ずっと戦争をしたいぐらいである。

「ふん・・・」
白龍皇の光翼がざわめくのを感じたのは、ヴァーリだった。
どうやら、あの時と同じことがおきているようだ。最終決戦のとき、不完全なオーフィスとなったあのクズに止めを刺したあの一撃。
それが、再び振るわれようとしているのだ。どうやら、それほどまでに強力な敵がいるらしい。
「おっ、あれを使うのか。俺も力を貸すぜぃ」
「ふん」
「ああ、好きにしろ」
いささかふてくされながら、ヴァーリは二人の手を取った。すると、後ろからサマエルが手を伸ばしてくる。
「では、私も祈るといたしましょう」
その突然の登場に面食らうクロウ・クロワッハではあったが、それを隠して手を握る。
祈り、想い。それらは白龍皇の魂を通って黄昏の聖槍に向かって時空を超えて集結する。
「・・・帰ったら、憶えてろよ」
土産話を楽しみにしつつ、ヴァーリは苛立ちをあらわにしていた。

「・・・着たか！」
晄が思わず立ち上がった。ようやく、微力なれど艦長の為にこの有り余る力を使う機会が訪れたのだ。
しかも、以前とは違い自分にも神器が宿っている。これならば、直接自分の力を届かせることができる。
「艦長、無事でいてくれ！」
巨大な拳を握り締めて、自分の中で輝く魔獣創造に力を注ぎ込む。
それこそ、渾身の力を。
それに習うわけではないが、護も拳を握っていた。決して大きくないが、しかし多くのものを守り抜いてきたこの拳を。
この拳で、少なからず彼の期待にこたえてきたのだから。

「艦長、どんな姿でもかまいません。どうか、帰還してください」
しかし、その拳も今はむなしい。ただ、思いを届けることしかできない自分が悲しい。
晄同様、もてる限りの力を魔獣創造に注ぎ込んでいた。
「艦長、どうか、どうか帰ってきてください・・・！」
れいかは、自分の体が輝いていることにすら気づかない。一誠の精神が別の世界に転移したこと、その世界に自分がいけないことを知ってからずっと祈り続けていた。
故に、その祈りは一切のタイムラグなく黄昏の聖槍に通じた。
平素ではほぼ意味のないその祈りには、今明確な力となってかの地に送られている。そう、一誠を救う為の戦場に。
それらを、ある種の冷ややかな目で見ているのは空音だけだ。
なるほど、自分たちは彼のために祈るべきなのだろう。だが、祈りすぎてこの機に乗ぜよと何かがあれば、それこそ問題なのではないだろうか。
そういう意図もあって、自分は余り力を込めることなく祈る。
残った自分たちには、残った自分たちにしかできないことがあるのだから。
「やだやだ・・・」
ふと会議室の外を見れば、自分たちの部下たちも、神器持ちたちは祈りをささげている。それはいいのだが、神器を持たない連中まで彼らに力を注いでいる。どうせ、次代を担うものに比べれば雀の涙のようなものだ。
祈りすぎても、徒労に過ぎないのだが。
「あいつら、有事に備えるって言葉知らないのかね～」
とはいいつつも、悪い気はしない。皆が、彼を求めているのだから。

「ふん・・・」
ディオドラは、自分の中の絶霧が沸き立つのを感じる。いつかの戦

場で味わった、全ての神器がリンクするあの現象だ。もっとも、あの時と違って今はリンクを制限している。

完全に発動しても、以前に曹操が祝福した相手にしか適用されない。だが、それでも十分すぎる力が発動する。

なにせ、次代を担うものが『全員』そろっているのだから。一誠自身が抜けていることを差し引いても、嘗ての発動とは比べ物にならない威力になる計算である。

ふと、自分の部下を見ると皆が祈りをささげている。

面白くない。なんというか、助けるのならばもっとスマートにいきたかった。

これでは、自分は彼からあんまり感謝されないと想う。

自分は、あのバカ二人よりもよっぽど有能で優秀だというのに、これではあの世界に軍勢を送り込んだだけだ。

そして今、祈りをささげるその他大勢の一人に過ぎない。それが、たまらなく不愉快で、無力さを感じていた。

「・・・帰ってきてくれよ、怪物君」

不在の間、いかに自分が仕事をしたのか、相手が呆れるまで言い続けて困らせてやろう。

そう想いながら、ディオドラも祈りをささげる。友の、無事の帰還を願って。

「発動しましたね」

「ああ」

ミカエルとアザゼルは、自分たちの手で発動させた、曹操の滅神奥義四文字斬りの封印を司っていた台座を眺めていた。

それは、それ自体もまた神器であり、当然ながら黄昏の聖槍とリンクしている。

いいや、曹操が自分の槍を封じるために作成した神器だ。他の神器よりもより深く槍と関わっているに違いない。

であれば、神器を持たない自分たちでもこれを通して祈りをささ

げ、彼の地にいる曹操に力を伝えることができるはずだ。
　無論、次代を担うものに比べれば、その力は微力であろう。だが、微力であったとしても何かをしたい。彼が戻ってくる可能性を少しでも上げたかった。
「我々も祈りをささげましょう。この世界の全ての家族の為に」
「ああ、そうだな」
　堕天使の総督と天使長は、等しく願いを台座に奉げる。即ち、世界が平和でありますようにと。

　事前に四文字斬りの使用許可をしていた四大魔王も、この事態を察していた。
　このときの為に、わざわざ四大魔王には祈りをささげるための神器が用意されているのである。
　もっとも、それは普通の神器と違い
「始まったか・・・」
「いや全く、聖書の神も人が悪い。これだけの代物を隠していたとはね」
　神話間戦争で明らかになった事実。それは、次代を担うものという最終進化形態と、真なる神器という秘密兵器。そして、全ての神器は等しくリンクして黄昏の聖槍とつながっているということだ。
　この時代に、やたらと禁手の亜種が生まれたもの、それに由来するらしい。
「でもでも!こういうときは良かったんじゃないかな!っておもうよ!皆がつながっている感じがして、すっごく素敵だと思う!」
「でもさ、すんごくめんどくさいよね、これ」
「まあ、そういうことを言うもんじゃない。さあ、我々も力をささげよう。冥界の未来を彼らにだけ任せるわけには行かない。その重荷は、本来我々のものであるべきなのだから」
　多くのものを彼に託してしまった。その無力さは未だに胸にこびりついている。だが、それでもこういうときだけは、彼の力になりたい。

そういう意味では、なるほど、こういう奥義は悪くない。
力ならば、有り余っているのだから。

新エデン。そこは、嘗て神話間戦争で生み出された新たなる楽園であり、人の手の付かない未知の世界。
そこには、生まれて間のない獣が大地を駆け、植物が生い茂り、原初の地球さながらの美しい自然が広がっている。
ここを管理するのは、神話間戦争で生まれた新世代の天使たちの職務だ。最上級悪魔に比肩する彼らは、己の父から賜ったこの使命を、教えとして誇りを持って従事している。
主な仕事はここで生きる生命の数や生態を調べること。有用な薬草が見つかることもあるし、恐ろしい獣が見つかることもある。
その多くは未だに未発見であり、従事する彼らはその観察において日々忙殺していた。だが、そんな彼らにはもう一つ、決して怠れない職務がある。
この世界に唯一存在する人工物、神話間戦争の慰霊碑の世話をすることだ。
この慰霊碑には、神話間戦争において当時正規軍ではなかったM・A・R・Sの戦死者たちの名前が刻まれている。
彼らは、己の意思で冥界のために戦い、そして死んでいった。正真正銘の英雄であり、勇者である。彼らの名前は表では語られることはないが、しかしそれでも、残しておかなければならない大切な名前である。
今日も、多くの天使たちがその慰霊碑に水をかけ、汚れを落としている。この英霊たちが、死後も安らかにいられるように。
しかし、そんな折普段とは違うことがおきた。
１５００人ほどの名前の刻まれた慰霊碑。それが眩く輝き出したのである。

その意味を、滅神四雄を祖とする天使たちは察した。彼らは、今再び彼らの為に力をささげようとしているのである。

死して尚、その魂は不滅。己の信じた主がそれを欲するのであれば、たとえその命が絶えていようと、彼らは戦う。

その献身に涙しつつも、天使たちはやはり主の為に祈りをささげる。

ああ、世界が平和でありますように、と。

「ねえ、せんせい。せんせいってなんさいなの？」

「何歳だと想います？」

新世代の天使は、自分の勤める幼稚園の園児ににっこり笑って語りかける。

ディオドラは最強の空間使いであり、確率そのものすら支配できる。その彼の力を最も熱望したのは他でもない。絶滅寸前の悪魔である。

彼らは、長命ゆえか極端に出生率が低い。故に、子供が死ぬとそれは大問題なのだった。そして、先の2度にわたる戦争で、人口は大いに減少している。

移民政策に近い転生悪魔も、結局のところ家名を残すには足りない。

そこで、ディオドラが確率に介入して出生率そのものを上げたのである。

こうなると、必然産婦人科や教育に関して人手が足りなくなるのだが、それを補うのもまた新世代の天使の務めとなった。

もちろん、悪魔ですらない彼らに教育を任せるのは大きく反対もあったが、結局民衆からの強い要望を政府は跳ね除けることができず、結果彼らに依頼することになったのである。

ミカエル等天使も、まあ天使として悪魔を教育するのであれば、と

しぶしぶ了解をし、こうして今のところは大きく問題は起きていない。
「えっとね、１００さい！」
「ふふふ、みんなよりすこしお兄さんの、５歳ですよ」
「ええっほんとう？」
「本当です」
笑いながらざわつく、幼稚園の教室。そんな中、新世代の天使は自分の中で沸き立つものを感じた。
そして、みんなの手を握りお遊戯のように祈りをささげるのである。
「さあ、みなさん。少し早いですがお祈りをしましょう」
「何をお祈りするの？」
輪になって手をつないでいる園児たちは、なんと祈ればいいのか疑問だ。まだ、そういうことが分からないのだろう。
「何でもいいですよ。毎日おいしいご飯が食べたいでもいいですし、先生に褒められたいでもかまいません。
でも、一番いいのは、家族の皆が健康なこと、それをお祈りしませんか？」
それこそ、『調和』の最も望む願いであろう。無理とは知っているが、世界の家族が皆幸せであること。それに勝る望みはない。
「うん！」
「は～い！」
悪魔の子供たちは元気に返事をして、祈りをささげる。その幼い祈りを受け止めて、新世代の天使は彼の地の『天秤』に伝えた。
どうか、この子達の未来が少しでも幸多からんことを。

まだ知らぬ友よ！次代を担うものたち！

「漂流者が１０人・・・一誠が６人もいるぞ。どうなっているんだ」
「何？７人で殺しあって、その優勝者？」
「ああ、そういえばそんなことも言ってたな」
「大丈夫、元の時代に返してやるよ。傷も治してやる」
「俺は、この世界の『一誠』に救われたんだ・・・」

『カオスラヴァーズＤ×Ｄ』の世界にて

ふと、会社帰りにそんなことを思い出した。
なぜだろうか。あれからもう１０年たつというのに。
元の世界、元の時代に帰ってから、自分はそれなりに面倒ごとに巻き込まれ、そして色々あって平穏を取りもどした。
次代を担うものとしての力は、結局自分から天使や悪魔を遠ざけることにしか使わなかった。
でもまあ、それでよかったと思う。
昔の自分は、一誠になる前の自分は、それはもう考えが甘かった。
大甘だ。
個性的なヒロイン達に囲まれて、ドタバタバトルハーレムとか、よく考えなくても自分には合わなかった。
結局、転生神が言っていたような、普通の会社に就職して普通に就業して、普通に生活している。
まあ、嫁だけはその限りではないのだが・・・。おかげで、未だにポケットからはフォークが手放せない。
幸せなんだけどなぁ・・・。
と、していると、右手に赤龍帝の籠手が装着されていた。
夜の住宅地、人通りはないのでどうと言うことはないのだが、これを見られると、

やだ、夜に中二病を発症しているわ！
といらぬ噂を立てられかねない。ただでさえ妻があれなのだ。自分はちゃんとしていないと。
『久しぶりだな、一誠』
「いきなりどうしたんだよ、ドライグ！」
『いや、どうやらあの時の曹操が力を必要としているらしい。それで、呼応してしまったというわけだ』
ちょうど、思い出していた自分と嫁の恩人。彼が自分の力を必要としているのか。
だとしたら、迷うことはない。この平穏は彼がくれたものなのだから・・・。
そう、力を奉げよう。懐かしい呪文を唱えて。
さあ、乾杯しやう。
乾杯しやうぢゃないか、人といふものどもに。
善人も悪人もいつの世も人はくり返す。
膿むには余りに長く学ぶには余りに短い時の螺旋上。
だからこそ好く欲し好く発するするのだろう？
命など陽と地と詩とで満たされるほどのものなのに
それは、余りにも懐かしい感覚。自分には余りにも使い道のない、膨大すぎる、どうしようもない力の塊。
これを、彼が欲するのであれば、いくらでも奉げよう。きっと何もかも放り出して暮らしている自分よりは有効に活用してくれるはずだから。
力が、籠手を通して抜けていく・・・。どうやら、終わったようだ。
倦怠感は残るけど、さあ、帰ろう。家で妻と子供が待っている。

『ブレイブハートD×D』の世界にて

天界の城の中で、書類の山に埋もれながら昔漂流したことを思い出した。

あの後、恋人にはえらく心配された。無理もないだろう。結局自分は十年も異世界を漂流していたのだから。

まあ、元の時代に送り届けてくれたので不都合はなかったのだけれども・・・。

しかし、それにしても何の因果か自分は神様だ。何が起こるのかわからない。

だけど、この日々は決して悪いものなんかじゃない。

大好きな奥さんと一緒にいられる幸せは、何ものにも変えがたい。

だから、彼にはとっても感謝しているんだ・・・。

「あれ、どうしたのドライグ」

右腕には、もう使わなくなって久しい赤龍帝の籠手が装着されていた。

『いや、覚えているか、異世界の曹操を』

「うん、おぼえてるよ。あの人いい人だったよねー。こっちの曹操とはえらい違いだったよ！」

そりゃあもう、ひどいことをしたのだ。上位神滅具を使って、世界をひっくり返さんばかりの大暴れ。

あんな無茶をした奴は、絶対に止めなければならなかった。たとえ、神になる必要があったとしても。

『どうやら、彼は力を必要としているようだ・・・』

「そっか、じゃあ！」

神である一誠は、力を込めて呪文を詠唱する。

めぐる銀河のその果ての、青く輝く小さな星の、小さな男の大きな話。

語りつくせば日はまた昇る。天の光は全て星！

因果の輪廻に囚われようと　残した想いが扉を

開く。
　無限の宇宙が阻もうと、この血のたぎりが運命を決める。
　天も次元も突破して、つかんでみせるぜ己の道を！
　決して勇敢とは言えなかった自分が、勇気を出したその呪文。
　その呪文に乗せて、頼りない力よ、彼に届け！
「頑張れよ、大恩人！」

『カルチャーショックD×D』の世界にて

　大量の美しい女性を、水着でプールに押し込める。更に油を撒けば『女湯』の完成だ。
　皆がみんな、見事に死んだ眼をしている。いいぞ、この調子だ。実にいい。
　顔を仮面で隠している一誠は、隠れている自分の顔の傷の痛みさえ喜びに変えていた。
　そう、この光景こそ男の子の夢！中学生の思い描くエデンだ！
「はははははは！」
「いやー義兄さんは本当に頭が悪いですね」
　一誠の隣で椅子に座り、ジュースを飲んでいるのはレオナルドだ。
彼は、一誠のことを馬鹿にしつつ自分も笑いながら喜んでいる。
　これから、彼女たちの中に飛び込んでワッフルワッフルするのだ。
股間のテントも絶好調である。
　こういう頭の悪い展開を、この義兄弟は好んでいた。
　しかしその二人の夢の時間を、突如として乱入者が妨害する。
「バカ義兄貴！緊急事態だよ！」
「お義兄様！タイヘンです！」
　妹分のヴァレリーとルネが、二人のプライベートな室内プールに、無礼なことに普段着で入ってくる。

「ほら、義兄貴がはずしてる赤龍帝の籠手が、鳴動してるよ！」
　見れば、確かに鳴動していた。
「ほら、あの時助けてくれた曹操さんが力を必要としているらしいんです！」
「おおっ！そういえばそんなこともあったな・・・」
「じゃあ、義兄さん！あれをやりましょう！」
「おう！」
　我等４人は、一心同体！なれば、呪文も同様なり！
　ヴァレリーが祈る。
「月は夜の空にありながら、昼の光で輝く。人は大いなる夢の海、その波のひとつひとつこそ個々人の夢。月を開け、夢のかよひじを見つけろ！」
　ルネが叫ぶ。
「人が生まれで決まるなら、夢などいらない。夢をつかむことで、人は生まれを乗り越えられる。それでこそ人、それでこそ夢!!」
　レオナルドが唱える。
「理想を求め空ばかり見ていると、地上の花を見失う事もある。空は見えても足下は見えず・・・またその逆もある」
　そして、一誠が吼えた。
「両の手を叩き合わせたその間に何がある？右手と左手、善と悪、男と女、陰と陽・・・その狭間に何がある!?」
　４人の声がいまひとつになる。

「「「「唱えよ、創聖合体！」」」」

　４人の力が一つになり、それは彼の地にある曹操へと送られる。
「さあ、負けるなってかっこ悪い真似しなさんなよ！セーギのミカタさんよ！」

『ソフトクリームD×D』の世界にて

冥界ではなく日本にて、大きな公園の中でソフトクリームを販売している車があった。

その店主は、ニコニコと笑ってお客を待っている。空は晴天、季節は夏。調度、一番売れる時期だ。

だが、店主の笑顔は商売が繁盛しているからではない、公園の中が、笑顔と平和に満ちているからだ。

平和な中に活気があるとは実にすばらしい。やはりこの国はいい。多くの国を、多くの世界を歩いて回ったが、この国が一番すばらしい。

祖国ということもあるだろうが、皆が楽しそうに休日を過ごしている。

そんな国に生まれ、この国を守ることに力を注げることを誇りに思ってしまう。

師匠から、あるいは宿敵（とも）から学んだ拳は、今もこの手に宿り自分を支えている。

だから、今日も仕事だ。この仕事は、皆が笑顔になれるすばらしい仕事なのだから。

しかし、そんな折、自分の肩に一羽の鳩が止まった。加えて、右腕に竜の籠手が装着される。

「ドライグにY・H・V・H。一体どうした」

『あの曹操が、貴方の力を必要としているようですね』

『・・・だそうだ。お前がいると、俺の仕事がないな』

鳩と籠手は、流暢に人間の言葉で一誠に語りかける。

その内容は、嘗ての恩人が自分の力を必要としているという緊急事態を告げるものだった。

「なんだと！でであれば、この私が直接！」

『いえ、力だけでかまわないようですよ』

『だ、そうだ。というか、お前は平行宇宙間の移動はあんまり得意じゃないだろう』

「そうだった・・・。よし、では力を送るとしよう！」

一誠は、車から降りて木の陰に隠れる。そのまま、集中して呪文を唱え始めた。

風が鳴き、空が怒る！水が舞い、波が踊る！大地が震え、花が詠う！

影に向かいて影を斬り！光に向かいて光を斬る！

人も知らず、世も知らず、影となりて悪を討つ！

拳が燦然と輝き、その力は彼の地に伝わった。彼の、その熱意と愛と共に。

バ・ビ・ロン！

『ドロップアウトD×D』の世界にて

男は、まどろんでいた。四人の美女に抱きしめられながら、力なく宙を見つめている。

酒は、いつも浴びるほど飲んでいる。今日も同様に、つまみもなくただ酔うために飲んでいる。

酩酊しなければやっていられない。この、有り余る力を、どうしていいのかも分からずに。

力はあった。それを使いこなす為に努力もした。制限を解除するためにリスクもおかした。

むろん、それが本来自分には備わっていない力だとしても、決してその苦労はなかったことにはならない。

だが、その力を使って得た活躍劇の終焉は、どうしようもない臆病な自分の性根と向き合うことだった。

今となっては、もう身の回りのことをこの四人に任せなければ何もできないほど、自分は駄目な奴になってしまった。

それでも、こうして生き恥を晒しているのは、結局自分が死ぬのが

怖いからなのだろう。
「主・・・」
白い少女が、髪も肌も透き通るように白い少女が胸元に擦り寄りつつ右手を掴んだ。その右手は、気付けば装甲に覆われている。
意図せずして、この神器が現れるなどありえない。一体、何故。
「主、力をささげよと、『天秤』が申しているのです」
「・・・そうか、あいつか」
思えば、あの時自分が祝福されていなければ、自分はスーパーヒーローだと勘違いしたまま死ねたのだろう。そのほうが、一体どれだけ幸せなことか・・・。
だが、それはあくまでも自分のミスだ。彼のせいにはできない。であれば、恩はきっちりと返すべきだろう。どうせ、することなど何もないのだから。
男は、呪文を唱え始める。この呪文は、まだ自分が無敵の主人公だと信じていた時代のものだ。今となっては、何もかもがむなしい。
「その頭脳は全てを知り覚える事のできる知恵を持ち、その肋骨からは無限のエネルギーが湧き出し、その腰には生命を生み出す泉が湧き出ている」
白い少女が、それに続く。
「その右手は触れるもの全てを砕き、その左手はどんな攻撃も防ぐ盾が備わっている」
赤い女性が、それに続いた。
「その右肩には決して消えることのない炎が、その左肩には決して溶けることのない氷が備わっている」
黒い少女が、更に続く。
「その右膝にはどんな悪をも遠ざけ、その左膝には幸運を引き寄せる自然の法則が働いている」
青い少女が、それを更に続ける。
「その右足には大地の呪縛を解き放つ力が、その左足には人の目を欺く光の幻術が備わっている」
そして、男は最後まで唱えきった。

「そして、その翼に包まれるとあらゆるものに変身でき・・・傷が癒されるという」

心地よい脱力感の元、力がどこかへ流れていく。

どうせ、強い敵と戦って、かっこよく倒すんだろう。自分のように、どうでもいい理由で挫折などせずに・・・。

そう思うと、無性に悲しくなってしまう。嫉妬だ。自分は、もう何処にも進めないのに、進み続けている誰かが、たまらなくねたましい。

『ＸⅡセイバーＤ×Ｄ』の世界にて

強いとはなんだろうか。それは、誰にも分からないものなのかも知れない。

だが、明確に世界最強という言葉には回答が存在する。

世界の全ての男で戦い、生き残って最後まで立っていた男。その男が世界最強だ。

だが、それになんの意味があるんだろうか。最強であることを証明して、一体何が待っているのか。

むなしい最強の称号と、取り返しの付かない孤独が待っているだけなのではないだろうか。

不毛の荒野で隻腕の男が一人、一本の剣の突き立つ墓の前に立っていた。

みすぼらしい風貌とは裏腹に男は、この世界で最強の男である。間違いなく。

なぜならば、この世界で男は彼と彼の息子だけだからである。それ以外の男は、いや人類は、いや生命はおろか世界すら滅びている。

この男が、滅ぼした。意図したわけではない。この世界を、何が何でも滅ぼそうと思ったわけではない。

ただ、彼が己の敵と定めたオーフィス、６６６、グレートレッド。そ

の3体と戦った折、その余波で滅びたのである。
一度目、オーフィスと戦った折は、まだ多くの世界が残っていた。
666と戦った折、残る世界のほうが少なかった。グレートレッドと戦い終わった後、もう何も残っていなかった。
それでも、彼が守りたかった唯一のもの、彼の愛しい人だけは残った。そして彼女の兄の墓標だけは。壊れてしまった彼の心にとって、これより他に大切なものが残っていなかったということだろう。
風もない荒野は、もうどうしようもなく寒い。寂しい。壊れきった男の心象風景を写すようだった。
しかし、それでも男はそこに立っていた。語りかけることもなく、ただ、自問自答を繰り返していた。
不意に、背負っていた刀の、その鞘が鳴いた。赤龍帝の力を持つその鞘は、一誠に語りかける。いつかの恩人が、力を欲していると。
自問自答の果てに世界を巻き込んで壊れ果てた男は、恩義に報いるという、数少ない正しい理性に従って動く。
体は剣で出来ている　。
血潮は鉄で、心は硝子。
幾たびの戦場を越えて不敗　。
ただの一度も敗走はなく、
ただの一度も理解されない　。
彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う。
故に、その生涯に意味はなく、
その体は、きっと剣で出来ていた。
その呪文と共に、力が抜けていく。赤龍真帝を正面から打倒した、最強の神器、『破壊』を司る神器の所持者の力が・・・。
かの地に向かう。
平凡な日常の中に幸福を見出した男の小さな力が。
神になってしまった男の自由のない力が。

己の欲求を満たすことを第一とする男の悪しき力が。
影ながら平和を守る男の神聖なる力が。
自分を嫌ってしまった男の存在するはずのない力が。
全く存在する意味のないひとりぼっちの男の最強の力が。

発動！滅神奥義四文字斬り！

「Ｙ・Ｈ・Ｖ・Ｈが教えてくれた！全ての神器はリンクしていると！」

フォーメーションＧ。

それは、神の遺志の封じられた槍。その本来の力である、あらゆる神器を通して人々の祈りをつなげる力の封印を解き放つもの。

その強大すぎる力と、余りにも世界に対して影響を与えることから、司令官である一誠が幾重にも封印を施したもの。

作戦開始前にあらかじめ四大魔王から許可を賜り、実際に使用する前には天使長と総督からの許可が下りなければならなかった。

しかし、それも既に正当な手段で許可されている。もはや、阻むものは何もない。

フォーメーションＧによって、遠い外宇宙であっても曹操の持つ槍は無数の祈りを受け取ることが可能であった。

「祈りが、力が伝わってくる・・・待ってたぜ、この瞬間を！」

時と空間、世界や宇宙すらも超えて、伝わってくる祈りを力に変える。

本来、かの宇宙でのみ振るわれるべき力、しかし、この宇宙で振るわなければ意味がない。物理法則の不具合は、ガッツで補う！

「クラッシャー、コネクト！」

より深く、より真摯に。曹操はその祈りと受け取っていく。天使の祈りがあった。悪魔の祈りがあった。年老いたものの祈りがあった。幼い者の祈りがあった。

『全ての神器を・・・』

『全ての祈りを・・・』

『受け止めてください・・・』

『頑張って・・・』

『負けないで・・・』

『勝利を、掴み取れ・・・』

『ガッツだぜ・・・』

曹操の心に、魂に、祈りに乗って想いが集結していく。争いの中で

倒れていった仲間達。共に戦い抜いた戦友。戦いの後に生まれた命。その全てが、曹操につながっている。

「滅神奥義、四文字斬り！」

そして、その全てが曹操の力に変わる。否、曹操を基点として、その全てが一塊の強大な光の柱に姿を変える。

滅神奥義四文字斬り。

それは遠い未来、外宇宙からやってくるであろうグレートレッドよりも強大な侵略者、時天空級の敵を迎撃するために聖書の神が残した、人類最後の切り札である。

人々の祈りを背負い力に変え、討つべき敵に向ける。即ち、時代を背負うもの。次代を担うもの。

その特性上、自分以外の次代を担うものからも力を集めることができるため、理論上これ以上の火力を持つ奥義は存在し得ない。

あらゆる神器の頂点に君臨する『黄昏の聖槍』にふさわしい権能といえるだろう。

嘗てオーフィスの力を得たルシファーの子に振るわれた渾身の一撃、それを超える最強の一撃となって遠い外宇宙にて振り下ろされようとしていた。

夜を昼で塗りつぶし、絶望を希望で上書きし、曇天を威風で吹き飛ばす。雲海は消え去り、曹操はその威光を大地に示した。

冬木の民は見た。空を埋め尽くす、神の光を。それは、影を生むことなく大地のあらゆる場所を照らしていた。

その奇跡に、Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓに拘束されていた聖堂教会の面々も涙する。主は、間違いなくあの光であり、この地に姿を見せたのだと。

聖杯の奪い合いという醜い争いを止めるために、その威光を持って正さんとしているのだと。

「ぐうっ!?」

しかし、突如として曹操自身に膨大な数の鎖が絡みついていく。それは虚空から生じ、大地や大海、大空から曹操の肉体を拘束していた。

これは、明らかに目の前の英雄のそれではない。まるで、この地球そのものが外敵を排除しているかのような、そんな力だった。

事実である。振り下ろされれば、この星をたやすく砕こうという力。それに、抑止力が反応しないわけがない。可視化するほどに強力な力となって、曹操を締め上げていた。

「なんて圧力だ、ねじ切れてしまいそうだ・・・！」

単なる圧力ではない。それは、物理法則や摂理、この地球という星の持つ『世界』そのものの力。本来、神であっても逃れえぬ星の意思。

それが、ただ一人の人間に過ぎないはずの曹操に、その総力を持って排除しようとしていた。

己の持てる力を、光の柱に注いでいた曹操。無防備な彼には、身がねじ切れるほどの苦痛が襲う。

だが、この身はもとより人々の願いの総決算。決して、負けることなど許されない。

「真っ向勝負だ！この惑星全てが相手でも！」

曹操に絡みつく、無数の鎖が悲鳴を上げる。本来、物理的な力ではヒビ一つ入らない絶対の節理の顕現であるはずのその鎖は、摂理そのものへの介入によって崩壊寸前までにその姿を維持できなくなりつつあった。

そう、物理法則への介入など、次代を担うものにとっては天使の創造同様の基本スキル。まして、黄昏の聖槍を持つ曹操にとっては花を摘むようにたやすい。

「俺は、次代を担うもの、マイソロジースレイヤー！この宇宙の物理法則の書き換えは完了した！そっちに返すぜ！」

咆哮と共に、跡形もなく砕け散る無数の鎖。しかし、それだけにとどまらない。今度は、アーチャーのサーヴァントの体に先ほど以上の無数の鎖が絡みついていく。

物理法則を改ざんした以上、もはや曹操はこの宇宙にとって異物ではありえない。逆に、異物とみなされたのはこの地球の守り手であるべき英霊、ギルガメッシュだった。

先ほどまで曹操を苦しめていた以上の圧力が、今度はギルガメッシュとそのマスターである時臣に襲い掛かる。うめき声一つ、指先一本に至るまでその存在すらも拘束された二人は、来るべき裁きを受け

入れることしか許されない。
『曹操・・・やっちまえ!』
不意に、声が聞こえた。自分の友であり、主であるあの男の声が。
幻聴だろうか。いや、幻聴だとしてもかまわない。力はここにあり、意思もまた揺るがない。
この力は自分ひとりだけのものではない。孤独ではないことが、この上なく嬉しかった。
「俺は一人じゃない・・・俺達は、一つだぁぁあああああああ!」
光の柱が、目の前の敵、ギルガメッシュに向かって振り下ろされる。
その刀身は人類の観測できる限界をも超えた地点にまで伸びており、その影響は6次元はおろか12次元、その遥か先にまで及ぶ。
ただの物理的な力だけではなく、神秘、概念、情報にいたる全てを破壊しながら、その刃は目標に向かう。
「光に・・・」
切断され、消滅していく宇宙。それは、悉くが光の刃によって光の粒に、エネルギーそのものとなって昇華していく。
それは、嘗てこの宇宙が生まれたビックバン、その再現であった。
全ての物質は大いなる火の玉であった。それらが熱から物質へと姿を変えて、今の宇宙を形成している。それが、この一振りによって虚無であった時代にまでさかのぼろうとしているのだ。
そして、それを阻むことができるものは、この世界に存在しない。
「なあぁれぇえええええええええええええええええええええ!」
ついに、法則の鎖で拘束されたギルガメッシュにその刃が及ぶ。その輝く帆船と共に、その魔力で編まれた肉体は消滅していく。物質的に存在している時臣さえも、その威光に裁かれていく。
そのまま、四文字斬りは振り下ろされた。世界が、地球がその祝福に包まれていく。
その輝く刀身を振りぬいた曹操は、四文字斬りを解除した。無数に分解していたパーツは再び槍として構築し、その姿を取り戻している。
血振りするように槍を振るうと、槍は光のように消えていった。何

のことはない。曹操自身が力を使い果たし、槍を維持できなくなったのである。

滅神奥義の疲労に耐え切れず、空から重力に従い落下していく曹操。しかし、その顔はことを成し遂げた笑顔だった。

「俺達の・・・勝利だ！」

そのまま意識を失い、笑顔のまま冬木沖に着水する曹操。波に揺られる彼を仲間が発見するまで、数分すらも必要なかった。

こうして、第四次聖杯戦争は最後まで生き残ったアサシン、兵藤一誠とそのマスター岸波白野の優勝で幕を下ろしたのである。

果たして、万能の願望機を得た二人は、果たして何を願うのだろうか・・・。

さらば聖杯戦争！オケアノスの潮騒を聞け！

「ここが、オケアノス・・・」

冬木の砂浜で、拘束を解かれたウェイバー・ベルベットは水平線のあるべき海のかなたを見ていた。

しかし、その彼方には何もない。真実何もない。ここが地の果て、海の果て。それを嘗てのギリシャ人はこう呼んでいた。

オケアノス、この世の果てと。

嘗て、征服王イスカンダルが求めた、世界の終わり。そこに、期せずして彼は立っていた。

「これが・・・」

彼の手は、震えていた。感動ではない、恐怖ではない。怒りによって震えていたのだ。

「これが、人間のやることかよ！」

砂浜に膝をつき、拳を幾度となく振り下ろす。砂浜は形を変え、拳の跡を残すが、しかしそれだけだ。波と共に、その跡も消えていく。

なんという無力だろう。自分は、世界が滅びたというのに何もできないのだ。

人間の無力さを味わいつつ、これをなしたのが人間であるという事実に憤りを隠せない。

なにせ、世界は滅びた。これは極めて物理的な意味での滅びである。社会制度が崩壊したとかそういうちんけな理由ではない。極めて単純に、冬木を除く全てが消滅しているのである。

滅神奥義四文字斬り、それはそもそも宇宙そのものよりも強大な存在と交戦した場合にのみ振るわれるべき力。それが、たった一人の英霊に振るわれることがまずおかしいが、その結果がたった一人の英霊の脱落で済む訳もない。小さな宇宙船地球号は、冬木を残して『宇宙』ごと消滅したのだ。

振るった当人は、オケアノスの波間で気絶しており、眼が覚めたらドヤ顔で『勝ったぜ！』と言い出した。そのあと、怒り心頭のアサシンに殴られ続けている。今も。

アサシンは曹操を十字架に磔にし、ジャンヌ・ダルクが作った剣を片っ端から突き刺し、ロンギヌスの槍ならぬロンギヌスの剣を大量に生産しながら尚も責め続ける。まあ、正当な報いだろう。というか、全く足りていない。

星一つどころか宇宙一つ滅ぼした男には、まだまだ突き刺すべき剣が足りない。

ふと空を見上げるウェイバー。空には無数の銀河がうかび、大地を照らしている。アサシン曰く、あれは一つ一つが宇宙そのものであり、この宇宙が滅びたことで冬木が外宇宙から見て露出している形になっているからだそうだ。

神秘的で、幻想的な風景だ。自分にはないセンスだが、もしもイスカンダルがこれを見たらどう思うだろうか。これだけ前人未到の風景が広がっていれば、今すぐにでも戦車を走らせたのか知れない。

宇宙は、一つ一つが渦をなし、一つ一つが脈動している。滅びた自分たちの宇宙も外から見ればあんな感じなのだろうか・・・。

自分は、なんてちっぽけなんだろう・・・。もう、笑うしかなかった。

自分は生きているし、無傷だ。戦車の墜落による傷も『彼ら』によって治療済み。だが、だからなんだというのか。ロンドンも、イギリスも何もかも消滅している。根源も、それそのものがなくなった。

これで、生きているからラッキーと思えるほど彼は愚かにはなれない。

ふと、教師であるケイネスを見る。彼は、未だに気絶している婚約者の手をとっていた。こうなると、守るべきものがあれば多少はマシなのかもしれない。

そのまま周囲に目をやれば、他にセイバーのマスターであろう男性が、泣きながら白髪の女性を抱きしめていた。婚約者か妻だろうか、どうやら、治療後も意識が戻らないようだ。

そして、教会の連中は呆然としていた。彼らにしてみれば、聖杯をめぐる争いを助長していた自分たちへの天罰とでも思っているのかもしれない。事実はともかく、結果から見れば確かにそうとも言え

る。聖杯の奪い合いをしていたらＹ・Ｈ・Ｖ・Ｈが現れて世界を滅ぼしたのだ。まあ、そう解釈するのが正しいだろう。
御三家の一角、マキリと思わしき老人も、自分同様海を眺めていた。まあ、見たところ何もかも綺麗に吹っ飛ばされたのでいろいろ気分を整理しようとしているのだろう。
サーヴァントが脱落したあと、自分たちは自分の影から出てきた触手によって拘束され、河原の土手に転移していた。
すわ、このまま殺害されるのかと悲観していたら、そのあとのアレである。もう、それどころではなかった。
アサシンの安全を確保したということで、自分たちは解放されていたが、されたからと言ってできることはない。こうして、開放された砂浜で黄昏るしかなかった。
「お前な！一体陛下からなんて命令されてここにきたんだ！」
「お、前を・・・救出してこいって・・・」
「それでどうしてこの宇宙を崩壊させる必要があるんだ！最も破壊を伴う方法をとりやがって！お前頭の中アンリ・マユさんでも詰まってんのか！」
「ご、ごめん。お前がピンチだと思ってつい・・・」
「そもそも四文字斬りなんて使う必要ないだろうが！というか、使うなって言っておいただろうが！」
「だって・・・」
「なんだ！」
「だって、みんな使っていいって言うから・・・」
「子供か！お年玉をもらったはじから使い倒す子供か！」
昨晩、イスカンダルを相手に一歩も引かずに交渉した男とは思えないほど、アサシンは怒りをさらけ出していた。
その怒号だけが、砂浜を満たしていた。

白野視点

「まあ、司令官。その、それぐらいにしておきなさい」
ジャンヌ・ダルクがアサシンを止めたのは、一体どれだけ時間がたったときだろうか。今まで自分たちが見たことがないほど怒り狂っていたアサシンに怯える私たちは、ただ見ていることしかできなかった。
しかし彼女は、あっさりと彼を止める。なんというか、彼があそこまで怒るのはそんなに珍しくないようだ。と言うことは、彼はいつも世界を滅ぼしているのだろうか・・・。
「男一人救うために世界を滅ぼすってヤンデレすぎませんかねぇ」
「うむ、見事なデウス・エクス・マキナよな」
「頭痛が止まらないわね・・・。というか、あいつ本当に英雄？私より全然悪党じゃない」
「父さんが、どうして俺に優しいのかよく分かった。うん、アレに比べれば国一つ滅ぼしたぐらい全然問題ないな。国民皆殺しにしたわけでもないし」
反英雄４人が呆れるほどのイデっぷりというかドワォっぷりを見せ付けたアサシンの部下は、ようやく十字架から下ろされた。彼の受難というか罪の清算はこれからである。
とはいえ、この状況をどうにかできるのも彼だけである。とりもなおさず、世界を再構築して欲しいものだ。
「曹操、分かっていると思うがさっさとこの世界を再構築しろ。できるだろう？」
「え？いや、できるが・・・」
意外にも、曹操はアサシンの命令に乗り気ではないようだ。なにか、理由でのあるのだろうか。
曹操は、自分の体に刺さっている剣を抜きながら反論する。
「死んだものを無理に生き返らせても、後から続く者の邪魔になるだけだ。
人生は一度だけなんだから、悲劇をなかったことになんかできない！」

それはひょっとしてギャグで言っているのか?

「しろ!」

酷く真っ当に聞こえる主張をする曹操の顔面を、思いっきり踏んづけるアサシン。世界を特に意味もなく演出のように滅ぼした男が言うと、それはもう踏むしかない暴言だ。

アサシン自身、死者蘇生にはあんまり乗り気ではなかったが、状況が状況である。これはもう、できるのであればせねばなるまい。でえじょうぶだ、死んでもドラゴンボールがある、理論だ。

「あのなあ、おまえ状況を見て言え?ちょっと考えればわかるだろう?な?」

「だ、けど・・・」

「世界をついうっかり滅ぼしちゃいました、テヘペロ!じゃねえんだよ!さっさと元に戻せ!」

「・・・だが、この町の住人はどうする?あれだけの奇跡を目撃したんだ、人生観が変わっている可能性も・・・」

「お前が言うな!」

サッカーボールのように蹴り飛ばされる曹操の頭。いいぞ、もっとやれ。

「・・・そうだな、じゃあまず第4部隊から人数を引っ張ってきて、この町の人間から祝福を除去、記憶を改ざんしよう。頭数がいればどうとでもなる。

そのあとで、世界を再構築すればいい。それで万事解決だな」

「で、貴方はどうするの?」

ジャンヌは一番重要なところを聞く。そもそも、彼らはアサシンを回収しに来たのだ。さっきは、アサシン自身が帰ることを渋っていたが、さて、今はどうだろうか。

ヘラクレスやその他生前の一誠の部下も、死後の部下である反英雄たちも、彼を見ている。戦闘員だけは、どうでもよさそうだ。それこそ、何処にでも着いてく所存なのだろう。

「帰るに決まってんだろうが!こんなバカ放置してられねーよ!ボケ!」

ものすごい毒舌ながら、しかしアサシンは帰ることを決めた。さっきまで泣きながら帰っていいのか悩んでいた男とは思えない。まあ、分かる話ではある。確かにここまでの力を持った馬鹿を放置していたら、何が起こってもまったく不思議ではない。

してみると、アサシンは非常に重要なポジションの人間だ。こんな力をもった人間を管理することができ、いなくなったらこれだけの人が助けに来るのだから。

しかし、これにはジャンヌやヘラクレスも一安心といったところだろう。胸をなでおろして安心しているようだ。

「では、戦闘員はともかく、そこの４人とマスターはどうしますか?」

白銀の剣士アーサーが尋ねる。彼は、どうやらモードレッドに思うところがあるようだ。先祖として、というか一人の剣士として、だとは思うのだが。

その微笑みは、背筋が凍るほどの冷たい。一誠の部下ではさして珍しくない嗜好というのも、嫌なところだ。

私は付いていく。記憶もないし、家族も死んでいる。私にとって、家族はアサシンとその宝具の８人、反英雄４人だ。だから、置いていかれる方が嫌だ。

「余はもちろんついていくぞ。余は奏者の剣なのだからな。それに、新しい世界というのも創作意欲が刺激されそうだ」

「私ももちろんお供します。ご主人様のいくところ、良妻賢母のこのタマモあり!」

「地球の男に飽きたところよ、って奴ね!」

「・・・俺は父上の願いを止める」

モードレッドだけは、何かを決意したかのようにアサシンについていかないと宣言した。

その眼は、未練を断ち切ろうとしている騎士の目だった。彼女は、或いは父をもう憎んでいないのかもしれない。ただ、国を救わなければならないという思想にとらわれてしまった少女を救うために、戦おうと思っているのかもしれない。

それは、反逆者である彼女が、父であり王であるアーサーに対する

最期の忠義なのかもしれなかった。それを、私はとめるすべを持たない。

「マスター、私は聖杯を求めて再び戦争に赴くつもりだ。むろん、願いをかなえるまで旅を続ける。だから、貴方には付いていけない。だが、もしも、終わってまた会えるのなら・・・そのときは貴方を父と呼んでもいいだろうか」

モードレッドは、アサシンの目を見つめながら問う。きっと、アーサー王が脱落したと知って、それからずっと考え続けていたのかもしれない。

そんな彼女を見て、アサシンは怒りを沈め、慈愛の目を向ける。その切り替えの早さには、脱帽する。他の反英雄3人は、その手があったか！という目だ。なるほど、確かに目立っている。

「モードレッド、以前お前に言ったな。強い男は強い女がいなければ生まれない、強い父親は良い子がいなければ生まれないと」

「うん」

「男を育てるのは女で、父親を育てるのは子供だ。逆ではない。だから、いきなりお前に父親といわれても、正直困る」

「・・・うん」

「だから、一緒に親子になろう。なに、おれの妻はあれで包容力のある女でな、まず間違いなく受け入れるさ」

「・・・うん・・・」

ふと思った。アサシンの妻、一体どんな人なんだろうか。貞淑だったり、清楚だったりするんだろうか。

ジャンヌ達には声をかけづらいので、戦闘員8人に聞いてみる。すると、すんなり答えが返ってきた。

全員がネロを指差した。その上で一言、大体一緒だと。それを聞いてネロは喜びの声を上げる。残りは不満そうだ。私もイラっとする。

「だから、もうそう呼んでいいぞ」

「駄目だ。そう呼んだら、きっとオレは・・・」

「というか、聖杯ならいくらでも作ってやるさ」

そういって、アサシンは懐から紙コップを取り出して、地面に倒れ

ている曹操の顔を思いっきり踏んづけた。
まだ傷の塞がっていない傷口から、勢い良く血が噴出した。それを、紙コップで受け止める。
「ほら、聖杯」
「え、えええええええええ」
「まあ、だまされたと思って願ってみろ」
これ、いくらなんでも酷すぎないか?
アサシンが聖杯に対して全く執着がないのが良く分かる。これだけホイホイ聖杯が作れるんだったら、そりゃあ執着する理由なんてないよね。
だって、部下が宇宙吹き飛ばせるんだもん。万能どころか全知全能だもんね。
「・・・アーサー王の願い、国家の救済が叶いませんように」
紙コップは金色に光り輝き、いともあっさり願いをかなえた。なんとなくだが、叶ったような気がする。えらくお手軽に叶うのだなと感心するほどに。
ただ、モードレッドが手に持っていた紙コップは消滅していた。どうやら、負荷に耐え切れなかったようだ。流石に即席の代物だけあって使い捨てなのだろう。
「これで、おれの息子になってくれるな?」
「うん・・・」
戸惑いながら、頷くモードレッドを、アサシンは暖かく抱きしめる。曹操を踏みつけながら。
その顔は、人を踏みつけながらとは思えないほど優しく、暖かかった。その胸をかりながら、モードレッドはアサシンの背中に手を回していた。
そのまま、二人は暖かい抱擁をしていた。少し、いやとても羨ましい。
「まあ、とにかくこれで一件落着ね。一誠は新しい部下を連れて帰還。この世界も、元通り。めでたしめでたし」
ジャンヌが〆る。そう、なんというか、あまりにも解決方法が力ず

くすぎたが、これで大円団。万事解決だ。
しかし、その言葉をさえぎるように叫びが聞こえる。
「ふざけるな！」
その手の中に意識のない女性を抱えた男、たしかセイバーのマスターだという男が、滂沱の涙を流しながら叫んでいた。
どうやら、まだ終わらないようだ。いや、終わっていないようだ。
彼にとっての聖杯戦争は。

聖杯はしかるべきものの手に

なんという美しさだろう。言峰綺礼は、その光景に目を奪われていた。

夜の空には日輪さえも霞むような輝きの銀河が渦をなし、それが無数に浮かび大地を照らしていた。あの一つ一つが宇宙であり、各々が無数の可能性を内包しているという。

無論、この宇宙も同様であり、つい先ほどまでは無限の平行宇宙の横幅と、現在過去未来の縦幅、2次元や多次元の高さの幅。そのこと如くを内包した渦銀河の姿をしていたという。

それが、いましがたの奇跡によって根こそぎ吹き飛ばされ、こうして外宇宙を観測できるようになっている。

この光景は、たとえ根源に至っている魔法使いですら見ることのできない神の視点であり、本来現在の人類には紙の上であるのではないか、と仮説を立てるのがやっとという領域だった。

そして、その光景のなんと荘厳なことか。彼は、およそ余人でも美しいと感じるであろう光景を、自身も美しいと思っていた。中身のない人間だと思っていた自分が、共感できるなど、身が震えるほど嬉しかった。

同時に、そう思っているのがこの場では自分だけだということにも気付く。なぜだろうか、こうして『世界が滅ばねば見れない』最高の眺めだというのに、誰もが沈んでいる。監督役であり、尊敬する父も、ただ呆然としていた。

なぜだろうか。と思ってしまう。この風景は間違いなく美しい。それは彼が『余人の美しい』と思うであろうそれを上回りこそすれ、決して下回ることのないものだ。なにせ、自分ですら感動で胸が満たされているというのに。

そうして、気付く。彼らは失われたものの重さに耐えかねているのだ。この風景を見るために失われた命や、世界、そして彼ら自身の信仰。その個人の骨格とでもいうべきものがなくなったことに耐えられないのだ。

『だからこそ美しいのに』

そこで、綺礼は更に気づいた。言ってしまえば、今まで自分は回答の無い己のあり方を必死で探し続けてきたが、この境地に至ってするすると答えが出てくる。代行者にあるまじきことだが、これがいわゆる悟りの境地というものだろうか。

自分は、この光景の美しさに感動しているのではない。この光景の犠牲になったものの重さ、その滑稽さゆえに満たされていたのである。

筋肉で武装された戦士の、その戦闘力ではなく積み重ねてきた鍛錬に思いをはせるように、綺礼はこの光景に至るまでに失われたものを観ていたのである。

これまで、人類が築きあげてきた文化、信仰といった精神的なもの、或いは文明や建築物や建造物、或いは兵器や道具。その一切が神の気まぐれによって吹き飛ばされた。跡形もなく。

嘗て神は7日で創世を行ったというが、神にしてみれば、作り上げた世界も作り上げたとき同様一息に吹き飛ばせるもののようだ。

それが、この上なく『愉快』だった。ああ、なんと儚く、そして無価値なことか。人類の営みなど、神は砂の城のように崩してしまうのだ。

認めざるを得ない。自分は今まで自分の中身を求め続けてきたが、始まりにこそ答えはあった。綺礼の問いに、神は世界を滅ぼすことで示してくださったのだ。

『お前の本質はこうだ』

おお、なんという奇跡。なんという幸運。周囲を見れば明らかだ。自分だけがこの光景を喜んでいる。自分だけが満たされている。即ち、神は自分にこの光景を見せ、答えを示すために姿を御見せになったのだ。

事実がどうあれ、そうとしか受取りようがない。信仰心に答えてくださったのだ。首に下げた十字架を握り締める。おお、主よ・・・。

「聖杯戦争の関係者、全員集まってくれ！」

この事態を引き起こした面々が、一端集まるように声をかけてきた。いかねばなるまい。いずれにせよ、他にできることなどないのだから・・・。

白野視点

「さて、集まってもらったのは他でもない。第四次聖杯戦争を締めくくるためだ」

最後まで残ったサーヴァント、アサシンは面々を召集したあと司会のように話し始めた。

正直、たかが聖杯戦争の〆なんてしている場合ではないと思う。この世の全ての悪とかこの世の全ての欲とかそういうレベルじゃない。この世の全ての終わりが訪れた後なのだから。

しかし、それでもアサシンは平常運転だった。力なくうなだれている聖杯戦争の関係者一人一人の顔を見ながら話を進める。

「この聖杯戦争の勝者は、岸波白野とそのサーヴァントアサシンだ。異論はあるまい」

他のサーヴァントが全員脱落している以上、なるほど、自動的に自分たちの優勝である。

・・よく考えたら、自分たちはただの一騎すら打倒していない。ただひたすら戦力を積み上げ続けていただけだ。

気がついたら機械仕掛けの神が何もかも、それこそ何もかも台無しにしていた。だが、勝ちは勝ちである。決して誰にも否定できない。

まあ、だからなんだというのだろうか。世界滅びてるし、宇宙滅びているし。万能の願望器なんぞでどうにかできるレベルではない。

「だが、勝者であるおれ達は未だに聖杯を掌中に収めていない。御三家及び監督役には説明をして欲しい。おれ達はもとより、ほかの生き残った二人の参加者にも分かるようにだ」

しわくちゃの老人がびくりと振るえ、監督役だという老いた神父がため息をつき、セイバーのマスターだという男はこちらを睨んでいた。

元をただすと、セイバーのマスターがこちらに文句を言ってきたのがこの説明会の始まりである。

いや、文句を言ってきたのは当然だ。誰だって怒るだろう。彼個人レベルで考えたとしても、動産、不動産といった財産もこの町の外のものはなくなっているだろうし、もしかしたら家族も死んでいるのかもしれなかった。それを思えば、文句の一つも言いたくなるだろう。

だが、アサシンは一旦彼を押しとどめた。というのも、説明するのはやぶさかではないが、彼にだけ説明するのも非効率的で不公平だと。つまり、この聖杯戦争を一旦ちゃんとまとめる必要があると言ったのだ。

「できれば、この戦争の始まりから、聖杯の原理、仕組み、そういうのも説明してくれ」

彼らは魔術師であったり、中立の立場の人間だ。正直に言って参加者には説明したくないこともたくさんあるだろう。だが、アサシンの言葉に逆らえるはずもなく・・・。

聖杯戦争。それは、失われた第三魔法ヘブンスフィールを蘇らせるため、根源にいたる穴を穿つ大儀式。

要するに、サーヴァント7騎を召喚して更にそれを死亡、というか霊核を砕いて脱落させ、その膨大な魔力を聖杯に貯めて一気に使うものらしい。

へんな話だが、根源というのはこの世界の外にあるらしく、この世界の内側においてどんな願いでもかなえる、という使い方をする場合のほうが必要な魔力は少なくていいらしい。

それを聞いたランサーとライダーのマスターは、ああ、なるほどね。と達観していた。無理もないだろう、今更そんな情報は何の価値もないに違いない。ただ、セイバーのマスターは相変わらずこちらを睨ん

でいた。
　話を聖杯に戻すが、どうやら彼の抱いている女性の中に聖杯はあるらしい。脱落しているのは6騎のサーヴァントだが、どういうわけだが完全に完成しているらしく、根源への穴を穿てる状態のようだ。
　でもまあ、正直にって根源そのものが破壊されているらしく、更に言えばこの宇宙の物理法則も変わっているので、果たして願望器としても効果を発揮するのかどうか・・・。
　つくづく全くもって聖杯戦争とは一体なんだったのだろうか・・・。
「ふむ・・・」
　なにやら、思案しているアサシン。どうやら、聖杯が偽物であるということが気になっているようだ。
　聖杯とは、そもそも救世主の血を受けた杯のことである。それは万能の願望器とされているが、この冬木における聖杯は、願望器ではあっても救世主の血を受けた杯ではない。
　その理屈で言うと、さっきの紙コップで作ったインスタント聖杯ほうが真実の聖杯なのだが・・・。認めたくないものである。
　まあ、アサシンはメシア教徒でも十字教徒でもないので、正直な話真作だったとしても全く興味がないのだろう。だが、万能の願望器という触れ込みそのものに疑問を抱いているようである。
「これって・・・、ひょっとして願望器としては欠陥品なんじゃないのか？」
「ふむ？」
　その言葉に意味のある反応したのは、マキリの当主だという老人だ。彼は、聖杯戦争の当初からの関係者らしい。その問いに、思うところのでもあるのだろうか、アサシンに続きを促した。
「純粋な魔力だの、無色の魔力だの謳っているが、要するに方向性の定まらない代物なんだろう？これ、下手したらサルの腕みたいになるんじゃないのか？」
「まあ、確かにのう・・・。例えば使用者が『世界で一番優れた魔術師になりたい』と願ったとして、実は心の中では『自分以外の魔術師は皆死ねばいい』と思っていれば、そのように願いを聞き届けてしまう

かも知れんな」
「『学校に行きたくない』と思ったとして、当人の中には『そうなるには事故で怪我をするしかない』と思っていたら、そうなっちまうわけか」
そ、それはタイヘンに恐ろしいですね！
無色だの、純粋だのと言っても、その実は方向性が定まっていないということだ。使用者の願いを純粋にかなえようとすれば、術者にとって望ましくない結果をも招きかねない。
人の心は複雑だ。愛している人を憎むこともあるし、逆もまた然り。いけないと分かっていても、心のどこかで『良くない願い』を思ってしまうものだ。
「いや、それもあるけど、例えば見たこともない親に会いたいとか、そういう願いでもかなえられないだろ？使用者は具体的な願いを持っていないんだから」
「うむ、そうじゃな。無色である以上、具体性がなければその願いをかなえることはできん。結果を望めば、もちろんその結果に対して明確なヴィジョンがなければかなえようがない」
「無色だもんな。本当に欠陥品だな、この願望器」
「まあ、それは副産物だからのう・・・」
と、そんなことを話し始める両人。しかし、その言葉を聞いて、セイバーのマスターは更に嘆きを深めていた。
もしかしたら、彼も明確なヴィジョンを持たないのに願いをかなえようとしていたのだろうか。だとしたら、それは最初っから破綻していたということになる。
本当にもうどうしようもないな、これ。
「で、だ。セイバーのマスター、お前はおれに話があるんだよな。どうだ、恥じるものがないのであれば端的でいいからこの場で説明しろ」
セイバーのマスターは、淡々と語りだした。
親が魔術師で悪をなしたこと。育ての親を、他の多くを救うために切り捨てたこと。その後も、切り捨て続けたこと。

全てを救うために、もはや聖杯の奇跡にすがるしかなかったこと・・・。

「お前酷い奴だな」

セイバーのマスターの告白を最後まで聞き終わると、いともばっさりアサシンは斬って捨てた。その言葉には、明らかに見て取れる軽蔑の念が含まれていた。

なんというか、アサシンは本当にこういうときあっさりと斬って捨てる。セイバーのときも、キャスターのときもそうだった。

というか、キャスターのときが一番感情がこもっていた。一体どういう基準なんだろか。アサシンは言葉を続ける。最後まで聞いてみよう。

「千年も頑張ってきた魔術師の家の悲願を横から掠め取ろうってのか。許しがたいな。一般枠での参加ならそれは正当だが、御三家の代理として参加してそれはないだろう。人様の家宝を当にした挙句、当が外れたら泣くとか本当にどうしようもないな。まるでお恵みに文句を言う物乞いだ」

本当に、もう、軽蔑しきった声で言い放つ。だが、正論だ。彼は人類の平和を願って聖杯を求めていたが、少なくともアインツベルンに接触する必要は無かった。ランサーやライダーのマスターたち同様、普通に参加していればよかったのである。

勝算を上げるためだろうがなんだろうが、参加枠だけいただいて、願いは自分のものをかなえるとか、詐欺にもほどがある。

「自分の願いにだけしか興味がなく、それ以外の全てを無価値とする。自分の価値観こそ絶対であり、それ以外の価値観は間違っていると断じる。まさしく、絵にかいたような魔術師だ。それも、なんの誇りもない典型的な恥知らずの愚か者だ。今まで殺してきた、そのうちの一人程度の価値しかない。ちっとも珍しくない、何処にでもいる阿呆だな」

その言葉の一つ一つが、彼を苦しめていく。人類を救済する、その使命は確かに貴いが彼はその方法を間違え続けてきたのだろう。少

なくとも、アサシンにしてみれば、事故や事件が起きてしまった時点から対処を始める彼の動きでは、どうやっても人類を救済できないと呆れているのだろう。

「お前、友人の一人もいないだろう。誰かに相談もせず溜め込んでいるから、そんな極端な思考に走るんだ。真面目も、長所と短所の表裏一体。愚直さも、他人からすれば融通の利かない迷惑な代物だ。あいにく、同情の余地はないな」

「これだけの・・・」

その言葉に、ついにセイバーのマスターが反論する。

そう、元々、彼はアサシンに言いたいことがあって声を荒げていたのだ。

「これだけ、これだけの力が有れば人類を救済できるだろうが！それなのになんだ、お前等はなぜ誰も救わない！」

「のぼせるな！」

セイバーのマスターの絶叫に、アサシンは英雄の持つ胆力で跳ね除ける。

その言葉は、先日全知全能の無意味さを語った彼にしてみれば、鼻で笑うようなことだろう。

そう、彼は全知全能ゆえに苦しんでいた。誰も彼もを救い続けること、そのこと自体が以下に無意味であるのかを語っていた彼にとって、散々苦悩したことなのだから。

「たかが、全知全能ぐらいで、全人類が救えるものか！ただの一人とて『本当には』救えはしない！」

「なっ・・・！」

「問うぞ！暑さのない世界とはなんだ！」

「・・・いきなりなんだ」

「答えろ！暑さのない世界とはなんだ！」

いきなり前起きなく禅問答が始まった。いや、これは聖杯問答なのだろうか。

セイバーのマスターは返事をできず、ただ混乱するのみ。ほかの面々も、畑違いの事にただ困惑している。

ここに、禅僧は一人もいないので、結局アサシンが自分で回答を言った。
「誰もが『暑いと思わない』世界だ！」
「・・・！」
「分かったか！全人類の救済とは、つまり全人類が『救済されたいと思わない』というだけの世界を作るだけだ！」
なんという論理。なるほど、確かにそうだった。
人は、皆何がしかの不満を持って生きている。それを救われたいと、つまり誰かに何とかして欲しいと思う者と、そうでなく自分で何とかしたいと思う者に分かれているだけのこと。
皆が皆、自分で自分のことを何とかしようとしていれば、救われたいと思わないわけで、それはつまり救われる必要のない世界だ。それが、全人類の救済だというのか。
それでは、今とさして変りのない世界ではないか。ようは、気の持ちようということになってしまう。
「それは・・・」
「当然、お前の望むものではあるまい。だが、人類の救済という『おせっかい』な願いの最低条件は、つまりそういうことだ。
それにどんなに肉付けをしたとしても、最低でもそれをしなければ人は結局救いを求めるぞ！それの何処が救済だ！」
「あ・・・」
「それとも、全人類の欲望を満たし続ける夢の世界でも作るのか。人類の意識をまぜこぜにして満たされた世界を作るのか。個体差を無くして、皆が全く同じ生き物になる世界でも作るのか。だが、根幹はそれだ。結局、気の持ちようだ。その程度の代物だ。救済など！」
「・・・違う、僕が求めているものは・・・！」
「何が違う！少なくともお前は、自分で自分の願いを否定しているだろうが！」
「え・・・」
「小さな幸せの満ちた閉ざされた世界。貞淑で美しい妻がいて、自分に甘えてくる可愛らしい娘と共にある家庭。それがお前の信じる幸

せだろう。それを、お前は否定して大望をかなえるためにここにいる。それが、幸せの否定でなくてなんだというのだ」

セイバーのマスターは、必死にアサシンに反論を使用とするが、しかしそれでもアサシンは彼の矛盾を解き明かしていく。平和を求めて戦場を渡り歩いた正義の味方は、自分があいまいにしたまま過ごしてきた『救済』や『幸福』を直視し、その不確かさを目の当たりにしていた。

彼は、戦争を憎んだ。魔術師を憎んだ。だが、彼は今自分を直視している。今まで、自分は何を求めてきたのか。それを、彼は初めて認識しようとしていた。

「・・・不本意だが、全知全能のおれがお前を救ってやる。全知全能の力など使わずにな」

アサシンは、おそらく彼のことが好きでもなんでもないのだろう。だが、もう彼を止めるには、彼の『聖杯戦争』を止めるには、彼自身を救済するしかない。

アサシンは、彼の中に潜み、彼を呪い続けた患部を摘出する。全知全能の力ではなく、言葉だけで。心底嫌そうに、彼は救ってみせる。人を救うのは、こんなにも簡単で、しかし難しいのだと。

「お前は、幸せになってもいいんだ」

今度こそ、セイバーのマスターは完全に沈黙した。

力なく膝を突き、抱きかかえていた妻を、聖杯の器を泣きながら抱きしめる。彼にとって、幸せになっていいという言葉は、一体どれだけの救いのある言葉だったのだろうか。それは、分からない。

そして、おそらく彼は今後も悩み続けるのだろう。果たして、自分は何がしたかったのか。自分は本当に幸せになり続けてもいいのか。それを問いながら、しかし幸せを守り続けるのだろう。

それは、何処でもある普通の男の物語だ。

「マスター。貴女は、私がどうしてジル・ド・レェに優しかったのか、同情的だったのか、不思議に思っていましたね。

何のことはないのですよ。私は、聖書の神を信じていた彼を、彼のように聖書の神を理由にしていた彼を『決して救わない』自分が嫌いで、だから同情的だったのですよ」

泣き崩れるセイバーのマスター、その姿を見下ろしながら、アサシンは言葉を続ける。

「自分で決めて自分で行動したものは、結局自己責任だ。同情の余地はない。聖書の神を信じたものも、結局は自己責任なのかもしれません。ですがね、聖書の神も、全人類の救済とはいかなくても、信徒に贔屓をして悲劇を無くしてあげても良かったんじゃいのか、とか思ってしまうんですよ。神にならなかったおれは」

そういい終わると、アサシンは指で曹操に指示をする。既に、一切の出血が収まっている曹操は、手にした槍を振るった。その切っ先から迸る光の奔流は、セイバーのマスターとその妻を包み込んでいく。

意識のない彼女から、黄金の杯が現れる。それを観て、マキリの当主は、その美しさに目を奪われていた。彼にとって、聖杯戦争の最初期から関わっていた彼にとって、これはまさしく悲願だったのだろう。

聖杯は、第四次で、世界の崩壊と引き換えにようやく姿を現したのであった。

光の奔流が収まると、黄金の杯からは黒いもやのようなものが蒸気のように一瞬だけ噴出し、そのまま消えてなくなった。それは一体なんだったのか。もはや、意味がないことだった。

アサシンは、それを手にすると高らかに宣言する。

「この聖杯戦争の勝者であるアサシンは、唯一生存している御三家の参加者、衛宮切嗣に聖杯を譲渡する。しかし、それはあくまでも、アインツベルンの代理としてだ。千年の執念に報いてやれ」

アサシンは、軽く自分に目配せをする。私は、頷いた。これは確かに、私が使うべき代物ではない。まあ、欲しくなったら作ってくれるらしいし。

セイバーのマスターは、涙にぬれた目でそれを確かに受け取ると、そのまま妻と一緒に抱きしめた。その妻は、ここから見ても明らかな

ほど顔に生気が満ちている。

おそらく、曹操が槍で何かをしたのだろう。それぐらいできて当然に違いない。

かくて、今度こそ聖杯戦争は幕を下ろした。

この後は、そこそこに忙しい後始末が待っているのだろうが、それはまた別の話だ。この場にいる戦争の生還者たちには、また新しい日常が待っている。

後悔を引きずるもの、無力感を引きずるもの、手から零れ落ちなかった幸せをかみ締めるもの。様々だろう。だが、少なくとも世界は元に戻り、この空も青空になる。

世はこともなし。

伊耶那美！黄金体験鎮魂歌！

真なる神器。全部で１３存在し、次代を担うもの一人一人に託されている本当の意味で新しい時代を作るための装置。

艦長、モンスターズＤ×Ｄの一誠は全ての神を陳腐化させる炎の剣を持ち、

ディオドラ・アスタロトは新しい秩序、法則摂理を構築するための石版を所持し、

ヴァーリ・ルシファーは更生の余地もないほど罪深い命を焼き尽くすメギドの火を操るのであれば、

曹操は、全ての罪を背負い許す聖人の遺体を所持している。

さて、聖人の遺体と一体化した曹操の、その血は受けた杯に『願望器』としての機能を当然のように与える。

この世の全ての悪を受けた冬木の聖杯は『最も破壊を伴う方法で願いをかなえる』。では、曹操の生み出す聖杯は、いかなる方法で願いをかなえるのであろうか。当然、生み出す曹操自身の考え方が色濃く反映される。とはいえ、曲解も言葉遊びも何もない。願った当人の思いをそのまま反映してかなえることだけは確かだ。

気付けば、また己にとって終焉の戦場、丘に至っていた。満身創痍で、剣を大地に突き立てたまま呆然としている。目の前には、昨夜再び刃を交えたモードレッドの姿が。無論、血に濡れて地に倒れている。夕日は、相変わらず騎士達の息絶えた姿で埋まった丘を赤く染めている。

ああ、何もかもが分からなくなってしまった。

国や民を守ることに共感を覚えた将には、やり直すことの傲慢さと卑劣さを教えられ、遥か時の果ての子孫には、王の剣はただ強いだけの剣であると証明された。

もはや、この手にしているエクスカリバーは、権力や権威を示すも

のではなくなっていた。ああ、もうどうしようもない。だが、だからと言って諦められるのだろうか。この、悲劇に満ちた戦場を見て、この光景をなかったことにしたいと思ってなにが悪いというのか。

「・・・諦めるものか」

必ず聖杯をこの手におさめる。そして、この戦場を、悲劇をなかったことにする。アサシンも言っていた、勝てば良いと。であれば、必ず自分は勝ってみせる勝つまで、繰り返して見せると。

彼女は、世界との契約の元再び聖杯戦争に召喚される。勝利するまで。

二度目の聖杯戦争では、特に強敵もなく、魔術師も取り立てて問題のない、協力的な魔術師だった。聖杯もまた、汚染されていることもなく正常に動作するものだった。

彼女は十分な供給の元、なんのハンデもなく危うげなく勝利を重ね、最終的に生き残った。目の前には聖杯がある。これで、自分の国と民は救われる。ああ、よかった・・・。

『自害せよ、セイバー』

その言葉の意味を理解する暇もなく、己の剣は自らを貫いていた。この手で。

『済まないな。根源に至るには、６騎の英霊では足りない。自身のサーヴァントを含めた7騎の英霊の脱落が必要なんだ』

魔術師は極めて魔術師らしい理由で、あっさりとセイバーを斬って捨てた。言葉でだけは謝って。

思えば、自分たちは余りにも何の障害もなく勝ち進んだが故に、全くと言っていいほど事務的に勝利してしまった。互いを理解する必要も、その時間もなく。

だから、ただ道具であるセイバーを裏切るのも、ただ用済みになった道具を捨てる程度の、軽いものだったのだろう。彼は悪人でも外道でもなかった。ただ、根源にいたることを目標とするただの『魔術師』だったのだ。

故に、彼女が優勝するのと同様に、彼女の脱落もまた当然のこと

だった。

３度目の聖杯戦争では、未熟な魔術師によって召喚された。魔力は足りなかったが、まだ魔術師としての心のあり方が定まっておらず、だからこそ、きちんとした人間関係を構築できた。

ただ、それは戦争そのものは優位には進まない。後手に回り続け、気付けば敵だらけ。魔力は少なく、宝具も使用できない。

『令呪を破棄し、サーヴァントを脱落させれば、命まではとらない』

相手は、極めて好意的に譲歩を示した。或いは、令呪を使って抵抗されるよりは安全と考えたのかもしれない。魔術師自身が無能で、セイバーさえ脱落すればそれで良い、そう考えたのかもしれない。

セイバーは、相手の魔術師を信じて自らの首を落とした。再び、自害を命じられるよりは、と思ったのだろう。

その後、彼は何の裏切りにも不運にも出くわすこともなく、安全に監督役に保護され、正式に脱落することができた。無論、セイバーにはそれを知ることなどできはしないが。

４度目の聖杯戦争は一種の地獄だった。

サーヴァントは例外なく神話クラス。一人として自分よりも弱い敵がおらず、アサシンやキャスターですら自分を凌いでいた。

マスターもまた、自分のマスターを除いて全員が規格外。死徒２７祖の上位陣、真祖の姫君、英雄の子孫、受肉した英雄、聖杯と一体化したもの、果ては魔法使いという面々。

自分を召喚した魔術師は一級ではあったが、その程度であった。極めて、当然のように自分は真っ先に脱落する。

そこに、卑劣な策も不運も全く存在しない。実力差故に、当然の結末が待っていた。

５度目の聖杯戦争は、月で行われていた。

１２８人のマスターによる、トーナメント戦。ある意味では、他の聖杯戦争以上に自動的で、紛れの起こらない代物だった。

マスターは、地上の王になるべき完璧なる魔術師。供給も作戦もバックアップすらも、全てが完璧。負けるはずはなかった。

決勝戦で、無名のマスターを下し、ついに聖杯に至る。それは願望器というよりはラプラスの魔。無限の可能性を計算し続ける巨大なコンピューターだった。

よって、セイバーの願いも、彼女の望むようにかなえることができた。はずだった。

決勝戦の後、聖杯の前で待ち構えていた第八のサーヴァントとマスター。その手によって希望は費えた。

かの覚者には、聖剣も意味をなさず、今まで自分たちが勝ってきたとき同様、必然の敗北を遂げた。

6度目の聖杯戦争は、絶望しかなかった。

既に滅ぶことが決定している人類、青くない空に枯れた海、緑のない大地。人類を救うために自分も魔術師も勇敢に戦った。

敵は、新人類であったり人類の安楽死を望むものであったり、人類の粛清を望むものであったり、人類が生まれてきたことそのものを否定するものであったり。

そんな彼らを排除してたどり着いた聖杯さえも、汚染されて使うことはできなかった。

『セイバー、聖杯を破壊してくれ』

マスターである彼のその言葉には、無念しかなかった。だが、そうするしかない以上、セイバーは無言で頷いて宝具を使用する。

7度目の聖杯戦争は、比較的普通の聖杯戦争だった。

マスターも普通、敵も普通。そこそこに不運があって、適度に苦境に陥るも、しかしマスターと力を合わせてそれを脱した。

だが、最後に控えていた一騎。その魔力の消費量ゆえに最後の一人になるまで待っていたバーサーカーとそのマスターが、聖杯を前に立ちふさがった。

そのバーサーカーは、いつか見た誰かに良く似ている、片腕の剣士

だった。

『アーサー、なのか・・・』

一目見て自分の真名を見抜いた彼は、片腕ながら見事な剣技で自分を追い込み、宝具の開放にまで追い込まれた。

手にした剣はエクスカリバーと対を成す魔剣の頂点グラム、基礎能力や技量、実戦経験はこちらを大きく上回っている。しかし、負ける気はなかった。令呪の後押しもあって、必勝を期していた。

『覚醒〃完遂形魔剣無月流虚刀鑢〃滅神奥義《七花八裂》』

何が起こったのかすらわからない。令呪を用いて強化されたはずの自分の一撃は、一瞬たりとも拮抗すらできず打ち破られ、聖剣は自分の体とマスターごと破壊された。

『弱い・・・』

その、失望しきった言葉だけが、耳に残っている。

8度目の聖杯戦争は、平均水準の高い戦争だった。

明らかに壊れて強いマスターも、絶対に勝てないと断じるほど強いサーヴァントもいない。一級の魔術師が、一級のサーヴァントを従えて参戦していた。

策謀と裏切り、知略と同盟。多くの要素が絡まり、誰もが疑心暗鬼になりながらも聖杯を求めて歩みを進める。

一時は停滞したものの、キャスターの脱落と同時に事態は一気に動き出して続々と脱落していくサーヴァントたち。

一般人に被害を出すこともなく、取り立てて異常事態がおきることもなく、全ては魔術師同士のハイレベルな決闘・・・。

『刺し穿つ死棘の槍!』

自分も、その中で散った。言い訳もできないほど、真正面から強敵と死闘を演じて。

9度目の聖杯戦争は本当にただの戦争だった。

二つに分かれた聖杯の、その所有権をかけた2陣営の戦い。

聖杯は一級故に、無数のサーヴァントが召喚され、自分もそのうち

の一人に過ぎなかった。
多くの周辺被害を出しながら、両陣営は幾度となく激突を繰り返し、そのつど多くの犠牲が出た。そして、再び召喚され補充されるサーヴァントたち。
その中で、自分は奮戦したが、しかし戦火の中で志半ばにして倒れた。
どうせ、自分が死んでもまた他を召喚するのだろうと思いながら・・・。

１０度目の聖杯戦争は逆に小規模だった。
聖杯も陳腐で、召喚された英霊も陳腐。自分も、大きくステータスが下がり、宝具も不可視の鞘に限定されていた。
とはいえ、あっさり優勝を達成した。その分、かなえられる願いは大したものではなく、祖国の救済は叶わなかった。
『ギャルのパンティーをくれ！』
マスターの、本当にどうしようもない願いによって、聖杯はすべての力を使い果たして消えた。
その程度の願いしかかなえられない聖杯は、本当に聖杯でもなんでもないと思いながらセイバーは消えた。

１１度目の聖杯戦争は『本物』の聖杯をかけた戦争だった。
正真正銘、救世主の血を受けた聖杯。それを得た主催者が、その聖杯に願うにたる願望を求めて催した祭り。
その時代の権力者たちが、国の威信を賭けて多くの資金と人員を費やして介入してきたその戦争は、もはや魔術師達の思想など一切無視されてしまっていた。
サーヴァントである自分も、人質をとられて身動きの取れないマスターと一緒に拘束され、何をする自由も与えられなかった。
結局、敵国の工作員の手によって自分のマスターは暗殺され、そのまま自分も脱落した。
その、聖杯を求める権力者たちの行動を正当と思いながら。

１２度目の聖杯戦争は終始他の面々のトリッキーな能力によって翻弄され続けた。
複数のアサシン、姿を消すアーチャー、宇宙から飛来するライダー、存在を操作する固有結界を操るキャスター、必ず転がせるランサー、理性的に動くバーサーカー。
真っ向勝負ならば負けない相手ばかりだったが、それが禍した。正当な英雄は自分ひとり、強力なマスターも自陣一人。
故に、全勢力が手を組んで、こちらを殺しにかかった。
６対１では多勢に無勢。その剣は真価を発揮することなく、マスターを殺されて何もかもが終了した。

１３度目の聖杯戦争はある少年に召喚された。
その少年は、真っ直ぐで無茶をして、そして・・・気付けば多くの困難を乗り越えて成長していた。
魔力供給のために肌を重ね、見回りのために共に出歩いて、気付けば、恋に落ちていた。
剣を抜いたときに、捨てていたものがよみがえるのを感じた。だが、それでも国家を救済したかった。
だが・・最後にはキャスターの姦計によってマスターを奪われ、自害を命じられた。
最後の光景は、キャスターに抱きしめられ、その肉におぼれる自分の愛しい人の、虚空を見る目だった。

１４度目は、１５度目は、１６度目は・・・１００度目は。

幾度目の丘だろうか。
彼女は余りにもままならないこの状況をようやく整理して考えた。
そして、思い出したのだ。最初の聖杯戦争で、己の息子が、自分の

目の前で地に倒れている息子が言った言葉を。
『そうか、では私はあなたの願いが永遠に叶わないことを聖杯に願おう』
「モードレッド・・・」
憎い。この騎士が憎い。
国を滅ぼされても、自分は彼女を憎むことはなかった。ただ、王の責務として反逆者を討っただけのこと。
だが、こうして、死して尚自分の前に立ちはだかれては、憎しみがわく。
彼女の意図はどうあれ、国家の崩壊を良しとする彼女を、アーサーは憎まずにいられなかった。
握り締めた拳を、大地に叩きつける。幾度も、幾度も。

曹操の基本理念は感情に従うことにある。そして、敵と定めれば必滅あるのみ。
故に、聖杯にある可能性を排除して欲しいと願えばそれはそのまま適用される。
即ち、その可能性のある宇宙の消去である。
故に、彼女はその願いをかなえるという結果に到達することはできない。
終わりがないのが終わりである。しかし、このループから逃れる道も当然存在する。
聖杯に願うのをやめ、滅びの定めを受け入れること。それだけが、彼女に残された、聖杯戦争に参加し、聖杯に願うことができない、というループからの唯一の脱出方法である。
それを、彼女が受け入れるかどうかは、また別の話だが。

大団円！みんな幸せ！

いつの世も人は、争い続ける。

それを、達観した誰かは、或いは絶望している誰かは人類は有史以来全く進歩していないという。本当にそうだろうか。少なくとも自分は、作者はそうは思わない。

人は、確かに争いの為の道具を進化させ続けている。だが、それを進歩がないというのはいかがなものだろうか。

地球に、原初の生命が生まれて数十億年が経過している。多くの動物が、植物が。その間にいる生命が、微生物が、生きて死んできた。

彼らは、無駄死になのだろうか。それを違うと思うのであれば、人類もまた同様であろう。

人類は、多くの過ちを犯して生きたと人は言う。だが、本当にそれだけだろうか。所詮、ここ数百年で構築された薄い論理感で、勝手に決め付けているだけなのではないだろうか。

その時代の人間が如何に知恵や勇気を振り絞って生きてきたのか。それを思えば、無駄だと言い切れるだろうか。

人は確かに争うし、それを続けてきた。だが、それだけではない。愛し合い、慈しみを伝え合ってきた。

今日もどこかで争いが起こる。だが、同じくらい愛情もどこかにいる誰かと誰かをつなげているはずだ。覚めぬ夢はないが、人は皆それでも夢を見る。

だって、そのほうが楽しいじゃないか。

「・・・ここだな」

成人男性の一般的服装、スーツに身を包んだ兵藤一誠は冬木市の武家屋敷の前にいた。護衛のために、４人の反英雄と二人の英雄を引き連れて。

ここは、衛宮邸。嘗て兵藤一誠が始めに参加した第五次聖杯戦争の

マスターが住んでいた場所だ。彼にしても会いたいとは思っていないかもしれないが、自分としては、あの後どうなったのか気になるところだ。

故に、こうして足を運んだ次第だ。玄関のチャイムを鳴らす。・・・返事はない。

「留守か?」

「いいや、気配はあるぞ」

「そうね、なんていうか、声も聞こえるし・・・」

ヘラクレスとジャンヌ。英雄ゆえの鋭い感覚が、この邸の中にいる誰かを明確に捕らえていた。

(ん・・・あ・・・っ!)

(セイバー!・・・セイバー!)

「・・・帰ろう」

一誠は、全てを悟った。もう帰ろう、おれには帰るところがあるのだから。

「父上の気配がする!父上、父上!」

「あーっ!ファザコンが空気も読まずに突っ込みやがりました!わざわざパンドラの箱を開けに!」

「見えている地雷よな。その心意気やよし!」

「・・・(ボッ!)不潔よ、不潔だわ!こんな真昼間からどうして勤しんでいるのよ!」

反英雄エリザベートは事情を察し、顔を赤らめた。なるほど、正論である。まだ日は高いというのに、情事に勤しむのはまるでサルのようである。

ち、ちちうえ!

セイバーが二人!?

も、モードレッド!?

父上が男色を?!

何を言っているのですか!というか、何故貴方がここに!

そ、そんな父上が、父上が・・・こんなの父上じゃねー!

セイバー、まず服を着てくれ！

「収拾が付かんな、いくぞお前ら」

モードレッドが扉を蹴破った玄関を通って、一向は情事の現場に踏み込んでいく。これから行く場所の惨状を思って、気は進まなかったが。

まあ、現場がどういう事態にハッテンしていたのかは深く描写しませんが・・・。ご想像通りと思っていただければと思います。

ともあれ、若い男女が（女のほうが若くないが）一つ屋根の下で、男女の営みをしようと別に糾弾することもない。そもそも、そんなことをしにきたわけでもない。

８人は、居間で並んで座った。ヘラクレスは、大きすぎて部屋に入れず、庭でぽつんと立っている。

「・・・まあ、そのなんだ。マスター、久しぶりだな。ここではもう半年ぐらい経ったか？」

「ああ、うん。それぐらいはたったな！」

アーチャーのクラスで召喚された一誠は、当時マスターだった士郎に挨拶をする。正直、生き残っていることに疑いはなかったが、まさか遠坂のサーヴァントだったセイバー、アーサー王とねんごろになっているとは思っていなかった。というか、セイバーが女の顔をしているとは思っていなかった。

受肉自体は特に言うことはないが、まさか新しい人生を女として過ごすとはなぁ・・・。人は変わるものである。そのきっかけが、自分の『理想の王論』に由来するとは思っていないが、まあ幸せならばそれが一番である。結局、王も人間である以上、寝るし腹も減る。同じくらい、恋だってするのだから。

先日の第四次聖杯戦争においてセイバーをアーサーが切り捨てたことを思うと、なんだか運命の微妙さには苦笑いである。

「バーサーカーと黄金のサーヴァント、それからお前が死んだらそれで聖杯が完成して、その後キャスターが聖杯を調べたら、汚染されててキャスター以外だとちゃんと使えない代物になってたんだ。

で、さっさと使い切らないとやばいって言う理由で、生き残っていた5騎のサーヴァントは全員受肉を希望して、今に至るってわけさ」
「そうか・・・人死にがないなら結構だ」
「それはそうと・・・お伺いしたいのですが、なぜモードレッドが貴方の使い魔に・・・。しかも受肉して」
セイバーのその視線の先にはモードレッドがいる。微妙に恥らっており、一誠の影からアーサーを伺っている。
「聖杯戦争で主従になってな。そのからみで、この場にいる4人の反英雄はおれの部下になったのさ。まあ、そういうことだ」
「そうでしたか・・・」
セイバーは、にっこりと笑ってモードレッドを見る。その目に、国を滅ぼした叛逆の騎士にたいする憎しみも怒りもなかった。
その目を受けて、おそるおそる一誠の体から身を乗り出すモードレッド。
「その、父上・・・」
「モードレッド・・・」
二人は、テーブルを挟んでゆっくりと向き合った。お互い、言うべきことが頭の中を埋め尽くしているに違いない。だが、胸がいっぱいで言葉にならない。
モードレッドは立ち上がり、ゆっくりとセイバーに歩み寄る。セイバーも同様に立ち上がり、彼女に歩み寄った。一歩、また一歩。二人は互いに距離をつめあっていく。
それは、宿命の果てに幸福を得た二人だからこその『歩み寄り』。二人は、双子の姉妹の如き父子は、その距離をついにゼロにする。互いに抱きしめあい、涙する。
一体、どれだけの犠牲と時間の果てに、この境地に至れたのだろう。この二人は、親子でありながらようやくそれを互いに認めることができたのである。
ここにいるのは王の剣を引き抜いた騎士王でも、近親相姦によって生まれた不義の、そして叛逆の騎士でもない。ただ、二人の父親と息子だった。

その和解に、心中複雑ながらも士郎は喜んだ。なにせ、伝説から考えればこの場で殺し合いを始めてもおかしくなかったのだから。

「うむ、宿命の果てに和解する親子。うむ、美しい。正直羨ましくもあるな」

「まあ、これでファザコンも少しは収まるといいんですがね。そして、キャラが薄くなれば、その分私が、くくくくく！」

「どっちがどっちなのかしら。正直見分けつかないわね・・・」

「でさ、表にいるおっきい人は・・・」

「ああ、生前の、という言い方もおかしいな。以前からの部下、ヘラクレスの魂を継ぐもの、名前はそのままヘラクレスだ」

「ああ、やっぱり」

ヘラクレスは、それこそヘラクレス以外の何者でもない姿をしていた。あれでペルセウスと名乗ろうものならば、詐欺だ、と訴えるレベルだ。そりゃライダーも殺されるだろう。

魂を継いでいるだけであそこまでガチムチなマッスルボディに成れるとも思えない。きっと、色々努力したのだろうと思う。きっと、彼なりの冒険があったのだろう。

「ヘラクレスと言えば、イリヤの・・・ああ、バーサーカーのマスターも寂しそうにしていたから会ってあげてくれないか？」

「元より、そのつもりだ。以前、ランサーやセイバーとも酒盛りの約束をしていてな、受肉しているのなら話も早い。全員呼んで派手にやるとしよう！」

とはいっても、武家屋敷とはいえとてもではないがこれだけの面々を一堂に集められるほど衛宮邸は広くない。よって、アインツベルンの城を借りることになった次第である。

最初は嫌そうにしていたアインツベルンのメイドも、ヘラクレスを見て大喜びするイリヤスフィールを無視できず、結果場所を貸し出すことになった。

一誠が自分の邸の料理人に作らせた料理は、文字通りの意味でこの世のものではない。連合軍の司令官である一誠の、城専属の料理人の

腕は超一流であり、加えて材料も一誠の領地で取れる、シフォンの影響を受けて良い意味で突然変異をしたグルメ食材ばかりである。
神代の料理すらも凌ぐであろう美味の数々はセイバーや小次郎といった、比較的美食に縁がなかった二人はおろか、ライダーやランサー、キャスターすら驚愕させるものだった。
それを、大きなテーブルいっぱいに並べて振舞う一誠を、やはり只者ではなかったか、と感心している。
「ねえねえバーサーカー!■■■■■■■■ーーー!!って、言ってみて!」
「だから、俺はバーサーカーじゃないんだってば!あと、それは一体どうやって発音すればいいんだ?!」
「言ってあげればいいじゃない」
自分の膝までの大きさしかないイリヤが、猛烈にじゃれ付いてくるので困っているヘラクレス。元々、行く先々で子供に大人気な自分ではあるが、肩に上ってこようとするのを止めるので精一杯だった。
無責任にジャンヌはたきつけるが、一体発音が分からないのにどう言えというのか。
おかげで、せっかくの食事も食べる暇がない。アインツベルンのメイドからの視線も痛い。それに、小次郎やランサーから『勝負しようぜ』オーラも恐ろしい。せっかく普段のバトルマニアから開放されたかと思ったら、またバトルマニアと戦うことになるとは・・・。
「いや、本人じゃないとはいえやっぱりヘラクレスを名乗るだけのことはある。ありゃあ極上の戦士だ」
「うむ、是非手合わせ願いたいものだ。この剣、果たしてあの偉丈夫に届くか否か?」
「勘弁してくれ・・・」

「宗一郎様!これもおいしいですよ!」
「ああ、そうだな」
普段は無表情な自分の夫、マスターである宗一郎が、珍しく口角を吊り上げて食事をしている。これが自分で作った食事でないという

のはいささか残念だが、それでも愛する人の笑顔に勝るものはない。
それに、別に他所の主婦が作ったものではなく一流の料理人が作ったものだ。嫉妬するなどばかばかしいことである。
それに、神代の魔術師である彼女をして、この料理は異常においしい。別に、魅了の魔術が使われている形跡はないというのに、ただ美味であるというだけで胃袋をわしづかみにしている。
非常に発達した科学は魔法と見分けが付かないというが、食卓から魔術は生まれたというが、まあ、そんな感じだ。害はないし、であれば文句もない。とりあえず食べられるだけ食べるだけだ。
「あの時、アーチャーと戦わなくて良かったわ！」

「桜、余り食べ過ぎると、その・・・太るかと」
「・・・でも、ライダー。貴女は凄い食べてるじゃない！」
食べれば太るのは絶対の真理だ。というか、多くの生き物は食えるときは太るぐらい食べるものだ。それが食事の意義でもある。
だが、この日本で生きる人間にとって太りすぎは、かえって健康上良くない。それに、年頃の女性とあれば尚のことだ。
まあ、受肉しているとはいえライダーは英霊。そうした心配はまず必要ないのだが・・・。
「サクラ・・私は太らないのです。ほら、魔力に変えられるので・・・」
「・・・うそよね？」
「いいえ、真実です」
だとしても、一体どうして目の前にある無数のスイーツを無視できようか。色とりどりのケーキは見るからに美しく、自分に食べて食べてとねだっているのだ。これはもう、一週間絶食したとしても食べるべきなのではないだろうか？
「甘いわね、桜。私はもう退路を捨てたわ」
自慢げに自分の皿を見せる凛。その更には、いかにも太りそうな、もとい高カロリーのような甘い、甘い誘惑のスイーツが山盛りとなっている。そして、その眼はもう死んでいた。
明日を捨てた暴走列車は、壁にぶつかるまで止まれない。そう、明

日の体重計という壁にぶつかるまで！
「もう、どうなってもいい・・・！ありったけ食べる！」
明日、スカートがはけなくてもいいという覚悟！彼女は、既に明日を捨てていた！
「姉さん・・・！私も一緒です！」
全くの雑談だが、一誠に一言言えば、味は若干落ちるものの太りにくいスイーツも用意していたので、それを薦めていただろう。

「・・そういえば、貴方は要職についているようですが、こうして足を伸ばしてもいいのですか？」
バゼットは、食にあまり興味を持つくちではないが、それでもおいしくいただいていた。彼女は体を動かすタイプの格闘型魔術師なので、そもそも基礎代謝も多い。また、余り気になる異性もいないのでばくばくと食べている。
そんな彼女は、隣にいる一誠に尋ねる。士郎にしても、それは確かに疑問だ。学生の自分と違って、彼はそう暇ではないはずだが。
「どうなんだ、アーチャー」
「この体は分霊でな。本体はちゃんと自分の家で仕事してるよ」
それに対して、あっさりと回答する一誠。もとをただせば、この場にいる反英雄や英雄も、本人がそのままいるのではなく座にいる本体からのコピーである。よって、一誠も同じようなものだ。最初から受肉しているという点は、少々違うといえるが。
一誠は、神霊の上位種。よって、分霊の一人や二人、作るのはたやすい。まあ、あんまり作りすぎるのは本人としても好きではないのだが。
「ま・・・まさかここまでおいしい野菜があったなんて・・・。私が今まで食べてきた料理は、一体・・・。腐っていたのでしょうか？」
「いえ、父上。これは単に材料がいいんですよ。料理人も一流ですし・・・」
「貴方は、いつもこんなおいしい料理を？」
「いいえ、週一ぐらいですね」

「おのれモードレッド！」
「食事で親子喧嘩とは情けないな。他所でやらぬか。風情の分からぬ野蛮人よな」
「ううう、こんなおいしいものを、いつか私も作れるんでしょうか？そう思うと、正妻の道は険しいですぅ・・・」
「やっぱり、材料が大事よね。料理の先生も材料が大事って言ってたし・・・。マネージャーに今度言ってみようかしら？」

反英雄も英雄も、同じ食卓で食事を分け合うこの光景は、まさしく聖杯戦争の生み出した奇跡の光景だろう。
怪物も、騎士も。いつの時代の誰もが、こうして食事をする。それを、進歩がないと捉えるのではなく『変わってはいけないものがある』と思いたい。
もちろんこうして和気藹々と食事をできることは、彼らが戦争を勝ち抜いた勝者だから、と言い切るのはたやすい。
敗者は、あの丘でいつまでも諦めることもできず永遠の悪夢を繰り返すのだろう。だが、それも戦争に望んだものに対する正当なる結果だ。
弱肉強食ではないが、勝者はこの光景を守る為に戦ったのであり、敗者は負けたがゆえに失う。それもこの宇宙の真理だ。
だが、話はそんな簡単でもない。
この第五次聖杯戦争の勝者たちは、決して幸運ゆえにこの幸せを勝ち取ったのではない。互いに語り合い、或いはちゃんと理解を交わしたが故にたどり着いた妥協の産物である。
バーサーカーやギルガメッシュ、言峰のようにどうあっても和解できない関係もあったかもしれない。だが、それでもちゃんと話せば取り返しが付かない事態に発展することも避けられるし、手を取り合うこともできるのかもしれない。
なんにせよ、一言言えるとすれば、この場にいる面々は理想を持っていても聖杯に願うものは持っていない。それは、もう願いが叶っているからではなく、願いとは自分の手で掴み取るものだと知っている

から。

兵藤一誠は約束していた宴を開き、彼の聖杯戦争は、こうして幕を下ろした。

だが、彼の戦争はまだ終わらない。

ドコーン！

「な、なんだ！」

「この気配・・・！サーヴァントです！」

即座に臨戦態勢に入る英雄、反英雄たち。一体何処の愚か者だ。如何に酒が入っているとはいえこの場には英雄の中でも上位陣ばかり。

騎士王アーサー、光の御子クーフーリン、魔剣士佐々木小次郎、雷鳴の大戦士ヘラクレス、戦旗の聖女ジャンヌ。

裏切りの魔女メディア、ゴーゴン三姉妹メドゥーサ、調和なす異形兵藤一誠、薔薇の皇帝ネロ、叛逆の騎士モードレッド、傾国の妖狐玉藻御前、鮮血魔嬢エリザベート。

たとえ、侵入者がギルガメッシュであっても一蹴できる戦力だ。いかなるサーヴァントだろうと敗北などありえない。

全員はある種の余裕を持って武装し、表に出る。そこには、想定外の代物が待っていた！

「くははははは！流石は星の開拓者、平行宇宙の移動もたやすいな！」

「はっはっは！私の船で越えられない海はないってことだね！」

アインツベルンの城上空に浮かぶ黄金の鹿号。その上で腕を組むのは征服王イスカンダルとその副官フランシス・ドレイクだ。

さる聖杯戦争で優勝し、受肉を果たしたイスカンダルは、嘗ての敗戦を喫した一誠に再戦を挑むべく、こうして戦力を蓄え平行宇宙からアインツベルン邸に進入してきたのである。

とはいっても、当然戦力はフランシス・ドレイクだけではない。彼女は非常に強力なサーヴァントだが、彼女だけでヘラクレスに対抗できるとは思えない。

「くははははははは!!!滾る滾る!!血が!!肉が!!孫悟空の弟子よ！さあ、再戦といこうではないか！」

魔拳士李書文。嘗て、月の聖杯戦争で最も一誠を苦しめたサーヴァント。

時の果てでイスカンダルに勧誘された折、一誠の軍勢と戦えると聞いて喜び勇んで参陣した。無論、受肉済みである。

「なるほどな、確かにいるぜ、ヘラクレスが！」

イスカンダルにとって、最も頼もしき援軍トロイアの英雄アキレウス。

ギリシャ最大最強の英雄の座を駆けて、同じ師に教えを受けた、後輩に当たるヘラクレスと戦うためにこうして黄金の鹿号に乗船した。当然、受肉済みである。

「ふむ、なるほど・・・」

幽鬼のような白い肌、黄金の鎧を身に纏うのはインド屈指の英雄カルナ。

己のマスターがイスカンダルに心酔し、その結果彼はこうしてイスカンダルの幕下に加わっている。一応言うが、受肉済みである。

「・・・・」

無言で大地を見下ろすのは、不死身の竜殺しジークフリート。
聖杯戦争の折、縁を持ったカルナが参陣すると聞いて自らも参戦すると決めた。まあ、受肉済みである。

「分かっていますね？あそこにいるモードレッドをとっ捕まえます」

黄金の聖剣を構え、狂気を瞳に宿すのは騎士王、アーサーだ。
彼女は、イスカンダルの旗下に加わったわけではない。あくまでも同盟を結んだのだ。
この、いくら望んでも聖杯に至れない現状の原因であろうモードレッドをしばき倒すために、こうして平行宇宙からやってきたのである。
生前従えた、円卓の騎士の2トップを供にして。

「分かりました、我が君」

それににこやかな顔で応じるのは太陽の騎士、ガウェイン。
生前の王の頼みとあれば、断ることなどできはしない。生前貫けなかった忠義を果たすため、太陽の剣を振るう所存である。

「・・・お任せを」

やや陰気な顔で頷いたのは、湖の騎士ランスロットだ。
こうして、ガウェインやアーサーと肩を並べてモードレッドと戦えることを喜びつつ、肝心の王の目が明らかに狂気に染まっているので心底からは喜べずにいた。

「さあ、朋友たちよ！今宵こそ雪辱を晴らすとき！」
「「「然り、然り、然り！」」」
そして、当然のように受肉している王の軍勢。彼らも、黄金の鹿号のほか、フランシス・ドレイクの艦隊に乗り込んでいた。
いつかの雪辱を晴らすべく、彼らも意気高揚である。

多勢に無勢という言葉もあるが、これはいくらなんでも度を越えている。
アインツベルンに集合していた英雄、反英雄たちは、船に乗り込んでいる面々一人一人を捕捉できてはないが、しかしその数と熱気に押されていた。

「仕方ない。早速使うか」

そういって、一誠が取り出したのは一冊の本である。
このカタログは、ランカーズバイブルという名前の新しく作られた宝具である。
一誠には、元々召喚に関する技術は全くなかったが、今度似たようなことがあったときに他のM．A．R．Sランカーも召喚できるように、わざわざ作ったのである。
なお、この宝具で召喚される折は、ディオドラの滅神奥義によってある程度弱体化し、この世界への影響を最小限に抑えるようになっている。
「ディオドラ、来い」
まず呼び出したのは、EXクラスの5位であるディオドラ・アスタロト。最強の空間使いである。
本を開いてページをめくると、ただそれだけで、魔方陣が発生して軍服のディオドラが現れる。
「いきなりだね、どうしたんだい？」

「お客さんだ。結界を張ってくれ」
幸いというべきか、ここは郊外のアインツベルン。無関係の被害は出にくいだろう。とはいえ、万に一つでも周辺被害は抑えたい。結界を張れば、それも安心だ。
「了解。戦わなくていいんだね？」
「ああ、そっちはヴァーリに任せる」
結界を張り始めたディオドラを他所に、一誠は連続で召喚を始める。
こんな、どうでもいいことで、万に一つも戦力を失いたくはない。であれば、最精鋭たる彼らを呼ぶべきだろう。

「くくく！ここが聖杯戦争のあった世界か！たぎるぜ！」
ランキング３位、第二精鋭部隊隊長、白銀派筆頭『白銀の戦龍』ヴァーリ・ルシファー。
「ふむ、アマテラスの子も人使いが荒いですね」
ランキング７位、第二精鋭部隊副隊長、白銀派『龍喰者』サマエル。
「やっと俺の出番だぜぃ！」
ランキング１５位、第二精鋭部隊上級戦闘員、白銀派『金剛の魔猿』美猴。
「今度も楽しくなりそうですね」
ランキング１６位、第二精鋭部隊上級戦闘員、白銀派『聖王剣の担い手』アーサー・ペンドラゴン。
そのほか、神喰狼フェンリル、『魔源の禁龍』アジ・ダハーカ、『原初なる晦冥龍』アポプス、『三日月の暗黒龍』クロウ・クルワッハ、『大罪の暴龍』グレンデル、『霊妙を喰らう狂龍』八岐大蛇。これらＡクラス１０名に加えて、巨大化を済ませた戦闘員８名と小型フェンリル２頭、Ｂクラス計十名。
神話一つを滅ぼして余りある、Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓにあって最精鋭たる第二精鋭部隊がこの地に集結した。
相手がいかなる英雄の軍勢であろうと、この怪物の群勢を相手に生き残るなどありえない！

「やれやれ、俺も行くか」
「まさか、こんな大仕事になるとはね」
最初からここにいたヘラクレス、ジャンヌも臨戦態勢をとる。

聖杯戦争は終わっても、戦争は終わらない。なるほど、確かに人は進歩していないのかもしれない。

「お前等、この場はあいつ等に任せろ。こんなつまらない戦いで死ぬなんてありえないからな」

今にも飛び出しそうだったランサーやアサシンを抑えて、兵藤一誠は命運を第二精鋭部隊に委ねる。彼らは、こと暴れるという一点においてのみ圧倒的な力を発揮する。
間違いなく、一人の損害も出さずに済むだろう。

「さあ、征服王。3度目の勝負といこうか」

「ほう、これだけの怪物を従えるとはな・・・ますます気にいった！」

英雄の軍勢と、怪物の群勢が、今このアインツベルンの森で激突する！

イリヤ「他所でやれ！」

激突する！

おまけ

アインツベルンに帰還した切嗣とアイリスフィール。
その手には、あるはずのない完全なる聖杯があるというのに、その表情は曇りきっている。
切嗣にしてみれば、人類の救済、恒久平和がこの聖杯でかなえることができないという事実だけで打ちのめされているというのに、その願いそのものが如何に荒唐無稽か、かなえる意義のないものなのか知ってしまった。悟ってしまった。納得してしまった。
結局のところ、聖杯とは、万能の願望器とは、無色の魔力とは鏡のようなもの。手に入れてしまえば自分の分というものを思い知ることになるだけだった。
アイリスフィールは、再び生きて娘に会えるという事実と、夫の願いをかなえることができなかったという事実の板ばさみになっていた。嬉しくもあり、悲しくもあった。
勝とうが負けようが、自分は聖杯の器に過ぎない以上、聖杯戦争の終わりは死を意味していた。だが、こうして家族皆で会うことができる。
だが、夫はいつも以上に打ちのめされている。この、救いようのない現実に。その願いを、聖杯として叶えたかった。最初から、叶えることはできなかったのだけど。
そう思えば、切嗣もアインツベルンも、お互いを結果的にだましていたのだろう。切嗣は聖杯を持ち帰るつもりがなく、アインツベルンの聖杯は人類を救済することができない。
このような、それこそ根こそぎ解決するような力技でもなければ、アインツベルンは目的を達成できなかったに違いない。
そう思いながら、アインツベルンの邸に入る。そこで待ち構えていたのは喜びに満ちた愛娘イリヤと、これまた満面の笑みを浮かべたアインツベルンの当主であった。
「ママ、キリツグー！」
「イリヤ・・・！」

本来、ありえなかった母娘の抱擁。それは、まさしく何処にでもあってここにしかない奇跡の光景だった。ホムンクルスの二人は、人間のそれに決して劣らない涙を流していた。

それに混ざっていいのか、躊躇い、迷いつつも一歩足を踏み出そうとした切嗣。この再会は、娘に約束したそれではあるが、破ることが前提のそれだった。果たして、結果的に守ったとはいえこの光景に自分が混じっていいのだろうか。

しかし、そんな彼に抱きついてきたのはイリヤではなく、ご当主であった。白髪の老人は、少年のような満面の笑みで一切の躊躇いなく切嗣の体に手を回し、痛いくらいの力で背中を何度も叩いた。

「いや、本当に良くやってくれた！

心のどこかで、聖杯を勝手に使ってしまうのではないかと貴方を疑っていたが、全くの杞憂だった。

己の目を恥じる。いや、これで千年の宿願は果たされた！

これで、失われた第三魔法は復活する！」

気付けば、枯れる寸前の老人の目には涙が溢れていた。

第二次聖杯戦争の昔から、この日を待ちわびていた老人は、まさに満願成就。聖杯探求の任を成し遂げた外来の魔術師、衛宮切嗣を褒め称えた。そこに、一切の裏はない。心底彼は切嗣に感謝をしていた。

論理的な矛盾、即ちアイリスフィールが健在なことなど、もはやどうでもいい。眼中になく、思考の外だった。なにせこの邸を出るときは空だった聖杯は、完成された聖杯となって確かにアインツベルンへ持ち帰られたのだから。

この老人も、ここまで喜ぶことがあるのか、とうろたえる切嗣。考えてみればアサシンが語ったとおり、この老人も見果てぬ夢である聖杯の完成と、他の魔術師同様根源への到達を悲願としてきたのだ。自分よりもずっと長い時間、磨耗しながら。

もって帰るつもりのなかった聖杯ではあったが、してみれば確かにこの老人こそ最も聖杯を得るにふさわしいのかもしれない。

滂沱の涙を流す老人を抱きしめ返しながら、切嗣はそう思った。全ての願いは等しく貴いなどとは思わない。どう考えても、征服王の受

肉は、世界に混乱をもたらすものだったのだから。
　自分の願いはこの聖杯では叶わなかった。だが、この老人の願いは間違いなく叶う。であれば、この聖杯はこの老いた手の中に。
「これが、冬木の聖杯です」
「うむ、確かに、確かに受け取ったぞ！」
　見た目には普通のスーツケース、実際には幾重にも封印の施された聖杯の容器を、切嗣は確かに当主に渡した。当主はその重さを確かめながら、しっかりと抱きしめた。
「では、宴を開こう！満願成就の祝宴だ！」
　その、老人とは思えないテンションの高さに苦笑しつつも、切嗣はそれに頷いた。
　そして、自分に歩み寄る愛娘ににっこりと笑った。
「イリヤ、いい子にしていたかい？」
「うん！でも、もっと早く帰ってくると思ってたから、置いていかれたのかと思ったわ！」
　その言葉に、胸をうたれる。元々、ここに帰ってくるつもりなどなかったのだから。だから、彼女の心配は、まさしく当を得ていたのだが。
　アイリスフィールも、悲しげに笑う。だが、それは無意味だ。ここに家族がそろっている。誰もに祝福される形で、自分はここにいる。
「これからは、ずーっと一緒だよね？」
「・・・」
　切嗣は、今度こそ本当のことをいうことにした。娘には、今後は少なくとも母親がいるのだから。当主も、聖杯を持ち帰った今イリヤを調整する理由がないし、自分に『万が一』のことがあったとしても無下には扱わないだろう。なにせ、彼にとって自分は聖杯を持ち帰った騎士なのだから。
「・・実はね、また今度外で仕事があるんだ。だから、お祝いが終わったらいなくなってしまうんだよ」
　結局、聖杯に願わないにしても自分の仕事、正義の味方は続けることにした。舞弥は既に次の戦場で自分のためのサポートにはいって

いる。きっと、どんなに頑張っても全部は救えないだろう。１０の内、９はおろか５しか救えないし似ても、歩みは止めない。

火事が好きな消防士がいないように、犯罪が好きな警察官がいないように、かれは戦争が嫌いな正義の味方として、戦争が根絶しないことを知りながら戦い続けるのだろう。愛する妻子の元に帰る為にも。

「え～～～!?せっかくなのに・・・。ねえ、おじい様、ず～っとお祝いしましょう?」

「うむ、少なくとも一週間は、蔵の酒が尽きるまでは終わらぬよ!」

勝者は、聖杯を得るという意味での勝者は、全ての願いが叶わなかった。だとしても、確かに得たものがあることを、あるいは守ることができたのだと再確認した。

こうして、冬木の聖杯戦争は確かに終結した。

御三家の内、土地を提供した遠坂、システムを構築したマキリはともかく、聖杯を作るアインツベルンは目的を達した以上もう聖杯を作ることはない。

よって、遠坂もマキリもこの地の聖杯を使うことはできない。最も古くから悲願としてきたアインツベルンが、その執念ゆえに得ることができたのであれば、なるほど、順当な結果といえるだろう。

とはいえ、遠坂は聖杯戦争の正確な仕組みを後継者である凛に伝えることができなかったため、自然と聖杯で根源に至ろうとはしないであろう。

では、衰退していたマキリは?

老体に鞭打って、最初の聖杯戦争の時代から生きてきた老怪は、その目で嘗て自分たちが求めた聖杯の成就を見て憑き物が落ちたように腑抜けてしまった。

それは、もはや人間としての体裁すら取り繕えていなかった彼にとっては致命的なことであり・・・。いや、こう言うべきであろう。長く戦い続けてきた彼は聖杯の完成をようやく見届け、天寿を全うして

天に召された。
その死に顔は、それまでの悪行など忘れたかのような安らかで穏やかな、眠るような顔だったという。
これに困ったのは、他でもない遠坂葵である。なにせ、そもそも桜は希少で外道から狙われやすい優れた資質の持ち主だったからこそマキリへ養子に出したのだ。それが、魔術師であった当主の死によって振り出しに戻ってしまった。
断腸の思いだが、またどこかへ養子に出すしかない。だが、どこに？葵には、魔術師の妻としての覚悟はあっても魔術師としての知識も人脈もない。
自然と、唯一の知己であった監督役である言峰神父と、その息子である綺礼を頼らざるを得なかった。
「ふふふ・・・」
参加者にあらずして聖杯戦争の真の勝者、言峰綺礼は以前集めていたワインを楽しんでいた。
肴はない。ただ、この瞼に焼きついたあの光景を思い返すだけで美酒は味わいを増していた。
世の中の大多数は、というよりも第四次聖杯戦争の生還者を除いて、この世界にかの聖書の神が顕現され、この宇宙そのものを光にもどし、冬木が箱舟になったことなど思いもしないだろう。
世界は、再び元通り。だれもが、あの空白の時間があったなど思い至らないだろう。ああ、なんという滑稽な話だ。
滅ぼすのも復活させるのも神の御心のままであり、結局人の営みなどなんの価値もない。これは、彼にとって真理ですらない。証明された事実である。
自分には中身などないと苦しんでいた。自分は己のうちに満たすべき何かを探していた。
今となってはどうでもいいことだ。世の中の大多数には、自分にはない幸せを守る為に、必死でがんばっているのだろう。
そんなもの、何の価値もないというのに。自分は、そんな何の価値もないものを追い求めていたのだ。

そうと分かれば、こんな楽な話はない。いや、こんなに楽しい話はない。そんなものを後生大事に抱えて生きている彼らを思うだけで、そんな彼らの消えてしまったあの終末を思い返すだけで自分は満たされる。

「主よ・・・」

深く、何処までも深く綺礼は神に祈りを奉げる。神は、こうして自分を確かに救ってくださった。信仰を語るには余りにも若い自分ではあるが、こんなにも早く自分に答えを示してくださった。

そして、より明確に自分に答えをくれた彼もいる・・・。

『この光景を、人類の終焉を美しいと思うか・・・。

おれの部下に他人を不幸に陥れてそれを笑う趣味の奴がいるが、そいつに似ているな。だが、あれは人には薦められない生き方だ。

であればそうだな、お前が何かするでもなく、世の中には不幸な奴があふれている。そいつ等とかかわり、それを心の中で笑って、そして労わってやれ。

それだけで、お前は満たされるはずだ。なに、世の中の大概の奴は、救われない奴ばかりだ。無害に振舞っても、愉悦に浸れるだろうよ』

聖職者として生きよ、外道。おお、御心のままに。幸い、こうして自分は何をせずとも手中に玉を得た。

遠坂桜、いや今は言峰桜。彼女は既にマキリで虐待と呼ぶべき修行を受けている。心は完全に癒えることはないだろう。きっと、母親と一緒に生活している姉を羨んで生きていくに違いない。

おお、それを思うだけでも酒がすすむ。彼の言ったとおり、救済された世界とは救済されたいと思わない世界。ようは気の持ちようだ。気付けば、この世は愉悦に満ちている。

征服王イスカンダルの率いるワイルドハント。さながら、英雄を満載したアルゴー号の大艦隊。本来、この地上をたやすく支配するであろう異常戦力。しかし、それを迎撃するはルシファーの末が率いる様々な神話からかき集められた怪物の大群。如何なる英雄英傑の集結した大軍であったとしても、勝利をつかみとることはできるのかどうか。

しかし、まず開戦の火蓋を切って落としたのはこの怪物の大群の中にあって最大級を誇る『青き星からの侵略者』の８人だった。１００ｍ級の人間のシルエットをした昆虫という、怪物の中でもひときわ目立つ異形を、誇示するように彼らは飛び上がる。

「帆船が生意気に空飛んでんじゃねーよ！」

「引き摺り下ろして海に叩き込んでやるぜ！」

「そのまま潜水艦にジョブチェンジだ！」

「いいや、沈没船だ！」

「とりあえず、瓦礫に変えてやるぜ！」

「まずは墜落させてやる！」

「いいや、空中でぐちゃぐちゃだ！」

「船ごとミンチにしてやるぜ！」

本来、彼らはその巨体に見合わぬ速度と俊敏性で持って連携攻撃を仕掛けられるはずだった。だが、この世界で戦うために制限を設けられている彼らは、そこまでの芸当はできない。だが、それでも相手は彼らから見て虫ほどの大きさしかない。蹂躙するには十分であった。

「迎え撃てぃ！」

「さあ、大盤振る舞いだよ！」

しかし、それを迎え撃つは星の開拓者、世界を一周した偉人フランシス・ドレイクの海賊艦隊。そしてそれに乗り込んだ英雄英傑。如何なる異形であろうとひるむことなどありえない。ましてや、率いているのは軍略を持つイスカンダルと嵐の航海者を持つフランシス・ドレイクだ。軍勢を率いる指揮官によって、士気も統率も高い。

カルバリン砲の砲火と真名開放された宝具の嵐が、迫り来る怪物を押し返す。魔獣創造を体の内に宿す戦闘員は、凄まじい再生能力を保

持しているが故にそれを受けても死にはしない。だが、その威力は体勢を崩すには十分すぎた。そのまま墜落していく8人。

この最序盤、怪物を打ち払ったのは英雄であり、打ち払われたのは怪物であろうか。否、それは余りにも彼らを侮っているとしか言えない。元々、彼らにとって魔獣創造の禁手の力など後付されたもの。本来の彼らは、その単純な能力を生かした連携こそ本分である。当然、この事態も作戦のうちだった。

「あ～れ～」
「や～ら～れ～た～」
「バイバイキーン！」
「あべし！」
「ひでぶ！」
「きゃ～！」
「暴力はんた～い！」
「・・・なぁんちゃって！」

突如として落下を始める大艦隊。操船するライダーは、下方への落下という異常事態に大笑いする。まるで、大波に揺られていたあの時のようだ。

「はっはー！こりゃあ一本取られたね！」

本来空を行くものではない帆船にとって絶対の死角、船の底には肉眼で確認できるほど太い魔力で強化されているオオミノガの糸が接着されていた。むろん、全ての船にである。

そしてその船に接着されている糸は、当然のように落下している怪獣8体に固定されていた。戦闘員は自分たちへの宝具の嵐を目くらましにして、この作業を終えていたのである。

如何にスペインの無敵艦隊を殲滅した海賊船団とはいえ、その巨体を支えられる道理はなく、アインツベルンの森に向けて落下せざるを得なかった。

「一旦解除するよ！」

この船は、全てライダーの宝具である。出すも消すも思いのままである。よって、このまま地面に落下して損傷を受けるよりは消したほ

うが良いとの判断であった。
むろん、搭乗員たちはみな英雄英傑。空中に投げ出されたぐらいではなんの支障もない。というより、どのみち騎兵や弓兵以外は、『上陸戦』をするつもりだったのだ。少し予定が変わっただけである。
かくて、勇壮に英雄を満載していた艦隊は一旦姿を消した。乗り込んでいた英雄たちは、各々のやり方でアインツベルンの森に着地していく。
それにしても、こうして船から下りてみればその数には面食らう。十数万に及ぶ英雄の軍勢。それは、森の中を埋め尽くさんばかりだった。奇しくも、本来の第四次聖杯戦争においてはここアインツベルンで初めて姿を晒していた『王の軍勢』は、こうして受肉してこの地に降り立ったのである。
「２０ちょいであの数を相手にするのか。正直物足りないぜぃ」
しかし、兵藤一誠にとって最精鋭たる第二部隊の面々にとって、この程度は苦境の内にも入らない。特に、美猴、アーサー、ヘラクレスにとっては生ぬるいとすら言えるだろう。
なにせ、神話間戦争においてはフェンリル３頭という助太刀はあったにしてもインド神話丸々一つを相手どったのである。そのときを思えば、相手は弱兵でありこちらには邪龍もいる。むしろ、どれだけ戦えるのか心配になるほどだった。
「まあまあ、あれはあれで楽しめそうじゃないですか」
さて、森にまぎれた数万の兵。第二部隊は如何にして対処するのか。
邪龍の群のブレスで森ごと焼き払うのか、巨体に物を言わせてそのまま蹂躙するのか。いずれにせよ、その手管には事欠かない。
「さっさと済ますぞ。こっちはまだメシもろくに食っていないんだ」
いいや、ヘラクレスが『ヘラクレスの筋力』で解決する。
「地球投げ！」
アインツベルンの広大な森。その半分以上をヘラクレスは地盤ごとひっくり返す。いつかみせた、固有結界そのものを破壊した力技だ。

その、ひっくり返された地盤は、その上に乗っていた英傑たちをひっくり返しながらあらかじめ展開されていたアインツベルンを覆う結界に激突して止まる。

水平だった地面は、結界に沿う形で垂直になり固定された。これが、普通の軍勢ならばこの一撃でけりが付いたであろう。だが、あいては英雄英傑。このままで済むとは思えない。

もとより、数という一点において英雄たちに第二部隊は大きく劣る。こちらは大将である一誠と、その友人を守る義務があるのだ。このまま、陣形を整えさせずに征服王の首を取るべきだろう。

「おっさきー！」

「おいおい・・・先に行くなよ・・・」

「待ってください。私は二人より足が遅いんですから」

第二部隊の中では特に小さい三人は、めくれ上がって露出した地盤の上を駆けて行く。それに負けじと、怪物たちも雄たけびを上げて突き進んでいく。

当然、地面に埋もれた英傑たちは、それをただ待つわけではない。垂直に立った地面に亀裂が走り、その中から馬3頭引きの戦車が飛び出してくる。もちろん、アキレウスだ。英雄の中でも、随一の知名度と実力を誇るこの男は、怪物にも英雄にも恐れはしない。誰よりも英雄らしく生きるこの男は、天変地異にも興奮を隠せないだけだ。

「流石は、主神の仔！早々に楽しませてくれる！」

その戦車は、駆けて来る三人の中でも特に大柄な、すなわちヘラクレスに向けて突撃する。さあ、どちらがより優れた英雄か、雌雄を決しようではないか。

しかし、突撃してくるものがアキレウスとあっては他の二人も黙ってはない。いや、とくに反応したのは闘仙勝仏の子孫美猴だ。共に、相手こそ違えど軍勢を相手に大暴れした英雄である。矛を交えたいと思って当然だろう。

「まあまあ、俺の相手もしてほしいぜぃ！」

如意棒を振り回し、突撃してくるアキレウスを戦車ごと地面にたたきつけた。突然伸びてきた棒の一撃に混乱しつつも、戦車から投げ出

されつつ体制を整えるアキレウス。その目には、怒りよりも歓喜が渦巻いている。

「孫悟空か！話には聞いていたが、本当にいるとはな！だが、今日はヘラクレスと戦いに来たのだ！」

「つれないことを言うもんじゃないぜ。せっかくのお祭りなんだからよ！」

棒と槍をぶつけ合う両雄。能力の制限されている美猴は、技量でもって大英雄を打ち倒そうとするが、神の血を宿さぬものに、アキレウスは打倒できない。その唯一の弱点、踵を除いては。

とはいえ、アキレウスもまた美猴に有効打を浴びせることはできない。金剛の魔猿は伊達ではない、その肉体の強度は、ヘラクレスに勝るとも劣らないのだ。加えて、膂力はともかく敏捷性においてはヘラクレス以上。伸縮自在の如意棒で、アキレウスを近づけない。

だが、孫悟空が相手とあればこの男が黙っているわけもない。美猴は、自らのもつ仙術のスキルによって、接近してくる穏行を見破った。

「何もんだ！」

「カカカカカカ！」

横薙ぎの一撃をくぐって避けるのは、中国拳法史上随一の使い手とされる李書文である。アサシンとしての若い姿ではなく、老成した姿で槍を構えていた。

相手は、憧れの英雄孫悟空。当然のように自分の圏境を見破ってきた。当然であろう、あいてはあの孫悟空なのだから。如何に人間の域を超えた魔技圏境も、相手が人間でなくばできて当然の業である。

それが、嬉しくてたまらない。イスカンダルにとってアキレウスやヘラクレスがヒーローならば、李書文にとって孫悟空こそヒーローなのだ。

「李書文。龍がいると聞いていたが、孫悟空がいるとなれば話は別。さあ、相手をしてもらおうか！」

「神槍李か！近代の英雄じゃねぇか！そんなのもいるのか！」

「そっちは任せたぞ！俺はヘラクレスを！」

アキレウスは、既にこちらに背を向けて走っているヘラクレスを追

う。ヘラクレスは、こちらの大将を狙っているようだが、そうは行かない。戦車を起こして追跡しようと試みる。

だが、その前にはアーサーが立ちふさがっていた。

「さて、不死身の英雄をこの剣は切れるのかどうか・・・」

獰猛な笑みを浮かべて、アーサーはコールヴランドを構える。神の祝福を受けているコールヴランドならば、その神秘ゆえに神に限りなく近い体を持つアキレウスをも両断しうるかも知れぬ。いや、してみせる。

だが、そんな彼を突き刺すような殺気が襲った。同時に、おおきく吹き飛ばされてきたヘラクレスがアーサーのすぐ脇に着地した。体に傷はないが、剣で斬られた様な跡がある。

「・・・貴方の相手は私だ、『アーサー』」

「アロンダイト!」

その騎士は、黒い鎧を身にまとい、聖剣を手にこちらを睨んでいた。その正体は、間違えるはずもない。円卓の騎士において最強と謳われた完璧なる騎士、ランスロット!

「これはこれは・・・」

「貴方を、王の前には立たせない」

3対3で対峙する英雄たち。

中国拳法史上随一の使い手李書文と、闘仙勝仏の子孫にして金剛の魔猿美猴。

多くの騎士が集った円卓にあって完璧とたたえられた騎士ランスロットと、アーサー王の子孫であり聖王剣の担い手アーサー・ペンドラゴン。

そして・・・。

「ようやく、こうして立ちえあるな」

「・・・アキレウス殿か」

トロイアを駆け抜けた不死身の英雄アキレウスと、ヘラクレスの転生体にして雷鳴の大戦士ヘラクレス。

本来出会うはずもない彼らは、こうして夜の荒れた大地を戦場として敵として対峙していた。

だが、その風景は突如として色を変える。晒されたばかりの地盤は砂地に、結界に覆われた森は炎天の空に。すなわち世界の改ざん固有結界である。

これはむろん、イスカンダルと彼に率いられた軍勢の固有結界『王の軍勢』である。全ての英雄が受肉してここにいる今、サーヴァントの連続召喚に意味はない。だが、垂直になってしまった地盤から抜け出ることはできたし、なによりもここは昼である。

「征服王よ、ご助力感謝する！」

太陽の騎士ガウェインは、聖者の数字によって昼には3倍の性能を発揮する。そして、その宝具転輪する勝利の剣によって、邪龍の群を打ち払う算段だ。

当然、これでけりが付くとも思えない。だが、有効打を与えることはできるはずだった。しかし、それでも甘い考えといわざるを得ない。怪物の郡も侮られたものだ、このようなまやかしの太陽など、食い尽くすなどたやすいこと。

突如として、自身を祝福していた聖者の数字の力が消える。動揺するガウェインは空を仰いだ。そして瞠目する。日食だ、大地を照らす太陽はその姿を隠しつつあったのである。

本来、日食は天体の動きのよって起こる必然の現象だが、心象風景を具現化する固有結界の中においてそれが起こるなどありえない。『そのような力を持つ者』がいない限り・・・！

はっとして、邪龍のうち一頭を見る。そこには、いたのだ。太陽を喰うとされた、エジプトにおいて日食の原因となる龍が！

「太陽なんてだいっきらいだぁあああああああああああああ！」

エジプト神話より、闇と混沌を象徴する『原初なる晦冥龍』アポプス。太陽神ラーの敵対者である彼は、その能力で固有結界の内側を限定的に日食させたのである。

他人の心象風景に介入するとはなんという無茶苦茶な力だろう。とはいえ、これでは結界の意味はほとんどなくなってしまった。無駄な魔力消費を抑えるべく、征服王は結界を解除する。

とはいえ、土砂に埋もれていた面々も復帰し、軍勢は陣形を整えていた。ここからはこちらが攻める番である。
「ふむ、太陽の敵対者か。なるほど、それであれば俺が相手をするのが道理というものだ」
そういって、一歩足を踏み出したのはインド神話屈指の大英雄、この軍勢の中でも抜きん出た力をもつ太陽神スーリヤの息子カルナである。その肉体は、太陽の光でできた鎧で覆われ、夜の戦場を照らしていた。
それを観て、アポプスは怒りの声を上げる。たとえ神話が違おうと、太陽は彼の敵である。生かしてはおけない。
そんな彼の脇に、竜殺しの英雄ジークフリートが無言で並び立つ。太陽の敵対者に太陽神の息子が挑むのが道理ならば、邪龍を討つのに竜殺しがその剣を振るうのも道理だ。
その頼もしさに、頬を緩めるカルナ。だが、それだけではない。
「夜とはいえ、このガウェイン、邪なる者に決して遅れは取りません！」
「カルナ。貴方の槍は強力ですが、一度きりなのです。ここは私たちが！」
三つの聖剣が真名を解放し、唸りを上げる。標的はもちろんこちらに進撃してくる邪龍の群だ。
「『約束された勝利の剣』！」
「『転輪する勝利の剣』！」
「『幻想大剣・天魔失墜』！」
その名を知られた聖剣の三重奏。それは圧倒的な火力で怪物の群に接近し・・・。彼らの放つブレスの土石流で相殺された。
渾身の一撃が相手に傷一つつけられなかった事実に、さすがにうろたえるセイバー達。とはいえ、向こうもこの結果には驚いているようだ。もちろん喜んでいる。
ドラゴンたちにとって、力こそ全て。生態として、人に害をなす彼らは、全力でこちらを蹂躙するために突撃を再開してきた。
この世界で戦うために、その能力を制限されているとはいえ邪龍の

その能力は非常に高い。５頭もいれば、英雄が１０万いようとも楽に押しつぶせる。

加えて、こちらには神話を滅ぼす神喰狼フェンリルが三頭もいるのだ。

ブレスを吹くわけでも、特別な力を持つわけでもない彼らは、ただその巨体に備わった爪と牙で、風のように駆け抜けながら軍勢を蹂躙していく。その背には、旗を掲げたジャンヌとそれを守る戦闘員８人の姿があった。

さすがに、１００ｍ級のまま戦闘を続ければ仲間の邪魔になると判断した彼らは、人間の大きさに戻り自陣で最も弱いジャンヌの援護と、彼女からの強化を受けるためにフェンリルの背に乗っていたのである。

無論、その意図に気づかないジャンヌではない。既に、彼らは聖剣創造の鎧で武装され、その力を増していた。

とはいえ、英雄の軍勢もさるもの。一人、また一人とフェンリルたちにしがみついていく。それを、戦闘員やジャンヌは引き剥がしていった。

数が数であり、質も高い。弱体化している彼らは、苦戦とはでは行かなくとも楽勝ではなかった。

その光景を、白龍皇の鎧に身を包んだヴァーリと、その副官であるサマエルは空から見下ろしていた。

「死して尚、戦場を求めて戦うか・・・」

「ゼウスの仔も、血気盛んですね」

ヴァーリは戦争が嫌いである。

まだ、強くなる余地のあるものが未熟なまま挑み死んで行くこと、無力な一般人が巻き込まれること。それが気に入らなかった。

だが、この戦場ではそれがない。敵は、熟練の英雄であり、味方は信じるに足る精鋭たち。

「こんな戦場があったとはな・・・。つくづく一誠も人が悪い。こんな戦争なら大歓迎だ！」

歓喜に身を震わせながら、自分も戦場に飛び込んでいく。さあ、誰

が俺を止めるのだ！

「お前の術理は聞いている。屠竜破骨は使わせない・・・」
「おやおや、屠竜破骨だけが滅龍奥義と思われは心外です。お目にかけましょう、震天動地を！」
「ほほう？二重金剛の他にもあったのか、奥義とやらは」
「なにい？お前まだ教わってたのかよ?!この間俺をまっぷっつにしやがって！」
「・・・美猴、真面目にやれ」
「それはこっちの台詞だ、ヘラクレス！」

戦いは、どんどんヒートアップしていく！
さあ、勝つのは誰だ！

蛇足

二十対十数万。数の上では比較にすらなりえず、まして軍勢は全員が歴史に名を刻む英雄英傑ぞろい。

如何にサーヴァントとして機能が限定して弱体化していようと、受肉を済ませた彼らは猛威を振るう自然災害そのものである。

だが、相手はそれさえも凌ぐ怪物の群勢。神話や伝説に刻まれし人類の敵対者たち。如何に、この世界に影響を与えぬよう弱体化を施されていようとも、それでも英雄の軍勢を寄せ付けなかった。

二十の怪物、これに三人の英雄が加わるが、それでも全体は拮抗していた。人数比から考えれば、圧倒的な殲滅力である。

当然と言えば当然だ、なにせ第二精鋭部隊は敵の多いところの投入して暴れまくる以外の作戦運用が難しいからである。

裏を返せば、それだけは無敵の域だ。むしろ嬉々として敵をねじ切っていく。

「ぐぅ！」

「まさか、これほどとは！」

「流石に、そう易々とはいかないな」

グレンデルを相手に、ガウェイン、アーサー、そしてジークフリートが奮戦していたが、３人がかりでも『大罪の暴龍』グレンデルは強敵だった。

強固な鱗、俊敏な巨体。そして残虐性と炎のブレス。どれもが、英雄であっても致命傷に近い。

龍殺しで有名なジークフリートをして、かのベオウルフに打ち倒されたというグレンデルは強敵だった。

「ひゃあはははははは！そうだよこれこれ！こうやってぶちのめすのが楽しいんだよ！」

典型的な邪龍グレンデルは、殴り合い、殺し合いよりも蹂躙を好む。自分が弱体化していることは気に入らないが、相手が自分よりも弱く、適度に抵抗してくれるのであれば十分に楽しめる。

そういう意味では、この戦場はまさしく楽園に近いだろう。逃げも

せずに自分に向かってきてくれるし、その上いくらでもいる。
どれから殺そうか目移りするが、他の邪龍と取り合いになることもない。最高だ、最高の餌場だった。
時折ブレスを吐いて、遠くからチクチク矢を刺してくる輩を吹き飛ばすのも、いじましく抵抗してくる輩を踏み潰すのも、楽しくてたまらなかった。
他の邪龍も同様である。圧倒的な殲滅力、圧倒的な制圧力で軍勢を減らしていく。もちろん、相応の傷を負いながら。
「太陽なんてだいっきらいだぁあああああああああああああ！」
そんな怪物の内一頭に、たった一人で対峙している大英雄、カルナ。
やはり、その実力は群を抜いている。
「凄まじい力だな、太陽の敵対者よ。この太陽の鎧も、その権能で打ち破るか・・・」
カルナの持つ鎧、絶対防御である『日輪よ、具足となれ』は、太陽の光を物質にしたものであり、神々であっても破壊が困難であるとされている。
だが、相手は太陽の敵対者『原初なる晦冥龍』アポプス。その権能は日食、太陽の光を食い尽くすとされた彼の力はカルナの鎧を弱体化させていた。
相性は、お世辞にもいいとは言えない。むしろ最悪と言っていい。相手の攻撃を１０分の１にまで軽減し、かつ受けた傷を高速で修復するカルナの鎧も、今は精々半分程度しか弱められず、傷の治りも緩やかだった。
しかし、相性が悪い。その程度のことなど彼にとっては苦境の内にも入らない。
おおよそ、常人ならば世のすべてを恨むであろう彼の境遇は、決して幸運に満ちたものではなかったし、その結末も同様だった。
だが、それでも彼は自分の人生で悔やむことも呪う事もなかった。
それは死後も同様である。
そんな彼が、これだけ頼もしい味方に背を守られつつ、たった一頭

の龍を相手にするなど、むしろ幸運と言っていいだろう。
「お前が太陽を憎むのは当然だ。だが、俺も太陽の威光を背負うもの、父の名を汚さぬ為にも引けぬ」
神すらも打ち倒しうるという槍を手に、カルナはその卓越した技量と膂力と耐久と、全身から吹き上がる太陽の炎と不屈の精神を持って邪龍を押し留めていた。
そんな彼に、もちろん援護をしないなどありえない。英雄たちは案山子ではない、その弓矢で槍で魔術で、彼を援護することはできた。
だが、それは実際にはされなかった、何故か？単純に、彼らにその余裕がなかったからである。
怪物の中でも、邪龍にあらずとも最強に近い、神々を食い殺したとされる狼が戦場を駆け抜けていたからである。
北欧に語られし神話の終焉の狼、フェンリル。及びその子供である2頭の魔狼、彼らは地上をかける流星の様に英雄たちを食い散らかしていた。
不死身の英雄がいるのであろう、頑強な英雄がいるのであろう、俊敏な英雄がいるのであろう。
だが、神霊には及ばない。そして、それを食い殺すとされたフェンリルには尚及ばない。如何に、弱体化していようとも、だ。
しかし、それは英雄たちがあきらめる理由にはならない。無数の鎖が、数多の矢が、疾走するフェンリルたちに降り注ぐ。死をの恐れぬ勇猛な戦士は、弾丸の如き巨体にしがみつき、その体に剣や槍を突き立てていた。
巨象を打ち倒さんとする蟻の群。だが、それを侮辱と見るのは蟻と勇者、双方への侮辱だ。軍隊蟻は獅子をも打ち倒し、勇者は龍をも打ち倒す。
どれだけの犠牲を払おうと、いつかは狼をも押さえつけ、捕縛していたはずだ。
「「「「「「ヒャッハー！」」」」」」
その背に、無敵の怪物が最も信頼する兵士がいなければ。
彼らは、雨あられと降り注ぐ弓矢、投槍、魔術を己の武器と五体で

打ち払う。狼と比べれば、遥かに軟弱な体で、それでも狼を守っている。

彼らは、狼に喰らいつく勇猛な勇者たちを、歓喜でもって迎え撃つ。

狼に比べれば、例えようもなく弱い牙で、それでも狼を守っていた。

「オラオラオラオラ！」

「無駄無駄無駄無駄！」

「キャモーン！」

「ボラボラボラボラ！」

「アリアリアリアリ！」

「ドラァーーーーー！」

「イヒヒヒヒヒヒヒ！」

「ウッヒャー！」

チンピラの本能が叫んでいる、この戦場は死の危険に満ち満ちていると。

相手の戦力は、明らかに一人一人が自分たちと互角かそれ以上で、百メートル級の怪物になっていなければ死のおそれがあると。

もしも、狼の背から落ちれば、即ち敗北であると。

「「「「「「無賃乗車はお断りだぜ！」」」」」」

だが、戦闘員としての誇りがそれを無視する。

バグズのメンバーとして、アネックスの戦闘員として、Ｍ・Ａ・Ｒ・Ｓの上級戦闘員として。

艦長に『宝具』として認められた『忠実無双の無法者』としての誇りがそれを絶対に許さない。

初めて白龍皇を目の当たりにしたとき同様に、彼らは死のスリルを楽しむことはあっても、本能に従い引き下がることはありえない。

彼らの行動を決めるのは、経験と実績による『兵士の本能』からくる判断だ。８人の、誰一人さえも寸分さえもたがえることはなく、その直感は意識や視界を共有しているが如く連動していた。

戦場を駆け抜ける３頭の狼の背を、時に飛び移り、時に離脱し、時にしがみつき、ギリギリの綱の上を、薄氷の上を、根拠のある確信によって全力疾走していた。

あるいは、狼たちも同僚である戦闘員とのランデブーを楽しんでいるのかもしれない。あえて複雑に蛇行しながら戦場を切り裂く狼たちは、その軌道を複雑に変えて、背中の戦闘員達と連携していた。

そして、それをサポートするのは戦旗を掲げし聖女だった。流石に、彼女には狼の背を飛び移るほどの度胸も技量もない。だが、その旗で戦闘員に加護を与え性能を向上させることができていた。

「この旗を恐れぬならば、さあ、かかってきなさい！」

甚だ不本意で、非常に不愉快だが、やはりこの８人は最高の兵隊だ。即席の連携ながら、３頭の狼と自分をほぼ完全にフォローしている。

チンピラとして戦場を駆け抜けてきた直感は、自分にさえも適用され、こちらの意図をくんで最善の答えを先回りしてこなし続ける。これが全部勘だというのだから、笑えない。

とはいっても、流石に数が多すぎる。如何に兵が優秀で、騎馬が怪物でも捌き切れる自信がない。現に、既に何本か矢が刺さっている。

この程度では大したダメージではない。だが、それでも英雄の軍勢を相手に、自陣で最も弱いであろう自分が凌ぎきれるとも思えなかった。

「くははは！さあ、大将首は此処だぞ！怪物の長は俺だ！」

しかし、その不安を、夜の闇を染め上げる白銀の輝きがかき消した。

「・・・こっちの大将も、本腰を入れ始めたわね」

戦場全体に、魔力弾の雨が降り注ぐ。それは、魔王の血を継ぐものの圧倒的災害、対軍の魔力攻撃だった。

無論、英雄の軍勢も無抵抗ではない。自陣を攻撃するおそれがいない以上、空中に陣取ったきらめく白銀の鎧に攻撃が殺到する。

いずれもが、対人であれば必殺。対軍であれば千人を薙ぎ払う、圧倒的な攻撃の群だった。

だが、その何れもが、白銀の鎧に近づくたびに勢いを衰えさせ、届く前には消えてしまう。

「ははははは！命知らず、大歓迎だ！」

天かける騎兵隊が、半減の龍をも恐れず突撃を仕掛ける。それを、自陣最強の怪物、戦龍が迎え撃つ。

戦車であれ、騎兵であれ、その悉くが伝説の勇者たち。ヴァーリの圧に屈することもなく、勇猛果敢に大将首を目指して突貫する。

「半減流星群！」

それは、半減の力を凝縮し消滅の域にまで高めた龍の力の弾丸。無数の流星となったそれを、戦場の空に降り注がせる。

弾丸さえも迎撃するほどの精度を持って放たれたはずのそれを、騎兵や戦車は縦横無尽の軌道で避けていく。

さながら稲妻のように、或いは流水のように、もしくは木の葉のように、各々が各々、圧倒的技量でもって死の流星をかいくぐりながらその上でヴァーリに接近する。

震えるほどの歓喜がヴァーリを駆け巡る。誰もが精兵だ。誰もが強者だ。誰もが狂人だ。自分の首を求めて襲い来る彼らは、正真正銘の大馬鹿野朗共だ！

自らも空中機動しながら、縦横無尽のドックファイトを繰り広げる。戦車に乗り込んだ弓兵が、遊牧騎兵が矢を放つ。その一つ一つが自分の命を目指して殺到する。

半減流星で相殺しつつ、機動力で振り払う。こちらの動きを先読みし、眼前にまで接近する矢まで存在する。それを拳で打ち払いながら、魔王の血筋である青年は、歓喜の咆哮を上げる。

「もっとだ、俺の命には届かないぞ！」

地上から放たれる魔術攻撃、それも先ほどまでと違って空中戦のフォローに注がれていた。よほど優れた指揮官がいるのであろう、騎兵隊、戦車隊の前進を阻む流星にのみ絞って相殺して消えていく。

半減流星を相殺すること、それ自体が瞠目すべきことだ。白龍皇の力を極限まで凝縮した星々は、悉くが宝具の真名開放に勝るとも劣らない。命中して打ち消すなど、よほどの技量がなければ不可能に近い。

そして、ついに複数の戦車が最高スピードを維持したまま突撃の姿勢に入った。轟音、その威力は耳に入るだけで明らかだ。直撃は確実

に大ダメージだろう。それを味わいたくもある。
だが、自分は怪物の長。であれば最高の絶望でもてなさなければならない！
「三下では、触れることもできんぞ！」
全速力での、渾身の突撃。それが白銀の鎧に触れるや否や、反対に吹き飛んで叩き落される。
白龍皇の力、反射。それは文字通り攻撃を跳ね返す代物。その権能を持って、戦車隊の突撃はそのまま戦車隊に跳ね返った。
近づくことがまず困難、触れることがまず無意味、ダメージを与えるなどどれほどの難業か。まして、倒すなど『不可能』以外の何者でもない。
だが、不可能を可能にしてこそ本当の英雄だ。
半減の流星を物量と幸運によって掻い潜り、無数の砲弾が白銀の鎧に肉薄し、そのまま直撃した。
「なに！」
「あはははは！私に越えられない海なんてないんだよ！」
背後を振り向けば、そこには開戦当初で姿を消していた艦隊がその勇姿を再び見せていた。
不可能を可能にした救国の海賊フランシス・ドレイク。そのスキル『星の開拓者』は、不可能なことを不可能なまま可能にする。
軍艦専門の海賊で知られる彼女は、相手が強ければ強いほど後先を考えずに燃え上がる。
その、無数の魔力の砲弾は、全てではないがヴァーリに直撃してダメージを確かに与えていた。
それが、ヴァーリにとってはたまらなく嬉しかった。
「いいぞ、もっとだ、もっと来い！」
騎兵隊、戦車隊、艦隊。そのすべてを相手に、戦龍は意気高揚。魔王の覇気を持って戦場にその威風を示していた。
そして、もう一人。邪龍の群に降り立った怪物が、敵味方を問わずに恐怖のどん底に突き落とした。

「何故貴様が出てくる・・・邪魔をするな！」
体の震えを隠して、クロウ・クロワッハがサマエルに抗議する。
あらゆる蛇と龍種の天敵である神の呪いを帯びた堕天使にしてドラゴン、ルシファーに匹敵する存在とされた、アダムに知恵の実を与えたサマエル。
彼は、自陣の邪龍にさえも恐怖を与えながらその能力で無数の鎖を生み出していく。
「ふむ、あなた方がのんびりしているので、背を叩きに来たまでですよ」
純粋な龍である邪龍は当然だが、アーサー王やジークフリートを初めとして、龍の因子を持った英雄は多い。まして邪龍に抗しうるとなれば、別段珍しくもない。
であれば、その彼らにとって最強の龍殺しであるサマエルの権能は効果覿面だった。黒い鎖は、抵抗さえ許さずに龍の因子を持った英雄英傑たちを絡め取っていく。
それを、座してみる他の英雄ではない。無論、彼らを救うべく鎖やサマエルに向かっていく。だが、サマエル自身も強大な力をもち、そもそも先ほどまで戦っていた邪龍たちもまた大暴れを再開する。
有力な英雄たちが拘束されたことで、この場の戦場は大きく傾きつつあった。
「ぐ・・・王を救えぬとは、情けない！」
ガウェインは、口を開くことさえできぬ己の主を押さえ込む鎖に幾度となく剣を打ちつけ、そして傷さえつけられなかった。
汚名を返上する機会を得たというのに、王を救うことができぬとは情けなかった。無力を感じつつ、しかし何もできない。
彼の聖剣は、大軍を薙ぎ払うものではあるが、個人を相手にするには一歩劣る。少なくとも、ランスロットのそれと違って王を傷つけずに鎖を断ち斬ることなどできはしなかった。
その、余りにも混沌とした戦場とは少し離れた場所で立ちあう3組

の一騎打ち。それもやはり動きつつあった。
「・・・やる！」
鍔迫り合いから派生する滅龍奥義、震天動地。その術理を全て看破されている道理はない。だが、剣の天才アーサー・ペンドラゴンをして、湖の騎士ランスロットは用意ならざる相手だった。
剣のみと向き合う求道家アーサーの技量はきわめて高い。だが、相手は木の枝さえも武器とする騎士の頂点。その技量も、背負っているものも、アーサーをして圧倒できなかった。
圧倒できない以上、基本的な剣と剣の勝負になる。それは、たまらなく刺激的で美酒のように心をとろけさせる。
月の聖杯戦争で一誠が書文との戦いで感じていた混じりけのない歓喜を、アーサーは一瞬どころか永遠に近い時間味わい続けていた。
相手は騎士王を裏切ってしまった騎士。その心中は如何に。
憂いがあり、悔いがあり、嘆きがあり、苦しみがある。それらが、剣に乗り移って自分への闘志になっている。迷いだけはない。それでいい。
強い、強い、強い！楽しい、愉しい、嬉しい！
騎士王の聖剣を振るいながら、しかし騎士道とは程遠い心中でアーサーは死域に没頭していた。
対峙するランスロットの心中は、やはり複雑だった。だが、明確に明らかなことは、騎士達が信じた選定の剣を、まるで単なる武器のように扱う男への憤りだった。
王が変わってしまったことの悲しみもある。ガウェインと轡を並べていることに喜びもある。だが、今は憤りが心を支配していた。
「・・・貴様は、その剣にふさわしくない！」
「どうでしょうね。それは貴方には決める資格がない！」
アロンダイトとコールヴランド。ともに、アーサー王伝説に語られし聖剣は火花を散らしていた。
だが、両雄共に体が硬直するのを感じた。サマエルが動いたのである。最強の龍殺しである彼が動いたということは、あの場にいる龍の因子を持ったものが死の危険に晒されていることが明らかだった。

当然そんなことはランスロットには分からない。だが、王の戦地が大きくうねった事は確かだった。胸騒ぎがとまらない。

あそこには太陽の騎士ガウェインがいる。龍殺しのジークフリートがいる。ここよりも、よほど戦力は整っている。だが、それでも尚胸騒ぎがとまらなかった。

「・・・此処までしょう」

興味がなくなった、というわけではないが、剣士アーサーはランスロットから剣を降ろした。

迷いを抱えたものを斬ったところで、それは剣の誉れにはならない。まして、相手が先ほどまで自分と拮抗していたならば。

相手に勝つならば、万全の全力を打ち倒してこそ。高潔な騎士道のそれとは異なるが、それでも尚誇り高い求道の志。

剣士アーサーは自陣がどれだけ窮地に立たされるのかなど考えもせず、ランスロットを素通しすることにした。

「感謝する」

相手の思惑など、考慮にも値しない。もう二度と、己の王を失うわけにはいかなかった。

見逃された屈辱など、その事実の前には吹いて飛ぶ。迷わずに背を向けて、ランスロットは王の下へ駆け出した。

その背中を切るなど、当然アーサーは考えない。だが、周りを見れば同僚の二人も拮抗している。であれば、自分は次の獲物を探すだけだ。この軍勢を率いているであろうイスカンダル。その本陣に向けて突撃を仕掛ければ、強敵にぶつかるであろう。

そんな、余りにも考えなしの思考で、アーサーは敵陣に向けて駆け出した。

自分本位の考えしかしていないアーサーと違い、ヘラクレスは焦燥にかられていた。

自分の制限が効いているからか、或いは相手が強いからか。少なくとも、先日イスカンダルの軍勢を相手にしていたときよりも、目の前のたった一人の英雄に梃子摺っていた。

これでは、自陣で弱いジャンヌを救援できない。他の面々は心配するだけで時間が損するだけだが、ジャンヌだけは違う。最悪死ぬこともありえるだろう。

かといって、目の前の大英雄を相手に背を向ければ、それは即ち自分の死を意味していた。

「はっ！さすがだな、ヘラクレス！」

「そちらこそ！」

足を止めて斬りあっていたアーサーとランスロット。その二人と違い、ヘラクレスとアキレウスは全力でめくれ上がった大地を疾走しながら激突を繰り返していた。

敏捷性を大幅に強化する宝具「彗星走法」を持つアキレウスはもちろん、ヘラクレスも巨体に見合わぬ圧倒的な機動力で疾走している。

狩猟の女神さえ捉えることができなかったケリュネイアの鹿を捉えたとされる英雄の魂を継ぐヘラクレスは、当然の健脚を誇る。だが、あらゆる時代のあらゆる英雄の中でも最も速いとされたアキレウスは尚速かった。

とはいっても、僅差であり、アキレウスも速度で上回ることはあっても圧倒することはできなかった。

大地を抉りながら突き進むヘラクレスに併走しつつ英雄殺しの槍で幾度となく攻撃を仕掛けるアキレウス。

だが、不死身の英雄と称えられたアキレウスをして、あらゆる怪物を裸に近い姿で打ち倒してきたヘラクレスは難敵だった。

『十二の試練』という蘇生の約束された宝具など、このヘラクレスは持ち合わせがない。というよりも必要がない。

ひたすら単純に図抜けて頑丈な体は、英雄殺しの槍を持ってしても肉を貫くことができなかった。

逆に、神殿の柱の如き巨椀による反撃は大地を砕き、アキレウスをして背筋を凍らせるものがあった。

自分以上の神性を持つであろうヘラクレスの攻撃は、アキレウスの不死身性など障子紙同然だ。

しかし、それでも高速機動にかぎればやや上を行く。であれば、こ

のまま戦って機を見出すべきだろう。
アキレウスに焦りはない。だが、ヘラクレスはもう既に我慢の限界を迎えていた。
ヘラクレスに一騎打ちを楽しむ趣味はない。一対一の戦いに長じているのは、一重に強敵を単独で打ち倒し、己の背のにいる仲間を救うためだ。
そんな彼にとって、苦戦しているであろう戦友を尻目に、強敵であろうと一人を相手にし続けるなど論外である。
とはいえ、アキレウスは難敵だ。『勇者の不凋花』を抜きにしても強靭な肉体を持ち、自分以上の速力を持ち、自分の肉体をも貫くほどの槍の技量を持つ。
全く持って、容易ならざる相手といわざるを得ない。
さて、この難敵をヘラクレスは如何にして解決するのか？
「しぃいいいいい！」
「ぐう！」
弾丸の如き全力の突撃。己の槍に全体重を込めた刺突は、ヘラクレスにとっても致命傷になるであろう顔面に向かっていた。
巨体ゆえに小回りの効かないヘラクレスは身を避けることができない。そして、頭部への直撃は確実に損傷となり、そのまま死を意味していた。
自分が継いだ魂の持ち主と並び、ギリシャ神話における最大最強の英雄と称えられるアキレウス。その渾身の攻撃は絶対にまともに喰らうべきではない。
ヘラクレスは、とっさの行動にでた。
槍の穂先を歯で噛んで止めたのである。
「馬鹿な！」
これが、矢ならばまだ分かる。自分も、相手が一流であれ近距離であれ歯で噛んで止めることは可能だ。
だが、槍である。まして自分の全体重を込めた突撃を顎の力だけで受け止めて支えるなど、まして走りながらなど、とっさの行動など絶対にありえない。

如何に相手が巨重であろうと、自分が相対的に軽かろうと、真名を開放していなかろうと、歯で止められていい道理はない。

しかし、それを可能にしてこそ大英雄ヘラクレス。また、これで終わるヘラクレスではない。防御がそのまま攻撃に変わってこそ一流である。

顎の力で相手の全体重を受け止めたあと、そのまま自分の頭を大地に叩きつけながら首の力だけで反り投げをうった。

あまりの異常事態に体を硬直させてしまったアキレウスは、槍を掴んだまま大きく弧を描き大地に叩きつけられてしまった。

逆さまに大地に縫いとめられたアキレウス。両雄にとって、不動の大地は泥同然にやわらかい。強力と強靭を併せ持つ二人の衝突に、荒れた大地はめくれ上がり爆発する。

だが、当然このまま終わるアキレウスではない。なるほど、ここまで化け物だとは思っていなかった。だが、自分の想像を超えていて当然だ。

相手は自分を差し置いてギリシャ最強の英雄とされた大英雄、規格外であってこそであろう。

頭部から血を流しながら、即座に体制を整える。この程度の苦境、即座に逆転してみせる。

しかし、既に状況は詰んでいた。

自分の前世と同じ師を仰ぎ、自分以上の速力を持ち、強靭で強力な英雄を、ヘラクレスは如何に打倒するのか？

ヘラクレスは『ヘラクレスの筋力』で打倒する。

「はっけよい・・・」

アキレウスが体制を整えたときには、既にヘラクレスは『姿勢』を正していた。

伏せていると思うほどに膝を曲げ、体も地面と平行に。片手は地面につき、もう片手も軽く上げているだけ。

その『姿』は静止しているにもかかわらず『勢い』を秘めていた。爆

発寸前の火山の如き、一瞬で最高速度に達し、全体重を叩き込む。
およそ、他の『格闘技』ではありえない、最高速度と全体重を込めた『初撃』。
それは、極短距離しか維持できないが、短距離走さえも凌駕する最速にして最強の打撃。

「・・・のこったぁあ！」

日本の相撲、『ぶちかまし』である。
健脚と巨重。そのすべてを注いだ渾身の一撃。その直撃は、宝具の真名開放さえもかくやという暴力を持って強靭なはずのアキレウスの体を、骨まで砕きながら天たかくまで吹き飛ばした。
だが、まだ終わらない。もとより、ヘラクレスの相手は尋常ならざる生命力の持ち主ばかり。戦闘続行のスキルを発揮するであろうアキレウス、その体に刻まれた爆雷の刻印が、花火のように戦場の夜空を彩った。
「ち・・・流石だな。だが・・・！」
まだ生きている。そう確信しつつも、ヘラクレスは彼に追撃しなかった。自分の勝敗など些事、大事なのは全体が犠牲なく勝つことだ。本陣にアーサーが突撃を仕掛けたことは眼の端で捕らえている。であれば、自分はジャンヌの救援に向かうべきだろう。
戦場を駆けている狼に向けて、再び走り出す。その姿に、一切の迷いはなかった。
かくて、この場に残ったのは『初代孫悟空』の子孫美猴と、神槍李書文だけである。
「カカカカカ！」
「うおりゃあああ！」
共に、中国拳法を操る達人。長物を手足のように自在に操り、互いの命を貪欲に求める。
戦場のことなど完全に忘れて、両名は命の奪い合いに没頭していた。

もとより、李書文に戦場の習いなど思考の隅にさえない。一度の立会いでは一人しか殺さないという、戦争に全く向かない思想を持つ彼は、それでも自分の武を最大に発揮できることを心から喜んでいた。

それは美猴も同様である。もとより、アーサーやヘラクレスと違い仙術など多彩な技を操る彼は、その気になれば間合いを大きく取って遠距離攻撃に徹することも、また置き去りにすることも可能だった。

だが、それは絶対にしない。なぜならば、相手が神槍李だから。これで一歩でも引き下がろう物ならば、これほどの極上を相手に技で遅れをとっていることを認めるに等しい。

これが、邪龍の類ならば多彩な技で翻弄することも戦術に入る。だが、相手は人間でしかも武術家だ。これで、自分が小細工に出るならば全面降伏に近い。いっそ、自害をえらぶだろう。

裸に近い人間が、武で挑んでくるのだ。自分も武で答えるのが礼儀だ。

この混沌とした戦場で限りなく相似した価値観を持つもの同士という奇跡のような邂逅。

愛するように打ち合う、愛を告げるように突き合う。

全身は歓喜し、己の修練のすべてが発揮されている。

己がいままで培ってきた人間を殺すためのすべてが、遺憾なく発揮されている。

それでも殺せない相手が、愛おしくてたまらない。

「これよ！これが『殺し合い』よ！」

「ああ、分かってるぜぃ！」

呼吸さえも惜しむ。酸素さえ不要だ。すべての集中力が相手に注がれ、自分の命さえも思慮の他だ。

言葉も無粋だろう。だが、嬉しくて愉しくてたまらない。全力で走る幼子のように、二人は己のすべてを解き放ち、相手の命を奪おうとしていた。

敵も味方も、誰も彼も、狂気だけが戦場を支配している。

そんな大地に、戦場を左右するほどの力を持たず、しかも狂気から解き放たれた男が参陣していた。

「聖処女よ・・・今参ります！」

キャスターとしてではなくセイバーとして現界し、受肉を果たした彼は遂に平行宇宙を越えて己の守るべき女性の下にたどり着いた。

彼の名前は、ジル・ド・レェ。フランスの元帥を勤めたほどの武人である。

主役

あの『益荒男《ヘラクレス》』は、ひょっとしたら『ヘラの栄光《ヘラクレス》』ではないのかも知れん。

だが、『お前の知る英雄《ヘラクレス》』以上に、『最強の英雄《ヘラクレス》』だろう。

自分を誘った暴君、己の子孫であるとされていたイスカンダルに、そう言われた時はなんの話かと思った。だが、今ならば分かる。確かに、あの男はギリシャ神話最強の英雄ではないのかもしれない。

立ち会ったことで、なんとなく理解できるのだ。あのヘラクレスは、十二の試練を乗り越えた英雄ではないと。

だが、そんなことは心底どうでもいい。

自分に止めを刺さず、仲間を救援するべく狼を追いかけた。それも別にかまわない。

アキレウス自身、戦場を駆け抜けた英雄である。戦場にあって、危機に瀕した友軍を助けようとするのは、戦術的にも心情的にも理解できる。

自分を殺すことよりも、仲間を救うことを優先しただけだ。であれば、筋違いであろう。

問題は、自分が無様をさらしているということだ。ヘラクレスが、自分に止めを刺さないことが問題なのではない。トロイアを駆け抜けた自分が、誰よりも優れた英雄として生きた自分が天を仰いで大地に倒れているなどありえざる恥辱である。

何をしているのだ、自分は。

自分は、英雄殺しの槍による必殺の刺突を噛んで受け止められ、動揺してしまった。動揺してそのまま、首の力だけで槍ごと大地にたたきつけられた。それが、そのまま先ほどの一撃に繋がっている。

相手は、生前出会った誰よりも著名な、自分以上に名の知られている大英雄ヘラクレス。そう名乗っている存在を今までの敵と比べることがありえざることなのだ。

先ほど見たばかりではないか、うっそうと茂る森を大地ごとひっく

り返した『筋力』を。まさしくヘラクレスの柱の再現ではないか。巨大な山脈を登るのが面倒だと、怪力と棍棒で山脈を大地ごと砕いてジブラルタル海峡を作ったとも言われる剛勇無双の英雄。

自分一人の突撃など、首から上だけで受け止められて当然だった。相手は、怪物はおろか自然さえも屈服させる、神に列席を許された半神の大英雄である。

あのヘラクレスが自分の知っているヘラクレスではないにしても、その実力はその名前に全く遜色ない。天地の全てを支え、大陸を動かし、山脈を砕き、多くの偉業を成し遂げたヘラクレそのものである。

そのヘラクレスを、楽に殺せると思った、自分の慢心に腹が立つ。

今、アキレウスは急所である踵は無傷だった。だがそれ以外の、体の末端を除くおおよそ全てが爆炎と雷撃によって焼かれていた。それは、各種内臓器官も含めてであり、英雄であっても即死は免れない致命傷であった。

さすがはアキレウスであろう。その強靭な肉体によってヘラクレスの渾身の一撃を喰らってなお原形をとどめ、戦闘続行のスキルによって命を繋いでいる。他の英雄では、ヘラクレスの一撃で１２回は死んでいた。

イスカンダルの軍勢に参加しているキャスター、中でも医療に特化した面々によって、治療を受けている。おそらく、生来の生命力によって復帰することも不可能ではないだろう。

意識を失うはずの苦痛の中で、治療の邪魔になるであろう恥辱から来る体の震えを抑えてアキレウスは耐えていた。

もとより、アキレウスに潔さなど持ち合わせがない。殴られれば腹が立つし、友を討たれれば許さない。その彼が、自分に恥辱を味わせた相手が今尚戦場で猛威を振るうことなど、許容できはしない。この恥辱は、あのヘラクレスの首を取ること以外では決してぬぐい得ない。

そして、極めて戦術的な事実として、あのヘラクレスを相手にできるのは自分を除いてたった一人である。如何にあらゆる神話や伝承からかき集められた英雄英傑の集ったイスカンダルの軍勢とはいえ、

この星の全ての英雄の中でも十指に入るであろうヘラクレスを相手にはできない。トロイアで自分がそうであった様に、雑兵のように薙ぎ払われるばかりである。

自分だからこそ拮抗できたのだ。例え湖の騎士ランスロットであっても、不死身の龍殺しジークフリートであっても、おそらく数合は持ちこたえるであろうが、それが限界。マスターの魔力に縛られず、全力を出し続けられるヘラクレスは、正に災害である。凡百の英雄では、足止めにさえならない。

そう、星の歴史からかき集められた軍勢の中でも自分と並ぶ半神の英雄、ギリシャ神話に勝るとも劣らぬ英雄を擁するインド神話にあって屈指の大英雄。太陽の光の鎧を父から与えられ、宿敵の父からも神殺しの槍を与えられた、アルジェナに敗れて尚誉れも高き施しの英雄。

カルナだけが、あのヘラクレスを止められる。いや、打ち倒しうるであろう。

ランスロットとの戦いを一旦預けた剣士アーサーは、敵軍の指揮の流れをその経験から読み取り、最も情報の集中しているであろう場所に向かって単身突撃を仕掛けていた。

言うまでもなく、剣士アーサーの得物は聖王剣コールヴランド。その威光は、あらゆる聖剣の中でも屈指であろう。輝きを解き放てば、如何に英雄の軍勢であっても木っ端の如く蹴散らすに違いない。

だが、それは求道家にあるまじき、恥ずべき行為である。そうできるとしても、そうしないことで自分や自陣が不利になるとしても、剣士アーサーには不可能だった。

自分の前進を阻むのは、誰一人例外なく戦場に人生を賭けた古強者ばかり、尊敬すべき先達ばかりである。剣の技で討ち果たさずして、己の術で討ち果たさずしてどうするのか。

あらゆる国からかき集められた英雄たちは、まさしくびっくり箱。世界中を渡り歩いた自分でさえも知らない理合の持ち主たちばかり。おそらく、伝承されることなく失伝したであろうその技は、時を越え

て自分の前に立ちふさがっている。
嬉しいし、楽しい。剣であれ、槍であれ、未知の技術を使いこなす彼らと戦うのはとても楽しい。
求道の剣は、ただ剣であるべきだ。頭から否定するわけではないが、腕を増やすとか、剣の特性を使いこなすとか、そういう雑な話ではない。相手と同じ土俵で、相手と同じ五体で、ただ磨き上げた技を競うものであるべきだ。
そういった意味では、美猴を羨ましく思う。同じ術理であるにしても、神話にあらずして武を極めて英霊に至った人間と戦うのは、さぞや殺し甲斐があるはずだ。
「……ふぅ！」
聖剣の真価をもってすれば、構えた剣と鎧を輪切りにできるであろう相手と、数合剣を交えてから鎧の隙間を狙って首をはねる。
返り血をかわしつつ、槍を構えた兵士に挑み、あえて不利な間合いでの攻防を繰り返して、懐に飛び込み、抜き胴を一閃する。
剣から輝きを解き放つだけではありえない、戦場の歓喜を味わいながらアーサーは敵陣を切り裂いて前に進む。
ふと、空を仰げば自分の直属の上司である白銀派筆頭、第二精鋭部隊隊長、ヴァーリ・ルシファーが歓喜の咆哮を戦場に轟かせていた。
戦場の空は魔力の輝きで花火のように彩られ、轟音は静寂をかき消していく。
彼も、メギドの火を解き放てば結界ごとこの国を焼き払えるであろう。もちろん、一誠は怒るだろうが。
それをしないのは、彼も楽しんでいるからに他ならない。やはり、白銀派は、ヴァーリに従うものはこうでなければならない。
「帝王の突進（シーザーズチャージ）！」
そんな、戦いの機微も分からぬ力技で戦場を駆け抜けていくのは、天秤派のヘラクレスである。彼は、怪物さえも圧倒できる膂力をあろうことか一般の兵にさえ振るい、残酷にも轢殺していく。戦いに生涯

をささげたであろう彼らを、無慈悲に踏み潰していく。
彼も力だけではなく豪快にして勇猛な技の数々を持っているというのに、イザ戦場では力に頼ることが多い。力を否定するつもりはないが、力に頼りきるのはいかがなものか。

「全く、これだから天秤派は」

戦場を切り裂いていくフェンリル、それと合流しようとしたヘラクレス。その巨体は見失うなどありえないが、その速度ゆえに追いつくのは困難を極める。
連絡を取り、集合地点を打ち合わせるのも手であろう。戦場全体の動きからフェンリルの進路を予測し、先回りするのも不可能ではないだろう。
だが、ヘラクレスは『ヘラクレスの筋力』で解決する。

「帝王の突進（シーザーズチャージ）！」

さながらスプリンターのように、マラソンランナーが駆け抜けるであろう距離を全力疾走しながらヘラクレスは敵陣を踏破していく。
自分の目に写る目標に向けて、全力で最短距離を突っ切る。敵ばかりのそれがどれだけ無茶なことか、それは一々口にするべきことではない。
もしも、単独で敵陣を切り裂けるほどの戦士がいるとすれば、それは軍隊の否定に他ならない。人は、強い敵を倒すために武器を持ち、多くの敵を倒すために陣を組む。そして、軍を成して戦術を持って運用されるのだ。
だが、ヘラクレスを名乗ることが許されるこの英雄には、軍というものは甚だ無意味である。
英雄の中でもトップクラスの特性を持つヘラクレスのーーー

「絶牛雷犁熱刀（ダブルラリアット）！」

数多の怪物を打ち倒したーーーネメアの大獅子を棍棒で殴り倒し絞め殺した、クレーテーの牡牛を生け捕りにした、オルトロスや牛の番人を棍棒で打ち殺した、冥界の番犬ケルベロスを生け捕りにした、『腕力』。

「雷我爆弾（ライガーボム）！」

天地さえも揺るがすーーーアルペイオス川とペネイオス川の２つの川の流れを強引に変えた、アトラスに代わって天空を支えた、山脈を大地ごと砕いてジブラルタル海峡を切り開いた、『膂力』

「射殺す百頭（ナインライブズ）！」

多くの師から得たーーーアムピトリュオーンから戦車の扱いを、アウトリュコスからレスリングを、エウリュトスから弓術、カストールから武器の扱いを、そしてケンタウロス族のケイローンに武術を学んだーーー

ステュムパーリデスの鳥を射殺した、再生するヒドラの首を残さず断ち切った、ポセイドンの子アンタイオスを抱え上げたまま絞め殺した、『技量』。

「Δダイナマイト！」

そして神をも恐れぬーーー熱気に腹を立てて太陽神ヘーリオスに矢を射掛け、ヘスペリデスの居場所を求めて水神ネーレウスと取っ組み合い捕まえた、『蛮勇』。

その全てを、ほぼ完全に再現するに至った、『英雄の生まれ変わり』でもなく、『英雄の子孫』でもない、シヴァ神から認められた『神話間

戦争の英雄』。
『サラブレット』を『サラブレット』にする以上の苦難と、成長があった。成長こそ芸術。
『ヘラクレスの魂を継いだ男』は、『ヘラクレス』に成った。
神に最も近い英雄が完成した。

「ビックバンパンチ！」

〃英雄の到達点〃ヘラクレス。

「遅いわよ。なに梃子摺ってんのよ」
「悪い、アキレウスがいてな」
トロイアの大英雄を相手に一進一退の攻防を繰り広げ、隙を見出してからの一撃で辛くも引かせた。そこから更に、千軍万馬の受肉を済ませた英雄の軍勢に傷も癒えぬまま突入し、駆けているフェンリルの背に飛び乗った男。
彼を迎えたのは、戦友からの辛口の評価だった。とはいえ、それは正当な判断である。ヘラクレスは、それぐらいできなければならないのだ。遅いくらいであろう。
「頑丈がとりえのアンタが、そこまで傷を負うとはね。制限がきついの、それとも相手の実力？」
「両方だ、といいたいが、やはりアキレウスは強敵だった。まだ死んでないけどな」
アキレウスが思ったとおり、ヘラクレスにとってアキレウスやカルナ以外の英雄は雑兵同然である。ヘラクレスの肉体は下手な宝具よりも更に頑強であるが、それに傷を負わせたのはアキレウスだけであった。彼の進撃を阻まんとした他の英傑は、障害にさえならなかったのである。
「あっそ、他の二人は？」
「美猴は李書文を相手に遊んでる。アーサーは敵陣に突入したが、剣

で戦っていやがる」
　それを聞いて、思わずジャンヌは空を仰いだ。自陣で一番弱い、サポート型の自分が思うところではないが、一体男集は何をやっているのだ。上空のヴァーリが本気を出せば世界は荒野と化すのでそれは仕方がないが、美猴もアーサーも、その気になればヘラクレス以上に猛威を振るえるはずである。それが、方やたかが近代の達人を相手に技比べ。方や剣士の誇りとやらに熱中している。救いがたいほどの愚かしさだ。
「これだから白銀派は」
「言ってる場合か？」
　呆れているジャンヌをごまかしつつもヘラクレスは、片手でフェンリルの背の毛を掴み、もう片方の手を軽く握り締めた。直後ヘラクレスが駆けていた大地が、雷を伴って爆発する。その近辺にいた兵士たちが吹き飛んでいく。

「ヘビーステップ（大いなる一歩）！」

　殴ったものに印を刻み、任意のタイミングで発動させダメージを与えるヘラクレスの神器。それは、別に手に限定されない。踏みしめている大地に、地雷の如く設置することも可能であるし、かの神話戦争では防御の際にシヴァの拳へ印を刻んでもいた。
　単純ゆえに応用の効くヘラクレスではあるが、やはり攻撃がそこまで広範囲ではない。聖剣の威光、妖術や仙術の類でかく乱して欲しいところなのだが、それは望み薄であろう。
「そろそろ、戦術を変えるわ。向こうも木偶の坊じゃないし、こっちの動きに対応してくるはず。戦闘員は４・４に分かれて、スコルとハティに乗り込んで。フェンリルは３頭とも別行動よ、ヘラクレスと私はフェンリルに……？」
　声が聞こえた。いつか聞いた、つい先日、或いは前世に置いて幾度となく聞いた声が聞こえた。
　いまだ、戦場に轟く邪龍のブレスでもなく、兵士たちの怒号でもな

く。祈りのような声を確かに聞いた。

「糸を！」

「ヒャッハー！！」

直後、違和感を案じた場所を指差したジャンヌ。戦闘員は、即座にオオミノガの糸を戦場の端に向けて放った。そして、それは確かに誰かに命中して繋がった。

「よし来た！」

その糸を掴むのはヘラクレスである。さながら一本釣りのように、彼方の『友軍』を引き寄せた。

そして、糸をつかんではせ参じたのは、やはり……英雄と呼ばれるにたる男であった。

「……お久しぶりです、聖処女よ」

勇壮な装備で身を固めた、フランスの元帥、ジル・ド・レェ。いつか見た、キャスターの姿ではなくセイバーの姿で受肉を済ませてそこにいた。

「久しいですね、ジル。貴方にあえてうれしいです」

揺れる狼の背で、戦争の最中とは思えないほど、厳かに再開する両雄。それを察したのか、ヘラクレスは二人を守る為に拳を振るい始めた。殴った相手を他の敵に叩きつけて、そこから更に爆ぜさせる。地味ながらも、豪快に二人を堅牢に守っていた。

「あの時の約束を、贖罪の機を得るべく、恥を偲んで参上仕りました」

忘れるものか、あの美しい瞬間を。自分の過ちを正し、進むべき道を教えてくれたあの瞬間を。永遠に失われない、絶対の時間を。たとえ、座に帰ったとしても。記録ではなく記憶として刻まれたそれを胸に、ジル・ド・レェはそこにいた。

それに対して、ほんの少しだけ申し訳なさそうにするジャンヌ。彼女は知っている。この場にいる彼は、自分と共に戦った元帥ではない、違う宇宙の同位体に過ぎないと。しかしそれを察したのか、セイ

バー、ジル・ド・レェは言葉を続ける。
「あの後、私は私と共に駆けたジャンヌにお会いしました。やはり、彼女もあの結末を選択したそうです」
ルーラーとして、聖杯になんの願いも抱かないものとして参加していた彼女に、奇跡のようにジル・ド・レェは出会っていたのだ。
「そうですか」
「そして、その上で、貴女にとって私が違うとしても……、やはり貴女は私の過ちを正してくれたのです。であれば、あの約束も……」
「ええ、そうですね。その通りです」
であれば、なんのためらいがあろうことか。ジャンヌは今尚奮戦するヘラクレスを、戦場の怒号に負けじと怒鳴りつけた。
「ここはもういいわ！　貴方は……いつものように一番強い奴を叩きなさい！」
直後だった。太陽の炎が夜の闇を照らし、歓声と共に邪龍が二頭倒れたのは。そして、世界が真夜中の荒地から快晴の砂地に変わったのは。

ヘラクレスは、助けるべき仲間に背を向けて、討つべき敵に立ち向かう。

受肉したカルナは、まさしくインド屈指の大英雄に恥じぬ偉業をうちたてた。すなわち、エジプトに語られし日食を引き起こすとされた邪龍、アポプスを打ち倒したのである。
全身から、太陽の炎を魔力放出するカルナの戦闘能力は、まさしく太陽の化身であろう。それを抜きにしてなおジークフリートと互角。それを全開にできる今ならば、その実力はギルガメッシュさえも認める、最強クラス、破格の大英雄。
インドラから送られた神殺しの槍をアポプスに突きたて、太陽の敵対者を内側から焼き尽くしていく。

「太陽なんて……」

受肉していようと、サーヴァントはクラスによって、その能力を制限されている。同様に、邪龍もこの世界に存在するために多くの制限を設けられていた。だからであろう、神話の時代から力を削がれたカルナが、アポプスを槍の真名開放抜きで此処まで追い詰めたのは。

「大嫌いだぁ……」

聖杯によって歪ながらも蘇っていた邪龍は、魂を残して死体を消滅させる。それは、この場から日食を成すドラゴンを排除したことを意味している。もちろん、そうした伝説を持つドラゴンはもう一頭いるが、しかし彼は別に太陽が嫌いなわけではない。それを発動させることはないであろう。

歓声が上がった。それは、カルナがアポプスを打ち倒したからだけではない。なんとも無謀なことに、八岐大蛇に突貫を仕掛けたイスカンダルが、傷を負っていたとはいえそのまま打ち倒したのである。

英雄たちからの猛攻を受け、最後の最後、怪物としての大暴れをしていた八岐大蛇に最後の一太刀を浴びせたのが、一軍の総大将である。生前敵陣に単独で挑んだというイスカンダルらしい暴挙であろう。

「ふはははは！見たか、余は遂に悲願であった龍殺しを成したぞ！」

猛毒を持った、暴れる邪龍への一撃。それは、蛮勇ではあった。だが、遂に２０近い怪物の内２頭が脱落したのである。軍勢は大きく士気を向上させた。

「我が精兵よ、ゼウスの仔らよ！　みるがいい、邪龍と言えども打ち倒せぬ道理はない！恐れるな、勝利の栄光は我等にあり！」

然り！　然り！　然り！

戦場は、再び固有結界『王の軍勢』によって塗り替えられる。そして、それは太陽が現れることを意味していた。

「はぁぁあああああ！」

聖者の数字によって、3倍の力を得たガウェイン。彼は、人類に知恵の実を与えた堕天使の拘束から己が主を救わんと、鎖に聖剣を幾度となく振り下ろしていた。だが、それでも、それでも一押しが足りなかった。

龍に対する最強の毒であり、呪い。サマエルの毒は、聖剣ガラティーンをもってしても切断することが容易ではない。だが、それを覆すべく生前の業をぬぐうために戦場を駆ける騎士が参じた。

「ガウェイン！　呼吸を合わせろ！」

「ランスロット！　承知！」

湖の騎士、ランスロット。その手にした剣はアロンダイト、担い手を強化する特性に合わせて、龍殺しという性質も持っている。最強の龍殺しサマエルも、堕天使でありながら龍であることに変わりはない。

「「忠義の剣閃！」」

聖書の神の、蛇と龍への憎悪で編み上げられた鎖は、龍殺しであるアロンダイトと聖者の数字による加護を得たガラティーンによって、ついに切断された。

「だれか、王を頼む！」

「他の面々も、今助ける！」

今度こそ、間に合った。生前最後まで忠義を尽くすことができなかった王が、毒によって苦しみながらも息があることに安堵を覚えながら、両騎士は王と同様にサマエルの鎖に捕らわれた龍の勇者たちを鎖から解き放っていく。

「そうですか、私の相手はあなた方ですか」

自分の鎖を断ち切るものが現れた。サマエルは、ルシファーに並ぶとされた力を解き放っていく。それを前にしても、両雄は退く気はない。引けば、衛生兵の元へ連れられていく王が再び脅かされることになる。

「今度こそ……ランスロット！」
「ああ、ガウェイン！」
白と黒の鎧に包まれた騎士は、遂に嘗ての信頼を取り戻したように、神の呪いに立ち向かっていく。
その、極付近でーーー何かが着弾した。それは、人間の肉体とは思えぬほどの神秘と重量感を持った、破壊の権化のような弾丸だった。
「スクランブルダッシュ！」
トロイアを駆け抜けた英雄を下した、ギリシャ神話最大の英雄の魂を継いだ男と……。
「そうか、次の相手はお前か、ゼウスの仔よ」
「そういうことだ、スーリヤの仔よ」
エジプトの邪龍を討ち果たした、インド神話屈指の英雄が激突しようとしていた。
「楽しそうだな、畜生……」
その戦場は、救世の国賊によって宙に浮かぶモニターに映し出されていた。
それを、ケルト神話最大の英雄、太陽神ルーの仔、クーフーリンは食い入るように見つめている。知名度のからみで、日本での実力は彼らに及ばない。だが、アイルランドで召喚されればヘラクレスやカルナに勝るとも劣らぬ実力をこの男は持っていた。
戦車があれば、それこそアキレウスのようにかけだしていたかもしれない。そう思いながら、手にした槍を握っていた。
「アーチャー」

イリヤの屋敷の入り口からこの戦争を観戦していたセイバー、アルトリアはガウェインとランスロットが背を預けあう戦場から眼を背けずに尋ねた。その相手は、当然兵藤一誠である。

「貴方は、彼女に何かを聞かれて、それに応じましたか？」

第五次聖杯戦争に参加したセイバーは、アーチャーとして参加した兵藤一誠と轡を並べて戦った。その折に、アーチャーに理想の王について尋ねたことがある。その答えは、理想の王とは王ではなく救世主である、という残酷な答えだった。その答えが、王の選定を思い直した今のセイバーに繋がっているといっても過言ではない。

もしも、この戦争に参加しているであろう彼女が、アーチャーに何かを尋ねていたとしたら、それは大いに影響を与えていることは想像に難くない。そして、自分とは逆に思想を硬化させているのだろう。

「聖杯による国の救済の、是非について聞かれた」

「貴方は、なんと答えたのですか」

「お前が打倒した蛮族が同じことをしたらどうするつもりだ、過去の改ざんを永延と繰り返すことになる、と答えた」

「ああ、その通りだ……」

反論の余地がないほどに、全く持って正論だった。万能の願望器が本当に万能であれば、過去の改ざんはできるのであろう。それこそ、自分の国を救う事もできるであろうし、あの丘の戦いをなかったことにもできるのであろう。だが、自分が打ち倒してきた『蛮族』が同じことを願うこともできるはずだ。それをされたら、自分は、そして自分を信じて戦ってきた騎士達はどう思うのであろうか。

「私は、愚かでした。切嗣が言ったとおり、私は自分を正当化していたのでしょう」

自分は剣を取り、国を救うべく立ち上がった。第四次聖杯戦争で切嗣が語ったとおり、殺人という行為を正当化して。それは、同じ時代に生きたわけでもない彼には否定されるいわれはないと思った。だが、それは一面に置いては真実だった。少なくとも、聖杯戦争に参加した時点で、あるいは聖杯を求めた時点で自分を正当化していたのだ。

「この手には選定の剣が、傍らには円卓の騎士が。どちらも、諸国の王が求めてやまぬ至宝でした。それでも私は国を救えず、挙句聖杯まで求めてしまった。なんという、恥知らずでしょうか」

その独白を、その場にいた英雄、反英雄、魔術師は黙って聞いていた。怒号と轟音による戦場音楽をＢＧＭに、騎士王の胸の内は穏やかに語られていく。

「私は、王になることで民を救おうと思った。であれば、少なくとも王の剣を抜いた時点で聖杯を求めてはならなかった。『どんな願いでもかなう聖杯』を求めるのであれば、最初から一人で聖杯探求の旅にでるべきだったのでしょう」

王による救済には、多くの犠牲が伴った。敵だった蛮族の死、味方だった騎士達の死、なによりも守るべき無辜の民の死。それらの犠牲の果てに、自分はそれらの犠牲を払わずに救済できる聖杯を望んだ。であれば、今までの犠牲はなんだったのであろうか。

「モードレッド」

「はい、父上」

この場で唯一同じ時を生きた騎士、モードレッドにアルトリアは優しく語りかけ、モードレッドは静かに応じた。

「貴女には、我慢を強いました。許してください」

「いいえ、全ては私が幼かったが故の過ちです」

あの時、モードレッドは王に自分が何者であるのか打ち明けた。それは、国を滅ぼせという母の思惑に反し、同時に王である父親にも不利益な行為だった。単なる、幼い自分のわがままだった。

「貴女が幼いというのであれば、王としてではなく、父として導くべきでした」

モードレッドに王として国を託すことはできない。だが、わが子であると認めたのであれば、抱き寄せて愛を与えるべきだった。公的に無理であればこそ、私的には暖かく愛を伝えるべきであった。そうすれば、モードレッドは道を違えずに済んだはずだった。

「それは違う、貴女は王としてその場で私を討つべきでした」

モードレッドはそうであればと思いつつも、それを否定する。親か

らの愛を求める幼子の理屈で動いていた自分だ、きっと私的な関係では我慢ができず、愛されれば愛されるほどに公的に認められることを望んだはずだ。それは、王としてできないことであると知りながら。

よって、アーサー王の最適解はその場で自分の首をはねることだった。己と同じ顔の騎士をさらし、この騎士は自らに成り代わろうとした、そう宣言するべきだった。顔を隠していた自分である、きっと、誰もが納得したに違いない。

「貴女にとって、私は害でしかなかったのです」

そして、親子とは互いに触れ合う時間で関係を作るものである。それをマスターである兵藤一誠から教わった。血が繋がっているだけで、親として子供を愛せるものか。モードレッドはそれを認められるほどには成長していた。。

「そうかもしれません。ですが昔も今も、私は貴女を憎んではいません」

少なくとも、王としてのアルトリアにとってモードレッドは災厄だった。明確な悪意を持って生み出された傾国の兵器だった。それは確かであろう。

だが、王だったアルトリアは最後までモードレッドを憎むことはなかった。そこには、一切の情はない。無関心という嫌悪よりも尚性質の悪い感情があるだけだった。

しかし、今のアルトリアは違う。国も民を失い、一人の少年を愛する少女であるアルトリアは、目の前の少女に対して償いたいとさえ思っていた。

「いいえ、今の私は貴女の幸せを願っています」

「父上」

「私を貴女が父と呼んでくれるのであれば、私は父としてあなたを守りましょう。たとえ、相手が湖の騎士であれ、太陽の騎士であれ」

魔力で鎧を編み上げ、聖剣を構えて少女は宣言する。それは、過去をやり直すのではなく、今を生きると決めたアルトリアの宣言だった。

「あの日、私の子であると名乗りでた貴女に、後継者であると認めず、

王の器にあらずと断じた、私の過ちを繰り返さぬために」

「バ……バカじゃないの？」

それは今まで黙っていたエリザベート・バートリーの、心底絶句した、呆れゆえに零れた言葉だった。

「そんなこと言ったら、裏切られるに決まってるじゃない！」

全員が、現在を生きる魔術師もこの時代に復活した英雄も反英雄も、一切が沈黙せざるを得なかった。

「貴女、そんなことも分からなかったの？」

王が、父が、幼い我侭。そんな小難しい言葉など一切必要なかった。上司である父親に息子ですと名乗り出た部下が、「お前後継者にシネーから」と言われれば、裏切って当然である。

騎士道も武士道も、全く縁のなかったエリザベートである。その論理は全く完璧であり、恋人である士郎でさえ全く擁護の言葉が出ないほどに正当だった。

そんなことも分からないほどに、王としてのアルトリアは「人の心が分からなかった」のである。

ただ、この親子が和解する感動的場面で言い切られると、もうどうしようもなかった。エリザベート以外、全員が絶句していた。

「おい、田舎妖怪……空気読め」

かろうじて、玉藻の前が突っ込みを入れるのがやっとだった。

熾烈な戦い

「こら、エリザベート」

最も早く現実に復帰したのは、当然と言うか兵藤一誠だった。彼は、自分の使い魔であるエリザベート・バートリーに歩み寄り、角の間の頭頂部をやや乱暴気味に撫で始めた。

「ちょ、なにするのよ！　セットが乱れるじゃない！」

「お前は、淑女としてもうすこし慎みを知るべきだな」

一誠はため息混じりに、エリザベートの首がグネグネと動くほど強く、大きくかき混ぜる。

それは、当然不愉快ではある。女性の象徴である髪を、強引にかき乱されて喜ぶことはまず無い。

だが、娘が父親にされていると思えば、それは決して不快ではない。父親が、自分を優しく叱責しているのだ。そう悪い気分にはならなかった。愛情のある、優しいスキンシップである。

実際、エリザベートは照れてはいるものの、本気で逃げようとはしていない。やや嬉しそうでもあった。ネロや玉藻、モードレッドは羨望さえしている。

「エリザベート、お前の言っていることは正しい。その感性は非常に適切だ。この場では希少で、得がたいものではある」

英雄は、力があるだけではなく行動原理も、時として一般人と大きく隔絶する。

施しの英雄であるカルナなど最たる例であろう、彼の生き様は同等の力を持っていても真似できるものではない。

また、アキレウスもクーフーリンも、短命であることを受け入れて英雄として生きる道を選んだ。如何に名声が後世に残ろうと、太く短く生きることを決断できるかと言えば、それは否であろう。

イスカンダルはオケアノスを目指して無謀なほどに領土を拡大し、アルトリアは人としての幸せを放棄して王としての生き様を選んだ。

李書文も佐々木小次郎も、ただ武を研鑽する人生を送った。

ある英雄は特殊な出生により、ある英雄は呪いを受け、ある英雄は

神々に試された。だが、彼等は常人ならば決して選ばない苦難の道を歩んでいた。

だが、それはあくまでも彼等が一種の狂人であることを示している。凡人ならば選べる選択肢でも、彼等には選ぶことができないし、思いつきもしなかったのだろう。

そして、英雄の誠実で真実の言葉よりも、凡人の虚偽な方便の方がいい結果を出すこともある。

「確かに、アーサー王のモードレッドへの返答は裏切られて当然の言葉だった。それはちっとも間違っていない」

「だったら、どうして貴方は私を怒るのよ」

「言っていることは正しくても、お前が言うことは間違っているからだ」

ようやく、一誠は頭を撫でるのをやめた。すっかりエリザベートの髪は乱れてしまったが、それでも一誠は手を休めない。今度は腰を落してエリザベートと視線を同じにすると、彼女の頬を両手で挟んで固定した。

「お前の真名を始めて聞いたとき、おれがお前に言ったことを覚えているか」

「ええ……『生前のことは知っているが、それをどうこう言うつもりは無い。だから、今後はよろしく』だったわよね」

「そうだ、お前の生前の行状は決して褒められたものではない」

反英雄、エリザベート・バートリー。吸血鬼カーミラの原典とされる、大量殺人鬼である。

処女を拷問して殺し、その血でバスタブを満たし、美容の為だと言い張ったという。

「だが、お前も他の3人も、とっくの昔に裁かれている。であれば、それをおれが糾弾するのはお門違いだ。そう言ったな」

「ええ」

「だとしたら、お前が今言っていることもお門違いだ。歴史の本を読み、暗記するのではなく共感したり感想を持つのは正しいし、賢い。だが、本人を前にしてそれを言うのは、間違っているし愚かなことだ」

他人の失敗を、自分の教訓にすることは非常に正しい。だが、他人の失敗を笑うのは、あるいは口にするのは余計な軋轢を生むだけだ。

「お前は月の聖杯戦争で、ヴラド三世の方が人を殺していると言ったな。それも正しい。軍人として、或いは王としては必要な行為だったのだろう。だが、それはそういう立場の人間の理屈だと言うことも、自覚はある」

自覚、と言ったのは一誠自身の自虐である。少なくとも、千人も殺していないエリザベートである。率いた軍勢の『戦果』や守るべき国民の『犠牲』を思えば、その数は彼女の比ではない。

一誠は、軍を率いて国を守った。それは事実だし、誇るべきなのだと自分に言い聞かせてもいる。だが、戦争は起きてしまった。その時点で、軍隊の最大の機能である抑止力としての機能を果たすことができなかった。それは、決して擁護できない事実である。また、軍人が人殺しであること、そして司令官が殺人を教唆していることも、真実だ。

その事情を細かく知っているディオドラは、思わず頭を抱えた。この司令官は、未だに外交の失敗が、一端であれ自分に責任があるのだと思って、引きずっているのだ。

確かに、一誠には戦争を未然に防ぐ手段を持っていた。だが、転生悪魔でしかない一誠にそれを期待すること事態が間違っていると、純血の悪魔であるディオドラは信じて疑わない。為政者が背負うべきものを、新参者に解決させようとすること、それ自体がおかしいのだ。

「だが、それでも理屈は理屈だ。同じ時代を生きたわけでもなければ、軍人でも王でもないお前にどうこう言われる筋合いは無い。」

一誠は、王であることを完遂したアーサー王を侮辱したエリザベートに対して、それなりに怒っていた。軍人である一誠にとって、王とは尊敬の対象だからである。

一誠は、軍人として自分の戦う理由を王に預けている。それは、社会全体から考えれば非常に穏便だが、しかし考えようによっては思考の放棄とも取れる。

先日のイスカンダルとの邂逅では、彼に王ではないと看破されたの

は、自分の意見を一切言わずに主に仰いだがゆえである。忠実と言えるが、敵味方の決断と言う重要事項を全面的に委ねていた。

嘗て、一誠は暗殺者集団の『王』として己の判断で、救えた命を見殺しにし、必ずしも殺さなくて良かった多くの命を奪った。その折の心労は、当時の彼にとっては胃に穴が開くほどのものであったと言う。

もちろん、そんな彼だからこそ幹部や捜査員、構成員は彼を信じて戦えたのだが、それでも彼は擦り切れていた。だからこそ、友好を語る王に従うことは、彼にとって救いだったのだろう。

自分で決断することの重み。国家という重荷を一身に背負う王への敬意は、一誠にとって不動のものだ。もちろん、王であったとしても許されないことはあると知っているが。

「お前だって、自分の美容法が間違っていたことなんて指摘されたくは無いだろう」

その言葉に、周囲の英雄や魔術師は思わず表情をゆがめた。少なくとも、エリザベート・バートリーの行いの善悪は、間違いなく悪である。それをすっ飛ばして美容法に言及するのは、明らかにピントがずれている。

「……本当に、お肌に良かったのよ？」

「そりゃあ思い込みだ。現代の医学に置いて、他人の血を浴びるなんて不衛生で不健康だ。健康に勝る美容は無い。お前の美容法は明らかにおかしいんだよ。もちろん、今のお前は英霊だからそんな常識には捕らわれないがな」

軍人として、負傷者の手当ての基礎知識を持っている一誠である。本職の医者ほどではないが、血液感染の危険性は知っている。その彼からすれば、拷問や殺人以前に生血を浴びるのは健康上良くない、と思っているのだ。

まあ、一誠は正真正銘の吸血鬼や、人間を捕食する生き物とも交流がある。そんな彼からすれば、処女を食い物にする彼女は、そこまで異常ではないのだろう。

「そんな事言われても……」

ほぼ全ての学問に当てはまることだが、定説と言うものは覆されるものである。

医学と言えば、人間が生きている限り避けられない学問ではあるが、しかし、近代に入るまで明確な根拠も無く間違った医療が公然と行われていた。

それとはかなりずれているが、エリザベートの『定説』は現代では間違っていると証明されているのだ。

「ほら、違う時代の、違う価値観の人間に指摘されても困るだけだろう。だから、お前も違う時代の、違う職業の人間を責めるな。分かったか？」

違う時代であっても同じ職業であれば、あるいは違う職でも同じ時代であれば、その糾弾はある程度正しいのだろう。だが、二つとも違うのであれば、それは見当違いも甚だしい。

「……はい」

「分かったら、ほら、何をすればいい？」

一誠は、やや突き放すようにエリザベートの頬から手を離した。それをやや惜しみつつも、ぼさぼさの髪を手櫛で取り繕うと、エリザベートはモードレッドとアルトリアに頭を下げた。

「ごめんなさい」

およそ、生前非道の限りを尽くしたとは思えないほど、心の底からエリザベートは誠実に謝っていた。それに、改めて周囲の面々は戦慄する。

そして、士郎は納得していた。アーチャーだった頃の一誠が、どうしてあんなにも理屈ぽかったのか。

こうして理詰めにしないと、自分が悪いと理解できないものが多くいたのだろう。

もちろん、ややピントがずれているが、少なくともエリザベートは自分の発言が『悪い』と理解したのだ。

「いいえ、気になさらず。確かに昔の私は愚かだったのです」

「父上が許すなら、俺も許すさ」

両名共に直感スキルを有している。また、対人経験もそれなりに豊

富な二人は、エリザベートが（彼女なりに）真面目に謝っていることを理解しそれを受けたのだった。

ともあれ、この場は確かにまとまったのである。

そしてこの場で、一誠が言うところの『王を糾弾する資格』を持つ、皇帝ネロは和解している親子をやはり羨んでいた。

「で、どうすんの？　最悪君も行くかい？」

「ヴァーリに任せた以上、好きにやらせるさ」

怪物たちの総大将は、その経験ゆえに状況をある程度見切れていた。つまり、この状況は決して不利ではないと。

というよりも、この戦場は結局のところ怪物の餌場である。怪物の数など実際は全く重要ではなく、最後の一頭が残っている限り英雄達は安息できない。全滅するまで元気に戦い続ける邪龍は、半分も死ねば壊乱する軍勢とはその辺りが違うのだ。

ヘラクレスが体現したように、度を越えて突出した個の『攻撃力』は戦場をいくらでもひっくり返す。反面、防御力に欠けるがこの状況ではほとんど考える必要は無い。

上空でヴァーリは遊んでいるが、それもフランシス・ドレイクの『星の開拓者』と『嵐の航海者』あってこそ。天秤が傾き彼女が脱落すれば、その時点でこの戦場は詰みの盤面となる。

「ん？」

一誠は、戦場から周囲に視線を戻した。自分の使い魔であるキャスターと、バゼットの使い魔であるランサーが冷や汗をかいているのを感じたからだ。

「血が騒ぐな」

「ええ、私と同じ太陽神やそれに連なるものが、その通力を最大に放出しているのでしょう」

ルーの息子である半神クーフーリンと、太陽神の分霊である玉藻の前。二人は、スーリヤの息子であるカルナの、力の高ぶりを感じ取っていた。

そう、太陽の敵対者であるアポプスを前に、拮抗していた先ほどまでとは違う。かげることなき太陽の威光が、大地に示されようとして

いたのだ。
　同様の高まりを、太陽の騎士ガウェインも聖剣を通して感じているに違いない。

　さて、もう一人の総大将であるイスカンダル。彼は周囲の軍師、側近から先ほどの無謀をとがめられていた。
　無理らしからぬ話である。この場に揃った英雄英傑も、軍勢として機能しているのは一重に大王であるイスカンダルがいればこそ。
　多くの時代、多くの国でその名を残した彼の器量と名声あればこそ、星から集められた彼等は集団として機能できるのだ。
　イスカンダルがいなくとも、受肉を済ませた軍勢は消えうせはしない。だが、彼の死後に起きた争いが再び繰り返されるであろう。そうした意味で、彼の行為は余りにも分の悪い賭けであった。
「何を言うか。怪物と言うものは息絶える前が一番手ごわいのだ」
　それこそ、死後に得た最大の教訓である。一誠との初戦で、イスカンダルはほぼ勝利を確信していた。だが、後一歩のところで逃げ切られた。軍勢を非力なアサシンだった一誠に殺しきられ、自分も決死の兵に身動きができず、ランサーもセイバーも反英雄に足止めされきってしまった。
　手負いの虎、飢えた狼。ただの獣でさえ、万全でないほうがおそろしい。ましてや怪物、その悪あがきは傾きかけた戦場をひっくり返しかねない。
　あの場で自分が突撃を仕掛けなければ、あの多頭龍は毒を撒き散らしながら暴れ狂っていたであろう。それは、下手をすれば軍勢にとって致命傷になりかねなかった。
　また、イスカンダルは史実に置いても単身での突撃を仕掛けている。無謀な単騎での突撃は彼の十八番だ。
「それで、アキレウスとカルナは」

アキレウスとカルナ。言うまでも無く、この戦場全体を通しても随一の実力者である。言ってしまえば、この二人が何の成果も無く倒れれば、それだけでイスカンダルは転進を選んだであろう。

そもそも、言っては悪いが彼等二人を除けば第四次聖杯戦争の最終局面と比べても差はあまりない。というのも、ヘラクレスに勝てる英雄という意味で、該当する英雄が二人しかいなかったのだ。

アーサー王が率いる湖の騎士と太陽の騎士。なるほど、強い。誉れも高き円卓の騎士、そのなかでも随一の知名度と実力を持つ、聖剣にふさわしき者達だ。だが3人がそろい、そのもてる力のすべてを重ねても、あの益荒男に勝てるとは思えなかったのだ。

令呪４画というありえざる強化。それによって、短期的に見れば受肉をしたに等しい力を王の軍勢は持っていた。だが、それでも『刃』が立たなかった。世界を征服できたであろう軍勢が、たった一人の英雄の力に屈したのである。

知名度で言うのであれば、暴君ネロも義賊ロビンフットも、それなりに知られている。だが、彼等はそもそも強い英雄ではない。個の力が突出して高いという逸話を持たないのだ。

実力で言えば、クーフーリンも相応の力を持っている。だが、悲しいかな彼は祖国以外ではあまり知られていない。

知名度、個の実力双方を兼ね備えているのがジークフリートだ。だが、彼もヘラクレスにはやはり及ばない。

およそ、人類最古の物語であるギルガメッシュ叙事詩の主人公、ギルガメッシュとその友であるエルキドゥ。神秘の理屈で言えば彼等に勝る英雄はいない。だが、それでも世界に置いて、神秘の何たるかも知らない民草が、最強の英雄と利いて誰を思い浮かべるか。

間違いなく、ヘラクレスであろう。群を抜いた逸話の数、その一つ一つの輝かしさ。聖剣も魔剣も持たず、ただひたすら屈強な大男。男子たるもの一度はあこがれる絶対の英雄。それが、ヘラクレスだ。

それを名乗るに足る実力者が、数に屈するとは思えない。同等の個をもってしか、抗し得ぬことはあまりにも明白だ。

「そうか、アキレウスはもうすぐ復帰か」

カルナ。彼に関しては、報告が上がるよりも先に目視できた。
戦場全体に伝わる緊張感が彼の背筋を走り、その発生源には陽光と雷光がせめぎあっている。そう、少なくとも遠眼には両者は拮抗していた。
インド屈指の英雄対ギリシャ屈指の英雄。やはり、少なくとも自分と自分の軍勢すべてよりも、カルナやアキレウスの方がヘラクレスにはふさわしいのだろう。それが悲しくもあり、嬉しくもある。
とはいえ、カルナはともかくアキレウスが2対1を請け負うとは思えない。英雄であろうとする彼が、一騎打ちに横槍をいれるとは考えにくい。いや、考えられない。また、そうであって欲しくない。
かといって、彼を遊ばせておくだけの余裕はこの軍にない。
現状、既に多くの兵が倒れている。相手は逃げるなど脳内に備わっていない邪龍の群、イスカンダルにとっては未知の相手である。はっきり言って、見通しが立たないが、少なくとも優勢ですらない。
まして、あの怪物を従えている兵藤一誠は影も形も見せていない。つまり、この状況でも相手の底は知れていないのだ。これが武将にとって、どれだけの恐怖と歓喜か。語るに及ぶまい。
「では、フェンリルの首を所望すると伝えろ」
イスカンダルは、今尚戦場をかき乱す地上の流星を睨んだ。アレを止めなければ、被害は増すばかり。陣形はかき乱され、邪龍を討つことに専念できはしない。

「そうか……」
怪我から復帰したアキレウスは、炎天下の荒地で鳴り響く雷鳴を睨みながら、伝令に応じる。
あそこで誰と誰がぶつかっているのか。それは余りにも明白だ。その片割れに怒りを覚えていないわけが無い。だが、しかし……自分も彼も、英雄として立会い、そしてその結果が導かれただけだ。
もしも、自分があの両雄の激突に首を突っ込むことがあれば、それはカルナもヘラクレスも、戦場の常であると納得するであろう。ヘラクレスの死は、自軍を高ぶらせるであろう。だが、それを他でもない

自分が許容できない。
カルナと己が手を組めば、討てぬ英雄などどの神話にも存在しない。だが、それでもアキレウスという英雄の生き様にかけて、そんな恥を知らない真似はできない。
自分が求めるのは自軍の勝利ではない、世界を己が掌中に治めることでもない。まして、ただひたすらの勝利でもない。英雄としての生であり、英雄としての戦いであり、英雄としての勝利であり、英雄としての死だ。
そして、カルナが太陽の敵対者を討ったというならば、自分も神話を滅ぼす狼に挑まずにいられようか。
神であるが故に、踵以外のあらゆる部分が不死身となった自分の肉体も、主神さえも食い殺した狼の前には無力だろう。
だが、だからこそ意義がある。死ぬかもしれないからこそ、この敗戦の恥を雪ぐことができる。
そこまで分かっていても、アキレウスはフェンリルに駆け出すことができずにいた。友軍であるカルナに殺意を覚えるほどの、羨望を感じていたからだ。
あの大英雄カルナは、自分の全く知らない考え方で動く英雄だ。はっきり言って、本当に言葉が通じているのかと疑うばかりだ。だが、それでも英雄としての誇りや一騎打ちの誉れは知っている。
その彼が、大英雄ヘラクレスと万全な状態で戦えることを喜ばないわけが無い。あの怪力を如何に捌くか、あの巨体を如何に御すか、あの暴威を如何に凌ぐか。あの英雄2人は、まさに誰もが想像するとおりの英雄として立ち会っている。
自分よりも、光輝に満ちた戦いを演じる二人が、殺したいほど憎らしい。
ああ、妬ましい。叶うならば、あの二人を同時に相手にしたいとさえ思う。友軍であるカルナの背を突くなどありえざる行為だ。だが、それでも憎しみさえおぼえる。
「その首、俺のために残しておけよ」
その言葉が、一体誰への言葉なのか。アキレウス自身も定かではあ

るまい。だが、それでも彼は英雄殺しの槍を手に、神殺しの狼に向かって駆け出した。

フェンリルは、脚を止めた。突然の停止に、上に乗っていたジャンヌとジル・ド・レェも、或いは周囲の軍勢も困惑する。

体に矢傷を多く受けてはいるが、それでも戦闘に支障があるとは到底思えない。それでも、その巨躯は確かにとまり、しかし今にも駆け出さんばかりに威力を溜め込んでいた。

それを、ジャンヌは察する。おそらく、このフェンリルが警戒するほどの相手などカルナ以外にはアキレウスぐらいのものだろう。そして、彼と殺しあうとすれば、制限をかけられた今のフェンリルでは自分に向ける余裕が無いのだろう。

「分かったわ。ジル、降りましょう。此処からは貴方の力を借りて、征服王の軍勢に挑みます。楽な戦場ではありませんが、お願いできますね」

「はい、貴方と轡を並べられるのであれば、侵略者になど遅れはとりません」

フランスの聖女と元帥は、神喰狼の背という安全地帯からためらうことなく戦場に身を投げる。それを確認するかせざるか、狼は溜め込んだ力を爆発させて向かってくる脅威に向けて走り出した。

フェンリルは、飢えていた。あの戦場でインド神話のすべてに挑んで以降、狼としての飢えを満たされずにいた。この牙に、ふさわしき獲物を。久方ぶりの餌場であるこの戦地も、なるほど自分の爪を滴らせるだけの価値はある。だが、極上の餌が向かってくる気配を感じてしまえばいてもたってもいられない。

一切の特別な力を持たぬ、牙と爪、巨躯で神さえも食い散らかす狼は、半端な神の肉体など丸呑みにする勢いで駆けていく。しかし、知れ。この憤ったアキレウスは、北欧神話最強の怪物であっても容易くはないと。

「さて、周囲は敵だらけ。こちらは私と貴方だけ」

「ええ、左様で」
旗手と司令官、およそ二人が揃えば何者をも恐れぬが、しかしこの二人だけでは戦争にならない。まして、周囲が雑兵のいない、精兵ですらない英傑の軍勢。その戦力は、例えるならば嵐の中の木の葉の如し。容易く飲み込まれるばかりであろう。
無論、二人はそんなことは分かっている。すくなくとも、此処から敵軍のすべてを蹴散らせるとは思っていない。だが、それでも勝算は十分にある。
「つまり、いつもどおりということですね」
「はい、なんのこともありません」
本当に此処は戦場なのか、と思うほど穏やかに二人は微笑を交わした。周囲を囲まれて尚、二人に焦りも不安も迷いも無い。
直後、ジャンヌ・ダルクの周囲に光輝の鎧に包まれた騎士が部隊を成して整列した。そして、当然ジル・ド・レェも鎧に包まれた。
「さあ、貴方の采配を見させてくれますか」
「ええ。血肉と汚泥にまみれた私ですが、貴方を失望させはしません」
最大の派閥である天秤派にあって、中核をなす3人の英雄は軍を成すに当たって得意分野が分かれている。
曹操は人を集めることに特化しており、ヘラクレスは人を鍛えることに特化しており、ジャンヌは人を鼓舞することに特化している。
だが、軍勢を率いること、策を練ることに特化した者はいなかった。
そう、今までは。
「私の力を貴方に委ねます、ジル」
「ええ、お任せを、ジャンヌ」
フランスの元帥を務めた男が、案山子の如く首を取られるものか。
青髭と呼ばれてしまった男は、輝かしい戦士達を指揮し始めた。

ヘラクレスもカルナも、決して雄雄しく名乗りを上げて戦うくちで

はない。互いの戦力を見切った上で、自分が瞬きの内に死ぬこともあると知った上で、恐れることなく砂の大地を踏みしめて前に進む。

その姿が陽炎で揺らめくのは、ただ結界の中の、戦場の熱気によるものではない。神の血に恥じぬ偉業をなした大英雄同士の威圧感が、周囲の空間さえも捻じ曲げている為だ。

カルナは涼しげな顔のまま、余力の一切を忘れて太陽の炎を体から吹き荒れさせる。応じるように、ヘラクレスもまた全身から雷鳴を迸らせ始めた。

ある兵士が、その姿を見て背筋を凍らせる。神話を代表する両雄が対峙したことによって生じた圧力に、引き込まれるようにして身動きが取れなくなった。それは、彼だけではない。付近で戦っていた邪龍たちも、その重厚な気当りに動きが鈍くなることを感じた。

互いの攻撃の間合いに足を踏み入れても、両雄は脚を止めずに前に進む。そこは、既に一足一刀どころか必殺の圏内。カルナの槍は城塞のごとき肉体を穿つであろうし、ヘラクレスの鉄拳は太陽の鎧を破砕するであろう。だが、それでも両者は足を止めなかった。

殺し合いを始めるとは思えない、無防備な接近を眼にして歯の根が合わないものもいた。それでも、両雄は相変わらず平然と間合いを詰めていく。

その短い時間の中で、ヘラクレスは更なる力を発揮するべく自分の戦う理由を思い返していた。

『ヘラクレスさん、ですよね？　大ファンなんです！』

『ヘラクレスさんみたいに、強くなりたいです！』

『ヘラクレスさんに鍛えてもらえるなんて、夢みたいです！』

それは、誰だったか。あの戦争で、勇敢に戦って散った誰かだ。いや、彼等だ。

『シヴァ神と戦うんですよね？　でも、きっとヘラクレスさんなら勝てますよ！』

『そうですよ。此処だけの話、ヘラクレスさんがこの中で一番強いって思ってる奴、多いんですから』

『フェンリルにも、戦龍にも、異形にも、誰にも負けてませんよ！』
『そうそう！　ヘラクレスさんは、最強の英雄なんですから！』
無責任な鼓舞だった。おかげで、愚痴を言うこともできなかった。
実際、シヴァ神には終始やられっぱなしだった。さすがはインド神話最強の破壊神、その武勇は自分如きでは喰らいつくのがやっとだった。
ヴァーリや一誠、曹操ならばきっともう少しうまく戦えただろうに。案外、シヴァ神相手でも討ち取っていたかもしれない。
『ヘラクレスさんは、俺達の自慢なんです』
全く、迷惑な話だ。そういうのは、あの規格外たちに背負ってもらいたい。自分では、荷が勝ちすぎる。
『ヘラクレスさんは、俺達の誇りなんです』
違う、そんな格好いいもんじゃない。俺は、ただ英雄の魂を継いだだけの木偶の坊で、ウドの大木だというのに。でかいだけがとりえの筋肉ダルマだというのに。
『勝ってください、ヘラクレスさん！』

なあ、俺がお前達の名前を墓碑に見たとき、どんな気分だったと思う？
全く、迷惑な話だよな。
これでますます負けられなくなった!!!

カルナは、ヘラクレスの肉体が膨れ上がったことに気付いた。城塞のような肉体は、更に膨れ上がりはちきれんばかりに脈動している。
明らかに、力んでいる。筋力がスピードを生み出すことは確かだが、それにも限度はある。力みすぎれば、それは返って動きを阻害してしまう。肉体を動かすのに必要な筋肉以外が緊張すれば、それが邪魔になるからだ。
それでも尚、筋力を。もっとパワーを。もっと強く、もっと剛く、もっと、もっと！
吐く息は、熱砂の戦場よりも熱く、白んでいる。体から吹き上がる

雷鳴は尚も勢いを増していく。
　これほどか、とカルナはヘラクレスの存在を上方修正した。主神の息子、自分の種違いの弟、輝く王冠、アルジェナ。彼と同等と思っていた。いや、実際そうなのだろう。だが、それでもこれだけの威圧感は彼には出せなかった。
　ヘラクレスの力は、彼だけのものではない。彼を戦わせているものは、彼を最強だと信じた誰かへの返礼。彼等に恥じぬ英雄であろう、彼等が誇る英雄であろうという彼なりの誠意。
　誰よりも強く生まれた自分。何も持たずに生まれた誰かに報いるために、不当に迫害された誰かに勇気を与えるために、強くなりたいと思う誰かの目標であるために。
　父なる神でもなく、仕える王にでもなく、名も無き兵士や民草のための、奮戦であり蛮勇なのだろう。
　もしも、彼が最強なのだとしても、最強でありたいと固執した結果ではなく、信じる誰かに答えただけなのだろう。
　これだけの相手に、言葉は無粋。カルナは手を伸ばせば届く距離で長大な槍を振るい、ヘラクレスは極めて大振りに拳をたたきつけた。雷鳴と火炎がぶつかってはじけ、閃光と轟音が周囲を満たす。
　固有結界がきしむ、戦場が揺れる。兵士が緊張し、邪龍が硬直する。
　しかし震源である両雄にとって、ただの出会いがしらの一撃に過ぎない。それが証拠に互いに吹き飛んで距離ができた両雄は健在。ヘラクレスの腹部には火傷の痕が残るだけであり、カルナの鎧はわずかにへこんだだけだった。
「ジークフリート以上だな、その硬度は」
　カルナの槍の一撃を、ヘラクレスは避けることなく腹筋で受け止めていた。疾走しながらの機動戦ならばいざ知らず、足を止めての殴り合いならばヘラクレスは全力で筋力を硬直させることができる。
　ヘラクレスが真剣《リアル》に固めた腹筋は、聖剣であろうが魔槍であろうが、決して穿てぬ城塞となる。こうなったヘラクレスは、ただの『一流の英雄』では傷つけることさえあきらめるしかない。
　防具など無用、真の英雄は肉体一つで事足りる。

それでも、ヘラクレスは傷を負っているのだ。やはりカルナは規格外の英雄なのであろう。現にヘラクレスの一撃を受けても、鎧は変形するだけで済み、それも時間と共に癒えていく。

それを見て、ヘラクレスは今の一撃がほぼ意味の無いものだったと悟る。では、どうするべきか。

あの鎧は神々であっても破壊困難であるという。どれだけの力で攻撃しても、１０分の１ほどしか通らない。１０度打って、或いは１０倍の力で打って、ようやく一打分。それも、相手は高速で自己修復すると来ている。なるほど、インドラが手を焼くわけだ。ヘラクレスは納得していた。

さて、ではヘラクレスはどうするのか。１０度打つのか、１０倍の力で打つのか。

「力みが足りないか」

１０度打つか１０倍で打つかを選ぶなど、凡百の英雄の貧困な発想である。このヘラクレスにはそんな考えなど必要ない。

１００倍の力で、１００度打ち込めばよい。相手は無抵抗に棒立ちしてはいないだろう、反撃してくるに違いない。だが、それでも自分ならば、ヘラクレスならばそれが可能だ。

大きく振りかぶる、背を相手に見せるほどに、ヘラクレスは拳を大きく振りかぶる。さながら、槍投げの如く放たれる鉄拳。それは、先ほどの一撃と比べても尚、ありえざるほどの威力を秘めた剛拳がカルナに迫る。

それを、カルナは怯まずに迎え撃つ。太陽の威光に恥じぬ、勇壮なる槍さばきで、鉄拳の真芯を捉えて正面から止めた。同時に、両雄の足場が爆ぜた。互いの重心移動が万全であり、互いの威力を止めたが故であった。

しかし、それさえも両雄は気にも留めない。全ての集中力を相手に注ぎ、その命をめがけて決死の一撃を打ちこみ続ける。

槍と拳、巨躯と痩身。肉体と鎧、雷鳴と日輪。ギリシャとインド、英雄と英霊。

余りにも違いすぎる両者は、しかし一歩も退かずに死域に没頭して

いた。

ヘラクレスの巨拳が大地を抉って砂塵を吹き飛ばし、それに纏わせた爆雷でカルナを覆えば、カルナは負けじとプロミネンスで爆雷をものともせずに大地さえも溶かす。

裸足のヘラクレスは、その足裏を焼かれた。いや、全身が太陽に突入したかのように煮立ち、焼かれる。だが、それでも眼を閉じずに灼熱の中心に向けて剛腕を振るう。

カルナはそれを恐れずに間合いを詰めて槍を胸に突き刺す。しかし、ヘラクレスの胸筋は炎を放ち続けるそれを阻み、止まる事なき巨腕は打点がずれているにもかかわらずカルナを吹き飛ばした。

直後、カルナに刻まれた刻印が太陽の鎧を穿たんと中心に向けて爆ぜていく。太陽の炎は一瞬途切れ、雷光がそれに変わる。英雄であっても蒸発を逃れぬ雷の熱量の中、カルナは倒れることさえなく反撃に転じる。

ヘラクレスのただの前蹴り、スケールの差ゆえに顔面を捉えるその一撃を爆雷に包まれながら潜り、カルナはヘラクレスの軸足を突く。

体重差も何処か、ヘラクレスは軸足をかられて宙に浮く。しかし無手ゆえの利によって、片手で大地を掴み、突かれたはずの宙に浮いた軸脚で反撃を行う。

距離をとることもできたはずの、わざと宙に浮いて喰らい、吹き飛ばされることでダメージを軽減できたはずの一撃。しかし、カルナは槍の柄でそれを受ける。大地に踏ん張り、致死の一撃をあえて受ける。

巨体に見合わぬ、曲芸のような軽業。それを披露したヘラクレスは即座に体勢を整えるとカルナに組みかかる。一旦組み付いてしまえば、カルナがヘラクレスに勝てる道理は無い。膂力と体格の差が、そのまま決着に繋がるだろう。

だが、それをカルナが甘んじて受け入れるわけも無い。身の丈以上の槍を巧みに操り、ヘラクレスの腕をそらして尚も接近戦を継続する。

組技の間合いであって、組み付けぬとなればむしろヘラクレスが不

利。拳の間合いの内側では、その鉄拳も巨腕も威力が殺される。凡俗の英雄ならばいざ知らず、カルナを討つには足りない。

だが、ヘラクレス。近接格闘では並ぶもののない大英雄だ。肘を振り下ろして動きを硬直させると、膝の一撃で顔面を捉えた。

鎧の加護なき顔面への一撃。しかし、カルナは、それでも不屈の英雄。大地をも動かす英雄であっても、彼の心をへし折ることなどできはしない。

細身の何処に、それだけの力が。ヘラクレスにそう思わせるほどの威力が備わった拳で、ヘラクレスの顎を捉えた。ヘラクレスの巨躯が、わずかながら浮かび上がる。

しかし、ヘラクレスも浮き上がった頭部を振り下ろし、頭突きにてカルナに返礼。両雄の脳内に火花が飛び散るも、しかし攻防に支障はなく更に戦闘は続く。

両雄は不死身の英雄なれど、その威力も必殺なれど、保身は無い。心技体が備わった英傑ゆえに、退く道は無く、ただ前進あるのみ。

近づくだけでも命を落す炎と雷の嵐を巻き起こしながら、カルナとヘラクレスは至近での戦闘を続行していた。未だに優劣はつかず、終わりもまた定かではなかった。

ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ編
プロローグ　忘れられていた二人

二人の才媛、遠坂凛とルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトは、久方ぶりの自由に体を動かしていた。

ついうっかり『世界崩壊』を巻き起こしかねなかった二人の大失態は、正直な話二人の首（物理）ぐらいでは済むはずもない。

彼女たちは、暴れること以上に自害を防ぐため、幾重にも編みこまれた拘束の魔術で自由を奪われていた。

生命は維持され、声一つ、指一本すらも動かせない拷問のような拘束。それは強気な彼女達から勢いを奪っていった。だが、それでもここまでの精神的圧迫は受けなかっただろう。

この男を前にすると、拘束具で一生幽閉されていたほうがマシと思うほどに。

「はははははは！」

男は、応接室に持ち込んだであろうノートパソコンで、ある実写映画を観ていた。

その映画は、通常とは別の意味で豪華キャストの出演していることで有名な映画だった。なにせ、監督は滅神四雄、主演は若手四王、ゲストで四大魔王である。

魔法少女もの、というべき実際の魔術師とは乖離した架空の魔法を使う魔法少女が、世間を騒がせる怪物と戦うという、そのジャンルにおいてはオーソドックスなストーリーだ。

奇を照らすこともない、お約束から一歩もはみ出ないその物語は、『登場人物が権力者』であるという一点だけで力づくで笑わせにかかっている。

ある意味、公開処刑と呼ぶべきその作品は、主演女優にとって甚だ不本意なことに興行収入、レンタル、ダウンロード、ＤＶＤ売り上げ共に記録的な成果をたたき出していた。

真面目に魔術を志している二人にとって、それは不快ですらあるの

だが、そんなことは一言も言えない。
目の前にいる男は、笑ってはいても目が全く笑っていないのだから。
「ははははは！」
ディオドラ・アスタロト。救世の国賊と呼ばれるこの男は、現魔王の血筋でありながら冥界の確保していた絶霧を奪い禍の団に走った冥界最大の裏切り者である。
同時に、神話間戦争においてはM・A・R・Sの一員として多くの功績を残し、恩赦を得てこうして公的な立場を得ている、四雄の中でも特別な男である。
危険人物の集団の中でも、策を練るという意味では最も危険とされる男だ。その男は、指を一つ振るえば確立に干渉して自分たちが存在していたという事実さえ書き換えてしまう。それこそ、先祖代々にさかのぼるまで。
なぜ、そんな大物が優秀な生徒、将来有望な魔術師に過ぎない彼女たちの前にいるのか。それは、理不尽でもなんでもない。極めて当然の帰結である。
なにせ、二人は連合軍の司令官を意図せずとはいえ意識不明の重体に追い込んでしまったのである。これを、罰するのに彼以上の適任はいないだろう。
「どうした、笑わないのかい？」
ディオドラは、甚だ不愉快そうに笑った。その圧力は、次代を担うもののそれである。
つい、引きつった笑いが二人の顔を支配していた。とっくの昔に失禁している。床は、『なぜか』汚れていない。
「僕はね、一誠から君たちの処遇に関して僕に一任したんだよ。『笑って済ませろ』ってさ」
ひたすら残念そうに、絨毯の敷かれた床に正座している二人に語りかける。
「君たち専用の地獄を作って、そこに君たちの先祖や子孫を放り込む、というのも考えていたんだけど、それはさすがに笑えないしねぇ」

一誠は、被害が自分に納まっている限り非常に寛容な男である。無論、そこから一歩でも踏み出せばその限りではないが。今回、被害は自分と周囲の建物。加えて、一誠自身が他の神に借りを作ったことぐらいである。

よって、彼は二人に罰を加える必要がある。メフィストにも、これは任せられない。例え本人はそんなに気にしていなかったとしても。

だが、ディオドラに任せれば、周囲はそれで納得する。この男の素行の悪さは、こういうとき便利だ。どれほど重罪だったとしても、この男に任せれば皆が納得してくれる。

『大変だったね』と・・・。

だが、実際に罰を受けるほうはたまったものではない。なるほど、事の重大さは弁えている。到底謝罪で許されるレベルではない。

しかし・・・。この男に関わって、いやこの男から罰を受けて無事な未来が想像できない。

「・・でだ、僕も上司である友人からの頼みとあってはやむをえない。君たちには軽い罰を与えて、それで終わりにしよう」

二人は言葉もない。この男の言う軽い罰。軽いはずはないのだから・・・。

「君らも知ってのとおり、兵藤一誠はこの宇宙に存在するはずのない力、外宇宙の力とそれを散布する代物を持っている。念能力、六式、薬、核鉄、魔法の筒だ」

これは、授業でも習うところだ。特に、念能力。これは既存の魔術、魔力理論を大きく覆す代物だ。

戦闘面においては柔軟なオーラ運用を可能にし、そのほかの面では多大な時間を労するとはいえ特定の能力を『作り出す』ことができる。

Ｍ・Ａ・Ｒ・Ｓの中にあって、これを有するのは調和派のごく一部のみ。それ以外では、以前にリアス・グレモリーへ仕官した一松鉄兵一人だけである。

これを研究したいというものは後を絶たないし、これを欲するものもまた後を絶たない。なにせ、それを運用しているものは最下級の捜査員ですら圧倒的なアドバンテージを持って戦闘ができるのだから。

もちろん、ただの一人もこれを許されたものはいない。兵藤一誠は魔王との契約の際に『武器の運用に口は挟まない』と他の如何なる条件よりも優先して規定している。

よって、アジュカ・ベルゼブブですらこれを調査することは許されていないのだ。

「念能力と同質の、即ち『外宇宙のエネルギー』が地球に拡散している。それも、全部で6種類」

その言葉に、二人は愕然とした。もしもそれが明らかになれば、世界はひっくり返るだろう。

次代を担うものはこの世界で最強の存在だが、外宇宙の力ともなれば全く話しは違う。彼らを超えうるものすら生み出せるのかもしれない。

「まあ、それは一誠のそれと違って『他人が運用できない』らしいが、これが世間に迷惑をかけるといけない。よって、これの回収任務を君たちへの罰とする。なに、便所掃除みたいなものだよ」

軽く言うが、しかしこれは重大ごとだ。この情報を知っているだけで、自分たちは殺されるのかもしれない。それほどの情報だ。

第一、この宇宙に存在するはずもない力を相手どると言うことは、こちらの常識が一切通用しないということだ。危険である。

だが、内容としては自分たちに加える罰としては破格の軽さだ。なにせ、危険というだけだし、自分たちの才覚で乗り越えらないわけでもない。

やる価値はあるだろう。どの道、こちらに選択肢などないのだから。

「でだ、いくら君達がマイソロジースレイヤースレイヤーとはいえ、無手では心細いだろう。特別に神器を作成した」

その顔は、ものすごく嬉しそうに歪んでいる。

「平行宇宙から魔法力をかき集めることができる優れものでね、身体強化、物理保護といった戦闘面での機能も充実。まあ、『容姿』に問題はあるけど、命には代えられないよね？」

二人は、猛烈に嫌な予感がした。

調度そのころ、ディオドラのノートパソコンでは、魔法少女が変身をしていた。

魔法少女、出揃う。

カレイドステッキ。

ルビーとサファイアの二個が一対で作られた新造神器。曹操がその権能で生み出したそれは、出力こそ神滅具に遠く及ばないが、戦闘面での機能はむしろ凌駕している。

持ち主の任意で形を変える障壁。対物理、対魔術を自在に割合を変えられる保護。散弾、収束、設置など多彩な射撃システム。

よく言えば非常に自由度が高く、悪く言えば玄人向けの武装に思えるが、人工知能を内蔵しており初心者でも安心。

なんというか、スペックだけならば一般人にさえ並みの魔術師をはるかに凌駕する力を与える代物である。

では、何が問題なのか。問題は二つ。一つは、人工知能はディオドラが作成しており、非常に扱いにくい。もう一つは、この神器を起動した際に所有者はいわゆる『魔法少女』の姿になってしまうのだが、このステッキを含めて、『商業展開』されているという点である。

時系列順に説明すると、さる戦争で大敗した原因を自分たちが安易な考えで完成させたシステムにあると自責の念にかられた天才二人。彼女らは失敗を成功で返上するべく軍隊へ志願した。しかし、名家の跡取りである二人を軍に入れられないと、司令官は断る。そこで、裏口で入隊するためにディオドラに接触する。実は、これも司令官にとっては想定内。ディオドラにはあらかじめ入隊を許可しても良いと指示をしていた。当然、これを二人は知らない。

その際、ディオドラが二人が入隊するに当たって交換条件として提示したのが実写映画、というか映像作品の主演を勤めることだった。むろん、二人を大義名分の下いじめるためである。

才媛二人の捨て身タックルの演技は以外にも好評であり、結果的に興行成績は黒字と成った。無論、二人は憤慨したが、その収益を戦災復興に使うとあっては反論のしようも無い。これに気をよくしたディオドラは、総力を挙げてこれをメディアミックス。二人をいじるためだけにアニメ化し、なんと人間界でも放送したのである。ディオ

ドラが全力を出しただけあって、第二期はおろか第三期も決定している。

さて、この元と成った実写映画。その撮影のためだけに造られた神器。それがこの2本のステッキである。

よって、一切の事情を知らない人間が、それも日本の少女がこれを見た場合皆がこう思うのである。

ああ、コスプレか、と。

夜の少女の私室。そこで、二人の少女と魔法のステッキは会議をしていた。

「というわけなのよ・・・」

苦虫を食いつぶしたかのような顔で説明するのは、魔術師遠坂凛。説明を受けるのは、件のステッキルビーと強制的に契約されてしまった少女、イリヤである。

何のことはない、元々魔術を用いてまで殺しあうほど仲の悪い才媛二人。如何に己の、いや一族の命運が関わっているとはいえ呉越同舟すらできるわけもない。非は相手にあると怒りに燃えて、せっかく無駄にハイスペックな神器を同士討ちに使用したのである。如何に、人工知能に過ぎないとはいえ姉妹とこんな理由で闘うとなっては、自立型として契約を反故にするのも当然であろう。

そう、やたらとかわいい口調で主張したのはカレイドルビーである。

『第一、前任者もそうなんですけど魔法少女を名乗るには年が不適当な人ばかり。ここいらで、適正な人がいたならばそりゃあ乗り換えたくなるって話です』

「うっさいわね！神器の分際で、なに主人を変えているのよ！」

『自立型ですし。そもそも、あそこまで二人がいがみ合わなければ、というか殺し合いで使用しなければこんな強攻策には打って出ませんでしたよ』

理路整然とした主張である。

なるほど、イリヤも話を聞いているだけで両者の苦悩、というかステッキの苦悩が伝わってくる。確かに、本来の目的を忘れて殺しあう二人は余りにも見苦しい。

「あの～、と言うことは私は魔法少女にならないといけないんでしょうか？」

「・・・」

いや、別に？

といいそうになった遠坂凛ではある。自分の実力は、もちろんあの怪物『救世の国賊』とは比べ物にならない。だが、極一般的な意味では一流に分類される魔術師であるし、戦闘経験もある。相手が並ならば遅れは取らない。

だが、相手はこの宇宙の物理法則の外側に位置するもの。果たして、規格外であることが前提の相手と、徒手空拳で何処までやれるだろうか。ディオドラが神器を貸し出したのは、もちろん自分たちへの罰であることは必定だが、それを抜きにしてもこれがないと任務の達成が困難であることを示している。でなければ、自分たちは神器を使わずに戦って任務を終えていただろう。

であれば、協力していただかねばなるまい。

「そうね、正直気は進まないけど・・・」

「そっか・・・！」

イリヤは、魔法少女になった自分の姿を自分の部屋の姿見に映す。そこには、アニメで観た魔法少女の姿がそのまま自分で再現されている。

これが、アニメで観たとおりにバリアをはったりビームを撃ったりするのだ。なんという乙女心をくすぐるアイテムだろう。年甲斐もなく、ついくるくると回ってしまう。

その姿に遠坂が呆れているとイリヤはあることを思い出した。もう一つのステッキの存在である。

「あのさ、もう一つのステッキの持ち主も変わってるの？」

『ええ、サファイアちゃんもきっと貴女同様魔法少女に似合う素敵な人に出会ってますよ！』

夜の公園。
カレイドサファイアに選ばれた少女、美遊。その任務の説明を受けた彼女はやや表情をこわばらせた。
「カードの回収ですか・・・」
イリヤも、遠坂もルヴィアも。彼女たちは元ネタこそご存知の通り型月の住人ではあるが、設定上ではハイスクールD×Dの世界の出身である。この町も、当然それに準拠している。
だが美遊だけは、人としての機能を持つ聖杯である彼女だけは全く原作の設定どおりの、プリズマイリヤの住人である。そういう意味では、彼女も外宇宙の力を得ているイレギュラーであろう。とはいえ、個体としてみればさほどこの世界に影響は与えないはずである。
彼女にとって、全く法則の違うこの世界に来てしまったことが、第二魔法の使い手であっても追跡不可能なこの地に降り立ったことが、幸か不幸かは彼女の考え方次第であろう。
だが、カードと聞けば全く話は違ってくる。自分の世界で生み出された代物が、この世界に来ているのであれば、もしかしたら彼らも追跡してくる可能性が・・・。
「あくまでもサンプルですが、写真があります」
そういって、差し出されたそれを観て、自分が知るそれとは全く違うそれを観てやや安心する。自分の知るそれは、クラスを示す名前と、それに準じた騎士の絵が描かれていた。
だが、このカードは違う。クラスは描いてあっても絵は描いていない。そのかわり、三角錐を真上から見たような図形だけが描かれている。これが、何を意味するのかは全く分からないが。
「これに酷似したデザインのカードが6枚、この町にあります。それらは独自に行動し、現在は特に被害も出ていません。ですが、神秘の隠匿のためにも早々に回収しなければなりません。外宇宙の力を嗅ぎ付けた連中が、要らないちょっかいを出す前に・・・」
どうやら、というかこの町並みを観ていて確信していたが、おおきく神秘の在りようが異なるこの世界であっても一般に魔法の存在は

知られていないらしい。
　まあ、一般に被害を出さないというのは、彼女にしてもありがたい話だ。積極的にそんなことをしては『兄』に顔向けができない。
「まあ、聞くところによるとこのカードは『特定の条件を満たさないと使用できない』代物だそうですが・・・」
「使用できない・・・？」
　その説明に、美遊は疑問を憶える。観たところ、手順はともかく使用方法は自分の知っているそれと同じに見える。それが、『使用方法が分からない』ではなく『使用できない』とはまた妙な話だ。外宇宙の代物だというのに、なぜそんなことが分かっているのだろうか。
「ええ、元々の持ち主も、条件を満たしていないため使用できなかったらしいのです。そのため、回収を待たずに自分の世界に戻ったとか・・・」
　なんとも、無責任というか気前のいい話だ。使えないとはいえ、外宇宙の力を失ったまま帰るとは。よほど、自分の力に自信があるのだろうか。それとも、急いで帰らなければならない理由でもあったのだろうか・・・。
　美遊は、再び写真のカードを見る。キャスターとクラスの書かれたそれは、果たして如何なる力を秘めているのか。そして、その持ち主はどんな人物だったのだろうか？

ゴーストライダー

回収するのはカード。とはいっても、元々散逸しているということと、こうして武器を渡されていた以上戦闘は当然である。

だが、まさかあそこまで分かりやすいとは。

「うおおおおおおおおおっ！」

夜の街を叫びながら、道路ではなく建物から建物へ、高速で移動している高校生ぐらいの少年がいた。

人間離れした物理法則を無視している運動機能以上に、目を引くのはそのけったいな格好。さながら特撮のヒーローのパワードスーツのように、様々な機械のパーツを寄せ集めて体を覆っている。

それが、この宇宙に存在し得ない力であると、人工知能であるルビーは断言する。様々な神話と交流のあるＭ．Ａ．Ｒ．Ｓによって生み出された彼女は、追加された機能である高度な測定機能によってそれを看破した。

もちろん、看破したのは『外宇宙の力』であることだけ。それがどのような機能を持つ、どのような性能を発揮する、どのように動力を生むのか。そんなことは分からない。なぜならば外宇宙のエネルギーだから。

実際のところ、この世界では５０人に満たない念能力者の『オーラ』もそれが『エネルギー』であり、精神や肉体を起源とすることは分かっていても、それは使用すると精神や肉体が疲労するということが分かっているだけで、どのように変換されているのか分からない。

特に、強化系はともかく直感警報のような特質系念能力はどうして危機が事前に分かるのか、その仕組みは調査できないことを差し引いても全くの謎である。

おそらく、アレはカードを使用している誰かか、ないしカードそのものが文字通り暴走しているのだろう。おそらく後者だ。前者で、あそこまでの変態的な移動術をそうそう使いこなせるとは思いたくないし、第一、理性があるものにしては行動が雑すぎる。

見れば分かることもある。あれはどうやら高機動型のパワード

スーツのようだ。あれが外宇宙のエネルギーであるとはいえ、使用しているのはこの宇宙の人間。その発想は似通っていることは確かだ。
おそらく、機動力に物を言わせて接近戦を行う、そういうコンセプトなのだろう。問題は、あれが一晩中この町を駆け回っているということだ。燃費がいいとか、よく飽きないとか、そういう問題ではない。何処にいるのか、分かってもあの調子では意味がないのだ。
「早速参ったわね。どうにかして引き摺り下ろさないと・・・やっぱり罠かしら」
「なんだか、さっぱり魔法少女ぽくない・・・」
かわいい服を着て、近所の人のために魔法を使う。なるほど、魔法少女である。しかし、相方は「罠かしら」という魔女だ。どう考えても敵の台詞である。
とはいえ、状況は単純な分イリヤにも良くわかる。あの町を駆け回っている暴走少年は、特定のコースを持たず駆け回っている。今は、とあるビルの最上階から相手を視認できているが、追いかけるとなると不可能に近い。
「俺は、自由だぁぁぁぁぁぁ！」
相手は、ビルの隙間や壁を縦横無尽に走り回っている。３次元で移動する相手に、待ち伏せもできはしない。
となれば、餌が必要だろう。アレが何を食べるのか、さっぱり分からないが。
「追尾弾、撃てるわよね？」
『ええ、もちろん！初心者にも安心安全な魔法のステッキですから。逃げる相手にも命中させられます』
それは、果たして安心できるのだろうか。イリヤは、このステッキが兵器であるとようやく思い知る。とはいえ、狙撃など自分にはできる気がしないし、専門的な知識はないが動いている的に狙撃など『魔法』でもない限り不可能だと分かる。なにせ、スコープに収めるのがまず無理だ。
追尾弾。ホーミングしてくれるのであれば、こんな心強い話はない。それに、はずしたら町が壊れるのでそれは嫌だった。魔法少女的

に考えて。
『ですが、イリヤさんではろくな威力になりませんよ?そもそも距離がありすぎて減衰しますし・・・』
当たり前だが、普通の弾丸がそうであるように魔法の弾丸も距離があればあるほど威力は落ちる。それは、威力を長時間維持できないということもあるし、単純に推力がなくなるということでもある。
これも当然だが、イリヤは『一般人』であり、一級の魔術師である遠坂よりも圧倒的に実力は低い。よって、如何に魔力が無尽蔵に供給されるとはいえ最高出力も大いに低くなっている。
よって、この距離から命中させたとしても、全くと言っていいほど決め手にならないのだ。もしも遠坂が使用していれば、この距離から一方的に攻撃し続けれることができたかもしれない。もちろん、相手がなされるがままであれば、だが。
「十分よ。まずこの周囲に罠を張り、砲撃を命中させて誘導。接近してきたところを罠にはめて叩くわ」
正直に言って、これは相手が遠距離戦ができないことを前提にしている。向こうが撃ち返してくれれば、罠は空振りだ。とはいえ、それも勝算がないでもない。そもそも、向こうは脚に自信があるというかどこにでもいいから走りたがっていて、見るからに理性的ではない。おそらく、挑発さえすればたいした考えもなく接近してくれるだろう。
「じゃあ、罠をはるから、それまでは・・・」
「・・・こっち来たぁ!」
「お前等、なんなんだ!うぜぇんだよ!」
なんということでしょう。罠を張る前に敵に気付かれてしまいました。と、がっくりきている場合ではない。二人は、一目散にビルから飛びおりる。
もともと、高いビルから飛び降りたぐらいで怪我はしないと説明されていたイリヤではあったが、正直に言って敵が怖すぎた。ジャンクパーツの寄せ集めのような無駄に重厚なボディーは、明らかにこちらを威嚇している。というか、目が血走っている。どう見ても、人間のそれではない。確かに、アレは明確に敵だった。

「うっぜえええええええええええええ！」

少年は、鉄パイプで覆われた両脚を新体操の演技のように軽やかにビルの屋上にたたきつけた。結果は、さながら交通事故のように屋上面が粉砕される形で現れている。やはり、あれは殴りあう鎧のようだ。俊敏性に比べて破壊力はそれほどもないが、やはり一般人を相手にするには十分過ぎる。

もちろん、そんな解析をしているのは優秀な戦闘用の人工頭脳を持つルビーだけだ。他の二人は、猛獣のような気迫に押されている。遠坂も突発的な事態に慌てており、イリヤはもう必死で無我夢中だった。

「俺は、自由なんだよ！自由に決まってんだろうが！」

当然のように、ビルの屋上から追跡してくる少年。そのスーツから覗ける双眸は憎悪に染まっている。

「だから、邪魔はいらねーんだよ！」

ビルの屋上から路上に着地したばかりの二人に、頭上から追撃を加える少年。両脚を装甲で束ねて、肉体を一つの槍のように固定して攻撃してくる。その威力が、先ほど以上であることは明白だった。

『回避、間に合いませんね～』

ルビーは、極めて冷静に状況を把握していた。その間の抜けた声に、二人は怒りすら覚えた。しかし、その後の対応はまさに、さすが熱くならない限り常識的な曹操や総じて有能なディオドラが作成しただけのことはある、という見事な動作だった。

即座に上方へ障壁を展開。更に転移の準備を始めた。移動先は、遠坂凛の拠点であるこの町で一番のホテルの一室である。

「垂直落下式特攻ＢＵＫＫＯＭＩ！」

おそらく、向こうにとって最大最強の一撃、加速を済ませた全体重を一点に集中させるその突撃を、障壁は確かに受け止めた。更に、そのまま二人を安全圏へ瞬間移動によって移動させる。

こうした、本来単一の機能しか持たないはずの神器の中で、ここまで複数の機能を持つものは神滅具でもそうはない。最上位に位置する黄昏の聖槍ぐらいな物であろう。その万能性は、映画の撮影のた

め、というかストーリーの展開のために生み出されただけのことはあった。
「さすが、5位からの任務といったところね」
死地から一転、自分の拠点に戻れた遠坂は一息ついた。
とはいえ、分かったことは多い。まず、相手は俊敏で高速だ。加速力、持久力もあるのだろう。だが、『それだけ』だ。本当にそれしか備えていない。無強化の自分でも一撃は逃げられたし、ルビーの自動防御も転移も余裕だった。
攻撃に特殊な効果があるわけでも、必中や追尾といった特殊技能があるわけでもない。おそらく、転移もできないだろう。あれは早いだけの鎧だ。そうと分かれば、対策はたやすいだろう。
問題は、その策を協力者である彼女が実践できるかどうか・・・。見れば、初めての実戦で興奮しつつ混乱していた。まあ、恐怖に震えていない分マシだろう。
「今日はもう遅いし、もう帰りなさい」
その一言で開放されたイリヤは、魔法少女の姿から私服に戻り、ホテルから徒歩で歩いて帰る。その足取りは重い。
敵が喋ったことが怖いというか、どちらかというと気迫に押されたのだ。重厚な鎧で俊敏に迫ってくる少年。その怒りに、気おされてしまった。
無理もない、彼女は『ただの一般人』なのだから・・・。とはいえ、退く気はない。このままやられっぱなしでは性にあわないのだ。
「さて、リベンジよ!」
遠坂は、路地裏で拳を握り締めて意気込みを示した。なるほど、敵の能力が明らかになって作戦も立てた。よって、負けるつもりはないのであろう。
その意気込みに、神器であるルビーも賛同する。
『その意気です!さあ、やっちゃいましょう!』
「お～・・・」

まあ、イリヤはやや足取りが重い。またアレと戦うのか。と思うと気が重くなってしまった。とはいえ、既に変身しているので引き下がる気もないようだが。

ここで引いたら、いくらなんでもヘタレが過ぎると思ったのだろう。長生きできないタイプだ。

「作戦は簡単よ。この路地に罠を仕掛けたわ、ここに誘導して捕縛して〆る！」

「ちっとも魔法少女っぽくない・・・」

どちらかというと、敵の作戦のようだ。それも、すぐに失敗するパターンである。とはいえ、作戦は簡単なほうがいい。自分では覚えられないからだ。

「ルビー、この町の地図は記憶しているわよね？」

『ええ、もちろんです。ばっちりナビ可能ですよ』

「なら、あなたたちは身体能力を強化してビルの上を走ってあいつを見つけるかあいつに見つかって、で、ここまでつれてきなさい」

「やっぱり・・・」

当然のように、誘導役は自分である。まあ、機動力と防御力が高いのは自分のほうなのだから、当然である。

とはいえ、アレとほぼ単身で向き合うのはどうしても度胸がいる作業だった。まあ、行くしかないわけで・・・。

「いってきまーす！」

「今日中にけりをつけるんだからね！」

遠坂からの叱咤を背に、魔法少女は身体能力を強化してビルの屋上へと跳躍した。地味だが、明らかにチートである。昨日の今日でここまで使えるようになるのだから、それこそゲーム感覚に近い。

それにしてもふと思ったのだが、この町では6人もあんなのが暴れているわけだ。どうして何のニュースにもならないのだろうか。

「ねえ、ルビー。昨日の被害って結局どうなったの？」

『なかった事になっていますよ』

「え？」

『ですから、この町では『そんなことが起こらない』ようになっている

んです』

外宇宙のエネルギーは、他でもない兵藤一誠にとって非常に繊細な部分に深く関わっている。それをしっているディオドラは、期間限定、範囲限定ながら超常現象による町や人への被害をなかったことにしているのだ。

『まあ、あの国賊がその気になれば、これぐらい簡単ですよ』

つまり、この町でのみならば、魔術師が魔術で人を傷つけてもその事実が改ざんされるということだ。たとえ、この町を吹き飛ばすような攻撃があったとしても。それは、外宇宙のエネルギーによるものも同等の効果が発動する。既存の物理法則以外なら、という話だ。

「なんだか・・・よくわかんないけど、その人がその気になればカードの回収なんてすぐなんじゃ？」

『ええ。もちろん可能です。指の一振りでどうとでもなります』

言ってしまえば、彼女たちへの懲罰以外の何者でもない。イリヤはそれにつき合わされているだけなのだ。

尚のことテンションが下がる。まあ、正直いきなり世界の命運を背負わされても困るのだが。そういうのは、作品が終了する少し前ぐらいにしてほしい。こちらは初心者なのだ。

「・・・考えるのをやめよう」

『それでいいですよ。あの規格外に対して色々思案するのは時間の無駄以外の何者でもありません』

夜の街を、ビルからビルへ飛び移っていく。そのスピード感は半端ではない。乗り物ではない、自分の足でそれを行っているという事実も心を高揚させる。

同時に、彼もそうなのだろうか、と思ってしまう。自由であると叫びながら、町を駆け抜ける彼を思う。カードの暴走、それは一体何に由来するのだろうか・・・。果たして、本当に打ち倒していいのだろうか？

「うっぜえええええええええええええ！」

そんな甘い考えも、いともあっさり吹き飛んだ。何のこともない、相手は本気でこっちを殺す気なのだ。それも、敵対行動らしいことも

せず、ただ立っているだけで。これはもう排除するしかあるまい。
「きゃあああああああああああああ！」
　可愛らしい悲鳴と共に、作戦通りの逃走を始めるイリヤ。もちろん、作戦がなくても逃げ出しただろうが。
　そこで、ふとある事実に思い至る。そう、そもそも、相手はこちらよりも早いのではないのだろうか？
「多角形ドリフトシュート！」
　即座に自分の進行方向に回り込み、その鉄に覆われた脚で蹴ってくる。逃げるべき方向とはまるっきり反対方向へ蹴り飛ばされる。
　そう、よく考えてみれば、逃げれば追いかけてくるだろうが向こうの足が早ければ即座に追いつかれてしまう。もう、作戦は最初の段階から破綻していたのだ。
「凛さんのばかぁ～～～！」
　とはいえ、物理保護が効いている。これならば十分に受けきれる。実際、痛みは全くない。これは、ルビーが優秀というよりも向こうが『攻撃力』が低いということだろう。
　よって、防御に全力を割かずとも十分に受けきれるということだ。
『イリヤさん、反撃ですよ！』
「うん、分かってる！」
　よくよく考えてみれば、この距離ならば追尾弾を高い威力で撃てる。速度も十分だろう。
「追尾弾！」
　ステッキを大きく振ると、多数の魔法力の弾丸が発射される。その威風たるや、見るからに頼もしい。
　高速で発射されたそれは、物理法則にあるまじき軌道でパワードスーツに追いすがる。
「馬鹿が！俺についてこれるか！」
　少年は、当然のように回避を開始する。その速度は、おそらく俊敏性を捨てたものであろう。とにかく真っ直ぐイリヤから離れていく。それはつまり・・・。
「あ・・・あっちは・・・」

そう。イリヤの逃走方向に回り込んでいた彼が真後ろに逃走するということは、即ち誘導地点へ自主的に向かっているということである。

それを察したルビーが、追尾弾を巧みにコントロールして進行方向を塞ぎ、そして・・・。

「あああああああ!?」

屋上に、遠坂が準備していた拘束魔術罠。それが見事に発動して彼を宝石の輝きを持つ鎖で拘束した。さしもの高速のパワードスーツも、あらかじめ設置されているものより早く動くことなどできはしない。そして、動きが止まったものが追尾弾をかわせるはずもない。

予定とは少々食い違いがあったが、結果的には想定以上に鮮やかに、拘束と攻撃の見事なコンビネーションが炸裂した。

「くそったれ!」

無防備なまま、ビルが半壊するほどの破壊力が、いや実際に半壊させた破壊の弾丸は見事に対象を捉えた。しばらく、砂埃が舞い落ちる。それは、圧倒的な破壊以外の何ものでもなかった。

それをみた遠坂は、ガッツポーズをとって、軽やかにジャンプしそのビルの近くの屋上に着地した。

「いよし!作戦通り!」

「何処が!?」

完全に計画は破綻しており、うまく言ったのは単なる結果論である。まあ、うまくいけばそれでいいのだろうが。

カードの暴走体だけではなく、ビルまで吹き飛んでしまった。果たして、どれだけの被害が発生したのだろうか。それを思うと、イリヤは頭が重くなる。

しかし、突如としてビルは元の威厳を取り戻した。それこそ、何事もなかったのだと・・・。その異様な光景に目を奪われる。なるほど、これだけの力が有るのであれば、町でいくら暴れても問題がない。

と、納得していると・・・。

目の前に、先ほどまでのパワードスーツを来た少年が拘束の解けた状態で立っていた。

「そんな！確かに直撃したのよ！」
「ルビー！まさか、この修理って、アレにも適用されるの！」
『違います、アレは素の防御力です』
考えてみれば、接近戦をすることを想定しているにもかかわらず、足が速いだけというのはありえない。おそらく、速度と持久力だけではなく『耐久力』にも多くを割いているのだろう。
俊敏性に目を奪われていたが、どうやら低いのは攻撃力というか腕力だけで、それを補うために速度を上げて頑丈な体をぶつけていたのだろう。
「カブが、世界最強の車であるカブがこんなもんで壊れるかよ！」
その咆哮に、どれだけの意味があるのやら。とはいえ、さすがにルビーのそれほど強固ではないらしく、鎧はある程度損傷し、顔が明らかになっていた。
その顔を見て、遠坂は無傷以上に衝撃を受ける。
（・・・なんで、『調和』と同じ顔をしているの？）
人相はだいぶ違うが、それでもよく知る人物の顔と瓜二つだ。だが、彼であることなどありえない。彼ならば、この『星』ごと自分を始末するのはたやすいはずだ。
だが、どうして・・・？そんな困惑にイリヤが気付くはずもない。うろたえて、追撃をかまそうとする。だが、当たるだろうか。そして、当たったとしてどの程度の効果があるのだろうか。
「収束・・・発射！」
無機質な言葉と共に、パワードスーツに風穴が開いていた。それは、間違いなくステッキの魔法弾。
自分が背後から放たれた弾丸によって敗北したことに気付いた少年は、呆然としながら自分の体を撫でた。
「・・・またなのか？」
その言葉には、怒りよりも無念が込められていた。自分が死ぬことが理解できないというよりも、それを受け入れたくないという想いが感じられる。
「・・・また、ろくに戦えず・・・」

少年は、まるで幻だったようにその姿をなくし、そこには一枚のカードが残った。

そのカードを回収したのは、やはりもう一人の魔法少女だった・・・。

その内容を確認して、サファイアの少女は一人つぶやく。

「ライダー・・・」

器を意味する円の中に魂を意味する炎。そして、騎兵を意味する『ライダー』と書かれたカードは確かに彼女の手の中に収められた。

ニンジャ≠アサシン

正直、ライダー撃破の後何があったのかを語る必要性は全く無い。原作に準拠しているからだ。

ライダーのカードはルヴィアが得て、そのあと遠坂と素手による喧嘩になり、そのまま痛み分けとなった。翌日、美遊がイリヤのクラスに転校してきて・・・『貴女は戦わなくていい』。お約束のパターンである。

正直な話、ただそれだけのことである。

だが、次の対戦相手は当然のようにキャスターではなかった。キャスターのカードを持つ彼は生きている。ブレイブハートD×Dの主人公として。

よって、彼女達4人の前に立ちふさがったのは別のカードを核にするもの。アサシンであった。場所は原作においてキャスターと交戦した箇所、鉄橋の近くである。

「正体不明のエネルギー、つまり外宇宙のエネルギーが観測されたのは確かにここのようね」

遠坂は、怒りすら感じながら目の前にいるルヴィアを睨みつけていた。その脇にいる、サファイアの契約者美遊のことなど眼中にない。それほどまでに、彼女はルヴィアに怒りを燃やしていた。

それはルヴィアも同様である。残り五枚、全て独占する腹だったというのに、よりにもよって全く同じタイミングで同じ相手を狙うことになるとは。いや、むしろこの状況を利用して彼女を討つべきなのかもしれないとすら思っていた。

「どうして、あっちもココに気付いたんですの?」

『それは、同じ性能の姉妹機ですから。こちらが一つしか発見できていない以上、向こうも同じところに来るのは当然かと』

サファイアの返答は、明らかに『そんなことも分からないのか?』といわんばかりである。まあ、確かに自分たちだけ気付いていると思うのは、虫がいい。

「大丈夫です。私が必ずカードを・・・!」

決して吼えることはないが、美遊の表情と決意は固い。少なくとも、遊びの延長で考えているイリヤよりも彼女は真面目だった。

とはいえ、現状いるはずの敵は見当たらない。先日は、われ此処にありと言わんばかりに爆走していたライダーとはえらい違いだ。アサシンなのだから当然だが、それは神ならぬ彼らには理解の及ばないことである。

いずれにせよ、優れたセンサーを持つカレイドステッキが二つある以上、そもそも場所が特定されている以上、発見できない理由は無いのだが。

『え～～～、あそこですね』

『はい、確かにいます』

言うまでもないが、姿を隠すというのは何処にいる誰でも思いつきそうな手段であり、同時に対策を立てるべきことでもある。よって、アサシンが隠れていても、それを見つけるセンサーを二人が持っていればそれも無意味であった。

二つのステッキが、手のように動く羽とリボンで指差した先は、鉄橋の裏、本来人のいるべきでない場所だった。

「あそこ？」

『はい、熱源を感じます』

「あそこに隠れているって、まるで忍者ね」

その言葉に答えるように鉄橋の裏から地面に降り立ったのは、黒い忍装束に身を包んだ少年、らしき影だった。ぶっちゃけ、まさに忍者といわんばかりの姿である。むしろ、忍者以外の何者でもなかった。

「アイエエエ!?ニンジャ!?ニンジャナンデ!?」

と、この上なく露骨に驚いたのはルヴィア一人だけである。というか、奇声を発したというべきであろう。なんの意味があるのか分からないが、とにかく驚いたのは確かだったようだ。

他の面々、それこそステッキすらも呆れている。遠坂すらも、笑うよりも呆れていた。哀れんですらいた。

「平安時代の日本をカラテによって支配したという半神的存在が敵だというの?!」

「「違う！」」

生粋の日本人である遠坂と、日本で育ったほとんど日本人のイリヤは即座にそれを否定した。忍者とはなにか、と専門的に答えられるわけではないが、少なくとも平安時代に空手は存在しない。

少々専門的な話をすると、忍者はそもそも間諜の類であり機密情報を収集することを生業とする、要するにスパイである。忍者という言葉は近年の創作であり、実際は忍術使いとかすっぱとか、地方によって様々だったという。平安時代とは行かないが、鎌倉時代ごろには忍術はもう存在したらしい。

言うまでもないが、そもそも戦闘を専門とせず、どちらかというと盗賊に近かったらしい。また、火遁の術とか土遁の術などは確かに存在するが、火を噴いて攻撃するとか地面をたたみのようにひっくり返して攻撃するとか、そういう代物ではない。

火遁とは家に火をつけて逃げる、土遁とは土に埋もれて隠れる、水遁とは追っ手に熱湯をぶちまける、木遁とは林に隠れたり木に登ること等を言う。というか、『遁』という字は遁走という言葉からも意味するとおり逃げる、という意味である。

まあ、そうした勘違いは近年に限った話ではなく、江戸時代にも誇張された存在として面白おかしく忍者を語っていることもあるので、別に現代のイメージ、というものではない。

スパイというものに、裏家業としてのある種の神聖さを感じた一般市民の憧れというか勝手なイメージは昔からあったようだ。

しかし、その言葉に思うところでもあったのか、当の忍者は暫くこちらに向けて殺意を向けることはなく、いきなり礼儀正しく頭を下げた。

「ドーモ。イッセイスレイヤーです」

「オジギ!?やはりニンジャ！」

謎の判断基準であった。少なくとも、昔の武将やサラリーマンではないのだから、こうして正面から名乗るのは間諜としてはありえないことだ。一体、二人は何処の世界のニンジャをイメージしているのであろうか。まあ、ルヴィアはそれを妄信しているようであり、忍者装

束の少年はその夢が壊れないように配慮しているようだ。
　とはいえ、アイサツをされたのだ。答えねばタイヘンシツレイである。ルヴィアは少々赤面しながら深々とオジギをする。案外、日本に来てニンジャに会ったらしてみたかったのかもしれない。それほど、迷いなく彼女は頭を下げていた。
「ドーモ。イッセイスレイヤー＝サン。ルヴィアです」
「・・・ドーモ。トオサカです」
「・・・ドーモ。イリヤです」
「・・・ドーモ。ミユです」
『ドーモ。サファイアです』
『ドーモ。ルビーです』
　こうなると、残った面々ももはや頭を下げるしかない。実に礼儀正しく、全員深々と頭を下げる。ステッキすら、柄をまげて頭を下げたようにしている。結果的に、全員でルヴィアの幻想を守ったのだ。ムラハチを恐れるニホン人らしいアクションである。
「敵は殺す、慈悲はない！イヤーッ！」
　わざわざ前置きをして掛け声と共に襲い掛かってくるアサシン。おそらく、その言葉にも何かしらの意味があるのだろう。ルヴィアは嬉しそうに笑いながら目をキラキラとさせている。サービス精神旺盛で、随分律儀なニンジャである。だが、此処まで堂々としていると完全に忍者ではない。
　或いは、忍者らしく振舞うよりも『ニンジャ』を期待している人を裏切らないというのが彼の忍道なのかもしれない。悪い人じゃなさそうだ。ルヴィア以外の全員がそう思うほど、彼は期待に答えていた。
「ミユ！きっとニンポを、ブンシン＝ジツを使いますわ！散弾の準備を！」
「え？・・・はい！」
「相手にしちゃ駄目よ！正面から来ているのに、わざわざかく乱なんて・・・！」
「うん、分かってる！」

分身を警戒するルヴィア。それに疑問を憶えつつ応じる美遊。そんなことはあるまいと断じる遠坂。イリヤも同感であった。そもそも、分身の術を使うのであればこうして姿を現す前に使うはずだ。目の前に姿を見せた時点で、使う意味は半減している。

だが、その言葉にも思うところがあったのだろう。忍者は一旦襲い掛かるのをやめにして暫く考え込んだ後、手をせわしなく動かして印を組んだ。ぼんっという効果音と煙とともに、忍者の姿が４人に増えている。どのような原理かは知れないが、この上なく律儀に全員の目の前で分身の術を使って見せた。もう、忍者ショーと化していた。

「ブンシン！ブンシン＝ジツですわ！」

「・・・本当に分身した」

「どうしよう、凛さん。この人、いい人だよ。凄くいい人だよ」

「そうね、ある意味やりにくいわ・・・」

子供のように目をキラキラとさせながら腕をぶんぶんと振るルヴィアを他所に、他の３人は呆れていた。物陰に隠れてこれをやれば、陽動として分身を動かしこちらに隙を作ることもできただろうに、目の前でやるとは戦術上ありえないことである。手品の種明かしをするなものだ。

とはいえ、目の前の標的が４倍になったのは脅威と言っていいだろう。さて、どれが本物なのか。見破るのはステッキの仕事だが、さて。

『・・・マズイですね。アレ、全部本物です』

『重力センサーに感あり。どれも実体があります』

なんと、実体のある残像、ではなく分身とは恐れ入る。実体がある以上、偽物であろうが本物であろうが回避するないし防御の必要がある。保護を受けている魔法少女の二人ならばともかく、ほぼ無防備の二人には辛いだろう。

「スリケン！きっと次はスリケンですわ！」

その言葉に答えるように、４人の忍者は懐から何かを取り出しこちらに向けて輝く何かを投擲してきた。もはや、なにも驚かない。魔法少女二人は障壁を展開して遠坂とルヴィアを守る。

しかし、なんということか。昨夜はライダーからの高速打撃を何度

受けてもヒビ一つ入らなかった障壁にその投擲物は突き刺さっていた。

その事実に震撼する二人の魔法少女。それ以上に驚愕したのは当のステッキである。優れたセンサーを持つ二人は、この投擲物が単なる鉄の塊に過ぎないと見抜いていた。だというのに障壁を貫きかけたのである。あってはならないことだ。

『そんな！物理障壁を半分貫かれるなんて～！』

『美遊様。すみませんが、何を投げられたのか確認したいので手にとっていただけませんか？』

この宇宙に存在しないエネルギーを使用したことは確かであろう。確かに手にとって確かめる必要もある。障壁を一旦解除して、地に落ちたそれを確認する美遊。それをみて、彼女は青ざめた。障壁を維持したまま彼女をかばいつつ、一緒にそれを見たイリヤも同様であった。

どう見ても、手作りだったのである。いや、忍者の武器だというのであれば、なるほど確かに大概は工場生産ではなく鍛冶職人の手によるものであろう。だが、二人が見たそれは明らかにホームセンターで売っていそうな鉄板を素人が加工したものだった。本当に、ただの刃もない十字手裏剣の形をしている何かだった。

こういうときのために、わざわざ作ったのだろう。ニンジャなのにスリケンがなかったらガッカリしちゃうので、まさか空気中からスリケンを生成することなどできないし、仕方ないので自分で作ったのだろう。あらかじめ。

「凛さん。やっぱりこの人超いい人だよ。倒せないよ」

「うるさいわね！こっちは一族郎党どころか先祖と子孫の尊厳がかかってんのよ！やりなさい！」

「きっと、今度はカラテですわ！」

「もういいです・・・」

案の定、というかやっぱり四方を囲んで一斉に襲い掛かってくる忍者４人。なんとも義理固いことに、わざわざ素手である。

「イヤーッ！」「イヤーッ！」「イヤーッ！」「イヤーッ！」

とはいえ、その籠手に覆われた腕は明らかに輝き、何がしかの外宇宙のエネルギーを秘めていた。

それがなんであるにせよ、まさかお手製手裏剣よりも弱いということはあるまい。魔法少女は、障壁の範囲を広げてルヴィアと遠坂を守りつつ、その出力も先ほど以上に上げた。

だが、それも結果的に無意味である。四方からのカラテチョップは全て肘まで障壁を貫通し、そのまま突破しようと押し込んでくる。もしや、このまま４人は同時に殺される運命なのだろうか。いや、それはありえない。この場に魔法少女は二人しかいないが、魔術師も当然いるのだ。

「「炎色の荒嵐!!」」

障壁が破壊されるや否や、二人は四方へ宝石をばら撒いた。その後、四方を吹き飛ばす大爆発。あらかじめ宝石に術式や魔法力を込めておくことでワンアクションで大魔術を展開できる宝石魔術によって、４人は死地を免れた。だが、それもあるいは想定内だったのだろう。吹き飛ばされた本体は別として、三つの分身はただ煙のように消えるのではない。全身を雷に変えてこちらへ抱きついてきたのだ。

その電撃たるや、如何に保護を受けているとはいえ戦闘経験の余りない魔法少女二人と、ほぼ防御のない二人には大きくダメージを与えていた。

感電は、人体にとって損傷以上に深刻な麻痺を引き起こす。デンキウナギが生態電流で狩を行うことは周知の事実であるが、それに限らず多くの生き物は体の神経で電気のやり取りを行っている。よって、感電すると精神でどうこうできるレベルではなく体内の神経の命令が乱されてしまうのだ。

よって、４人はまともに立つこともできず地面に倒れた。

『イリヤさん！もう治療は開始しているので、安心してください！』

『行動可能まで、あと１０秒です！』

なんということだろうか、戦闘中に４人全員が行動不能になるとは。これは、もはやＲＰＧでは全滅扱いである。しかし、伝説の勇者でもない彼女たちは教会で所持金を半分奪われるだけではすまない。

敗北は死と同じである。
そして、輝く何かの謎も解けた。おそらく、スリケンやチョップが障壁を穿つ威力を持っていたのは、あの雷のようなものに由来するのだろう。それを武器や体に纏わせて貫通力を向上させていたのだ。
『速度は昨日のライダーと同等ですが、攻撃力が段違いに高いです！』
『姉さん、ここは一旦離脱を・・・？』
唯一、感電を免れていた両ステッキは、優れた思考速度によって撤退をしようとしていた。とはいえ、つい先ほどまで全力で防御していた二人である。即座に転移とは行かなかった。数秒から十数秒を要するかに思えたが、そこにいたってようやく二人は敵の状況を知ったのだ。
雷となって掻き消えていた分身とは違い、吹き飛んでいた本体は、そのまま大の字となって倒れていたのである。
神ならぬ彼女たちにはわからない事だったが、この忍者がルヴィアのリクエストに応じて行った分身は、一つ一つが雷でできた攻撃用の囮なのだが、その高性能ゆえに消費は激しく同時に操れるのは3体のみ。加えて、出すとものすごく疲労する。
また、それ以前に忍者は防御が薄かった。昨日の敵同様の速度に加えて魔法少女の防御を上回る攻撃力の持ち主であった忍者ではあるが、防御力は昨日の敵よりも低かったようだ。
「・・・え～？」
ダメージから復帰しつつあったイリヤは呆れてしまったが、美遊はもう言葉にならなかった。なんという間抜けな忍者だろう。高い隠密性と機動力、こちらの防御を突破する攻撃力、かく乱する技を持ち、かつ防御が低いにもかかわらず正面から挑むなどあってはならない。
昨日の敵は昨日の敵で、明らかに正気ではなかったが、今日の敵も正気には見えなかった。なんというか、技の一つ一つは威力も精度も良かったが、明らかにリクエストに答えたがっていた。その結果、身を滅ぼしている。
「・・・くそ・・・」
忍者は、ぼろぼろになった体を必死に起こしながら立ち上がった。

頭巾に隠れていたその顔は、人相こそ違うものの明らかに昨夜の敵と同じ顔である。

「・・・だって、だって・・・」

忍者らしくもなく、文字通り必死で言い訳をしようとしていた。

「だって、こんなことができるって、自慢したかったんだ・・・。毎日、必死で練習して・・・」

どうやら、誰に褒められることもなく一人で黙々と練習していたらしい。なので、誰にも褒めてもらえなかったようだ。それを思うと、別に自分が倒したわけでもないが余計気がめいった。

「技を披露するより先に、何もできずに・・・敗退した・・・。悔しかったんだ・・・」

その顔は、怒りではなく昨夜の敵同様の無念で包まれていた。火傷だらけの体は、少しずつ光になりつつあった。それは、明らかに死を意味していた。

「・・・サヨナラ！」

しめやかに爆発四散することはなく、しかし幻のように消えていく忍者。祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を表す。

誰からも賞賛されず、その修行を無意味に終わらせてしまった忍者は、６人の前で最後の最期までニンジャを貫いた。あるいは、自分にニンジャを求めてくれたルヴィアのために・・・。

カードが舞い落ちた。太極図の上に、木、火、土、金、水からなる通常の五行相関図ではなく、風、火、土、雷、水からなる五行相関図が描かれた、アサシンのカードが。

それが、おそらくそのカードの司っていた外宇宙の五行相関図だったのだろう。それを手に取った美遊はやはりこれがこの宇宙のものでも自分の宇宙のものでもないと確信する。

なお、イリヤは未だに感電から抜けきらない二人の介護を行っていた。その背中を見ながら、美遊は自分ひとりならばもっと酷い結果になっていたことを確信する。

少なくとも、自分はともかくルヴィアを守りきることはできなかっ

た。二人だから、背中を預けることで四方からの攻撃に耐えられたのである。

思えば、昨日の戦闘も彼女が隙を作った後のことだった。いくらなんでも、ここまで相手が非効率的な戦闘をしたとはいえそれでもこの惨状。自分とルヴィアだけでカードを集めきれると勘違いしていた自分の不明を恥じていた。

「流石はニンジャ・・・デンキ・カラテとは・・・」

「うっさいわね！もう黙ってなさい！」

とはいえ怪我はかるく、二人はルビーの治療を受けて復帰しようとしていた。よかった、これで・・・

「エクスカリバー！」

あまりにも考えが甘かった。昨夜は自分たちもしたことだ。勝利を確信した背中を狙うのは。

失われた聖剣の名前を持つ手刀が、こちらに向けて地面を振り下ろされる。光の速度の斬撃が、その場の全てを切り裂いた。

セイバーのエクスカリバー

セイバー、聖杯戦争においては最優のクラスとされる剣の英霊。
無論、聖杯戦争の知識のない遠坂やルヴィア、イリヤやカレイドステッキはそんなことを知ることはない。美遊も、クラスカードを確認していない以上敵のクラスがセイバーだと知ることはない。
だが、見るだけで分かる。目の前にいるやたらぼろぼろのタンクトップにダメージジーンズの少年は、今までで最強の敵だと理解できた。
手刀一閃。大地は底が見えないほど深く切りつけられ、その先にある鉄橋もすっぱりと両断されていた。その、素手の少年の一撃に、6人は言葉もない。
「今のはわざとはずした。さっさと体制を整えて構えろ。格の違いを教えてやろう・・・」
やはり、ぼろぼろのバンテージを撒いた拳をこちらに向けて、宣戦を布告する。その目には、激しく攻撃的な感情が見て取れた。
先日といい先ほどといい、カードの暴走体はどうやら感情が極端になり外からの刺激に対して敏感になっているようだ。どうやら、彼はこちらに対して酷く怒っているらしい。
『皆さん、撤退を前提に行動しましょう。信じがたいでしょうが、敵の攻撃速度は〝超音速〟です。測定では、マッハ5を超えています。これは、測定できる範囲の上限がマッハ5だからです。それよりもはるかに早いです』
『・・・ただし、撤退の魔方陣を準備しても、敵が攻撃してきた場合結界ごと切り裂かれます。よって、転移の魔方陣を数秒間防衛する必要もあります』
「なるほど、完璧な作戦ね。不可能という点を除けば」
「超音速の攻撃を放ってくる相手に、数秒間。気が遠くなりますわね・・・」
怪我から復帰した二人の魔術師は、数字上の強さ以上にある事実に戦慄していた。

先日のパワードスーツ。先ほどのニンジャ。どちらも顔は倒す直前しか見えなかった。だが今は違う。相手は、明らかに自分の知っている顔だった。

自分たちのせいで、意識不明にしてしまった、あの調和なす異形に余りにも酷似している。

「あのライダーも、たぶんさっきのアサシンも、おんなじ顔をしていたわね」

「だとしたら、この一件はやはり2位に深く関わっていると?」

「もともと、外宇宙のエネルギーを所有しているのは無敵の怪物ただ一人。とくれば、必然だったかもね・・・」

研究者としての好奇心が、くすぐられる。そして、それ以上にその顔に恐怖する。兵藤一誠は、それほどまでに畏敬の念で見られているのだ。

だが、とうぜん当人ではありえない。もしも当人ならば、こんな程度の圧力ではありえない。ディオドラの怒りに触れた彼女たちだから分かる、確かな事実だ。であれば、戦うだけだ。

「ど、どうしよう!?」

「落ち着いて!必ず何か策は・・・」

突然の敵襲にうろたえる魔法少女だが、そもそも策など出てこない。戦力は現在が最高であり、これ以上などありえない。だが、目の前の相手は明らかに先ほどのアサシン以上。おそらく、強さの絶対値はこちら全員を合わせた分より上だ。

「二人とも、慎重に行くわよ。倒すにせよ、逃げるにせよ、まずは手の内を把握しないと・・・!」

「まずは、攻撃あるのみですわ!」

その言葉に答えるように、二人の魔法少女は魔術師と共に攻撃を開始する。

「まずは、散弾!」

イリヤと美遊は、全く同時に面制圧型の散弾を放つ。それは、周囲一帯を埋め尽くすほどの量があったが、そのことごとくが地面に到達する前に縦横の4っつに切り分けられて霧散する。

「うそ、全然効いてない！あたりもしないなんて！」
「届かない。その前に切り裂かれる！」
『お二人とも、次は収束ですよ！』
『こちらは、誘導弾です！』
ステッキの提案の元、二人は別々の攻撃を仕掛けた。イリヤは魔法力による収束砲を発射。美遊は魔法力を込めた数十発の弾丸を弧を描くように発射する。
イリヤの直線の攻撃と、美遊の円の攻撃。どちらも、必殺の気迫をもって殺到する。
「遅い。ハエが止まるぞ！」
少年にとって、そのこと如くが止まって見えるほど遅い攻撃だった。止まっているのであれば、如何なる軌道で向かってこようと、数がいくらあろうと無意味。一切の例外なく、霧状になるまでバラバラに切り裂く。
だが、その隙に二人の魔術師は対魔獣用の拘束術式を完成させていた。どれだけ早くとも、拘束してしまえば無意味だ。少年の四方に投擲で設置された宝石から、黒い鎖が現れ、絡みつく。
だが、それすらも止まって見えたのだろう。少年は気合一閃、鎖を地形や宝石、魔術式ごと切り裂いた。
「くそ、高い宝石をスパスパスパ斬ってくれて！」
「出し惜しみしたら許しませんよ！」
その全てが無意味だった。背筋が凍るほどに、圧倒的な蹂躙だった。手数では勝っている。その思い上がりを叩きのめすように、少年の手は消えるように早く動き、あらゆる攻撃を『切断』していく。
無手の剣士は、無数のバリエーションを持つあらゆる攻撃を、極限まで研ぎ澄まされた一芸で切り裂いていく。そんな攻撃を、誰かがこう呼んでいた。
『レベルを上げて物理で殴ればいい』と。
補足する必要はないかもしれないが、カレイドステッキは非常に優秀な神器である。散弾も収束も、どれも多くの局面で使用できる優れた攻撃だ。だが、こうも速度域で後れを取れば、もはやどう攻撃した

所で勝ち目などない。
　手詰まりだった。魔術師は所持していた宝石を使いきり、あとはガンドくらいしか攻撃手段は残っていない。加えて、カレイドステッキによる砲撃パターンも使い切ってしまった。
　肩で息をしている４人に対して、タンクトップの少年は涼しげな顔で宣言する。
「ふん、どいつもこいつも鈍すぎる。こちらはまだ第七感にすら至っていないというのに・・・ハエが止まるような遅い攻撃ばかりで、寝てしまうところだったぞ」
　今度はこっちの番だ、といわんばかり右手を手刀の形で高だがと振り上げる。
　それは、少年にとって、短い人生の全てを費やした珠玉の一撃。最強の聖剣の名を借りた、それに恥じぬ万物の根幹、原子を砕く、否切断する一撃。無手の少年をセイバーたらしめるその名も・・・
「エクスカリバー！」
　もしも、この場で彼の攻撃を完全に見抜くことができるものがいたとすれば、大上段から振り下ろされた手刀は、そのまま凄まじい速度で斬撃を放ち続け、その場にいた４人をずたずたに引き裂くところを視認できたであろう。
　だが、攻撃を受けた４人にはそんなことを知覚できるはずもない。少年にしてみれば大いに手を抜いた一撃であっても、全員にとっては時間でも止めたかのように早すぎた。
「は、早すぎる・・・」
「攻撃の後に音が・・・やはり超音速の・・・」
「痛い、痛いよう・・・」
「なんとか、しなくちゃ・・・！」
　死屍累々。空高く吹き飛ばされ顔面から地面に激突した彼女達をみて、少年はさらに怒りを燃やしていた。
「超音速だと？ぬかせ！俺の攻撃がそんなにすっとろいものか！この俺はすでに第八感に至り光速の域に達している！貴様等如き音速すらも出せない青銅以下に、後れを取るものか！」

手刀を右から左へ一閃。同時に、地面に亀裂が走り周囲は悉くが切り刻まれていく。当然のように、地面は修復されていくが、超常の住人である4人はその保護下にない。ダメージは蓄積していくばかりである。むろん、魔法少女の二人は治療されるが、とてもではないが追いつけない。

「この俺の『小宇宙』は、誰にも負けない最強のエネルギーだ!だが、なぜだ!その俺が死んで、どうしてお前等が生きている!」

全てを両断せずにはいられない、鋭くとがった攻撃的エネルギーを纏い、少年は絶叫する。その傷だらけの体を見せ付けながら、なおも叫ぶ。

「どうしてだ!俺は、必死で頑張ってきたというのに!アテナに仕えていないにしても、聖闘士にも負けない決死の修行をこなしてきたというのに!何故だ!何故だ!」

激しい炎のように、怒りを燃やして攻撃を続ける少年。その目には、強者の余裕など一切ない。何もできず成せないまま死んでしまった、悲しい負け犬の遠吠えだった。

「世の中の理不尽を、不条理をたたっきるために、毎日全力で鍛えてきたんだぞ!それが、どうして、どうして!」

(やはり、暴走している・・・!)

美遊は、ステッキの自己再生機能によってなんとか意識を保っていた。そして、その明晰な頭脳で状況を必死に整理していた。

なるほど、敵は圧倒的に強い。その速度と攻撃力はアサシンやライダーとは比べ物にならない域だ。おそらく、それ以外の全てを切り捨てている。これを破ることができれば、それだけで相手は手詰まりになるはずだ。だが、どうやって?

美遊の常識において、光よりも早いものは存在しない。物体に力を加えれば動き、加速していくが、光の速度に近づけば近づくほどエネルギーは速くなり難くなり、重量を増していく。

よって、考え方によっては相手の光の速度の攻撃も字面ほどの脅威ではない。もしも真実光速ならば、その一撃はどんなに軽いものだったとしても無限大の威力を持つからだ。おそらく、外宇宙の法則に

よって、光速は出せても重量は上がっていないのだろう。
だが、だからなんだというのだ。自分たちには余りにも速度が足りない。
「・・・次で決めてやろう。この俺の最大の拳で！」
４人は、わずかに残った意識の中でタンクトップの少年の背後に膨大な何かを見た。それは、ある種の宇宙だった。
それは、本来人が人ならぬものと戦うために使うべき力。聖なる鎧を身に纏って放つその技は・・・。
「ＥＸ・・・」
人間に放てば、必ず死ぬだろう。
美遊は、無意識にライダーとアサシンのカードに手を伸ばしていた。これが、或いは自分たちに力を貸してくれれば、この状況を打開できるのかもしれない。そう思い、腰のホルダーに何とか手を伸ばした。だが、答えることはない。
やはり、『特別な条件』を満たしていないからだろうか。だとしたら、余りにも悔やまれる。自分は、幸せにならなければならないというのに。そうでなければ、余りにも兄が報われない・・・！」
「カリバー！」
夥しい光が、一瞬瞼の裏にまで真っ白に染め上げた。それは、死を覚悟させるには十分すぎる代物だった。
だが、体に苦痛はない。恐る恐る目を開けると、底には手を掲げたまま首から上がなくなっている、少年の立ち往生している姿があった。
先日のライダー同様、知覚外の攻撃によって絶命されたようである。
「・・・一体、誰が？」
皆が、何とか体を起こして互いを見合わせる。しかし、誰もがこの現象を理解できない。何者かが、自分たちを援護してくれたのだろうか。では、一体誰が？
「案外、正義の味方だったりして？」
ややふざけた調子で、イリヤは照れつつも言ってみた。実際、自分

は魔法少女などをやっているわけであるし。その言葉に、真面目に悩んでいた遠坂は満身創痍の体で叫んだ。

「正義の味方なんて、いるわけないでしょうが！」

「いるさ、ここにな！」

狙い撃つアーチャー

「いや～言ってみたかったんだよ、これ」

上下がジャージの少年は、やはりセイバーと同じ顔をしていた。ただ、その人相は落ち着いているというか、軽い。得意げにへらへらと笑っている。

「ピーターパンさ！とかいいや、おしまいさ！ってかんじで、颯爽と登場するの。この能力にするって決めてから、ずっと色々台詞を考えていたんだけど、これが一番言ってみたかったんだ。こ～ぶら～♪」

絶体絶命の窮地を救ってくれた少年は、何を思ったのか全員の前でいきなり熱唱をはじめた。どうやら敵ではないようだし、話も通じているようだが、やはり暴走しているらしくテンションがおかしい。傷だらけの４人を前に、好きであろう歌を伴奏もなく歌い始める。しかも、特別上手でも下手でもなかった。微妙な感じである。というか、歌詞の英語の部分が非常に適当である。

（（（どうしよう、お礼を言わないといけないけどスッゴイむかつく）））

ヒーローというか、お調子者だ。感謝したいが、この軽いノリには付き合えない。特に、今は体中が傷だらけなので。

考えてみればいい。つい先ほどまで決死の覚悟で交戦していたら、突然の救世主が！歌って踊りだしたのである。むかつくだろう。

「はっ！いかんいかん。つい歌ってしまった。うん、今日はそんなことをしている場合じゃないのに」

思い出したかのように、先ほどまでセイバーの立っていた場所に向かう。そこには、無数の星座の描かれたカードが落ちていた。

「この模様は・・・やはり、小宇宙。聖闘士星矢だったのか・・・セインセイヤーッ！」

再び歌って踊りだした。しかし、歌の中盤で我に返ると、ぎこちなくこちらに笑顔を向けた。

「危ないところだったね。もう大丈夫だ！」

いや、もう手遅れである。特に、この少年の評価が。なんというか、

あれだけ格好良く登場してどうしてここまで評価を落とせるのかコツを聞きたいくらいだ。
　とはいえ、この少年は怪我の治療ができるわけでもないので、皆がステッキの治療により復帰するのを警護する形となった。もちろん、また乱入者が現れないとも限らないのでとりあえず遠坂の拠点に転移しているが。
　あどけない少女の体に刻まれた、酷い切り傷も、魔法のステッキはなんの問題もなく治療していく。さすがに、専用の神器には及ばないが、この状況では非常に心強い。
「・・・どっかで見たようなステッキだな～」
「アニメになってるから、それじゃないかな」
「アニメ・・・。うんそうだな、昔見たのかもな」
　ジャージ姿の少年は、なんのこともなさそうに頷いている。相変わらずテンションは高めだが、しかし暴れださずにはいない。
　期せずしての2連戦。肉体的な損傷は回復できるが、精神的な疲労は抜けない。正直、目の前の少年との3連戦目など、冗談ではない。
　だが、この状況を利用しないルヴィアと遠坂ではない。どうにかして、この相手から情報を引き出さねば。今までは何の前情報もなく手探りだったが、その結果がこの様だ。次もこの幸運があると信じるほどお気楽な二人ではない。
「・・・まず、礼を言わせていただきます。危ないところを、助けていただいてありがとうございました」
　美遊から傷の手当てを受けながら、ベットに腰掛けたルヴィアが頭を下げる。相手の素性はどうあれ、自分たちが助けられたのは事実だ。であれば、まずは礼を言うべきであろう。それに続く形で、他の3人も頭を下げた。
　それを受けた少年は、暫く呆然とした後、いきなり滂沱の涙を流した。会話は成立してもカードの暴走体、情緒不安定なのだろう。
「感動した。人助けをしてお礼を言われるなんて、夢みたいだ・・・！」
　お礼を言われる。たったそれだけのことが嬉しくてたまらない。忍者もそうだったが、彼もまた孤独だったのだろう。その心中は察す

ることすらできないが、孤独であったことは確かだ。
外宇宙の力を操る彼らは、皆例外なくこの孤独に耐えていたのだろう。例外、規格外、存在しない力。それは、誰とも共有できない孤独な力。
この世界では、裏においてポピュラーな魔術師である遠坂やルヴィアにも、兄がいてくれた美遊にも、ステッキで『たまたま』魔法少女になったイリヤには、到底理解できないことだ。
「・・・それで、貴方はいったいなんなの?」
遠坂は、泣き止まない彼に尋ねる。このままでは、一向に話がすすまない。というか、相手はカードの暴走体。下手をすればこのまま暴走する可能性もある。
「・・・兵藤一誠だ。まあ・・・より適切に言うと『天力使い』の兵藤一誠だ」
「天力・・・それが貴方の操る外宇宙の力なのね」
兵藤一誠と名乗ったことに、今更驚きはしない。それは、当人も知っているようだ。なにせ、わざわざ天力使いと名乗っているのだから。
おそらく、この地にばら撒かれたという六枚のカードは、もれなく『兵藤一誠』なのだろう。
「外宇宙・・・?ああ、確かにそれで間違いはない。この宇宙には存在しない力だからな」
そう言って、掌に光を生み出してみせる。それが、彼に与えられたエネルギー、天力だった。
「俺のエネルギー、天力は大気を掴む力。そして、天力を使用した攻撃を天撃と呼び、それを極めることで『才牙』となす」
天力使いの手には、光が形となって長い狙撃銃が握られていた。そのデザインは白を基調としており、加えて多くの装飾が施されている。おそらく、多くのギミックを備えているに違いない。
「光の才牙、ジャッジメントXⅢ。見ての通り、銃だ」
固形化するエネルギー。それは、ルヴィアと遠坂に話に聞く具現化系の念能力を思い出させた。もっとも、具現化系はパフォーマンスと

いうか、習得に多大な労力を要するので、現在はその能力者存在しないのだが。
「光を弾丸として発射する。この遠距離狙撃銃形態のほか、中距離機関銃形態、近距離散弾銃形態に変形する。各機能は、聞いてのとおりだ」
　流石に、カレイドステッキほどのバリエーションはないが、それでも多くの状況に対応できそうなよい銃である。
「と言うことは、先ほどのセイバーを撃ったのは遠距離狙撃銃ということですわね？」
「ああ、３ｋｍ先から狙撃させてもらった」
「「「３ｋｍ!?」」」
　３ｋｍとは、普通の狙撃銃では到底望めない距離である。というか、まず射程距離が足りない。丸めたティッシュを、どれだけの力で投げても遠くに飛ばないのと一緒で、鉛玉にも限界はあるのだ。
　だが、少年は得意げに自分の手の内を明かす。というか、きっと説明したくてしかたがないに違いない。おそらく、一人で黙々と修行していたものだから、誰かに自慢したかったのだろう。
「なに、発射するのは光だからな。視認できれば月にでも狙撃できるさ」
　弾丸は、どう頑張っても真っ直ぐは飛ばない。それ自体の重量によってゆっくりと落ちながら飛ぶのだ。加えて、風の抵抗もある。例え止まった的であったとしても、狙撃というのは精密であるが故に多くの条件を計算しなければ決して命中しない。
　だが、発射するのが光であれば？光も重力によって曲がるし、加えて蜃気楼に代表されるように熱によっても屈折する。だが、狙撃する分には全く問題ない。なぜならば、発射される弾丸もまた光であるが故に屈折するからだ。つまり、蜃気楼によって『そこにいるように見える』場所に向かって発射すれば、屈折して『実際に命中』するのである。
　簡単に言うと、鏡に写った的に向かって撃てばそのまま跳ね返って命中する、というわけだ。実際は、光の弾丸にある熱量によって鏡が

損傷するのでそううまくはいかないが。
いずれにせよ、通常の弾丸と違ってレーザーポインターのように視認できれば命中できるのである。
そして、なによりも、光の弾丸であるということは当然のように『光速』だということだ。光速の弾丸は視認できない。なぜならば、見えるということは命中しているということだからだ。
「元々、ああいった超音速や光速で動く相手用の狙撃だからな。どんな能力者であれ、実戦経験はないに等しいはず。であれば、光の速度で３ｋｍ先から狙撃すれば確実に殺せるに違いない。そういうわけさ。ふふふ、どうだ、恐ろしいだろう。知っているか、狙撃手からは逃げられない・・・！」
「せこいね」
「・・・ぐすん」
イリヤの心無い発言に、泣きべそをかく天力使い。きっと、本人も気にしていたに違いない。
「・・・だって、仕方が無いじゃないか。天力は身体機能強化が低いんだから、接近戦なんてできねぇよ」
「まあ、分かりますわ」
つい先ほどまで光の速度の敵と戦っていたのだ。その気持ちは良くわかる。どれだけ武器が強くとも、本人のスペックが低ければ勝負になる見込みすらない。
「・・・でだ、ついでだからこのまま俺達の境遇について話させてもらうが・・・いいかな？」
あるいは、聞かなくてもいいことだったのかもしれない。もしかしたら、『調和なす異形』の琴線に触れる話題だったのかもしれない。だが、それでもこのままでは無意味に死ぬだけだ。それを避けるためにも、一歩前に進むべきだろう。
４人は、続きを促した。尚、ステッキは今尚治療を続けている。
「信じてもらえるかは分からないが、俺達はこの宇宙の外側で生きていた・・・」
その、天力使いから語られた話は、その場にいる４人にとって信じ

がたいことだった。
　7人の『兵藤一誠』が、本来の歴史への介入権をかけて7種のルールで殺しあう戦争。
　自分たちが戦った3人も、この場にいる彼も、そしてまだ見ぬ二人もその参加者だった。いや、敗者だったのだ。
　そして、おそらくこの宇宙にいる『調和なす異形』はその勝者であるのだろう。彼が悪魔になる以前、外宇宙の力をかけて戦っていたことは知られているが、そうした背景があるとは知らなかった。いや、知られていなかった。
「なるほど、最古参のメンバーが『艦長』と呼ぶ理由が分かったわ・・」
　最古参の部下、アネックスの面々にとって『兵藤一誠』は特定の一個人をさす言葉ではないのだ。だからこそ、彼らは兵藤一誠を名前で呼ばないのだろう。
「・・というか、貴方たちを倒した人ってどれだけ強いの?あのセイバーもやっつけちゃったんでしょう?」
　事実として、これまで戦った相手もこれから戦う相手も、全員負けている。と言うことは、勝者は彼らよりも強いということになる。それは、つい先ほどまで瀕死だったイリヤには到底理解できなかった。
　その言葉を聞いて、天力使いの目が憎悪に染まった。見るからに雰囲気が変り、周囲に殺気を撒き散らしている。それは、ライダーやセイバーと同質のもの。即ち『憤り』だった。
　しかし、それが行動に移されることはなかった。すぐに、とは行かないが暫くすると収まっていく。すわ戦闘か、と身構えていた魔術師二人と美遊、逆鱗に触れたのかと慌てていたイリヤは胸をなで下ろした。
「・・その前に、話しておくことがある。俺達の戦争の詳細についてだ」
　そう言って、できる限り無機質に天力使いは話を続ける。おそらく、そうしていなければきっと、自分を自分で制御できなくなってしまうのだろう。
　彼もまた、敗者。勝者に対する嫉妬や憤怒は当然のように持ち合わ

せていたのだろう。ただ、抑えているというだけで。

「俺達は、この宇宙に存在するはずのないエネルギーをカードを触媒に使用することができる。開催までの年月を鍛錬に費やし、開催期間の丸一年、一つの街を舞台に殺し合いをするというものだったのだが・・・。此処まで聞いて、おかしいところがあるだろう?」

『今まで倒した面々の能力ですね』

『皆さん、戦闘に特化しすぎていました』

これに答えたのは、優れた人工知能を持つステッキ二つだった。その二つにしてみれば、今まで倒してきた連中の能力は余りにも戦闘面に特化しすぎていた。

もちろん、暴走していたため他の機能を使っていないという可能性もあるが、いずれにせよ、目立ちすぎた。最悪自分以外の6人を敵に回す可能性すらあるサバイバルには余りにも不利だろう。

「それは、この戦争で積極的に戦うことを促す、あるルールに由来する。というのも、この戦争は長期間行われるバトルロワイヤル。であれば、戦闘用の能力よりも逃走や策的能力を習得したほうがうまく立ち回れるし、生存率も高い。だが、それでは誰もが隠れ潜んで戦争にならない。

だから、危険を侵してでも戦闘するものへのメリットが用意されている。要するに、殺した相手のカード、能力を奪うことができる。これが、どれだけ優位なことか想像できるだろう?」

その言葉に、美遊はやはり、という顔をし、他の面々も息を飲んだ。なるほど、殺した相手から能力を奪えるのであれば、序盤から積極的に動くメリットはある。

なぜならば、一人からでも能力を奪えれば、その分自分は強くなれるのだから。例えば、セイバーは確かに強力だったが、ライダーとアサシンの能力を同時に操れれば倒せる可能性もある。無論、セイバーが丘の敵を倒して自分をより強化できる可能性もあるのだが。それを避けるためにも積極的に殺すべきだろう。それに兵藤一誠に成った優勝者には更なる戦いが待っているのだ。より多くの力を求めるのは自然だろう。

「殺した相手というのが重要でな。例えば5人殺した参加者を誰も殺していない参加者が殺しても得られるカードは一枚だけ。優勝者の総取りとは行かない。だから、参加者は優勝後のことも考えて積極的に動く、というわけだ、が。

これもやはり、俺の用に狙撃で倒すほうが効率がいい。射程距離が短いエネルギーならばともかく、それ以外ならばやはり索敵と狙撃の能力を得るべきだ。だが、それも対策済み。

実際に奪ったカードを使用するには、殺した相手の同意、というか納得が必要になる。狙撃で不意を撃って殺しても、使用できないということさ」

『・・なるほど、だからあの3人は、忍者さえも正面から戦う力を持っていたわけですね？いえ、そう鍛えたのですか。男の子ですね～』

『正面から戦って、相手に負けを認めさせる。なるほど、そう考えると理屈が通りますね』

「そうだ。接近戦のできない俺はともかく、身体能力を強化する類の能力者にしてみればそうして当然だ」

その言葉を言うや否や天力使いは、一気に沈んだ。思い出したくないことを、思い出してしまったかのように。或いは認めたくないことを認めるように。

「・・裏を返せば、俺は勝ち生き残るためにこの銃を選んだ。多くの力を得ることよりも、確実な勝利を欲したんだ。

だが、おそらく優勝した奴は俺以上に『勝つこと』しか考えずに能力を構築したんだ。それこそ、優勝した後どれだけ困ることになろうとも、生き残りを図ったんだ」

「なぜ、そう断言できますの？」

「俺達敗退者6人はまず間違いなく、全員が初日に、しかも同時に殺されたからだ」

その言葉に絶句する。もしもそんなことができる能力を構築すれば、なるほど、絶対に勝てるだろう。だが、敗退者は絶対に彼に力を貸さないだろう。加えて、そんな能力はセイバーのそれと違って『汎用性』の欠片もないに違いない。

「なんどかルールを確認したから確かだが、戦争中に脱落者がいれば脳内に放送される。たとえば、一人死んで残り6人です。とかそんな感じにな。それを聞いた覚えが全くない。脱落した後カードにわずかに意識が残っていて、そのときに他のカードも似たような感じだった。

つまり、優勝した奴は『町中に散らばった参加者六人を捕捉する』能力と、『離れた箇所にいる特定人物を同時に6人殺す』能力の二つを持っている」

「なにそれ・・・」

「悪質ですわね・・・」

戦争をするつもりがない。ただ一方的に殺すための力。そして同時に納得する。今まで出会った彼らが無念の慟哭が痛いほど分かる。十年もの歳月を積み重ねて編み出した己の技。それを披露する機会も無く評価されることも無く、加えて気がつけば死んでいた。そんなこと、納得できるわけもない。

「正直、俺も怒っている。だが・・・」

天力使いは手に握った狙撃銃を見つめた。狙撃は、言ってしまえば戦闘の放棄。先ほどのように、安全圏からの一方的な攻撃だ。ある意味では、同じタイプであるといえる。

「俺も、狙撃という卑怯な手段を完成させるために相応の努力を割いた。だから、分かるというか、諦めてしまうというか・・・。その卑怯な能力を構築するにも、きっと多くの試行錯誤があったに違いない。そう思ってしまうんだ。それに、一旦能力を構築したら変更するのは難しいからな。きっと優勝した後も苦労しているに違いないさ」

例えば、天力使いは光の銃を才牙としているが、他の天撃も使えないわけではない。だが、また新しく才牙を構築するとなると並々ならぬ努力を割いても不可能だろう。彼は、銃を選んだことにより接近戦では大きく不利となってしまった。だが、優勝することしか考えていなかった優勝者はそれどころではあるまい。戦闘能力があるのかすらも疑問だ。

「だから、自我を保てているんですか？」

美遊は、天力使いの顔を覗き込んだ。その顔は、夢に破れて再度挑戦する気力を失った疲れている顔だった。
「そうだな、他の連中は真面目に敵を倒すつもりだったんだろう・・・。その分、傷ついているに違いない」
彼らは夢見ていたに違いない。十年の歳月をかけて鍛えに鍛えた己の技を同様の歳月を修練に奉げた敵にぶつけ、打ち勝ち、相手に認められてその能力を使う日を。そして、優勝した後にまつ栄光の日々を。それは、誰にも評価されることの無かった研鑽の日々を支えていたに違いない。
それを、吹き飛ばされた。初日で、たった一人に一方的に殺された。戦うことすらできずに。カードの暴走体は、そんな彼らの悲哀と慟哭でできていたのだ。
「では、どうして暴走を?」
「さあ、気がつけばこの町にいた。おそらく外側から何がしかの刺激があったんじゃないか?」
「・・・貴方の目的は何?」
遠坂は、ある意味核心を付いた。言ってしまえば彼や他のカードの事情も、知る必要の無いことだ。だが、今目の前にいる彼の目的はなんだろうか。返答いかんによっては、このまま交戦もやむをえないだろう。
「・・同士を、志を同じくしてきた『一誠』たちを休ませてやりたい」
その目には、涙さえ浮かんでいた。彼も、天撃や狙撃を極める為に多くの時間を割いたのだろう。彼らは、その青春をそれにささげたのだ。誰一人例外なく。きっと、皆無念に違いない。化けてでも無理らしからぬことだ。だが、暴れたからといってなんになるというのだ。ただ、悲しいだけだ。
「そのために、君たちに協力して欲しい。それだけだ」
「・・分かりましたわ。それでは、こちらからも協力をお願いします」
「ええ、そうね。私からもお願い」
正直、この任務を単なる罰だと舐めていた。実際は、未知の敵も己の才気で補えると、高性能な神器で打倒できるとそう信じて疑わな

かった。任務に乗じて相方を撃つほどに。
だが、現実は厳しい。たった一人を相手に、全てを出し切って尚上回られた。これは、猫の手も借りたいところだ。魔法少女二人も、天力使いの力になりたいと決意を新たにしている。
「みんな・・・すっげえうれしいよ！」
やはり感極まって、緊張が解けたのか大いに涙する天力使い。きっと誰かと協力して困難を打破するというシチュエーションに餓えていたのだろう。荒唐無稽な話を信じてくれたこともあって、嬉しくてたまらないようだ。
「・・・そういえば、今までどんな奴を倒したんだ？」
「機械でできた鎧を着ているのと、忍者、それからさっきのセイバーだね」
「あと、貴方を除いて二枚ね」
「そうか・・・じゃあ、あいつが残っているな」
「あいつ？あなた、他のカードに関して情報をお持ちなんですの？」
「一人だけは知っている。相性が絶望的に悪くて、とてもじゃないが一人じゃ勝てない」
「・・・セイバーよりも強いとか？」
恐る恐る、イリヤはたずねた。光速攻撃を可能としたセイバーをして、天力使いは光の弾丸で一方的に殺している。もちろん、狙撃できる体勢が整っていたこともあるのだろうが、それを含めても相性が悪い、とは一体どんな相手なのだろうか。イリヤは、悪い予感が隠せない。
「どうだろうな。だが、互角に立ち回れるだろう。奴も、光速移動や五感剥奪が使えるだろうしな・・・」
天力使いは、嘗て自分がスコープに捕らえて、しかし狙撃できなかった相手を思い出す。彼には、絶対に狙撃は通用しない。確信を持っていえることだった。
「探せば見つかるだろうが、間違いなく強敵だ。気を引き締めてくれ」

コートの上の魔物

天力使いは、ルヴィアがこの町で滞在するために用意した豪邸の一室を借りていた。

と言っても、荷物があるわけでなし、着の身着のまま広い部屋で写真を見ていた。キャスターと書かれた、三角錐を真上からみたような図形を描いたカード。彼と、この地に散乱した5枚のカードの持ち主を殺した男のカード。

さて、この図形は何を意味しているのだろうか。天力使いは、ふとした弾みで暴走しそうになる頭を必死で制御しながら答えを導き出そうとしていた。

『コイツも必死だったんだ。俺も一方的に殺すつもりだったんだ。だから、お互い様だ』

そんな風に達観できるわけがない。恨まずにいられるものか、憎まずにいられるものか。俺は、まだしたいことがたくさんあったんだ。ハイスクールD×Dの主人公になったら、たくさんの冒険を仲間として、多くの困難を潜り抜けて、たくさんの人に賞賛されたかった。そして、『毎日努力してよかった』と、そう思うために、後悔しない為にがんばってきたんだ。

それが、今はなんだ。なるほど、同世代の綺麗な少女二人、年下の魔法少女二人と協力して困難を解決しようとしているが、だからなんだというのだ。こんな、眠くもならない腹も減らない性欲もない体で、一体どうしろというんだ。

憎悪で心が塗りつぶされる。狙撃にささげた青春が、生涯が、全て無駄にされたことが許せない。一体、どれだけのものを犠牲にして手に入れた力だと思っているんだ。一体、どれだけのものをあきらめて手に入れた力だと思っているんだ。

アニメが見たかった。漫画が読みたかった。友達と遊びたかった。少しでも長く寝たかった。少しでも長く夜更かしがしたかった。映画だって見たかった。歌だって聴きたかった。

天力を扱えるようになったあの日、光の天撃を放てるようになった

興奮、才牙を生み出したときの達成感、少しずつ遠くの的を射抜けるようになっていき得られる自信。

その全てが、あの戦争では一発も披露されることもなく無駄に終わってしまった。これで、どうして憎まずにいられよう。自分はそこまで人間ができていない。

そんな自分がこうしてかろうじて理性的に振舞えているのは、やはり同士の無念があるからだろう。今も、彼らは誰とも関わることができず、孤独に空を眺めているのだろう。それを思うと、自分はとてもではないが暴走などできない。無意味なのだ。この場に『奴』がいればまた別の話だろうが、ここで暴れても何の意味もないのだ。ただ、むなしいだけなのだ。

だから、止めなくてはならない。後二人を、なんとしてでも止めなければならない。それが『奴』同様に戦わず殺すことに特化してきた自分の、唯一にして絶対の義務だ。彼らと悲しみを共有できる自分の、務めだ。

「・・・コイツは一体何のエネルギーを得ているんだ」

だが、それとは関係なく勝者は如何にして自分たちを殺したのか。そのことに意識が向かうのは自然なことだ。自分のカードには５つのシンボルが描かれているが、これもエネルギーの特性を現している可能性が高い。であれば、この三角錐を真上から見た図形も、正三角形の中心から内角に向けて線が延びていることに意味があるはずだ。

初めは、覇気使いかと思ったのだ。見聞色によって、あの町では段違いに強かったであろう自分たち６人を捕捉することもたやすいからだ。まあ、その場合どうやって６人同時に殺せたのか、という話になるが・・・。

覇気は３種類、見聞色、武装色、覇王色に分かれており、３角形はそれを意味しているのかも知れない。だが、それでは中心が意味を持たない。なんだ、この中心には何の意味がある。

小宇宙のように１種類でも、波紋のように２種類でも、覇気の様に３種類でも、天力のように５種類でも、念能力のように６種類でも、チャクラのように７種類でもない。４種類ある力。

エネルギーが分かれば、おのずと殺害方法も明らかになる。逆を言えば、それが分からないとどうにもふわふわとしてつかめない。

「いや待てよ・・・ドラゴンボールの『気』で、町ごと吹き飛ばしたのか?いや、いくらなんでもそれはない。俺はともかく他の面々は対処できるだろう」

少なくとも聖闘士は、いやアテナに仕えていた訳ではないので単なる小宇宙使いは、それに対処できるはずだ。だが、彼も抵抗すらできずに死んでいる。アレは、街を吹き飛ばされたことに対する怒り方ではない。

「・・・デスノート並だな、この能力は・・・あれ?おかしいぞ、それなら町に入って即殺せばよかったはずだ」

少なくとも、自分はテニスプレイヤーを捕捉した事を覚えている。死んだときの記憶は定かではないが、少なくとも他の面々も戦闘はしていたはずだ。

運が悪ければ、直接戦闘能力の低いであろう優勝者も巻き添えを食らって死んでいた可能性もあった。だが、それを無視して優勝者はタイミングを待っていた。

なにか、条件があるのか?念能力のように、制約でもあったのだろうか・・・。

「チャクラの使い手なら、幻術を使われて記憶が定かでないのも分かるんだが・・・」

あいにく、それも死亡が確認されている。とはいえ、チャクラを操るものならば、それこそ多くのことが可能だ。幻術対策などできなかった自分たちでは、たやすく操られただろう。例えば、音を使って町中を洗脳とか・・・。

いや、それは流石に度を越えている。木遁や写輪眼のような特定の血統に由来する能力を、自分たちは決して習得することができないからだ。人柱力ならばともかく、ただの優れた忍者では町ひとつを丸まる洗脳などできはしない。第一洗脳能力など・・・。

「・・・そういうことか!」

瞬間、全てを天力使いは悟った。

「ふざけるな！」

写真を握り潰し、火の天撃で焼き尽くした。そのまま、憎悪に任せて周囲を焼き尽くそうとする。いや、そうしてしまえればどれだけ楽なことか。

狂うことも、怒りをぶつけることもできずに、ジャージ姿の少年は眠りのない夜をすごした。その、優勝者への消えない怒りを噛み潰しながら。

天力使いは、一体どうやって相手が自分を殺したのか。それをはっきりと特定できたわけではない。だが、一つだけはっきりしたことがある。この、カードに秘められたエネルギーの、その正体を彼は読み解いたのだ。それは、紛れもなく正解だった。

もう一つだけ、確かなことがある。それは、もしもこの場にモンスターズD×Dの主人公がいれば、彼を羨んだということだ。

外宇宙のエネルギーと、それを操るための『才能』と『知識』を与えられた彼らは、艦長と争った『会長』と名乗った強化系念能力者だった参加者に比べて、極端なほど強かった。

当然だが同じ強化系念能力者でも、ウヴォーギンとゴン・フリークスとグリードアイランドでくすぶっている連中ではそのスペックは大きく異なる。個人の資質、才能がダイレクトに反映される『念能力』や『小宇宙』は、才能の有無は非常に重要だ。

特別な血統に由来する『絶対時間』や『血継限界』は使用できないにしても、その圧倒的な性能は『他の七人の兵藤一誠』を大きく凌いでいる。これに勝るものは『改造人間の殺し合い』ぐらいなものだろう。

そんな彼らが、街中で殺しあえばどうなるか。それは武器の拡散が起きないにしても、大規模な破壊が起きたことは確かだろう。その被害額は『モンスターズD×D』のそれとはとらべものにならなかったに違いない。

そして、なによりも艦長である彼が最も望んでいた『必要最低限』の6人が死んで終わった戦争である。たとえ、自分が脱落するにしても、長年の努力が報われることが無かったにしても、それでも無用な

犠牲が出るよりはよっぽど良かったはずだ。
戦争に参加したのは自己責任。冷酷な言葉だが、確かにそれは真実だ。なにせ、彼らの努力など彼らの戦いの舞台となった町には『何の関係もない』ことなのだから。
敗退者6人はともかく、勝者にとっても街にとっても、最短にして最良の結果であったことは絶対の真理である。
「・・・もう朝か」
眠れなくても、時間は過ぎて朝は来る。
自分の中で燃え盛る優勝者への怒りを何とか心の隅に追いやって、天力使いは心の中を『幸せな感情』で満たそうとする。そうでもしなければ、自分は他の面々同様暴れだしてしまうだろう。それだけは避けなければならない。絶対に。
「いや~よく考えたら皆かわいいし、これはもうハーレムと言っていいんじゃないかな?うん!」
遠坂もルヴィアも、どちらも非常にスタイルがよく綺麗だ。小学生の二人も、自分が見た中では一番かわいい。外人というのも重要だ。あんがい、このままモテモテという可能性もあるだろう。
そんな、自分でもありえないな、と思ってしまう妄想で心を支えて、顔を微笑みで取り繕う。そうでもしなければ、きっと一歩も動けないから。

人払いが済まされ、日中だというのに人通りのない休日のテニスコート。そこで一人テニスウェアに着た兵藤一誠がベンチに座っていた。もしかしたら、対戦相手を待っているのかもしれない。
「・・・本当に居た」
「居ましたわね」
「居たわね」
「・・・本当に居るとは」
天力使いの指示に従ってやたら強いテニス選手の噂を探したとこ

ろ、ルヴィアの情報網によっていともあっさり特定された。その少年は、ある日ふらっと現れて圧倒的な技量で皆を驚かせたらしい。今のところ、外宇宙の力を使用していないようだが、さて。

「なんたって、俺の頭は酢入りだからな（ドヤァ）」

「あ～はいはい・・・にしても、アレがどんな能力を持っているのか、本当に分かっているの？」

遠坂にしてみれば、テニスコートにカードの暴走体が本当に居ることがまず驚きで、加えてその能力が分かるというのも驚きだ。というか、本当になんでテニスウェアを着ているんだろうか。

「ああ、見る奴が見れば見れば一発で分かる。あいつは『無我の境地』と呼ばれるエネルギーの使い手だ」

無我の境地とは、精神状態を意味する言葉で少なくともエネルギーそのものをさす言葉ではない。だが、五行が全然違う宇宙もあるのだし、言葉の意味が大きく違ってもさして不思議ではない。

「気をつけろよ、どんな『テニス』を繰り出してくるのかわからないぞ！」

「それ、絶対私たちの知っている『テニス』じゃないと思う・・・」

まず、テニスに外宇宙のエネルギーは使わないと思います。イリヤは、つくづく宇宙は広いのだと思い知らされる。よく考えてみれば、先日は本当に分身する忍者もいたのだ。さして不思議ではないのかも知れない。

「一応念のため言っておくが、『遠距離攻撃』は使うな。どんな種類であれ速度であれ、絶対に倍返しにされるぞ。とにかく、玉切れを待つんだ！」

「・・・どういう『テニス』なのよ」

魔法の攻撃も光の弾丸も跳ね返すとは、一体どういう敵を想定しているのだろうか。というか、聖闘士と戦えるほど強いのか、テニスプレイヤーは。

疑問を憶えつつも、５人は戦闘態勢を取ってコートに立つ。すると、待っていたかのようにテニスウェアの少年は立ち上がった。

「待っていたよ。今日この時間に敵が来る確率、１００％・・・」

「それ、絶対言ってみただけよね！」
つい、無粋な突込みを入れてしまう遠坂だが、もとより暴走しているのだ。会話などまともに成立しない。無我使いはラケットを手に取ると、そのままネット越しに握手を求めてきた。これも、オジギの一環なのだろう。天力使いもそれに応じる。
「最初のサーブはくれてやる。さあ、かかって来いメス猫ども！」
いきなりのぶっ飛び発言に頭を抑える４人。しかし、先制攻撃をさせてくれるというのならばこんなありがたいことはあるまい。まずは誘導弾で牽制を・・・。
「待て、あんまり強い攻撃は使うなよ！」
「あ、そうだった。じゃあ弱めで・・・」
ルビーによって威力を調整された魔法弾。それは見るからに貧弱な速度でフヨフヨと無我使いに向かっていく。それを、無我使いはあっさりと避けた。
魔法弾は、そのまま真っ直ぐ飛んで背後の壁にぶつかって消える。
「１５―０！」
いつの間にかいた審判が、何事もなかったかのようにポイントを先制したことを宣言する。そう、テニスでは打った玉はバウンドしなければならないのだ！・・・いつの間にテニスのルールで戦っていたのだろう。
「ああ、もう！面倒くさい！」
「あ、待て！」
遠坂は、警告を無視してネット越しに宝石を数発投擲する。それらは着弾するや否や大爆発を起こすはずであった。だが、その複数の宝石はコートに着弾すると同時に全て吸い寄せられるように無我使いの手元に引き寄せられていく。
それを、無我のオーラで強化した左手のラケットで打ち返す。軌道、威力、回転をそのまま倍返しにしての反撃。それは、見事に呆然としている遠坂に肉薄していく！
「くそっ！」
危機一髪。天力使いの散弾銃が、光の弾丸を放ち全ての宝石を爆発

する前に破壊した。まともに直撃していれば、生身の遠坂は一撃でKOだっただろう。

「30―0!」

それ以上に、あまりにも物理法則を無視したこの状況に、遠坂は怒りを爆発させた。

「どうなってんのよ!どうして相手コートにばら撒いた宝石が集まっていくのよ!」

「手塚ゾーンだ!打球にあらかじめ回転を加えておくことで、手元に吸い寄せることができるんだ!それがなければ、『百錬自得の極み』は使えないからな!」

「宝石を投げたのは私なんだけど!」

「細かいことはいい!とにかく、強い攻撃は使うな!」

「ええ?じゃあ・・・えい!」

イリヤは、また弱い砲弾を打つ。今度は、コートでバウンドするような軌道だ。それを、無我使いは引き寄せるのではなく回りこんで打ち返す。このとき、無我のオーラは全身に満遍なく覆われている。

そして、その魔法の打球は明らかに先ほど以上の威力でイリヤに向かっていく。

「避けるな、受け止めるな、打ち落とせ!死ぬぞ!」

「死ぬの?!」

死ぬといわれたイリヤは、慌てて魔法弾を発射する。それは、目の前の魔法弾の威力を明らかに上回っていた。相殺することはたやすかっただろう。迎撃できていれば。

その魔法の弾丸は、まるで蛇のように軌道を変えて、地面にバウンドして迎撃の魔法弾を潜り抜け、イリヤの顔めがけて飛んでいく。

「危ない!」

とっさの判断だったが、美遊はサファイアのステッキで『イリヤ』を攻撃した。威力はなかったものの、大きく吹き飛んだイリヤは直撃を免れた。

地面に倒れた体は当然痛いが、自分にぶつかるはずだった打球が壁を砕いて尚回転しているところを見ると、血の気が引いた。まさし

く、直撃は死を意味していた。
「４０―０！」
相変わらず、何事もなかったかのように宣言する審判。一体彼は何者だろうか。
「トルネードスネイクを、スーパースイートスポットで打つとは、やるな！」
「これテニスですわよね⁉」
「そうだ、おそらく、高校生の全国大会ベスト４レベル！」
「これで高校生なの⁉」
「プロなら天変地異が起こせそうですわね・・・」
「甘いぞ、それぐらいなら中学生でもできる・・・」
ルヴィアの皮肉に、天力使いは極めて真面目に返事をする。その眼には、一切の脚色が存在しない。誰が知ろう、かの宇宙においてテニスプレイヤーは豪華客船が難破しようが炎上しようがテニスを続ける鋼の精神力を求められるのだ。そうでなければ、テニスなど到底極められない。
「強く打っても、弱く打っても、複数で打っても駄目だなんて・・・」
想定以上だ。遠距離攻撃では分が悪すぎる。だが、接近しようにも、相手はラケットをオーラで強化できる。あれで攻撃されれば、どうなるかは明らかだ。
「ゲーム、兵藤一誠！」
そして、サーブ権が切り替わる。向こうが先に球を打ってくるのだ。通常のテニス同様、先に攻撃するほうがこの場合も有利に違いない。
「いいか、とにかく相手がボールをとりに行くまでボールを壊し続けろ。それまでは、耐えるしかない！」
「・・・うん、ルビー！」
「サファイア！」
『ハイ、物理保護最大です！』
『砲撃のチャージも開始しました！』
先日の聖闘士との戦いもあって、二人は最大級の迎撃体勢をとる。

だが、それもあるいは無意味だと、最初から気付いていたのかもしれない。

「これが最初の波動球だーーー!」
「ぐふぅ!」
「砲撃と障壁を全部ぶち抜いてルヴィアさんが吹っ飛んだー!?」
「15―0!」

「一・球・入・魂!」
「ひでぶっ!」
「早すぎて防御が追いつかない!ああっ天力使いさんが!」
「30―0!」

「次は一球でいい!」
「ルヴィア、盾になりなさい!・・・アーレー!」
「凛さん?!軌道が変わって凛さんだけを吹き飛ばした?!そのまま磔に?!」
「40―0!ゲーム、兵藤一誠!」

「テニスって、やっぱり楽しい!」
「!!・・ごめんなさい、お兄ちゃん・・・」
「美遊!?今、なんか時間が吹き飛んだんですけど!」
「15―0!」

気付けば、イリヤ一人がコートに立ち、他の四人は地面に埋もれていた。無我使いの圧倒的テニス力である。彼ならば恐竜を絶滅させることもたやすいだろう。
「楽しんでる?」
「ちっとも楽しくないよ!」
此処までテニスボールで蹂躙しておいて、楽しいかと聞いてくる天

衣無縫の無我使い。もちろん、イリヤは一般人なのでちっとも楽しくない。余り詳しくはないが、テニスとは少なくとも命の奪い合いではなかったはずだ。それがどうしてこうなった。死屍累々である。

「マッチポイント！」

何の役にも立たない審判は、あらゆる超常現象を無視して冷静に宣告する。このままでは3ゲーム目も相手にとられてしまう。というか、死ぬ。

しかし、そこでようやく好機が訪れた。度重なる攻撃によって、ついに相手の持っていたボールがなくなったのである。コートの外に予備のボールをとりに行く無我使い。それを見て、イリヤは駆け出した！

『イリヤさん！千載一遇の好機です！此処で倒せなければ倒れていった仲間達が報われません！』

「なんか、最終決選みたいなノリで背中を打つの!?」

倒れていった肉壁、もとい仲間達を背に、イリヤはステッキに刃を構築してネットを飛び越えて切りかかる。これは、明らかにテニスの範疇を超えた反則である。今更だが。

それを迎撃せんと、左手のラケットにオーラを集中させる無我使い。当然叩き落されるだろうが、もう此処で引いても結果は同じだ。さながら鉄砲玉のように退路を捨てて肉薄するイリヤ。その刃は・・・。

「どうして・・・無抵抗で?」

「ぐふっ・・・」

見事に、無我使いの急所を穿っていた。おそらく、アサシンやアーチャー同様に防御力は低いのだろう。ただの一刺しで、光と共に消えていく無我使い。彼は、苦しそうな表情のまま潔く、戸惑っているイリヤの疑問に答えた。

「ラケットは・・・」

なるほど、無我の境地のオーラを集中させたラケットならば、百錬自得の極みならば、魔法少女の突撃も打ち返せるだろう。それこそボールのように。自分が突撃した力の倍返しで吹き飛んだイリヤは、

そのままＫＯされていたはずだった。
だが、そうできるのにもかかわらず、無我使いは白刃を受け入れていた。なぜだろうか。それは、彼が『テニスプレイヤー』だからだ。
「人を傷つけるためにあるんじゃない！」
確固たる信念の元、無我使いは断言して消えていく。その表情は、悔いなど残しては居なかった。満足げに、光の中へ消えていった。

「・・・ボールで傷つけるのはＯＫなの?!」

イリヤの突込みを聞くこともなく、百錬自得、才気煥発、天衣無縫を意味する三つの扉の描かれたカードを残して、無我使いは消えた。
「・・なんていうか、怪我の治療ばっかしているような気がするよ・・・」
唯一無傷なイリヤは、勝利の感傷に浸る間もなく埋まったり礫になったり回転の力で立てなくなって居たりする面々を救出していく。
これがテニスの結果とは、だれも思わないだろう。
『まあまあ、これも運が良いからですよ・・それに、これで後一枚です」
非常に軽い調子で、ルビーはイリヤを励ました。そう、全６枚のうち４枚は掌中に、一枚は協力者が。残るは後一枚である。
ついに、長いようで短いカード回収も終わりが見え始めていた。

こうして、５人は最大の強敵と激突することになる。

死ねないバーサーカー

最後に残ったカード。そのありかはなかなか見つからなかった。

ディオドラがこの街にあると言ったのだ。であれば、ないわけがない。あれは、少なくともあの状況で嘘を言う男ではないからだ。また、嘘だったとしてもそれを疑うことはこの二人には許されないことである。

とはいえ、ステツキによる捜査が無理ならば、時間をかけて探すより他に手はない。なに、最初と違って顔は分かっているのだ。顔だけは。なので、金さえあれば探すのは難しくない。

そのとき勝ち誇った顔のルヴィアが、悔しそうな遠坂が、それぞれ対照的だった。とはいえ、人海戦術には時間がかかる。各人、連戦により疲弊した体を休めていた。

そこで、問題だったのは協力者である天力使いだった。如何に理性的とはいえ暴走している彼は、日に日にその眼が憎悪に染まっていった。それこそ、他のカード同様に暴れださんばかりに。

「・・・正直な話、魔術師として尊敬に値するほどの自制心ですわ」

「そうね、他の面々から考えれば、ありえないレベルよ」

当人が言っていた通り、戦闘による正面からの勝利ではなく狙撃による殺害を戦術としていた天力使いは、納得はできなくても諦めることはできていたのだろう。

同様に、狙撃というスタイルは忍耐が要求される高等技能である。それを反動や弾道のずれがない光線銃であったにせよ高精度で使いこなす彼は、相応の精神力を持っていたのだろう。

だが、それも限界が近い。肉体があれば本能を満たすことで解消される怒りや憎しみが、ひたすら蓄積されていくのだから。

精神と肉体の関係性に詳しい魔術師の二人からは、今暴走していないことを評価こそすれ、これ以上続かないことに腹を立てることはなかった。

「・・・何か、できないかな」

善良な一般人であるイリヤとしては、恩人である彼がすさんでいく

姿を見るに耐えなかった。
日に日に眼に憤怒が宿り、今にも暴れ出しそうになっているのを見れば、良識のある人間ならばどうにかしたいと思うであろう。
とはいえ、眠ることも食べることもできないということは、欲求を満たすことにより不満を解消できないということである。そうした欲求以外で不満を解消となると・・・。
『私たちは元々神器ですからね～～～』
『元は人間だったパーソナリティとは大きく違いますから・・・』
「あの・・・もしかしたら何ですけど・・・」
美遊は、恐る恐る提案をした。この状況を、打破できるかもしれない手を・・・。

「セインセイヤーッ！」
ルヴィアの豪邸に用意されたカラオケ。それで熱唱しているのは天力使いである。
不安定と言うことは、良いほうにも悪いほうにも傾きやすいということ。一緒に歌おうと４人が提案した瞬間、天力使いはその表情を一気に取り戻し、ノリノリで歌い始めた。
ルヴィアやイリヤが歌っている間も、ひたすら楽しそうに手拍子を叩いている。流石に、飲み物やお菓子には手をつけないが、それでも涙を流しながら楽しんでいる。
友人と遊ぶという経験が全くなかった彼にしてみれば、こうして皆で騒ぐこと自体が『夢』だったのだろう。孤独だった時代を取り戻すかのように、大いに歌って騒いでいた。
ルヴィアや遠坂も、そんなにレパートリーがあるわけでもなく、自然とアニソンをたくさん知っているイリヤが歌うことになる。美遊も、恐る恐るそれにデュエットで参加した。
とはいえ、楽しい時間はすぐに終わるもの。肉体を持たないルビーやサファイア、天力使いはともかく他の面々は３時間も歌うとぐったりとしてしまった。
「・・・みんな、ありがとう」

そうなれば、流石に天力使いも自重する。歌をやめ、その場の面々に礼を言った。この催しは、自分のためであると理解できる程度には、彼も理性があった。

友人に気を使ってもらえること。それはとても嬉しいことだ。経験がなければなおのことだ。そんな気遣いが、嬉しくてたまらない。

たとえ、もうすぐ終わってしまうとしても。

「ねえ、天力使いさんはカードを集め終わったらどうするの？」

それは、後一枚でカードを集め終わる今だから聞かなければならないこと。遠坂やルヴィアにしてみれば、彼自身も含めて回収しなければならないが、敵に回すのは恐ろしい。何せ、視認できれば射程に収めることができる相手だからだ。

だが、それでなくても協力してくれた相手である。それを『倒す』ことに抵抗を持つ程度には、二人も人間性があった。

「・・・どうだろうね」

それは、本当に困惑しているとかではなくて『想像』ができないという感じだった。たった数日先のことなのに、そこから先は闇の中だった。

この一件が解決した後の自分が、どうしているのか。遠坂やルヴィアと戦うのか。イリヤの家に世話になるのか。或いは、自刃するのか。その選択肢すら思いつかない。

「・・・とりあえず、決意は改めて固まった。残った一人を『止める』。そのことだけは絶対だ」

いま自分には、一緒に戦ってくれる仲間が居る。気を使ってくれる友達が居る。昔、いつか『主人公』になったら手に入ると思って我慢していたもの。それが、いま自分の周りにある。リアス・グレモリーもその眷属でもないけれど、彼女たちと違って恋慕ではないけれども。それでも仲間が居てくれることが心強い。

暴走しそうになる自分は、こうして皆が支えてくれている。だから、だからこそ分かる。一人、帰る家もなくさまよう最後の『同士』をどれだけの孤独が襲っているのか。

駆け出したい自分を抑えて、暴れたい衝動を殺して、憎悪から目を

そらして。外宇宙の力を振るわずに孤独に耐えている彼を、救い出さなければならない。
「だって、違う空の下で志を同じくした同士なんだから」
突如として、ルヴィアの屋敷が大きく揺れた。地震ではない。明らかに連続して何かが起きている。
『タイヘンです！大規模な外宇宙のエネルギーを観測しました！』
『位置からすると街中で、相当の破壊行動が行われています』
そこは、まるで地獄だった。というべきなのは明らかだ。ただ、問題は誰にとっての地獄なのか、という点だった。
「うおおおおおおおおおおお！」
黄色の輝きに身を包んだスーツ姿の少年が、雄たけびを上げて周囲の建物を破壊している。ガラスが割れる、壁が砕けるというレベルではない。建物が基礎を残して隣のビルに倒れ、更に道路はひびが入るどころか大穴が開いてた。ガスや電気、水道のがあふれ出し、爆発などや冠水などがおきている。
それは、明らかに事故のレベルではない。局所的な自然災害だ。彼の周りだけ、大震災でもあったかのように破壊が起きている。
そう、その一瞬だけは。
「うおおおおおおおおおおお！」
その数秒後には、何事もなかったかのように元通りだ。街行く人も、彼が破壊をすれば逃げ惑うが、暫くすると何事もなかったかのように歩き出す。死傷者が現れても、即座に元通りになって平和な世界が取り戻される。
まるで、世界が彼を『認識しない』ようだった。人も、物も、自称さえも彼を記憶しない。もちろん、彼が行っていることがそのまま世

界に爪あとを残せば、それは悲劇以外の何ものでもないだろう。だが、彼の認識においてはどうだろうか。

誰もが自分を見ない。誰も自分を知らない。誰も自分を理解しない。それが、暴走している彼にとってどれだけ心身に負担をかけるのか、魔術の住人であり先ほどまで天力使いの独白を聞いていた４人には想像はたやすかった。

とはいえ、止めないわけには行かない。あの出力だ、下手をすればこの町の外にも影響を与えてしまうかもしれない。そうなれば、こんどこそ取り返しの付かないことになる。

「・・・間違いない、死ぬ気の炎だ。それも、晴の炎。おまけに到達地点とは」

その絶望感を共有できる天力使いは、茫然自失としながら敵のエネルギーとその能力を看破した。

それは、非常に厄介な代物だった。速度はセイバーに及ばず、防御もライダーに劣り、射程は自分より短く、アサシンのように隠密もできず、テニスプレイヤーのように多彩な能力を持っているわけでもない。

「あれは、身体能力を活性化させるエネルギーだ。おまけに非常に高い再生能力を持っている。たぶん、頭を吹き飛ばさないと駄目だ」

「再生能力？確かにそれは厄介ね・・・」

「では、やはり足止めからの狙撃でけりをつけましょう。あれは・・・見るに耐えません」

「イリヤ、私が天力使いを運ぶから。戻ってくるまで貴女はあまり無理をしないでね」

「うん、分かってる」

５人は、荷物を満載したトラックをボールのように放り投げ、ビルを破壊している彼をみて、既に正面からの戦いを諦めていた。

あらゆるものの働きを強化する強化系念能力と違い、活性を特性とする晴の炎は生き物にしか効果がない。だが、その高速再生能力は強化系の回復をはるかに凌いでいる。まして、死ぬ気の炎の最終奥義、死ぬ気の到達地点は全身の細胞が死を覚悟した境地。全身の如何な

る部分に損傷を受けようと、即座に回復するだろう。
故に、狙撃によるヘッドショット以外では倒せない。それが彼女たちの出した結論だった。
「じゃあ、手をとってください」
「ああ・・・」
美遊は、悲しみに震えている天力使いの手を取った。余りにも無作為な破壊行為に手を染めている彼の、その心情は察するに余りある。最初は天力使い同様に我慢できたに違いない。だが、眠れぬ夜をすごし食べることもできず、そしてなによりも自分の知らぬ世界で、いや自分を知る者が居ない世界で過ごす日々。それは、きっと彼にとって地獄にちがない。
それを、半分とはいえ察することができる美遊は、決して泣きながら震える手を伸ばしてきた天力使いを笑うことはできなかった。そんな彼をつれて、ビルの上に跳躍した。

「ねえ・・・どうやって足止めするの?」
イリヤは、今更ながらあれを相手に足止めするという難易度に気付いた。というのも、ライダーのように拘束すればいいものではない。なにせ、狙うは頭だ。たとえ鎖でがんじがらめに拘束したとしても、頭を振って暴れるだけでヘッドショットは不可能となる。加えて、間違いなく今まで出会った面々を全員合わせた以上の怪力だ。拘束できるのかがまず怪しい。
「言葉も、届きそうにないわね・・・」
「決め技を打つ体制を整えさせるのはどうかしら」
「それって、半端じゃないほど強いんじゃ・・・」
先日のセイバーは、決め技を打つための溜めを天力使いに穿たれた。天力使いの才牙による狙撃は圧倒的な長射程を誇り、光ゆえの光速の弾丸は小宇宙の使い手にも通用する。それは、元々光速攻撃を可能にする彼らと戦うための能力なのだから当然だが。だが、追尾機能もついていないその弾丸は、相手が動いているだけで命中させることは難しくなる。

故に、相手に数秒、できれば１０秒動かないで居てもらう必要がある。
「とにかく、遠距離攻撃の手段はあまりないようですし、距離をとって牽制をしましょう」
再生能力は確かに厄介だが、こちらには一撃必殺の弾丸がある以上、そして事前に分かっているのであれば対処はできる。三人は落ち着いてスーツ姿の少年にむかって攻撃を・・・。
「・・・誰だ!」
誰もが自分を無視する中、明確に感じた視線。それは暴走している彼にとって、明らかな攻撃対象だった。
「・・・敵だな、敵なんだな?!」
あるいは、歓喜に震えながらスーツ姿の少年は拳をこちらに向けてきた。黄色の輝きはよりいっそうの迫力を増している。
「敵を倒さなきゃ・・・死んでも死にきれねぇ!」
『物理障壁、最大展開!』
ルビーの判断は正確だった。余りにも唐突に向けられた殺意にうろたえる3人を他所に、自分の最大級の防御を展開して身を守る。
それは、ただエネルギーによって活性化された肉体による移動、ただエネルギーによって活性化された肉体による攻撃。故に、結果的にはただの物理攻撃でありルビーの障壁を穿つほどではなかった。
おそらく、単純な腕力ならばともかく、攻撃力ではセイバーはおろかアサシンにも及ばないだろう。
だが、それでも障壁には亀裂が走った。再生するが、それでも敵の攻撃が早い。連続で拳を叩きつけてくる。
『このままではあと１０秒しか持ちません!』
「ああくそ、仕方ない!」
「分かっています!」
弧を描く形で投擲された宝石は、全弾が命中して爆発する。それは、確かに命中したし、爆発もした。防御を破って肉体に損傷を加える。だが、それだけだった。皮膚を、肉を、骨さえも損傷を受けたが瞬時に再生する。服が吹き飛んだだけで、少年は更に歓喜して殴って

くる。
「高速自己修復だ。どうだ、これが晴の炎だ！どうだ、すごいだろう？俺は凄いだろう？」
「く、話には聞いたけど、ここまで早いとは・・・」
「Ａクラスの攻撃でも足止めにもならないなんて・・・」
「そうだ、俺は凄いんだよ！チートに頼り切らず、毎日毎日頑張ってきたんだ！朝から晩まで走り通しで、体力をつけた！死ぬ気の炎をコントロールするための特訓だって休んだことはない！そして、だから死ぬ気の到達地点に至った！その俺が、誰も倒さないまま死ぬなんて・・・死ぬなんて！」
　ようやく自分を認めてくれた、認識してくれた人に対して、黄色い炎を纏った少年はその力を誇示する。そして、暴走ゆえの極端な感情が爆発した。その、激しすぎる炎だけで３人は大きく吹き飛ばされた。
「誰にも、認められないまま死ぬなんて、誰も褒めてくれないまま死ぬなんて、そんなの死んでも死にきれねぇ！」
　あるいは、この世の多くの敗者たちの持つ当然の不満。それを代弁するように、ぼろぼろの服を着た少年は世の中の理不尽を嘆いた。

　例えば、甲子園。優勝者は栄光に包まれるだろう。賛美されるだろう。彼らは才能と努力、そして運を兼ね備えた勝者だからだ。
　では準優勝は？地区大会どまりは？彼らは、優勝チームとさして実力が変わらなかったとしても、彼ら以上の力を持っていたとしても、決して多くのものからの賞賛を集めることはないだろう。
　本当に、世間で評価されるのは一握りの勝者のみ。敗者は、やがて、あるいは即座に忘れられるのみ。いや、敗者ならばまだ再起出来る。だが、死者は？
　この物語に現れた彼らは、ブレイブハートＤ×Ｄの主人公も含めて誰もが多くのものを我慢して、多くの修練を積み重ね、孤独に耐えて力をなした。
　その彼らが、等しく汗と涙を流したはずの彼らが、どうして等しく

栄光を得られないのか。それは、彼らが死者であり、敗者だからだ。

この宇宙には、いや外宇宙には多くのエネルギーが存在し、それに由来して多くの戦法が存在する。それは、一長一短ありだれが最も優れているのかなど定義はできない。だが、それでもはっきりしていることがある。

『勝者は得る、敗者は失う』、『生者には機会があり、死者には次もない』

残酷だが、これを蔑ろにしてしまえば、何がなんだか分からない。

当事者と何の関係もない誰かが、正統な勝者を敗者に貶めれば、それは敗者をより貶めることになる。

おそらくこの場にいる敗者たちは、勝利していれば自分たち同様に努力した誰かを、相対的に弱いという理由で打ちのめし、切り捨てていただろう。

それを正しいとするのであれば、彼らが敗れたのもまた正しいことである。

たとえ、勝者は正面から戦う気が全くなかったとしても。

そもそも卑怯とはなんだ。限られたルールの中で、何をしたとしてもそれは卑怯ではあっても反則ではない。反則でなければ、咎めを受けるいわれはない。

神を滅ぼすための武器を持つことは、神から与えられた才能があることは、よい師にめぐり合うという幸運に恵まれたことは、恵まれた環境の中で努力したことは、卑怯なことだろうか？

あるいは、人によっては卑怯なことかもしれない。女々しいことなのかもしれない。だが、それは決して反則などではない。

だが、それはあくまでも単なる理屈だ。当事者が納得できるかどうかは、まったく別の話である。

「死んでも、死にきれねェよ！」

狂った笑みを浮かべながら、黄色い輝きはより高まっていく。死の絶望を知る少年は、そのエネルギーを更に高めていって、そして・・・頭を吹き飛ばされた。無論、才牙による狙撃である。本来人間でない

ものを殺すために使われていたこの技術は、こと殺傷性においては随一を誇る。防御に向いていない晴の炎を軽々と穿ち、頭部を蒸発させた。

「・・・終わった・・・ね」

「ええ、何とか・・・」

「美遊が戻る前にけりが・・・」

安堵する三人。しかし、それをルビーがかき消した。

『エネルギー反応確認、皆さん、逃げてください！』

カード化しているからなのか、あるいは元々そうなのか、首から上がなくなったはずの少年はその頭部さえも復元させて怒り狂った。

「狙撃で殺されたら。死んでも、死にきれねェよ！」

手詰まりである。まさか、脳さえも復元可能とは思わなかった。現状、もはやこの少年を止める手立ては全くない。一旦離脱して再度作戦を立て直さなければならなかった。

「皆、一旦下がって！」

ビルの上から、牽制にもならないであろう美遊の魔法弾が少年に向けて殺到する。それを、少年はただなすがままに受け止めた。そして、爆風の中で拳を放つ。

「痛・・・！」

『何か、こちらの物理保護を突破しました！・・・これは塩？発汗の塩です！』

肉体に残った汗の塩を、弾丸のように発射する。それは明らかに常識外のことであった。故に、人工知能を持つサファイアは対処が遅れて保護を最大にできなかったのである。

その威力は低く、当然行動不能にさせるほどではない。だが、それでも遠距離戦すら可能だということに瞠目する。

「くそ！」

風の天撃を下に向けて放ち、減速しながら天力使いはビルから身を躍らせる。狙撃銃から機関銃に切り替えて、光の弾丸を無数に発射する。悉く命中して、悉くが血が流れるよりも早く治療されていく。

「撤退するぞ！転移の用意を・・・！」

「させると思うか！」
道を行くトラックを片手で軽々と掴んで持ち上げ、ビルから落下している天力使いに放り投げる。天力使いも散弾銃に切り替えて吹き飛ばすが、流石に連発できず破壊しきれずに直撃を受けた。
ビルも車もディオドラの力で元通りだが、天力使いは、全く防御力のない天力使いはダメージを負ったまま道路へと落下した。
「リミットブレイク・・・！」
その事実を認識するよりも早く、黄色の炎を纏った少年は決め技を放とうとしていた。それは、活性化した拳の風圧による、エクスカリバーすらも凌ぐ最大級の破壊。
「オーバーサンシャイン！」
瞬間、全てが吹き飛んだ。修復されるまでの数秒間、彼の周囲にはクレーターが形成され、ビルはなぎ倒され、道を歩く人は跡形さえも残っていない。
そして生き残っていた5人は、息も絶え絶えでなんとか意識を保っていた。
「・・・どうだ、凄いだろう!?」
「・・・ああ、凄いよ」
痛みではなく悲しみで泣きながら、天力使いは答えた。なるほど、彼も自分同様必死で努力したのだろう。それが明らかな一撃だった。
だが、それだけだ。あまりにも何も生み出さない力だった。
「だけど、これは違うだろう?お前があのラノベのヒロインの、一体誰が好きだったのか、どういう男になりたかったのか、そんなことは知らないけど、少なくともこれは違うだろうが！」
なるほど、強い。神滅具を持たずして、彼は圧倒的に強い。たとえ他のカードを得られなかったとしても、彼ならば最強の兵に軽々となれただろう。強いエネルギーとそれを修練した日々。彼は極めて正当な強者だ。
「もう、死んでるんだよ！俺達は、もう負けて死んでるんだよ！悔しいのは分かるけど、これ以上暴れたってなにも変わらないんだよ！」
「うるさい！」

余りにも正論過ぎる天力使いの言葉は、暴走している彼にとって余りにも無意味だった。
そんなことは分かりきっている。だから、そんな事実を認めるわけにはいかないのだ。
だって、認めてしまったら、自分は一体なんの為に『兵藤一誠』になったのか、あれだけ努力したというのか。ワケがわからなくなってしまう。
「認めさせてやる、皆に、俺が凄いと認めさせてやるんだ！」

『ああ、お前はすげーヤツだよ。だが、それは駄目だ』

誰かが、そう言った。

『皆から嫌われるようなことをしたって、誰も友達にも仲間にもなってくれねーよ』

また誰かがそう言った。

『ぶつける相手もいないのに暴れたって悲しいだけだ』

一体誰の声なのか。

『その力は、誰かを傷つけるためにあるんじゃない・・・！』

それは、余りにも明らかだった。

平行宇宙を駆ける魔法少女

『・・・見ていられねーよ。お前、すんごいだっせえ』
『認めて欲しいのはわかるけどよ、それは違うだろ』
『今のお前は、ただの破壊者だ。捨て置けぬ』
『その力は誰かを幸せにするためのものだったはずだ』
その言葉は、天力使い同様目の前の黄色の炎を纏った少年を慮る言葉だった。間違いなく、魔法少女のカードホルダーから聞こえてくる。
それは、紛れもなく既に倒れた者達の、『兵藤一誠』たちの言葉だった。
『久しぶりに町の中を駆け抜けた。楽しかったぜ、久しぶりの自由はよ・・・だけど、やっぱ違うんだよ。もう死んでんだよ、昔みたいに楽しくねぇんだ。なんていうか、必死で楽しいふりをしている感じだった。ちっとも楽しくないのを認めたくなくてよ』
『忍者として、ニンジャらしく振舞いたかった。ニンジャを信じる人の夢を守りたかった。そう振舞えたが・・・お前はどうだ。一体誰の為に暴れてるんだ』
『真正面から戦いたかった。結局それは敵わなかったが・・・。確かにこの力は物を壊せる、人を殺せる。だが、それでは愛がない。愛がなければ、英雄にはなれない。俺達がなりたかったものは、形こそ違えど愛のある英雄だったはずだ』
『鍛えぬいた全てを使って、全力でテニスがしたかった。途中で終わってしまったが、それでも楽しかったよ・・・。お前は、そんなことをする為にテニスをしてきたのか。そんなことはないはずだ。テニスは、楽しいもののはずだ』
４人は、口々に黄色の炎を纏った少年を諫める。それに、暴走していたときの積極性というか、自分勝手さはなりを潜めている。客観的に物事を観察し、そして目の前の暴走体を諭そうとしていた。
「・・・お前等」
『わりーな天力使い。お前にばっか押し付けちまってよ』

『ここからは、及ばずながら力になろう。なに、人生ではじめてのチームプレイという奴だ』
『ふん、勘違いするな。別に貴様等に敗北をみとめたわけではない。ただ、こいつをこのまま放ってはおけないというだけの話だ』
『さあ、油断なく行こう！』
ライダーのカードが遠坂の胸の中に、アサシンのカードがルヴィアの胸の中に、セイバーのカードが美遊の胸の中に、そしてテニスプレイヤーのカードがイリヤの胸の中に、それぞれ収まっていく。
それは、本来のカードの使い道。納得して敗れた敗者が、次を目指す勝者へ力を託すための行いだった・・・。
「・・・これが外宇宙の力なの？」『そういうこった！さあ、受け取りな！』
自らの魂から引き出される未知の力に困惑しつつ、遠坂はその体をスーパーカブの部品を媒介に、スーパーカブの九十九神を憑依合体させていく。
『「スーパーカブｉｎスーパーカブ！甲縛式オーバーソウル、ウルトラスーパーＤＸ！」』
攻撃力こそ低いものの、速度と持久力、そして防御に優れたその装甲は、彼女の肉体をすっぽりと包み込み守っていた。
本来、初めて使う能力であり戸惑うところだったが、しかしまるで１０年間研鑽を怠らなかったかのようにその魂に馴染んでいた。
「これがニンジャソウルが宿るということですね!?」『いいや違・・・いや、その通りだルヴィア＝サン』
精神と肉体から編み上げられるエネルギー。その感覚に戸惑いながらも、ルヴィアはそのエネルギーを身に纏う。
性質変化によって、雷そのものと化したチャクラ。それを身に纏い肉体を活性化させ防御力さえも向上させる。
『「性質変化、雷遁の衣！」』
その凄まじい電力で髪を逆立たせながら、その肉体を雷で覆っていくルヴィア。
その力は、その鍛錬をしてこなかったはずのルヴィアに、生前の一

誠同様の力を与えている。
「すごい、これが小宇宙」『フン、この程度でうろたえるな！』
美遊は自分の中に宇宙が生まれたかのような錯覚さえ覚える。いいや、事実としてそうなのだろう。本来、人の身では決して対抗し得ない神と戦うための力。
その小宇宙が自分の中で燃焼していく。感じる、本来六感までしかない感覚が七感、八感にまで拡大していくのを。
『「聖剣抜刀・エクスカリバー！」』
全ての根幹である原子を砕くことを基本とし、その原子で構成された全てを両断する力、エクスカリバー。
失われて久しいその聖剣の名を冠するにふさわしいこの世の万物を切断する力が彼女の四肢に備わっていく。
「なんなの、このエネルギー?!」『これが無我の境地だ』
「だからそれなんなの?!」『無我のオーラだ』
「無我のオーラってなに!?」『テニスって、楽しいだろう?』
「全然会話になってない!?」『天衣無縫の極み・・・それは、テニスを始めたときは皆が持っていた気持ちだ・・・』
「・・・それで?」『天衣無縫の極みというものはようするにそういうことだ・・・』
まったくもって何の話だか分からない。一体どこからわく力なのか、体感しているイリヤすら全く分からない。
説明をしているテニスプレイヤーも、話が異次元過ぎて会話にすらなっていない。おそらく、デュエリストがカードを創造する時とかそんな感じなのだろうが、常人には理解できない境地である。
『「無我の境地の扉の一つ、天衣無縫の極み?!」』
此処はテニスコートでもないし、相手はテニスプレイヤーでもないし、ましてやこれから始まるのはテニスでもなんでもない。しかし、それでも彼にとってこれは『テニス』だ。誰がなんと言おうと、これはテニスなのである。
その、テニスをひたむきに楽しむという心が、たとえ１０８式波動球で観客席まで吹き飛ばされようが、磔御免で金網に叩きつけられよ

うが、悪魔になった相手にボコボコボールをぶつけられようが、自分のチームの監督にボールをぶつけられようが、焼肉屋で大食い大会を催そうが、五感を剥奪されて身動き一つできなくなろうが、ダブルスの相手がねばねばしているオーラでつながって浮遊していようが、めがねを踏み潰されようが、いきなり相手が二人に分身しようが、ダブルスがシングルスになろうが、いきなり相手が『跡部王国』とか言い出そうが、バリカンで坊主頭にされようが、記憶喪失になってテニスの事さえ忘れようが、目の前で特になんの関連もない少女が人質にとられようが、テニスの試合前に殺されそうになろうが、目の前でいきなりコントが始まろうが、ズラをかぶっていようが、対戦相手が自分のところの部長に変身しようが、入院先の病院が包帯巻々総合病院だろうが、相手の中学生の腕をへし折ろうが、心を閉ざしてこようが、いきなり英語で話し始めようが、黒いオーラで威嚇してこようが、ガットに穴が開こうが、証明が落下してこようが、豪華客船が難破しようが、目の前で隕石が降り注いできて恐竜が絶滅しようが。

それでも尚『テニスって楽しい』と思う、簡単なようでよく考えなくても異常に難しい境地に達さなければ実現できない力。常人には余りにもハードルの高い境地。それが天衣無縫の極みだった。

「く・・・お前たちまで、死んだことを認めるというのか?!」

「違うぞ、認めないのはお前の凶行だ」

ふらつきながら、天力使いは真実孤立した死ぬ気の炎を纏う少年に宣言する。この場の全員が、お前を止めるために戦っていると。

「・・・どうせ口で言ってもかわらないんだろう?それなら、力ずくで止めてやる」

「・・・ふざけるな!俺は、絶対に認めない!」

「だから、力ずくだって言ってるんだ!」

「うおおおおおおおお!」

明確すぎる拒絶。境遇を同じくするものさえ、皆が皆自分を否定する。こんな不条理があっていいものか。塩の弾丸を拳から射出する。目標はもちろん、天力使いだ。

だが、その弾丸は、榴弾のようにバラバラになりながら向かう弾丸は、しかし一発たりとも命中しない。身動きすらできない天力使いのその直前で、不自然なほど急激に軌道を変えてそれていく。この現象は、彼もよく知るあの技によるものだった。

「こ、これは手塚ファントム！」

「・・・なんか、肘が痛くなってきてるんだけど」

『手塚ファントムの反動だ。下手に乱発をすれば再起不能になるぞ』

「どういう原理?!」

全く持ってどういう原理なのか分からないが、肘が痛くなることと引き換えに味方の身を守る技なのだろうか。テニスを知らないイリヤにとって、この状況は余りにも不可解が過ぎる。

とはいえ、ここからは反撃だ。イリヤが遠距離攻撃に対して圧倒的なアドバンテージを誇るテニスプレイヤーになった以上、向こうは接近戦をするしかない。

まず飛び出したのはルヴィアだ。雷を身に纏って、瞬身で接近する。

「雷虐水平！」

バーサーカーの咽を狙ったチョップは、しかし当然のように防御される。光速攻撃すら見切れる死ぬ気の到達地点は、雷速をもってしても不意を打てるものではない。

雷に性質変化をしたチャクラを身にまとうことで攻撃力は圧倒的に向上しているが、敵もさる者。活性化によってダメージを受けても即座に回復し傷さえ残らない。

さて、この敵をルヴィアは如何にして攻略するのか？

「イッセイスレイヤー＝サン！インストラクションを！」

『え？・・・あ、俺の事か、うん。・・・インストラクション・ワンだ。百発のスリケンで倒せぬ相手だからといって、一発の力に頼ってはならぬ。一千発のスリケンを投げるのだ！』

「なるほど！イヤーッ！」

彼女のニューロンの中で、ニンジャソウルとなったイッセイスレイヤー＝サンのインストラクションが伝わってくる。ジャストオンタ

イムな奥ゆかしいインストラクションによって、もはやルヴィアに迷いはなくなった。
　がちがちに防御を固めた敵の防御を、力づくでこじ開けんとチョップの嵐をお見舞いする。「ノー・カラテ、ノー・ニンジャ」。ニンジャにとってジツに頼るのは死亡フラグ。カラテこそが真髄だ。
　むろん、晴の炎の到達地点による再生速度を上回ることなどありえない。だが、動きは明らかに拘束されている。むろん、このまま負けるバーサーカーではない。活性化された反射神経によって攻撃の合間を見る。そして、攻撃の速度においても雷遁の活性を晴の活性は凌いでいた。
「エクスカリバー！」
　だが、それをも凌ぐのが小宇宙の燃焼だ。その鋭すぎる太刀筋は、腕を切断されようと高速修復によってたちどころに回復する。だが、それでも動きは一瞬止まる。そして、止まりさえすればルヴィアのチョップの嵐は反撃を許さない。
「イヤーッ！イヤーッ！イヤーッ！イヤーッ！イヤーッ！」
「これが光速拳、いえ、光速斬撃！」
『そうだ、奴等の高速など、精精マッハ３～５。その程度の速度ではこの光速攻撃にはついてこれまい』
　美遊の援護を受けて、尚もラッシュを仕掛けるルヴィア。とはいえ、やはり決め手にかける。切断の類では、修復は速やかに行われてしまうのだ。
　だからというわけではないが、脚部のタイヤによって道路を駆け抜けて加速を済ませた遠坂が、ルヴィアと呼吸を合わせて前後から挟み撃ちにする。
『「クロスボンバー！」』
『「絶牛雷犂熱刀！」』
　全く同じ技を全く違う名前で発動させた二人は、敵の首をあっさりと吹き飛ばした。その上で口論を始める。
「あんたね、ちゃんと私に合わせなさいよ！」

「貴女こそ、私に合わせなさい！」
『バッカかオマエ！これはクロスボンバーだろうが！マグネットパワーだろうが！』
『・・・いや、ニンジャだし絶牛雷犂熱刀だろう・・・』
ルヴィアと遠坂、アサシンとライダーも口論する。この技は、果たしてどちらの名前が正しいのだろうか。それは年代によって変わってくるのではっきりしない。
『「エクスカリバー！」』
それは置いておいて、首から上さえもあっさり修復できるバーサーカーも、流石に動きは硬直する。その隙を逃すまいと、美遊は連続の光速拳によって幾度となくきり刻み、硬直させたまま動けなくさせる。
そして、止めを刺すのはやはり、イリヤだった。
『「二人』とも、力を貸して！」
2枚のカード、テニスプレイヤーとアーチャーのカードを身に宿したイリヤは、光の天撃をボール代わりにサーブの体勢に入っていた。
『才気煥発の極みによる予知だ・・・この一球でいい』
『ああ・・・この一撃で終わらせる。頼んだぞ』
既に、力なく倒れて動けなかった天力使いは、自らカードとなりイリヤに力を貸していた。みなぎってくる天の力に背中を押されながら、イリヤはまるでずっとしてきたかのように光の天撃を凝縮した玉をトスし、ラケットに変形し無我のオーラで増強されたカレイドステッキでサーブを放つ。
『天衣無縫の極み、百錬自得の極み、才気煥発の極み、同時発動！』
『光の天撃、蒼天の陽光弾！』
『魔法力は身体強化に全フリです！イリヤさん、やっちゃってください！』
『『『「一・球・入・魂！スーパーノヴァ！」』』』
放たれた打球は、無我のオーラによって倍化し、切り刻まれながらも再生をし続けていたバーサーカーに迫る。先ほどの狙撃は、確かに

首から上を吹き飛ばしていた。であれば、倍化によって増幅されていれば、それは体を丸ごと吹き飛ばすにたる一球となることは明白だった。

その狙いはたがうことはない。着弾の直前巨大化した光のサーブは、バーサーカーの肉体を飲み込んだ。

しかし、それは彼女の視点。天衣無縫の極みによって最適化されたその行動は、一切余人に写ることはない。さながら時間が吹き飛んだかのように、光速攻撃すら見切るバーサーカーに反応さえ許さず消し飛ばした。

攻撃の後も、再生能力ゆえか未だにバーサーカーはその姿を残していた。だが、才気煥発の極みによる予知は完璧であり、事実として彼はもう戦闘ができなかった。単純に、エネルギーが切れたのである。

「い、や、だ・・・」

泣き崩れ、体のほとんどが維持できなくなったというのに、バーサーカーは尚も苦しみ、それでも、消えようとしない。

「みんな、俺を知らないんだ。みんな、俺を忘れているんだ」

平行宇宙からかき集められた7人の兵藤一誠。その7人の勝者は、果たしてどの世界で生きるのか。また、死んだ6人は果たしてもとの宇宙ではどうなるのか。

答えは単純。元の宇宙そのものがなくなる。およそ、7人は彼らの周囲以外は完全に同じ環境の平行宇宙であり、勝者の周囲が優先される形で7つの宇宙は統合される。

それは即ち、敗者の宇宙は、というか敗者の友人や家族はその関係性の一切を失って生きていく。勝者の友人としての記憶と過去だけをもって。

「俺を殺した奴も、俺のことなんて、知りもしないんだ・・・。もう、だれも俺を知らないんだ・・・」

孤独は、絶望の入り口である。そして、見知らぬ世界でただ一人であるという以上に、自分の帰るべき家がないというのは、まさにどう

しようもない絶望であろう。
「そんなの・・・死んでも死にきれねぇよ・・・」
誰かに憶えていて欲しい。誰かに知って欲しい。誰かと繋がっていたい。それが、彼の暴走の根幹。
それは、もはや帰れない美遊にとって、非常に共感させるものだった。だが、果たして自分は彼の手を取っていいのだろうか。帰るべき世界から逃げ出した自分が、帰る世界を失った彼の手を。
そんな躊躇を知ってか知らでか、魔法少女のままイリヤは歩み寄る。その眼には怒りも憎しみもなかった。
「大丈夫、私は忘れないよ」
その真摯な瞳に、バーサーカーは射抜かれた。
「本当に、本当に忘れないのか?」
「うん、絶対に忘れない」
天力使いの言葉を聞いて、彼と触れ合って確信した。彼らは確かに負けたのかもしれない。だが、彼らの暴走はそれを理由に放置していいものではなかった。だから、止めたかった。
巻き込まれてしまったが、今はそう思う。できることならば、彼の心も救いたかった。
「そうか・・・ありがとう」
半ば消えかけていた体は、一気に崩れていく。しかし、その顔は安らかで・・・。
「今日は、死ぬにはいい日だ・・・」
色とりどりの、大空の七属性、大地の七属性、夜属性を意味する炎を描いた一枚のカードを残して、バーサーカーは消えた。同時に、イリヤたちに宿っていたカードも弾けるように飛び出した。
元々、バーサーカーを止めるために力を貸していただけのこと。もはや戦う理由をなくした彼らは、沈黙を取り戻していた。ただ一枚、アーチャーと書かれたカードを除いて。
『ああ、良かった・・・』
それは、人としての姿を取り戻すことはなかった。カードのまま、独白する。それは、暴走するとは思えないほど穏やかになっていた。

あるいは、これが本来の彼なのかもしれない。
「天力使いさん!?」
『・・うん、楽しかった。短い間だったけど、本当に楽しかった。仲間と一緒に敵に挑んで、和解して・・・。うん、思い描いた冒険そのものだった。君は、楽しかったかい?』
「うん、とっても楽しかった!タイヘンだったけど、意味わかんなかったけど、でも楽しかったよ!魔法少女になれてよかった!」
『・・そうか、じゃあ良かった。俺のことも覚えておいてくれるんだね?』
「何言ってるの?」
まるで、死ぬみたいな、遺言のような話し方だった。それは、幼いイリヤにとってはとても受け入れられない別れであり・・・。
しかし、美遊も魔術師二人も、それを止めることはできない。彼は、元々楽になりたがっていた。それから開放された今、彼には成仏というべきものが待っていて当然だろう。それは、3人にはなんとなく分かっていたことだった。
『・・・ああ、安心した』
それが、最期の言葉だった。天力使いのカードは、天撃の五属性を意味するシンボルの描かれたアーチャーのカードはそれっきり何も喋らなくなった。それこそ、ただのカード同様に。

２ｗｅｉ！編

７人の兵藤一誠について

クラス　ライダー
通称　シャーマン
保有エネルギー　巫力
動力源　魂
能力・必殺技
甲縛式オーバーソウル『ウルトラスーパーＤＸ』
性能
６人の中でも随一の防御力を誇り、加えて機動力持久力共に高め。
格闘を前提としているが腕力はそれほどでもない。よって、罠にかかると拘束から抜け出せない。
スピードと頑丈さに物を言わせたヒットアンドアウェイの轢き逃げ攻撃を特意とする。
思想
ガチ。流石に全員を倒すのは無理と思っており、自力では数体倒す程度で考えていた。
天敵
セイバー　向こうのほうが早い上にあっさり装甲をぶち抜かれて一撃で首をはねられる。
備考
超・占事略決に書きこまれた知識をあらかじめ与えられており、赤龍帝の助力があれば死者蘇生も可能だった。
かなりの当たり能力だと本人も思っていたが、肝心の持ち霊と媒介が、そんなに良質なものを学生の分際で得られるわけもなく・・・。
仕方なく、スクラップ置き場で見つけたスーパーカブの九十九神と、そのジャンクパーツを媒介にして修行を始める。
とはいえ、世界で最も売れている車は伊達ではなく、性能の割りに非常に燃費が良かった。

もしも勝ち抜いていれば、赤龍帝の魂を用いて赤龍帝の籠手で甲縛式オーバーソウルを構築することもできた。
しかし、キャスターの卑劣な能力によって殺害される。
未練は、もっと自由に駆け抜けたかったこと。人目を忍ばず、好きに町を走りたかったらしい。

クラス　アサシン
通称　忍者　ニンジャ　イッセイスレイヤー
保有エネルギー　チャクラ
動力源　肉体・精神
能力・必殺技
雷遁系忍術全般
性能
忍者だけあってトリッキーさというか変幻自在さでは随一。技のデパートと化していた。
基礎能力もそれなりに高く、セイバー以外なら逃げるのも楽であった。
隠密2に対して戦闘8ぐらいの忍ぶ気が少ないトリッキーファイター。
本編で語られたとおり、防御力はほぼなく、直撃を受けると脆い。
思想
ガチ。隠密能力は、勝てそうにない敵から逃げるためのもの。流石に小宇宙の使い手は無理。その場合は暗殺を考えていた。
天敵
特になし　索敵能力を持つのがキャスターだけなので、逃げれば逃げ切れる。
備考
その場の勢いでイッセイスレイヤーと名乗ってしまうほど真面目なニンジャ。
いざリアスに出会ったときは、忍者であることを隠しつつ影ながら色々やるという中二病の患者。

サービス精神が旺盛で、つい、不合理なこともしてしまう。
まあ、本編では暴走していたのでそれがいささか以上に露出していたが。
なんだかんだで面倒見のいい、付き合いのいい男である。
未練は一度もニンジャらしく振舞えなかったこと。

クラス　セイバー
通称　聖闘士（偽）
保有エネルギー　小宇宙
動力源　内宇宙
能力・必殺技
光速拳、エクスカリバー
性能
随一を通り越してぶっちぎりの攻撃速度を誇る。
とは言っても、テニスプレイヤーとバーサーカーでは対処できるので無敵でもない。
攻撃力は高いが、鋭利な切断による攻撃であり、自力で怪我を治せるライダーとバーサーカーには相性が悪い。
でも、ライダーは首を切れば死ぬのでそこまで手間でもない。
弱点として、直接戦闘以外の能力を持たず、また、光速攻撃ができるのに機動力もなぜか低い。
あと、聖衣もないので防御も紙である。
思想
ロマン。圧倒的な性能を自負し、自力で全員を殺して本来の歴史に殴り込みをかけるつもりだった。
天敵
アーチャー　光速の狙撃には対応できないし、あまり走り回るほうでもないので狙撃しやすい。
備考
フェニックス一輝を意識した、やたらと高圧的なツンデレ。中二病。

必死で修練する傍ら、いろいろかっこいい台詞を考えていた。
その台詞を言うに足る実力を持ち合わせており、赤龍帝の鎧を身に纏えばヴァーリすら瞬殺できた。
４９人の兵藤一誠候補の中でも随一の戦闘能力を誇る。
未練は正面から戦い勝利できなかったこと。

クラス　テニスプレイヤー
通称　テニヌ
保有エネルギー　無我のオーラ
動力源　？
能力・必殺技
天衣無縫の極み
性能
対遠距離攻撃に対してはほぼ無敵。反撃できれば手塚ゾーンと百錬自得の極みによるカウンター、許容量を超えていれば手塚ファントムと才気煥発の極みによる回避が可能。
もはや、スポーツ漫画ではない。
天衣無縫の極みが発動すれば、たとえセイバーであっても認識が不可能なレベルの時間を吹き飛ばしたかのような攻撃が可能。
もはや、スポーツ漫画ではない。
なお、接近戦は思想の問題で得意ではない。雷による光速移動で逃げることはできる。
もはや、スポーツ漫画ではない。
アサシンほどではないが、なかなか優秀な補助能力がそろっている。
もはやスポーツ漫画ではない。
思想
ロマン。できれば、全員と勝負、というかテニスをしたかった。
天敵
ライダー　殺傷能力が余りないので、防御が固く接近戦しかしない相手には弱い。

備考

全員に共通することだが、エネルギーを運用するための才能とはエネルギーの総量が多いことに加えてそれを運用するための気質も含まれている。

例えば、第八感とか到達地点とか、とくにイベントとか試練もないのに至っているのはそのためである。

この男の場合、『どんなテニスも楽しむ』ことが必要な天衣無縫の極みを会得できるようにそういう気質を与えられている。つまり、ぶっちゃけテニス脳と化している。

そのおかげで、どんなに辛い鍛錬でも乗り越えることができたが、反面なんでもテニス中心で考えるようになってしまっている。

もう完全に呪いか洗脳である。ちなみに、能力はともかくクラスに関しては成長し、能力を会得していく中で記入されるのだが、これだけは最初からテニスプレイヤーとかいてある。

未練は、全力でテニスができなかったこと。

クラス　バーサーカー
通称　マフィア（仮）
保有エネルギー　死ぬ気の炎
動力源　波動
能力・必殺技
晴の炎の死ぬ気の到達地点
性能
圧倒的再生力を持つ。加えて光速攻撃にも対応可能。近距離ではセイバーに匹敵する戦闘能力の持ち主。
遠距離戦はさして得意ではないが、塩の弾丸を発射することはできる。精度、威力共に高くはないが。
炎を推進力に高速移動も空中に飛ぶこともできる。尚、ボックスはルール上与えられていない。
思想
ロマン。全員を正面から倒すつもりで居た。事実としてそれぐら

いの力はあった。
天敵
アサシン　というか、常時戦闘モードにはなれないので、背中から刺されると普通に死ぬ。
備考
超直感も持たないので、じゃあ再生能力が要るだろうと晴の炎を選んだ。
活性と倍化は相性がよく、生き残っていればかなりの強キャラとして猛威を振るった可能性も・・・。
セイバーと違って打たれ強く、安定感のある戦いができた。
まあ、キャスターの卑劣な能力によって死んでしまったが。
未練は、誰かに自分を覚えていて欲しかったこと。

クラス　アーチャー
通称　天力使い　ヴィンデルバスター（偽）
保有エネルギー　天力
動力源　大気
能力・必殺技
光の銃の才牙ジャッジメントXⅢ
性能
最強の射程距離と殺傷能力を持ち、暗殺に徹すればテニスプレイヤーを除いて全員殺せる。
バーサーカーも、テニスプレイヤーと違って常時発動の能力を持たないため、例えば公園でくつろいでいるところを狙えば一発である。
索敵能力を持たないため、まず探すところから始めなければならないのが悩みどころ。
遠距離戦では無敵に近いが、極端なほど接近戦が弱い。まあ身体能力が強化できないので仕方ない。
光の天撃の他、移動用、というかホバーとして風の天撃をある程度扱える。戦闘ができるほどではないが。
天敵

テニスプレイヤー　遠距離攻撃全反射、予知能力持ち。詰んだ。

思想

ガチ。何人かを狙撃し、見つかったら機関銃や散弾銃で抵抗するぐらいのつもりはあった。

備考

他のぱっと思いつくエネルギーに比べて身体能力の強化ができないというか、弱いので接近戦を避ける狙撃銃を選択。

間違っておらず、セイバーにさえ通用する代物になった。反面接近戦では絶望的だが。

きっと、みんな真面目に戦う練習してるんだろうな、と狙撃に対して自信を得つつも、正面から戦わないことに負い目があった。

その結果、暴走しても理性を保てていたことに繋がる。なお、テニスプレイヤーも暴走はしていなかった。南無。

未練は友達と遊び、冒険することができなかったこと。

クラス　キャスター

通称　???・ヘタレ

保有エネルギー　???

動力源　???

能力・必殺技

???

性能

アーチャーの推理どおり『町の中にいる6人を捕捉する能力』と『遠い場所に居る6人を同時に殺す能力』の二つを持っている。

尚、勘違いしている方も多いようだが、こいつを含めて7人はあくまでもエネルギーとそれを扱う才能を与えられている。

よって、セイバーやアサシン、テニスプレイヤーのように既存の技を習得することもできるし、バーサーカーやライダー、アーチャーのように新しく能力を造ることもできる。

既存の技は、おなじ一誠なら知られていることもあるので対応されやすい。新しく能力を作ると素人考えなので案外穴があること

も・・・。

ちなみにコイツは全く新しい能力を作っていた。ただ、原作でも全く同じ原理の能力を操るものはいた。使用方法は全く違ったが。

思想

メタ。あらゆる可能性の中で最も安全な初日に皆殺しを実行。

能力の構築は完全に『この戦いを勝ち残ること』以外の一切を排除している。優勝したけど、このあとどうしよう?

天敵

自分以外全員

備考

もともとの『兵藤一誠』だってなんの能力もないのに努力と武装で幸運で生き残ってたんだから、別に戦闘向きの能力を作らなくても大丈夫だろう。

そんなノリで生存のための能力を構築したが、これが結構タイヘンで・・・。他の面々同様非常に真面目に努力しています。

なお、セイバーやバーサーカーがそうであるように、艦長の参加した戦いと違って非常に強力な能力者がそろっている。

もしも、この男が初日で全てを終わらせて居なければ、艦長のときとは比べ物にならない被害が予想された。

というか、初日にセイバーとバーサーカーが戦闘し、カルナ対ジークフリート並の被害があった。マジシャレにならん。

死と遊ぶ暗殺者

説明する必要があるのか疑問に思うのだが、原作を知らないという方もいるとは思うので、一応説明させていただく。

遠坂凛とルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトはカード全6枚を回収した後、案の定同士討ちを始めた。

ディオドラからの命令はあくまでも回収だけだが、自分でカードをすべて持ち帰ってしまえば、相手を一方的に貶めることができる。

自分がディオドラの作った地獄に一族郎党先祖代々子々孫々に及んで放り込まれるのは勘弁だが、相手だけそれになるのであれば願ったり敵ったりであろう。

まあ、次代を担うものであるディオドラに虚偽が通じるとは思えないが、原作でも宝石翁に対して同様の思考で行動をしていた二人である。ある意味原作に忠実だといえよう。

二人の宝石を用いた魔術による戦闘は一昼夜をかけ、全ての（備蓄分を含めて）宝石を使い切って遠坂が勝利した。

が、ディオドラは計ったかのようにそのタイミングで遠坂の携帯電話に連絡を入れてきた。

『まだカードがあったから、見つけて回収してね』

それを聞いたときの、遠坂の絶望といったら無いだろう。手をじっと見る。宝石は一つもない。

そもそも、二人は魔術師としては非常にオーソドックスであり、要するに武名だのにはそんなに興味が無い。無いわけではないだろうがどちらかと言えば研究者としての面が濃いのだ。

つまり、あの6枚のカードをめぐる戦いの焼き直しなど、冗談ではないだろう。とはいえ、遠坂にせよルヴィアにせよ、拒否権は無いわけで・・・。

市内にある大きな競技場。夜の静まり返った雰囲気の中、少女４人とステッキ2本はどこか白けきった空気の中立っていた。

「ということで、またまたカード回収よ～・・・」
「・・終わりが見えなくなって着ましたわね。あの国賊を甘く見ていましたわ」
ふてくされた調子で、遠坂は宣言した。その顔に、生気はない。
ルヴィアはそれほどではないが、やはり調子が出ないようだ。無理も無いだろう、同じ世界の相手なら知識で対応できるが、全く違う世界のエネルギーが相手では魔術師としての経験もかえって足を引っ張りかねないのだ。
現に、前回のアサシンは全く違う五行相関図だったわけであるし。
どこぞのバトルマニアでもあるまいに、未知の敵に心躍るわけも無く、轡を並べる相手の信用のできなさを再確認し、先行き真っ暗である。
いや、そもそもこのまま死ぬまで戦わされることになるのではないのかと不安になってさえいた。
「・・・ちょっと複雑な気分かも」
つい先日の感動の最終決戦はどこへやら。また大して変わらない戦いが始まろうとしている。
また魔法少女として戦えるということが嬉しいような、悲しいような。イリヤの心中は複雑だった。
「大丈夫、私も一緒だから」
「美遊、ちょっと眼が怖いよ」
とはいえ、イリヤにはデレている美優は意気高揚。勝利への意思を胸に確固たる覚悟を固めていた。
まあ、それはイリヤには痛いほど伝わっているようだが。
『印象阻害のされていた前回もそうでしたけど、今回は異次元での戦闘ですか・・・』
『魔法少女としては派手にやりたいんですけどね』
そう、前回の6枚のカード回収の折りは通常空間そのものに細工がされていたが、今回はまったくの異次元での戦闘となっている。
それは、魔法少女用神器として作成された両ステッキとしては大変に不満だった。

というか、魔法少女というのは町内トラブルを解決するものと相場が決まっているというのに、毎度毎度こんな任務ではやる気も起きないというものだ。

「はいはい、とにかくやるわよ」

「では、わかっていますわね？」

『はいはい、さっさと済ませちゃいましょう！』

『半径２ｍで反射路形成！鏡界回廊一部反転します！』

今回の敵は、異次元である鏡面界と呼ばれる領域に潜んでいる。前回と違って方々を探す必要は無く、ステッキの探知能力を持ってすれば見つけ出すのはたやすかったのだ。

それが、いわば慢心とも言うべきものを４人に与えていたのかもしれない。

前回の暴走していたカードは6枚。しかし、その暴走は一般的な意味での暴走ではなかった。どちらかと言えば、感情表現が極端になっていただけだった。

彼らは、なるほど一級の戦闘能力を持っていたが、しかしアーチャーたる天力使いを除いて殺意そのものはさして弱かった。

ただ怒りを表現したがっていたシャーマンたるライダー、自分の戦うところを見て欲しかった忍者たるアサシン、正面から戦うことにこだわっていた聖闘士（偽）たるセイバー、ただテニスをしたかった無我の境地に至っていたテニスプレイヤー、忘れられることに耐えられなかったマフィア（偽）であるバーサーカー。

かれらが、もしも積極的に殺そうと動いていれば、あるいは単に自動的に動くだけだったのであれば、四人が五体満足であれたはずが無かったのだ。

単なる小学生に過ぎない二人の少女、研究者としては一流でも戦闘者としては未熟な二人の魔術師、そしてどれほど高性能であっても『魔法少女』用に過ぎない人工知能二体。

彼女たちは、たるみきった空気のまま戦場に赴くという最悪の事態に『気付く』ことさえもなかったのだ。

「・・・霧？」

「周囲が見えないね」
「警戒を怠っちゃ駄目よ？」
「索敵から始めましょう、美遊」
鏡面界に始めて突入した４人は、転移した先が霧に覆われていても、それが異常なのかそうではないのかまったく理解できなかった。
『まずいです！これは強酸・・・毒です！』
『結界を展開します、絶対に吸い込まないでください！』
迅速に対応したのはやはりステッキ２本。両ステッキは防毒結界を展開し、４人を保護した。
とはいっても、この毒霧はどうやらそれそのものが神器のような結界で、たやすく吹き飛ばせそうに無い。
『索敵結果・・・総数１０００？』
『完全に囲まれて・・・着ます！』
完全に、後手に回ってしまった。毒霧に混じって参じるは、呼吸する機能自体ない骨でできた骸の兵士だった。
手にするは単なる兵士の持っていそうな粗末な剣ばかり、動きも先日の『彼ら』に比べれば鈍いというレベルにすらない。なによりも、全く意思も悲哀も無い。
完全武装した魔法少女である二人ならば、打ち倒すのはたやすいはずだった。一人や二人ならば。その数量が１０００を数え、毒霧に紛れてさえいなければ。
「まずいわね・・・結界を展開しながらだと攻撃が弱くなるわ」
「こんなことなら、美優とイリヤの二人だけで突入させるべきでしたわね」
「数が多いみたいだし、散弾で倒せるか試そうか？」
「ううん、多分本体がいるから、そっちを探そう」
とはいえ、性能差で大いに圧倒されていたバーサーカーやセイバーと比べれば何のことも無い。パニックにならないという意味では、前回の戦いは教訓として生きていた。
だが、それでもいっそライダーとの初戦のように、パニックを起こしてでもさっさと撤退するべきだったのだ。

この、生き物を拒む硫酸の霧と無生物である竜牙兵の親和性がよく、てっきりセットであると全員が勘違いをしていた。だが、事実は大きく異なる。

この境界面には、極めて無慈悲で機械的な暗殺者が『二人』いたのだ。

『・・・高エネルギー感知！攻撃です！』

『障壁最大！皆さん、耐えてください！』

霧の内側で、霧と竜牙兵に紛れて機をうかがう少女のような暗殺者とは別に、霧の結界の外側で宝具である巨大な浮遊要塞「虚栄の空中庭園（ハンギングガーデンズ・オブ・バビロン）」に座している女帝のような暗殺者は、魔術による爆撃によって侵入者である４人を殺傷すべく武器である竜牙兵ごと吹き飛ばさんとしたのだ。

その威力たるや、宝具であるはずの霧の結界の内側を埋め尽くさんばかりである。流石に、もう一人の暗殺者は有効射程外で難を逃れていたが、爆心地にいた４人は全くその限りではなかった。

「・・・ぐっ！みんな、大丈夫？」

「・・・やってくれましたわね。この屈辱は必ず１００倍にして返しますわ！」

「・・・なんとか」

「・・・前よりはマシかな？」

『皆さん！敵が再度着ます！』

『一旦撤退しますので、それまで持ちこたえてください！』

此処が引き際である。両ステッキはこれ以上の戦闘を無謀であると判断し、自動的ながら撤退を始めていた。

だが、そう簡単に退ける道理は無い。再び空中の城塞から投入されてきた竜牙兵の軍勢が、剣を手に襲い掛かってきたのだ。

「こんのぅ！」

「これしきで！」

だが、この程度の木偶に後れを取る魔術師二人ではない。

宝石の尽きている遠坂は、拳を握り締めて龍の牙でできた戦闘人形の頭蓋を叩き砕く。

別に宝石が尽きているわけでもないのに、負けじとルヴィアもタックルからのリフトアップでバックドロップを華麗に決めて撃破していた。

とはいえ多勢に無勢、何よりも今は防毒の結界も解除されている。如何に二人がフィジカル面でも優れているとはいえ、長く持つ道理は無い。

そしてそのタイミングを狙って、イリヤや美遊と比べても尚幼い容姿をしたロンドンの殺人者が転移に集中していたイリヤに無言で襲い掛かっていた。

「危ない！」

それに気付いた美遊がステッキで短剣を受け止めるが、それでも幼い暗殺者はためらわない。目の前の敵を排除するべく、その野生さえ感じさせるような俊敏な動きで肌を切り裂いた。

「美優！」

倒れそうになる美遊を見てイリヤも脱出のための準備を放棄して美遊へと飛び出すが、しかし、その咽元に無慈悲な刃が迫っていた。

そのとき、全員の眼はイリヤに集中していた。手を伸ばそうとしたり、声をかけようとしたり、かばおうとしたり。

しかし、そのいずれもが無駄に終わる。戦場に出向いたルーキーは、装備におぼれて死を迎えるはずだった。

だが、イリヤの中の、冬木の聖杯とはまた違う別の聖杯がそれを跳ね除ける。

イリヤの咽に刃が触れるその間際、イリヤの体から光が噴出し、それに呼応するようにルヴィアと遠坂の持っていた6枚のカードが眩く輝いた。

「千鳥！」

『夢幻召喚（ファイルロード）アサシン』

少女の暗殺者は、極めて機械的に獲物を捕らえようとしていた刃を

引いて身をそらした。それはイリヤの命を奪うことはできなかったが自分の命を守ることに成功していた。
なぜならば、その細い腕は雷を纏った突きによって焼ききられていたからである。腕が無ければ、致命傷を受けていたことは確実だろう。
「・・・危ないところだったな・・・！・・・だってばよでござる！」
イリヤを救ったのは一目見れば忍者だとわかる、忍者装束に身を纏った少年だった。
いや、彼だけではない。あるものはジャージを、あるものはタンクトップにダメージジーンズを、あるものは場違いなことに黒いスーツを、あるものは、競技場にふさわしい？テニスウェアを、あるものは機械仕事をするための作業服を、それぞれ着ていた。
『夢幻召喚（ファイルロード）アーチャー』
「イリヤ、大丈夫かい？」
『夢幻召喚（ファイルロード）セイバー』
「ふん、仮にも俺を倒したお前たちがその体たらくとはな、まったく情けない」
『夢幻召喚（ファイルロード）バーサーカー』
「・・・謝罪は後だ。今は、こいつ等を」
『夢幻召喚（ファイルロード）テニスプレイヤー』
「さあ、油断無くいこう！」
『夢幻召喚（ファイルロード）ライダー』
「死んだり生き返ったり、われながら忙しいもんだぜ！」
暴走しているわけでもなく、嘗てのように明らかに体を持って６人は少女たちを守るように並び立っていた。
その事にきづいてしばし呆然とする４人だが、そもそもそんな場合ではない。硫酸の霧は、確実に彼女達の呼吸器や肌を侵していた。
「まずは、この霧だ！何とかできるやつぁいねーか！」
甲縛式オーバーソウルで身を守りつつ、ライダーが叫んだ。自身はどうにでもなるが、流石に結界をはって皆を助けるとなると専門外である。

というよりも、ライダーは防御に長じているが他の面々はその限りではない。自分以外が硫酸に侵されるなど、見たくは無かった。
「任せろ！手塚ゾーン！」
テニスプレイヤーを中心に、巨大な空気の渦が発生する。それは、霧の結界を吹き飛ばすには至らずとも霧押しのけ安全圏を確保することには成功していた。
「何でもアリすぎじゃない!?」
「・・・おかしい、何がどうなっているのかさっぱり分からない」
美遊もイリヤも、正直に言って未だにこのテニスプレイヤーの能力がさっぱり分からない。
他の面々はエネルギーを足し算引き算のように分かりやすく運用しているが、この男だけは明らかに意味不明な能力を多数取り揃えすぎている。
そもそも、手塚ゾーンとは手元にボールを引き寄せる能力だったような気が？
「オラァ！」
呆然としている二人を他所に、ライダーは装甲に覆われたままヴィアと遠坂の周囲の敵を蹴散らした。そして、そのまま彼女たちの治療を始める。
もとより、魂を操るシャーマンにとって生命体の傷の治療は『技術』の域だ。練習さえつめば、持ち霊がなんであれ巫力を用いての治療は可能である。
シャーマン自身が医者であったり、ないし神クラスの霊であるならば蘇生も可能であろう。当然、持ち霊が単なる九十九神に過ぎないライダーに、そこまでの効果は見込めないが。
「・・・アンタ、こんなこともできたんだ」
「意外な特技ですわね」
「まあ・・・な。これぐらいはな」
「俺も手伝おう」
黒いスーツのバーサーカーも、活性の晴の炎でそれを援護する。傷の治りを早くする活性は、二人の傷を確実に癒していった。

二人の治療により、酸によって焼かれていた無防備な二人は確実に治療されていた。
だが、それを待つほど敵に感情は無い。無限を思わせる数の竜牙兵が、テニスプレイヤーの生み出した空気の渦の中に突入してくる。
だが、こっちもそれを見逃すほど鈍くは無いのだ。

「セイバー！」
「ふん、言われるまでもない！」
アーチャーは機関銃形態の才牙を構え、背中合わせのようにセイバーは手刀を構えた。この場にいる１０人の中でも最速を誇る両者は、ガラクタどもを廃棄するべく、全方向に攻撃を開始した。
「エクスカリバー！」
「ジャッジメントＸⅢ！」
光の弾丸と光速の斬撃。眼に映るはずも交わせるはずも無い攻撃が群がる有象無象共を寄せ付けない。
光の弾丸は骨の体を蜂の巣にし、光速の斬撃はサイコロ状に切り分けていく。
未だに負傷から復帰しない魔法少女二人、怪我の治療をしている二人と、受けている魔術師二人、霧を吹き飛ばしているテニスプレイヤーに、指一本さえ触れさせていなかった。
だが、二人の死角である直上方向から片腕を失っていたアサシンが奇襲を仕掛けていた。
手にしたメスは、首一つを切断することなどたやすいだろう。
だが、知れ。この場にいる暗殺者は二人ではないと。
「雷虐水平チョップ！」
雷遁による肉体活性は、反射神経さえも大幅に向上させる。少女のアサシンをしとめ損ねていた忍者は、その汚名を返上するべく雷に覆われた手刀で少女の首を切断していた。
首を失った少女がカードに戻ると同時に、彼女の生み出していた硫酸の霧も解除され、ようやく鏡面界はその姿を示した。
周囲には未だに競技場を埋め尽くすほどに無数の竜牙兵が群がり、

なによりも競技場の上空にはこの世のものとは思えない浮かぶ城が存在していた。
「忍者をなめるな！」
「サツバツですわ！マッポーですわ！」
その、しめやかなニンジャらしい活躍に興奮を隠せない、治療済みのルヴィア。その興奮に、治療を済ませたバーサーカーもライダーもドン引きしている。
殺伐はともかく、末法はあんまり忍者には関係がないと思うのだが。
『カードを得ても鏡面界が失われない・・どうやら、まだカードが残っているようです』
『霧はあの小さいのが、さっきのでかい爆撃と雑魚キャラは、あのラ○ユタのほうにいるみたいですね』
「ラピュ○って・・・」
「イリヤ、宮崎監督の創作じゃないよ？」
「くわしいね、美遊」
頼もしすぎる援軍に、気を緩めるイリヤ。とはいえ、まだ戦闘は終了していない。
毒霧と少女は確かに脅威だったが、先ほど自分たちにダメージを与えたのは紛れもなく爆撃だ。
少なくとも、あれを撃破しなければならない。でなければ、こちらは一方的に攻撃されるばかりである。
「とはいっても、まず飛び移るなりしねーとな。こっちで飛べる奴は？」
イリヤと美遊だけが、遠慮がちに挙手をする。少なくとも、あの爆撃をかいくぐって突入するほどの自信はないのだろう。
だが、このまま待つわけには行かない。ステッキからの治療を受けていたイリヤと美遊は立ち上がった。
しかし、イリヤだけは脱力して倒れてしまう。
「あ、あれ？力が入らない？」
ステッキから無尽蔵にエネルギーを供給されるはずのイリヤが、こ

うして力が入らないのは不可解だ。
そして、その原因は余りにも明らかである。六人の一誠は顔を見合わせた。
「どーやら、イリヤから供給を受けてる見てーだ」
「あんまり無茶はできないな・・・でござる」
「く、所詮は仮初の体か・・・情けない」
「どうする?あの城を壊すにせよ進入するにせよ、省エネルギーでできることじゃないぞ」
「・・・というか、それ自体難しいんじゃないか?」
飛んでいるということは、単純な話距離があるということ。この中で遠距離攻撃に長じているのは魔法少女二人とアーチャーだが、城一つを落とすとなると火力不足はいなめない。
かといって、進入するにしても飛ばなければならず、また向こうの防空装備で対処される可能性が高い。防御に優れたライダーといえども、耐えられないだろう。
ましてや、6人の一誠のエネルギーはイリヤから供給されているようだ。6人が全力を出し続けられるほど、潤沢ではないだろう。
そうこうしているうちに、先ほど同様の大規模な魔術攻撃が打ち込まれてきた。潤沢な魔力の塊であるその威力は下手をしなくても、少女を巻き込む心配をしない分先ほど以上であろう。
「百錬自得の極み!」
だが、遠距離攻撃である以上テニスの領分である。
魔力の塊だろうと、隕石だろうと、テニスプレイヤーにとってこれはテニスである。
軌道、回転、威力に至るまで倍返しとなった魔術の爆撃は、当然直撃し轟音と共に城を揺らす。
外壁が大きく欠け、内部の構造が露出している。
その無茶苦茶さ加減に、皆声もない。だが、流石に撃沈させることはできず、加えて中にいるであろうアサシンを殺すことも、できなかったようだ。
「データは揃った!」

だが、テニスプレイヤーに策アリのようだ。確信を持ってメンバーに作戦を伝え始める。
「バーサーカーとライダーは、一旦カードに戻って美遊に夢幻召喚されてくれ」
「私、ですか？」
「いいけどよ、どういう作戦なんだ？」
「・・・ちゃんと説明しろ」
『危ないことはなさらないでください』
夢幻召喚を重ねがけする以上、消耗は激しい。イリヤが夢幻召喚の負担を受けている以上、美遊が適当なのは当然だ。だが、ライダーとバーサーカーの重ねがけで何をしようというのだろうか。
しかし、遠距離攻撃は不利であると学習したのか、竜牙兵は更にその数を増している。その亜種であろう翼の生えたものまで繰り出されつつあった。
もはや、もめている場合ではない。バーサーカーとライダーはしぶしぶ美遊に体を委ねる。

『二重夢幻召喚（デュアル・インストール）ライダー・バーサーカー』

美遊の肢体が機械の装甲に覆われ、その隙間から黄色の炎があふれ出す。本来二重召喚は使い手の消耗が激しく実現できない。無尽蔵の魔力が供給される魔法少女だからできる力技だった。
なるほど、ライダーの装甲は軽く固い。バーサーカーの火力は高く再生能力も抜群だ。だが、空中戦に長じているとは言いがたい。はたしてどうやって城に至らせるつもりなのだろうか。
「よし、じゃあ全力で防御を固めろ」
テニスプレイヤーは、『雷』による光速移動で美遊から距離をとり、ボールをトスした。
それを見て、美遊もサファイアもバーサーカーもライダーも戦慄する。
「サファイア、物理保護全開！」

『承りました！他の機能を一旦カット、全力で防御します！』
『装甲全開だ！』
『再生準備も良いぞ！』
防御を固める４人。そして、なにをするのか察した他の面々は群がってくる竜牙兵も無視して美遊からダッシュで距離をとった。
それを確認しているのかいないのか、テニスプレイヤーのラケットを持った手が膨れ上がる。無我のオーラが爆発的に腕に集中して溢れていた。

「百八式波動球！」

その、渾身のサーブは余波だけで周囲の竜牙兵を競技場のグラウンドから観客席に叩きつける。他の面々は何とか地面に伏せて猛風をやり過ごしていた。
直撃を受けた美遊は吹き飛ばされ、城塞の備えていたであろう防衛機能が作動するよりも早く城の内部に激突していた。
『美遊様、ご無事で？』
「うん、なんとか・・・」
『無茶しやがって、ってレベルじゃねーぞ！あのテニヌバカ！』
『ごめん、本当にごめん』
結果だけ見ればテニスプレイヤーの作戦は『大当たり』だ。難攻不落の空中城塞に、被害も無く何とか侵入することができたのだから。
だが、攻撃を受けたこっちはたまったものではない。装甲と保護。その二つの守りをもってして尚、美遊は大きくダメージを受けていた。
バーサーカーの自動回復が無ければ、敵中でもだえ続けていたであろう。
しかし、こうして城の中に入ってさえしまえばこっちのものだ。
美遊が立ち上がると、城の内部でのみ可能であろう重力場による攻撃が美遊の体を襲った。手足が何倍にも重くなり床に縫い付けられそうになる。このまま罠が待ち受けているであろう城を探索し、潜ん

でいるであろう暗殺者を仕留めるなど不可能だ。
だが、それでも儚すぎる。バーサーカーにしてみれば、近づけるかどうかが問題であり、こうして進入さえしてしまえば何の問題もない。
『美遊ちゃん・・・』
「分かっています・・・！」
『美遊様、身体強化に魔力を全て回します』
美遊の体を覆う装甲の隙間から、勢い良く黄色の炎が吹き上がる。極限をも超えた、絶望を吹き飛ばす日輪の一発逆転の一撃。
『「リミットブレイク・・・！」』
城のどこに潜んでいようと関係ない。この一撃は、城そのものさえも破壊する最強の一撃なのだから！
『「オーバーサンシャイン！」』
解き放たれた拳は、夜を照らすばかりに輝き、城を内側から食い破った。
その衝撃に、外側からならばともかく内側から喰らった城塞は、まるで砂の城のように一瞬で崩れていく。
玉座に座していた妙齢の女帝は、その姿を誰に知られることも見られることも無く、ただ衝撃波によって粉砕された。
そして、城の瓦礫と共に消えた彼女の残したカードを、ステッキによって発見した美遊が空中にして手にした。
勝利の証であるはずのそれを見ても、美遊は喜ぶことなく思いつめていたが。
かくて、第二幕は幕を開けたのである。

敗者たちの休息

自我を取り戻した６枚のカード。彼ら６人の兵藤一誠は、戦闘さえしなければそれほど負担にならないらしく、実体を保ったままルヴィア邸に招かれていた。

イリヤの家には６人も泊めるスペースはないし、遠坂の泊まっているホテルも同様である以上、美遊と同じくルヴィアの邸の他に選択肢が無かっただけだが。

とはいえ、６人は久しぶりにきっちりと自我を保ったまま一息を入れることができたのである。

「風呂に入れるだけでも、こんなに嬉しいとはなぁ・・・」

アーチャーは、以前と違い湯船に浸かることで得られる温もりに満足しながら、仮初の肉体を楽しんでいた。それは、他の５人も同様である。

ルヴィアの邸は風呂も相応に広く、６人で入っても全く余裕があった。

「いや～～～、全くだぜ。命の洗濯ってやつだな。魂が洗われるぜ・・・」

「水遁の術・・・はしなくていいか」

「ふん・・・生き恥を晒すことになるとはな」

「さあ、油断無く１００までちゃんと数えよう・・・！」

「Ｚ～～～」

巫力使い、シャーマン、ライダーは腑抜け切った表情で体をとろけさせている。

チャクラ使い、ニンジャ、アサシンは水にもぐったり水の上に立ったりするべきかしないべきか、真面目に悩んでいた。

小宇宙使い、聖闘士、セイバーは死んだ身が仮初ながらも生きていることが恥ずかしいらしい。

無我使い、テニスプレイヤーは、酷く真面目な表情で肩まで浸かっていた。

死ぬ気の炎使い、マフィア、バーサーカーはよほど気持ちが良いの

か湯船にはいったまま寝ていた。
「前もそうだったけど、ルヴィアのご好意に感謝しないとな・・・」
「にしても・・考えてみりゃあ殺しあうはずだった『兵藤一誠』が顔を合わせて、こうしてのほほんと過ごすってのも変な話だよな」
「これも、奇縁という奴だ・・・」
「ふん・・・」
「これで、テニスができるな・・・！」
「Z～～～～」
元々、この場に集っている6人の兵藤一誠は、ハイスクールD×Dの主人公になるべく殺しあう定めだった。
それが、初日に皆殺しにされてカードに封印され、何の因果か復活して暴走して、また封印されて復活して協力しているのだ。
確かに、奇妙な縁といえるだろう。
寝ているバーサーカーとテニスプレイヤー以外、感慨深くなる。
毎日、やりたいこともせずにひたすら精進してきた。それは結実することは無かったが、こうして奇妙な形ながら意味を成している。
心中は複雑ではあったが、それでもやはり誰かと協力して事をなすのはとても楽しい。
磨き上げた力を少女のために使うのだ。そこに疑問など差し挟むはずは無い。
「そういやさ、天力使い。お前は前のときに色々話聞いてたんだろ？ここの『兵藤一誠』はどんな感じなんだ？」
「ん？・・・なんでも天使と悪魔、堕天使の連合軍の司令官をやってるらしいぞ」
「へえ・・・じゃあやっぱりモテモテなのか。いいなぁ・・・ハーレム」
「いや、なんでも昔色々あってハーレムは作ってないらしいぞ」
その言葉を聞いて、ライダーは湯船から立ち上がって仰天し、更に憤慨した。
無理も無いだろう。彼の夢の一つに、美少女でいっぱいのハーレムを作ることは入っていたのだから。
「なんだとぅ?!じゃあなんで兵藤一誠になったんだよ！」

「シャーマン・・・貴様、女性を物扱いするつもりか?」
セイバーの眼は厳しい。というか、あからさまに軽蔑している。
武人気質の彼にしてみれば、とにかくハーレムを作って、多くの女性を囲いたいというライダーの発言は許せるものではなかった。
もちろん、彼自身ハイスクールD×Dがハーレムラノベであることは覚えているが、その主人公に積極的になりたいという男がハーレム志望というのは許せなかった。
要するに、『弱みにつけこんで女性を口説く』行為に他ならないからだ。
「別に・・・そういうわけじゃねえよ。ただ、兵藤一誠だぜ?可愛い女の子とイチャイチャするため以外にどんな理由があるって言うんだよ」
「それは・・・強敵と戦うとかだな・・・」
「そんなの、他でも良いだろうが」
「そんなことは無いぞ、あらゆる世界の神魔と戦えるのは・・・はぁ!?!?!?」
突如として、頭を抱えるセイバー。なにかを思い出したのか、そのまま湯船に沈んでいく。
それを見て、ライダーとアサシンは何かを察したのか、深くは追求しなかった。
ああ、恥ずかしいことを書いたノートを家に置いてこなかったんだな・・・。と。
「それはさておいて、天力使い。お前は我々を殺した相手の能力を知っているか?」
この上なく露骨に、話題を摩り替えるアサシン。彼にも、中二病への気遣いはあったのだ。同病相哀れむという奴である。
何かを察したのか、アーチャーもその話題の切り替えに応じた。彼も、まあ中二なのだから、思うところあるのだろう。
「正気に戻ってから色々考えていたのだが、どうしても思い至らなくてな。まさかデスノートではないだろうし」
「あ、ああ~~~・・・確かにな。どうやって6人を同時に殺したんだ?」

ライダーもそれに乗っかる。彼自身、痛いところはたくさんあるのだ。

「それか・・・エネルギーについては推測が立っている。多分、『ＰＳＹＲＥＮ』の『ＰＳＹ』だ」

それは、以前眼にした写真に写っていたカードの模様から推測できたこと。

基本であるトランス、バースト、ライズと、それの発展形であるノヴァ。これからなる三角錐を真上から見た図形。

「・・・なにそれ。週間少年ジャンプでやってた?アニメになってる奴?」

「いや、アニメにはなってないはずだ。ちゃんと週間少年ジャンプで連載されていた。ＳＱでも月間でもミラクルでもグランドでもヤングでもないぞ」

「すまんが・・・さっぱり分からん」

「それはどんなテニスだ?」

どうやら、アサシンもライダーもテニスプレイヤーも、全く知らないらしい。

まあ、ＮＡＲＵＴＯもシャーマンキングもテニスの王子様も冒険王ビィトも、どれもアニメ化しているメジャーに分類される漫画だ。

しかし、それに比べてＰＳＹＲＥＮはアニメ化もしておらず、マイナーといわれても仕方ないだろう。

まして、彼らがジャンプを読んでいたのは１０年以上も前の話だ。自分の好きでもなかった作品ではなかったら憶えていなかっただろう。

むしろ、よくアーチャーが憶えていたというべきだろう。

「まあ、一般的な超能力の類だと思って間違いない。それで、多分だが・・・ダウジングでこちらの位置を捕捉して、そこを遠距離で洗脳して街の外に誘導した・・・そんなところだろう」

「・・・はぁ?」

困惑と、怒り。その双方を眼に宿らせてライダーは顔をゆがめる。

もとより、寝込みを襲われて死んだのだ。その手口が真っ当である

はずもないとは思っていた。だが、それでも、いくらなんでも酷すぎる。

その能力では、『あの街の戦い』以外では、なんの役にも立たないではないか。

まるで、その戦いで勝ちさえすれば、それでいいかのような構成だ。

それは、ライダーにとって許しがたいことだった。

いや、アサシンも不満げだ。そんな、戦う気の無いものが自分を殺したなど、許せない。

だが、ニンジャたらんとしている彼にとって、相手を卑怯だと罵ることはできないのだろう。

「・・・くそっ!」

いくら憤ったところで、自分はもはや死者。そして此処は平行宇宙である。勝者に文句を言うこともできはしない。

ライダーは、腹立ちながらもそこで話を打ち切った。

「・・・それが、テニスで一体何の役に立つんだ?」

別の意味で困惑しているテニスプレイヤーのことを、3人はさっくりと無視する。

テニヌ脳には、何を言っても無駄だからだ。

かくて、折角の風呂も微妙な空気になってしまった。

相変わらずバーサーカーは寝ているし、セイバーは落ち込んでいるし、テニスプレイヤーは天然だし。

まともな3人は、風呂を上がることにした。

「上がるか」

「そうだな・・・」

「ああ・・・」

「そうか、では俺も。長い風呂も体に悪いからな」

3人に続く形で、テニスプレイヤーも風呂を出ることにした。なんのかんの言って、結構な長風呂であった。

「そういや、ライダー。お前持霊がどうして九十九神なんだ?」

「あのな・・・ここは天使だの悪魔だのがわんさかいる世界だぞ?根性のある霊なんぞとっくに成仏しとるわ」

「ああ、そりゃそうだ・・・」
「持霊探すの、大変だったんだぞ？原作に関われないから有名どころなんて探せねぇし、蘇生の当がないから死んでグレートスピリッツに行くこともできないし」
「というかグレートスピリッツあるのか？」
「まずそこが疑問だな・・・」
「そこはどんなテニスコートだ？」
かくて、残ったのは寝ているバーサーカーと落ち込むセイバーのみ。
「Z～～～～～～～～」
「・・・の、ノートが、ノートがぁぁあああああああああああああああああああ・・・」
南無。

使役する魔術師

前回は回収対象だった6人の『兵藤一誠』。理性を取り戻した彼らの協力は、未知の敵に挑む4人の少女にとってありがたいことだった。

とはいえ、死人である彼らは戦闘にいくつかの制約があった。

まず、肉体を得ている状態での戦闘はイリヤ一人に負担がかかる。どういうわけだか、肉体を得ている状態での彼らの行動は、イリヤからの供給でまかなわれているらしい。

また、カードになって他の面々に宿った場合、ステッキによる無尽蔵の供給がない魔術師二人では1枚が限界、美遊やイリヤも2枚がやっとだった。

本来、当人の分も含めて7枚重ねがけであるべきものだが、やはり正当な使いでない分制約があるようだ。

「じゃあライダー。貴方は私が使うわよ」

『ああ、好きにしろよ』

「では、私はせっかくですからイッセイスレイヤー＝サンを選びますわ！」

『・・・ウム！』

「の、ノートが・・・」

宝石魔術師二人は、防御力の低さを補うために装甲のあるライダーと、回避能力のあるアサシンをインストールしている。

前回の反省もあって、残る4人はファイルロード状態だ。とはいっても、セイバーは何故か戦闘前からもだえているが。

ただ、露骨なくらい他の面々が彼に関わろうとしていないので、イリヤも美遊も触れなかったが・・・。

「イリヤ、4人の戦闘は大丈夫そう？」

「うん・・・ちょっと分からないかな？」

『前回の戦闘時に使用したエネルギー量から考えれば、4人ならば通常戦闘に負担はないかと・・・』

前回の敵は2枚だった。今回も2枚、とは限らない。下手をすれば

１０枚でてきても不思議ではない。
であれば、手数は必要だった。そういう意味では、イリヤはこの中でも生命線と言ってもいいだろう。
優秀な人工知能を持つルビーは、前回の戦闘における負担からステッキからイリヤへの供給量とファイルロードの消費量を計測していた。
４体までならさほどの負担にはならないはずである。もちろん、全力で戦闘する場合はその限りではないが。
特にバーサーカーは全力で戦う場合、再生も含めてとにかく消費が大きかった。
「よし・・・油断なくいこう！」
何故かテニスプレイヤー主導の下、鏡面界に一行は突入する。

そこは、うっそうと茂る森だった。
生命力に満ちた、人の手のはいっていない、原初の森。
それは、鏡界面であり現世の写し鏡であるはずのこの世界を塗りつぶしていた。
前回も霧が視界をふさいでいたので想定外というほどでもなかったが、それでも面食らったのは言うまでもない。
「うわ～～、すごい」
「これは、原生林・・・。原生林を造る英霊なんて・・・」
語彙の少ないイリヤはただ感嘆することしかできなかったが、美遊はこれを行った英雄に思い至る相手が居らず困惑していた。
いや、もっと適切に言うのであれば、世界を書き換える固有結界であるのだろうが、原生林を固有結界とする、つまり心象風景にするということは、相手は自然に近い相手ということになる。
これが、森を縄張りとしていたロビンフット辺りならばまだマシだが、自然そのもの、神に近い存在であれば、その力は計り知れない。
もしものときは、既に得ているカードを用いて夢幻召喚を行うべきだろうが、どう考えてもアサシンでは神霊を討ち得ない。

「凄い生命力を感じるわね・・・。でも敵意はない」
「前回と違って、攻撃ではありませんね・・・。外は夜なのに、此処は昼。それも一切の不快を感じない適度な気候ですわ」
二人の魔術師は周囲の木々を、細心の注意を払いながら手で触って感触を確かめる。
魂の力である巫力をあやるつシャーマン、生命力と精神力を元にするチャクラを操る忍者。その特性を得ている二人は、この森が尋常の森ではないことに気付いていた。
ここには、全く人の気配を感じない。もちろん、以前に鏡面界に人が立ち入っていない以上ここに入ったのは自分たちだけだ。
だが、カードの元になりこれを生み出した『何者か』の気配や作為さえも感じられない。
噂に聞く、神話間戦争で新しく生み出されたエデンのようで・・・。
「・・・来るぞ!」
バーサーカーは、この楽園めいた森の中で不似合いな腐臭を感じ取り、周囲の面々に注意を促した。
そして、腐臭の先からは森の木々の隙間から見えるほど巨大な蛸の怪物と、人工物を排除し自然物で生み出されたであろう人造人間がこちらに向かって歩み寄ってきていた。
『か、怪物かよ!』
『・・・こっちも口寄せなり尾獣化できればよかったんだが・・・くそ』
「インストールしていて良かったわね。あんなの、さすがに魔術じゃどうにもならない・・・!」
「ええ。ニンジャならば、怪獣怖れるに足らず、ですわ!」
それは、余りにも対照的な光景だった。
腐臭を放つ怪物は森の生命を飲み込んでいくが、しかしその端から森は何事もなかったかのように復元していく。
巨人が歩けば森の木々は道を明けるように動いて道を空けていく。おそらく、というか見れば明らかだがこの自然空間は巨人が生み出しているようだ。
「まず、俺が遠距離攻撃で様子を見る!」

アーチャーは光の才牙を構えて、まだ遠くから歩み寄るばかりの巨人と怪物に光の弾丸を浴びせる。
巨体を相手に致命傷になるとは思わなかったが、それでも相手の特性を割り出すには十分だと判断したゆえだ。
そして、それは確かに有効だった。その攻撃が無駄だったと分かったのだから・・・。
腐臭の怪物には確かに命中した。巨体ゆえに避けることができなかっただろうが、命中したことはまったくの無意味だった。対人戦しか想定していない光の弾丸は、滑る巨体の一部に針をさしたような穴しか穿てず、それも瞬時に再生する。
巨人はもっと理不尽だった。穴さえ開いていなかった。命中したというのに、まったくの無傷だったのである。貫通力に長じている光の弾丸は、その痕跡さえ残していなかったのだ。
「なに?!」
『・・・両者共に、着弾と同時に再生を確認!』
『海魔の方もそうですが、特に巨人は再生速度が速すぎてダメージが確認できないほどです!』
「どちらもバーサーカー以上というわけか・・・」
明らかに、自陣のバーサーカーと同じタイプのようである。
とはいえ、こちらのバーサーカーはエネルギーをイリヤに依存している。あれだけの巨体をどのように維持しているのかは甚だ疑問だが、少なくともイリヤよりも少ないということはないだろう。
「なるほど、敵の攻撃に屈しないタフな選手というわけか。これは波動球でも相手が悪い。変化球で堅実にポイントを取るべきだ・・・だが!」
「分かってる!」
アーチャーは才牙を近距離散弾銃形態に変形させる。狙うは、当然テニスプレイヤーだ。
放たれる無数の光の弾丸。広範囲に礫としてばら撒かれるはずのそれは、空気の渦によって不自然に軌道をまげてテニスプレイヤーの無我のオーラが集まったラケットに集中していく。

一発一発が、エネルギーを操るものさえ貫く必殺の弾丸。そのすべてが強化され、比較的やわらかい海魔に殺到する。
「フルチャージーショット！」
「百錬自得の極み！」
先ほどと違い、広範囲を膨大な弾丸が焼いていく。それは、さすがに多少は効いたらしく海魔を大きくもだえさせた。
片方を倒せる好機と見て、他の面々も攻撃を仕掛けようとする。だが、それを許す巨人ではない。
巨体を忘れさせるほど軽やかに飛び上がり、イリヤたちに襲い掛かる。その手にした黒曜石の剣は、圧倒的破壊力で楽園の大地を揺らした。
「させん！」
だが、それを許すセイバーではない。万物を断ち切る聖剣を宿した手は、いともあっさり黒曜石の剣の上半分を切断した。
しかし、その剣さえも、巨人が大地に脚をつけるや否やたちどころに元に戻った。
「セイバー！俺達はイリヤと合体するべきだ！」
「・・・そうだな。この木偶の坊はちと手を焼きそうだ！」
アーチャーとテニスプレイヤーは遠距離攻撃で海魔を焼く必要がある。そして、俊敏な巨人を相手にするのは難しいだろう。
メンバーの中でも破格の攻撃力を持つセイバーとバーサーカーで、魔法少女二人を守りつつ攻勢に出るべきだ。
「俺は消費が特にでかい。これ以上イリヤに負担はかけられない・・・美遊ちゃん！」
「分かりました！」
『夢幻召喚（インストール）バーサーカー』
「いくぞ、イリヤ！」
「は、はい！」
『夢幻召喚（インストール）セイバー』
共に、服装が魔法少女から切り替わる。
美遊は麗人を思わせる男装のスーツに。イリヤはダメージジーン

ズとシャツのワイルドな姿にそれぞれ変わった。
どう見ても魔法要素はゼロだが、考えようによっては大分マシな格好になったといえよう。
その二人に、自然物の巨人が襲い掛かる。その威風は、神を思わせ存在だけで人間を従えてしまいそうだ。
だが、精神防御も完備しているカレイドステッキはそれさえも遮断する。
『「サンバルカン！」』
『「エクスカリバー！」』
光速の斬撃と日輪の拳撃が無数に放たれ、自然でできた巨人を責めさいなむ。だが、切断はともかく再生しにくいであろう拳による鈍撃も等しく瞬時に再生していく。
余りの再生速度に、攻撃が届いていない錯覚さえ覚えるほどだ。
「いくらなんでも早すぎるし、キリがないよーっ！」
「・・・確かに、キリがない」
イリヤは悲鳴を上げた。とはいっても、悲鳴を上げられるだけ随分余裕があるともいえるが。
美遊も緊張した面持ちだが、それでも切羽詰ってはいない。主導権を握れているからだろう。
再生能力さえどうにかすれば倒すのは難しくないからだ。
『お待ちください。早急に対策を練りますので！』
『再生の核を探しましょう！』
バーサーカーに変身したことでスーツの装飾の一部になっていたサファイアと、髪飾りになっていたルビーが敵の再生能力の核を探し始める。
いくらなんでも再生能力が高すぎるのだ。これにはなにかタネがあると見るべきであろう。幸い、攻撃速度での優越は明らかで、加えてステッキによる供給も無尽蔵。戦線の維持は容易そうである。
とはいえ、イリヤも美遊も一般人。精神的にまいることは考えられたが。
「私たちも参戦いたします！」

『助けに行くってばよ！』
「じゃあ私も・・・」
『待て、あっちもやばいぞ！』
手をこまねいてみているわけにもいかない。アサシンと一体化したルヴィアと、ライダーと一体化した遠坂は駆け出そうとする。
だが、ライダーは遠坂を止める。見れば、アーチャーとテニスプレイヤーが小型の、それでも人間よりも大きい海魔に囲まれつつあった。
アーチャーは機関銃で周囲を薙ぎ払っているが、数が多すぎて手一杯のようである。
テニスプレイヤーも、遠距離ではなく近距離攻撃のため対応しあぐねているようだ。加えて、なにやら海魔の本体に対して集中をしているようだ。
あちらにも救援は必要なようである。
「・・・ああ、もう！あんなの相手にしないといけないなんて！」
『オラァ！』
生物というよりは汚物の塊である海魔を、鋼鉄の軍馬となった遠坂が蹴散らしていく。
他の面々と比べて攻撃力が高いとはいえないライダーだが、その機動力や防御力は非常に安定している。
頑丈とは言いがたい海魔を叩き潰し、そのまま広範囲を轢殺するには非常に向いていた。
障害物の多い原生林を、軽やかに舞い、同じく不似合いな海魔たちを蹂躙していく。
とはいっても、海魔の本体から生み出されていく大量のそれを駆逐するには至らない。
「・・・無我使い、当はあるか？」
「もう少し待ってくれ。集中してるんだ」
無我のオーラを集中させず、通常の無我の境地になったテニスプレイヤーはその眼で海魔の本体を睨んでいた。
巨人の再生速度も確かに驚異的だが、怪獣の巨体もまた圧倒的だっ

た。少なくとも、テニスプレイヤーとアーチャーでは殺しきれない。
大規模な攻撃で薙ぎ払うことはできない。おそらく核があるのだろう、そこを射抜くしかない。
「うう、気持ち悪い！」
『文句言うなら降りろ！』
鎧越しとはいえ、その異臭と気色の悪い感触は霹靂してしまいそうだ。
当分蛸は食えそうにない。たこ焼きならイケそうだが。

「イヤーッ！」
雷を身に纏ったルヴィア＝サンの猛烈なチョップ！デンキ＝カラテの威力は実際凄い。並みのサラリマンならばネギトロめいた物体にしてしまうほどの破壊力を持ち、それどころかテンプラになってしまうであろう熱量も帯びている。
だが、ゴーレムには効果がない。重量で大いに差があることも影響しているのだろう。ゴーレムをのけぞらせることさえもできなかった。
幾度となく打ち込まれるチョップも、怯ませることさえなく、ゴーレムはそのまま反撃する。その動作は非常に俊敏で、動きもまた術理を感じさせるものだった。
『変わり身の術・・・』
「これが伝説の・・・感激ですわ！」
だが、ニンジャのニンジャ反射神経ならば避けるなどたやすいことだ。
巨人が切ったのは、楽園に自生している木々の内の一本に過ぎなかった。
『分析結果がでました！』
『核は頭部と心臓部。そして、供給源は両脚です！』
２本のステッキは、ようやくというべきか分析を終えた。
この巨人は、世界を楽園で塗りつぶし、その楽園から祝福を受け損傷を『なかったこと』にしていたのだ。

核というべき頭部と心臓を破壊しても、両脚が地面についている限り巨人はいくらでも再生する。

つまり、都合４箇所を同時に砕かなければならないのだ。

「４箇所も!?」

「３人だと、難しいね」

砕くことは難しくない。現に何度もこちらは何度も破壊している。だが、一人で同時に砕けるのは一箇所が限界だ。くわえてアサシンとルヴィアでは攻撃力が足りない。

さて、どうしたものか。攻撃力と言えばアーチャーも高いが、向こうも忙しい。とあれば、一旦引くのも手だろう。今のところ攻勢を保てているが、一人でも落ちれば崩れる攻勢だ。

一旦安全地帯に避難して、作戦を立てるのも手だろう。

そう思っていた矢先だった。突然、雄大だった巨人がぐらつく。まるで、地面についているはずの脚がその機能を奪われ、自らの生み出した自然と切り離されてしまったかのようだ。

「好機ですわ！」

『ああ、様は両脚が地面についていなければいいんだろう?!』

雷遁瞬身によって間合いをつめて、ルヴィアは巨人の片足にタックルを決める。そのままよろけている巨人の体制をレスリングの技術で巧みに操作する。

むろん、なされるがままにしているゴーレムではない。剣をふるって攻撃しようとするが、それも美遊の鉄拳が砕く。それも再生するはずが、やや遅い。

おお、ブッダ！ルヴィアに微笑んでくれたのですね！

巧みな体術、古代ローマカラテと双璧を成したというレスリングによって、自分よりも遥かに巨大なゴーレムをルヴィアは掲げて飛び上がり、大地に叩きつける。

『身体活性全開！』

「これが、ニンジャのカラテですわ！」

『「雷我爆弾（ライガーボム）！」』

ナムサン！大地に脚をつけている限り無敵の巨人は、なんという皮

肉か、その大地に逆さまになって埋められた！
こうなっては即座の回復など不可能である。
『美遊様！チャンスです！』
『さあ、派手にやっちゃいましょう！』
今の二人に迷いはない。確実に楽園の主を穿てる。逆さまになっている今、避けられる恐れもないのだ。
十分な予備動作を取って、二人の魔法少女は渾身の一撃を叩き込む！
『「ＥＸカリバー！」』
『「シャイニングナックル！」』
イリヤの刃が地面に埋没している頭部を、美遊の鉄拳が無防備な心臓部を破壊した。
たったそれだけで、大地の主、最も原典に忠実なゴーレム、受難の民を導くはずだった楽園の王は、その命を終えた。
周囲の草木は幻のように消えていく。楽園など、最初から存在していなかったかのように。
それとほぼ同時に、海魔と対峙していたテニスプレイヤーが、本体の中に隠されていた魔術師の宝具、魔の本をその視力で捉えていた。
『跡部王国（あとべキングダム）！』
「スケスケだぜ！」
アーチャーからの狙撃銃の一撃を球として放たれる逆転の一発は、見事に海魔をこの世界に留めていた宝具を穿ち破壊していた。
それだけで、やはり海魔も消えていった。
若干の苦戦はあったものの、やはり分析に長じたステッキ。それによって無尽蔵のスタミナを与えられた魔法少女。優秀な魔術師。若く、しかし鍛え抜かれた戦士６人。
これだけの面々が揃っていることもあって、前回ほど危うい眼にあうこともなく勝利を彼女たちは手にしたのだった。
「・・・さっさと帰りましょ。ホテルでシャワー浴びたいわ」
汚物を相手に格闘戦をしていた遠坂は、精神的に非常に消耗していた。

そんな彼女だけではなく、他の面々も底なしのスタミナを見せた相手との戦いでつかれきっていた。
誰一人、異論を唱えることなく撤収していった。
ただ、美遊と二本のステッキだけは、なぜ巨人の動きが鈍ったのか、困惑していた。
あきらかに、自分たちしかいないはずのこの世界で、何者かの干渉があったようだ。
とはいえ、並大抵の相手がステッキの探知を抜けるとも思えない。
２枚のキャスターのカードを得た一行は、意気揚々と鏡面界を後にした。

カードを失い、崩れていく鏡面界。その中で、妖艶な和服の女性が笑っていた。
彼女こそ、卓越した仙術によって巨人を弱体化させた張本人だった。

黒歌
出身　中国
種族　猫？
特殊能力　仙術
Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓランキング　４０位

「にゃ～～～ん」
野良猫の女王、暗躍。

勝者たちの宴

キャスターのカードを得た後、敗者たち６人はライダーの部屋に揃っていた。

その表情は、一様に緊張している。普段は寝ているバーサーカーも、珍しく他と歩みをそろえていた。

言うまでも無く、ルヴィアには各々の部屋を与えられていたが、こうして一つの部屋に集まっていたのは先延ばしにしていたある事を確認するためだ。

すなわち、死んだはずの自分達はどうしてここにいるのか、だろう。

既に物語から退場しているはずの自分達が、どうして仮初とはいえ蘇っているのか。帰るべき場所も無く、冒険を始めることさえできなかった自分達が生き恥を晒しているのはどうしてか。

別に、知ろうとしなくても良かったのかもしれない。だが、こうして理性を持って過ごしていることが一種の奇跡であり、また暴走を始めないとも限らない。

自分達に次など無いかもしれないが、それでも自分達の現在は確認しなければなるまい。

そもそも、どうして自分達はカードから蘇ったのか？

「始めようか」

カードになって以降の、ノイズがかかった記憶。それを思い出すのは、トラウマもあるのだろうが頭痛が激しい。

それに耐えながら、６人は過去に埋没した。

憎い、憎い、憎い憎い、憎い憎い憎い！

キャスターが憎い。自分達を殺した男が憎い！

一体、どうして許せるというのだ、アレだけの修練を無に帰した男を。

『……そうか、そんなことが……』

『ああ……』
『馬鹿すぎる……しょうもないことを気にするんだな、お前は』
『言いすぎだぞ、7位。お前には分からないだろうが……』
兵藤一誠になりたかった。
美女ぞろいのハーレムを作る彼にあこがれた。
皆から賞賛されるヒーローにあこがれた。
泥臭くも奇跡によって彩られた戦士にあこがれた。
彼のようになりたかった。
『3位、お前が羨ましい……』
『そうか、格上のお前にそういってもらえると嬉しいな』
『1位、アーサーと戦えば、きっと君の中でも決着がつくと思うよ。出会いは、確かに人生を変えるんだ』
『出会いか、確かにな。オレ様も、そうだった……』
『2位……』
『なあ、5位。お前も絶対に後悔する。お前は、オレ様の様にはなるな。お前は、まだいくらでもやり直せる』
『そうか、そう思うか?』
『ああ、お前はオレ様と違って人を救っているからな』

声が聞こえてくる。
勝った奴等の声が聞こえてくる。
未来が存在する奴等の声が聞こえてくる。
栄光と勝利と祝福に満ちた人生があるはずの、彼等の声が聞こえてくる。
こいつ等にはあるのだ、自分達にはない未来が。ああ、どうして彼等には未来があるのだろうか。
自分達は、彼等に比べて何が劣っているというのか。
少なくとも、努力が劣っているとは絶対に言わせない。自分達が積み重ねてきた修練は、決して軽くはない。
そうだ、朝から晩まで鍛え続けてきた。それもこれも、すべては勝利のために。それが、それが!

『2位、君は間違っている！』
『なんだと……？　6位、お前に何がわかる』
『わかるさ、僕も君と同じだから！　だから、君は間違っているんだ！』
『6位、オレ様の何を知った気になって否定する！』
『2位、それでも君は間違っているんだ！』

懐かしい声が聞こえる。ひたすら不愉快な声が聞こえる。
コイツだ、コイツが俺達を殺した兵藤一誠だ……！

『貧乳といったら、如月千早だろう！　常識的に考えて！』
『それは断じて違う！　貧乳といったらメルトリリスだ！』
『貧乳を愛する君が、どうしてあの所作を愛さずに居られるんだ？』
『てめえこそ、どうしてあの肢体を艶やかに魅せるポーズにぐっとこねえんだ！』
『なるほど……僕は貧乳を恥じる姿を愛し、君は己の姿に絶対の自信を持つ妖艶さを愛するということか』
『難しい言葉でごまかすんじゃねえ！　オレ様とお前……貧乳を本当に愛しているのはどっちかってことだろうが！』
『面白い……僕が脳内に納めたヴァーリの恥らう姿を見ても、同じことが言えるかな？』
『……なに？　こ、これはテレパスか。オレ様も使えるが……ぐ、こ、この姿は！』

その瞬間、6人の脳内に画像が鮮明に映し出される。
それは、まるで目の前に銀髪の少女が実際にいるような錯覚さえ覚える、手を伸ばせば触れられる、そんな姿だった。
銀髪の少女が、巨乳の女性二人に挟まれ、今にも泣き出しそうになっている。
その服は露出が激しく、ボディーラインが余りにも明らか。スレン

ダーで、起伏は乏しいものの、しかしそれでも余計な肉など一切無い姿。それは、確かに美少女だった。

だがその少女を更に美しくしているのは、すれて居ない、恥じらいの表情だった。

『どうだ、僕の脳内永久保存フォルダは！』

『なんだ、この胸の高鳴りは……』

『好きな女の子をいじめたいという、小学生だった頃の想いが蘇ってくるだろう！』

『これが、お前の貧乳への思いであり、兵藤一誠としての出会いだったということか？』

『そうだ、これが僕の生きる意味だ！』

『オレ様には無かった、人生を変える女との出会いか……』

『そうだ、故に、僕の貧乳好きはぶれないのさ！』

『……だが、オレ様だって負けちゃいねえ！』

その瞬間、６人の目の前には何かが出現した。

それは、長袖に長ズボンを来た長身の少女だった。

だが、その腹部と胸部、太ももの前側は完全に露出していた。胸と性器の局部だけは申し訳程度に隠されているが、しかしその防御は絶対であり神聖ささえ感じさせる。

そう、見せるべき場所を完全にガードする。それによって過剰な猥褻さの中に貞淑さをそえているのだ。

『おまっ……おまえ!?　なに考えてるんだ?!　自分で美少女に変身するとか?!』

『ククク……変身する能力を得たら、誰だって試すだろうが常識的に考えて！』

『はぁ！　確かに……』

『余計な肉なんざ一切無くても、逆るセクシーさ！　超サイコーだろう！』

『僕の眼でも耳でも鼻でも一切見破れないなんて?!　見た目だけじゃなくて、体臭や内臓機能さえも完全に再現しているというのか?!』
『おいおいマジかよ。自分の輪廻眼でも見破れねぇなんざ、ありえねえだろ』
『この僕が認めよう、君は筋金入りのＨＥＮＴＡＩだ！』
『ふふふ、嬉しいぜ。だが、これでハッキリしたな』
『ああ、ハッキリしたよ』

『『僕等（オレ様たち）は、分かり合えない！』』

『んじゃあ、自分も見せるとするか。幻術でな……さあ自分の眼を見ろ、月読！』

それは、今までとは余りにも異なる肉の量だった。
先ほどの二人が見せたものが、いずれも少女的な貧乳だったこともある。だが、それを抜きにしても過剰なまでの肉量だった。
起伏の激しい、はちきれんばかりの女性的ボディーだった。それも、一人や二人ではない。
牙のある女性、翼の生えた女性、尾の生えた女性。彼等は人間ではない。だが、いずれも人間離れした美貌の持ち主ばかりだった。
その眼は、明らかに正気を失い、何者かに操られていた。術者が兵藤一誠になった誰かなのは明白だろう。
しかし、そんな正気とは言いがたい女性は、いずれも劣らぬ滴るようなエロスを漂わせていた。

『な、なんだこの量は?』
『これは、ハーレムというよりも、むしろファーム?!』
『自分のコレクションだ、当然貧乳もそろえている！　あえて言おう、女は量だ！』
『クソ、お前オレ様だって此処まで酷いことはしていないぞ！　羨ましいけど！　正直死ぬんならここで死にたいな！』

『その発想は無かった！　でも実行に移すなんて凄いな、いろんな意味で！』
『自分は、おっぱいドラゴンを超えたのさ！』
『いや、それはちょっと違うだろ。羨ましいけど』
『うん、これは方向性が違うかな。人によっては大差なく思うかもしれないけど』
『3位、お前セーギの味方的にどう思うよ……』
『大変だ！　3位が鼻血を大量に噴出しているぞ！』
『マジだ！　覆面も外れてるし、こりゃあ死ぬレベルだな』
『ボクはついていけないな。1位はどう思う？』
『ウム……ほれた女の胸に勝るものなし！』

六人は、回想を打ち切った。どうやら、彼等から得るものは無いらしい。
「なあ、俺達って客観的に見たら…あいつ等と大差ないのかな」
「いうな」
アサシンの独白に、誰もが沈痛な面持ちで応じない。アーチャーが、一人黙らせようとするだけだ。
誰と無く、立ち上がってライダーの部屋から去っていく。やや前かがみになった彼等は、各々の部屋に帰って『処理』を済ませなければならないのだろう。解き放つことで賢者になるために。
だが、一人だけ、セイバーだけはアーチャーに語りかけた。
「メルトリリスか……なあアーチャー、お前は知ってるか？」
「どうした、セイバー」
「Ｆａｔｅというシリーズを」

一誠の屋敷ではよくあること

「‥明日の予定は、アレス様と、オーディン様、インドラ様とシヴァ様か‥‥レイヴェル、時間の調整は大丈夫か?」
「はい、お時間に関してはばっちりです。鉢合わせになるようなことには絶対になりません!」
各神話の主神格が連日訪れる一誠の屋敷。そのスケジュール管理はやはり第二婦人でありかつ秘書のレイヴェルが行っていた。
神と神とはいえ、多神教では同じ神話でも中が悪いのもざらであり、神話が違えば尚のことである。接触は極力避けるべきだった。
本来、万に一つも顔を合わせないために違う日にするべきなのだが、一誠のスケジュールは忙しいときには本当に忙しい。
ブッキングしないように神経を使うのもレイヴェルの勤めである。
「‥‥で、今日はアポロン様か」
「はい、ご用件はネロの件でして‥‥」
「だよなあ」
ため息をつく一誠。それを見て、シフォンや1号、2号は怪訝そうだ。
「どうした、一誠」
「どーした、いっちぇー」
「お父さん、アポロン様はたしかネロさんのことが嫌いなんだよね」
「ああ、あいつの大言雑言はオリンポスにも届くほどだからな」
一誠の使い魔となった彼女は、生前自らのことを楽神アポロンに匹敵する芸術家と呼んではばかりなかった。
それはもちろんこの宇宙でも同様で、その事に怒りを覚えたアポロンは、一体何度この宇宙のネロを射殺そうと思ったのか数限りが無いらしい。それは、一誠が愚痴としてよく聞いていたので知っている。
シフォンや1号も同様だ。
だが、そのネロを、同位体に過ぎないとは言え一誠は使い魔にして

しまった。一誠は余計な仲間を作ることを嫌がって多くの神話から寄せられた使い魔志望を断っていた一誠が、ついに使い魔を得たと思ったら、異世界である。

まあ、玉藻御前は天照の分霊の分霊なので日本神話的にはまあいいのかもしれないが、それ以外はエリザベート、モードレッド、ネロ。悉く、神話と関係が無かった。

で、ネロである。彼女は自信過剰で自意識過剰。無駄にポジティブで、もしもアポロンが来ると知れば・・・。

おおっ！ついに至上の芸術家同士が歴史的、否神話的邂逅を遂げるのだな？

などと相手を怒り狂わせかねない発言をするだろう。そんな理由で、かのアポロン神を怒らせるなどあってはならない。

「まあ、会わせないのは当然として・・・如何に奴を押さえ込むかが問題だな」

一誠は一計を案じることにした。まあ、一誠の場合一計とはすなわち力押しに他ならないのだが。

「前置きなしで要点だけ伝えよう。今日、アポロン神さまがいらっしゃる。で、マスターを含めてサーヴァント全員は別室で待機だ」

「意義あり！」

と、勢いよく抗議したのはやはりネロだ。まあ、当然の反応である。しかし、他の４人は特に文句もなさそうだ。というか、アポロンに積極的に会いたいと思うのはネロぐらいで、別に他の３人には因縁が無い。

モードレッドだけは、同じ円卓の騎士にアポロンの加護を受けていた太陽の騎士ガウェインがいたぐらいで、彼女にしてもその程度の認識だった。

「べっつに～～？おなじ太陽でも神話が違えばそれまでです。会おうと思えばいつでも会えますし・・・」

「ていうか、アポロンって太陽だっけ、音楽だっけ?」
「どっちでもいいだろ。それに、特に会いたくも無いしな。ガウェインを殺したことでなにか言われるかもしれないし」
「余は是が非でも会いたいぞ。後生だ奏者よ・・・きっと、アポロンも余と芸術について語りたがっているに違いない!」
「それは気のせいだから安心しろ」
一誠の言葉通り、気のせいである。あるいは自分にとって都合のいい思い込みだ。
アポロンは、一誠に苦情を言いに来るのである。あるいは、これを理由に何か要求をしてくるのかもしれない。力で上を行くとはいえ、一誠は決して相手を下に見ない。相手の要求が正当ならば、その要求を断りきれないだろう。
この上、余計に怒らせるようなことをするべきでもないだろう。一誠は、彼女の要求を完全に断つつもりだった。
「あいにくだが、ことは外交に関わる。まあ、軍人であるおれが外交を皇帝に語るのはおかしいと思うが、そこはそれだ。第一、ここではお前は皇帝ではなく使い魔なんだ。国の一大事には関わらせられない」
「ぬぬぬ・・・」
一誠は、頑固だ。こうなったら絶対に譲らない。
そんなことは分かりきっているのだが、しかしあきらめることなどできるだろうか。相手は憧れの楽神である。
絶対に、乱入してやる・・・。ネロは天才的な頭脳を働かせて作戦を練っていた。一誠はそれを既に知っていたし、あきらめてもいた。
まあ、すべきことは既にしていたが。

「とにかく、執務室から5人はでないこと。いいな」

お互い、騙すことが前提の関係を『狐と狸』という。
今回もそれと同様であり、ネロは一誠の静止を聞く気が無く、一誠

は自分の言葉にネロが従わないと知っていた。
　ゆえに、これからネロは執務室から応接室に向かおうとして、一誠はそれを妨害するわけである。
「・・・おい、ネロ。お前何処に行く気だ？」
「・・・なに、ちと花を摘みにな」
　要するに、トイレである。まあ、受肉している以上英雄も出るものは出る。執務室から出ようとしているネロを呼び止めたモードレッドは、疑いの目でネロを凝視した。
「じゃあ、オレもいこう」
「・・・うむ、分かった」
　断ったら余計に疑われる。取り繕って、ネロは頷いた。
「あら、二人してトイレなんて、怪しいわね？」
「おやおや～～～？イケナイカンケイって、奴ですか～～～？いいですよ～～、ご主人様は私に任せてそのまま戻ってこなくて結構です！」
　玉藻もエリザベートも、二人が何をしようとしているのか察しているが、あえてからかう。岸波だけは呆れているが、これも予定の内だ。
　とはいえ、二人は席を立ち厠へ向かった。まあ、広い屋敷だがその分トイレも多い。もしも二人が本当にトイレに行くだけならば、すぐに戻ってくるだろう。それは、ありえないが。
　岸波がそう思っていると、案の定、二人が部屋を出た直後に剣戟の音が聞こえてくる。だが、だれも動じない。此処では、日常茶飯事だ。
「いきなり切りかかってくるとは、何事だ裏切りの騎士よ」
「黙れ暴君！父さんの邪魔はさせないぞ！」
　酷似した顔の二人は、剣を手に割りと本気で相手を切ろうとしていた。まあ、仮に斬っても一誠からの膨大な魔力供給で大抵の傷なら塞がるし、傷が治らない呪いも両者には無い。あってもこの屋敷には英雄王の財宝に勝るとも劣らない秘薬の在庫が山とあり、優秀な医者も大量に居る。それが、結果的に両者からためらいを奪っていた。
「くくく！芸術家でないものには分かるまい！このあふれ出す情熱が！」

「知るか、そんなもん！」
「ふん！無粋な田舎騎士め！」
「なにを！放蕩皇帝が！」
口げんかでは互角だが、戦闘は明らかにモードレッド有利だ。技量、経験、純度、筋力、耐久、どれをとってもモードレッドのほうが上である。万能の天才であるネロも、戦闘のプロにして天才であるモードレッドには勝ち目が無いのは当然だった。
現在、皇帝特権による剣術スキルで対抗しているが、それも空しい。なにせ、相手は騎士王を討った騎士。そう容易くは討てない。
「ぐぬぬぬぬ」
「どうした、色ボケ皇帝！」
ネロは、彼女を倒してハイおしまいではない。その後、楽神アポロンに会うという重大な使命が待っている。それを全うするためにも、時間を気にしなければならない。
そして、それは当然モードレッドも知っている。時間の経過は血の一滴。両者の表情は段々対照的になっていく。
「・・・やむを得ぬな」
同じ主に忠を誓ったセイバー同士、背を向けるのは恥ずべきことだ。だが、そうこうしている間に帰られたら、それこそ後悔する。
ネロは、嘗て最も苦戦した暗殺者のスキルを皇帝特権で模倣した。周囲に気配を溶け込ませる中国拳法の奥義、圏境である。
それは、魔術的にも知覚できぬ、単なる不可視化とはわけが違う代物だ。如何に直感を持つモードレッドとはいえ、たやすく対処できる術ではない。
「くっ！圏境か！」
「ふはははは！ではいかせてもらうぞ！」
声はすれども姿は見えず。行き先は応接室と知っているが、行ってどうするというのだ。今のネロは、視認はおろか触っても認識できない。追いかけるだけ無駄というものだ。
だが、モードレッドも月の聖杯戦争の勝者だ。その対策はよく知っている。その中でもいま自分にできることは・・・。

「赤雷よ・・・」

王剣クラレントを掲げ、魔力放出を最大にする。如何に認識できぬとはいえ、そこにいることは確かなのだ。当てるのは不可能ではない。

「な、なんと!おぬし正気か!?」

モードレッドの宝具は対軍宝具。それも、極めて直接的な攻撃だ。それ故に居場所の知れなくなったネロを討ちうるのだが、室内で、しかも主の屋敷で使うなど正気ではない。

「我が麗しき父への叛逆（クラレント・ブラッドアーサー）！」

だが、それでもあっさりモードレッドは真名を開放する。その憎悪にそまった赤雷は、廊下の壁や床、天井や調度品を一切壊すことなくネロだけを攻撃・・・することなく、派手に破壊した。

屋敷は大きく揺れるが、それだけだ。だれも騒ぎ出さない。まあ、修理のための新世代天使がこちらに修理に来るぐらいで、屋敷のものはいつものように仕事をしている。

第一、モードレッドの宝具で死ぬような輩は岸波ぐらいで、他の戦闘員でないメイドや料理長さえ、支給されている装備や当人の力量によって怪我さえしないのだ。

第二精鋭部隊の連中は、なにか己に誓約でもしているかのようにいつも屋敷を壊すので、当然の配慮であった。

「当たったのか?いや、違うか・・・」

モードレッドは、直感ゆえに自分は屋敷を壊しただけで肝心のネロを仕留められなかったことに憤慨する。己の実の父の名を冠した宝具も、安くなってしまったものだ。

「くそ・・・ごめん、父さん」

モードレッドは宝具の真名開放ゆえの脱力感に支配された。断っておくが、別に建物を壊したことを謝っているわけではない。ネロを止められなかったことをわびているのだ。

まあ、自分が止めなくても何かしているのだろうが・・・。

信頼する父の1手を信頼しつつ、モードレッドは執務室に戻った。

「・・・揺れたかな?」
「ええ、おそらくまた邪龍が暴れでもしたのでしょう」
応接室で一誠と話をしていたアポロンは、やはり全く動じなかった。それこそ、よくある話だからである。
シフォンや1号、2号ものんきにお菓子を食べ続けていた。
「それでだね、閣下。言わなくても分かるとは思うが・・・ネロについてだ。私があれだけ彼・・・いや、彼女だったか・・・。かの皇帝に怒りを抱いていると知っていた君が、平行宇宙の同一人物とはいえ彼女自身を使い魔にするなど・・・」
「彼女は、意識不明の自分に従ってくれた部下なのです。無下にはできません。真に申し訳ありませんが・・・彼女を解雇することはできないのです」
これだ、アポロンはため息をつく。
一誠は敵を増やす以上に仲間を増やすことを恐れる。反面、一旦仲間と認定すればその慈悲を満遍なく与える。
以前、戦争の後ヴァーリが勝手に邪龍を部下にしたときも、怒りはしたが、その後封印の話が持ち上がったときにかばっている。
だからこそ、一誠の部下になりたがるものはおおいのだ。誰彼かまわずでないからこそ、一誠の寵愛には希少価値があるのだから。
アポロンは、今回の一誠の失態につけこんで、ひとつ要求を通そうとしていた。
「・・先日、アキレウスの転生者が君の門を叩いて、袖にしたそうじゃないか。だというのに、彼女たちは君の部下なのかね?それだけの価値があると?」
「いいえ、違います。自分は単純に、彼にはもっといい環境があると判断したまでです」
一誠は、自分の組織したM．A．R．Sをならず者の集まりだと認識している。それは正しい。一誠自身、非合法の暗殺集団アネックスの長だし、他のメンバーも禍の団の出身だ。全く弁解の余地はない。
しかし、それは一側面に過ぎない。才能溢れる若いものから見れ

ば、一誠はまさしく英雄であり、彼の元で武勲を立てわれ此処にありと叫びたがっているのだ。
だが、一誠はそうした彼らを相手にしない。というか、露骨に拒絶している。
種族を問わず、一誠は原則として飛びぬけて優秀なものを組織に新しく入れたがらない。理由は単純だ。もういらないからである。
一誠の部下には、主神クラスが１２人もいる。人格的に問題はあるが、きちんと管理できている今はあんまり問題が無い。よって、これ以上の突出した戦力は必要ないのだ。
第一、訓練するにも手間がかかる。一誠が求めているのは優秀という言葉に収まる戦士であって、図抜けた天才など、専用のカリキュラムが必要で手間がかかる分いらないのだ。
以前、ソーナはあらゆる階級の悪魔が学べる学校を作ろうとしていたが、魔力量に１０倍以上の差があり、習得速度も同様の開きがあるものを全く同じカリキュラムで育成するのは不可能だと、一誠は体感で知っているのだ。
同じクラスで勉強するということは、つまり一番上の者にあわせるのではなく一番下のものに合わせなければならない。６０点の生徒と１００点の生徒ならばともかく、１０００点、２０００点の生徒が足並みをそろえるのはお互いにとって不幸だと考える。
「彼ならば、この軍に入らなくても何処でも名を上げられますよ・・・」
「そうかもしれない。いや、そうだろう。だが、それでも彼はここに入りたがっているし、私も入れたいと思っている」
「・・・彼が入れば、間違いなくＡクラスになるでしょう。これ以上、Ａクラスは必要ありません」
「そこだ。ＥＸからＢのランカーの上限を１００名としているが、それをもっと増やせないか？」
「今、軍縮が訴えられているんですが・・・」
「そこをまげて、だ。Ｍ．Ａ．Ｒ．Ｓの強化は世界の安定に繋がる」
「逆ですよ。これ以上の力など必要ありません。力を求めて不安定になるのは本末転倒でしょう・・・」

「だが・・・ん?また揺れたね」
「ええ、今日は多いですね」

「田舎騎士が・・・全く、程度があろう」
自分の行動を棚に上げて、ネロは圏境を使って屋敷内を駆けていた。真名開放は、床を砕いて階下に飛び降りることで凌いだ。
結果的にショートカットとなり、応接室まであと少しである。そして、入ってしまえばこっちのものだ。きっと、アポロンは自分の登場に喜ぶに違いない・・・!
「ぐふ、ぐふふふふ」
「おや、ネロ様。何処に行こうというのですか?」
廊下の曲がり角から現れたのは、侍従長補佐の少女だった。明らかにネロを視認している。圏境はもちろん維持されているが、しかし彼女の眼はごまかせない。
圏境は人間レベルから見れば神業だが、文字通り神などいくらでもいるのがこの世界。この屋敷に勤める彼女たちにとって、それを看破するための装備も当然必要だった。
「・・・その・・・奏者に呼ばれてな。急用なのだ」
「おや、おかしいですわね。私は先ほど閣下よりネロを通すなとご命令をいただいているのですが」
両者の間で、静かに火花が散った。そして、戻ればいいものを、ネロは彼女を倒すという道を選んだ。
此処を押し切れば、アポロンに会える。その一心で、ネロは手にした剣を構えた・・・。
「花散る天幕!」
しかし、それは無謀だった。彼女は『侍従長補佐』である。すなわち、隊長クラスだということだ。
屋敷勤めの彼女と、ネロは幾度と無く顔を合わせているが、その戦闘能力は計れなかったのだ。

「冥土エルボー！」

魔王クラスの彼女に、単なる使い魔に過ぎないネロが抗しうる道理なし。肘鉄の一撃で、ネロはあっさり撃沈した。

美々野くるみ
出身　日本
種族　混血悪魔
保有神器　冥土闘衣
Ｍ・Ａ・Ｒ・Ｓランキング　９８位

「お掃除完了ね！」

宝物庫

アサシンは、いつも大勢で移動する。
というのも、常に娘であるシフォンと1号、2号を連れていることに加えて、このたび４人の反英雄と私が加わっているからだ。
そして、今日はこれに妻であるララさん、第二夫人のレイヴェル、更に戦闘員８人まで一緒だ。ちょっとした行列になっている。
皆で、礼服を着てアサシンの屋敷の中を歩いている。
屋敷が広いこと、また屋敷内が安全でないこともあって、私はあまり屋敷内を知らない。
今歩いている廊下も、必然良く知らない道だった。いや、全く歩いたことのない道だった。
もちろん、三カ国からなる連合軍の司令官であるアサシンの屋敷にふさわしく、調度品なども見事なものが揃っているのだが、奥へ行けばいくほど段々人気がなくなっていく。
なんというか、廊下が非常に長い。その上、何処にも扉がない。一番奥の突き当たりには小さく扉が見えるが、他には何もなかった。
「奏者よ、この度は余に未知の喜びを与えてくれるのであろうな？」
「なんだか、宝探しみたいでわくわくするわね？」
「・・・あの扉、此処から見てもとんでもない呪いがかかってるんですけど。どんだけー」
「父さん、今日はこんな大勢でなにをするの？」
そう、いつもなら事前に今日は何をすると連絡をしていた。だが、今日に限っては意図的なのか、ただ皆でぞろぞろと歩いているだけだった。
しかし、私たち新参の５人を除き、皆が楽しそうに笑っている。レイヴェルさんだけは、複雑そうな表情だが。
「あれ？レイヴェルは嫌なの？」
「ララさん・・・私は貴女と違ってそんなに素直に喜べないんです」
妊娠しているとはいえお腹の目立っていないララさんは、それでも立ち振る舞いが『母親』を感じさせるものだった。

慈悲と寛容、包容力に満ちたその笑顔は、なるほど人間を愛していると公言して憚りないネロに良く似ている。

違いがあるとすれば、本質だろうか。ネロの愛は、全てを与え全てを焼き尽くすもの。ララさんの愛は、ただ愛を与え続け、受け入れ続けるもの。

うまく言語化しづらいが、どうやらネロの愛と違って、ララの愛は先に破綻が待っていないらしい。少なくとも、独占欲は彼女にないようだ。

「にしても、艦長。思ったより大分遅くなりましたね？」

「こっちの都合も考えたとか？」

「毎度思うんですが悪くないですね、こういうのも」

「誘ってくれて嬉いっす」

「いや～、楽しみだなぁ」

「ひゃっは～～～」

「さて、どんな感じになりますかね？」

「うひゃひゃひゃひゃ！」

「ふひひ！」

戦闘員８人は、やはり軍服を着ている。

戦争中と違って、全員アサシンとおなじく成人している。まあ、その佇まいはともかく、雰囲気は全く変化がないのだが。

昔から今に至るまで全く性格に変化がないと言うのは、褒められたものではないのだが。

とはいえ、それでも全く彼らを怖いとは思えない。不愉快なことに、彼らがどれだけ粗暴で野蛮で救いがたいほど救いを求めていないにしても。彼らがアサシンの傍にいる限り、彼らはアサシンの頼もしい兵隊だ。

戦争の後、この世界に帰ってきたアサシンを、多くの部下が、そして上司である王が迎えた。アサシンに怒るもの、ただ暖かく迎えるもの。皆が、彼の帰還を喜んでいた。

彼らに対してアサシンは、謝罪したり感謝したり、あるいは礼を言った。そして、最後に戦闘員８人にだけはアサシンは『尋ねた』。

供回り実にご苦労だった。・・・それでどうだった?この戦争は。
９人で町中を走り回って、戦って、他に誰も頼れなくて・・・それが懐かしかった。
もちろん、彼らはこんな風に言ったわけではない。いつものようにへらへらと笑いながら、ふざけた調子で答えた。だが内容はこんな感じだった。
それを聞いて、アサシンは同意した。嬉しいでも楽しいでも喜ばしいでもない。アサシンは、ただ懐かしんでいた。
そこには、余人では立ち入れないものが彼らの間にあると感じることができた。
「マスター。今日は皆を私個人の宝物庫にご案内しようかと思いまして」
個人、個人といったか。
先日、アサシンは仕事の合間を縫って屋敷の宝物庫に案内してくれた。
そこには、原初の英雄にすら劣らぬ神々からの供物が、膨大に整然と陳列されていた。
余りにも多く、また一つ一つの価値が計り知れぬものであったばかりに、芸術家としての側面を持つネロとエリザベートは大興奮し、モードレッドも、武器に分類される至高の神々の武具には眼を奪われていた。
玉藻ぐらいだろう、ある程度落ち着いていたのは。仮にも主神の分霊の分霊、知らないではないらしい。まあ、ある程度は感動していたのだが。
自分は、とにかく濃厚な神秘に圧倒されるばかりで、倒れそうになってしまったが。
その、宝物庫とは別。個人的な宝物庫とはなんだろうか。あまり、収集癖もなさそうなアサシン。その彼にとって大切なものとは武器と、仲間ぐらいだと思っていたのだが。
とはいえ、宝物庫と聞けばテンションが上がるのがネロだ。見るからに愉快そうである。

「宝物か・・金銭に限らず、宝とは使ってこそ、浪費こそ本質である。しかし、そなたがこうして大切に守らせているもの、それには大変に興味が沸くぞ！」

と、如何に長い廊下とはいえ所詮は室内。気付けば宝物庫の前にたどり着いていた。

そして、奇妙なことにその宝物庫の扉には鍵穴がなかった。アサシンが物に固執するというのは・・件の船ぐらいかと思っていたが、それにしても無用心が過ぎるだろう。

しかし、その扉に施された魔術、いや神の奇跡にキャスターである玉藻は一歩後ずさった。

「あの～この扉、固有結界ですか？」

「ああ、そうだ。この扉はそれ自体が一つの世界。『世界扉（ワールド・ドア）』だ」

そういって、アサシンはドアノブに手をかける。そして、そのままノブを回すことさえなく引いた。それだけで、あっさりと扉は開く。

扉の向こうには、輝く黄金財宝が散逸している龍の宝物庫が・・・なかった。極普通の部屋があるだけだった。

固有結界の扉と聞いて、開くには何がしかのアクションがあるかと思ったのだが、そんな事はなかったようだ。

と、思っているとキャスターは呆れている。アサシンが扉を普通に開けたことに驚いている。

「な、なんというマッスル！」

「この扉は鍵はないですが、力が要る。この扉は世界一個分の重さがあるため、開くには世界を持ち上げられるほどの腕力が必要なんですよ」

・・・ふーん。としか思えないのが、自分の考えが神話基準になっている証拠だろう。

多分、世界を滅ぼさないと開かない扉もあるに違いない。

「さあ・・・どうぞ中に入って」

当然、アサシン以外の全員に世界を支える力はない。というか、そんな力があるのはアトラスとヘラクレスぐらいだろう。

よって、アサシンは扉を開けたまま全員が中に入るように促した。

ぞろぞろと中に入り、最後にアサシンが扉を閉める。
そこには、何もなかった。本当に、なにもなかった。床と天上と壁と、照明器具ぐらいだった。豪華な内装、と呼ぶには余りにも貧弱で・・・。
しかし、その壁にあるものを見つけた。いや、正しく言えば、部屋の壁には額縁に飾られた写真が掛けられていたのだ。
「これが『おれ』の宝物です」
それは、写真だった。
アサシンが歩んだ苦難の道、それを一緒に歩いてきた者達と一緒に撮った写真が、肖像画でも魔術によるものでも念写でもすらもなく、ただの写真が飾られている。
しかし、それに写るアサシンは、あるときは厳粛で、あるときは困っていて、あるときは笑っていて、あるときは幸せそうで、あるときは泣きそうで・・・。
一番古いものは、アサシンがサーヴァントだったときと同じぐらいの年齢だった。
それから、大人になっていくアサシンの生き様が伝わってくるような、そんなアルバムだった。そう、宝物庫と呼ぶには余りにも貧相な、しかし写真を飾るには豪華すぎるアルバム。それがこの部屋だった。
だが、そのうちの一枚一枚を見るアサシンは、傍らの子供やペットを軽く抱きしめながら、懐郷に浸るようだった。
納得してしまう。これは彼にとって紛れもなく宝なのだ。
「お恥ずかしい話なのですが、この部屋にある写真は、政治的にまずいものばかりで・・・。
一般の方に知られると、それなりに困るものばかりなのですよ。何分、自分の部下は元とはいえテロリストばかりなので」
照れくさそうに、一枚一枚の紹介をしていくアサシン。
それを、つまらなそうに聞いているのは４人の反英雄だ。無理もないだろう、この部屋にはアサシンの主だった部下の、情けない写真や厳粛な写真があるが、しかし『私たちの写真』は一枚もないのだから。
当然、家族写真もある。アサシンの、妻と二人きりの写真。子供で

あるシフォンを交えた写真。ペットも加えた写真。第二婦人であるレイヴェルも写っているものもある。

アサシンにとって、なるほど金銀財宝などよりも大切な宝ではあるだろうが、面白くなかった。

「今日、こうして集まったのは他でもありません。この場の面々で『家族が増えた記念』と『聖杯戦争を勝ち抜いた記念』で写真を撮って、飾ろうかと」

戦闘員たちが座る用の椅子、デジタルカメラとプリンター、新しい額縁とラミネーターを見せた。ご丁寧にバッテリーまでもっている。準備はばっちりだ。

「皆がよければ、いますぐにでも。どうですか、マスター」

もちろん、是非もない。

なるほど、こうして新しく思い出を刻むのだろう。

アサシンにとって、積み重ねていく未来へのつながりが宝なんだから。

それを聞いて、４人の反英雄も嬉しそうだ。

さし当たって、まず聖杯戦争に参加した面々で写真を撮ることになったのだが・・・。

「・・・奏者よ、とりあえず余とのツーショットで壁を埋め尽くさぬか？」

「なにいってんですか、この色ボケ皇帝！その写真で牛の刻参りしますよ!?」

「もうちょっと、そっちに寄りなさいよ。チンピラ騎士～～」

「なにいってるんだ！一番強いオレが父さんの隣でないわけがない！」

真ん中の椅子に私が座って、その後ろにアサシンが立つ。そこまでは、霊器盤に記される正当なマスターとサーヴァントから考えれば当然の配置だ。誰からも苦情が来ない。

アサシンの宝具になっていた８人が４・４で右と左に寄る。これも、まったくもめなかった。彼らとすれば、アサシンと同じ一緒に写っていることが重要で、他のことなどどうでも良かったのだろう。

能力に個性はあれども、立場は対等な彼ららしい扱いやすさだ。
だが、４人の反英雄はもめにもめた。当然だろう、彼女たちは己こそが一番と思って憚らないのだから。
・・・
結局、アサシンの鉄拳によって黙らされた彼女らは、写真に写っている限りでは仲良く収まった。
この写真は、その場でプリントアウトされラミネート加工され、額縁に収められた上で壁に飾られた。
全く過去のない自分が、こうして苦楽を共にした仲間と共に思い出を作っていく。そのことが、嬉しくてたまらない。
「次は、家族写真だな・・。申し訳ないが、マスターと、戦闘員。それからネロと玉藻とエリザベートはちょっと動いてくれ」
「・・・え?」
疑問系なのは、呼ばれなかったモードレッドだった。彼女は、アサシンと同じく2枚ともに写るらしい。
確かに、彼女は先日養女の扱いになる、みたいな話をしていたが、どうやらアサシンは彼女も家族写真に加えるようだ。
「うふふふ!この子のお姉さんがまた増えたわね?」
「どうして、ぽっと出の小娘が家族に加わってそんなに喜ぶんですか?悲しくはないんですか?私なんて１０年もかかったのに・・・」
「あら、家族は多いほどいいのよ?ほら、こんなに可愛いのに、ね～～?」
そういって、ララさんはモードレッドを豊満な体で正面から抱きしめた。
それをモードレッドは恥ずかしいのか照れくさいのか。最初はもがいたもの、段々おとなしくなって、それに甘んじた。
「ら、ララ・・・さん」
「だ～め。艦長を父さんと呼ぶなら、私のことは?」
「は、母上・・・?」
「違うでしょ?」
「・・・母さん」

「良くできました～～～～！」
その言葉が嬉しかったのか、ララさんは自分の胸にモードレッドをうずめたまま、ぐるぐると振り回す。
うっすらと、モードレッドの耳が赤くなっていた。どうやら、新しい親子関係は概ね良好なようだ。
「・・あなた？一応聞きますけど、あの子はあくまでも娘ですよね？」
「当たり前だ」
「・・・信じてますからね？」
涙目になりながら、レイヴェルさんはアサシンの腕に絡みついた。
仮にも正式な関係になっていることの主張なのだろう。彼女はそこを他人に譲る気はないようだ。
かくて、玉藻、エリザベート、ネロの羨ましそうな目線の中、家族写真は撮影された。
椅子には、子供を宿した朗らかな笑みのララさん。膝にはシフォンちゃんが。その脇に立つのは礼服ではなくカジュアルな服を着たアサシン。
その右脇に立つのはレイヴェルさん。アサシンの前には、1号と2号が。そして、アサシンの左脇に立つのは、先ほどまでの鎧姿ではなく、どこかのお姫様のような可愛い服を着た・・・泣きながら笑う少女だった。

主従契約

私はアサシンのサーヴァント、兵藤一誠をまったくのアクシデントから召喚し、冬木の第四次聖杯戦争に参加した魔術師もどきである。

聖杯は特に欲しかったわけではないのだが、キャスターのサーヴァントにまったくの逆恨みから命を狙われており、棄権することもできず戦争に身を投じることになったのだ。

その後、アサシンは生前からの部下を８人召喚して、更に死後の部下を４人召喚して、加えて全員受肉。

それだけでも大概だというのに、彼を助けるために生前の部下が部隊を送り込んできたのだ。

そして、最終的に元気玉的なイデオンソードによって宇宙が滅亡したのである。

何を言ってるんだか、さっぱりわからねーと思うが安心してほしい。私もさっぱりだ！

特に、最後の一行の存在感が半端ではない。この世の全ての悪とかムーンセルとかそういう問題じゃない。

さて、それは置いておこう。むしろ忘れよう。

今私は、アサシンの生前、というか生まれ故郷の宇宙の、冥界という世界に来ている。

そこにいるのは、いわゆる伝説の化け物ばかりだそうだ。

聖杯戦争が子供の遊びに見えるほど、この世界は神秘に満ちている。

アサシン曰く、もっとやばい世界もあるのでそんなに自慢にならないそうだ。

さて、そんな化け物ぞろいの世界観の中で、アサシンは実力、地位共にトッププクラスらしい。

本来、サーヴァントは言葉の意味では奴隷であり、しかし神秘の塊である彼らは分霊とはいえ人間に御せる者ではない。

だが、本来の力を取り戻したアサシンの場合、最も格の高い玉藻でさえ使い魔としては分不相応なほど弱いそうだ。

しかし、アサシンのすることに文句を言えるものなどそうはいない。よって、文句を言うのは第二婦人のレイヴェルさんぐらいだった。

それはいい。だが、問題は私だった。

世界最強の軍隊を率いる無敵の怪物が、少し魔力（この世界では人間の持つ力を魔力とよばないらしい）を多く持っている程度の素人と契約し、それどころか主従契約というのは絶対にありえないことだった。

聖杯戦争中ですら、受肉して以降たいしている意味のなかった自分ではあるが、この世界に着てからは全面的にアサシンの厄介になるばかりで、主としては全く機能していない。

故に、考えてみれば自分が彼の王を名乗るなどあってはならないのだが。無駄に義理堅いアサシンは、元の体に戻ってからも自分との関係を一切変えなかったのである。

それは、当然多くの歪みを生んだわけで・・・。

アサシンは、渋い顔で書類に目を通していた。

この世界の魔術協会（前の世界の魔術協会のこともよく知らないのだが）である、魔法使いの勢力。そのトップであるメフィストフェレスからの依頼を見て、アサシンは顔を曇らせていた。

言うまでもなく、アサシンと契約を欲している魔法使いからの面談希望である。

全知全能の英雄である曹操を従えているアサシンは、比喩誇張抜きで全知全能以上である。

そんな彼と契約を結びたがるものは数多かったらしいが、今までは職務が忙しいことを理由に断り続けていたらしい。

だが、此処にきて良く分からん小娘との主従契約。もちろん、彼らとてそんなうまい話があるとは思っていないらしいが、それでも何がしかの形で契約を結びたいそうだ。

「・・・どうする、か」

最近確信したが、アサシンは敵を作る以上に味方を作ることを恐れ

ている。
味方を作れば、その味方の敵まで自分の敵になるからだ。
キャスターに狙われていた自分を助けて、その結果敵対することになったのだから、アサシンの考えは間違っていない。
とはいえ、生きていれば敵も味方も増えるもの。強大な力を持つアサシンは、その分敵も味方も多い。
そんな中、人間と契約を結ぶのはリスクが多いわけで・・・。
「自分は、マスターさえいればこれ以上契約しなくても良いと思っていたのですが、考えが甘かったようですね」
「何をおっしゃっているのです。私との結婚で、返って縁談が増えたことをお忘れになったのですか？」
秘書でもあるレイヴェルさんは、アサシンにあきれている。
いや、案外彼女こそ自分に最も不満を抱いているのかもしれない。
軍人という立場もあって、アサシンは魔王にしたがっている。
それは、純血の悪魔に転生悪魔が従うという意味ではそこまでおかしくない。
だが、アサシンは今無力な人間である自分にも従っている。それは、相当面白くないだろう。
なにせ、孤児同然の自分が魔王と同格の扱いを受けることになるのだから。
「・・・此処は一つ、如何にマスターが素晴らしい方なのかを周囲に知らしめる必要があるかもしれないな」
「そうは言うがな、奏者よ。白野は確かにかわいらしくて抱きしめたくなる少女だが、流石に魔術師としては未熟以前であろう」
「そうよね、子リス確かにおいしそうだけど、食べ比べるわけにもいかないし」
「ご主人様、いかがでしょうか。この際私と夫婦の契約を・・・？」
「あのさ、父さん。言いたくないけど、契約を見直したほうが良いんじゃないかな？」
サーヴァント４人は、まあ一人は戯言をほざいているが、自分とアサシンの主従関係が適切ではないと思っているらしい。

それも無理らしからぬ話ではある。というか、私もそう思う。この際、私が僕になっても良いと思うのだが。

「バカなことを言うな！」

やや涙目にさえなりながら、アサシンはその場の面々を怒鳴りつけて黙らせる。

流石にびっくりするが、彼の近くで戯れている1号と2号は無反応だった。もしかしたら、そんなに珍しくないのかもしれない。

「マスターとの主従関係を切るってことはだな。昔同様にあの4人だけがおれの主ということになるんだぞ?!

そんなの、とてもじゃないが耐えられない！」

転職したほうが良いんじゃないだろうか、アサシンは。

ライダー、イスカンダルに勧誘された折には、己の忠節を迷いなく断言していた。

だが、生き返ってみれば色々と思うところもあるようで・・・。

「サーゼクス様は他の3人を止めない上にリアス様との結婚を進めようとしてくるし、

アジュカ様は未だに念能力者を生み出すコップを虎視眈々と狙っているし、

セラフォルー様は外交官として国辱を晒しまくっているし、

一番まともなのがファルビウム様という時点でお察しだよ！」

なんというか、生真面目なアサシンにとって、私生活が色々とまずい四大魔王と直接話したりプライベートでかかわりを持つことは大変にストレスなようだ。

どうやら、自分はいいところがあるというよりも悪いところがないという点が評価されているらしい。

「ということで、契約の変更はなしだ。少なくとも、おれはそのつもりだ。

とにもかくにも、我が主が兵藤一誠のマスターであることにふさわしいと示せばいい」

・・・。

どう考えてもふさわしくないと思います。

給料を払うどころかお小遣いをもらっている立場だし。
「そこは問題ないです。自分も昔は給料を払うこともなく人を使ってましたから」
それは、戦闘員達だけを率いていた時代の話だそうだ。
余り立ち入ったことを聞く気にはならないし、必要なら彼が話してくれるだろう。
「・・・ディオドラに頼んで、時間の感覚がおかしくなる空間を作ってもらうか。
主観時間が大幅に引き伸ばされ、数万年間分這うことしかできないようにしましょう。
マスター以外では耐えられないはずです！」
・・・あの、それって私も参加するんですか？
「当然でしょう！
マスターが参加しないと、マスターの凄さが伝わらないじゃないですか！
大丈夫です。床は最上級のベルベットをご用意させますので！」
嫌です！絶対に嫌です！
なんでそんなラスボスの嫌がらせみたいなことをされなくちゃいけないんですか!?
「・・・そうですか。
では、ゴールに近づくたびに体が吹き飛んでいって、最終的には手足と内臓の半分以上が消えるレースを催しましょう！
大丈夫です。非殺傷設定にしますから。ディオドラが」
それ、ただの拷問ですよね?!
前の奴よりはマシだけど、それでも完全に拷問ですよね!?
実は私のこと嫌いだったりするの、アサシンは。
「そんなバカな。私は信じているだけです。貴女ならば、必ずこの試練に打ち勝てると！」
「お父さん。それ、白野さんがカワイソウだよ」
「ふふふ、シフォン。お前はマスターの凄いところを知らんのだ」
こ、こいつヤンデレだ。流石に、他の面々も引いている。

ドンだけ私のことを妄信しているのだろう。彼は、私が神仏に勝るとも劣らない根性の持ち主であると信じて疑っていない。

そんなに凄いことをした憶えはないのだが。

「謙遜が過ぎますよ、マスター。貴女の凄いところを見れば、きっと皆が納得してくれるに違いありません！」

結局、数週間後に開かれたアサシンとの契約を希望する魔法使いの選考会。

当然というかなんというか、私も参加することになった。

選考会の内容は、公平をきするために私も知らされていなかったのだが、選考会場でエプロンを着ていたエリザベートがマイクを片手に現れた時点でもう既に私は全てを察していた。

予選として、予想通りエリザベートの作った朝食、スープが振舞われた。

最初の一口で犠牲者が続出した。こんなもの食えるか、とキレて文句を言い出した選手もいたが、私が食べ続けているのを見て、座って食事を再開した。

時間内に完食したのは、ほとんどいなかったが。

本戦として、エリザベートの調理した昼食、ポロネーゼが用意された

予選を突破した猛者たちも、既に一口目で顔を青くし、中には気絶する者まで現れた。

結局、時間内に完食できたのは私だけだった。

もう、自分しかいないのでする意味がないはずの決勝戦では、満漢全席の如きディナーを食べることになった。

作った分が無駄になるから、スタッフがおいしくいただくことになったらしい。

オメーが食えと何度令呪をつかおうと思ったことか。

なぜ私は争う相手もない中、一人で衆人環視の元テロい味の料理らしきものを食さなければならなかったのだろうか・・・。

まあ、明らかに食べ物ではない赤色の料理を、時に吐き出しながらも胃に流し込み続ける私を見て皆が納得してくれたらしい。彼女は王にふさわしいと。

魔法使いとしての素養を一切計ることなく、完全に大食い大会というか我慢大会と化していた選考会。アサシンの作戦が功をそうしたのか二度目の予定は当分ないらしい。

というか、アサシンぶっ殺す。